

岡山県中世城館跡総合調査報告書

第1冊

— 備前編 —

2020

岡山県教育委員会



162 三石城跡 北側堀切（南西から）



44 徳倉城跡 虎口（南東から）



43 金川城跡 「天守の井戸」(南東から)



117 保木城跡 発掘調査状況(北東から)

序

岡山県教育委員会では、県内に所在する中世城館跡について、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的として、「岡山県中世城館跡総合調査」を平成25年度から7か年にわたり実施してまいりました。本書はそのうち、旧備前国に所在する中世城館跡の調査成果報告書です。

備前国は現在の岡山県南東部にあたります。この地は、北は吉備高原の山々が連なり、南は瀬戸内海に接し、西に旭川、東に吉井川という大河が支流を集めて南流する自然豊かな所です。また畿内と九州の太宰府を結ぶ幹線道である旧山陽道が東西に走っていたため、古くから交通の要衝でもありました。室町時代、この地の守護は伯耆（鳥取県）が本拠の山名氏や播磨（兵庫県）に本拠を置く赤松氏が兼ねておりました。そうしたなか、嘉吉の乱により赤松氏は山名氏に追討されますが、後に再興を果たして、守護に再び咲き、旧領を回復しました。しかし、応仁の乱以降、山名氏との抗争や内紛により赤松氏が衰えを見せると、守護代の浦上氏が台頭しはじめます。備前西部は松田氏が勢力を張っており、また山陰方面からは尼子氏、備中・備後方面からは毛利氏・三村氏などが侵攻してきました。その間にあって浦上氏の家臣であった宇喜多氏は、次第に実力をつけ、やがては松田・浦上氏を倒し勢力を伸ばしていくのです。こういった有力者が鎬を削っているおり、当地の国人（中小の領主）たちもまたいずれかの勢力に身を投じていくこととなります。このような争いの中で、所領を支配、あるいは敵から守るための拠点、河川や街道に沿った交通の要衝、領地の境界などに多くの城館が築かれており、伝承も含めると500か所ほどが知られていました。今回の調査ではこのうち、約280か所の規模や構造等を明らかにすることができました。

本書が今後の地域の歴史研究に寄与するとともに、中世城館跡の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、総合調査及び報告書作成にあたりましては、文化庁をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和2年2月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 向井重明

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が平成 25 年度から平成 31（令和元）年度にわたり、国庫補助を受けて実施した岡山県中世城館跡総合調査の報告書の第 1 冊（備前編）である。この調査は、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が担当した。
- 2 本書には、岡山県南東部の旧備前国に所在する中世城館跡の調査成果を掲載した。旧備前国内に該当する市町は以下のとおりである。

岡山市、赤磐市、備前市、瀬戸内市、玉野市、倉敷市、加賀郡吉備中央町、和気郡和気町、久米郡美咲町
- 3 調査及び報告書作成は、平成 25 年度に文化財センター職員 澤山孝之・小嶋善邦・河合 忍、平成 26 年度に同職員 澤山・米田克彦・上楯 武、平成 27 年度に同職員 澤山・米田・島崎 東、平成 30・31（令和元）年度に同職員 小林利晴・氏平昭則・和田 剛が担当して実施した。
- 4 調査事業を円滑に実施するため、専門委員 2 名を委嘱し、調査全般及び報告書の作成に関する専門的な指導・助言を得た。また学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、調査協力員を委嘱し、さらに調査協力者を依頼し、助言を得た。深く感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の執筆は、第 1～3 章・第 5 章を文化財センター職員が、第 4 章歴史史料調査を畑 和良（歴史研究家）が、第 6 章を中井 均（滋賀県立大学）・乗岡 実（丸亀市教育委員会）・島崎 東（遺跡&ミュージアム）・畑 和良と文化財センター職員が担当し、文末に文責を記した。
- 6 本書の編集は、文化財センター職員 澤山・和田が行った。
- 7 遺物写真の撮影にあたっては、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 8 畑 和良、島崎 東には、縄張り図の提供及び城館跡に関する教示を受けた。ここに感謝の意を表する。
- 9 本書に使用した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の「数値地図 25000」（地図画像）を 3 万 5 千分の 1 に縮小して複製したものである（承認番号 令元情複、第 417 号）。本書掲載図を複製する場合は、国土地理院長の承認を得るものとする。
- 10 第 3 章の縄張り図で使用した地形図は、以下の機関から提供を受けて、掲載の許可を得た。

岡山市域・赤磐市域・備前市域・瀬戸内市域・吉備中央町域・和気町域：各市町作成の市域図・地域図（1/2,500）を使用。

玉野市域：岡山県南広域都市計画図（玉野市）（1/2,500）を使用し調製。承認番号 平成 26 年 3 月 17 日 玉都第 582 号

倉敷市域：倉敷市長の承認を得て、倉敷市所管の測量成果倉敷市都市計画図 1/2,500 を使用し調製。承認番号 平成 26 年 3 月 13 日 都第 3863 号

美咲町域：岡山県知事の承認を得て、森林基本図（1/5,000）を使用し調製。承認番号（平成 27 年 1 月 26 日付け岡山県指令林第 5 号）

11 現地調査並びに報告書作成に関しては、以下の機関から多大なる協力、助言をいただいた。記して謝意を表する（順不同）。

文化庁、岡山県立図書館、岡山市教育委員会、赤磐市教育委員会、備前市教育委員会、瀬戸内市教育委員会、玉野市教育委員会、倉敷市教育委員会、吉備中央町教育委員会、和気町教育委員会、美咲町教育委員会

12 本書に掲載している縄張り図を転載する場合には、本報告書名に加えて作図者名を明記することとする。

凡 例

- 1 第2・3・6章で用いた高度値は、標高である。
- 2 第3章で示した方位は、一部を除いて平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 3 第3章に掲載した縄張り図の縮尺は、基本的に1/2,000であるが、必要に応じて変更（1/3,000、1/4,000など）している。また図ごとの縮尺は、見出しに記載している。
- 4 第3章で遺構を示す場合、原則として 曲輪及び曲輪群は曲輪「I」のようにローマ数字で表記し、竪堀や堀切などは、竪堀「1」のようにアラビア数字で記載した。
- 5 第2章の分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「水島港」・「下津井」・「宇野」・「玉島」・「茶屋町」・「八浜」・「箭田」・「倉敷」・「岡山南部」・「犬島」・「西大寺」・「牛窓」・「総社西部」・「総社東部」・「岡山北部」・「豪溪」・「東山内」・「金川」・「有漢市場」・「下加茂」・「福渡」・「井倉」・「砦部」・「西川」・「下弓削」・「刑部」・「勝山」・「久世」・「津山西部」・「備前瀬戸」・「片上」・「万富」・「和気」・「備前三石」・「周匝」・「日笠」・「上郡」・「柵原」・「林野」・「上月」・「津山東部」・「真加部」・「佐用」を複製・加筆したものである。

目 次

卷頭図版	
序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法と経過	5
第2章 城館跡の分布図・一覧表	9
1 分布図	9
2 備前国中世城館跡一覧表	62
3 備前国中世城館跡遺構の評価と残存状況表	83
4 備前国不明中世城館跡一覧表	86
第3章 城館跡の概要	105
第1節 津高郡	107
第2節 赤坂郡	157
第3節 磐梨郡	191
第4節 和気郡	201
第5節 御野郡	235
第6節 上道郡	249
第7節 邑久郡	265
第8節 児島郡	279
第4章 歴史史料調査	317
第5章 城館関連地名表	375
第6章 総括	385
第1節 岡山県の中世城館跡について	385
第2節 岡山県の中世城館研究史	393
第3節 考古学から見た備前国の中世城館跡	407
第4節 文献史料から見た備前国の中世城館	419
第5節 岡山県下の城館遺跡に残る石積み・石垣	433
備前国中世城館関連文献一覧表	447
報告書抄録	
奥付	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

1 調査の経緯

瀬戸内海北岸のほぼ中央に位置し、近畿地方と東に接する岡山県は備前・備中・美作の3国からなる。南北朝時代から室町時代にかけて播磨の赤松氏と伯耆・因幡の山名氏がこの地をめぐる争い、戦国時代には出雲の尼子氏や安芸の毛利氏、上方の織田氏が進出して抗争を繰り返した。このため、県内に残る中世城館跡は、昭和55年に刊行された『日本城郭大系13』で884か所、現在の遺跡地図で約1,100か所と全国的に見てもすくぶる多い。

こうした城館跡の大半は、眺望に優れた山頂や尾根上に立地するため、テレビ鉄塔などの建設候補地にあげられることが多く、近年では携帯電話基地局の設置も相次いでいる。また、林道建設や土砂採取により、城跡が損なわれる事態も頻発している。

このため岡山県教育委員会では、県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成25年度から国庫補助事業として中世城館跡総合調査を実施することとなった。

2 調査の計画

調査にあたっては、平成25年7月1日に策定した「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」に基づいて、7か年にわたる調査体制を組織した。当初は、平成25・26年度に備前地域471か所、平成27・28年度に備中地域410か所、平成29・30年度に美作地域491か所と、現在の行政地域単位で調査を実施することとしていた。しかし、県北部の美作地域や備中地域北部は遠隔地である上、降雪等の気象条件により県南部と同様に調査を進めることは困難と考えられた。このため、平成26年度に調査計画を見直し、県北部・南部を並行して調査するよう改めた(第1図・表1)。最後の令和元年度には、これまでの調査結果に検討を加え、その成果を備前国・備中国・美作国の3分冊の報告書にまとめて刊行した。

岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項

(目的)

第1条 この事業は、岡山県内に所在する中世城館跡の所在とその内容等について悉皆的かつ総合的に調査し、その実態を把握するとともに、今後の保存・活用の基礎資料とすることを目的とする。

(事業主体)

第2条 この事業は、岡山県教育委員会(担当 岡山県古代吉備文化財センター(以下「センター」という。))が行う。

(実施期間)

第3条 この事業は、平成25年度から平成31（令和元）年度まで実施する。

（調査対象）

第4条 この事業における調査の対象は、おおむね中世（平安時代末から戦国時代までをいう。）に築かれた城、館、屋敷、砦、陣、要害、烽火台、物見櫓等（以下「城館」という。）とする。ただし、古代又は近世の城館についても、中世の城館との関連をうかがわせるものについては、これに含める。

（事業内容）

第5条 この事業の内容は、次のとおりとする。

（1）現地調査

- ア 図面、地図等関連資料の収集・整理
- イ 現地踏査による縄張り調査
- ウ 台帳作成

（2）文献調査

- ア 関連する史誌、報告書、研究論文等の収集・整理
- イ 城館関連地名の抽出と検討
- ウ 台帳作成

（3）報告書作成・刊行

〔報告書の主な内容〕

目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等

（専門委員等）

第6条 この事業を円滑に実施するため、専門委員（以下「委員」という。）3名以内及び調査協力員（以下「協力員」という。）10名以内を置く。

2 委員は、調査全般及び報告書の作成・刊行にわたって必要な専門的指導・助言を行う。

3 協力員は、当該年度の対象地域で行う調査の実施に当たって必要な専門的協力を行う。

4 委員及び協力員は、岡山県内の埋蔵文化財に詳しい学識経験者、中世城館及び中世史の専門的知識等を有する者のうちから、岡山県古代吉備文化財センター所長（以下「所長」という。）が委嘱する。

5 委員の任期は、委嘱した日から令和2年3月31日までとする。

6 協力員の任期は、委嘱した日の属する年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

（庶務）

第7条 この事業の庶務は、センターにおいて処理する。

（その他）

第8条 この要項に定めるもののほか、この要項の実施に関し必要な事項は、所長が別に定める。

附 則

この要項は、平成25年7月1日から施行する。

3 調査の体制

調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その実施にあたって専門的な指導・助言を得るために専門委員2名、対象地域の調査について協力を得るために調査協力員数名を、中世城館跡及び中世史の専門的知識を有する者の中から委嘱した。

専門委員

稲田孝司 岡山大学名誉教授（平成 25 ～令和元年度）

中井 均 滋賀県立大学教授（平成 25 ～令和元年度）

調査協力員

有賀祐史 赤磐市教育委員会社会教育課主任（平成 25 年度）

石井 啓 備前市教育委員会生涯学習課主幹（平成 25 年度）

村上 岳 瀬戸内市教育委員会社会教育課文化振興係長（平成 25 年度）

團 正雄 勝央町教育委員会教育振興部主査（平成 26・27 年度）

池田和雅 美作市教育委員会美作分室主任（平成 27 年度）

高田知樹 井原市教育委員会文化課係長（平成 28 年度）

森 俊弘 真庭市教育委員会生涯学習課主幹（平成 28 年度）

山本原也 笠岡市教育委員会生涯学習課文化係学芸員（平成 28 年度）

小郷利幸 津山市教育委員会文化課企画参事（平成 29 年度）

日下隆春 鏡野町教育委員会生涯学習課主幹（平成 29 年度）

西野 望 矢掛町教育委員会教育課生涯学習係長（平成 29 年度）

前角和夫 総社市教育委員会文化課文化財係主査（平成 29 年度）

藤原好二 倉敷市教育委員会生涯学習部文化財保護課倉敷埋蔵文化財センター主任（平成 30 年度）

水田貴士 浅口市教育委員会文化振興課文化振興係長（平成 30 年度）

三浦孝章 高梁市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事（平成 30 年度）

白石祐司 新見市教育委員会教育部生涯学習課文化振興係主任（平成 30 年度）

畑 和良 歴史研究者（平成 25 ～ 30 年度）

調査協力者

乗岡 実 岡山市教育委員会文化財課課長（平成 26・27 年度）

高橋伸二 岡山市教育委員会文化財課主査（平成 26・27 年度）

調査指導

近江俊秀 文化庁記念物課埋蔵文化財部門調査官（平成 25 ～平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門調査官（平成 30 年度）

文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門主任調査官（令和元年度）

大橋雅也 岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 25 ～ 27 年度）

岡山県教育庁文化財課総括参事（平成 28 年度）

柴田英樹 岡山県教育庁文化財課総括副参事（平成 29 ～令和元年度）

岡山県古代吉備文化財センター

平成 25 年度

所 長 平井泰男

次 長 大崎智浩

参 事 光永真一

〈総務課〉

総括主幹 岡部 一

主 任 宮岡佳子

主 任 岡村涼平

〈調査第二課〉

課 長 亀山行雄

総括副参事 澤山孝之（調査担当）

主 任 小嶋善邦（調査担当）

主 任 河合 忍（調査担当）

平成 26 年度

所 長 村木生久
次 長 大崎智浩
参 事 光永真一
〈総務課〉
総括主幹 岡部 一
主 任 宮岡佳子
主 任 山内基寛
〈調査第二課〉
課 長 亀山行雄
総括副参事 澤山孝之 (調査担当)
主 任 米田克彦 (調査担当)
主 任 上梶 武 (調査担当)
平成 27 年度
所 長 宇垣匡雅
次 長 成本俊治
参 事 光永真一
〈総務課〉
総括主幹 金藤賢史
主 任 宮岡佳子
主 任 山内基寛
〈調査第一課〉
課 長 亀山行雄
総括副参事 澤山孝之 (調査担当)
主 任 米田克彦 (調査担当)
主 任 島崎 東 (調査担当)
平成 28 年度
所 長 宇垣匡雅
次 長 成本俊治
〈総務課〉
総括主幹 金藤賢史
主 任 浦川徳子
主 任 山内基寛
〈調査第一課〉
課 長 亀山行雄
総括主幹 小林利晴 (調査担当)
主 幹 物部茂樹 (調査担当)
主 幹 小嶋善邦 (調査担当)
平成 29 年度

所 長 宇垣匡雅
次 長 高田 亮
参 事 大橋雅也
〈総務課〉
総括副参事 金藤賢史
主 任 浦川徳子
主 任 東 恵子
〈調査第一課〉
課 長 亀山行雄
総括主幹 小林利晴 (調査担当)
副参事 物部茂樹 (調査担当)
主 幹 岡本泰典 (調査担当)
平成 30 年度
所 長 向井重明
次 長 高田 亮
参 事 大橋雅也
〈総務課〉
総括主幹 甲元秀和
主 任 浦川徳子
主 任 東 恵子
〈調査第一課〉
課 長 高田恭一郎
総括副参事 小林利晴 (調査担当)
副参事 氏平昭則 (調査担当)
主 任 和田 剛 (調査担当)
令和元年度
所 長 向井重明
次 長 佐々木雅之
参 事 大橋雅也
〈総務課〉
総括主幹 甲元秀和
主 任 東 恵子
主 任 多賀克仁
〈調査第一課〉
課 長 高田恭一郎
総括副参事 小林利晴 (報告書担当)
副参事 氏平昭則 (報告書担当)
主 幹 和田 剛 (報告書担当)

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

現地調査

城館跡の現地調査にあたっては、まず、『改訂岡山県遺跡地図』（2003）に記載されているものや文献に見えるものに、地元の伝承等を加えて台帳を作成した。それをもとに現地を踏査し、関連遺構を確認したものについては測量や写真撮影を行って現状の記録を作成した。測量には主にGPS受信機を使用し、作成した縄張り図は市町村作成の都市計画図（1/2,500等）もしくは岡山県作成の森林基本図（1/5,000）から抜粋した地形図と合成した。

文献調査

中世・近世の文書から中世城館跡に関わる記事を抜き出し、一覧表を作成した。また、城館跡にかかわる記載のある近代～現代の自治体誌や研究書を収集して台帳を作成し、城館跡の概要を記述する参考とした。

関連地名調査

『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店（1989）や自治体誌に集成されている地名（小字名）から、城館に関連するものを抽出して一覧表を作成するとともに、その一部について地籍図・切図との対照を行い城館跡の所在を検討した。

2 調査の経過

平成25年度

年度当初は、事業の体制や全体計画の検討と併行して、調査対象とする備前市・瀬戸内市・赤磐市・和気郡和気町・玉野市・加賀郡吉備中央町所在の城館跡311か所について情報収集を行うとともに、城館跡に関わる文献や地名の調査及び報告書作成に着手した。7月1日（月）に「岡山県中世城館跡総合調査事業実施要項」を策定し、8月15日（木）付けで専門委員2名と、当該年度の調査協力員4名を委嘱して調査体制を整えた。また、26日（月）には九州歴史資料館 岡寺良学芸員から縄張り図の作成方法について指導を受けた。9月3日（火）から対象地の現地調査に着手したが、吉備中央町については狩猟期と重なって実施が困難となったことから翌年度に変更した。10月16日（水）には、古代吉備文化財センターにおいて調査事業会議を開催し、調査の計画や方法等について協議した。また30日（水）には、京都府教育委員会に赴いて「京都府中世城館跡調査」の進め方について教示を受けた。1月17日（金）、古代吉備文化財センターにおいて文化庁記念物課 近江俊秀調査官にこれまでの調査状況を説明し、翌日、津山市岩屋城跡にて現地指導を受けた。2月25日（火）には、瀬戸内市中央公民館において調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。3月28日（金）、現地調査、文献調査、城館関連地名調査を終了し、31日（月）に事業を完了した。

平成26年度

4月から、調査対象の岡山市、勝田郡勝央町に所在する城館跡258か所について検討を行うとと

もに、前年度から繰り下げた吉備中央町所在の城館跡 77 か所の現地調査及び報告書作成に着手した。また5月1日(木)には、当該年度の調査協力員等4名を委嘱した。10月15日(水)、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、調査計画の変更を協議するとともに、調査報告書の作成案について協議した。また、岡山市勝尾山城跡において現地指導を受けた。3月13日(金)には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして、24日(火)には現地調査、27日(金)には文献調査と城館関連地名調査を終了し、31日(火)に事業を完了した。

平成27年度

調査対象とした岡山市、美作市、勝田郡奈義町、久米郡美咲町、英田郡西粟倉村所在の城館跡 274 か所について情報収集を行い、4月から現地調査と関連文献・地名調査及び報告書作成に着手した。5月1日(金)には、当該年度の調査協力員等4名を委嘱した。10月7日(水)、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、備中高松城合戦の舞台となった岡山市宮路山城跡において現地指導を受けた。3月14日(月)には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。18日(金)には現地調査、25日(金)には関連文献・地名調査を終了し、31日(木)に事業を完了した。

平成28年度

調査対象とした笠岡市・井原市・浅口郡里庄町・真庭市・真庭郡新庄村・久米郡久米南町所在の城館跡 410 か所について検討を行い、4月から現地調査及び報告書作成に着手した。また4月28日(木)には、当該年度の調査協力員4名を委嘱した。5月9日(月)から、城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10月19日(水)、古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、八浜合戦の陣地となった玉野市両見山城跡において現地指導を受けた。2月22日(水)に城館関連の文献・地名調査を、3月13日(月)には現地調査を終了した。3月2日(木)、文化庁記念物課 近江調査官に調査状況を報告するとともに、同所にて開催された「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」において県内の代表的な城館跡を紹介した。17日(金)には、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について意見交換を行った。そして31日(金)、調査記録の整理を終えて事業を完了した。

平成29年度

4月から、津山市・総社市・小田郡矢掛町・苫田郡鏡野町に所在する城館跡 400 か所の情報収集を行い、現地調査及び報告書作成に着手した。6月8日(木)には当該年度の調査協力員5名を委嘱し、29日(木)から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10月11日(水)、真庭市久世公民館において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、真庭市陣山山城跡において現地指導を受けた。3月1日(木)には現地調査を、7日(水)には関連文献・地名調査を終了した。3月14日(水)、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。3月30日(金)には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成30年度

新見市・高梁市・倉敷市・浅口市・都窪郡早島町に所在する 276 か所の城館跡を対象に調査を行った。4月から、対象城館跡の情報収集を行うとともに調査及び報告書作成に着手した。5月18日(金)には当該年度の調査協力員5名を委嘱し、6月20日(水)から城館跡に関連する文献や地名の調査に着手した。10月10日(水)、倉敷市ライフパーク倉敷において調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、調査計画について協議した。また、倉敷市黒山城跡において現地指導を受けた。3月15日(金)、古代吉備文化財センターにおいて調査協力員会議を開催し、調査成果を報告するとともに、その評価について検討を行った。3月19日(火)には現地調査を、20日(水)には関連文献・地名調査を終了した。3月29日(金)には整理作業を終了し、事業を完了した。

平成31(令和元)年度

4月1日(月)から報告書作成・編集を開始した。作業は、城館跡と文献の調査に関する前年度までの整理作業結果に検討を加え、その成果を備前・備中・美作の旧国単位3分冊への編集する計画を進めた。7月24日(水)古代吉備文化財センターにおいて調査会議を開催し、前年度の調査成果を報告するとともに、報告書作成について協議した。また、矢掛町茶臼山城跡において現地指導を受けた。2月28日(金)に3分冊、総頁数1,662頁の報告書を刊行した。3月31日(火)には報告書作成作業を終了し、事業を完了した。(亀山・高田)

○備前国の現地調査

平成25年度の赤磐市・備前市・瀬戸内市・玉野市・和気郡和気町内の244地点を皮切りに、平成26年度は岡山市と加賀郡吉備中央町(旧加茂川町)の147地点、平成27年度は岡山市(旧建部町の一部・旧瀬戸町・旧灘崎町)と久米郡美咲町(旧旭町の一部)の31地点、2年空いて平成30年度は倉敷市の一部の24地点の調査を実施した。その結果、278城の城館関連遺構を確認している。また、近世地誌に記載があるがその実態が明らかではない城館などが、他にも250か所存在する。

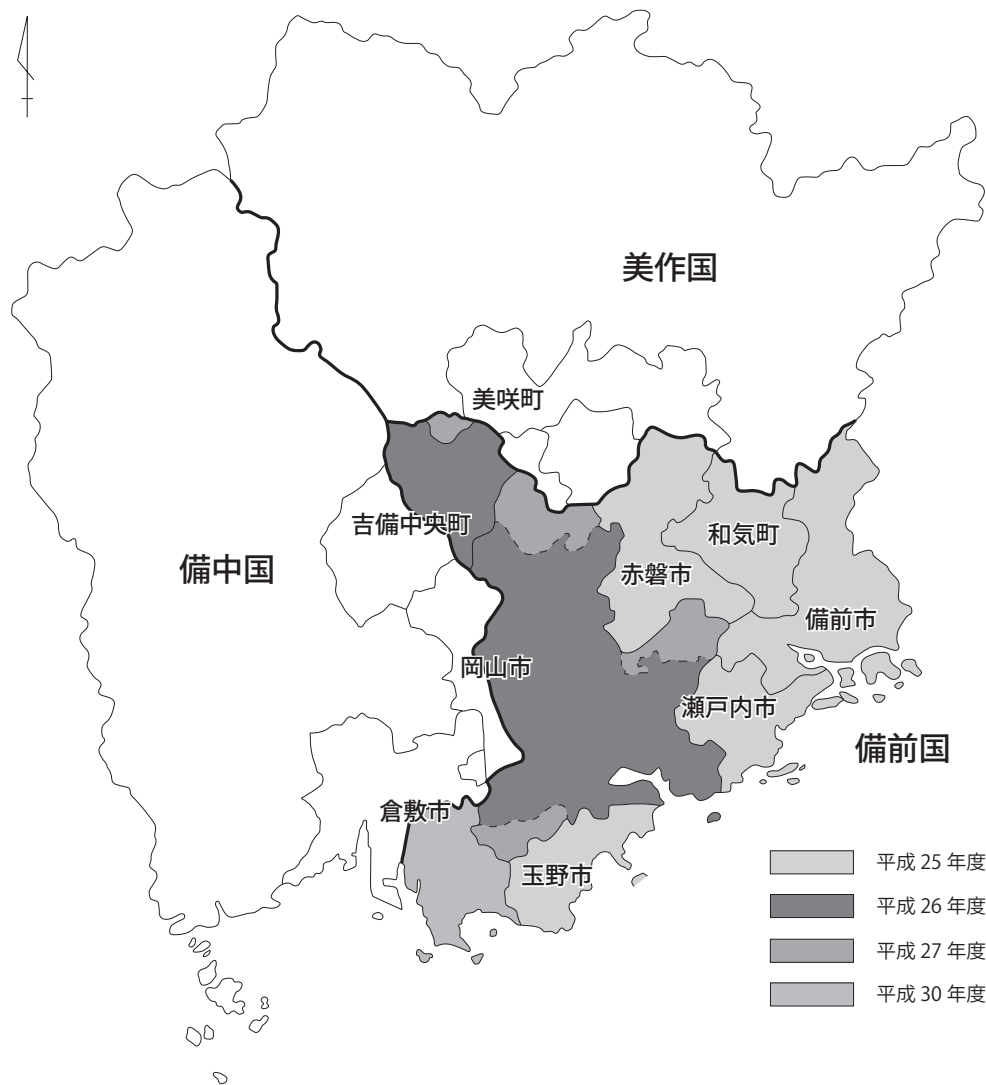
岡山県全体では、1,423地点の調査を実施し、1,126城の城館関連遺構を確認している。(備中国：484地点の調査を実施、442城の城館関連遺構を確認。美作国：493地点の調査を実施、406城の城館関連遺構を確認。)



写真1 調査風景(和気郡和気町 天神山城跡)



写真2 調査事業会議(平成26年度)



第1図 備前国調査実施年度

表1 岡山県中世城館総合調査事業7か年計画

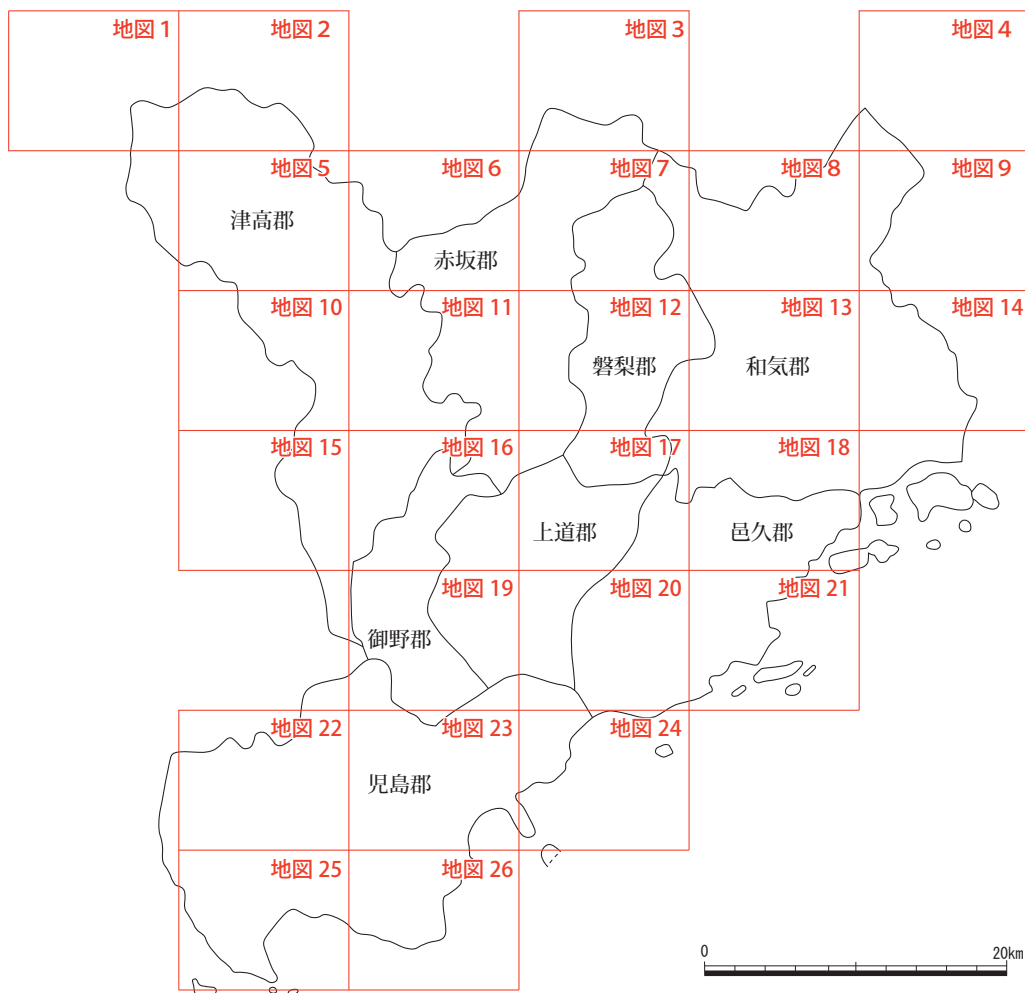
年度	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和元
対象地域	備前(446)						報告書刊行
	美作(493)						
	備中(484)						
小計	244	265	211	243	244	216	
調査該当市町村名	玉野市42	岡山市182	岡山市39	笠岡市37	総社市54	倉敷市63	
	備前市34	吉備中央町57	美作市87	井原市50	矢掛町29	高梁市54	
	瀬戸内市36	勝央町26	奈義町30	里庄町2	津山市111	新見市77	
	赤磐市86		西粟倉村4	真庭市131	鏡野町50	浅口市20	
	和気町46		美咲町51	新庄村2		早島町2	
			久米南町21				

※網図は備前国関係を示す。

第2章 城館跡の分布図・一覧表

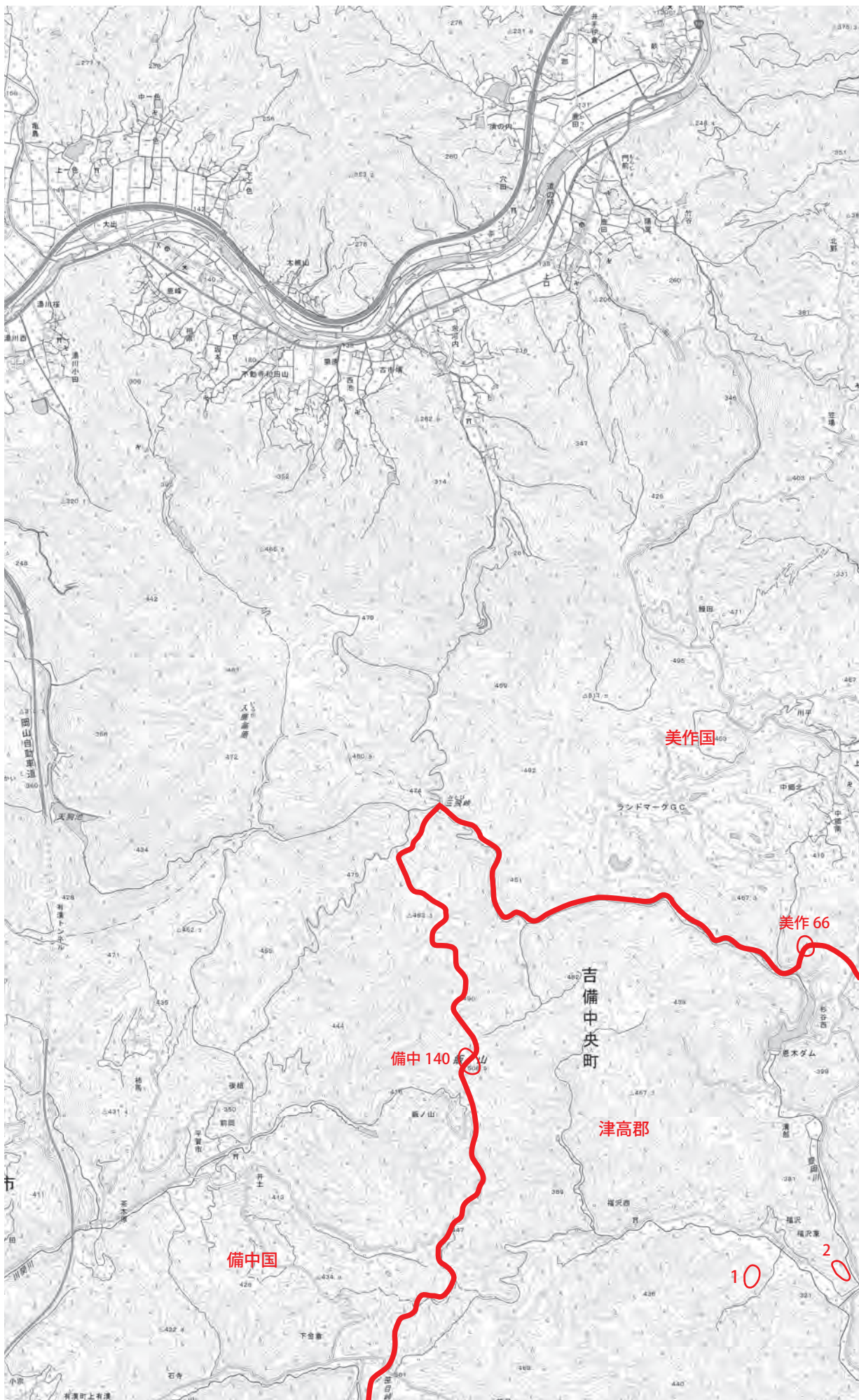
1 分布図

- ・城館番号は、旧郡を通して番号を付している。
- ・本巻の収録市町村は、岡山市（旧岡山市・旧建部町の一部を除く）、赤磐市、備前市、瀬戸内市、玉野市、倉敷市（旧児島郡）、和気郡和気町、加賀郡吉備中央町（旧加茂川町）、久米郡美咲町（旧旭町の一部）である。
- ・城館跡の範囲は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」を基に赤の実線で示している。すでに消滅しているものは、赤の点線で示している。また地形改変等により、城域が不明瞭なものは赤丸で示している。
- ・旧国境は実線で、旧郡境は点線で示している。
- ・旧国・旧郡の境界線は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館『旧高旧領取調台帳データベース』に記された旧村境を基にしており、おおむね新郡区編成時（明治11年）のものである。

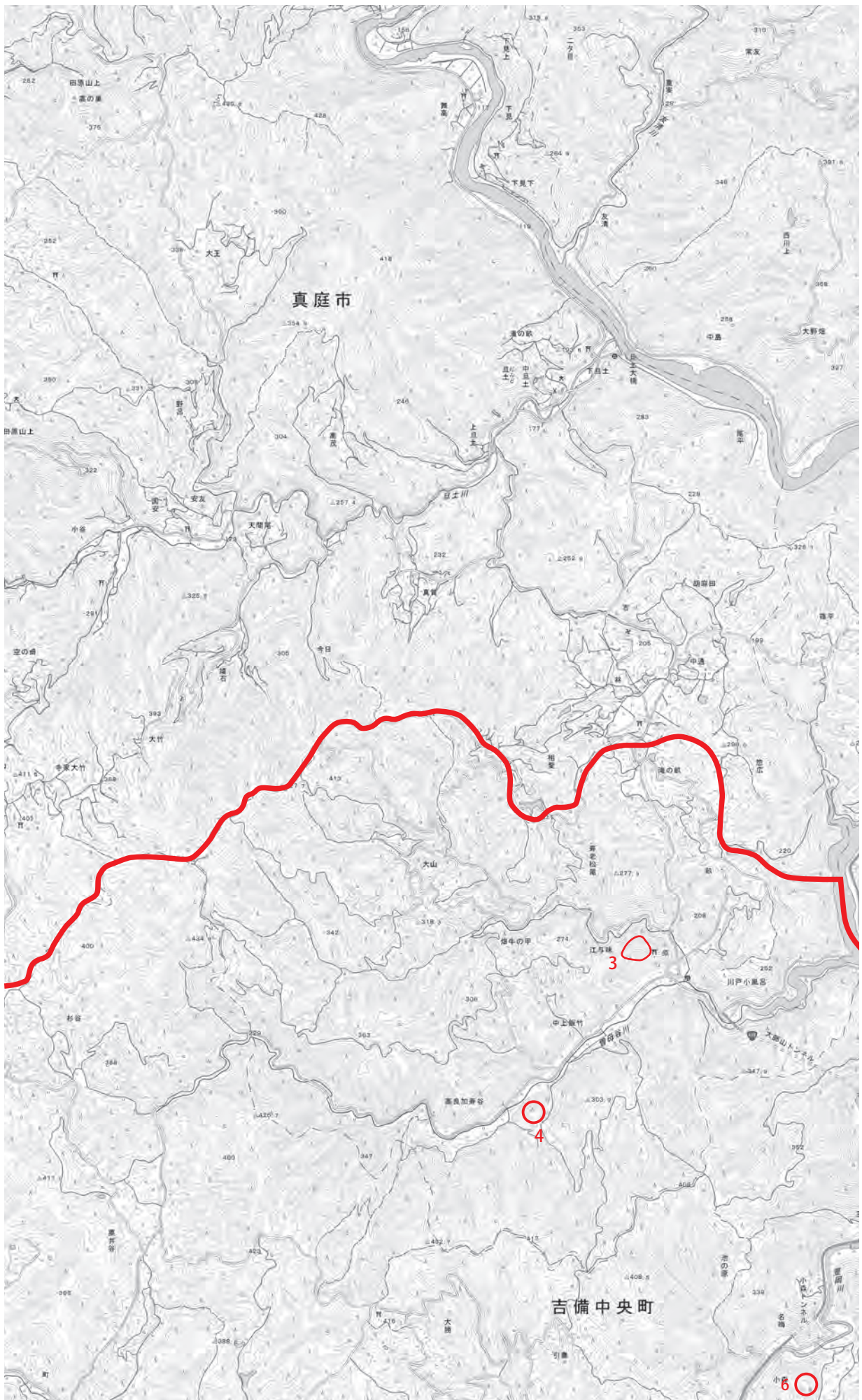


第2図 城館跡索引図 (1/500,000)





←
1



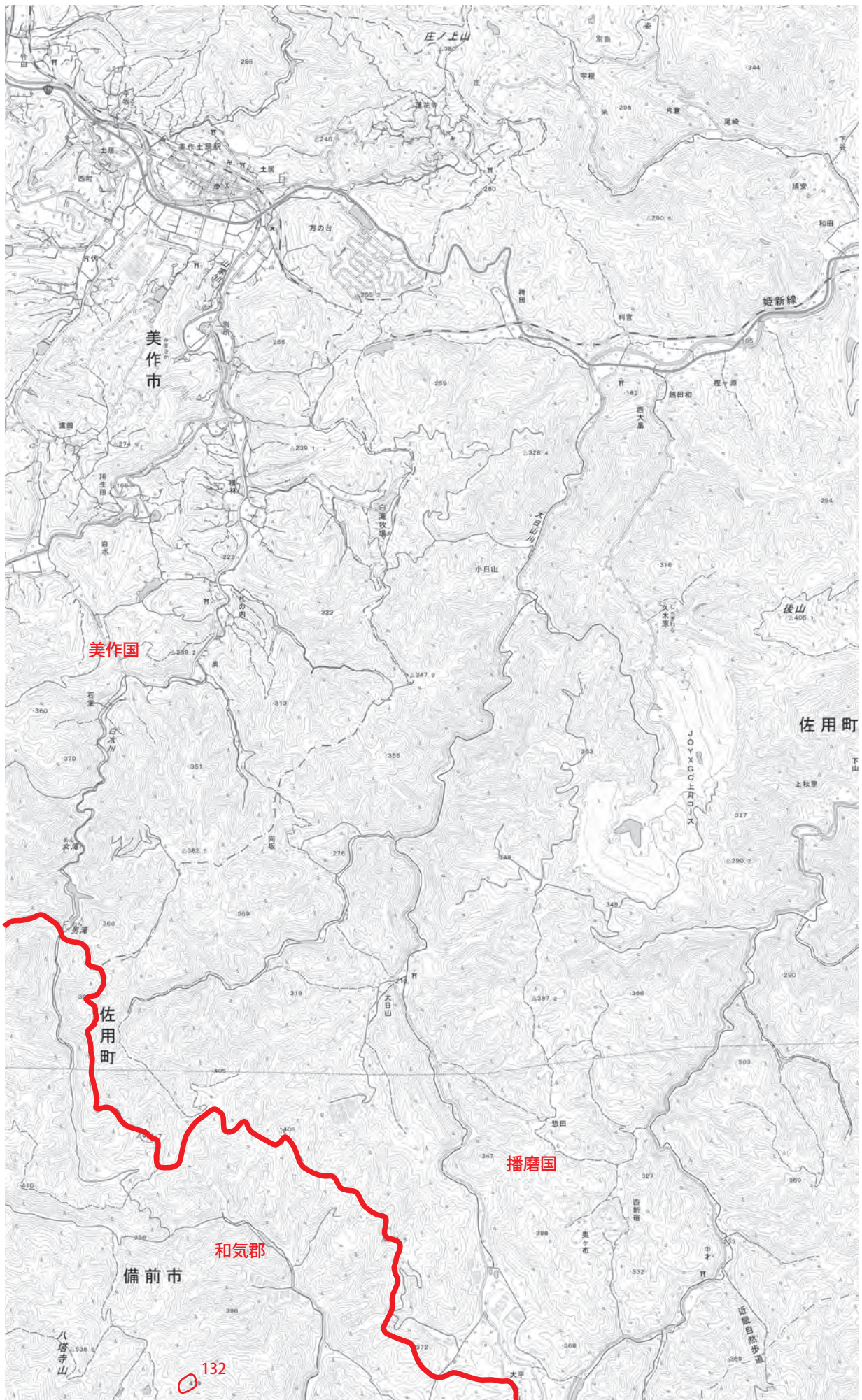


5 ↓





7 ↓

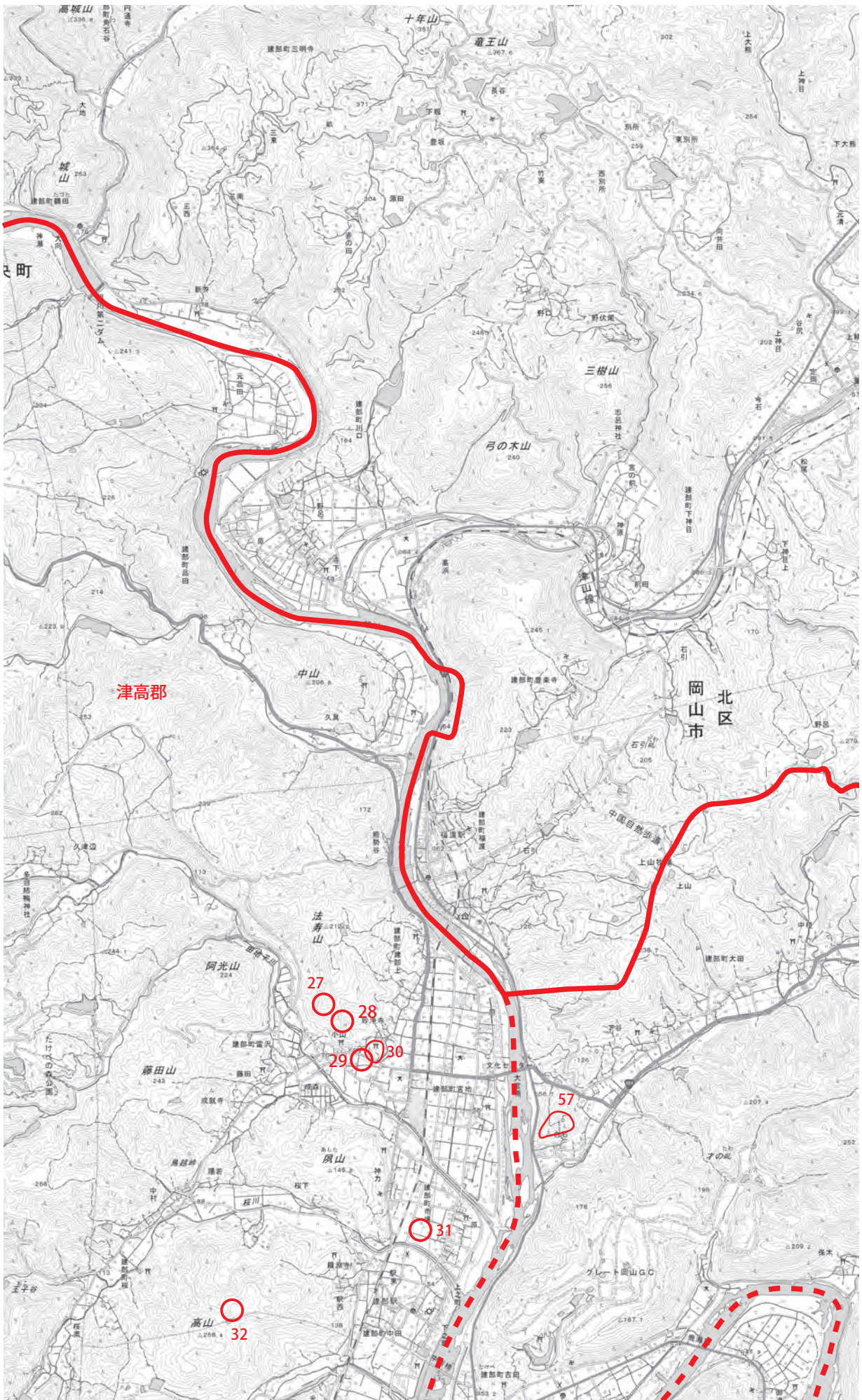






→ 6

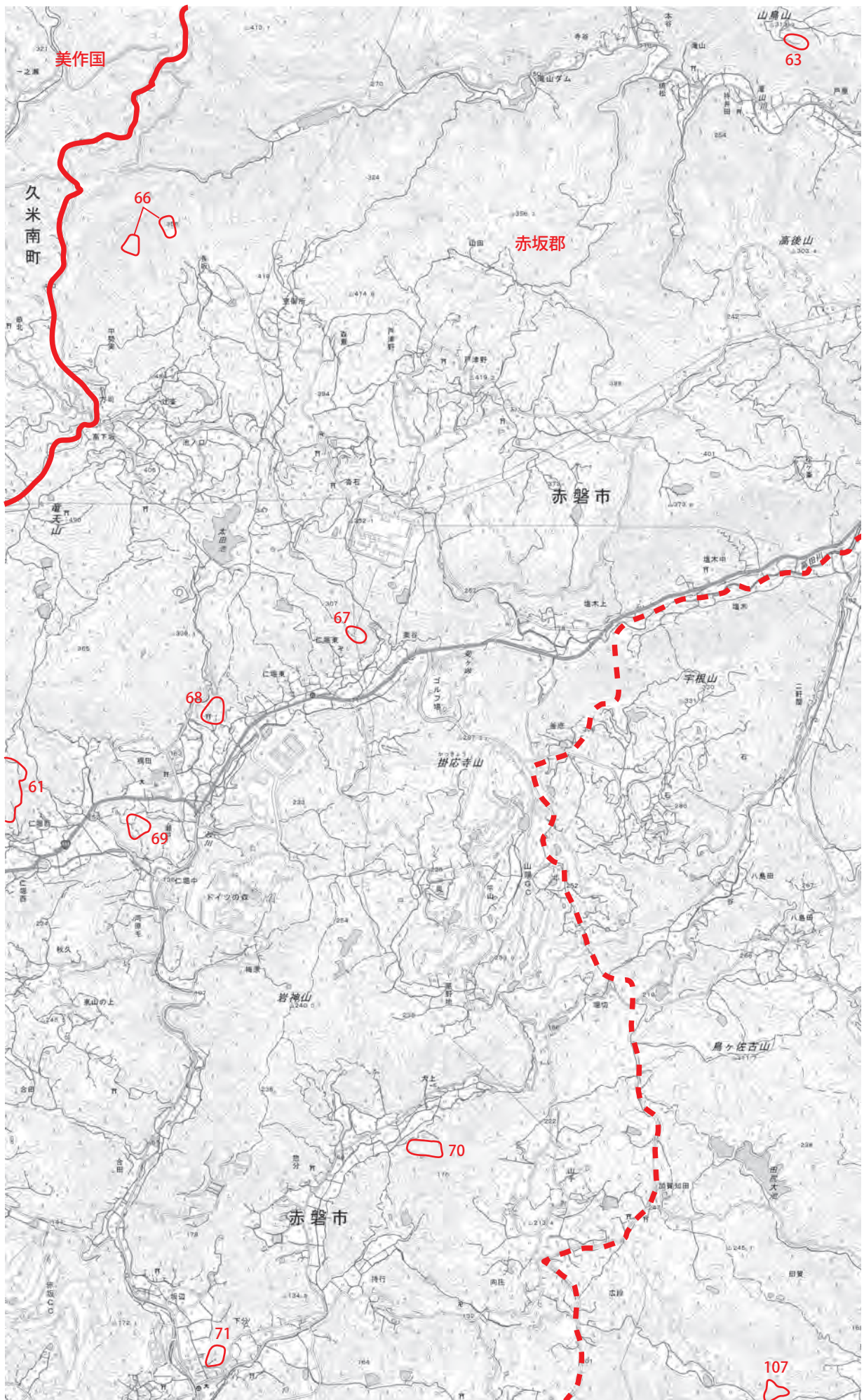
10 ↓



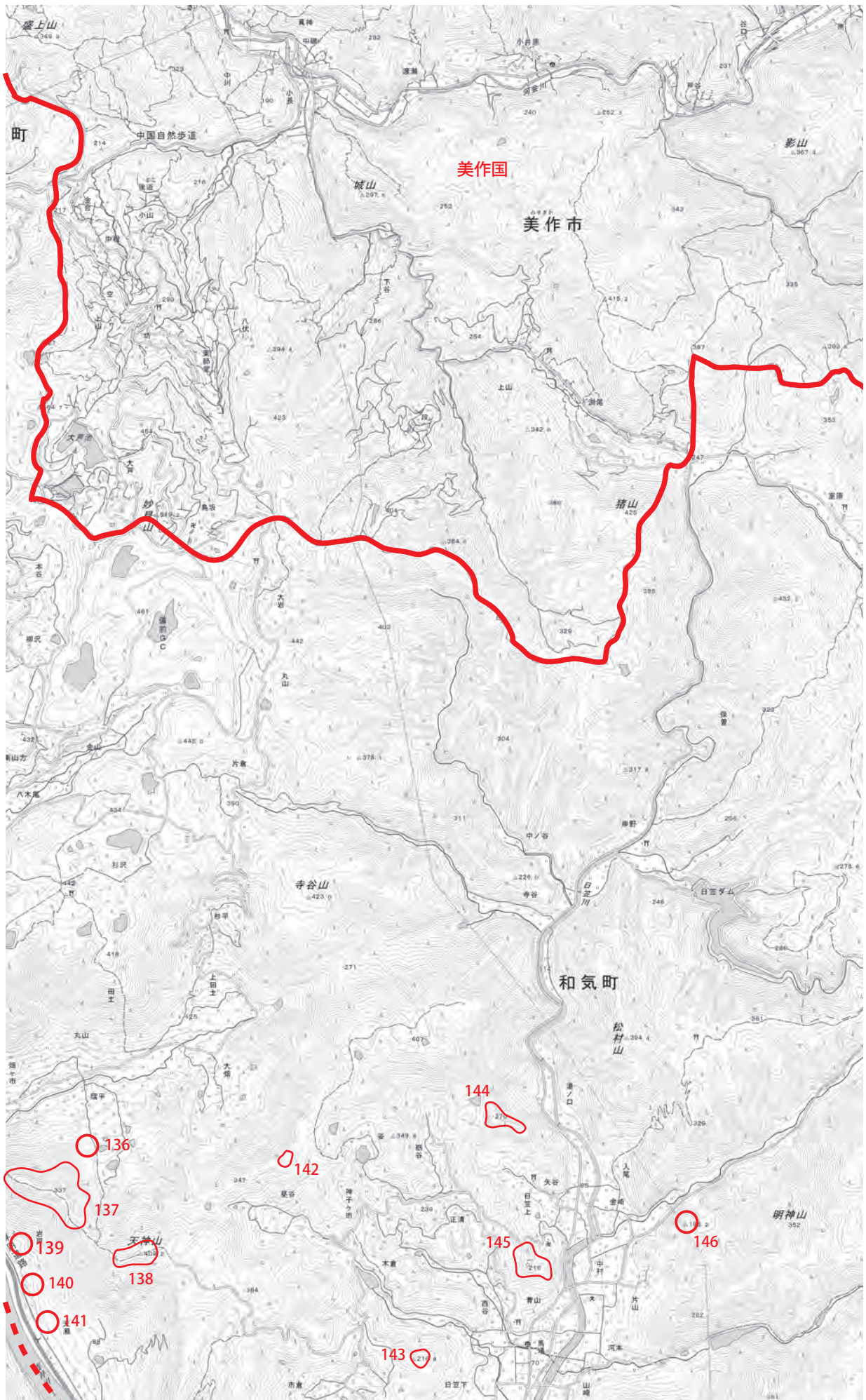
↑ 5

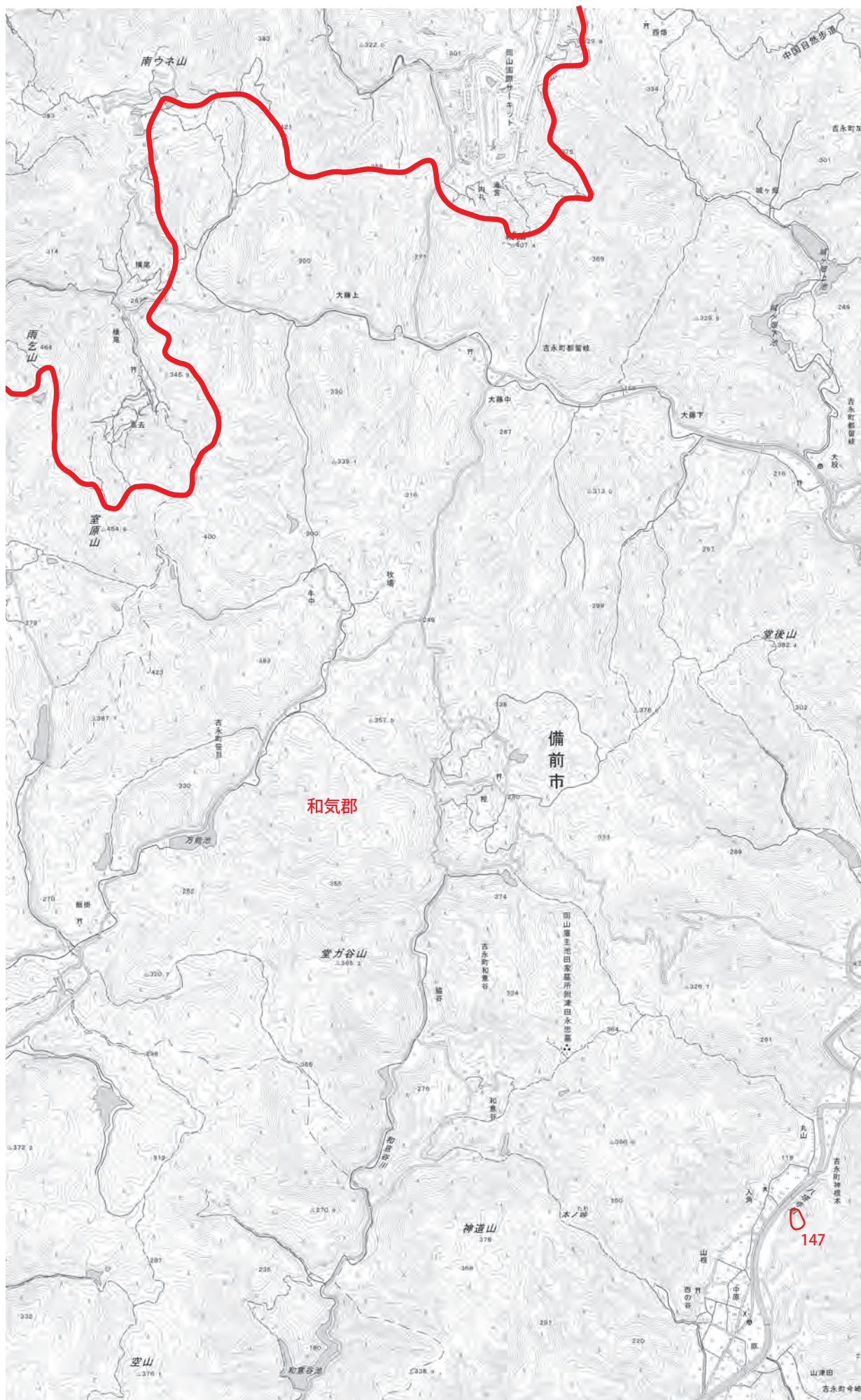
津高郡

岡山市 北区



7



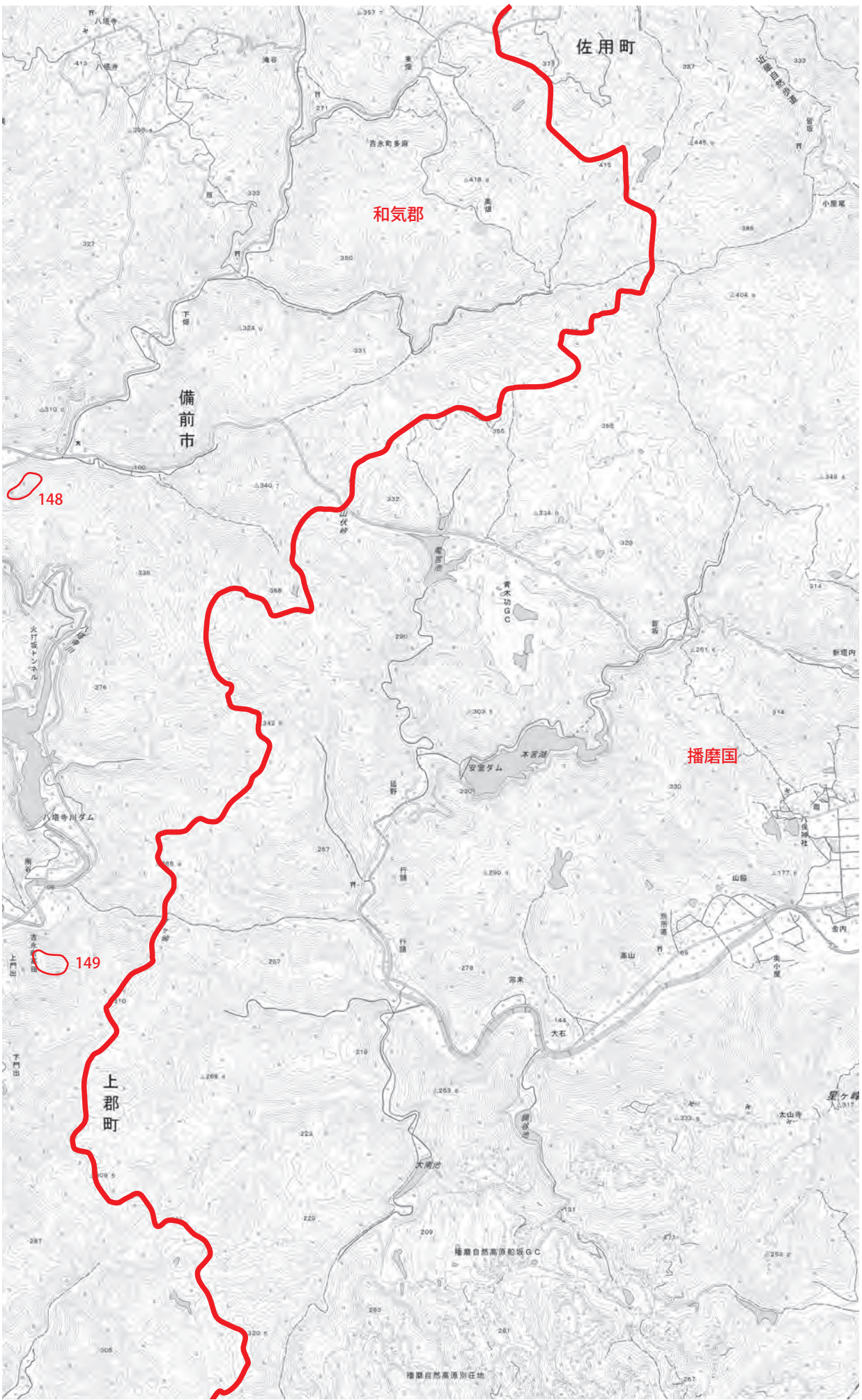


→ 9

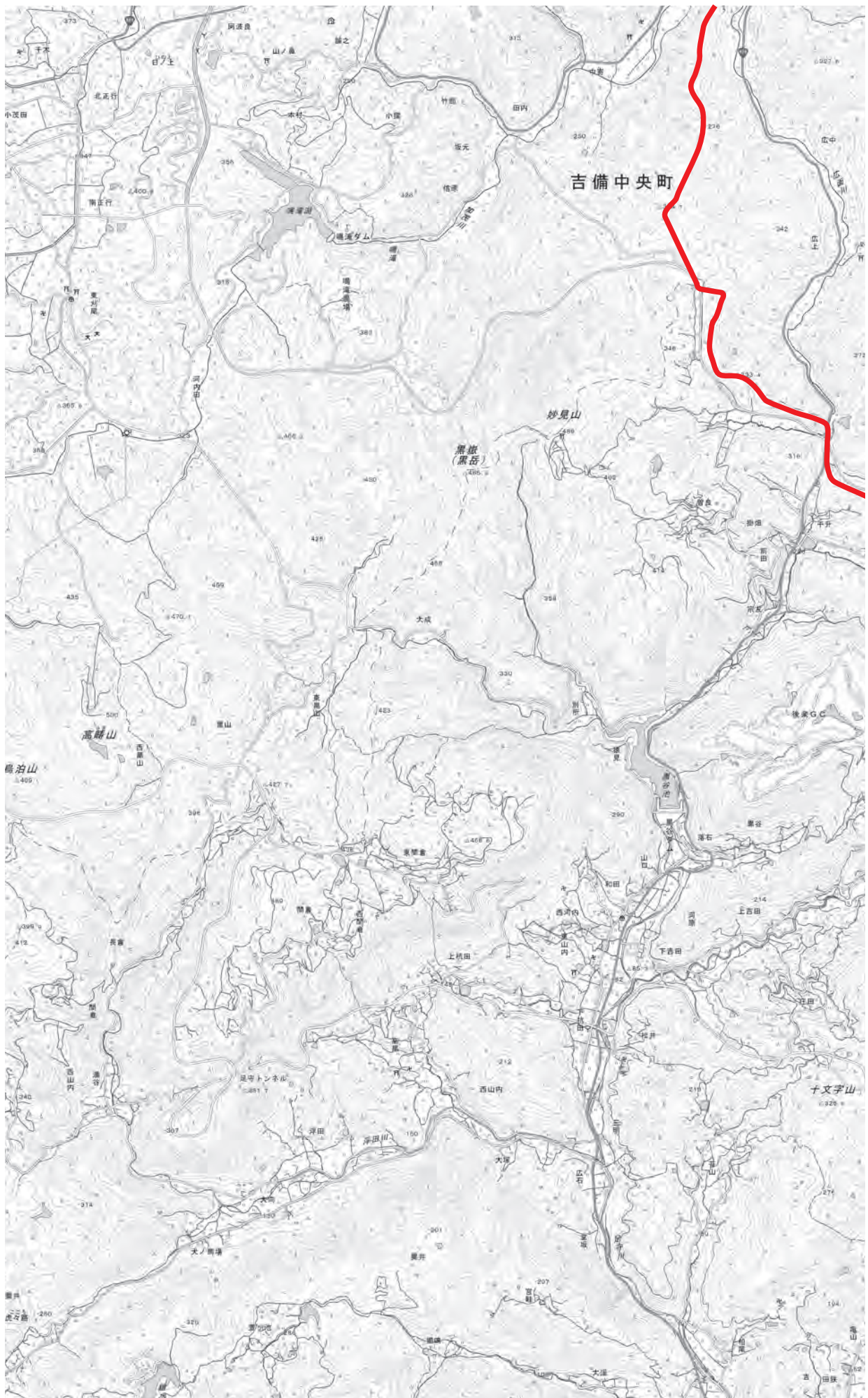
13 ↓

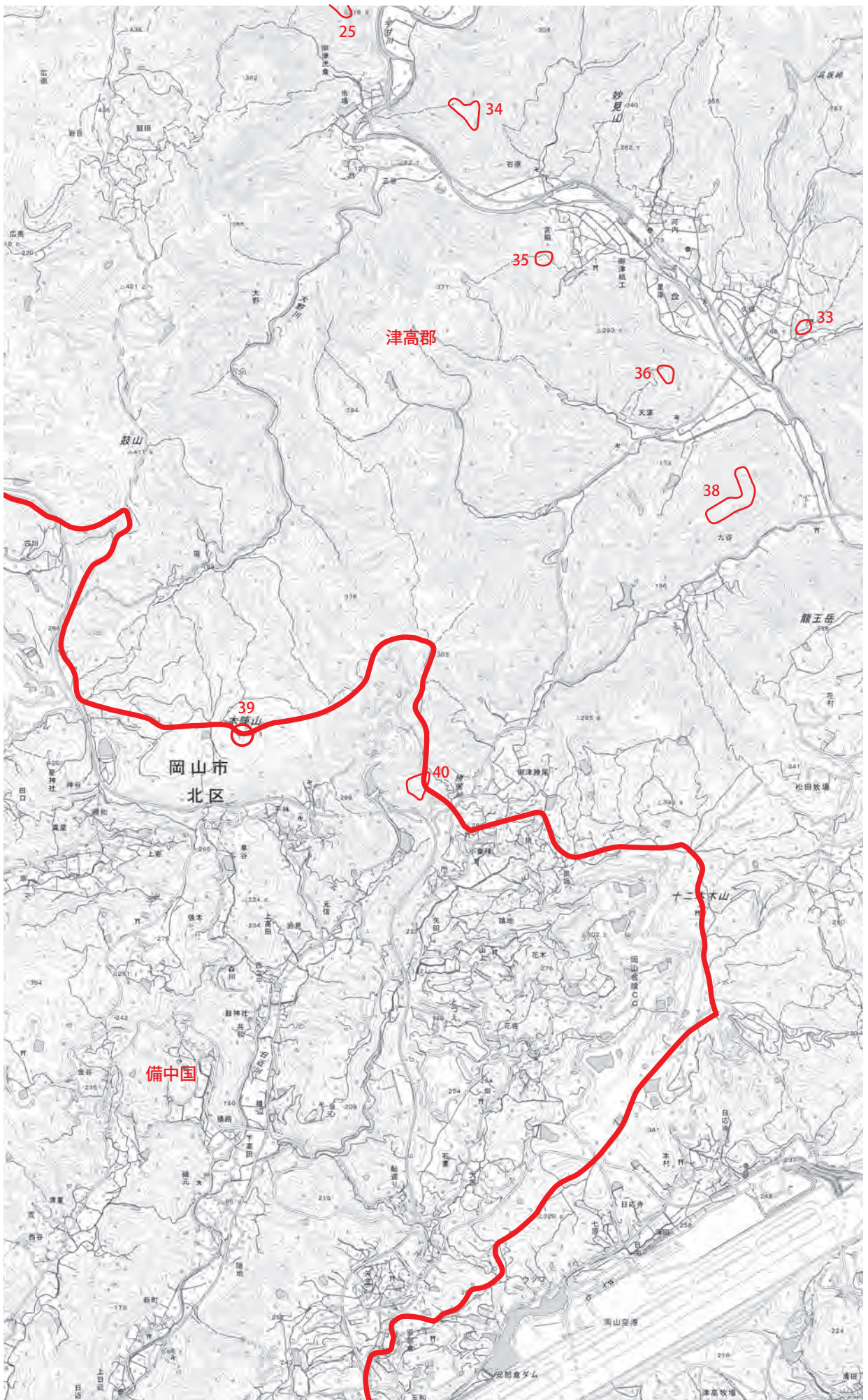
↑ 4

∞ ↑







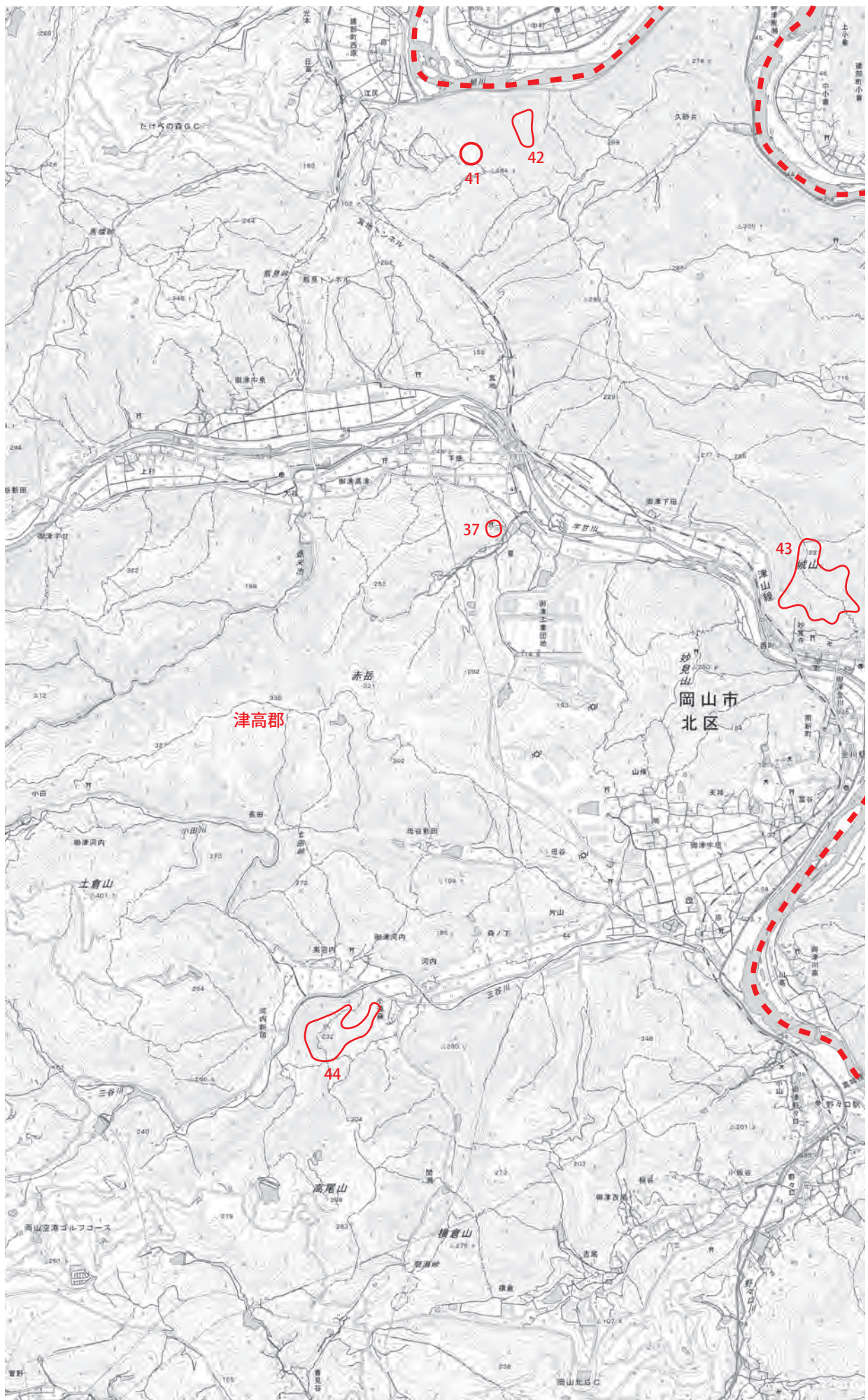


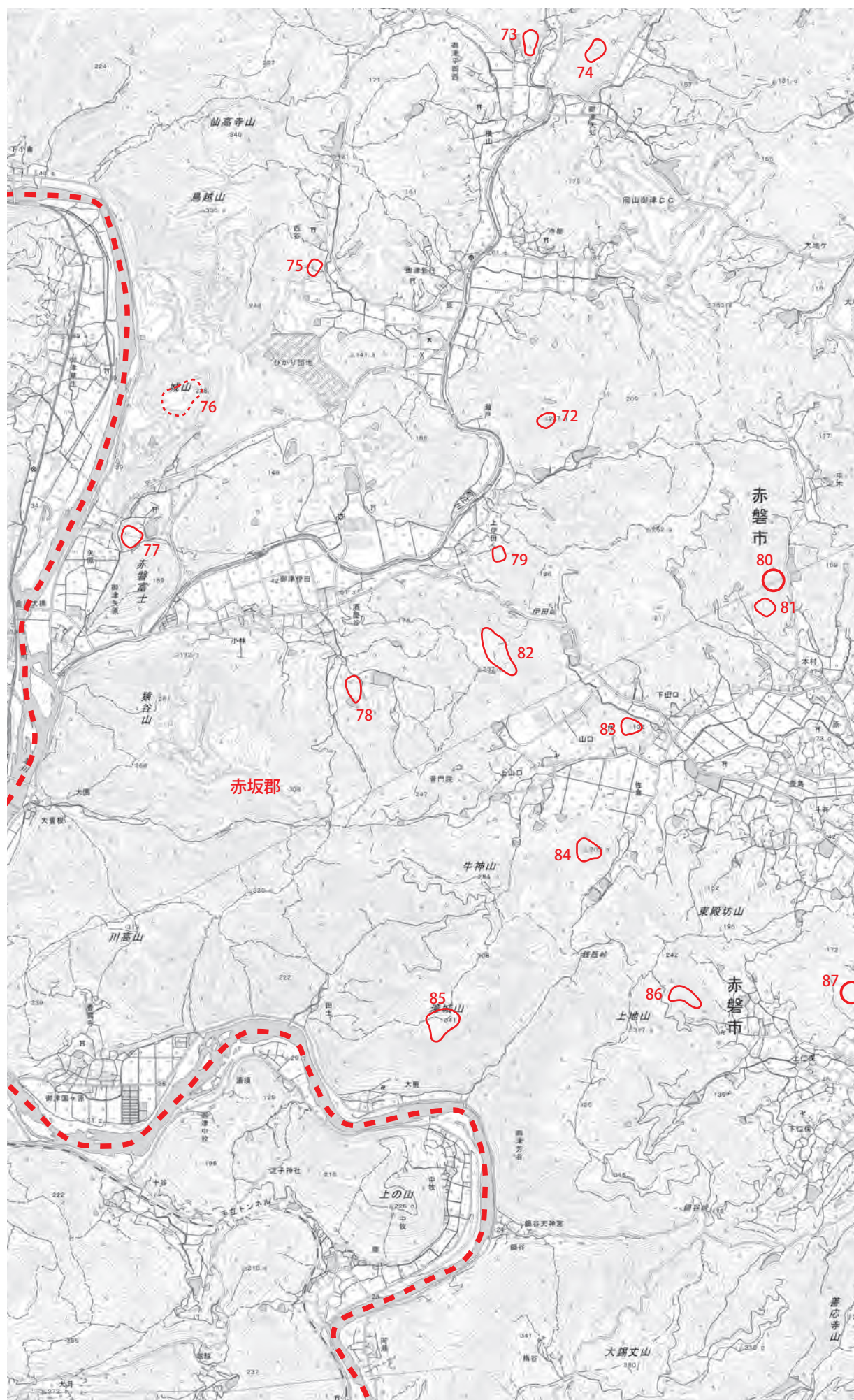
→ 11

15 ↓

↑ 6

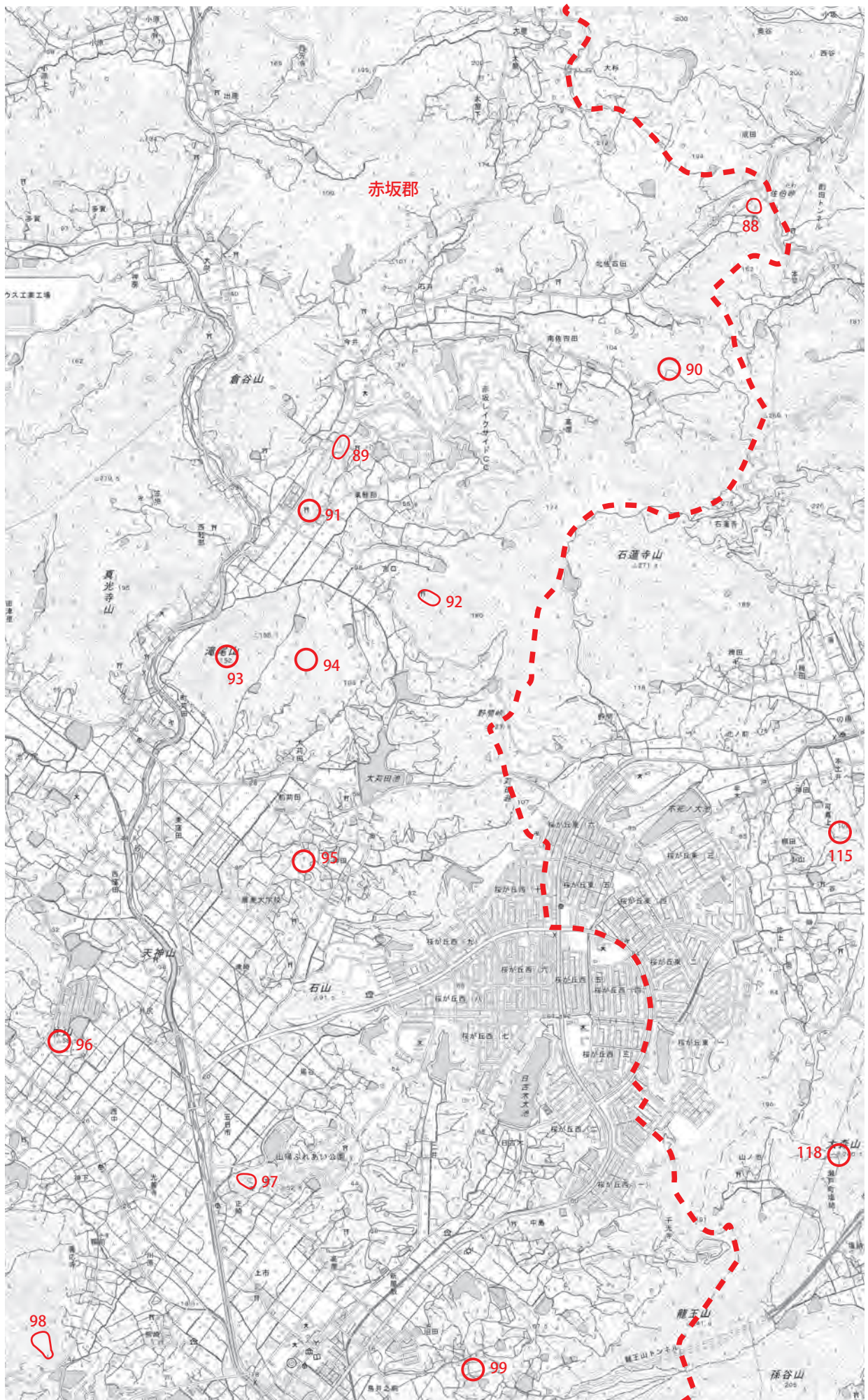
← 10





→ 12

16 ↓



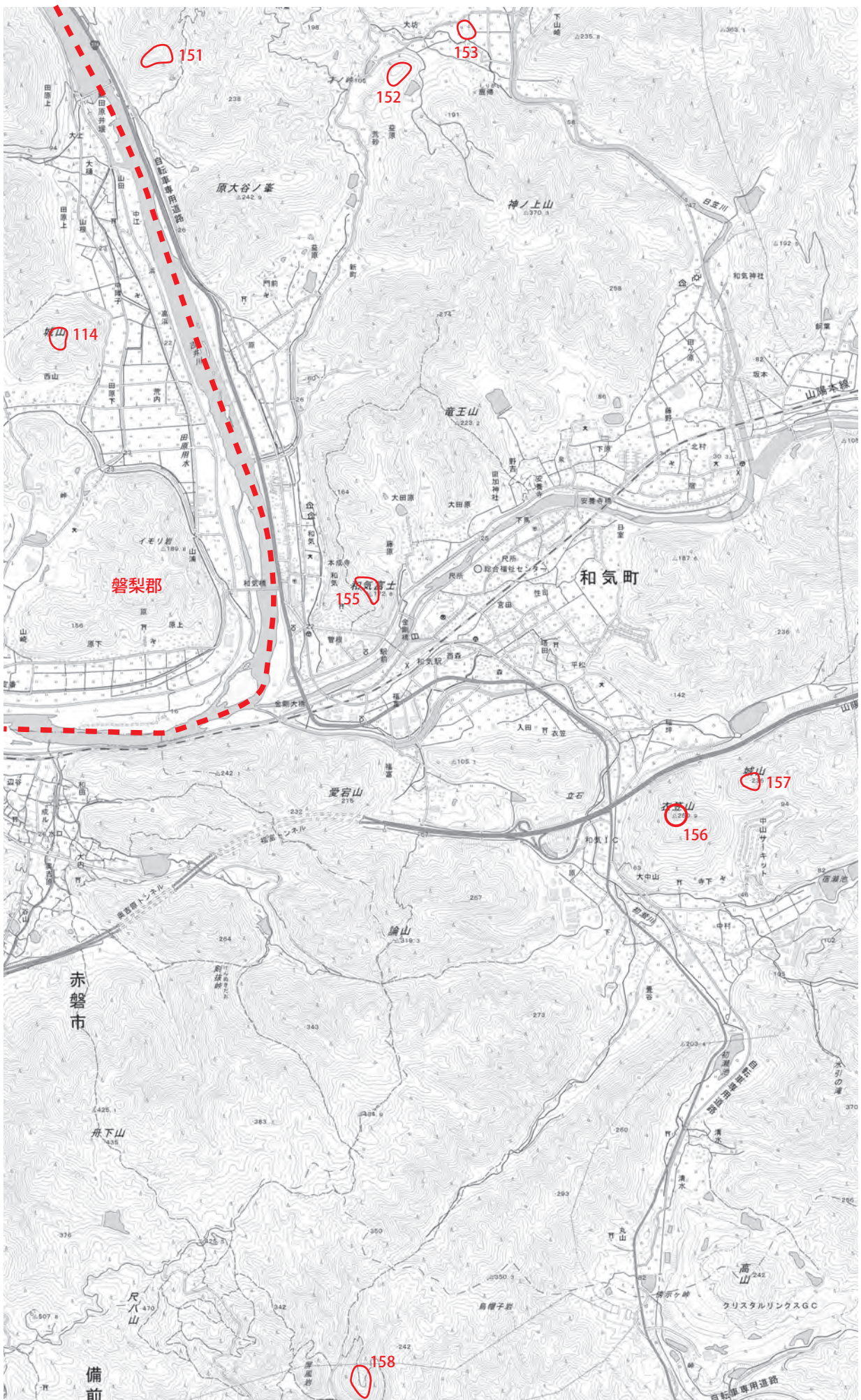


→ 13

17 ↓

↑ 8

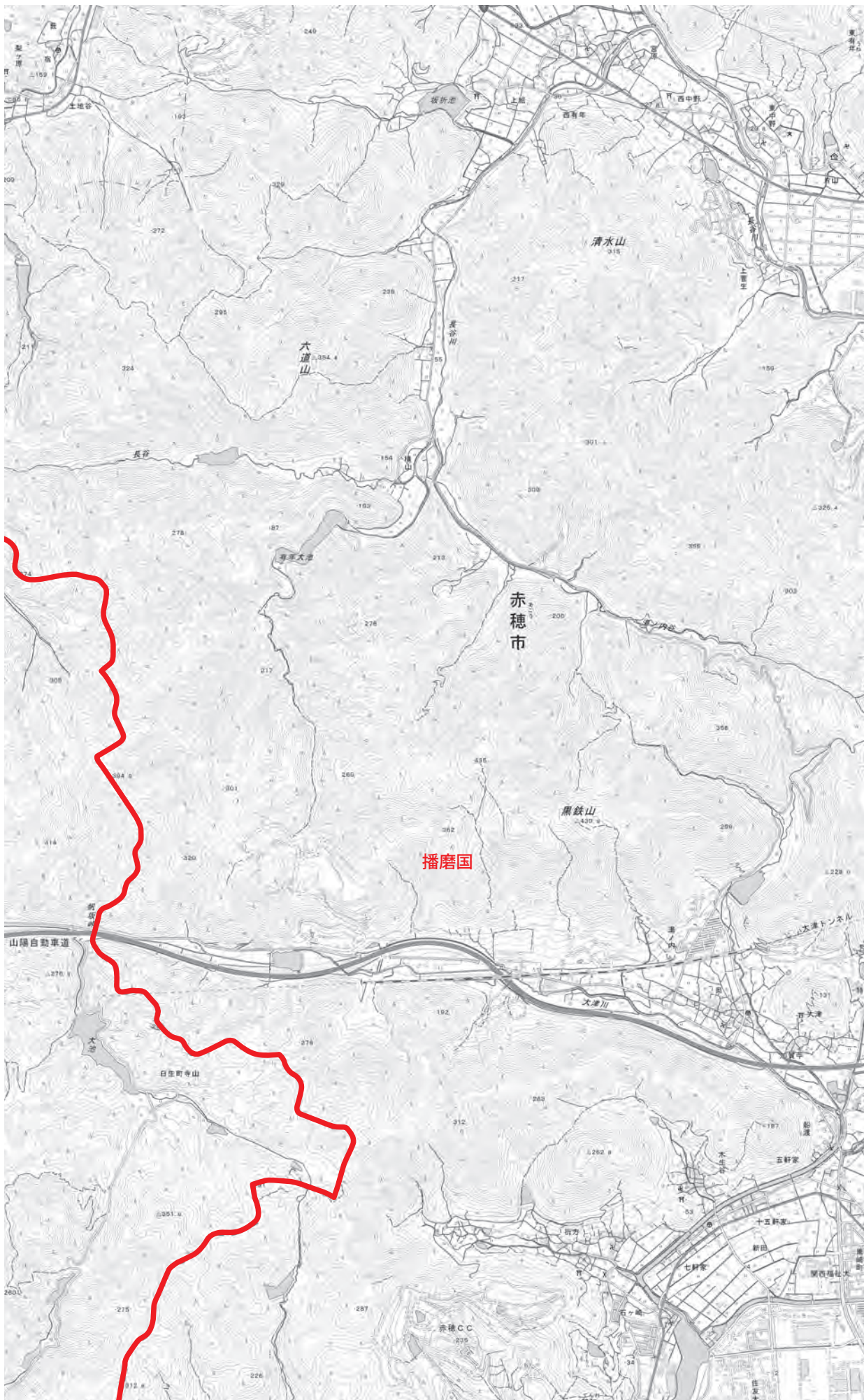
← 12

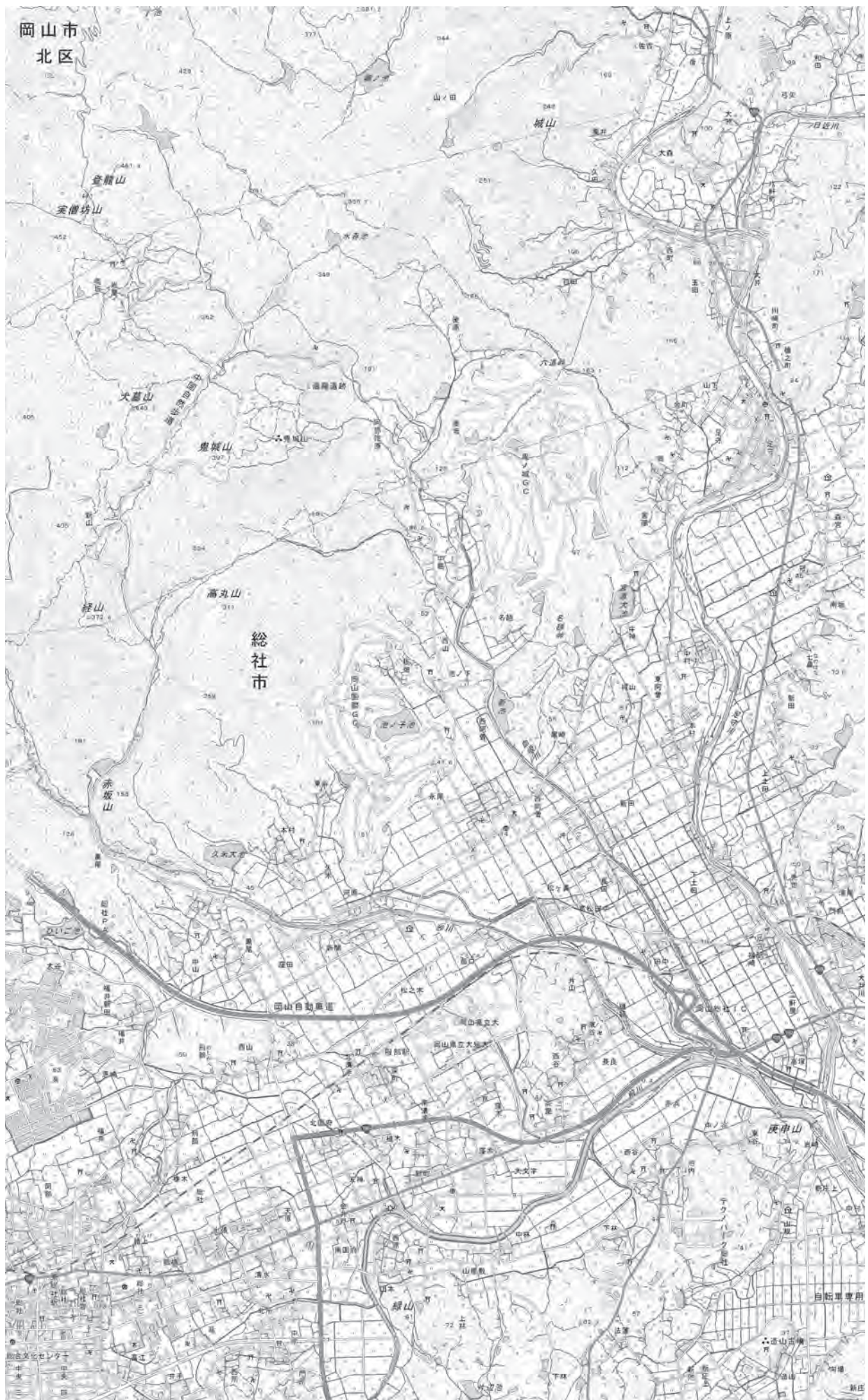


↑ 9



← 13



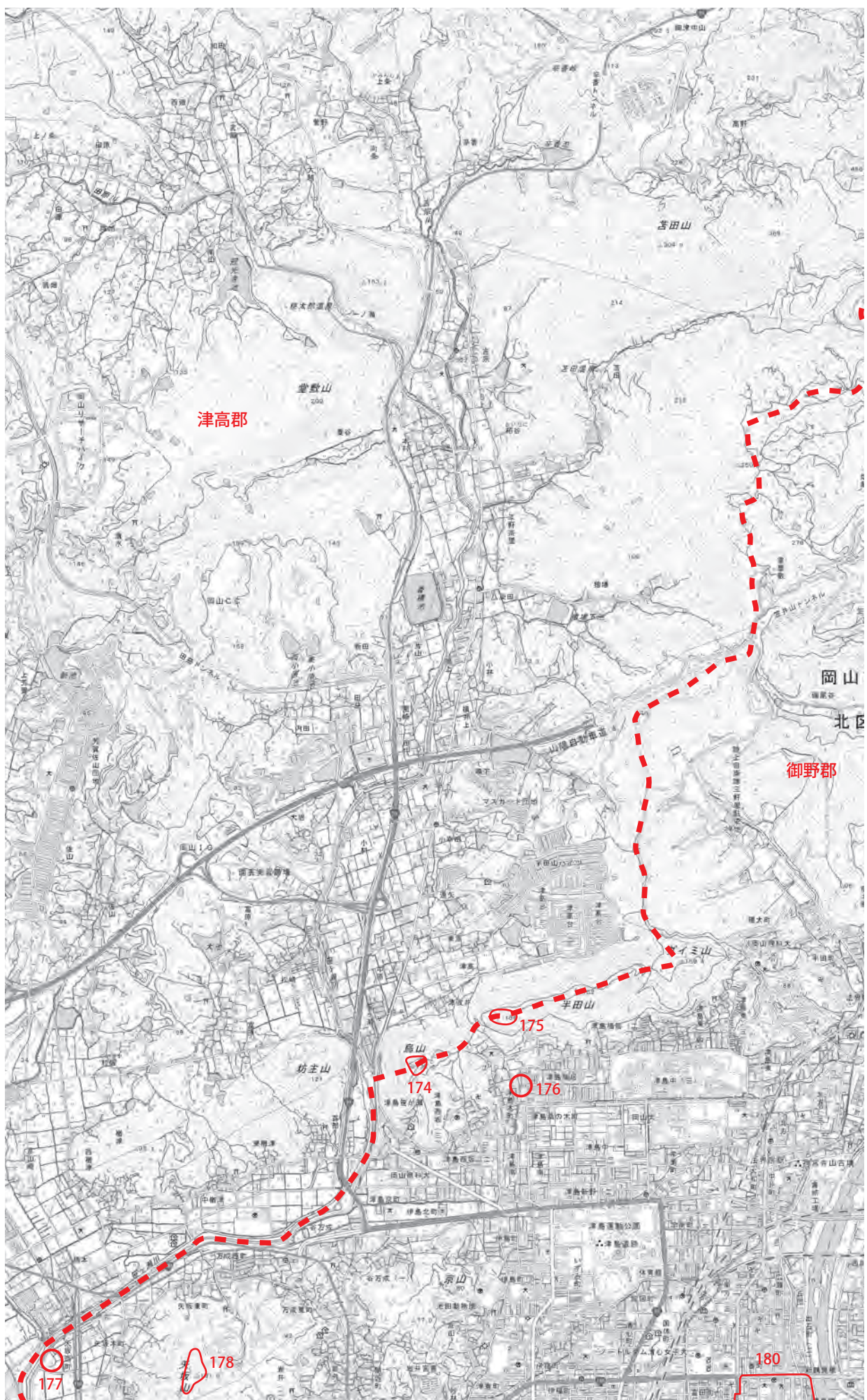


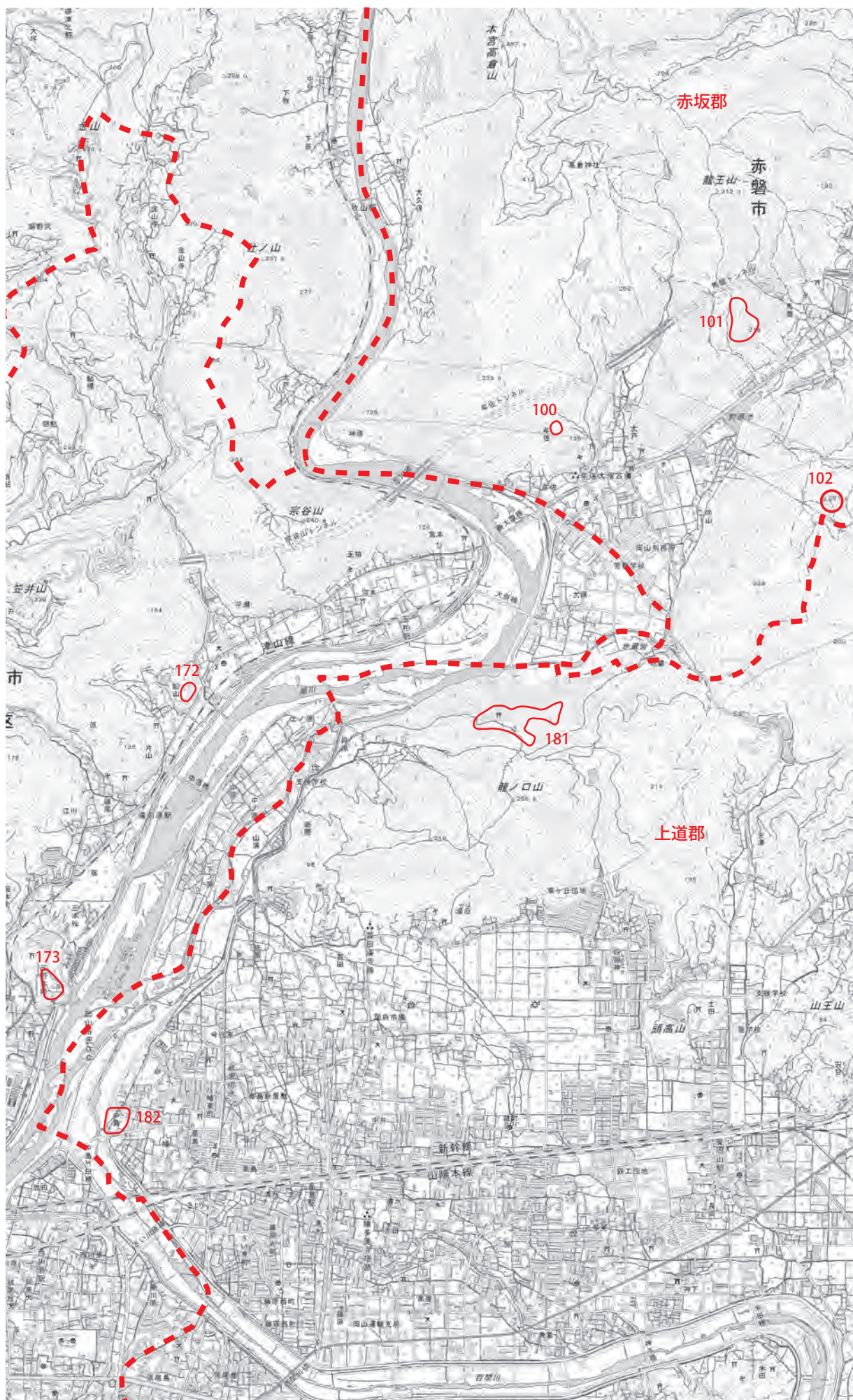


→ 16

↑ 11

← 15

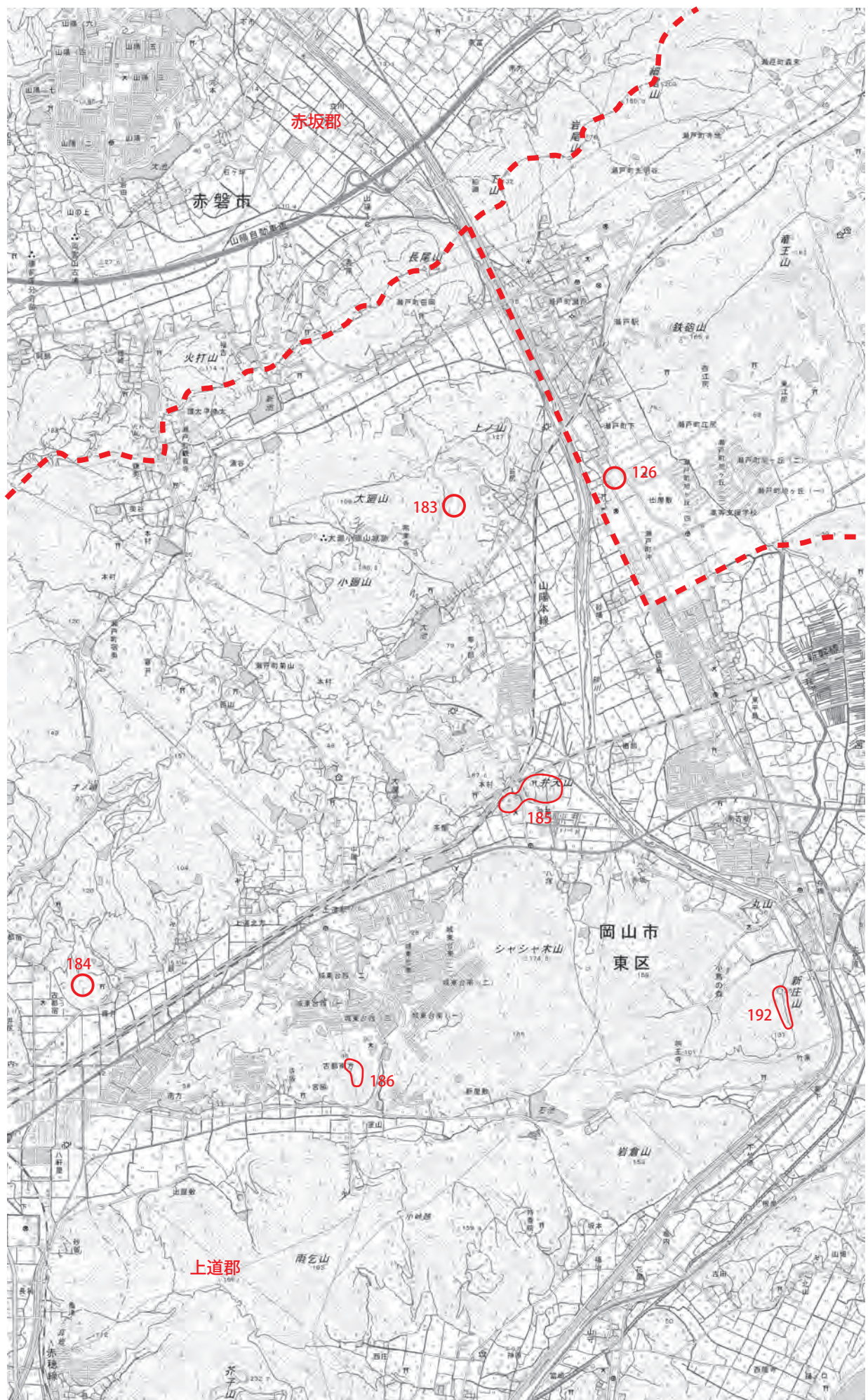




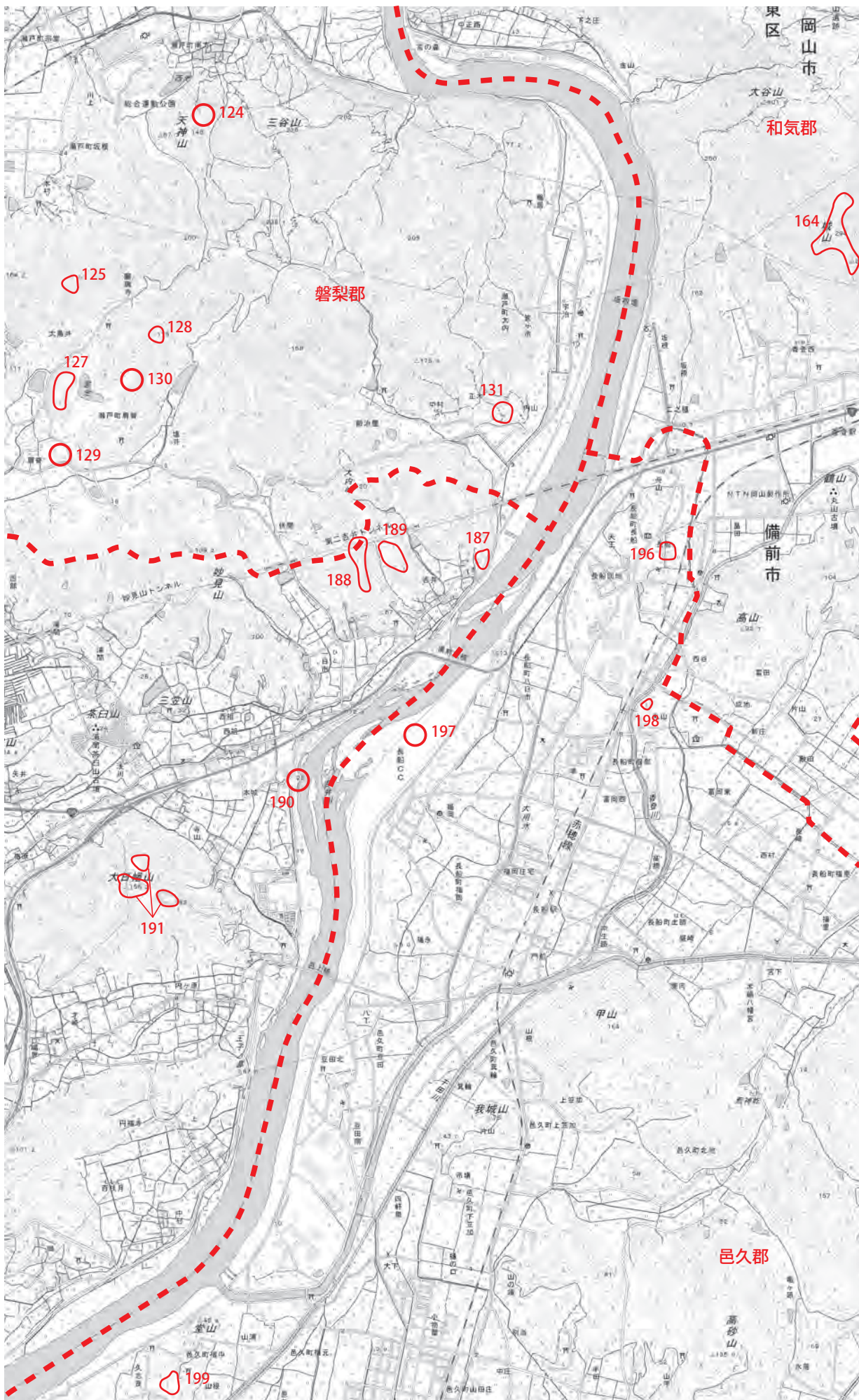
→ 17

19 ↓

↑ 12

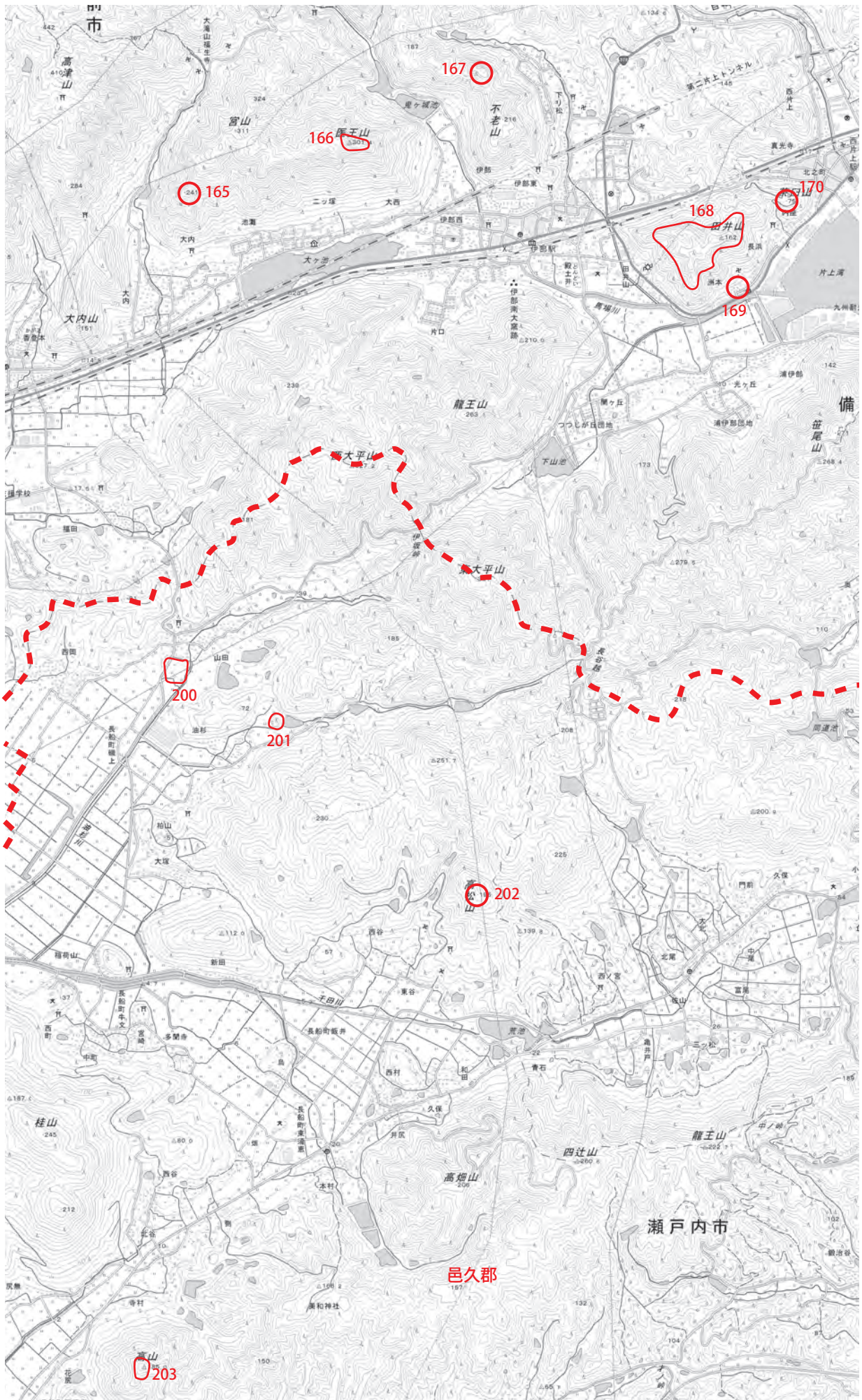


← 16

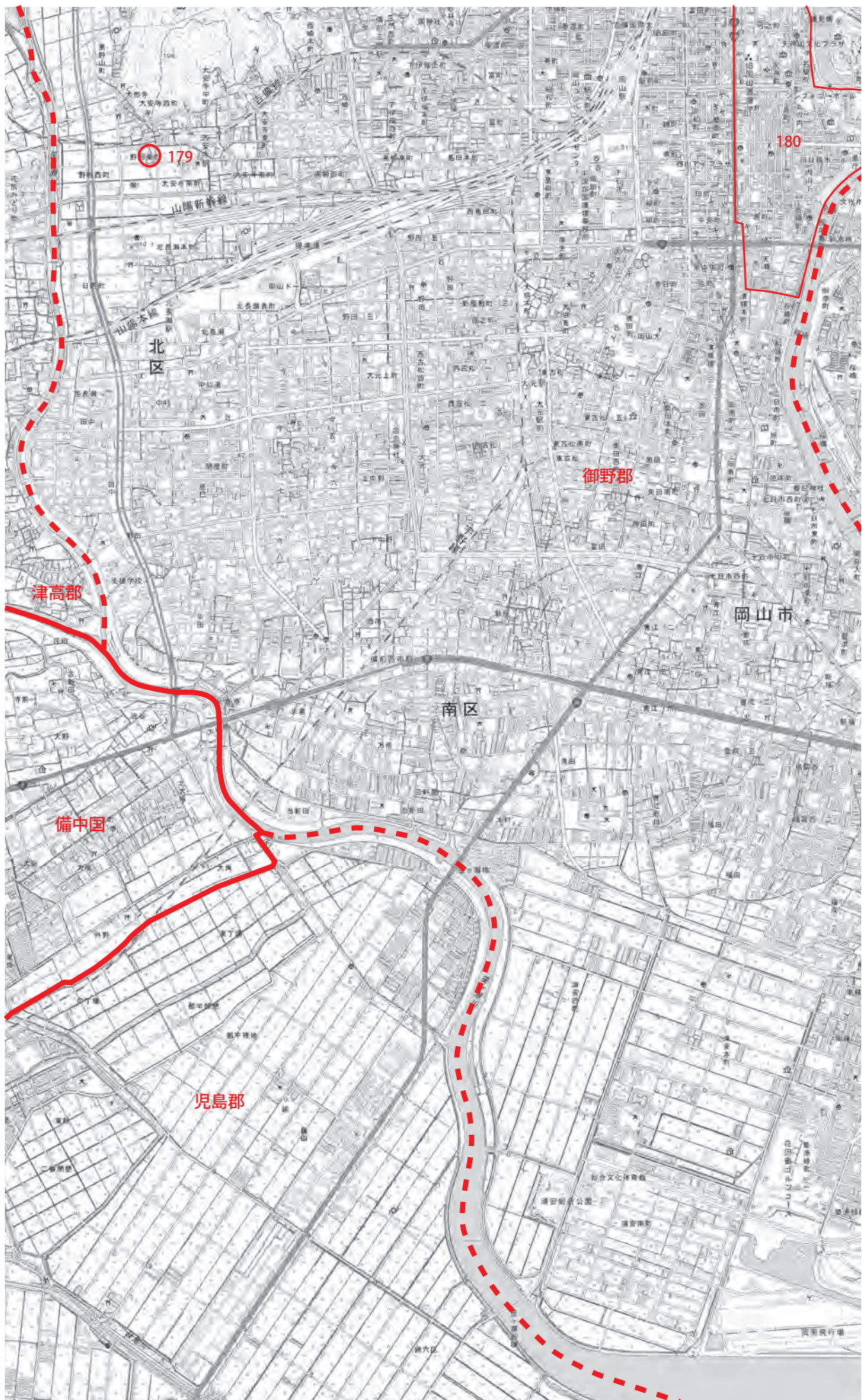


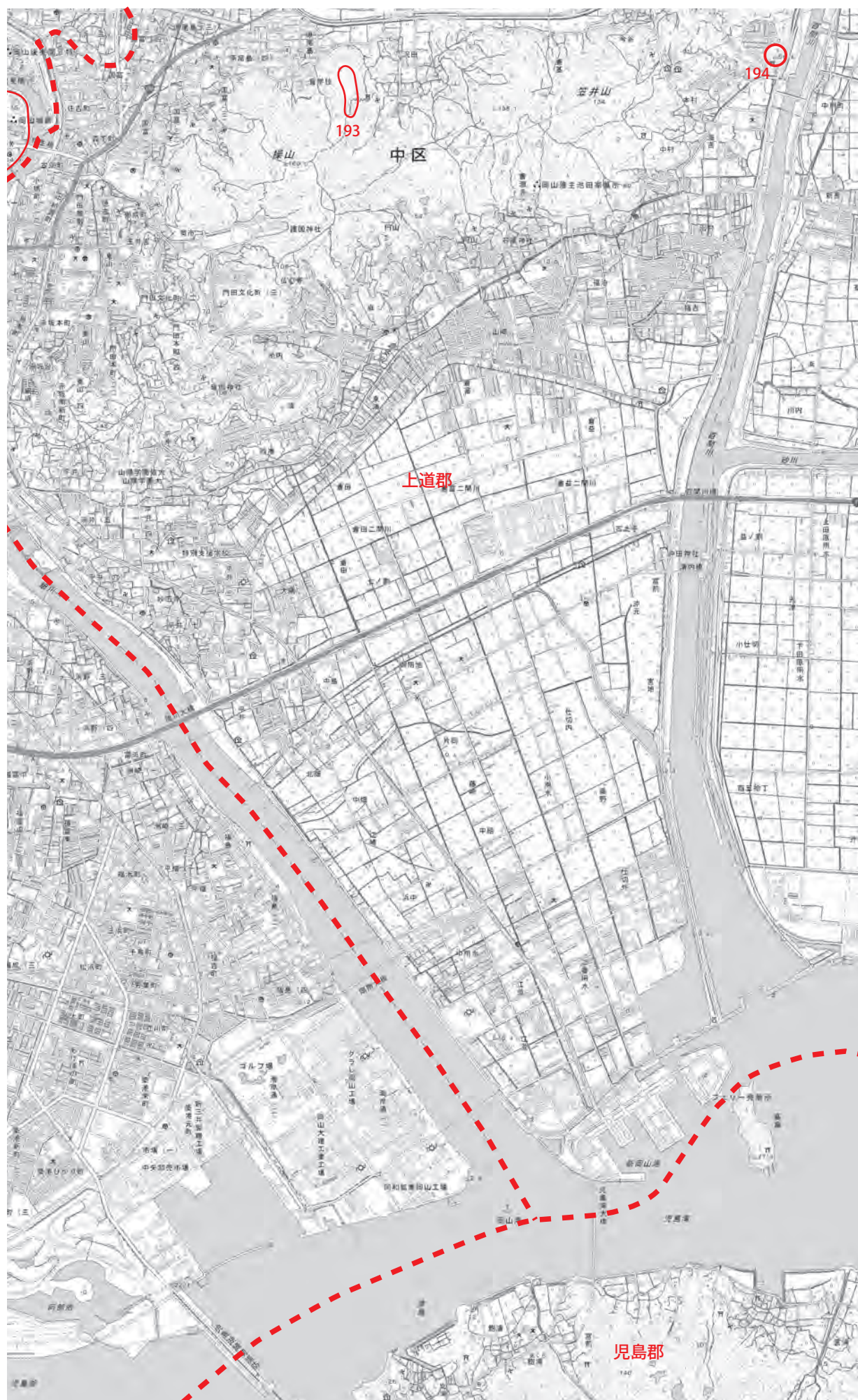
↑ 13

← 17







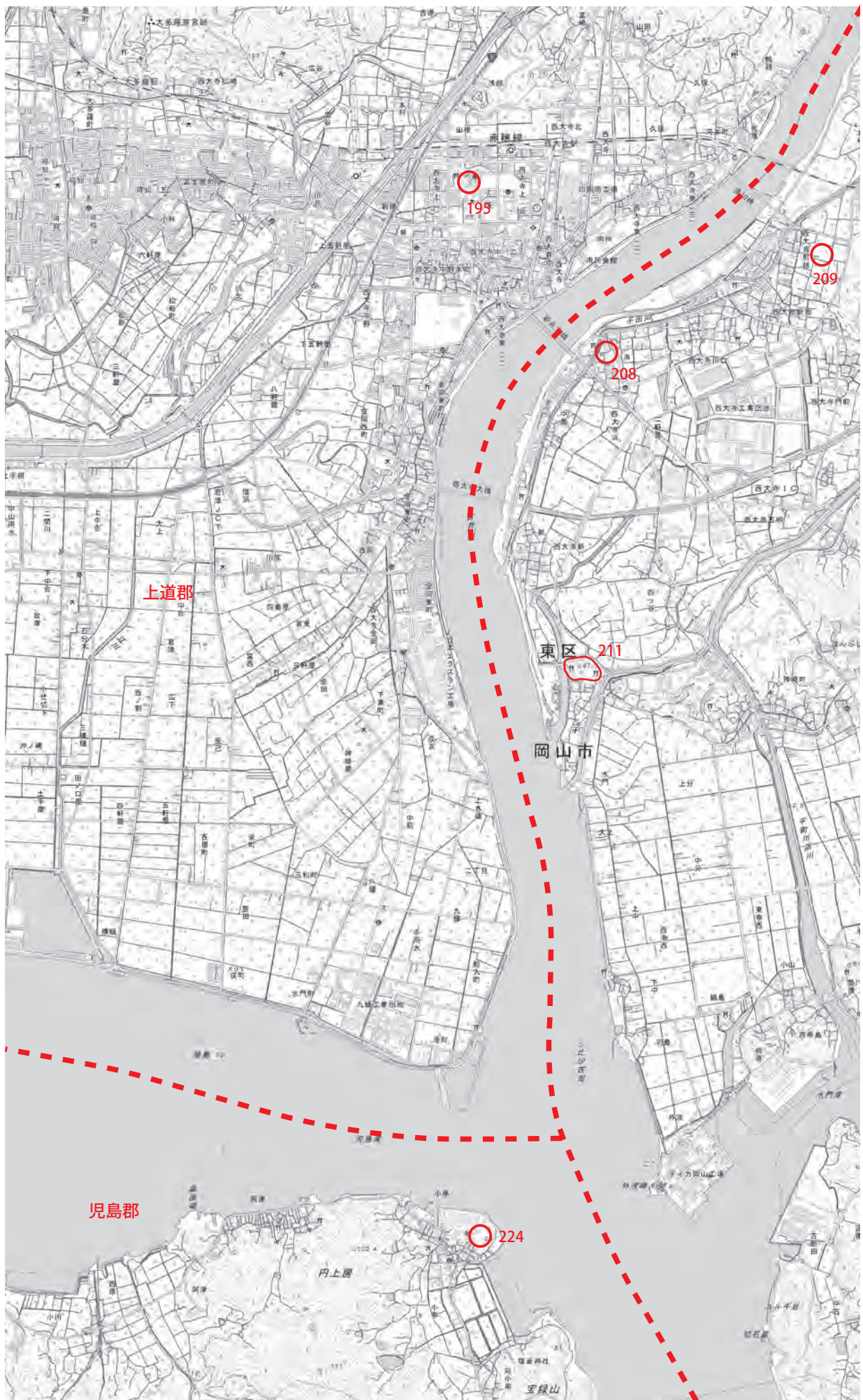


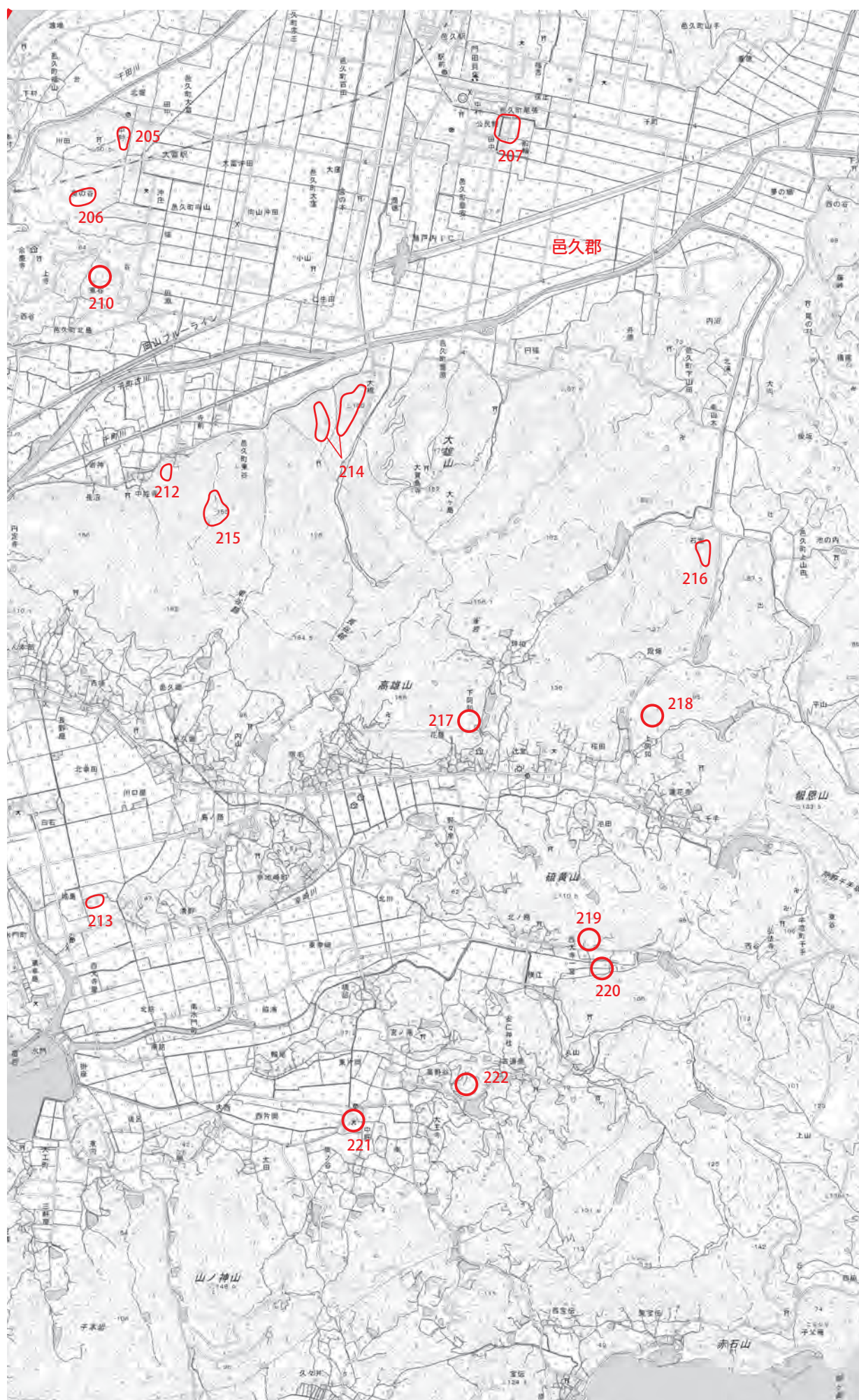
→ 20

23 ↓

↑ 17

↑ 19



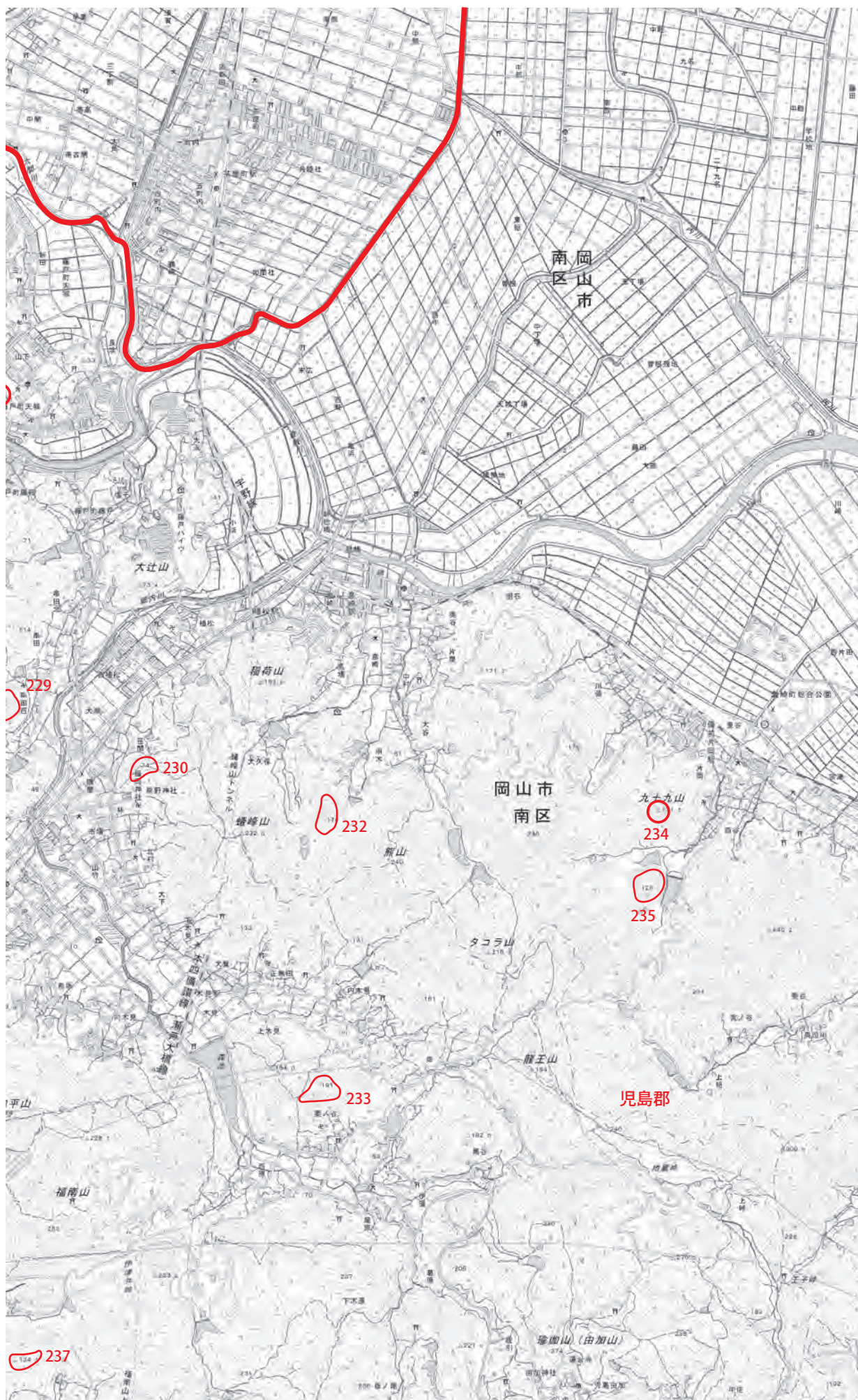


→ 21

24 ↓







→ 23

25 ↓

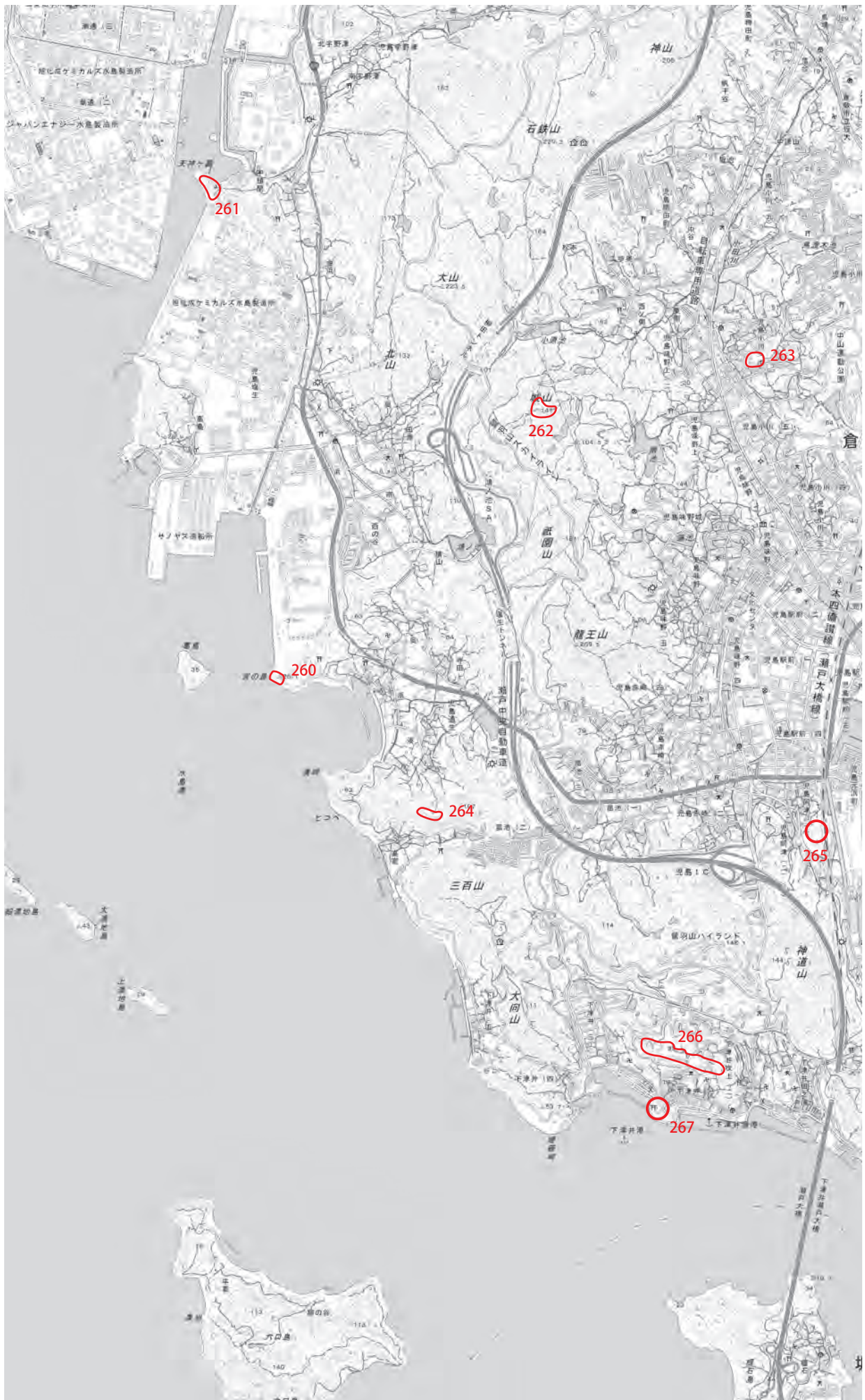




↑ 20



← 23





→ 26

↑ 23



← 25



2 備前国中世城館跡一覧表

1 一覧表の作成について

- (1) 本表は、旧備前国に属した旧津高郡、旧赤坂郡、旧磐梨郡、旧和気郡、旧御野郡、旧上道郡、旧邑久郡、旧和気郡（以後、旧を除く）に所在した城館跡等の一覧である。
- (2) 郡の単位は、分布図凡例のとおりである。ただし、郡境に位置するものは、①：近世地誌等に記載された旧村のある郡、②：①がない場合は主要部分が属する郡に含め、「郡名」覧には両方を明記している。

2 一覧表の記載内容について

- (1) 本表は、中世城館跡および城館関連遺構等を記載している。
- (2) 本表には、城館番号、城館跡名、旧郡、所在地、位置（緯度・経度）、立地、標高（最高所）、比高（最高所と山麓間）、城域（東西・南北の長さ）、現況（地目）、概要、分布図（地図番号）、解説頁を記載した。

- ・城館番号：分布図及び解説頁の番号と対応する。
- ・城館跡名：『改訂岡山県遺跡地図』（2003）に用いられたものを原則として使用している。また別称については、中世城館関連文献一覧表に記載している。
- ・所在地：市町村名と大字名を掲載している。また、城館範囲内に複数の住所が存在する場合は、その全てを記載している。
- ・位置：主郭と推定した位置の北緯・東経を示している。
- ・立地：広義の意味で、以下の4種に分類する。なお、第3章では、より詳細な地形的特徴を記述している場合もある。

頂部：独立丘陵や山塊の頂部に占地するもの

尾根部：山塊から派生した尾根筋に占地するもの（尾根頂部や平坦部を含む）

端部：尾根の先端部分や斜面部分に占地するもの

平地部：平地に占地するもの

- ・標高：城館の最高所の数値を表記し、1の位は切り捨てている。ただし、標高10m未満のものは、そのままの数値を表記している。
- ・比高：城館の麓と思われる場所から最高所までの数値を表記し、1の位は切り捨てている。ただし、比高差が10m未満のものは、そのままの数値を表記している。
- ・城域：城館遺構が存在する範囲を表記し、1の位は切り捨てている。また、城域が判然としないものは空欄にしている。
- ・現況：山林・水田・畑・果樹園・宅地・社寺・その他の項目に分けて記載している。
- ・概況：第3章で解説した城館は、確認した遺構の種類のみを記載している。また、その他のものは、現地の状況や故事来歴等を記載している。
- ・分布図：分布図にある図番号と右・左を表記している。
- ・解説頁：第3章で解説した城館はページを表記している。

表 2 備前国岡山県中世城館跡一覧表

津高郡	城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高 (m)	比高 (m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
	1	野々平城跡	津高	吉備中央町福沢	北緯34°55'38" 東経133°44'23"	尾根部	320	50	東西60m 南北80m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。畑和良教示。	1右	108
	2	名称未定	津高	吉備中央町福沢	北緯34°55'40" 東経133°44'46"	尾根部	290	50	東西30m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。地元情報提供。	1右	108
	3	江与味城跡	津高	美咲町江与味	北緯34°56'50" 東経133°47'39"	尾根部	230	110	東西140m 南北130m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。	2左	109
	4	祇園山城跡	津高	美咲町江与味	北緯34°56'15" 東経133°47'12"	頂部	220	80		山林・その他	曾保谷川右岸の山頂部に立地。標高約220m。外縁に低い土塁状の高まりをもち、南北に段をもつ約20m×40mの平坦面がみられる。地形改変が顕著。	2左	
	5	百坂城跡	津高	吉備中央町小森	北緯34°55'38" 東経133°48'44"	尾根部	250	120		山林・社寺	標高250mの山頂。頂部に東西21m、南北48mの平坦面。南側に小規模な平坦面あり。近世地誌類には、菱川右京亮、菱川左京、菱川与九郎などが居城したと記す。	2右	
	6	小森古城跡	津高	吉備中央町小森	北緯34°55'16" 東経133°48'22"	端部	250	100		山林	標高250mの山頂に東西13m、南北25mの平坦面あり。近世地誌類には、城主不詳または伊賀修理が居城したと記す。	2左	
	7	刈山城跡	津高	吉備中央町尾原	北緯34°55'09" 東経133°45'04"	端部	280	40		山林・社寺	標高約280mの山頂に立地。頂部に平坦地が広がるが、重岡神社の社殿造営の際に大規模な削平。近世地誌類には、狩山兵庫が居城したと記す。	5左	
	8	新山城跡	津高	吉備中央町尾原・粟井谷	北緯34°55'08" 東経133°45'26"	尾根部	280	40	東西270m 南北120m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	5左	110・ 111
	9	常江田城跡	津高	吉備中央町豊岡下	北緯34°54'59" 東経133°47'01"	尾根部	260	80	東西300m 南北130m	山林・その他	曲輪・堀切・竪堀群・虎口・櫓台を確認。	5左	112・ 113
	10	小森城跡	津高	吉備中央町小森・三谷	北緯34°54'59" 東経133°47'57"	頂部	270	110	東西70m 南北60m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。畑和良教示。	5左	114
	11	面城跡	津高	吉備中央町大木	北緯34°54'44" 東経133°46'50"	端部	230	50		山林	標高240mの山頂に位置する。頂部は尾根沿いに平坦面が大小4面あり、曲輪の可能性も考えられるが、堀切は未確認。『岡山県通史上編』は江田城の支城と記す。	5左	
	12	片山城跡	津高	吉備中央町豊岡下	北緯34°54'37" 東経133°46'37"	頂部	240	40	東西30m 南北160m	山林・その他	曲輪・堀切・土塁を確認。地元情報提供。	5左	115
	13	細田城跡	津高	吉備中央町細田	北緯34°53'51" 東経133°46'59"	尾根部	370	20	東西140m 南北140m	山林	曲輪・堀切・土塁・横堀を確認。地元情報提供。	5左	116
	14	妙見山城跡	津高	吉備中央町細田	北緯34°53'38" 東経133°47'06"	尾根部	420	20	東西70m 南北110m	山林・社寺・その他	曲輪・堀切・竪堀・横堀を確認。	5左	116

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
15	勝山城跡	津高	吉備中央町下土井・富永	北緯34°52'58" 東経133°45'46"	頂部	290	40	東西80m 南北40m	山林・社寺・その他	曲輪・竪堀群・土塁・横堀を確認。	5左	117・118
16	藤沢城跡	津高	吉備中央町加茂市場	北緯34°52'02" 東経133°45'06"	尾根部	270	60	東西90m 南北70m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	5左	118
17	藤沢城跡	津高上房	吉備中央町加茂市場・田土	北緯34°51'40" 東経133°44'57"	頂部	340	120	東西240m 南北500m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。畑和良教示。	5左	119～121
18	三納谷城跡	津高	吉備中央町三納谷・上田西	北緯34°52'53" 東経133°46'56"	頂部	350	130	東西80m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。畑和良教示。	5左	121
19	福山城跡	津高	吉備中央町加茂市場	北緯34°51'48" 東経133°46'04"	頂部	360	160	東西430m 南北240m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石積みを確認。	5左	122・123
20	山之田城跡	津高	吉備中央町美原	北緯34°52'14" 東経133°46'32"	尾根部	250	60		山林	標高250mの山端部に立地。尾根上は自然地形で、曲輪や堀切などの遺構は明確ではないが、尾根先端に祠を伴う平坦面がある。『岡山県通史上編』には、佐竹義勝が居城したと記す。	5左	
21	十力城跡	津高	吉備中央町高谷	北緯34°51'47" 東経133°46'58"	尾根部	330	180	東西80m 南北30m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。畑和良教示。	5左	124
22	綱谷城跡	津高	吉備中央町下加茂	北緯34°51'53" 東経133°47'55"	頂部	280	140	東西110m 南北240m	山林	曲輪・堀切を確認。	5左	124・125
23	大手城跡	津高	吉備中央町下加茂	北緯34°51'46" 東経133°48'06"	端部	170	30	東西80m 南北10m	山林	曲輪を確認。	5左	124・125
24	清常城跡	津高	吉備中央町上加茂	北緯34°51'04" 東経133°48'03"	尾根部	260	80	東西80m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・横堀を確認。	5左	126
25	虎倉城跡	津高	岡山市北区御津虎倉	北緯34°50'14" 東経133°49'58"	頂部	320	230	東西500m 南北290m	山林	曲輪・堀切・石垣・虎口を確認。	5右 10右	127～131
26	中山城跡	津高	岡山市北区建部町田地子	北緯34°51'50" 東経133°51'52"	尾根部	280	110		山林	多自林鴨神社裏山。頂部はやや平らな地形が続く。近世地誌類には城主不詳、『岡山県通史上編』には、応永年中(1394～1428)に国人の行森喜左衛門・小左衛門などが居城と伝える。	5右	
27	荒神山城跡	津高	岡山市北区建部町富沢	北緯34°51'32" 東経133°53'44"	端部	120	50		山林	能美城跡の麓。尾根端部の登山道に沿って時期不詳の石積みが見られる。『吉備前鑑』によれば、備後の三好善六が江田肥後介の宅に住んでいたが、勢を得て野見城の麓荒神山に城を構え、その後善六は京都に上り足利殿に奉公したとされる。	6左	
28	能美城跡	津高	岡山市北区建部町富沢	北緯34°51'32" 東経133°53'48"	端部	130	50		山林	尾根端部の登山道に沿って時期不詳の石積みが見られる。麓には「能美城塾田大助正信墓 先祖代々墓」と刻まれた墓標と厨子が祀られている。『吉備前鑑』によれば、能美大助正信が建部大杉山の野見城を築き、次男の野見兵庫助信秀が足利尊氏に属して野見城を継いだとされる。	6左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
29	筒井城跡	津高	岡山市北区建部町富沢	北緯34°51'24" 東経133°53'55"	平地部	70	0			平地に位置。茶臼山城跡の南隣に比定されているが、現状では城館関連遺構は判然としない。『岡山縣御津郡誌』には「永禄七年落去元亀元年新築三年にして火災に遇び焼失す」とある。『岡山県通史上編』には、江田肥後介が居城したと記す。	6左	
30	茶臼山城跡	津高	岡山市北区建部町富沢	北緯34°51'26" 東経133°53'58"	頂部	100	30	東西100m 南北80m	山林・社寺	曲輪・堅堀・虎口・井戸を確認。	6左	132
31	市場構遺跡	津高	岡山市北区建部町市場	北緯34°50'47" 東経133°54'11"	平地部	50	0		水田	旭川右岸の平野部。「構」という小字の田畑があり、館跡か。周辺の田畑の地割りが格子目になり、館の地割りの痕跡の可能性もある。	6左	
32	沼山城跡	津高	岡山市北区建部町桜	北緯34°50'31" 東経133°53'21"	頂部	220	170		山林	頂部はやや平らな地形が続く。近世地誌類には、中山治部太(大)夫が居城したと記す。	6左	
33	久保城跡	津高	岡山市北区御津紙工	北緯34°49'02" 東経133°52'03"	端部	90	30	東西70m 南北80m	山林・社寺・その他	曲輪・堀切・土塁を確認。	10右	132
34	石原城跡	津高	岡山市北区御津紙工・御津虎倉	北緯34°49'49" 東経133°50'36"	尾根部	330	240	東西240m 南北90m	山林	曲輪・堀切を確認。	10右	133
35	城ノ段跡	津高	岡山市北区御津紙工	北緯34°49'18" 東経133°50'55"	尾根部	170	80	東西70m 南北20m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	10右	134
36	天満城跡	津高	岡山市北区御津紙工	北緯34°48'53" 東経133°51'28"	尾根部	260	180	東西40m 南北20m	山林	曲輪・堀切を確認。	10右	135
37	菅館岩跡	津高	岡山市北区御津高津	北緯34°48'20" 東経133°54'30"	尾根部	90	40	東西60m 南北30m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	11左	135
38	金高城跡	津高	岡山市北区御津紙工	北緯34°48'23" 東経133°51'41"	頂部	260	190	東西40m 南北20m	山林	曲輪・堅堀を確認。	10右	136・137
39	本陣山城跡	津高 賀陽	岡山市北区御津虎倉・上高田	北緯34°47'35" 東経133°49'36"	頂部	440	170		山林	標高440mの本陣山頂部に立地。頂部はややなだらかな平坦面。毛利氏が忍山城に攻め入った際の本陣とされる。『岡山県通史上編』には、河原源左衛門、河田七郎などが居城したと記す。	10右	
40	勝尾山城跡	津高 賀陽	岡山市北区御津勝尾・岡山市北区山上	北緯34°47'24" 東経133°50'23"	頂部	330	110	東西130m 南北150m	山林	曲輪・堀切・堅堀群・土塁・虎口・横堀を確認。	10右	138
41	保木城跡	津高	岡山市北区建部町西原	北緯34°49'41" 東経133°54'25"	尾根部	230	180		山林	尾根端部に広い平坦面がみられる。近世地誌類には、山口兵庫が居城したと記す。なお、「保木城」は「鹿瀬城」の別称とされる。畑和良教示。	11左	
42	鹿瀬城跡	津高	岡山市北区御津鹿瀬	北緯34°49'48" 東経133°54'38"	頂部	200	150	東西30m 南北220m	山林	曲輪・堀切・土塁・石積みを確認。	11左	139
43	金川城跡	津高	岡山市北区御津金川・御津草生・御津下田	北緯34°48'08" 東経133°55'52"	頂部	200	170	東西500m 南北500m	山林	市史跡。曲輪・堀切・堅堀群・土塁・石垣・虎口・井戸を確認。	11左	140～144
44	徳倉城跡	津高	岡山市北区御津河内	北緯34°46'30" 東経133°53'45"	頂部	230	160	東西170m 南北300m	山林・社寺	県史跡。曲輪・堀切・堅堀・土塁・石垣・虎口・櫓台・井戸を確認。	11左	145～148

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
45	名称未定	津高	岡山市北区長野	北緯34°43'29" 東経133°50'50"	端部	190	50		その他	標高190mの山頂。かつては土塁が遺存していたが、現在は消滅。平成25年度に市教委確認調査実施。	15右	
46	高松城水攻め 鳴谷川遺跡	津高	岡山市北区長野	北緯34°43'00" 東経133°50'26"	端部	60	0		山林・その他	県史跡。鳴谷川流域に集石及び矢穴痕のある割石を確認。	15右	149・ 150
47	長野城跡	津高	岡山市北区長野	北緯34°42'58" 東経133°50'46"	尾根部	140	90	東西160m 南北210m	山林・果樹園	曲輪・堀切・土塁・石積み・虎口を確認。	15右	151・ 152
48	辛川城跡	津高	岡山市北区辛川市場・西辛川	北緯34°41'12" 東経133°51'21"	頂部	90	80	東西70m 南北120m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	15右	152～ 154
49	辛川城の根小屋跡	津高	岡山市北区西辛川	北緯34°41'02" 東経133°51'24"	端部	20	10	東西50m 南北50m	山林	平坦面を確認。	15右	152～ 154
50	小丸山城跡	津高	岡山市北区辛川市場・一宮	北緯34°40'55" 東経133°51'58"	頂部	10	4	東西90m 南北180m	山林・社寺	測量調査実施。曲輪・土塁を確認。	15右	155
51	名称未定	津高	岡山市北区西辛川	北緯34°40'54" 東経133°51'46"	平地部	4	0		宅地	砂川右岸の住宅街に位置。周辺の地割りと無関係に方形状を呈する街路あり。東西80m、南北60mの長方形の区画で城館の存在を示唆する。	15右	
52	大善城跡	津高	岡山市北区長野・福谷・大窪	北緯34°42'18" 東経133°50'55"	頂部	170	150	東西30m 南北20m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	15右	156
53	山崎城跡	津高	岡山市北区今岡	北緯34°41'07" 東経133°52'19"	頂部	30	20		果樹園	中川左岸にある標高30mの山頂に立地。頂部は比較的なだらかで、斜面地に複数の平坦面造成。「白山」の地名あり。	15右	

赤坂郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
54	茶臼山城跡	赤坂	赤磐市周匝	北緯34°55'27" 東経134°05'32"	頂部	170	110	東西230m 南北230m	その他	市史跡。発掘調査実施。曲輪・堀切・堅堀群・土塁・井戸・虎口・櫓台・堅穴遺構を確認。	3右	158～ 160
55	大仙山城跡	赤坂	赤磐市周匝・草生	北緯34°55'36" 東経134°05'20"	頂部	160	110	東西150m 南北350m	その他	曲輪・堀切・堅堀群・土塁・虎口・土橋・横堀・井戸を確認。	3右	159～ 162
56	頓の山城跡	赤坂	赤磐市黒本	北緯34°55'17" 東経134°04'44"	端部	100	30	東西60m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	3右	162
57	白石城跡	赤坂	岡山市北区建部町大田	北緯34°51'11" 東経133°54'46"	頂部	140	80	東西220m 南北90m	山林	曲輪・堀切・堅堀群・土塁・石積みを確認。	6左	163・ 164
58	土師方城跡	赤坂	岡山市北区建部町土師方	北緯34°50'38" 東経133°56'35"	頂部	200	140	東西240m 南北130m	山林	曲輪・堀切・堅堀群・土塁・石積み・虎口・土橋を確認。	6右	164・ 165
59	石上古城跡	赤坂	赤磐市石上・小鎌	北緯34°51'20" 東経133°58'27"	頂部	240	50		山林	標高230mの山頂部。近世以降の寺院や住居等の造成による地形変化が著しい。近世地誌類は城主不詳と記す。	6右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
60	江戸城跡	赤坂	赤磐市仁堀西	北緯34°52'19" 東経133°59'22"	頂部	330	150		山林	標高330mの山頂部。頂部に広い平坦地あり。『日本城郭大系13』は詳細不明と記す。	6右	
61	宮内城跡	赤坂	赤磐市仁堀西	北緯34°52'20" 東経133°59'53"	頂部	250	80	東西250m 南北600m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	6右 7左	166・ 167
62	中畑城跡	赤坂	岡山市北区御津中畑	北緯34°50'22" 東経133°59'11"	尾根部	130	30	東西90m 南北200m	山林	曲輪・堀切を確認。	6右	168
63	山鳥城跡	赤坂	赤磐市滝山	北緯34°55'04" 東経134°03'19"	頂部	310	50	東西100m 南北50m	山林	曲輪・堀切・竪堀を確認。	7左	169
64	先谷城跡	赤坂	赤磐市黒沢	北緯34°54'59" 東経134°04'46"	尾根部	100	40	東西140m 南北20m	山林	曲輪・堀切・櫓台を確認。	7右	169
65	黒沢城跡	赤坂	赤磐市黒沢	北緯34°54'40" 東経134°04'13"	尾根部	180	110	東西110m 南北280m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口・土橋を確認。	7右	170
66	長坂城跡	赤坂	赤磐市中勢実	北緯34°54'25" 東経134°00'33"	尾根部	350	140	東西270m 南北190m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。2城1対の城。	7左	171
67	徳近城跡	赤坂	赤磐市仁堀東	北緯34°52'55" 東経134°01'23"	尾根部	280	100	東西20m 南北100m	山林・その他	曲輪・堀切を確認。	7左	172
68	八幡山城跡	赤坂	赤磐市仁堀中 東	北緯34°52'40" 東経134°00'45"	端部	210	40	東西30m 南北90m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・虎口・櫓台を確認。	7左	172
69	明田城跡	赤坂	赤磐市仁堀中	北緯34°52'14" 東経134°00'27"	頂部	200	70	東西70m 南北110m	山林	曲輪・堀切・井戸を確認。	7左	173
70	惣分城跡	赤坂	赤磐市惣分	北緯34°51'06" 東経134°01'43"	尾根部	140	50	東西260m 南北20m	山林・その他	曲輪を確認。	7左	173
71	坂辺城跡	赤坂	赤磐市惣分・坂辺	北緯34°50'20" 東経134°00'46"	尾根部	80	30	東西30m 南北100m	山林	曲輪・堀切・櫓台を確認。	7左	174
72	松撫城跡	赤坂	岡山市北区御津新庄	北緯34°48'44" 東経133°58'28"	頂部	220	170	東西60m 南北20m	山林	曲輪を確認。	11右	174
73	地頭城跡	赤坂	岡山市北区御津平岡 西	北緯34°50'06" 東経133°58'23"	尾根部	120	40	東西70m 南北140m	山林	曲輪・土塁を確認。	11右	175
74	矢知城跡	赤坂	岡山市北区御津矢 知・御津平岡西	北緯34°50'03" 東経133°58'42"	頂部	150	80	東西40m 南北110m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	176
75	西谷城跡	赤坂	岡山市北区御津新庄	北緯34°49'17" 東経133°57'27"	尾根部	110	30	東西120m 南北180m	山林・その他	曲輪・堀切を確認。	11右	177
76	熊谷城跡	赤坂	岡山市北区御津矢原	北緯34°48'50" 東経133°56'55"	頂部	220	180	東西210m 南北50m	その他	発掘調査実施。曲輪・堀切・土塁・虎口・掘立柱建物を確認。	11右	178
77	寺山城跡	赤坂	岡山市北区御津矢原	北緯34°48'19" 東経133°56'38"	端部	70	30	東西70m 南北130m	山林・その他	曲輪・土塁・石積みを確認。	11右	179
78	殿谷城跡	赤坂	岡山市北区御津伊田	北緯34°47'46" 東経133°57'38"	尾根部	110	30	東西40m 南北130m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	180

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
79	宇那山城跡	赤坂	岡山市北区御津伊田	北緯34°48'15" 東経133°58'16"	尾根部	110	50	東西40m 南北60m	山林	曲輪・堀切を確認。	11右	181
80	名称未定	赤坂	赤磐市由津里	北緯34°48'08" 東経133°59'53"	頂部	170	130		山林	標高182mの丘陵頂部。頂部に広い平地あり。なお、「八左城」とは別である。畑和良教示。	11右	
81	小屋谷城跡	赤坂	赤磐市由津里	北緯34°48'04" 東経133°59'26"	頂部	160	110	東西60m 南北80m	山林	曲輪を確認。	11右	181
82	木山城跡	赤坂	赤磐市山口・岡山市北区御津伊田	北緯34°47'57" 東経133°58'15"	端部	200	100	東西20m 南北300m	山林	曲輪を確認。畑和良教示。	11右	182
83	金比羅城跡	赤坂	赤磐市山口	北緯34°47'37" 東経133°58'50"	頂部	100	50	東西90m 南北50m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	11右	183
84	高光城跡	赤坂	赤磐市山口	北緯34°47'11" 東経133°58'38"	頂部	190	130	東西40m 南北120m	山林	曲輪を確認。	11右	183
85	瀧ノ城跡	赤坂	岡山市北区御津芳谷	北緯34°46'34" 東経133°58'01"	頂部	330	300	東西260m 南北140m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁・虎口・土橋を確認。	11右	184
86	葛木城跡	赤坂	赤磐市上仁保	北緯34°46'40" 東経133°59'03"	頂部	240	160	東西170m 南北20m	山林	曲輪を確認。	11右	185
87	上仁保城跡	赤坂	赤磐市上仁保	北緯34°46'40" 東経133°59'49"	端部	140	100		山林	山頂部に広い平地が存在。頂部から北側の谷筋に、陣屋池と呼ばれる池。2～3段の石垣が組まれた平地が存在。『岡山県通史上編』は詳細不明と記す。	11右	
88	葛蒲佐古城跡	赤坂	赤磐市北佐古田	北緯34°49'28" 東経134°03'08"	尾根部	120	40	東西20m 南北40m	山林	曲輪・堀切を確認。	12左	186
89	東軽部城跡	赤坂	赤磐市東軽部	北緯34°48'37" 東経134°01'21"	端部	60	20	東西90m 南北130m	山林	曲輪・堀切・堅堀・虎口を確認。	12左	186
90	南佐古田城跡	赤坂	赤磐市南佐古田・北佐古田	北緯34°48'53" 東経134°02'46"	尾根部	160	110		山林・社寺	標高160mの丘陵頂部は広い平地だが、神社による改変が著しい。『日本城郭大系13』は詳細不明と記す。	12左	
91	宝地城跡	赤坂	赤磐市東軽部	北緯34°48'22" 東経134°01'11"	端部	60	30		山林・社寺・その他	標高37mの丘陵頂部。神社や墓地造成による地形改変あり。近世地誌類には、額田十内が居城したと記す。	12左	
92	宮口城跡	赤坂	赤磐市東軽部	北緯34°48'04" 東経134°01'43"	尾根部	140	100	東西70m 南北30m	山林	曲輪・虎口を確認。	12左	187
93	大久保城跡	赤坂	赤磐市町苅田	北緯34°47'50" 東経134°00'49"	頂部	90	60		山林・社寺	標高150mを測る山塊の南端頂部に加工された平坦面を確認。また、山塊の東側にある相口池へと張り出す標高90mの尾根先端頂部に、加工面と土橋状遺構が所在。近世地誌類には、城主不詳または糠田与次右衛門が居城したと記す。	12左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
94	高尾山城跡	赤坂	赤磐市大苅田・町苅田・東軽部	北緯34°47'48" 東経134°01'11"	頂部	110	80		山林・その他	標高約120m。頂部に石礎や祠を祀る広い平坦地。「河口文書」宇喜多直家判物(天正2(1574)年)に記された「鳥取高尾山」にも比定される。近世地誌類には、城主不詳または苅田右馬允、苅田右京、苅田四郎左衛門、額田与次右左門、額田与次右衛門などが居城したと記す。	12左	
95	神田城跡	赤坂	赤磐市神田	北緯34°47'07" 東経134°01'11"	端部	40	10		果樹園	標高40mの丘陵頂部。果樹園造成による地形変化が著しい。近世地誌類には、花(本)房与左衛門が居城したと記す。	12左	
96	高山城跡	赤坂	赤磐市下仁保	北緯34°46'28" 東経134°00'07"	頂部	50	20		山林・畑・果樹園	山塊から南東に突出した標高50mの丘陵頂部。頂部に平坦面あるも、畑や果樹園などにより大きく改変。	12左	
97	正崎城跡	赤坂	赤磐市正崎	北緯34°45'58" 東経134°00'56"	尾根部	50	30	東西100m 南北(40m)	山林	曲輪・堀切を確認。	12左	187
98	善志寺城跡	赤坂	赤磐市鴨前	北緯34°45'24" 東経134°00'02"	尾根部	150	110	東西70m 南北150m	山林	曲輪を確認。	12左	188
99	沼田城跡	赤坂	赤磐市沼田	北緯34°45'18" 東経134°01'57"	端部	30	10		山林・畑・果樹園・その他	標高30mの丘陵頂部。果樹園や畑の造成による地形変化が著しい。近世地誌類には、沼田左衛門太夫、沼田右京進などが居城したと記す。	12左	
100	名称未定	赤坂	岡山市北区牟佐	北緯34°43'46" 東経133°58'26"	尾根部	190	170	東西90m 南北80m	山林	曲輪・土塁・石列を確認。	16右	189
101	兜山城跡	赤坂	赤磐市馬屋	北緯34°44'02" 東経133°59'20"	頂部	200	160	東西40m 南北100m	山林	曲輪・堀切・土橋を確認。	16右	190
102	新田陣跡	赤坂	赤磐市穂崎	北緯34°43'25" 東経133°59'43"	頂部	290	250		山林	山頂部に立地。標高約290m。陣跡とされる平坦地を踏査した結果、土塁らしき痕跡を確認。『備前記』に記載があり、『備陽記』は新田義貞、『東備郡村史』は新田義助がそれぞれ居城したと記す。	16右	

磐梨郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
103	上田城跡	磐梨	赤磐市稲蒔	北緯34°53'30" 東経134°05'02"	尾根部	160	110	東西30m 南北90m	山林	曲輪を確認。	7右	192
104	稲蒔城跡	磐梨	赤磐市稲蒔	北緯34°53'31" 東経134°05'23"	頂部	200	160	東西20m 南北160m	山林	堀切を確認。	7右	192
105	石ヶ谷城跡	磐梨	和気町津瀬	北緯34°51'56" 東経134°06'06"	尾根部	270	220	東西40m 南北100m	山林	曲輪・堀切・石積みを確認。	7右	193
106	坊主山城跡	磐梨	和気町津瀬	北緯34°52'03" 東経134°06'18"	尾根部	260	230	東西50m 南北60m	山林	曲輪・井戸を確認。	7右	193
107	小坂城跡	磐梨	和気町小坂	北緯34°50'12" 東経134°03'12"	尾根部	120	60	東西80m 南北80m	山林	曲輪・堀切・土壇を確認。畑和良教示。	7左	194

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
108	田尻城跡	磐梨	和気町田賀	北緯34°50'30" 東経134°03'56"	尾根部	100	50	東西60m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁・土壇を確認。畑和良教示。	7右	194
109	城ノ段跡	磐梨	和気町父井原	北緯34°50'34" 東経134°07'01"	頂部	290	260	東西20m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。畑和良教示。	7右	195
110	岡城跡	磐梨	赤磐市岡	北緯34°48'55" 東経134°04'05"	頂部	120	90		その他	独立丘陵東側の標高120mの山頂部。基部径40m、頂部径20m、高さ3mの高まりの周囲を幅5～8mの帯曲輪状の平坦面が巡り、輪郭式山城の体をなすが、後世の大規模な改変により、本来の形状をとどめるものかどうか不明。平坦面の東端には備前焼壺散布。近世地誌類には、城主不詳または小野田左馬進が居城したと記す。	12右	
111	赤尾山城跡	磐梨	赤磐市殿谷	北緯34°48'56" 東経134°04'30"	頂部	100	70		山林	標高100mの山頂部。30m×30m以上の広い平坦地が存在。背後の山塊から平坦地へ至る尾根筋は、馬の背状でかつ急峻。殿谷城跡と一体的か。近世地誌類には、城主不詳または小野田左馬進が居城したと記す。	12右	
112	殿谷城跡	磐梨	赤磐市殿谷	北緯34°48'48" 東経134°04'29"	尾根部	50	20		その他	赤尾山城跡から南に延びる尾根筋先端部。頂部及び斜面全部全域を大規模に改変。赤尾山城跡と一体的か。近世地誌類には、城主不詳または小野田左馬進が居城したと記す。	12右	
113	可真下城跡	磐梨	赤磐市可真下・佐古	北緯34°48'09" 東経134°04'23"	頂部	120	110		山林	標高130mの独立丘陵の最高所から東に延びる尾根筋に、広い平坦地が存在。釜底王ノ谷の頂上に室町時代の城跡があり、大野三郎祐定が居城、南麓の王ノ谷に馬場の跡ありと伝わる。	12右	
114	西山城跡	磐梨	和気町田原上・田原下	北緯34°49'00" 東経134°07'35"	頂部	190	170	東西50m 南北50m	山林	曲輪を確認。	13左	195
115	可真上城跡	磐梨	赤磐市可真上	北緯34°47'16" 東経134°03'30"	尾根部	100	70		山林	尾根筋には幅約10mの平坦地が所々認められ、山頂部も広い平坦地。近世地誌類には、上村出雲が居城したと記す。	12左	
116	大盛山城跡	磐梨	赤磐市小瀬木・岡山市東区瀬戸町万富	北緯34°46'59" 東経134°04'57"	頂部	340	320		山林	標高340mの山頂。頂部に広い平坦地あり。	12右	
117	保木城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町万富・赤磐市徳富	北緯34°46'24" 東経134°05'23"	頂部	120	90	東西30m 南北400m	その他	発掘調査実施。曲輪・堀切・堅堀・土塁・虎口・掘立柱建物・礎石建物などを確認。	12右	196・197
118	妙見山大森山遺跡 (妙見山城跡)	磐梨	赤磐市弥上・岡山市東区瀬戸町鍛冶屋・瀬戸町塩納	北緯34°46'04" 東経134°03'30"	頂部	240	210		山林	標高240mの大森山山頂に、妙見宮造営に伴うと想定される一辺30m程の平坦面あり。山頂から北側に延びる尾根上は、広い平坦面がいくつか存在している。近くに、平木・土井・木戸など城跡に関連する地名が残ると伝わる。	12左	
119	保木城の岩跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町万富	北緯34°46'06" 東経134°04'55"	端部	60	40		山林	保木城跡の南西側丘陵頂部に位置。頂部はなだらかな地形で山道が通る。	12右	
120	保木風呂屋遺跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町万富	北緯34°46'05" 東経134°05'11"	平地部	20	0		畑・宅地	一辺19m前後の1段高い所あり。北側と西側は石垣が巡り、北側石垣付近に径約1mの井戸。重源が施揚をした跡と伝えられる。	12右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
121	塩納大日遺跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町塩納	北緯34°45'33" 東経134°03'50"	平地部	20	0		水田	東西約2町、南北約2.5町の矩形の地を小溝で囲み、九伝池を含めた地域を屋敷地と推定されるが、地形変化が著しい。	12右	
122	宗堂城山城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町宗堂	北緯34°45'17" 東経134°03'44"	端部	20	5		山林・水田・畑	吉井川西方の丘陵頂部に立地。標高約20m。3面の平坦面が認められ、北側の円弧状の水田が堀跡と推定できるが、地形変化が顕著。	12右	
123	名称未定	磐梨	岡山市東区瀬戸町宗堂	北緯34°45'21" 東経134°04'02"	平地部	10	5			田原用水沿い、南側台地付近に瓦質土器、陶磁器片が散布。天神城跡と伝わる。	12右	
124	南方城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町南方	北緯34°44'49" 東経134°04'27"	尾根部	130	90			麓に妙見社、頂部に天神社がある。古道による部分的な加工痕が見られる。近世地誌類には、日置孫一郎が居城と記す。	17右	
125	物理城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町坂根・瀬戸町肩脊	北緯34°44'13" 東経134°03'54"	頂部	170	150	東西50m 南北80m	山林	曲輪・土壇を確認。	17右	197
126	土井の内寺跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町下・瀬戸町沖	北緯34°43'32" 東経134°02'32"	平地部	7	0		畑・宅地	砂川左岸の平地に立地。残存長20m、幅4m、高さ1.5mの土塁、その南側に水路あり。東西80m×南北60mの方形区画の城館跡と推定。下・沖の境。一方で、東西100m×南北30m位の寺域とも推定。名称は従前通りにしたが、見直す可能性あり。畑和良教示。	17左	
127	肩脊城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町肩脊	北緯34°43'49" 東経134°03'51"	頂部	70	40	東西40m 南北180m	山林	曲輪・竪堀・虎口を確認。	17右	198・ 199
128	高尾城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町肩脊	北緯34°44'02" 東経134°04'16"	頂部	170	130	東西20m 南北60m		曲輪・虎口を確認。	17右	199
129	堀ノ内遺跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町肩脊	北緯34°43'33" 東経134°03'44"	平地部	10	0		水田	肩脊の平野部中央で東西60m×南北70mの方形区画の平坦面、西辺と南辺で堀を確認。西辺の堀北端は土橋か。1980年頃の確認調査では東辺で大溝がみつかり、その北端が西へ曲がることも確認されている。1段高い田があり、周辺に堀跡が残る。合子片2個体採集。土器多量に散布。木簡も出土。「堀ノ内」の地名残る。	17右	
130	鳥の奥遺跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町肩脊	北緯34°43'51" 東経134°04'08"	端部	30	20		山林	宮地の北東にある谷部に立地。果樹畑に利用された平坦面を囲むように溜め池や両側に溝が見られる。	17右	
131	内山城跡	磐梨	岡山市東区瀬戸町大内	北緯34°43'45" 東経134°05'46"	尾根部	40	30	東西90m 南北90m		曲輪・堀切・土塁を確認。	17右	200

和気郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
132	飯盛山城跡	和気	備前市吉永町多麻	北緯34°55'16" 東経134°15'38"	頂部	480	90	東西20m 南北70m	山林	曲輪を確認。	4左	202
133	奥塩田茶臼山城跡	和気	和気町奥塩田	北緯34°54'17" 東経134°06'45"	尾根部	140	70	東西150m 南北40m	山林・その他	曲輪・堀切・土橋を確認。	7右	202

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
134	北山方城跡	和気	和気町北山方	北緯34°53'02" 東経134°07'08"	尾根部	390	350	東西130m 南北70m	山林・社寺	曲輪・堀切・土塁を確認。	7右	203
135	観音山城跡	和気	和気町矢田	北緯34°50'50" 東経134°06'09"	尾根部	150	110	東西70m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁・土橋を確認。畑和良教示。	7右	203
136	天神山城跡根小屋	和気	和気町田土	北緯34°51'08" 東経134°07'41"	端部	140	70		山林	県史跡。標高175mの天神山山裾部。天神山城の北側の登城口にあたる。根小屋の地名を残し、曲輪状に平坦に加工した部分もある。	8左	
137	天神山城跡	和気	和気町田土・岩戸	北緯34°50'57" 東経134°07'33"	頂部	330	290	東西450m 南北210m	山林・その他	県史跡。曲輪・堀切・石垣・虎口・櫓台・井戸を確認。	8左	204～ 207
138	天神山城太鼓丸跡	和気	和気町田土・岩戸	北緯34°50'42" 東経134°07'50"	頂部	410	370	東西200m 南北50m	山林	曲輪・堀切・石積みを確認。	8左	208
139	天神山城跡 附天瀬武家屋敷跡	和気	和気町岩戸	北緯34°50'47" 東経134°07'23"	端部	70	40		山林	標高110mの天神山山裾部。天神山城の南側の登城口にあたる。曲輪状に平坦に加工した部分もある。	8左	
140	天神山城跡 附岡本屋敷跡	和気	和気町岩戸	北緯34°50'35" 東経134°07'27"	端部	40	2		畑	県史跡。標高48mの天神山南麓。天神山城主浦上宗景の家臣岡本某の屋敷跡伝承地。付近には江戸前期以降の岡本家墓所が所在。	8左	
141	天神山城跡附木戸跡	和気	和気町岩戸	北緯34°50'34" 東経134°07'28"	端部	50	4		畑	県史跡。天神山南麓に木戸館(張木戸)の地名が残る。標高50mの天神山南麓。天神山城主浦上宗景の家臣岡本某の屋敷に関連した木戸跡と推定される。	8左	
142	名称未定	和気	和気町木倉・田土	北緯34°51'04" 東経134°08'34"	頂部	360	290	東西30m 南北20m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。畑和良教示。	8左	209
143	大坊山城跡	和気	和気町木倉	北緯34°50'21" 東経134°09'10"	頂部	220	140	東西50m 南北40m	山林	曲輪・土塁・虎口・横堀を確認。	8左	209・ 210
144	北浦山城跡	和気	和気町日笠上	北緯34°51'14" 東経134°09'29"	頂部	270	140	東西250m 南北130m	山林	曲輪・堀切を確認。	8左	210・ 211
145	青山城跡	和気	和気町日笠上・木倉	北緯34°50'43" 東経134°09'36"	頂部	210	130	東西220m 南北210m	山林・その他	町史跡。発掘調査実施。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口を確認。	8左	212・ 213
146	天王久保山城跡	和気	和気町日笠上	北緯34°50'50" 東経134°10'18"	頂部	190	90		山林・その他	標高240mの山頂部。頂部に広い平坦地あり。近世地誌類には、宇喜多直家またはその家臣が居城したと記し、宇喜多氏の出城と伝わる。『岡山県通史上編』には、日笠甚左衛門が居城したと記す。	8左	
147	医王山城跡	和気	備前市吉永町神根本	北緯34°50'51" 東経134°14'31"	尾根部	160	80	東西40m 南北120m	山林	曲輪・竪堀・土塁・虎口を確認。	8右	213
148	大股古城跡	和気	備前市吉永町都留岐	北緯34°53'29" 東経134°14'58"	頂部	240	100	東西20m 南北130m	山林	曲輪・堀切を確認。	9左	214
149	惣谷山城跡	和気	備前市吉永町高田	北緯34°51'45" 東経134°15'04"	尾根部	250	150	東西150m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・石積み・虎口を確認。	9左	214・ 215

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
150	熊山城跡	和気	赤磐市奥吉原	北緯34°45'23" 東経134°07'16"	頂部	500	480		山林・社寺	標高490mの熊山山頂部。南北に広く眺望がきく立地。人為的な加工段や基壇等が山頂部に広く認められるが、旧霊山寺関係の遺構と考えられる。近世地誌類には、児島高德拳兵地と伝承されている。	12右	
151	龍徳山城跡	和気	和気町岩戸・益原	北緯34°50'01" 東経134°08'02"	頂部	190	150	東西70m 南北20m	山林	曲輪・堀切を確認。畑和良教示。	13左	216
152	上見山城跡	和気	和気町日笠下	北緯34°49'57" 東経134°09'05"	頂部	150	60	東西90m 南北40m	山林	曲輪を確認。	13左	216
153	鹿帰前丸山城跡	和気	和気町日笠下	北緯34°50'06" 東経134°09'23"	頂部	80	10	東西70m 南北80m	山林	曲輪・堀切を確認。	13左	217
154	宮山城跡	和気	和気町吉田	北緯34°49'00" 東経134°11'30"	頂部	60	30	東西40m 南北50m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	13右	217
155	曾根城跡	和気	和気町和気・大田原	北緯34°48'05" 東経134°08'58"	頂部	170	130	東西50m 南北220m	山林・その他	町史跡。曲輪・堀切・石積み・虎口を確認。	13左	218・ 219
156	衣笠城跡	和気	和気町衣笠・大中山	北緯34°47'17" 東経134°10'17"	頂部	250	200		山林	標高240mの山頂部。頂部に広い平坦地あり。『岡山県通史上編』には、中山五郎左衛門が居城と記す。	13左	
157	北山城跡	和気	和気町大中山・衣笠	北緯34°47'25" 東経134°10'37"	頂部	230	190	東西60m 南北50m	山林	曲輪を確認。	13左	219
158	伊部城跡	和気	備前市伊部	北緯34°45'14" 東経134°08'56"	尾根部	230	180	東西60m 南北170m	山林・その他	曲輪・土塁・虎口・井戸を確認。	13左	220
159	東山城跡	和気	備前市吉永町岩崎・吉永町福満	北緯34°49'15" 東経134°12'59"	頂部	260	210	東西120m 南北200m	山林	曲輪・石積みを確認。	13右	221・ 222
160	明石掃部介守重宅跡	和気	備前市吉永町今崎	北緯34°49'49" 東経134°13'50"	平地部	60	0		畑・宅地	土塁の一部が残存。中世の方形居館跡か。南東端に墓、石碑あり。明石掃部介守重の屋敷跡と伝わる。近世地誌類には、明石宗運が居城と記す。	13右	
161	ろんき山城跡	和気	備前市吉永町今崎	北緯34°50'00" 東経134°14'31"	尾根部	240	150		山林	標高240mの尾根頂部。頂部と背後の山塊をつなぐ尾根筋は、急峻かつ馬の背状だが、頂部及び東側尾根筋には、幅が広い平坦地が所在。近世地誌類には城主不詳と記す。	13右	
162	三石城跡	和気	備前市三石	北緯34°48'27" 東経134°16'14"	頂部	290	220	東西100m 南北300m	山林	県史跡。曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石列・石垣・虎口・櫓台・土橋・横堀・井戸・土壇を確認。	14左	222～ 226
163	関川城跡	和気	備前市三石	北緯34°47'58" 東経134°16'07"	尾根部	140	50	東西30m 南北180m	山林	曲輪・堀切・土塁・土壇を確認。	14左	227
164	香登城跡	和気	備前市香登西・香登本	北緯34°44'22" 東経134°07'13"	頂部	290	250	東西100m 南北260m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁・石積み・虎口・土壇を確認。	17右	227～ 229
165	狐塚城跡	和気	備前市大内	北緯34°44'31" 東経134°08'10"	尾根部	240	190		山林	宮山山頂から北西に張り出した標高230mの尾根上。広い平坦地あり。近世地誌類には城主不詳と記す。	18左	
166	茶磨岩城跡	和気	備前市伊部	北緯34°44'42" 東経134°08'54"	頂部	300	260	東西30m 南北60m	山林	曲輪・土塁・石積みを確認。	18左	230

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
167	鬼ヶ城跡	和気	備前市伊部	北緯34°44'57" 東経134°09'28"	尾根部	210	150		山林	標高180mの山頂。頂部に広い平坦地あり。近世地誌類には城主不詳と記す。	18左	
168	たい山城跡	和気	備前市伊部・浦伊部・西片上	北緯34°44'19" 東経134°10'25"	頂部	160	140	東西380m 南北370m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	18左	231・232
169	伝太閤門跡	和気	備前市浦伊部	北緯34°44'11" 東経134°10'36"	平地部	4	0		宅地	市史跡。高さ約1.5mの石垣に囲まれた屋敷地が、法悦城と伝わる。伊部の豪商来住法悦が備中攻めの羽柴秀吉を迎えるために屋敷に新築した門とされる。近世地誌類には法悦が居城したと記す。	18左	
170	茶臼山城跡	和気	備前市西片上	北緯34°44'29" 東経134°10'46"	尾根部	70	70		その他	田井山から派生する標高70mの尾根上。全面を公園化。一部に曲輪の痕跡あり。富田松山城の出城と伝わる。『和気郡史資料編下巻』には、生田氏や佐々部勘齋が居城したと記す。	18左	
171	富田松山城跡	和気	備前市東片上	北緯34°44'24" 東経134°11'30"	頂部	200	200	東西320m 南北130m	山林	曲輪・堀切・土塁・石積み・虎口・櫓台を確認。	18右	233・234

御野郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
172	船山城跡	御野	岡山市北区原	北緯34°42'43" 東経133°56'54"	尾根部	50	40	東西60m 南北80m	山林・その他	曲輪・土塁・堀切を確認。	16右	236
173	妙見山城跡	御野	岡山市北区三野本町	北緯34°41'40" 東経133°56'20"	尾根部	50	40	東西70m 南北130m	山林・その他	曲輪・堀切を確認。	16右	237
174	高山城跡	御野津高	岡山市北区津島笹ヶ瀬・津高	北緯34°41'23" 東経133°54'09"	頂部	130	110	東西80m 南北60m	山林・その他	曲輪を確認。	16左	238
175	半田山城跡	御野津高	岡山市北区津島・津高	北緯34°41'33" 東経133°54'33"	頂部	130	120	東西170m 南北100m	山林	曲輪・竪堀を確認。	16左	239
176	津島福居遺跡	御野	岡山市北区津島本町・津島福居1丁目・津島福居2丁目	北緯34°41'24" 東経133°54'42"	平地部	5	0		畑・宅地	発掘調査実施。半田山丘陵の南裾部。「城」の字名あり。古墳時代の溝・土壇、平安時代末から室町時代にかけての柱穴など検出。	16左	
177	辻川城跡	御野	岡山市北区矢坂西町	北緯34°40'19" 東経133°52'35"	平地部	1	0		水田・畑	笹ヶ瀬川左岸の平地。径約80mの弧状に巡る地割りがあり、備前焼や磁器が散布。周辺に「木戸口」「築出」の地名あり。近世地誌類には、辻将監が居城したと記す。畑和良教示。	16左	
178	富山城跡	御野	岡山市北区矢坂東町	北緯34°40'16" 東経133°53'13"	頂部	120	110	東西50m 南北300m	山林・その他	発掘調査実施。曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口・櫓台・礎石建物・池を確認。	16左	240～242
179	野殿城跡	御野	岡山市北区野殿東町	北緯34°39'41" 東経133°53'01"	平地部	2	0		宅地	笹ヶ瀬川左岸、大安寺の南方の平野部に位置。「城の内」という地名あり。近世地誌類には、宇喜多忠家(浮田安心)、宇喜多左京亮(宇喜多詮家)などが居城と記す。	19左	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
180	岡山城跡	御野	岡山市北区丸の内1・2丁目他	北緯34°39'53" 東経133°56'07"	頂部	20	10	東西1.0km 南北1.8km	山林	国史跡。発掘調査実施。曲輪・土塁・堀・石垣を 確認。	16左 19右 19左	242～ 248

上道郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
181	龍ノ口山城跡	上道	岡山市中区祇園・四御神	北緯34°42'38" 東経133°58'16"	頂部	220	210	東西250m 南北240m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・虎口・井戸を確認。	16右	250・ 251
182	中島城跡	上道	岡山市中區中島	北緯34°41'07" 東経133°56'36"	平地部	7	0	東西50m 南北50m	宅地・その他	発掘調査実施。曲輪・堀・掘立柱建物・柱穴列を 確認。	16右	252・ 253
183	名称未定	上道	岡山市東區草ヶ部	北緯34°43'25" 東経134°01'50"	頂部	100	90		山林	標高約100mの山頂に立地。主郭の南・北側にそ れぞれ平坦面、その縁辺に土塁状の高まり。	17左	
184	藤井城跡	上道	岡山市中区藤井	北緯34°41'42" 東経134°00'13"	頂部	50	40		山林・畑・果樹園	標高約50mの山頂に立地。藤井古墳を中心に平坦 地が広がり、その南から西側下方に数面の平坦地 を確認。後世の開墾による地形改変が著しい。近 世地誌類には、中山備中守が居城と記す。	17左	
185	亀山城跡	上道	岡山市東區沼	北緯34°42'24" 東経134°02'12"	頂部	30	20	東西420m 南北270m	山林・水田・畑・宅地・社寺・その他	市史跡。発掘調査実施。曲輪・土塁・石列・虎口・ 井戸・櫓台を確認。	17左	254～ 256
186	内山城跡	上道	岡山市東區古都南方	北緯34°41'23" 東経134°01'24"	頂部	90	80	東西30m 南北120m	山林・その他	曲輪・土塁を確認。	17左	257
187	名称未定	上道	岡山市東區吉井	北緯34°43'14" 東経134°05'41"	尾根部	50	40	東西60m 南北50m	山林	曲輪・堀切を確認。	17右	257
188	城ヶ辻城跡	上道	岡山市東區吉井・瀬戸町肩脊	北緯34°43'16" 東経134°05'08"	頂部	130	120	東西50m 南北80m	山林	曲輪・堀切を確認。	17右	258
189	吉井城跡	上道 磐梨	岡山市東區吉井	北緯34°43'14" 東経134°05'17"	頂部	120	110	東西100m 南北250m	山林	曲輪・堀切・土塁・井戸を確認。	17右	259・ 260
190	福岡城跡	上道	岡山市東區寺山	北緯34°42'26" 東経134°04'52"	頂部	20	10		山林・その他	標高約20mの丘陵頂部に立地。頂部の2か所と丘 陵南西側の裾部に平坦面。福岡奥之城跡とともに 福岡合戦に関わる城跡である。	17右	
	大日幡山城跡	上道	岡山市東區橘原・内ヶ原	北緯34°42'02" 東経134°04'09"	頂部	120	110	東西20m 南北40m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	17右	260～ 262
191	大日幡山城跡 東出丸跡	上道	岡山市東區内ヶ原・寺山	北緯34°42'00" 東経134°04'19"	頂部	150	140	東西50m 南北30m	山林	発掘調査実施。曲輪・堀切・土塁・土橋を確認。	17右	260～ 262
	大日幡山城跡 北出丸跡	上道	岡山市東區橘原・寺山・浅川	北緯34°42'07" 東経134°04'12"	頂部	90	80	東西90m 南北50m	その他	曲輪・土壇を確認	17右	260～ 262
192	新庄山城跡	上道	岡山市東區竹原	北緯34°41'40" 東経134°03'15"	頂部	120	110	東西50m 南北220m	山林・社寺	曲輪・堀切を確認。	17左	263

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
193	明禅寺城跡	上道	岡山市中区沢田・原尾島4丁目	北緯34°39'53" 東経133°57'37"	尾根部	110	90	東西50m 南北300m	山林・その他	堀切・堀切・土塁を確認。	19右	264
194	正木城跡	上道	岡山市東区中川町	北緯34°40'03" 東経133°59'28"	尾根部	50	40		山林・宅地	標高約50mの山頂に立地。頂部の平坦面の削平度は高いが後世の地形改変の可能性あり。この平坦面の南・北側には狭い平坦面が認められ、北側はわずかに北端が隆起する。北半は宅地造成などにより消失。近世地誌類には、正木大膳、岡信濃、岡豊前、岡但馬、寺尾作左衛門などが居城と記す。	19右	
195	金山城跡	上道	岡山市東区西大寺上1丁目	北緯34°39'35" 東経134°01'51"	頂部	20	20		山林・社寺・その他	標高約20mの丘陵頂部に立地。広い範囲で削平を受けて全壊状態。『岡山県通史上編』には、宇喜多忠家が居城したと記す。	20左	

邑久郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
196	長船城跡	邑久	瀬戸内市長船町長船	北緯34°43'15" 東経134°06'29"	平地部	10	0	東西100m 南北100m	水田・畑・果樹園・宅地・その他	土塁・堀を確認。	17右	266
197	福岡奥之城跡	邑久	瀬戸内市長船町福岡	北緯34°42'33" 東経134°05'23"	頂部	8	8		社寺	河川敷に高まりがあり、その狭い頂部は稲荷社地。頂部をとり囲む加工段などを認めるが、その周囲を含めて後世の土地造成、あるいは天正19(1591)年の大洪水などで大きな地形改変あり。近世地誌類には、赤松淡路守満弘、小嶋大和守、頓宮四郎左衛門、赤松(浦上)紀(喜)三郎則國、浦上伯耆守基景、浦上豊前守などが居城と記す。	17右	
198	丸山城跡	邑久	瀬戸内市長船町服部	北緯34°42'41" 東経134°06'25"	頂部	20	20	東西20m 南北60m	社寺	曲輪を確認。	17右	267
199	智満城跡	邑久	瀬戸内市邑久町福中	北緯34°40'15" 東経134°04'18"	端部	10	10	東西100m 南北100m	山林	曲輪を確認。	17右	267
200	堀城跡	邑久	瀬戸内市長船町磯上	北緯34°42'49" 東経134°08'08"	平地部	10	0	東西100m 南北100m	山林・水田・畑・その他	土塁・堀を確認。	18左	268
201	油杉城跡	邑久	瀬戸内市長船町磯上	北緯34°42'38" 東経134°08'34"	尾根部	40	20	東西60m 南北60m	山林	曲輪・石列を確認。	18左	269
202	高松山城跡	邑久	瀬戸内市長船町飯井	北緯34°42'00" 東経134°09'26"	頂部	180	140		山林・その他	標高180mの山頂。頂部に広い平坦地もあるも、近世以降の地形改変あり。近世地誌類には、高取(鷹取)備中守が居城と記す。	18左	
203	高山城跡	邑久	瀬戸内市長船町西須恵	北緯34°40'18" 東経134°07'59"	頂部	180	170	東西50m 南北60m	山林	曲輪・土塁を確認。	18左	269
204	虫明城跡	邑久	瀬戸内市邑久町虫明	北緯34°41'17" 東経134°12'53"	頂部	120	120		山林・社寺	標高127mの城山頂部の平坦面に金剛威王大権現あり。山頂から西側へ派生する尾根先端部は馬の背状。近世地誌類には、虫明威人、虫明四郎左衛門などが居城と記す。	18右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
205	光明寺城跡	邑久	瀬戸内市邑久町大富	北緯34°39'43" 東経134°04'05"	端部	20	20	東西20m 南北80m	山林・社寺	曲輪を確認。	20右	270
206	今木城跡	邑久	瀬戸内市邑久町向山	北緯34°39'31" 東経134°03'53"	頂部	30	30	東西110m 南北30m	山林・その他	曲輪を確認。	20右	270
207	尾張城跡	邑久	瀬戸内市邑久町尾張	北緯34°39'47" 東経134°05'49"	平地部	2	0	東西190m 南北80m	水田・畑・宅地・社寺	曲輪・堀を確認。	20右	271
208	浜城跡	邑久	岡山市東区西大寺浜	北緯34°38'59" 東経134°02'29"	平地部	2	0		宅地	標高約2mの平野部に立地。宅地造成により全壊状態。東方に宇喜多宗因を祀ったとされる小社あり。近世地誌類には、宇喜多宗院、宇喜多宗隆、浮田宗因などが居城と記す。	20左	
209	射越城跡	邑久	岡山市東区西大寺射越	北緯34°39'18" 東経134°03'25"	頂部	6	4		水田・畑・果樹園・その他	標高約6mの丘陵頂部に立地。幅狭の頂部に南側3面、北側2面の墓地造成が行われており、地形変化が著しい。近世地誌類には、城主不詳または射越五郎左衛門範貞が居城と記す。	20左	
210	向山城跡	邑久	瀬戸内市邑久町北島	北緯34°39'14" 東経134°03'58"	頂部	40	30		山林・その他	標高40mの丘陵頂部の平坦面南辺に高さ約1mの土塁があるも、在時のものか不明。頂部平坦面から南側は、墓地造成による変化が顕著。	20右	
211	乙子城跡	邑久	岡山市東区乙子	北緯34°37'49" 東経134°02'22"	頂部	50	40	東西230m 南北130m	山林・畑・社寺・その他	曲輪・石列を確認。	20左	272
212	長沼城跡	邑久	岡山市東区長沼	北緯34°38'33" 東経134°04'16"	端部	40	30	東西110m 南北30m	山林・その他	曲輪を確認。	20右	273
213	城島城跡	邑久	岡山市東区水門町	北緯34°37'00" 東経134°03'58"	尾根部	10	10	東西70m 南北40m	山林・その他	曲輪を確認。	20右	273
214	砥石城跡	邑久	瀬戸内市邑久町豊原・邑久町東谷	北緯34°38'46" 東経134°05'04"	尾根部	100	90	東西370m 南北390m	山林・社寺	市史跡。曲輪・堀切・土塁・石垣を確認。2城1対の城。	20右	274～ 276
215	高取山城跡	邑久	瀬戸内市邑久町東谷・岡山市東区長沼	北緯34°38'23" 東経134°04'28"	頂部	160	160	東西100m 南北150m	山林	曲輪・堀切・井戸・土壇を確認。	20右	277・ 278
216	上山田城跡	邑久	瀬戸内市邑久町上山田	北緯34°38'15" 東経134°06'36"	尾根部	70	60	東西40m 南北90m	山林	曲輪・堀切を確認。	20右	278
217	茶屋城跡	邑久	岡山市東区下阿知	北緯34°37'39" 東経134°05'34"	端部	60	40		山林・その他	標高約60mの山頂端部に立地。南東方向に延びる尾根上に平坦面数か所。墓地造成による地形変化が進む。中央の平坦地の南・北側の斜面は急峻。	20右	
218	作州山城跡	邑久	岡山市東区上阿知	北緯34°37'40" 東経134°06'23"	頂部	110	80		山林・その他	標高約110mの山頂に立地。西側は採石により消滅。頂部付近で自然地形の平坦地を確認。近世地誌類には、城主不詳と記す。	20右	
219	名称未定	邑久	岡山市東区西大寺一宮	北緯34°36'51" 東経134°06'07"	端部	20	10		畑	標高約20mの山頂に立地。段状の平坦面、南端で土留め用の低石垣。	20右	
220	西大寺一宮育苗圃公園遺跡	邑久	岡山市東区西大寺一宮	北緯34°36'47" 東経134°06'09"	平地部	10	0		その他	発掘調査実施。平野部に立地し、標高約10m。鎌倉～室町時代の水田・館跡・埋葬遺構を確認。館跡は鎌倉時代前半期の遺構で、藤井氏一族の館と推測される。	20右	

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
221	大附城跡	邑久	岡山市東区西片岡	北緯34°36'14" 東経134°05'05"	頂部	10	5		山林・社寺	標高約110mの丘陵頂部に立地。土地造成で全壊状態。北西側の最高所にある小社付近が城の中心か。近世地誌類には、片岡八郎経(常)春が居城したと記す。	20右	
222	朝日山城跡	邑久	岡山市東区東片岡	北緯34°36'20" 東経134°05'35"	頂部	50	30		その他	標高約50mの山頂に立地。緩斜面に平坦地数か所。全体に畑による開墾が著しい。近世地誌類には、城主不詳と記す。	20右	
223	佐井田城跡	邑久	瀬戸内市邑久町本庄・邑久郡尻海	北緯34°39'45" 東経134°08'07"	頂部	90	90		山林	標高70mの山頂部と南側へ派生する尾根先端部に、やや幅広い平坦地あり。近世地誌類には、城主不詳または佐井七郎、河本宗本などが居城したと記す。	21左	

児島郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
224	小串城跡	児島	岡山市南区小串	北緯34°35'47" 東経134°01'57"	頂部	30	30		山林・畑・社寺・その他	標高約30mの丘陵頂部に立地。部分的に曲輪状の平坦面や切岸状の斜面が認められるが、後世の地形変化が広い範囲に及んでいる。山城は元亀3(1572)年高島和泉守築城。台場は文久3(1863)年、岡山藩の海防強化施策に基づき建設。近世地誌類には、小串次郎左衛門秀行、小串三左右衛門、小串五郎兵衛秀信、高島和泉守、高島市正などが居城したと記す。	20左	
225	黒山城跡	児島	倉敷市福田町・浦田	北緯34°33'58" 東経133°45'02"	頂部	60	50	東西140m 南北100m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁・土橋・横堀を確認。	22左	280・281
226	城い山城跡	児島	倉敷市黒石	北緯34°33'52" 東経133°46'19"	尾根部	30	30		山林	元々児島と呼ばれた山塊の北側頂部にある尾根先端頂部が該当する。東西に走る吉岡川の南側に位置する。頂部に広い平坦地があり、鞍部付近に切通しが存在する。しかし、ほぼ全域が竹林による地形変化されている。近世地誌類には、児島高徳が居城したと記す。	22左	
227	桜山城跡	児島	倉敷市藤戸町天城	北緯34°33'49" 東経133°48'35"	尾根部	30	30		山林・その他	倉敷市藤戸町天城の丘陵頂部に位置する。城域は現況東半を岡山県立倉敷天城中学校・高等学校により削平され、南東側には岡山藩家老天城池田氏の墓所が築かれていた。池田氏墓所が曲輪を加工したものである可能性がある。近世地誌類には、城主不詳または豊臣秀吉が居城したと記す。	22左	
228	川越山城跡	児島	倉敷市福田町福田・福田町広江	北緯34°32'00" 東経133°46'46"	尾根部	170	170	東西90m 南北80m	山林	曲輪・堅堀群を確認。	22左	282
229	鼻高山城跡	児島	倉敷市串田	北緯34°32'42" 東経133°48'36"	頂部	100	80	東西70m 南北140m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁・虎口を確認。	22右 22左	283
230	福岡山城跡	児島	倉敷市林	北緯34°32'29" 東経133°49'11"	頂部	70	60	東西90m 南北30m	山林・社寺	曲輪を確認。	22右	284

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
231	稗田城跡	児島	倉敷市児島稗田町	北緯34°30'16" 東経133°47'35"	尾根部	140	70	東西20m 南北150m	山林	曲輪・堀切を確認。	22左	284
232	とんきり城跡	児島	岡山市南区彦崎	北緯34°32'18" 東経133°49'59"	尾根部	170	120	東西40m 南北180m	山林	曲輪・土塁・虎口を確認。	22右	285
233	戸山城跡	児島	倉敷市木見・尾原	北緯34°31'20" 東経133°49'58"	頂部	190	150	東西140m 南北90m	山林	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・石積み・虎口を確認。	22右	286
234	丸山城跡	児島	岡山市南区片岡・川張	北緯34°32'19" 東経133°51'26"	頂部	170	150		山林	九十九山頂。曲輪・腰曲輪・竪堀あり。近世地誌類には、三村孫太郎行清が居城したと記す。	22右	
235	片岡城跡	児島	岡山市南区片岡	北緯34°32'03" 東経133°51'23"	頂部	120	90	東西180m 南北140m	山林	曲輪・土塁・竪堀群・虎口を確認。	22右	287
236	稗田土井ノ鼻城跡	児島	倉敷市児島稗田町	北緯34°30'16" 東経133°48'16"	端部	50	20		畑・宅地	西から東へ延びる尾根先端頂部に立地。西側は宅地、東側は段状に畑の跡と墓地が残る。	22左	
237	暇城跡	児島	倉敷市児島稗田町	北緯34°30'21" 東経133°48'39"	頂部	130	90	東西180m 南北50m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	22右	288
238	迫川城跡	児島	岡山市南区迫川	北緯34°31'59" 東経133°52'27"	尾根部	60	60		山林	北に派生した尾根に立地。斜面を加工した平坦面が造成されている。	23左	
239	滝城跡	児島	玉野市広岡・木目	北緯34°30'14" 東経133°52'54"	頂部	140	120	東西50m 南北100m	山林・社寺	曲輪・堀切・土塁を確認。	23左	288
240	常山城跡	児島	玉野市宇藤木・用吉・木目・岡山市南区迫川	北緯34°31'31" 東経133°53'12"	頂部	300	300	東西300m 南北350m	山林	市史跡。発掘調査実施。曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口・櫓台・井戸・掘立柱建物を確認。	23左	289～ 292
241	麦飯山城跡	児島	玉野市榎ヶ原・八浜町大崎	北緯34°31'30" 東経133°54'44"	頂部	220	210	東西590m 南北110m	山林	曲輪・堀切・土塁・土橋を確認。	23左	293～ 295
242	両児山城跡	児島	玉野市八浜町八浜	北緯34°33'05" 東経133°56'25"	頂部	50	50	東西150m 南北320m	山林・社寺・その他	曲輪・堀切・竪堀群・土塁・横堀・井戸を確認。	23右	295～ 297
243	高山城跡	児島	岡山市南区飽浦・郡	北緯34°34'51" 東経133°58'25"	頂部	210	170	東西20m 南北190m	山林・その他	曲輪・土塁を確認。	23右	298
244	古城山城跡	児島	岡山市南区郡	北緯34°34'18" 東経133°58'01"	頂部	160	140	東西30m 南北90m	山林	曲輪・堀切・土塁を確認。	23右	299
245	丸山城跡	児島	玉野市八浜町波知	北緯34°33'02" 東経133°57'21"	頂部	40	20	東西80m 南北60m	山林	曲輪・竪堀・土塁・虎口・横堀・土壇を確認。	23右	299
246	怒塚城跡	児島	玉野市八浜町見石・岡山市南区郡	北緯34°34'13" 東経133°57'22"	頂部	320	310	東西110m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	23右	300
247	砂山城跡	児島	玉野市八浜町波知・山田	北緯34°33'07" 東経133°58'19"	尾根部	140	100	東西30m 南北270m	山林	曲輪・堀切・竪堀・土塁を確認。	23右	301
248	西田井地城跡	児島	玉野市西田井地・山田	北緯34°33'11" 東経133°58'48"	頂部	120	100	東西150m 南北30m	山林	曲輪を確認。	23右	301

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
249	楠城跡	児島	玉野市八浜町大崎・八浜町八浜	北緯34°32'25" 東経133°56'31"	頂部	200	200		山林	標高199mの日向山の山頂部やそこから南北に延びる尾根筋に、数か所の幅広い平坦面あり。『備陽記』に「向二楠ヶ峯ト云テ陣所アリ」の記述あり。	23右	
250	駿河山城跡	児島	玉野市田井4丁目	北緯34°31'28" 東経133°56'35"	尾根部	80	50	東西50m 南北20m	社寺	曲輪を確認。	23右	302
251	見能城跡	児島	玉野市田井5丁目	北緯34°31'28" 東経133°57'20"	尾根部	110	110	東西40m 南北40m	山林	曲輪・土塁を確認。	23右	302
252	屋敷山城跡	児島	玉野市東田井地・上山坂	北緯34°33'38" 東経133°59'38"	頂部	80	70		山林・その他	標高80mの低平な丘陵上。南麓に東郷屋敷あるも、佐々木一族の東郷太郎副時の居城か。細尾根によって高島城跡に続くが、その間に低平地が2か所あったとされる。現況は全壊状態。	23右	
253	高島城跡	児島	玉野市上山坂	北緯34°33'52" 東経133°59'49"	頂部	140	100	東西210m 南北110m	山林・社寺	曲輪・堀切・土塁・井戸・虎口を確認。	23右 24左	303
254	榎岡城跡	児島	玉野市榎岡・下山坂	北緯34°33'38" 東経134°00'22"	頂部	60	50		その他	発掘調査実施。城に関連する遺構は確認されず。本丸、二の丸、三の丸などの平坦面、堀切、土塁が遺存したとされる。江戸時代の陶磁器が数点出土。	24左	
255	杭原遺跡	児島	玉野市番田	北緯34°34'14" 東経134°01'36"	尾根部	20	20		山林	標高20mの丘陵頂部に長方形の平坦面、東・西・南の斜面に4面の加工段。いずれも畑作に伴う可能性あり。	24左	
256	相引城跡	児島	玉野市番田	北緯34°34'24" 東経134°01'47"	尾根部	40	30		山林	標高40mの丘陵端部。頂部に広い平坦地あり。	24左	
257	番田城跡	児島	玉野市番田	北緯34°33'45" 東経134°01'49"	尾根部	20	20	東西50m 南北240m	山林・宅地	曲輪を確認。	24左	304
258	胸上城跡	児島	玉野市胸上	北緯34°33'01" 東経134°00'26"	頂部	20	20	東西80m 南北170m	山林・畑・社寺	曲輪・堀切を確認。	24左	304
259	丸山城跡	児島	玉野市沼	北緯34°31'09" 東経134°00'07"	頂部	40	40	東西20m 南北70m	山林	曲輪を確認。	24左	305
260	宮の鼻城跡	児島	倉敷市児島通生	北緯34°27'46" 東経133°46'03"	頂部	20	20	東西70m 南北40m	その他	曲輪・堀切を確認。	25左	305
261	本太城跡	児島	倉敷市児島塩生	北緯34°29'31" 東経133°45'45"	頂部	30	30	東西170m 南北200m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁・櫓台を確認。	25左	306・ 307
262	神水城跡	児島	倉敷市児島味野城山	北緯34°28'43" 東経133°47'11"	尾根部	140	60	東西130m 南北130m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁を確認。	25左	308
263	小川城の辻城跡	児島	倉敷市児島小川7丁目	北緯34°28'55" 東経133°48'07"	尾根部	20	20	東西120m 南北70m	山林・宅地	曲輪・堀切を確認。	25左	309
264	湊山城跡	児島	倉敷市児島通生	北緯34°27'17" 東経133°46'43"	尾根部	100	90	東西120m 南北30m	山林	曲輪・堀切を確認。	25左	309

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
265	城山城跡	児島	倉敷市児島阿津1丁目	北緯34°27'12" 東経133°48'23"	尾根部	40	40		山林・その他	発掘調査実施。神道山から北へ派生した尾根先端頂部に位置する。JR瀬戸大橋線によって東側半分が削平されている。その建設時に予定地内において確認調査を行っている。西側半分は畑地によって改変が著しい。	25左	
266	下津井城跡	児島	倉敷市下津井・下津井1丁目・下津井2丁目・下津井吹上2丁目	北緯34°26'26" 東経133°47'39"	頂部	80	80	東西600m 南北90m	山林・その他	県史跡。発掘調査実施。曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口・土橋を確認。	25左	310・311
267	古下津井城跡	児島	倉敷市下津井1丁目	北緯34°26'13" 東経133°47'42"	頂部	20	20		山林・社寺	頂部は神社境内となっていて、全体に削平を受けているが、神社北東部、神社北側参道付近に2面の造成が認められ、曲輪の可能性がある。	25左	
268	禊田城ノ辻城跡	児島	倉敷市児島禊田町	北緯34°29'59" 東経133°48'41"	尾根部	40	20		畑・宅地	榎山から西へ派生した尾根先端の頂部に位置する。約100m四方の台地状の地形に城の存在を想定していた。現在の箇所は宅地と畑地によって地形が大幅に改変されている。	25右	
269	岩山城跡	児島	倉敷市児島上の町	北緯34°29'49" 東経133°49'27"	頂部	180	40	東西90m 南北70m	山林	曲輪・堀切・堅堀群を確認。	25右	312
270	内田城ノ辻城跡	児島	倉敷市児島上の町・児島上の町4丁目	北緯34°29'17" 東経133°49'20"	尾根部	70	60	東西120m 南北150m	山林・その他	曲輪を確認。	25右	313
271	熊城山城跡	児島	倉敷市児島下の町6丁目	北緯34°28'52" 東経133°49'27"	頂部	60	50	東西110m 南北20m	山林	曲輪を確認。	25右	314
272	向山城跡	児島	倉敷市児島田の口6丁目・児島田の口7丁目	北緯34°28'13" 東経133°50'26"	頂部	40	40		山林・宅地・その他	瀬戸内海に面し、岩瀆山より西へ向かって張り出した雁山岬頂部に立地する。北側は住宅地となっており、旧地形は残存していない。南側の丘陵先端部は工場用地で立ち入れなかった。近世地誌類には、難波若狭守が居城したと記す。	25右	
273	鍛冶山城跡	児島	玉野市滝・広岡	北緯34°29'58" 東経133°52'45"	尾根部	100	90	東西40m 南北60m	山林	曲輪・堀切・土塁・虎口を確認。	26左	314
274	寺上山城跡	児島	玉野市滝	北緯34°29'54" 東経133°52'22"	尾根部	160	130	東西50m 南北100m	山林	曲輪・堀切・堅堀・土塁を確認。	25右 26左	315
275	滝の古城跡	児島	玉野市滝	北緯34°29'41" 東経133°52'23"	尾根部	150	120		山林	標高150mの丘陵頂部。頂部に広い平坦地あり。	26左	
276	鬼味城跡	児島	玉野市長尾	北緯34°29'49" 東経133°53'39"	尾根部	70	40		山林・社寺・その他	石鏡山の山塊から南西に派生した標高60mの小丘の頂部。頂部に広い平坦地あり。	26左	
277	玉城跡	児島	玉野市玉6丁目	北緯34°29'07" 東経133°55'50"	端部	30	20		その他	山塊から南に突出した標高35mの小丘陵上。頂部に平坦面あるも、墓地により大きく改変。『岡山県通史上編』には、嘉陽宗高が居城したと記す。	26左	
278	向日比城跡	児島	玉野市向日比1丁目・深井町	北緯34°27'29" 東経133°56'03"	頂部	80	80	東西20m 南北220m	山林	曲輪を確認。	26右 26左	316

備中国

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
備中140	飯ノ山城跡	津高上房	吉備中央町福沢・高梁市有漢町上有漢	北緯34°56'24" 東経133°43'08"	頂部	500	60	東西170m 南北100m	山林・社寺	曲輪・堀切・竪堀群を確認。第2冊備中国参照。	11右	214

美作国

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	位置	立地	標高(m)	比高(m)	城域	現況	概要	分布図	解説頁
美作66	都我布呂城	真嶋津高	真庭市上山・吉備中央町溝部	北緯34°56'49" 東経133°44'36"	尾根部	410	110	東西160m 南北210m	山林	曲輪・堀切・竪堀群を確認。第3冊美作国参照。	24右	165

3 備前国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

- ・本表には、備前国城館跡の「遺構の評価」と踏査時における城館の「保存状況」を掲載している。
- ・本表で用いた城館番号は、第2章・第3章で表記したものと一致している。

【城館の評価】

- ◎：城館関連遺構が良好に遺存しており、また規模も比較的大きいもの
- ：城館関連遺構が残存するもの
- △：城館関連遺構は判然としないが人工的な地形改変が認められる、もしくは副次的な情報があるもの

【保存状況】

- ・「完存」「一部損壊」「半壊」「全壊」「消失」「一部消失」に分けて表記している。
- ・発掘調査が行われた後に後に消失した城館を「消失」、一部が消失したものを「一部消失」と表記する。

表3 備前国中世城館跡遺構の評価と残存状況表

津高郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
1	野々平城跡	○	一部損壊
2	名称未定	○	一部損壊
3	江与味城跡	○	一部損壊
4	祇園山城跡	△	半壊
5	百坂城跡	△	一部損壊
6	小森古城跡	△	一部損壊
7	刈山城跡	△	半壊
8	新山城跡	◎	一部損壊
9	常江田城跡	◎	一部損壊
10	小森城跡	○	一部損壊
11	面城跡	△	一部損壊
12	片山城跡	○	一部損壊
13	細田城跡	○	一部損壊
14	妙見山城跡	○	一部損壊
15	勝山城跡	◎	完存
16	藤沢城跡	○	一部損壊
17	藤沢城跡	◎	一部損壊
18	三納谷城跡	○	一部損壊
19	福山城跡	◎	一部損壊
20	山之田城跡	△	一部損壊
21	十力城跡	○	一部損壊
22	鍋谷城跡	○	一部損壊
23	大手城跡	△	半壊
24	清常城跡	○	一部損壊
25	虎倉城跡	◎	一部損壊
26	中山城跡	△	完存
27	荒神山城跡	△	一部損壊
28	能美城跡	△	一部損壊
29	筒井城跡	△	一部損壊
30	茶白山城跡	○	一部損壊
31	市場構遺跡	△	半壊
32	沼山城跡	△	一部損壊
33	久保城跡	○	半壊
34	石原城跡	○	完存
35	城ノ段跡	○	一部損壊
36	天満城跡	○	一部損壊
37	菅館砦跡	○	半壊
38	金高城跡	○	一部損壊
39	本陣山城跡	△	一部損壊

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
40	勝尾山城跡	◎	完存
41	保木城跡	△	一部損壊
42	鹿瀬城跡	○	一部損壊
43	金川城跡	◎	一部損壊
44	徳倉城跡	◎	一部損壊
45	名称未定	△	消失
46	高松城水攻め鳴谷川遺跡	○	一部損壊
47	長野城跡	○	一部損壊
48	辛川城跡	○	完存
49	辛川城の根小屋跡	○	一部損壊
50	小丸山城跡	○	一部損壊
51	名称未定	△	半壊
52	大善城跡	○	完存
53	山崎城跡	△	半壊

赤坂郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
54	茶白山城跡	◎	一部消失
55	大仙山城跡	◎	完存
56	頼の山城跡	○	一部損壊
57	白石城跡	◎	一部損壊
58	土師方城跡	○	一部損壊
59	石上古城跡	△	半壊
60	江戸城跡	△	完存
61	宮内城跡	◎	完存
62	中畑城跡	○	完存
63	山鳥城跡	○	完存
64	先谷城跡	○	一部損壊
65	黒沢城跡	○	完存
66	長坂城跡	○	完存
67	徳近城跡	○	一部損壊
68	八幡山城跡	○	完存
69	明田城跡	○	完存
70	惣分城跡	△	一部損壊
71	坂辺城跡	○	一部損壊
72	松撫城跡	○	完存
73	地頭城跡	○	一部損壊
74	矢知城跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
75	西谷城跡	○	一部損壊
76	熊谷城跡	◎	消失
77	寺山城跡	○	半壊
78	殿谷城跡	○	一部損壊
79	宇那山城跡	○	完存
80	名称未定	△	完存
81	小屋谷城跡	○	完存
82	木山城跡	△	完存
83	金比羅城跡	○	一部損壊
84	高光城跡	○	完存
85	瀧ノ城跡	○	一部損壊
86	葛木城跡	○	完存
87	上仁保城跡	△	完存
88	菖蒲佐古城跡	○	一部損壊
89	東軽部城跡	○	一部損壊
90	南佐古田城跡	△	完存
91	宝地城跡	△	半壊
92	宮口城跡	○	完存
93	大久保城跡	△	完存
94	高尾山城跡	△	一部損壊
95	神田城跡	△	全壊
96	高山城跡	△	全壊
97	正崎城跡	○	半壊
98	善応寺城跡	○	完存
99	沼田城跡	△	全壊
100	名称未定	○	完存
101	兜山城跡	○	完存
102	新田陣跡	△	一部損壊

磐梨郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
103	上田城跡	○	完存
104	稲蒔城跡	○	完存
105	石ヶ谷城跡	○	完存
106	坊主山城跡	○	完存
107	小坂城跡	○	完存
108	田尻城跡	○	完存
109	城ノ段跡	○	完存
110	岡城跡	△	半壊
111	赤尾山城跡	△	完存
112	殿谷城跡	△	全壊
113	可真下城跡	△	完存
114	西山城跡	○	完存
115	可真上城跡	△	完存
116	大盛山城跡	△	一部損壊
117	保木城跡	◎	消失
118	妙見山大森山遺跡(妙見山城跡)	△	完存
119	保木城の砦跡	△	一部損壊
120	保木風呂屋遺跡	△	一部損壊
121	塩納大日遺跡	△	全壊
122	宗堂城山城跡	△	全壊
123	名称未定	△	一部損壊
124	南方城跡	△	一部損壊
125	物理城跡	○	完存
126	土井の内寺跡	○	半壊
127	肩脊城跡	○	一部損壊
128	高尾城跡	○	一部損壊
129	堀ノ内遺跡	○	一部損壊
130	鳥の奥遺跡	△	一部損壊
131	内山城跡	○	完存

和気郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
132	飯盛山城跡	○	一部損壊
133	奥塩田茶白山城跡	○	一部損壊
134	北山方城跡	○	一部損壊
135	観音山城跡	○	完存

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
136	天神山城跡根小屋	○	一部損壊
137	天神山城跡	◎	完存
138	天神山城太鼓丸跡	◎	完存
139	天神山城跡附天瀬武家屋敷跡	○	一部損壊
140	天神山城跡附岡本屋敷跡	○	一部損壊
141	天神山城跡附木戸跡	○	一部損壊
142	名称未定	○	完存
143	大坊山城跡	○	完存
144	北浦山城跡	○	完存
145	青山城跡	○	一部消失
146	天王久保山城跡	△	完存
147	医王山城跡	○	完存
148	大股古城跡	○	完存
149	惣谷山城跡	○	完存
150	熊山城跡	△	完存
151	龍徳山城跡	○	完存
152	上見山城跡	○	完存
153	鹿帰前丸山城跡	○	完存
154	宮山城跡	△	半壊
155	曾根城跡	◎	一部損壊
156	衣笠城跡	△	完存
157	北山城跡	○	一部損壊
158	伊部城跡	○	一部損壊
159	東山城跡	○	完存
160	明石掃部介守重宅跡	○	半壊
161	ろんき山城跡	△	完存
162	三石城跡	◎	完存
163	関川城跡	○	一部損壊
164	香登城跡	◎	完存
165	狐塚城跡	△	完存
166	茶磨岩城跡	○	完存
167	鬼ヶ城跡	△	完存
168	たい山城跡	○	一部損壊
169	伝太閣門跡	○	一部損壊
170	茶白山城跡	△	全壊
171	富田松山城跡	◎	完存

御野郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
172	船山城跡	○	一部損壊
173	妙見山城跡	○	半壊
174	烏山城跡	○	半壊
175	半田山城跡	○	一部損壊
176	津島福居遺跡	△	半壊
177	辻川城跡	△	一部損壊
178	富山城跡	◎	一部消失
179	野殿城跡	△	半壊
180	岡山城跡	◎	一部消失

上道郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
181	龍ノ口山城跡	○	半壊
182	中島城跡	○	一部損壊
183	名称未定	△	完存
184	藤井城跡	△	半壊
185	龜山城跡	◎	一部損壊
186	内山城跡	○	一部損壊
187	名称未定	○	完存
188	城ヶ辻城跡	○	一部損壊
189	吉井城跡	○	半壊
190	福岡城跡	△	半壊
191	大日幡山城跡	○	完存
	大日幡山城跡東出丸跡	○	消失
	大日幡山城跡北出丸跡	○	完存
192	新庄山城跡	○	一部損壊
193	明禪寺城跡	○	半壊
194	正木城跡	△	一部損壊

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
195	金山城跡	△	全壊

邑久郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
196	長船城跡	○	半壊
197	福岡奥之城跡	△	半壊
198	丸山城跡	○	一部損壊
199	智満城跡	△	完存
200	堀城跡	○	半壊
201	油杉城跡	△	一部損壊
202	高松山城跡	△	半壊
203	高山城跡	○	完存
204	虫明城跡	△	半壊
205	光明寺城跡	△	半壊
206	今木城跡	△	半壊
207	尾張城跡	△	半壊
208	浜城跡	△	全壊
209	射越城跡	△	半壊
210	向山城跡	△	半壊
211	乙子城跡	○	半壊
212	長沼城跡	○	一部損壊
213	城島城跡	○	一部損壊
214	砥石城跡	◎	一部損壊
215	高取山城跡	○	完存
216	上山田城跡	○	完存
217	茶屋城跡	△	半壊
218	作州山城跡	△	一部損壊
219	名称未定	△	半壊
220	西大寺一宮育苗園公園遺跡	△	消失
221	大附城跡	△	全壊
222	朝日山城跡	△	全壊
223	佐井田城跡	△	完存

児島郡

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
224	小串城跡	△	全壊
225	黒山城跡	◎	一部損壊
226	城い山城跡	△	一部損壊
227	桜山城跡	△	半壊
228	川越山城跡	○	一部損壊
229	鼻高山城跡	○	一部損壊
230	福岡山城跡	○	一部損壊
231	稗田城跡	○	一部消失
232	とんきり城跡	○	完存
233	戸山城跡	○	完存
234	丸山城跡	○	完存
235	片岡城跡	○	完存
236	稗田土井ノ鼻城跡	△	一部損壊
237	暇城跡	○	完存
238	迫川城跡	△	一部損壊
239	滝城跡	○	一部損壊
240	常山城跡	◎	一部消失
241	麦飯山城跡	○	完存
242	両児山城跡	◎	一部損壊
243	高山城跡	○	一部損壊
244	古城山城跡	○	完存
245	丸山城跡	○	一部損壊
246	怒塚城跡	○	完存
247	砂山城跡	○	完存
248	西田井地城跡	○	完存
249	楠城跡	○	完存
250	駿河山城跡	○	一部損壊
251	見能城跡	○	完存
252	屋敷山城跡	△	全壊
253	高島城跡	○	一部損壊
254	梶岡城跡	△	消失
255	杭原遺跡	△	全壊

城館番号	城館跡名	遺構の評価	残存状況
256	相引城跡	△	半壊
257	番田城跡	△	全壊
258	胸上城跡	○	半壊
259	丸山城跡	○	完存
260	宮の鼻城跡	○	一部損壊
261	本太城跡	◎	一部損壊
262	神水城跡	○	一部損壊
263	小川城の辻城跡	○	一部損壊
264	湊山城跡	○	完存
265	城山城跡	△	半壊
266	下津井城跡	◎	一部損壊
267	古下津井城跡	△	一部損壊
268	稗田城ノ辻城跡	△	半壊
269	岩山城跡	○	完存
270	内田城ノ辻城跡	○	一部損壊
271	熊城山城跡	○	一部損壊
272	向山城跡	△	一部損壊
273	鍛冶山城跡	○	完存
274	寺上山城跡	○	半壊
275	滝の古城跡	△	完存
276	鬼味城跡	△	一部損壊
277	玉城跡	△	全壊
278	向日比城跡	○	完存

4 備前国不明中世城館跡一覧表

・本表は、近世地誌などに記されてはいるが所在地が不明の城館と城館が所在したとされる伝承地を踏査したが、城館関連遺構が不明瞭であったものを載せている。

・所在地欄には、所在地が推定される現在の市町村名と大字名を載せているが、場所が推定できないものは市町村名のみもしくは空欄にしている。

・文献番号欄には、巻末にある文献一覧表の番号を記載している。

表4 備前国不明中世城館跡一覧表

津高郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
279	今保城	津高	岡山市北区今保	笹ヶ瀬川と足守川の合流地にあたる、旧今保港北側の小字「城」周辺の平地を推定地として踏査を実施するが、遺構は未確認。ただし、所在を示す中世文書あり。	
280	松田屋敷	津高	岡山市北区今保	『東備郡村誌』によれば、津高郡馬屋郷今保村に「宅址」の記載がある。「松田屋敷」という地名をもとに推定地の踏査を実施するが、遺構は未確認。	12・108
281	大窪城	津高	岡山市北区大窪	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、津高郡大窪村に城主不詳の「大膳城」・「古城」の2城があったとある。なお、『東備郡村誌』には長野村の「大膳山」に城があったと記す。	5・9・12・171・172・190
282	美濃権介佐重宅	津高	岡山市北区尾上	『東備郡村誌』によれば、津高郡尾上村に美濃権介佐重の屋敷が所在したとある。	12
283	名称未定	津高	岡山市北区栢谷・横井上	『東備郡村誌』によれば、津高郡栢谷(栢谷か)邑に城主不詳の城があったと記す。推定地の頂部及び南斜面の一部に平坦面が確認できるが、大半は墓地造成で改変されており、遺構は未確認。	12
284	下牧城	津高	岡山市北区下牧	『改修赤磐郡誌』によれば、牧山村下牧に所在したとある。	42
285	菅野城	津高	岡山市北区菅野	『備陽国誌』・『東備郡村誌』によれば、津高郡菅野村(西菅野村)に松田左近将監の家臣横井土佐が居城したと記す。『日本城郭大系13』は「田益城」の出城と記す。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	5・12・27・31・78・171
286	鍋屋城	津高	岡山市北区高野	『日本城郭全集15』によれば、永禄年間(1558~1569)に片山宗兵衛久秀が居城したと記す。ただし、城主名から吉備中央町下加茂の「鍋谷城」との誤認も考えられる。	173
287	田中城	津高	岡山市北区田益	『横井村誌 第八輯 伝説・土俗民俗 附横井城主略史』によれば、『岡山県通史上編』は「田中城」は横井土佐守が城主とするが、「横井城」には別所豊後守齋藤が居城したと記す。横井公園南西側に67m×55mの方形地割があり、周辺に「城の内」の地名や古井戸がある。「田益田中遺跡」の範囲内。	27・113・196
288	田益城	津高	岡山市北区田益	『岡山県通史上編』によれば、御津郡横井村田益に松田将監の家臣横井土佐が居城したと記す。ただし、所在地を除き『備陽国誌』・『東備郡村誌』の「菅野城」と同じ記述である。	5・12・27・28・133・171・172・190
289	古城山	津高	岡山市北区津高	『備陽国誌』によれば、津高郡東原村に城主不詳の城が所在したとある。	5
290	蜂矢城	津高	岡山市北区富原・楯津	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、津高郡富原村に蜂谷某が居城したと記す。推定地の頂部は平坦で、斜面地は段取りの平坦面が複数あるが、開墾に伴うものと考えられる。	5・9・12・27・28・78・171・172・190
291	海野将監宅	津高	岡山市北区日応寺	『東備郡村誌』によれば、津高郡日応寺邑に海野将監の屋敷が所在したとある。	12
292	橋本五郎左衛門宅	津高	岡山市北区平津	『東備郡村誌』によれば、津高郡山崎村に松田の家臣橋本五郎左衛門の屋敷があったと記す。	12

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
293	妙現山陣	津高	岡山市北区横尾	『中国兵乱記』によれば、天正10(1582)年、高松の役の際、秀吉が「四塚」・「門前」と共に「妙現山」に陣城を構えたと記す。	155
294	横尾城	津高	岡山市北区横尾	『東備郡村誌』によれば、津高郡横尾村に瀬原佐渡が居城した城が所在したと記す。推定地の頂部は平坦に近い自然地形、南東側の尾根は平坦地のみで防御施設はなく、遺構は未確認。	5・9・12・27・28・171
295	奥宿城	津高	岡山市北区御津虎倉	『東備郡村誌』によれば、伊賀の家臣河原源左衛門、河田七郎が「虎倉城」の別堡である津高郡虎倉村鞍田の「奥宿城」に居城したと記す。また、『岡山県通史上編』では、御津郡宇甘西村天満の「惑状山」または「本陣山」に所在と記し、『日本城郭大系13』も、ほぼこれを踏襲している。ただし、この場合、所在地が岡山市北区御津虎倉宿か御津紙工天満なのか判然としない。「鼓田城」・「堤棚奥宿砦」と城名・所在地・概要ともに混乱がみられる。同一城館を指すか。	5・12・27・28・80・171・191
296	鼓田城	津高	岡山市北区御津虎倉	『中国兵乱記』によれば、永禄2(1559)年、毛利勢の攻めに対して、伊賀の家臣片山弥左衛門、河田又左衛門、河原源左衛門が「鞍田の構」を守ると記す。『御津の山城』の「堤棚(鼓田)砦」の情報も参考に、「虎倉城」の出丸の存在を推定した伍社大明神付近を踏査したが、遺構は未確認。「奥宿城」・「堤棚奥宿砦」と城名・所在地・概要ともに混乱がみられる。同一城館を指すか。	155・191
297	堤棚奥宿砦	津高	岡山市北区御津虎倉	『吉備温故秘録』・『備前軍記』によれば、天正2(1574)年、「虎倉城」より奥の「堤棚奥宿」に伊賀の家臣河原源左衛門、河田七郎が「堤棚奥宿砦」に居城したと記す。「奥宿城」・「鼓田城」と城名・所在地・概要ともに混乱がみられる。同一城館を指すか。	9・31・134・177
298	大谷館砦	津高	岡山市北区御津高津	『東備郡村誌』によれば、津高郡下畑邑に文明年中、海野豊前守が居住したとある。『御津の山城』によれば、宇甘郷の地頭と伝えられる海野豊前守の館あるいは屋敷が、丘陵の平地か東側の谷間に所在したと記す。推定地を踏査したところ、約10m四方の丘陵頂部に海野氏を祀る社殿や石碑が認められ、その北側と南東側下方に平坦面が見られる。しかし、明確な遺構は未確認。	12・191
299	桜村古城	津高	岡山市北区建部町桜	『東備郡村誌』によれば、津高郡桜村に城主不詳の城が所在、『岡山県通史上編』によれば、御津郡建部村桜に「桜村古城」が所在などと記す。	12・27・171
300	田邊九郎宅	津高	吉備中央町尾原	『東備郡村誌』に「宅址」の記載がある。津高郡長田荘尾原村に素性不明の田邊九郎の屋敷があったとする。	12
301	白坂陣	津高	吉備中央町上加茂	『岩田村誌』によれば、天正8(1580)年、毛利勢が宇喜多方の「虎倉城」を攻めようとした際、伊賀方が各地に備えた陣の1つ。河原七郎を置くことと記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
302	百々陣	津高	吉備中央町上加茂	『岩田村誌』によれば、天正8(1580)年、毛利勢が宇喜多方の虎倉城を攻めようとした際、伊賀方が備えた陣の1つ。河原越中を置くことと記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
303	三宅坂陣	津高	吉備中央町上加茂	『岩田村誌』によれば、天正8(1580)年、毛利勢が宇喜多方の「虎倉城」を攻めようとした際、伊賀方が備えた陣の1つ。坂頭に伊賀久隆と記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
304	八幡山陣	津高	吉備中央町上加茂	『岩田村誌』によれば、天正8(1580)年、毛利勢が宇喜多方の「虎倉城」を攻めようとした際、伊賀方が備えた陣の1つ。新山兵庫らを置くことと記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
305	古城	津高	吉備中央町小森	『備陽記』には津高郡豊岡村枝小森に「古城山」、『吉備温故秘録』には津高郡小森村に「古城」と記載。菱川与九郎が居城したと記すが、現状で村の辰(東南東)の方角で城は確認されていない。なお、『備陽国誌』では、菱川与九郎が「百坂山城」に居城したと記している。	3・5・9
306	せいひろ城	津高	吉備中央町下土井・富永	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には、津高郡下大(土か)井に城主不詳の「せいひろ城山」が所在と記す。推定地は山頂部に立地。尾根上は大半が自然地形で、一部は後世の改変あり。遺構は未確認。	5・9・12・27・171

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
307	舟山城	津高	吉備中央町下土井	『東備郡村誌』によれば、津高郡長田荘下土井村に城主不詳の城が所在と記す。吉備中央町下土井の推定地を踏査したが、頂部で平坦面を3面確認したが、明確な遺構は未確認。	12・27
308	伊賀左衛門別荘	津高	吉備中央町高谷	『東備郡村誌』に「廃墟」の記載がある。津高郡長田荘大谷邑に伊賀左衛門の別荘が元兼にあったとする。	12
309	河原源三左衛門別荘	津高	吉備中央町高谷	『東備郡村誌』に「廃墟」の記載がある。津高郡長田荘大谷邑に河原源三左衛門の別荘が元兼にあったとする。	12
310	河原五郎兵衛別荘	津高	吉備中央町高谷	『東備郡村誌』に「廃墟」の記載がある。津高郡長田荘大谷邑に河原五郎兵衛の別荘が元兼にあったとする。	12
311	古城山	津高	吉備中央町高谷	『備前記』に「古城山」の記載がある。津高郡大谷村の村坤（南西）に城があったとする。	1
312	城址	津高	吉備中央町高谷	『東備郡村誌』に「城址」の記載がある。津高郡長田荘大谷邑の元兼に伊賀兵庫、中村に伊賀伊勢守の城があったとする。	12
313	妹尾太郎兼康宅	津高	吉備中央町豊岡上	『東備郡村誌』によれば、津高郡長田荘下土井村に妹尾太郎兼康の屋敷が所在と記す。	12
314	江田城	津高	吉備中央町豊岡下	『備陽記』には津高郡豊岡村に城主不詳の「江田古城山」、『備陽国誌』には津高郡豊岡下村に城主不詳の「江田城」、『吉備温故秘録』には津高郡豊岡村に「郷田城」、『撮要録』には津高郡豊岡村に「郷田城」、『東備郡村誌』には津高郡豊岡下村に菱川与次郎が居城した「江田の城」が所在と記す。『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』にも菱川与次郎が居城した「江田城」と記す。推定地は山頂部に立地し、頂部は平坦に近いが曲輪ではなく、遺構は未確認。	3・5・9・11・12・27・171
315	九折堺陣	津高	吉備中央町広面	『岩田村誌』によれば、天正8（1580）年、毛利勢が宇喜多方の「虎倉城」を攻めようとした際、伊賀方が備えた陣の1つ。河田平内を置くと記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
316	広面陣	津高	吉備中央町広面	『岩田村誌』によれば、天正8（1580）年、毛利勢が宇喜多方の「虎倉城」を攻めようとした際、伊賀方が備えた陣の1つ。土井治郎右衛門を置くと記す。なお、『類纂虎倉物語』の『虎倉記』にこの記載の元となる合戦の陣取りを記す。	17・134
317	古城山	津高	吉備中央町船津	『備陽国誌』に「古城山」の記載がある。津高郡黒瀬村に岸本河内守守秀が居城し、その後、黒瀬村丹後守が居城したと伝わりと記す。	5
318	三谷城	津高	吉備中央町三谷	津高郡三谷村において、『備陽記』には「森清古城山」、『備陽国誌』には「古城」、『吉備温故秘録』には「森清山城」、『撮要録』には「森清城」、『東備郡村誌』には「城蹟」が所在し、城主は山脇民部と記す。『岡山県通史上編』では御津郡豊岡村豊岡上の「三谷城」（または「森清城」という）に山脇民部が居城と記す。「小森城」に南隣する同町三谷陰地の山頂部に所在したという地元情報に基づいて推定地を踏査したが、遺構は未確認。別称森清城。	3・5・9・11・12・27・28

赤坂郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
319	高倉山陣	赤坂	岡山市北区牟佐	『備前軍記』・『備前三石城史の研究』などによれば、明応6（1497）年、浦上宗助が籠もった「龍の口城」に対して、松田方の伊賀左衛門勝隆が陣取ったとある。	22・31・42・136・177・187・190
320	大松山陣	赤坂	岡山市北区御津石上・赤磐市石上	『改修赤磐郡誌』によれば、赤磐郡布都美村大字石上に所在し、『備前文明乱記』・『備前軍記』には、福岡合戦の文明15（1483）年、福岡方の小瀬弾正忠を大将として備前・美作の境に陣取ったとある。	19・31・42・44・177・185
321	国ヶ原城	赤坂	岡山市北区御津国ヶ原	『改修赤磐郡誌』には、赤坂郡葛城村国ヶ原に所在したと記す。推定地の平坦面や堀状の山道は確認したが、遺構は未確認。	42・73・80・191
322	松田屋敷	赤坂	岡山市北区御津平岡西	『東備郡村誌』によれば、赤坂郡平岡郷平岡西村に松田某の城館があったと記す。	12

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
323	大烏帽子城	赤坂	岡山市北区御津平岡西・御津石上	『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』に赤坂郡平岡西村に所在する城があると記すが特定できない。『改修赤磐郡誌』には赤坂郡五城村平岡西に所在すると記す。岡山市北区御津平岡西・御津石上の推定地の尾根南端には小規模な平坦面が6面連続するが、明確な遺構は未確認。	42・191
324	古城山・城址	赤坂	岡山市北区御津矢知	赤坂郡矢知村において、『備陽国誌』には城主不詳の「古城山」が所在したと記す。『吉備温故秘録』では、城主不知の「古城山」2城が所在したと記す。『東備郡村誌』でも城主不詳の「城址」2城が所在したと記す。ただし、現状では同村には「矢知城」しかこれまで確認されていない。あと1城がどれか判然としない。	5・9・12
325	吉田山城	赤坂	赤磐市石上・岡山市北区御津石上	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』によれば、赤坂郡石上村に「古城山」、岡山県通史上編に布都美村石上に2城の「古城」が所在と記す。『改修赤磐郡誌』には布都美村石上立畑に「吉田山城」の記載が見られる。	5・9・14・27・42・172
326	黒媛城	赤坂	赤磐市黒本	『日本城郭全集10』によれば、頓の山麓の円形の小山を呼んでいるとある。	172
327	権現山城	赤坂	赤磐市小原	『赤坂町誌』に具体的な城の所在地の記載があり、城主は藤原秀国と記す。同所には熊野神社や磐座周辺の人為的な地形改変による平坦地が認められるが、遺構は未確認。なお、『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』には赤坂郡小原村に「古城山」が、『東備郡村誌』には「小原城」が所在したと記す。『赤磐郡誌』にも「古城址」の記載が認められるが、この関係は判然としない。	1・3・5・9・12・14・15・172
328	天神山城	赤坂	赤磐市小原	『赤坂町史』には赤磐市小原の天神宮が建つ独立丘陵の頂部に所在とあり、城主は小原左兵衛と記す。社殿造営による平坦地の範囲は東西約25m、南北約40mであるが、その周囲は植林等の地形改変が見られ、遺構は未確認。なお、『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』には赤坂郡小原村に「古城山」が、『東備郡村誌』には「小原城」が所在したと記す。『赤磐郡誌』にも「古城址」の記載が認められるが、この関係は判然としない。	1・3・5・9・12・15・173
329	名称未定	赤坂	赤磐市坂辺	『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には赤坂郡惣分村西あるいは惣分下村などに城が所在したとする記載があり、『備陽国誌』を除いて湯原甚兵衛または湯浅藤内が居城とある。赤磐市坂辺の砂川左岸の山頂部に位置したと推定されるが、同所の大部分は地形改変を受けて詳細が不明であり、砂川方面に張り出す尾根上にも人為的な加工は認めらず、遺構は未確認。	1・3・5・9・12
330	塩木城	赤坂	赤磐市塩木	『改修赤磐郡誌』に記載の「塩木城」にあたる。故事来歴に基づき踏査したが、遺構は未確認。	42・123・172
331	辻ノ山陣	赤坂	赤磐市下仁保	『西山村史』によれば、西山村大字下仁保辻ノ山に「石相城」の背後を突くために陣取った陣と記す。	73
332	葛木氏居館	赤坂	赤磐市下仁保・西中	『山陽町史』によれば、赤磐市下仁保・西中の「土井の内」その北側に位置する「殿の後」という小字から葛木氏の大規模な居館を推定しているが、遺構は未確認。	58
333	古城	赤坂	赤磐市惣分	『赤磐郡誌』によれば、笹岡村惣分に2城所在したとあることから、「惣分城」とは別に城が存在したと解される。	14
334	高月城	赤坂	赤磐市高屋	『備前軍記』によれば、天文17（1548）年、浮田大和が備中の三村勢と示し合わせて、赤坂郡鳥取庄の「高月城」（高屋村の南にあった松田方の枝城）を攻めたと記す。ここでは、後に宇喜多直家に仕える馬場次郎四郎の武勇を記載。	177
335	岩鼻城	赤坂	赤磐市多賀・岡山市北区御津矢知	『改修赤磐郡誌』によれば、軽部村多賀矢知越の谷の中央に所在し、設備は貧弱であるが、東方1.5kmのところに平城が想像されるとある。また、「土井の前」・「秋月」・「殿ノ前」の地名と井戸を残すとある。	42
336	多賀城	赤坂	赤磐市多賀	『赤坂町史』に城主不詳として記載がある。推定地の南側に延びる尾根頂部には平坦な自然地形が広がり、端部には金比羅様を祀る祠周辺に平坦地が見られるが、遺構は未確認。	15

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
337	佐古古城	赤坂	赤磐市西軽部	『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』には、赤坂郡西軽部村に額田喜介が居城した「佐古古城」(サコ古城山・左古古城・さこの上城)と記し、『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』にも同様の記載がある。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	3・5・9・ 11・12・ 14・15・ 27・31・ 42・82・ 113・133・ 136・171・ 172・173
338	聖山城	赤坂	赤磐市西窪田	『赤坂町誌』が記す赤磐市西窪田の推定地は、畑作等による加工段が存在するものの、遺構は未確認。	15・173
339	天神山城	赤坂	赤磐市西窪田	『日本城郭全集15』によれば、赤磐市西窪田の天神宮のある独立丘陵の頂部に所在とあり、城主不詳とする。社殿造営による平坦地の範囲は東西約15m、南北約20mであり、その周囲は植林等の地形変化が見られる。遺構は未確認。	5・14・ 15・27・ 42・172
340	中山城	赤坂	赤磐市西勢実	『改修赤磐郡誌』に「開」・「上門」・「殿田」・「木戸」・「黒尾」・「黒座」などの城館関連地名を記載している。推定地の山頂部を踏査した結果、かなり広い平坦地は見られるが、遺構は未確認。	42・123・ 173
341	梅坂城	赤坂	赤磐市仁堀中	『備前記』・『備陽記』には赤坂郡仁堀中村に平尾源五が居城した「古城山」、『備陽国誌』には赤坂郡仁堀河原毛村に城主不詳の「梅坂古城」、『吉備温故秘録』には赤坂郡仁堀村に平尾源五が居城した「古城山」、『東備郡村誌』には赤坂郡河原毛村に所在した城主不詳の「梅坂古城」の記載がある。『岡山県通史上編』では赤磐郡布津美村合田の「梅坂古城」、『日本城郭大系13』では吉井町合田の「梅坂城」と記す。推定地を踏査した結果、広い平坦地や段状を呈する地形が認められたが、明確な遺構は未確認。	1・3・5・9・ 12・14・ 27・42・ 123・171・ 173
342	仁堀陣	赤坂	赤磐市仁堀東・ 仁堀中・仁堀西	『太平記』第38巻「諸国宮方蜂起事付越中軍事」によれば、康安2(1362)年6月3日に、山名時氏が五千余騎で、伯耆から美作の院庄へ越えて国々に軍勢を分けて差向け、時氏の子息である帥義を大将として二千余騎が備中、備前へ出発し、その一手が構えた陣であったと記す。	31・148
343	小原源次兵衛宅	赤坂	赤磐市福田	『東備郡村誌』によれば、赤坂郡福田邑に小原源次兵衛の屋敷が所在したとある。	12
344	龍王宮	赤坂	赤磐市穂崎	『備陽国誌』によれば、赤坂郡穂崎村に所在した城主不詳の城とされる。近世地誌類で赤磐市穂崎に所在したと記す「龍宮山」・「神宮山城」と同一の可能性が高い。	5
345	龍宮山	赤坂	赤磐市穂崎	『吉備温故秘録』によれば、赤坂郡穂先(崎)村に所在した城主不詳の城と記す。近世地誌類で赤磐市穂崎に所在したと記す「龍王宮」・「神宮山城」と同一の可能性が高い。	9
346	神宮山城	赤坂	赤磐市穂崎	『東備郡村誌』によれば、赤坂郡穂崎邑に所在した主将の姓名不詳の城と記す。近世地誌類で赤磐市穂崎に所在したと記す「龍王宮」・「龍宮山」と同一の可能性が高い。	12
347	石相城	赤坂	赤磐市町苅田・ 西窪田	『改修赤磐郡誌』によれば、赤磐郡鳥取上村西窪田に「石相城」が所在したと記載し、『赤坂町誌』には詳細な位置を示す。これらに基づき推定地を踏査したが、古墳や果樹園等による加工段が存在するものの、遺構は未確認。	15・42・ 73・173
348	上田城	赤坂	赤磐市馬屋	『赤磐郡誌』・『岡山県通史上編』では、赤磐郡西高月村馬屋に左近が居城した城として、『日本城郭大系13』では詳細不明の城として記載がある。赤磐市馬屋には「兜山城」が知られるが、同一か未周知の城であるか判然としない。	14・27・ 171
349	山口城	赤坂	赤磐市山口	『東備郡村誌』には、赤坂郡山口村に花房助兵衛直次が居城と記す。また、『赤磐郡誌』では花房助兵衛が、『日本城郭大系13』では宇喜多氏家臣の花房正次が居城した城として記載がある。赤磐市山口には「高光城」・「金比羅城」・「木山城」、隣接地には岡山市御津芳谷の「瀧ノ城」などが知られるが、どの城と対応するか、または未周知の城であるか判然としない。	12・14・ 133・171・ 180

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
350	高尾山城	赤坂	赤磐市由津里	『備陽国誌』・『東備郡村誌』には、赤坂郡由津里村に所在した城主不詳の「高尾山城」の記載がある。一方、同書には赤坂郡大刈田村の苧田四郎左衛門または額田與次(右左門)右衛門が居城した「高尾山城」の記載もある。『岡山県通史上編』には赤磐郡鳥取上村大苧田と由津里の「高尾山城」を併記しているが、適要欄は両者は同じと記す。『日本城郭大系13』にも赤磐郡赤坂町大苧田と由津里の「高尾山城」を併記しているが、前者を苧田貞重の居城、後者を同氏の持城と記す。このように「高尾山城」については、各文献の記載に混乱が認められる。ただし、所在を示す中世文書あり。	5・12・ 14・27・ 42・171
351	向山城	赤坂	赤磐市由津里	『改修赤磐郡誌』・『赤坂町史』によれば、鳥取上村由津里に所在して城は上下2段となり、礎石を残すと記す。『日本城郭全集10』によれば、赤坂町由津里に難波氏が居城した「向山城」が所在したと記す。『赤坂町史』が記す赤磐市由津里の地番周辺は南に延びる尾根の先端部には、墓地と植林造成に伴う3～4面程度の地形改変が見られ、尾根頂部には自然地形の平坦面が広がるが、遺構は未確認。	15・42・ 73・172
352	名称未定	赤坂	赤磐市由津里	『備前記』・『備陽記』によれば、赤坂郡由津里村の北側に雲州尼子晴久勢が来て陣取ったと記す。同村には「小屋谷城」・「八左城」などがあるが、未周知のものも含めて判然としない。	1・3
353	両宮山城	赤坂	赤磐市和田	『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、赤坂郡和田村に和田伊織が居城したと記す。『岡山県通史上編』では、赤磐郡西高月村和田の「両宮山城」に和田伊織が居城し、『日本城郭大系13』では赤磐郡山陽町和田の「両宮山城」に和田伊織が居城したとし、両宮山古墳を城に転用したと記す。ただし、古墳では遺構を確認できない。近世地誌類で赤磐市穂崎に所在したと記す「龍王宮」・「神宮山城」・「龍宮山」の記述との混乱がうかがえる。	9・12・ 14・27・ 31・34・ 42・58・ 73・133・ 150・171・ 177

磐梨郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
354	江尻城	磐梨	岡山市東区瀬戸町江尻	『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』によれば、磐梨郡江尻村の岡六郎兵衛または次郎兵衛が居城と記す。『岡山県通史上編』では、赤磐郡瀧瀬村江尻の「江尻古城」に岡次郎兵衛または六郎兵衛が居城と記す。岡山市東区瀬戸町江尻の砂川左岸の丘陵周辺に位置し、名称未定の散布地の範囲内にあたる。東江尻の中央にある低丘陵頂部に平坦面2面、南斜面に小規模な平坦面があるが、周辺を含めて現代の地形改変が著しい。丘陵は「城山」、丘陵裾の西に「木戸口」、丘陵裾の北に「土井」・「馬場屋敷」などの地名が残るものの、遺構の現認が難しい。別称前城。	3・5・9・ 11・12・ 14・27・ 42・63・ 98・145・ 146・171・ 173
355	大内村山陣	磐梨	岡山市東区瀬戸町大内	『岡山市史第2』の「讃岐松田系譜」によれば、永正11(1514)年、浦上氏・宇喜多能家の大軍が、金川城を攻めるため福岡に集まっていることを松田元隆が知り、松田勢を3手に分けた1陣と記す。	31
356	千種城	磐梨	岡山市東区瀬戸町鍛冶屋	『日本城郭全集10』によれば、額田十郎左衛門秀重が築城し、土井博信が居城したと記す。推定地の山頂を踏査したが、当地は後世の開墾により地形が改変されており、遺構は未現認。	63・90・ 145・146・ 172
357	陣場山城	磐梨	岡山市東区瀬戸町肩脊	『日本城郭全集15』によれば、「江尻城」の支城として、陣場山の頂上に岡次郎兵衛が築城、『赤磐郡誌』には、太閤秀吉、また宇喜多家臣の陣と口碑として伝わるが、詳細不明などと記す。	14・98・ 145・146・ 173

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
358	坂根城	磐梨和気	岡山市東区瀬戸町坂根・肩脊・備前市坂根	『備前記』によれば、磐梨郡坂根村の村東に「古城山」があったと記す。『備陽記』には、磐梨郡坂根村に城主不詳の「古城山」が所在したと記す。『備陽国誌』には、磐梨郡坂根村に長船右京が居城した「古城山」が所在したと記す。『吉備温故秘録』には、磐梨郡坂根村に物理貞茂、石橋左衛門尉、左藤将監らが居城した「物理城」が所在したと記す。『撮要誌』には、磐梨郡坂根村に城主不詳の城が所在と記す。『東備郡村誌』には、磐梨郡坂根村に佐藤将監、明石右京、周東飛騨守らが居城した城が所在と記す。『岡山県通史上編』では、赤磐郡吉岡村坂根に長船左京、また物理貞茂、また、佐藤将監、明石右京、周東飛騨守らが居城した「城ヶ谷山城」が所在したと記す。『日本城郭大系13』では、物理貞茂、戦国期に長船氏が居城した「城ヶ谷山城」が所在したと記す。一方、『吉備温故秘録』には、和気郡坂根村に明石右京、後に真（眞）家家臣が交代で守った「古城」が所在と記し、『岡山市史第2』では、赤磐郡吉岡村坂根に長船左京、また物理貞茂、また、佐藤将監、明石右京、周東飛騨守らが居城した「坂根城」が所在したと記す。つまり、岡山市東区瀬戸町坂根または備前市坂根に所在したと想定される「坂根城」は、明石右京、長船右京または右京らが居城した「坂根城」・「吉岡城」・「物理城」・「城ヶ谷山城」などを指す可能性がある。このように「坂根城」については、各文献の記載に混乱が認められる。	1・3・5・9・11・12・27・31・82・87・136・146・171
359	吉岡城	磐梨	岡山市東区瀬戸町坂根・肩脊	『備前記』によれば、磐梨郡坂根村の村東に「古城山」があったと記す。『和気組』によれば、磐梨郡の吉岡9か村の南の山に長船右京が居城した「吉岡城」が所在したと記す。『備陽国誌』には、磐梨郡坂根村に長船右京が居城した「古城山」を記している。『吉備温故秘録』には、坂根村に物理貞茂、石橋左衛門尉、左藤将監らが居城した「物理城」が所在したと記す。『東備郡村誌』には、坂根村に佐藤将監、明石右京、周東飛騨守らが居城した城が所在と記す。一方、『岡山県通史上編』では、赤磐郡吉岡村坂根に長船右京、また物理貞茂、また、佐藤将監、明石右京、周東飛騨守らが居城した「城ヶ谷山城」が所在したと記す。『日本城郭大系13』では物理貞茂、戦国期に長船氏が居城した「城ヶ谷山城」が所在したと記す。つまり、岡山市東区瀬戸町坂根・肩脊には、長船右京または左京が居城した「吉岡城」、「物理城」、「城ヶ谷山城」と呼ぶ1城が所在したことになる。しかし、長船右京亮は瀬戸内市長船町長船の「長船城」に居城したと考えられることから、「吉岡城」を指す城館が判然としない。このように「吉岡城」については、各文献の記載に混乱が認められる。	1・2・3・5・6・9・11・12・14・19・27・31・42・63・85・98・113・133・145・146・171・185
360	飯山城	磐梨	岡山市東区瀬戸町瀬戸	『日本城郭全集15』には飯山の頂上に築かれ、「江尻城」の山城として岡氏の一族が居城していたと記す。	173
361	鉄砲山砦	磐梨	岡山市東区瀬戸町瀬戸	『日本城郭全集15』には、JR瀬戸駅前の山が「鉄砲山」と呼ばれており、頂部の平坦地はかなり広いと記す。また、江戸時代、この山上に番兵を置き、大筒をすえて池田家の見張所に使用されたとある。	173
362	片山城	磐梨	岡山市東区瀬戸町南方	『日本城郭全集10』によれば、片山則継が築城、その後、難波十郎兵衛が居城したと記す。	14・136・172
363	藪ヶ鼻砦	磐梨	岡山市東区瀬戸町南方	『日本城郭全集10』によれば、「南方城」の東麓の竹藪で囲まれた小丘に位置し、安藤権現、嫡男盛之助が居城したと記す。	14・172
364	飯山城	磐梨	赤磐市石	近世地誌類では確認できないが、『改修赤磐郡誌』に記述がある。赤磐市石の推定地を踏査した結果、段状を呈する平坦地が認められたが、遺構は未確認。	42・90・123・171・172
365	古城山	磐梨	赤磐市稲蒔	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』によれば、磐梨郡稲蒔村の北側に城主不詳の城があったと記す。「稲蒔城」か「上田城」か未周知の城の可能性はある。	1・3・9
366	小瀬木城	磐梨	赤磐市小瀬木	『日本城郭全集15』によれば、「保木城」の北にある向山の頂上に所在したとある。	173
367	壁城	磐梨	和気町加三方	『改修赤磐郡誌』によれば、和気郡佐伯本村加三方三宅の上、上ヶ谷に所在、『日本城郭全集15』では、「田尻城」の東方に位置し、天文年間に宇喜多家臣の湯浅与左衛門尉時春が築城、『和気郡史資料編下巻』では、加三方の加部の上ヶ谷にあったなどと記す。	42・87・153・173
368	澤原源蔵左衛門宅	磐梨	赤磐市沢原	『東備郡村誌』には磐梨郡沢原村に澤原源蔵左衛門の屋敷が所在したことが記載され、『改修赤磐郡誌』にも同様の記述が見られる。	12・42

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
369	田原城	磐梨	和気町田原上・田原下	『岡山市史第2』によれば、磐梨郡石生村田原に浮田土佐が居城したと記す。なお、『備前記』に磐梨郡田原上村の北側に「古城山」があり、宇喜多土佐守が居城したとある。なお、方角の「北」が「南」の誤記ならば、同城は「西山城」の可能性が高い。	1・81・133・136
370	遠見山	磐梨	和気町田原上	『改修赤磐郡誌』によれば、和気郡石生村田原上遠見場に天神山攻撃の際、宇喜多方の陣場であったと記す。	42・57
371	大成城	磐梨	和気町父井原	『改修赤磐郡誌』によれば、和気郡佐伯本村父井原大成の向山に設備はないが、「開」や「土畔」より推定したと記す。『日本城郭全集10』では、向山山頂に築かれ、本丸跡に石垣の一部と井戸跡がわずかに残ると記す。岡左衛門尉小六政敏居城とする。	42・87・153・172
372	長船陣	磐梨	和気町父井原・田原上	『改修赤磐郡誌』によれば、和気郡佐伯本村父井原国山に所在したとあり、『日本城郭全集15』では、「仕出ヶ鼻城」の南麓の丘上に所在し、宇喜多家臣の長船紀伊守が居城したと記す。推定地の踏査でははっきりとした加工の跡は見られないとする。畑和良情報提供。	42・57・87・173・179
373	国山城	磐梨	和気町父井原・田原下	『改修赤磐郡誌』の「仕出ヶ鼻城」の記載によれば、和気郡佐伯本村父井原国山に所在し、天神山攻撃の際の宇喜多方の陣場とある。『日本城郭全集10』には、国山山頂に所在した「仕出ヶ鼻城」の別称が「国山城」とする記載がある。『佐伯町史』には「仕出ヶ鼻城」が父井原に所在とある。	42・57・172
374	仕出ヶ鼻城	磐梨	和気町父井原・田原下	『改修赤磐郡誌』によれば、和気郡佐伯本村父井原国山に天神山攻撃の際、宇喜多方の陣場であったと記す。	42・57・87・153・172
375	開	磐梨	和気町父井原	『改修赤磐郡誌』では、「矢口城」南東の平地に小字「開」・「開下」などの城館関連地名があると記し、『佐伯町史』でも同様の記載がある。ただし、地名の語源は判然としない。	42・57
376	矢口城	磐梨	和気町父井原	近世地誌には記録がなく、『改修赤磐郡誌』に記述が見られる。推定地の尾根筋を城の構造の記述に基づき踏査を実施した結果、当地は前方後円墳が築造された場所と判明した。よって、「矢口城」は金子山から北東へ延びる標高70mの丘陵上に築かれた全長40mの前方後円墳（矢口古墳）と同じと考えられ、後円部の背後は溝を掘削して丘陵と切り離されている。城館関連遺構は未確認。畑和良教示。	42・57・87・90・153・171・172
377	古城山	磐梨	和気町米沢	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』によれば、磐梨郡頭村に「古城山」が所在し、『備陽記』は宇喜多土佐が居城と記す。『赤磐郡誌』には、赤磐郡佐伯本村の太王山本久寺は、宇喜多土佐守の居城を改造して建立したとする元禄4(1687)年の棟札銘を掲載しており、これにしたがえば、同城は本久寺と同じ場所に存在していたと考えられる（文献113）。	1・3・9・14・113

和気郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
378	安達修理助宅	和気	備前市伊部	『東備郡村誌』によれば、和気郡伊部村に「たい山城」城主の安達修理助の屋敷が所在したとある。	12
379	宇喜多別館	和気	備前市浦伊部	『東備郡村誌』によれば、和気郡新田庄に高松城の戦いの際、宇喜多直家が建てた羽柴秀吉用の館であり、今の大門はその時のものとする。記載内容から備前市浦伊部の「法悦城」・「伝太閤門」を指すと思われる。	12
380	古城山城	和気	備前市浦伊部	『和気郡史資料編下巻』によれば、「上の山」といい、備前市浦伊部の北側に所在し、「たい山城」と同じ山塊にあってその出塁かと記す。この記述から「茶臼山城」の可能性が高い。	87・136
381	古城山	和気	備前市香登本	『備前記』によれば、和気郡香登本村の北方に川本左衛門が居城したとあり、『備陽記』にも同一記載がある。なお、ここに「熊山城」の記載もあることから、これとは別城と判断した。	1・3
382	古城山	和気	備前市野谷	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』によれば、和気郡野谷村の良（東北）側に所在したと記す。	1・3・9・87

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
383	鶴山城	和気	備前市畠田	『備前記』・『備陽記』には和気郡畠田村の村良（北東）に「古城」、また、和気郡香登西村に「鶴山古城山」、『備陽国誌』には和気郡畑田村に「鶴山城」が所在したと記す。この3書は城主不詳。『吉備温故秘録』には香登本村の南に浦上宗久が「鶴山城」に居城と記す。『撮要録』には和気郡畑田村に城主不詳の「丸山城」が所在したと記す。『岡山県通史上編』では和気郡鶴山村畠田の「鶴山古城」、『日本城郭大系13』では備前市畠田の「鶴山城」で詳細不明と記す。当地は国史跡丸山古墳の墳丘を曲輪として利用したものと想定できるが、遺構は未確認。別称丸山城。	1・3・5・9・11・27・31・87・121・136・171
384	三石城包圍陣	和気	備前市三石	『備前軍記』によれば、永正16(1519)年、赤松政村が再度「三石城」を攻め、播州勢が三石の四方に陣取って遠攻めしたと記す。	177
385	八木山城	和気	備前市八木山	『備前記』・『備陽記』に「古城山」の記載がある。備前市八木山に所在した故事来歴に基づき推定地を踏査したが、遺構は未確認。	1・3・5・9・11・87
386	馬ころび山城	和気	備前市吉永町金谷	『和気郡史資料編下巻』に記載がある。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	87
387	壘墟	和気	備前市吉永町金谷	『東備郡村誌』に「壘墟」と記載がある。和気郡金剛庄釜谷邑に城館が2か所あったと記すが、将の姓名は不明とする。	12
388	壘墟	和気	備前市吉永町金谷	『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、和気郡金谷邑（「釜谷邑」とあるが誤り）に城主不詳の「壘墟」が2か所所在したとある。	9・12
389	鳥ヶ成城	和気	備前市吉永町都留岐	和気郡大股村に『備陽記』には、明石掃部全職が居城の「鳥カナル古城山」、『備陽国誌』には明石大和が居城の「鳥がなる城」、『吉備温故秘録』には明石大和守景行が居城の「鳥がなるの城」、『撮要録』には明石掃部が居城の「鳥ヶ鳴山城」、『東備郡村誌』には明石大和守景行あるいは明石飛騨が居城の「鳥がなる壘」が所在したとある。一方、『岡山県通史上編』、『日本城郭大系13』では記載はなく、明石大和の居城した城としては、備前市吉永町都留岐の「大股古城」を記す。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	3・5・9・11・12・85
390	櫻城	和気	備前市吉永町和意谷	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』によれば、和気郡櫻村に所在したとあり、後2者には村の南側と記す。『吉永町史通史編2』は「櫻城」と呼称している。	1・3・9・85
391	桜丸砦	和気	備前市日生町寒河	『日生の気象と地名の伝承』によれば、児島高德勢が築いた砦と記す。真尾鼻北側の周辺か。	189
392	天狗丸砦	和気	備前市日生町寒河	『日生の気象と地名の伝承』によれば、児島高德勢が築いた砦と記す。天狗山山頂周辺か。	189
393	御所垣	和気	備前市日生町日生	『日生の気象と地名の伝承』によれば、平家の公達か屋島から逃れて居を構えた場所と記す。鴻島の亀の浦周辺か。	189
394	安養寺陣	和気	和気町泉	『備前軍記』によれば、永正16(1519)年、赤松政村が再度「三石城」を攻めて、播州勢が遠攻めするだけになった際、宇喜多和泉守能家が和気郡新田庄安養寺に陣取り、「三石城」を包囲している播州勢の背後を討とうとする情報が寄せ手の小塩勢に伝わったと記す。	177
395	大田原備前守晴清宅	和気	和気町大田原	『東備郡村誌』によれば、和気郡大田原に浦上宗景家臣の大田原備前守晴清の屋敷が所在したとある。	12
396	備前平四郎宅	和気	和気町大田原	『東備郡村誌』によれば、和気郡大田原に源義経郎党の備前平四郎の屋敷が所在したとある。	12
397	古城	和気	和気町衣笠	『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、和気郡森村に浦上宗景家臣の森中務が居城したとある。なお、『和気郡史資料編下巻』では、地形的に見て平城を想定しており、金剛川と初瀬川にはさまれた平地を本貫池と記す。実際には城館の位置を特定する根拠に欠けるが、「森土井」の地名が残る現和気駅南東部一帯（西森公民館周辺）がその候補地と考えられるが、市街化が著しいため、詳細は不明。	9・12・87
398	平松城	和気	和気町衣笠	『和気郡史資料編下巻』に記載がある。推定地を踏査したが、遺構は未確認。城主は恒次五郎左右衛門と記す。	87・177
399	陣屋ヶ鼻	和気	和気町田土	推定地の踏査では、尾根平坦部のみみられるのみで特段の加工は認められなかったとする（文献179）。畑和良情報提供。	179

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
400	糺田与次右衛門宅	和気	和気町田土	『東備郡村誌』によれば、和気郡河本邑に浦上宗景の家臣糺(糠=額)田与次右衛門の屋敷が所在したとある。	12
401	轅尾	和気	和気町田土	『改修赤磐郡誌』では矢田の小字名として取り上げている一方、『佐伯町史』は田土の地名としている。記載の誤りか。	42・57
402	開	和気	和気町田土	『改修赤磐郡誌』に田土に「開」という地名が2か所、そのうち1つには「鍛冶屋」という地名が近接して存在することを指摘している。ただし、地名の語源が判然としない。	42・57
403	本陣平	和気	和気町田土	推定地の踏査では、尾根平坦部がみられるのみで特段の加工は認められなかったとする(文献179)。畑和良情報提供。	179
404	日笠村陣	和気	和気町日笠上・日笠下	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15(1483)年12月、赤松側の「福岡城」が山名俊豊、松田元成に攻められた際、明石六郎兵衛が新田庄の野伏を率いて日笠村に布陣したと記す。	31・42・136・177・185
405	岡山城	和気	和気町日笠下	『吉備温故秘録』によれば、和気郡日笠下村の東方に所在したとあるが、現地不明のため未踏査。ただし、「岡」が「円」の誤記ならば、同城は「鹿婦前丸山城」の可能性が高い。	9
406	古城	和気	和気町福富	『吉備温故秘録』によれば、和気郡小中山村に浦上宗景家臣の森源七郎が居城したと記す。なお、『和気郡史資料編下巻』では、地形的に見て平城を想定しており、地名による推測を指摘している。実際には城館位置を特定する根拠に欠けるが、「広土井」・「土肥西」・「荒堀」の地名が残る現和気町体育館から和気駅南西付近が候補地と考えられるが、市街化が著しいため、詳細は不明。	9・87
407	鉄砲ノ段	和気	和気町矢田・田土	『改修赤磐郡誌』では矢田の小字名として取り上げている一方、『佐伯町史』は田土の地名としている。推定地の踏査でははっきりとした加工の跡は見られないとする。畑和良情報提供。	42・57・179
408	龍ヶ鼻城	和気	和気町矢田	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』では、和気郡龍ヶ鼻村に城主不詳の「古城山」が所在したと記す。「観音山城」と同一の可能性もある。	1・3・9・87
409	明石宗訥宅	和気	和気町吉田	『東備郡村誌』によれば、和気郡吉田村の働に明石宗訥(掃部の伯父または右近の伯父)の屋敷が所在したとある。	12

御野郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
410	根城	御野	岡山市北区	『和気綱』によれば、御野郡所在の記載がある。	2
411	八幡山城	御野	岡山市北区伊福町	『和気綱』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』に御野郡別所村(上伊福村)に所在した城で、中村弥右衛門が居城したとの記載がある。別称南天寺の城。	2・3・5・9・11・12・27・31・33・41・171・177
412	上中野城	御野	岡山市北区上中野1丁目	『備陽記』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』によれば、御野郡上中野村に前田越前守が居城したと記す。推定地は関連地名をもとに包蔵地として周知されるが、遺構は未確認。	3・9・11・12・79・108・133・171
413	北方ノ構	御野	岡山市北区北方1丁目	『東備郡村誌』によれば、御野郡北方村に「金間山城」という人物がいたと記す。『岡山市史第2』では「北方ノ構」と称す。推定地を踏査したが、宅地化が著しく、遺構は未確認。	12・27・31・84・133・171
414	網浜ノ熊城	御野	岡山市北区船頭町	『岡山市史第2』によれば、旭川西岸の妙勝寺に立地し、阿比六郎なる人物の屋敷が所在したと記す。ただし、踏査の結果では、遺構は未確認。別称網濱城・熊城。	31

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
415	高柳城	御野	岡山市北区高柳東町	『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』によれば、御野郡高柳村に中島某または中島(村)左馬頭が居城したと記す。推定地の「北の丸」・「城下」・「中の丸」という地名をもとに踏査するも、遺構は未確認。	1・3・5・9・11・12・27・31・41・42・79・82・97・108・133・136・171・177
416	古城	御野	岡山市北区田中	『備陽記』・『吉備温故秘録』・『撮要録』によれば、御野郡田中の村中に城主不知の「古城」があったとする。	3・9・11
417	里民城	御野	岡山市北区田中	『東備郡村誌』によれば、御野郡西野田庄田中村に誰の城館であったか不明であるが、当地に存在したとの記載があった。417「古城」と同一か。	12
418	牧石陣	御野	岡山市北区玉柏	『備前軍記』・『備前三石城史の研究』などによれば、明応6(1497)年、浦上宗助がここに陣を据えたが、敗北により、その後、松田元勝が陣取ったと記す。	22・31・42・79・136・177・187
419	とつつき城	御野	岡山市北区津島・津高	『和気綱』によれば、城主不詳の「とつつき城」が所在したと記す。なお、とつつきがとつき(都月)の誤字ならば、「半山山城」の可能性も考えられる。	2
420	遠藤河内守邸	御野	岡山市北区津島東1丁目	『岡山市史第2』によれば、岡山市津島字江道に遠藤河内守が居住したと記す。	12・31
421	野田城	御野	岡山市北区野田1～5丁目	『中国兵乱記』によれば、御野郡「野田城」の城主野田大炊助が、浦上遠江守に備中勢と内通を疑われて在国できないと、備中国服部郷に逃げきて、祢屋七郎兵衛を頼ったと記す。	79・155
422	笠井山陣	御野	岡山市北区畑船	『備前軍記』には、文龜3(1503)年、宇喜多能家が上道郡に打ち出て陣を張ったのに対し、松田元勝が御野郡笠井山に陣取ると記す。	31・177
423	甲斐川城	御野	岡山市北区福島1丁目	『和気綱』では御野郡の住吉、『備陽国誌』では同郡福島あたりに所在と記す。『岡山市史第2』では旭川の河口近くの海陸の要衝にあたと記す。『太平記』第16巻「西国蜂起官軍進発事」には、石橋左衛門佐を大将として「三石」・「甲斐川」の2か所に城を構え、海陸を支えたとある。	2・5・31・50・148
424	万成城	御野	岡山市北区万成東町	『日本城郭全集10』によれば、現在は採石により消滅しているが、万成峠の西に「城の段」と呼ばれる小丘があったとされ、鎌倉時代に江国十郎左衛門時重が城を築いたと記す。	172
425	狼の城	御野	岡山市北区三野本町・津島・津島笹が瀬	『東備郡村誌』に津高郡津島郷津島邑に三野邑より笹ヶ瀬の上まで処々多く認められると記す。半山山山塊の複数の城を指すか。別称とつつき城の城。	12
426	西川原城	御野	岡山市中区西川原	『備陽国誌』では、近藤因幡守が居城したと記す。『岡山市史第2』が記す推定地の「城跡」・「城前」・「城の後」という地名をもとに踏査するも、遺構は未確認。	5・27・31・64・84・97・108・171
427	西川尻陣	御野	岡山市南区浜野1～4丁目	『太平記』第16巻「備中福山合戦」によれば、和田備後守範長、子息三郎高德、佐々木の一党が、足利側が船より上陸することを聞いて、「西川尻」に陣取ったと記す。西川は旭川を指す。『岡山市史第2』は「甲斐川城」と同一との記述がみられる。	31・148
428	浜野構	御野	岡山市南区浜野1丁目	『岡山市史第2』によれば、旭川西岸の松寿寺に立地し、多田頼貞なる人物の屋敷と伝わると記す。ただし、踏査の結果では、遺構は未確認。	31

上道郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
429	平井城	上道	岡山市中区赤坂南新町	『備陽国誌』・『東備郡村誌』には上道郡平井村に所在した城の記載がある。また、『備陽国誌』・『東備郡村誌』では平井助之進が、『吉備温故秘録』では平井右兵衛尉家兼、平井助之進光信が、『岡山県通史上編』では平井習之進が居城したと記す。推定地の1つである網浜茶臼山古墳周辺を踏査したが、遺構は未確認。	5・9・12・27・31・33・41・42・59・82・133・136・171・177
430	徳良古城	上道	岡山市中区門田屋敷	『備前記』によれば、門田村の北側に宇喜多河内守が居城したと記す。ただし、城主名から「徳倉(良)城」のことを指している可能性がある。	1
431	古城山	上道	岡山市中区門田屋敷	『備陽記』によれば、門田村の内、上道郡徳吉村の北側に宇喜多直家の家臣宇喜多河内守が居城したと記す。ただし、城主名から「徳倉(良=吉)城」のことを指している可能性がある。430「徳良古城」と同一か。	3
432	段原砦	上道	岡山市中区祇園	『中国兵乱記』によれば、永禄7(1564)年、「備前龍口城へ備中侍大将加勢附討死の事」の記載で、「龍の口城」の守りの構えの1つとして記す。	155
433	国富城	上道	岡山市中区国富2丁目	上道郡国富村に、『備陽記』では国富左エ門佐、宇喜多直家、『備陽国誌』では国富源右衛門、一説に国富佐佐衛門佐または豊前、『吉備前秘録』では宇喜多直家、『吉備温故秘録』では国富左衛門佐、国富源左衛門、『撮要録』では国富左エ門佐、与市元常、豊前、『東備郡村誌』には宇喜多の臣国富源右衛門が居城したと記す。操山西麓の丘陵頂部に立地し、頂部には平坦面があると考えられるものの、周辺の宅地化が著しく、踏査は困難であった。別称比丘尼山城。	3・5・6・9・11・12・27・31・33・41・108・133・171
434	税所屋敷	上道	岡山市中区さい東町2丁目	穰公会堂の北側に「税所」の小字名があり、当地が税所氏の平地居館と推定されたが、踏査では遺構は未確認。畑和良教示。	97
435	澤田要害	上道	岡山市中区沢田	『中国兵乱記』によれば、永禄4(1561)年、浦上宗景が「船山砦」を攻めるにあたり、「龍の口城」の最庄治部が備中勢に寝返った際、祢屋与七郎に攻撃の案内を申し出た2つの要害の1つ。「明禪寺城」を指すか。他の1つは「国富要害」。	136・155
436	四御神要害	上道	岡山市中区四御神	『中国兵乱記』によれば、永禄4(1561)年、浦上宗景が「船山砦」を攻めるにあたり、宍甘太郎右衛門、角南隼人が立て籠もった要害と記す。	136・155
437	清水城	上道	岡山市中区清水1丁目	『備陽国誌』では上道郡清水村に、『岡山県通史上編』では上道郡幡多村清水城の内に城館があったと記す。推定地の「城ノ内」・「城之内」という地名をもとに踏査するも、遺構は未確認。	5・27・59・64・108・171
438	難波城	上道	岡山市中区清水1丁目	『岡山県通史上編』によれば、上道郡幡多村清水に難波将監が居城したと記す。ただし、『備陽国誌』では上道郡清水村には1城の存在しか記されておらず、「清水城」との関係が判然としない。	5・27・41・59・64・171
439	脇田城	上道	岡山市中区賞田	『備陽国誌』・『東備郡村誌』では上道郡脇田村に城主不詳の城が所在とあり、後者には「龍の口城」の別堡と記す。また、『備前軍記』には、明応6(1497)年、浦上宗助が籠もった「龍の口城」に対して、松田惣左衛門が陣取った「和意田」と同じ付近と思われる。小字「脇田山」にある安養寺周辺と小字「城山」にある吉備高島宮周辺の踏査を行ったが、後世の開墾による地形変化が及んでおり、遺構は未確認。	5・12・31・42・64・136・177
440	高屋陣	上道	岡山市中区高屋	『備前軍記』によれば、明善寺合戦の際、三村元親が「沼城」から「明善寺城」の西の「小丸山」に進攻し始めたのに対して、宇喜多直家が明石飛騨、岡剛介を前衛として待機させた陣と記す。	31・177
441	土田城	上道	岡山市中区土田	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』によれば、上道郡土田村に「十郎殿陣」という城主不詳の城があったと記す。『東備郡村誌』では、平家物語に登場する国守十郎藏人の城かと記す。	5・9・12・108
442	古城山	上道	岡山市中区徳吉町1丁目・2丁目	『吉備温故秘録』には、上道郡徳吉の北に城主不明の「古城山」があったとする。430「徳良古城」・431「古城山」と同一か。	9
443	小丸山陣	上道	岡山市中区原尾島4丁目	『備前軍記』によれば、明善寺合戦の際、宇喜多直家が明善寺山の西麓に陣取った場所と記す。三村元親は「明善寺城」の中軍の戦敗を知り、この陣に進攻し始めたとする。	31・177

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
444	円山城	上道	岡山市中区円山	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、上道郡円山村に所在した寺尾(井)(高尾)左衛門が居城したと記す。推定地の盛徳院周辺を踏査したが、遺構は未確認。	5・9・12・ 27・31・ 41・42・ 59・82・ 133・171・ 177
445	湯迫城	上道	岡山市中区湯迫	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』によれば、弥延大和守が上道郡湯迫村に居城したと記す。推定地を踏査したが、段状の地形改変が認められるものの、遺構は未確認。ただし、所在を示す中世文書あり。	1・3・9・ 31・42・ 64・79・ 94・108・ 171・187・ 190
446	茶白山城	上道	岡山市東区浦間	『備前記』・『備陽記』に「浦間村 村南二茶白山古城アリ」、『吉備温故秘録』に「茶白山城 浦間村の南にあり 城主不知」の記述が見られ、国史跡の浦間茶白山古墳がこの城に比定されると考えられる。遺構は未確認。別称茶白山古城。	1・3・9・ 11・136・ 155
447	築地山陣	上道	岡山市東区草ヶ部	『岡山市史第2』の「讃岐松田系譜」によれば、永正11(1514)年、浦上氏・宇喜多能家の大軍が、「金川城」を攻めるため福岡に集まっていることを松田元隆が知り、松田勢を3手に分けた1陣と記す。	31
448	古津山端陣	上道	岡山市東区古都宿	『備前軍記』によれば、永禄10(1567)年、三村元親の「禪寺城」攻めに対して、宇喜多直家が「沼(亀山)城」から出陣した際の5段配置の本陣が「古津の山はな」に置かれたと記す。	136・177
449	穴甘山城	上道	岡山市東区穴甘	『岡山県通史上編』によれば、上道郡古都村に所在した穴甘与左衛門または兵衛が居城した城の記載がある。また、『備前軍記』には、文龜2(1502)年、宇喜多和泉守が将となり、東川(吉井川)を超えて進軍したのに対し、松田元勝が家臣の横井、大村、伊賀、佐藤らを将として、穴甘村の上に陣取ると記す。推定地である山王山山塊周辺を踏査したが、穴甘山王山古墳や祠が認められるものの、遺構は未確認。	26・27・ 31・42・ 60・64・ 94・97・ 130・171・ 177
450	本城山城	上道	岡山市東区西祖	『日本城郭全集10』の記述にしたがえば、吉井川右岸の妙見山山塊の南側に位置する共同墓地が所在した低丘陵がこれに該当する。宇喜多興家の隠居所であったため「隠居所」・「隠居館」とも呼ばれたと記す。推定地を踏査したが、宇喜多直家生母の墓とする五輪塔があるものの、遺構は未確認。ただし、この記載は「福岡城」の伝承の誤解の可能性もある。	172
451	竹原城	上道	岡山市東区竹原	『東備郡村誌』には上道郡竹原庄竹原に所在し、新庄助之進が居城したとあり、『岡山県通史上編』にも同様の記載が見られる。「新庄山城」と同一の可能性が有る。	12・27・ 59・60・ 136・172
452	馬路山陣	上道	岡山市東区竹原	『岡山市史第2』の「讃岐松田系譜」によれば、永正11(1514)年、浦上氏・宇喜多能家の大軍が、「金川城」を攻めるため福岡に集まっていることを松田元隆が知り、松田勢を3手に分けた1陣と記す。	31
453	楢原村陣	上道	岡山市東区楢原	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15(1483)年、山名俊豊、松田元成が「福岡城」を攻める際、松田側の山名俊豊を初め、安芸・出雲・伯耆・石見国からの加勢が、吉井川の西の楢原に布陣したと記す。なお、山名俊豊は楢原の東南のある小山(「火鉢城」=「大日幡山城」)の本陣に入る。	31・42・ 177・185
454	奈良部城	上道	岡山市東区西平島	『東備郡村誌』では「新庄山城」を比定している。一方、最近の研究では、亀山城から東方に約200m離れた岡山市東区西平島字楢部に平城が存在していたと考えられている。同所を踏査した結果、同所は3つの微高地に分かれ、それぞれに地形改変が認められる。別称奈良部山城跡。ただし、所在を示す宇喜多氏旧臣の記録あり。畑和良教示。	12・27・ 30・31・ 34・42・ 60・108・ 115・130・ 133・136・ 172・177・ 188
455	古城山	上道	岡山市東区南古都	『備前記』と『備陽記』に「古城山」と記載。上道郡南古都村の東に城があったとする。	1・3

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
456	王子山城	上道	岡山市東区百枝月・内ヶ原	『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』によれば、上道郡内ヶ原村もしくは百枝月村に所在した河本某（左近進武政）が居城した城が所在したとある。推定地である王子ノ鼻周辺を踏査したが、社寺（王子宮）のほか城館は未確認。別称王子カ古城・王子鼻城・王子ヶ鼻古城山。	1・3・9・11・12・27・59・142・171・172
457	矢津砦	上道	岡山市東区矢津	『備前軍記』・『宇喜多戦記』などによれば、文亀2（1502）年、宇喜多能家に対して松田元勝が防いだ、永禄10（1567）年、明善寺合戦で三村元親が宇喜多直家の沼城を攻略するため経由した城などとして記される。	31・59・79・94・136・155・177
458	吉井村北山下陣	上道	岡山市東区吉井	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15（1483）年、「福岡城」が山名俊豊、松田元成に攻められた際、松田側の上野土佐守らの備中勢が吉井村の北の山麓に布陣したと記す。	31・42・60・177・185
459	吉井村山陣	上道	岡山市東区吉井・瀬戸町肩脊	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15（1483）年、山名俊豊、松田元成が「福岡城」を攻める際、松田元成らが吉井村の山に布陣したと記す。「吉井城」・「城ヶ辻城」などがそれらに該当すると思われる。	19・31・42・177・185

邑久郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
460	邑久郷城	邑久	岡山市東区邑久郷	『備陽記』・『備陽国誌』・『東備郡村誌』には邑久郡邑久郷村に所在した古城、『吉備温故秘録』には、郷岸寺城と記し、『備陽記』を除いて宇喜多（浮田）五郎左衛門が居城とある。『西大寺の城跡』によれば、岡山市東区邑久郷に所在した「紅岸寺城」が西方の山裾部に所在したと記し、「邑久郷城」が本城、「紅岸寺城」が出城の関係をもつと推測している。ただし、当地は山自体が土取りのため消滅しており、遺構は未確認。畑和良教示。	3・5・9・12・27・31・34～36・42・82・130・133・136・171・172・177
461	紅岸寺城	邑久	岡山市東区邑久郷	『吉備温故秘録』によれば、邑久郡邑久郷村に所在した宇喜多五郎左衛門が居城した「紅岸寺城」の記載がある。『撮要録』には、宇喜多家の「郷岸寺」と記す。推定地の紅岸寺跡は頂部に堂・祠・墓地や畑などの平坦地が見られるが、遺構は未確認。宇喜多氏の菩提寺であり、池田光政の寺社整理により廃寺となる。絹本著色宇喜多能家像（国重文）が奉納されていた。なお、近世地誌類で見られる「邑久郷城」とは別城と考えたほうがよいとする見方もある。畑和良教示。	3・5・9・11・12～27・31・34～36・42・82・130・133・136・171・172・177
462	古城山	邑久	岡山市東区邑久郷	『備陽記』によれば、邑久郡邑久郷村の東西に城主不詳の「古城山」が所在と記しており、同村には城が2か所所在したことになる。なお、同所にはいずれも宇喜多氏に関する記述はない。仮に「紅岸寺城」と「邑久郷城」が別城で、「紅岸寺城」が現在の紅岸寺跡に、「邑久郷城」が紅岸寺跡西方の山裾部に所在したのであれば、「紅岸寺城」は村東、「邑久郷城」は村西の城となる。一方、「紅岸寺城」と「邑久郷城」が同一城で、現在の紅岸寺跡に所在したのであれば、この城は村東、『備陽記』が指すこの古城は、村西の未周知の城となる。なお、『吉備前鑑』には、邑久郡邑久郷村で宇喜多氏由来の土地が島となり、「堀埋めたる跡あり」と記しており、同村内に平城もしくは館跡が存在した可能性がある。	3・7
463	神崎城	邑久	岡山市東区神崎町	『和気綱』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には邑久郡神崎村に所在した城主不詳の城の記載がある。『岡山県通史上編』には口碑では清水五左衛門が居城したと記す。『西大寺の城跡』の記す「竜王山の北続きの峰にある土石山の頂部」周辺の推定地を踏査したが地形改変が著しく、遺構は未確認。	2・5・9・12・27・35・36・130・171・172
464	和田屋敷	邑久	岡山市東区西大寺射越	『日本城郭全集10』によれば、上寺山の麓の児島高德の発祥地といわれる場所に立地すると記す。また、上寺山山頂部の余慶寺周辺に和田範長一族の居城・居館が存在したと伝わるが、推定地の踏査では遺構は未確認。一方、『岡山市史第2』・『倉敷市史第2冊』によれば、「射越城」から南に約200mに所在と記す。児島高德や和田範長ゆかりの土地と伝えられるが、推定地の踏査では遺構は未確認。畑和良教示。	31・50・168・172
465	下阿知城	邑久	岡山市東区下阿知	近世地誌類の記載はないが、『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』には城主不詳の城として記載がある。推定地を踏査したが地形改変が著しく、遺構は未確認。	27・35・36・130・171・172

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
466	鴻城	邑久	岡山市東区宿毛	『日本城郭全集15』によれば、宿毛集落の背後にある山頂部に羽納氏が築いた城と記す。別称蝙蝠城。	173
467	釜島城	邑久	岡山市東区西片岡	『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』によれば、岡山市東区西片岡周辺に所在と記す。天慶3(940)年、藤原純友が拠ったとある。524釜島城と混乱が見られる。	27・34～ 36・130・ 171・172
468	妙見山城	邑久	岡山市東区西片岡	『日本城郭大系13』では「大附城」の片岡氏の支城であり、一族の者が代々居城したとあり、『西大寺の城跡』では天津神社の約500m東方に位置したとする記載がある。伝承地は山ノ神山から東方に位置する山頂部にあたるが、後世の地形改変により遺構は未確認。	5・130・ 171・172
469	石原城	邑久	瀬戸内市牛窓町牛窓	近世絵図に「石原城」の記載があるが、所在地の特定できず。本蓮寺(瀬戸内市牛窓町牛窓)境内にある「石原但馬守藤原道高之碑」には石原但馬守藤原道高が「牛窓天神山城」の城主となり、本蓮寺の大檀那であったと記す。こうしたことから、「石原城」と「天神山城」とは同一の可能性も考えられる。ただし、同社寺とも遺構は未確認。	
470	牛窓城	邑久	瀬戸内市牛窓町牛窓	『和気絹』には城主不詳の「牛窓城」が所在、『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には、邑久郡牛窓村に鳥山左馬進(允)が居城、『撮要録』には鳥山左馬進が「上ノ山城」に居城したと記す。ただし、『岡山県通史上編』では「牛窓古城」として「紺浦城」・「天神山城」と同じとし、『日本城郭大系13』も所在地を邑久郡牛窓町紺浦としている。なお、地元の情報提供により、「牛窓城」城主の鳥山左馬丞が山城を構えたとする「城山」と呼ばれる推定地の山頂部周辺を踏査したが、遺構は未確認。	2・3・5・9・ 11・12・ 27・171
471	紺浦城	邑久	瀬戸内市牛窓町牛窓	『和気絹』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には邑久郡牛窓村に紺浦(山)城(紺の浦城)が所在したと記す。	2・5・9・ 12・27・36
472	天神山城	邑久	瀬戸内市牛窓町牛窓	『和気絹』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』には、邑久郡牛窓村に「天神山城」が所在したと記す。『東備郡村誌』には天神山として石原但馬守の「壘址」と記す。『日本城郭大系13』では記載がない。なお、本蓮寺(瀬戸内市牛窓町牛窓)境内にある「石原但馬守藤原道高之碑」には石原但馬守藤原道高が「牛窓天神山城」の城主となり、本蓮寺の大檀那であったと記す。こうしたことから、牛窓天神社及び本蓮寺周辺に所在した可能性も考えられる。ただし、同社寺とも遺構は未確認。	2・5・9・ 12・35・ 36
473	鹿忍城	邑久	瀬戸内市牛窓町鹿忍	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には鹿忍山(邑久郡鹿忍村)に城が所在したと記す。『岡山県通史上編』には記載がないが、『日本城郭大系13』では邑久郡牛窓町鹿忍に所在と記す。地元の情報提供により、推定地と伝わる御崎神社が建つ山頂部を踏査したが、遺構は未確認。	5・9・12・ 35・36・ 171
474	殿山城	邑久	瀬戸内市邑久町上山田	『邑久郡史上巻』に記載の「殿山城」にあたる。	36・37・ 38
475	殿山城	邑久	瀬戸内市邑久町佐井田	『岡山県通史上編』に記載の邑久郡本庄村佐井田の佐井七郎が居城した「殿山古城」、『日本城郭大系13』に記載の「殿山城」にあたる。	27・39・ 171
476	島広山城	邑久	瀬戸内市邑久町豊原・邑久町東谷	『宇喜多戦記』によれば、宇喜多直家に誅される時に島村貫阿弥が「島広山の城」の城主であったと記す。「砥石城」と同一か。	94
477	高尾城	邑久	瀬戸内市邑久町東谷	『備陽国誌』と『吉備温故秘録』には邑久郡長沼村に所在して、前書が島村豊後、後書が宇喜多管兵衛(勘兵衛)が居城とある。また、この2書では「高取山城」は「砥石城三町計西」と記す。一方、『東備郡村誌』には邑久郡長沼村に所在して高取備中や島村弾正貴則、島村豊後入道観阿弥が居城し、別称「高取山」・「高山」とある。また、『日本城郭大系13』では「高尾城」は岡山市東区長沼と瀬戸内市邑久町東谷の「高取山城」であるとし、『備陽国誌』や『吉備温故秘録』に記す「高取山城」は瀬戸内市邑久町豊原・東谷に所在した「砥石城」の出城とした。このように「高尾城」については、各文献の記載に混乱が認められる。	5・9・12・ 27・35・ 36・39・ 113・171
478	福谷城	邑久	瀬戸内市邑久町福谷	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』に記載の邑久郡福谷村所在の城にあたる。『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』にも同様の記載がみられる。	5・9・12・ 27・36・ 37・38・ 171

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
479	福中城	邑久	瀬戸内市邑久町福中	『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』に記載の邑久郡大山村の城にあたる。『岡山県通史上編』では、邑久郡福田村福中の「福中古城」として「大山村古城」ともいうと記す。『日本城郭大系13』では、邑久郡邑久町福中所在の「福中城」として詳細不明と記す。推定地を踏査したが、遺構は未確認。別称大山城。	9・12・27・35～39・171・173
480	上城	邑久	瀬戸内市邑久町福元	『邑久町史地区誌編』には、邑久町福元に城主不詳の城が所在したと記す。	39
481	白谷城	邑久	瀬戸内市邑久町虫明	『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』に記載の邑久郡裳掛村虫明の城主不詳の「白谷城」にあたる。	27・35～38・171
482	板屋瀬陣	邑久	瀬戸内市長船町八日市	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15(1483)年、福岡城が山名俊豊、松田元成に攻められた際、赤松側の長船右京亮、長船左京進が香々登新田の野伏を率いて「板屋瀬」に布陣したと記す。『改修赤磐郡誌』では「板屋瀬」は天王・八日市付近と記す。	42・177・185
483	津坂口の瀬陣	邑久	瀬戸内市長船町福岡・瀬戸内市邑久町豆田	『備前文明乱記』・『備前軍記』・『改修赤磐郡誌』によれば、文明15(1483)年、「福岡城」が山名俊豊、松田元成に攻められた際、赤松側の坂口五箇荘六箇郷の野伏が「津坂口の瀬」に布陣したと記す。『改修赤磐郡誌』では「津坂口の瀬」は福永・八丁付近と記す。	42・177・185

児島郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
484	麒麟城	児島	岡山市・玉野市・倉敷市	『中国兵乱記』によれば、天正3(1575)年、備前児島の「常山城」の上野隆式(上野隆徳)を攻めるため、宍戸備前が「麒麟城」に陣取ったとある。	136・155
485	島尾城	児島	岡山市・玉野市・倉敷市	『中国兵乱記』によれば、天正3(1575)年、備前児島の「常山城」の上野隆式(上野隆徳)を攻めるため、(穂田)元清が「島尾城」に陣取ったとある。	136・155
486	岡御前城	児島	岡山市南区阿津	『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には児島郡阿津村に所在した城の記載があるが、一部に「鼻面城」や「貝殻山城」との混乱が見られる。高島遠江守が居城か。	1・3・5・9・12・27・41・53・108・117・126・171
487	小串の別堡	児島	岡山市南区阿津	『東備郡村誌』に児島郡阿津村所在の記載がある。	12
488	鼻面城	児島	岡山市南区阿津	『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には児島郡阿津村に所在した城の記載があるが、一部に「岡御前城」や「貝殻山城」との混乱が見られる。高島遠江守が居城か。推定地である鼻面崎周辺を踏査したが、土取りが著しく遺構は未確認。別称花園山壘址・花皿山・花つら山・はなつら山。	1・3・5・9・12・27・53・108・126・171
489	高島林齋宅	児島	岡山市南区郡	『東備郡村誌』によれば、児島郡郡村に高島林齋(小串の高島一族)の屋敷が所在と記す。	12
490	陣山城	児島	岡山市南区宗津	『日本城郭全集15』によれば、「常山城」の北の山が陣山にあたり、常山合戦の陣地と伝えられると記す。別称宗津城。	173
491	宗津陣	児島	岡山市南区宗津	『岡山市史第2』によれば、常山合戦において、三村孫兵衛尉親成・孫太郎親宣が構えた陣と記す。	31・71・128・160・177
492	迫川陣	児島	岡山市南区迫川	『備前軍記』によれば、常山合戦において、三村孫兵衛尉親成・孫太郎親亮(宣)が構えた陣と記す。	31・128・160・177・188
493	寺山城	児島	岡山市南区迫川	『日本城郭全集15』によれば、通称寺山と呼ばれる丘の頂部の平坦地はかなり広く、宇喜多直家の属将高原重直が居城していたと記す。	173
494	彦崎陣	児島	岡山市南区彦崎	『備前軍記』によれば、常山合戦において、三村孫兵衛尉親成・孫太郎親亮(宣)が構えた陣と記す。	31・177・188

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
495	貝殻山城	児島	岡山市南区宮浦	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には児島郡阿津村、『備前記』・『備陽記』には児島郡宮浦村、『撮要録』では児島郡上山坂村などに所在したと記す。城主は『備陽国誌』では不詳、『岡山県通史上編』では高島遠江守などと記す。推定地を踏査したが、地形改変が著しく、遺構は未確認。別称貝柄山城・貝哥城・貝がら山城・貝カラ古城。	1・3・5・9・11・12・27・53・70・108・117・126・164・165・171
496	宇藤木陣	児島	玉野市宇藤木	『備前軍記』によれば、常山合戦において、浦兵部が構えた陣と記す。	128・160・177・188
497	秋葉山城	児島	玉野市北方	『東児町史』によれば、秋葉神社のある丘に城主不詳の城の記載がある。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	70・165
498	古城山	児島	玉野市小島地	『備前記』・『備陽記』によれば、児島郡小島地に城主不詳の「古城山」が所在したと記す。	1・3・69
499	丸山城	児島	玉野市下山坂	『備前記』・『備陽記』によれば、児島郡下山坂村に「丸山古城」が所在したと記す。推定地の長谷川が形成した河岸段丘上を踏査し、周囲より1段高くなっている畑を確認したが、土地改変がなされており、遺構は未確認。	1・3・70・164・165
500	田井古城	児島	玉野市田井4丁目・5丁目	『備前記』・『備陽記』には児島郡田井村の村東・西に名称・城主不詳の2城があり、『備陽国誌』もほぼ同じ記載がある。『吉備温故秘録』には児島郡田井村に「駿河城（するか山城）」と古城の2城が所在と記す。『東備郡村誌』には児島郡田井村に田井新左衛門信高が居城した1城の記載がある。『岡山県通史上編』では児島郡宇野町田井の「田井古城」の2城のうちの1城に、田井新左衛門信高が居城、『日本城郭大系13』では玉野市田井に城主不詳の「田井古城」があったと記す。このように「田井古城」については、各文献の記載に混乱が認められる。故事来歴に基づき推定地を踏査したが、遺構は未確認。	1・3・5・9・11・12・27・53・54・69・133・152・171
501	木ノ崎城	児島	玉野市田井5丁目	『玉野市史』に記載がある田井の城の崎にある「田井城」。推定地を踏査したが、団地造成により大規模に改変されており、遺構は未確認。	69
502	滝古城	児島	玉野市滝・広岡	『備前記』・『備陽記』には児島郡滝村の「古城山」と記す。『東備郡村誌』では児島郡滝村に4城が所在と記す（うち2城は「鍛冶山」・「寺上」と記す）。『岡山県通史上編』では児島郡荘内村滝に滝古城と称する2城があったと記す。『日本城郭大系13』では岡山市滝に所在したが詳細不明と記す。このように「滝古城」については、各文献の記載に混乱が認められる。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	1・3・12・27・53・69・171
503	玉古城	児島	玉野市玉5丁目	『備陽国誌』には児島郡玉村の城主不詳の「古城山」、『吉備温故秘録』には児島郡の城主不詳の「玉村城」、『東備郡村誌』には児島郡玉村の城主不詳の「古城」、『岡山県通史上編』では児島郡日比町玉の「玉の古城」が所在したと記す。推定地を踏査したが、遺構は未確認。	5・9・12・27・53
504	横田山城	児島	玉野市槌ヶ原	『東備郡村誌』には児島郡槌ヶ原村に「横田山城」が所在した記載があり、大崎村の「麦飯山城」も別に記載がある。『玉野市史』では玉野市横田所在の「横田城」とあり、大崎の「麦飯山城」と併記してある。よって、麦飯山城西峰にあたる別称「雨乞山城」と称する城を指す可能性が高い。	12・69
505	八幡山城	児島	玉野市八浜町八浜	『撮要録』によれば、児島郡八浜村に城主不詳の「八幡山城」が所在と記す。「両児山城」の可能性が高いが、同城の記載もあるため、当地と別の「八幡山城」が存在したことになる。現在、「両児山城」と呼ぶ北半部（神社のある場所）を指すか。畑和良教示。	11・31・136・155・177
506	伊賀栗之介宅	児島	玉野市東田井地	『備陽国誌』・『東備郡村誌』によれば、児島郡東田井地村に伊賀栗之介の屋敷が所在したと記す。	5・9・70・164

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
507	四宮城	児島	玉野市向日比1丁目・深井町	『備前記』・『備陽記』には児島郡利生村の「古城山」、『備陽国誌』には児島郡利生村の「地藏山城」が所在した記載がある。『吉備温故秘録』には児島郡日比に「地藏山城」が所在とあるが、地藏山が向日比か利生かの論があり、そのため城名も「日比」・「利生」というと記す。『撮要録』には利生村「古城」、『東備郡村誌』は地藏山の上の「古壘」と記す。『岡山県通史上編』では児島郡日比町和田に「四宮城」、『日本城郭大系13』では玉野市和田の「日比城」と記す。各文献は四宮宗清（雪）が居城とあるが、「四宮城」については、記載に混乱が認められる。推定地は工場敷地内のため未調査。別称地藏山城・日比城・利生城。	1・3・5・9・11・12・27・53・69・82・83・136・152・171・177
508	古城	児島	玉野市用吉	『撮要録』には、児島郡用吉村に從阿州山本四郎左工門 渡辺伊豆が居城した城が所在したと記す。個別に城館が存在する表現であるが、「常山城」と同一と考えられる。畑和良教示。	11
509	古城	児島	玉野市用吉	『撮要録』には、児島郡用吉村に戸川肥後が居城した城が所在したと記す。個別に城館が存在する表現であるが、「常山城」と同一と考えられる。畑和良教示。	11
510	古城	児島	玉野市用吉	『撮要録』には、児島郡用吉村に川島丹後が居城した城が所在したと記す。個別に城館が存在する表現であるが、「常山城」と同一と考えられる。畑和良教示。	11
511	井上城	児島	玉野市山田	『備前記』・『備陽記』によれば、児島郡山田村に「井上古城山」が所在と記す。『岡山県通史上編』では児島郡山田村上山田に井上彦六左衛門が居城とある。推定地を踏査したが、果樹園等により大規模に改変され、遺構は未確認。	1・3・27・53・69・83・152・165
512	三宅城	児島	玉野市山田	児島郡山田村において、『備陽国誌』には「古城山」、『撮要録』には山田村「古城」、『東備郡村誌』には「壘墟」が所在したと記す。『岡山県通史上編』では、児島郡山田村山田に「三宅城」が所在と記す。各文献は三宅源左衛門、同掃部などが居城とある。推定地を踏査したが、果樹園等により大規模に改変され、遺構は未確認。なお、「西田井地城」を指す可能性がある。畑和良教示。	5・11・12・27・53・69・83・152・165・171
513	壘墟・古城山	児島	倉敷市尾原	『備前記』・『備陽記』には「古城山」と記載。児島郡尾原村の南に鶯野某が居城したとある。『吉備温故秘録』には「古城山」と記載。児島郡尾原村の南に鶯野野某が居城したとある。『東備郡村誌』には「壘墟」と記載。鶯野某の城館としている。所在地からは「戸山城」の可能性もあるが、詳細は不明である。	1・3・9・12
514	木見城	児島	倉敷市木見	児島郡木見村において、『備前記』・『備陽記』には三宅源左工（衛）門尉行虎、または水澤和泉守が居城した「古城山」、『備陽国誌』には備後三郎高德が居城した「木見戸山城」、『吉備温故秘録』には水澤和泉守、一説に備後守高德が居城した「木見戸山城」、『撮要録』には三宅忠範が居城した「古城」、『東備郡村誌』には備後三郎高德が居城した「木見戸山城壘」と水澤和泉守が居城した「奥木見壘」の2城が所在したと記す。また、『岡山県通史上編』では「木見城山」に、『日本城郭大系13』では「戸山城」に、水沢氏が代々居城したと記す。このように「木見城」については、ほぼ、「戸山城」を指すと思われるが、各文献の記載に混乱が認められる。	1・3・5・9・11・12・27・53・133・161・171
515	原新左衛門宅	児島	倉敷市木見	『東備郡村誌』には「宅址」と記載。児島郡木見村の原新左衛門の屋敷としている。	12
516	古城山	児島	倉敷市児島味野山田町	『備前記』・『備陽記』によれば、児島郡味野村の村西に「古城山」があると記すが、確認されていない。祇園山・竜王山山塊方向に所在している可能性がある。	1・3
517	鵜石鼻城	児島	倉敷市児島通生・児島赤崎4丁目	『天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の築城動向（その二）』によれば、後世の削平により遺構の確認は困難であるが、城が築かれていたとの記載がある。	161
518	西五山城	児島	倉敷市児島唐琴4丁目	『天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の築城動向（その二）』によれば、竜王山の山頂部に位置し、一見すると城郭らしくないが、築城主張を持つ縄張りもみられるとの記載がある。	161
519	古城山	児島	倉敷市児島田の口	『備前記』によれば、児島郡田ノ口村の村東に「古城山」が所在したと記す。なお、『備前記』には同村南にあるとする「ガン山古城」が、『備陽記』では同村東にあると記され、混乱が認められる。	1・3

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
520	仙階山城	児島	倉敷市児島田の口	『天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の築城動向（その二）』によれば、仙階山の山頂部に位置し、一見すると自然地形のみで城郭らしくないが、築城情報を持つ縄張りが見られるとの記載がある。	129・161
521	田ノ口城	児島	倉敷市児島田の口5丁目	『天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の築城動向（その二）』によれば、後世の土採取により城郭遺構の確認は困難であり、遺構の考察には問題ありとの記載がある。	161
522	柳田城	児島	倉敷市児島柳田町	『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』によれば、児島郡柳田村に城主不詳の城が所在と記す。『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』もほぼ同様の記載がある。	5・9・12・27・53・171
523	山村城	児島	倉敷市児島由加	『備陽国誌』・『東備郡村誌』によれば、児島郡山村に城が所在と記す。『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』もほぼ同様の記載がある。城主不詳。『備前軍記』に記す、常山合戦で小早川隆景が陣取りした「山村」と同じか。	5・12・27・31・51・128・129・160・171・177・188
524	釜島城	児島	倉敷市下津井	『吉備前秘録』・『吉備温故秘録』では、児島郡下津井村の内海中の小島（「釜島」）のある倉敷市下津井に所在したと記す。天慶3（940）年、藤原純友が拠ったとある。467釜島城と混乱が見られる。	6・9
525	松島城	児島	倉敷市下津井	『備前記』・『備陽記』には「古城山」と記載。児島郡下津井村の巽（南東）にある「松島」に松島庄太夫が居城したと記す。『吉備温故秘録』では、児島郡下津井村の内海中の小島に松島庄太夫という者が居城していたとする。鷲羽山の沖合の「松島」のことか。	1・3・9
526	汐津三河宅	児島	倉敷市粒江	『東備郡村誌』には「宅址」と記載。毛利家の土汐津三河の屋敷としている。	12
527	三宅屋敷	児島	倉敷市林	『岡山市史第2』によれば、中村徳五郎著「児島高德」の終焉の地に関する異説として列挙している9つのうちの1つにあたる。ここは隠棲地及び墳墓があるとする。	12・31
528	広江城	児島	倉敷市広江	『岡山県通史上編』・『日本城郭大系13』によれば、倉敷市広江に城が所在と記す。	27・171

賀陽郡・津高郡

城館番号	城館跡名	旧郡	所在地	概要	文献番号
備中546	鎌倉山砦	津高賀陽	岡山市北区御津勝尾・北区山上	信倉山の北約1km地点、岡山市北区御津勝尾・北区山上に鎌倉山とされる場所があり、かつて土塁らしいものが確認されたとの情報に基づいて踏査したが、候補地が採石により消滅。なお、毛利氏家臣の記録からは、「勝尾山城」が当時鎌倉山城と呼ばれていた可能性もうかがえるとする。畑和良教示。	80・136・155・177・191

註

- 1 本表は中世城館関連文献のうち、「城」・「館」・「宅」・「屋敷」・「陣」・「砦」などの呼称で記載された事項を、悉皆的、網羅的に抽出したものを含み、本表からは「2 備前国中世城館跡一覧表」に記載した城館と確実に同一と考えられるものは除外した。
- 2 1の抽出作業において、「2 備前国中世城館跡一覧表」に記載した城館と同一であることが推測できる場合は、本表の「概要」にその内容を記した。また、一部の城館については、その推定地の踏査成果を記した。
- 3 本表に収載した城館（特に陣・砦など）が、必ずしもすべて有形的な構造物を伴っていたとは限らず、また、その实在自体の信憑性や周知の城館との関連性も今後は調査・研究を進める必要がある。

第3章 城館跡の概要

備前国は岡山県南東部を中心とした地域であり、北側は美作国、東側は播磨国、南側は讃岐国、西側は備中国に囲まれている。その地勢を北からみると、標高約 300 ～ 500 m で起伏が緩やかな平原が広がる吉備高原、標高約 300 m 以下の山々とその間を流れる中小河川により形成された谷底平野からなる瀬戸内丘陵、中国山地を源とする旭川と吉井川の沖積作用により形成された岡山平野、瀬戸内海に浮かぶ「吉備児島」と呼ばれる大島と複数の小島からなる。

当国は、713（和銅6）年の美作国成立以降、津高郡・赤坂郡・磐梨郡・和気郡・御野郡・上道郡・邑久郡・児島郡で構成されていた。これは現在の玉野市・備前市・瀬戸内市・赤磐市・和気町全域と岡山市の大部分と倉敷市・美咲町・吉備中央町の一部に該当している。本書では備前国に築かれた中世城館跡をこの8郡を基に掲載することとする。以下に各郡の概略を示す。

津高郡：岡山市北区・吉備中央町・美咲町の一部が該当する。地勢的には吉備高原・瀬戸内丘陵で構成される。北側は美作国、東側は赤坂郡、南側は御野郡、西側は備中国に囲まれ、東接する赤坂郡とは旭川、南接する御野郡とは笹ヶ瀬川、西接する備中国とは境目川などを境界とする。今回の調査では53か所の城館関連遺構を確認し、35城と1遺跡を本文に掲載している。

赤坂郡：岡山市北区・赤磐市の一部が該当する。地勢的には吉備高原・瀬戸内丘陵で構成される。北側は美作国、東側は磐梨郡・和気郡、南側は上道郡・御野郡、西側は津高郡に囲まれる。今回の調査では、49か所の城館関連遺構を確認し、37城を本文に掲載している。

磐梨郡：岡山市東区・赤磐市・和気町の一部が該当する。地勢的には瀬戸内丘陵・岡山平野で構成される。北側・西側は赤坂郡、東側は和気郡、南側は上道郡に囲まれ、東接する和気郡とは吉井川を境界とする。今回の調査では、29か所の城館関連遺構を確認し、13城を本文に掲載している。

和気郡：備前市・和気町の大部分と岡山市東区・赤磐市の一部が該当する。地勢的には吉備高原・瀬戸内丘陵で構成される。北側は美作国、東側は播磨国、南側は邑久郡、西側は赤坂郡・磐梨郡に囲まれる。今回の調査では、40か所の城館関連遺構を確認し、27城を本文に掲載している。

御野郡：岡山市北区・南区・中区の一部が該当する。地勢的には岡山平野で構成される。北側は津高郡・赤坂郡、東側は上道郡、南側は児島郡に囲まれ、東接する上道郡とは旭川を境界とする。今回の調査では、9か所の城館関連遺構を確認し、6城を本文に掲載している。

上道郡：岡山市中区の大部分と東区の一部が該当する。地勢的には岡山平野で構成される。北側は赤坂郡・磐梨郡、東側は邑久郡、南側は児島郡、西側は御野郡に囲まれ、東接する邑久郡とは吉井川を境界とする。今回の調査では、15か所の城館関連遺構を確認し、10城を本文に掲載している。

邑久郡：瀬戸内市全域と岡山市東区・備前市の一部が該当する。地勢的には岡山平野で構成される。北側は和気郡、東側は和気郡、南側は讃岐国、西側は上道郡、児島郡に囲まれる。今回の調査では、28か所の城館関連遺構を確認し、15城を本文に掲載している。

児島郡：玉野市全域と岡山市南区・倉敷市の一部が該当する。地勢的には現在と異なり独立した大島と複数の小島で構成される。北側は御野郡・上道郡、東側は邑久郡、南側は讃岐国、西側は備中国に囲まれる。今回の調査では、55か所の城館関連遺構を確認し、37城を本文に掲載している。

城館跡概要凡例

1 城館跡概要のタイトルに示した内容は、以下の通りである。

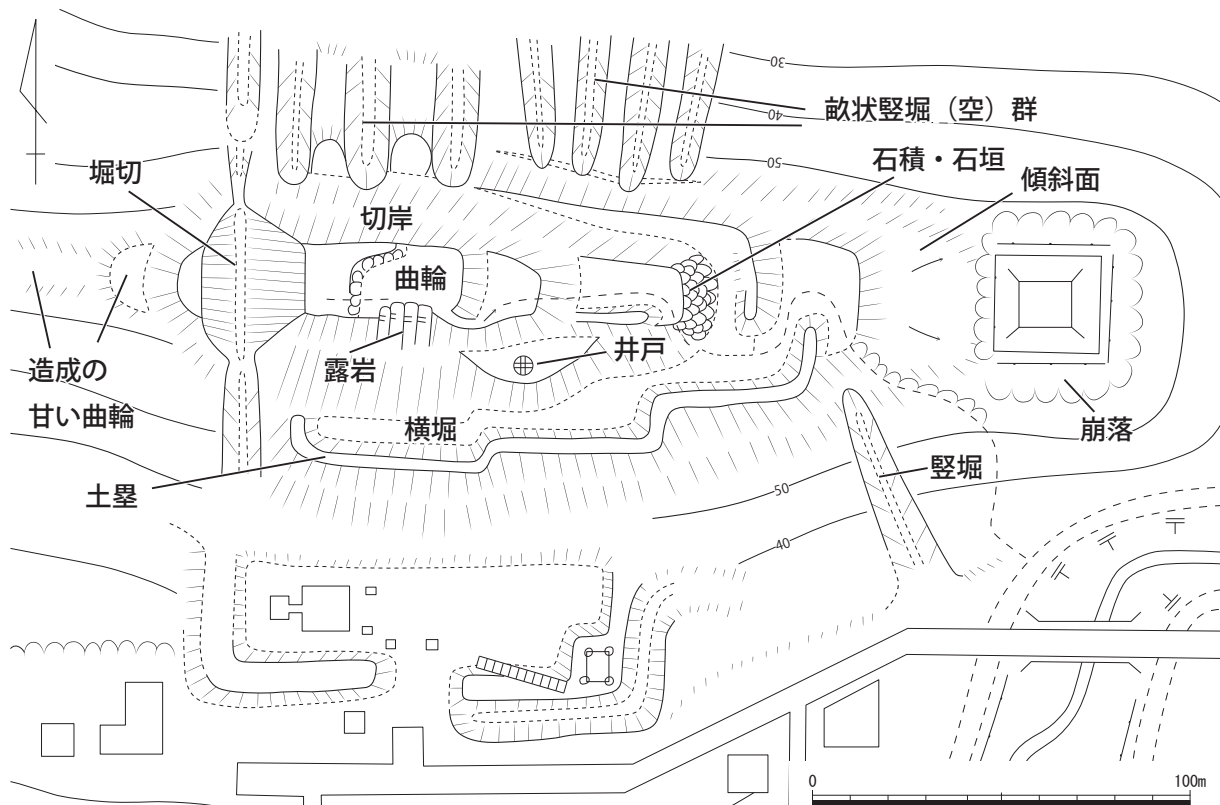
- ①城館番号 城館番号は第2章の城館跡分布図、及び一覧表の番号を記している。
- ②城館名 城館名は周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称を記している。
- ③所在地 所在地は現在の市郡町名並びに大字名の順に記している。複数の大字にまたがる場合は、「・」で大字名間を区分している。
- ④分布図番号 分布図番号は第2章の城館跡分布図で用いた、分布図の挿図番号を記している。右・左は地図の見開き右ページに記載してあるか、左ページに記載してあるかを示している。

①番号 ②城館名^{よみがな} ③所在地(大字、大字・大字) ④分布図番号

2 城館跡概要における以下のとおり、城館跡に関する情報を記している。

- 立地 城館跡に関する地理的情報を記す。他の城館との位置関係などについても記す。
- 概要 城館跡の縄張りに関する観察結果について記す。
- 文献・伝承 城館跡に関連する一次文献や参考文献の内容について記す。
あわせて執筆者の所見についても記載し、文責は文末の()内に示している。

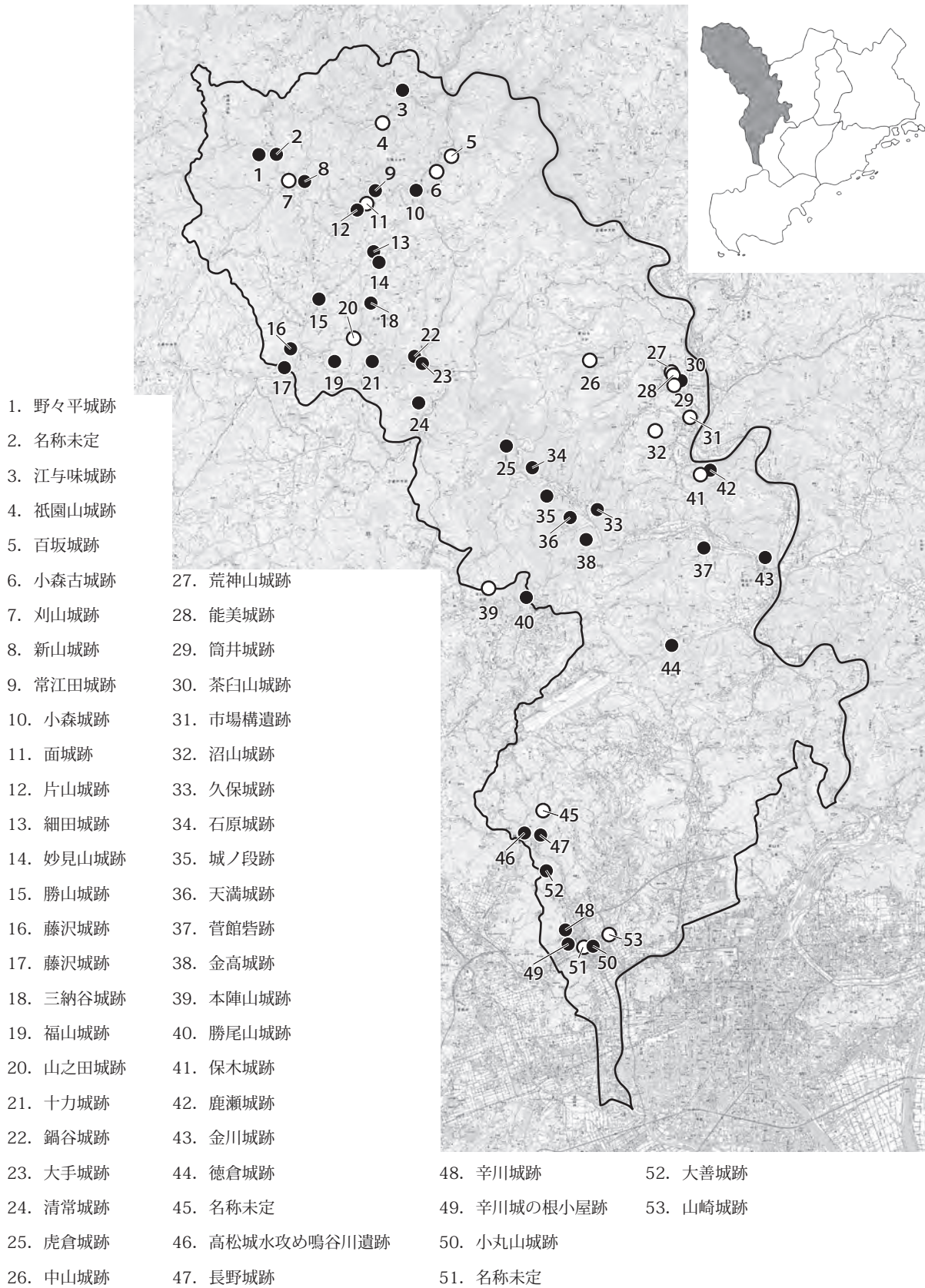
3 縄張り図に記載している遺構等の表現は下図のとおりであるが、製作者により異なる場合もある。



第3図 縄張り図凡例(『京都府中世城館跡調査報告書』を参考に作図)

※各節先頭ページ城館位置図の凡例：●解説文の掲載あり ○第2章の一覧表のみ掲載

第1節 津高郡



第4図 津高郡城館位置図

ののひら
1 野々平城跡

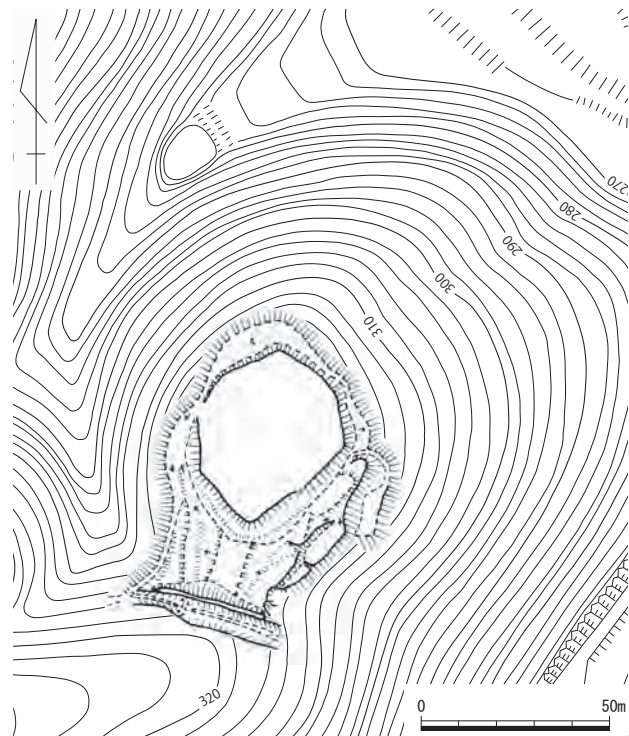
加賀郡吉備中央町福沢

地図 1 右

立地 猪木川右岸の標高約 320 m、比高 50 m の山頂部に立地し、野々奥池の南側にあたる。北・東の眺望が良好で、東約 700 m の丘陵に 2 名称未定の城跡が位置する。

概要 頂部に一辺 35 m の不整形の曲輪を配した単郭で、城域は東西 60 m、南北 80 m と中規模でも小さい。曲輪周縁下段は東西及び北側に帯曲輪を構える。南東側の斜面は小曲輪が 2 面ずつ上下に連なる。土塁を伴う堀切 1 条は主郭南側の尾根筋を区切り、深さは 3 m を超える。全体的に頂部の南側及び東斜面の守りを固めた縄張りといえる。

文献・伝承 『備陽記』・『吉備温故秘録』に森久村の村南に野々平城が所存する記述があるが、本城のことを示すかどうかの特定が難しい。(米田)



第 5 図 野々平城跡縄張り図 (1/2,000)

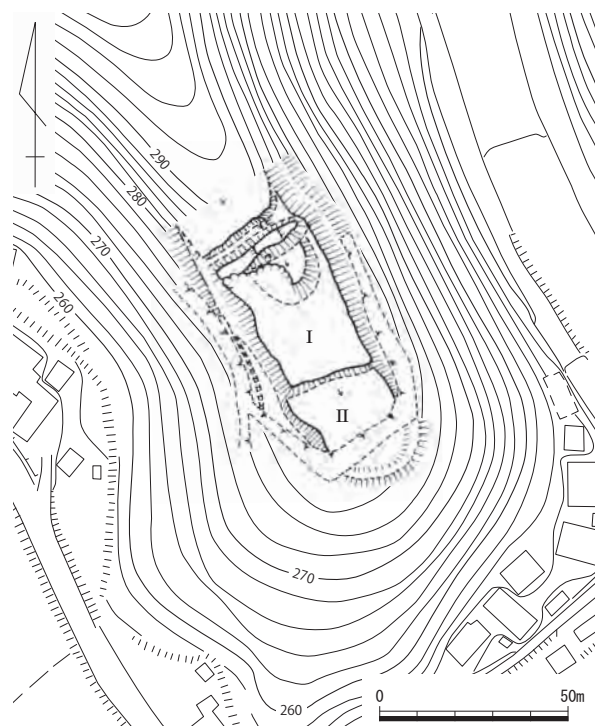
2 名称未定 加賀郡吉備中央町福沢

地図 1 右

立地 豊岡川と猪木川の合流点の北西側にある標高約 350 m、比高約 40 m の山頂部に立地し、西 700 m には野々平城跡が位置する。

概要 城域は東西 30 m、南北 70 m と小規模である。縄張りは尾根筋に連続する曲輪を中心に構成される。主郭となる曲輪 I は南北 33 m × 東西 22 m の長方形を呈し、縁辺がシャープである。曲輪 I 北端には 10 m 前後の小曲輪があり、土塁と接する。主郭の南東側は幅 23 m 程の方形の曲輪 II が接し、南東側は林道に削平されている。曲輪 I・II の北東斜面は急勾配である。曲輪の南西斜面には狭長の帯曲輪が 2 面あるが、大半は林道で削平されている。曲輪の北西側の尾根筋には浅い堀切 1 条と土塁があり、防御を固める。

文献・伝承 故事来歴は不明である。(米田)



第 6 図 名称未定縄張り図 (1/2,000)

立地 旭川と曾母谷川が合流するところの西側にある標高約 230 m の山頂に立地する。比高は 110 m である。北・東・南の各方向に対して眺望が開ける。旭川沿いの城跡としては備前最北端に位置し、美作との国境付近にあたる。近隣では旭川を挟んで東 5.4 km の山頂に一之瀬城跡が位置している。

概要 頂部の曲輪を中心とし、東側尾根に曲輪 4 面、北尾根に小曲輪 3 面を尾根筋に連ねて配置した連郭式の構造である。城域は東西約 140 m、南北約 130 m と大規模である。曲輪 I は 24 m × 15 m の規模で、北西隅・南西隅の 2 か所に西側の腰曲輪、北側中央へは北に延びる尾根に配置された小曲輪、北東隅には東側の尾根に続く曲輪へつながる出入口を設ける。また曲輪の東側は出入口付近が屈曲して 1 段下がる。東へ延びる尾根には、曲輪 I の東隣に 10 m × 5 m の長方形が曲輪が配置されている。それ以东は 35 m × 5 m の造作があまり狭長い曲輪、その南側に 1 段下がった同規模の曲輪がある。北へ延びる尾根には小曲輪が 3 面連なるが、北端は地形が削平されているため、防御施設の有無については不明である。頂部西側に堀切 3 条、南斜面に 5 本の堅堀を配置しており、西及び南側からの侵攻に対して堅守する。全体的に西及び南西側に対する防御を堀切や畝状堅堀群により堅固にし、他の方向は急な切岸で守る縄張りといえる。

文献・伝承 伝承では大野修理の居城とされるが、近世地誌類には城主等に関わる記述はない。

(米田)



第7図 江与味城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 新山城跡は豊岡川と畑枝川が合流するところの東側、旧新山小学校跡の北東隣にある標高約280 m、比高約40 mの山頂部に立地する。ここは美作国久米郡・真庭郡の境まで約3 kmと近い。

概要 城のある山は東側の山塊から南西へ延びた尾根先端が三又状に延びており、3つのそれぞれの尾根に縄張りがある。城域は東西約270 m、南北約120 mと大規模である。東側の尾根最頂部には約44 m×21 mの曲輪Ⅰがあり、主郭と考えられる。曲輪の周りは北半に帯曲輪を構え、北側及び南西側の尾根先端は小規模な曲輪を配置するほか、南側は絶壁となっている。帯曲輪の北東側には堀切があるほか、北側に開く谷の上方には計7本の竖堀があり、守りを固める。また、東側の尾根と中央の尾根がつながる鞍部では、南西に開く谷部に向かって斜面部に小曲輪を配置している。

中央の尾根には主たる曲輪3面と南北端にそれぞれ小曲輪がある。最頂部の曲輪Ⅱは一辺20 mの



第8図 新山城跡縄張り図 (1/2,000)

正方形に造作されており、一時期の中心曲輪であった可能性が考えられる。曲輪の北縁中央から西縁にかけては土塁が鍵状に設けられている。曲輪の南辺中央は虎口になっており、南西方向に延びる尾根中央には 40 m× 18 m の長方形の曲輪が続く。さらに南西方向の尾根先端には 42 m× 18 m の長方形を呈する曲輪が広がる。また中央の尾根と西側の尾根がつながる鞍部では、北東と南西にそれぞれ開く谷部の際を切岸状に造作している。

西側の尾根は頂部に一辺 30 m 程度の不整正方形の曲輪Ⅲがある。曲輪の北東隅は虎口があるほか、一部に土塁状の低い高まりがある。曲輪の南側斜面には帯曲輪と犬走りがある。また頂部の曲輪から南西側の尾根先端及び西側斜面にかけては小規模な曲輪状の平坦面が続くが、植林が著しいため、後世に改変による可能性も考えられる。

全体的に中央尾根と西側尾根に広がる縄張りは自然地形をうまく利用しており、単純な縄張りであることから古い様相を示す一方、東側尾根の縄張りは最頂部の曲輪を中心として南西及び北西に曲輪や帯曲輪が展開し、北側の谷部に畝状縦堀群を配置するなどの新相を示している。

文献・伝承 『備陽国誌』・『吉備温故秘録』によると、松田氏の麾下、新山民部あるいは兵庫を城主とし、宇喜多氏により破城したと伝える。また、天正七年極月二十五日付の吉川元春書状によると、毛利軍が備中の四畝城に加え、新山城を落城したとある（一次史料 179）。（米田）



写真3 東側尾根北側堀切（西から）



写真4 東側尾根北西側下段曲輪（南西から）



写真5 東側尾根北側谷畝状縦堀群（北から）



写真6 西側尾根上段曲輪土塁状（南西から）

立地 豊岡川左岸で合田川と合流するところの北西側にある標高約 260 m の山頂部に立地し、豊岡川沿いの東・南・北面の眺望に優れている。比高は約 80 m である。

概要 城域は東西 300 m、南北 130 m と一際大規模で、東側頂部の曲輪Ⅰを中心として構成される。山頂の尾根は東に延び、鞍部を挟んで2つの頂部に分かれる。尾根先端の東側頂部は約 80 m × 40 m の広大な曲輪Ⅰがあり、主郭と考えられる。曲輪は東へ緩やかに下がるものの、全体的に概ね平坦である。曲輪Ⅰの北辺中央辺りで折れが認められる。曲輪Ⅰの周縁は西辺を除いて全体を取り囲むように帯曲輪が3面構えられて、曲輪の東端及び南西側には最上段の帯曲輪とつながる虎口がある。中段の帯曲輪は北東端と南東端の2か所に櫓台Ⅱ・Ⅲが配置されている。北東端の櫓台Ⅱは 10 m 四方で正方形、南東隅の櫓台Ⅲは 15 m × 10 m の半円形を呈する。さらに最下段の帯曲輪より下の急峻な斜面には計 27 本の堅堀からなる畝状堅堀群が守りを固め、特に東斜面から南斜面にかけて顕著である。曲輪の西端は2条の連続堀切で区切り、強固に守る。

中央の連続堀切以西には頂部に幅狭な曲輪Ⅳと南北斜面部に帯曲輪を配置する。さらに南北の斜面部の帯曲輪の下方には堅堀も複数連続する。東側の頂部西端及び西側の頂部東端の鞍部は現在林道が貫通しているが、縄張りや地形的にみると、かつてはこの辺りに堀切があり、林道に改変された可能性も考えられる。西側の頂部は 40 m × 15 m の曲輪Ⅴがあり、その西端は幅 7 m の堀切で区切る。堀切以西は城館関連遺構が確認できない。全体的には東側頂部の主郭を中心として、東側及び南側斜面の畝状堅堀群、西側は連続堀切と堀切を配置して堅固する縄張りである。

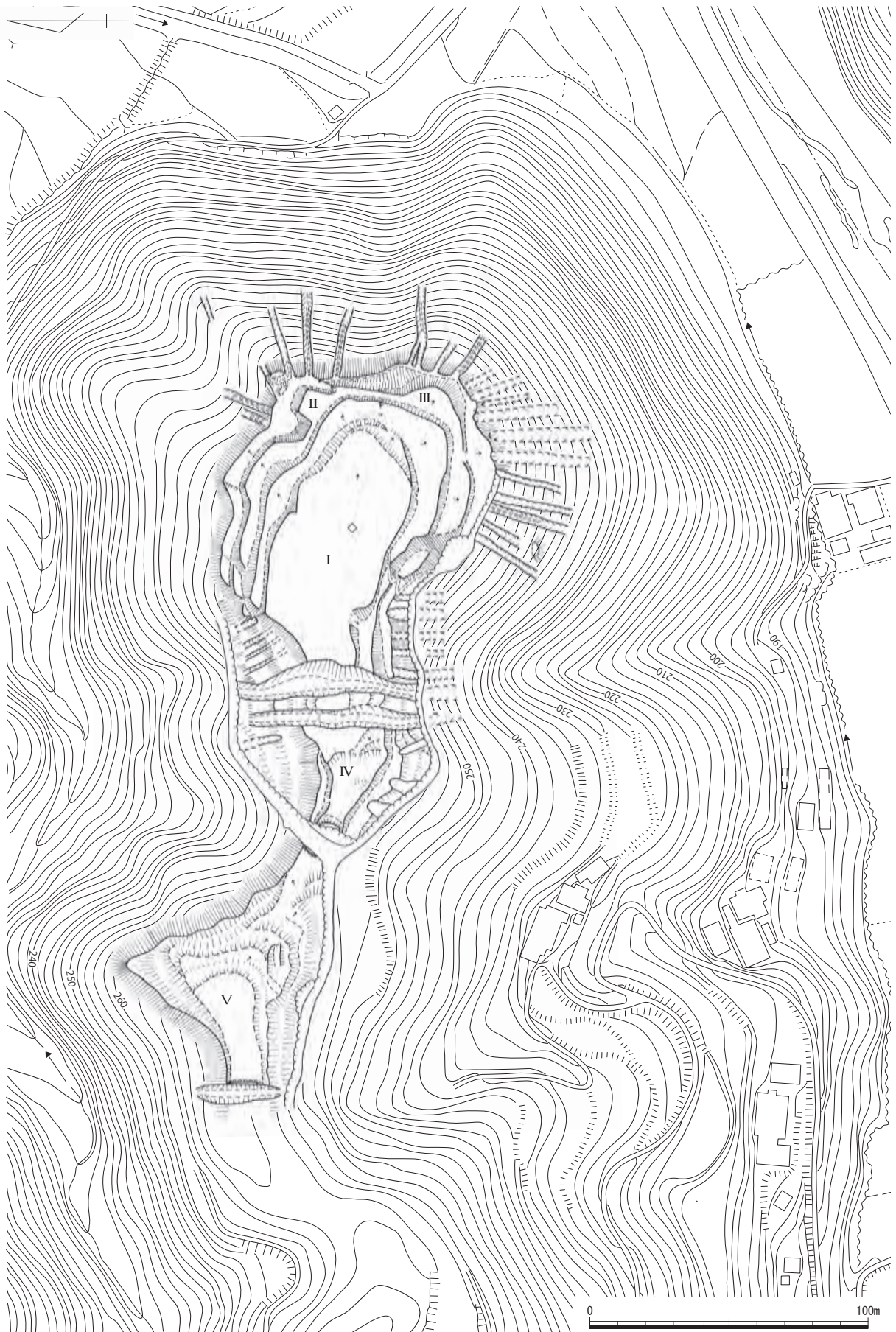
文献・伝承 『備陽国誌』の「江田城」、『東備郡村誌』の「江田の城址」に比定され、大永年中（1521～1528）に毛利氏の部将、菱川与次郎が居城したと伝える。また、巽松軒が記した「河内古跡」には、「常江田の城舟堀の上、堀切等もあり要害に優れたり、常江田城正徳五年乙未五月十四日書上候写し」とあり、天文（1532～1555）の頃に尼子経久が常江田に要害を構えたこと、天文の頃より3、40年後には毛利氏がこの城へ兵を入れたこと、天正の頃（1573～1592）に雲州勢が立て籠もったことなどが記録されている（『広報かもがわ第456集』1992）。（米田）



写真7 西端の堀切
(南から)



写真8 南斜面の畝状堅堀
(南から)



第9図 常江田城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 豊岡川が東から北東へ屈曲する右岸の標高約 270 m、比高約 105 m の山頂部にあたり、南北と西の眺望に優れる。本地点は畑和良の情報をもとに確認した。

概要 城域は東西 70 m、南北 60 m と小規模に近い。頂部北寄りには主郭となる 20 m × 15 m の曲輪があり、切岸は急である。曲輪の北斜面には犬走りが延び、頂部南東端の腰曲輪につながる。頂部南半は造成があまり曲輪で、南東へ緩やかに下がる。

南辺には虎口とその両脇に低い土塁が認められる。

特に西側の土塁は斜めに折れており、南西から侵入

することが容易ではない。その東下段には腰曲輪が

ある。堀切は認められず、急峻な山頂に立地する上、

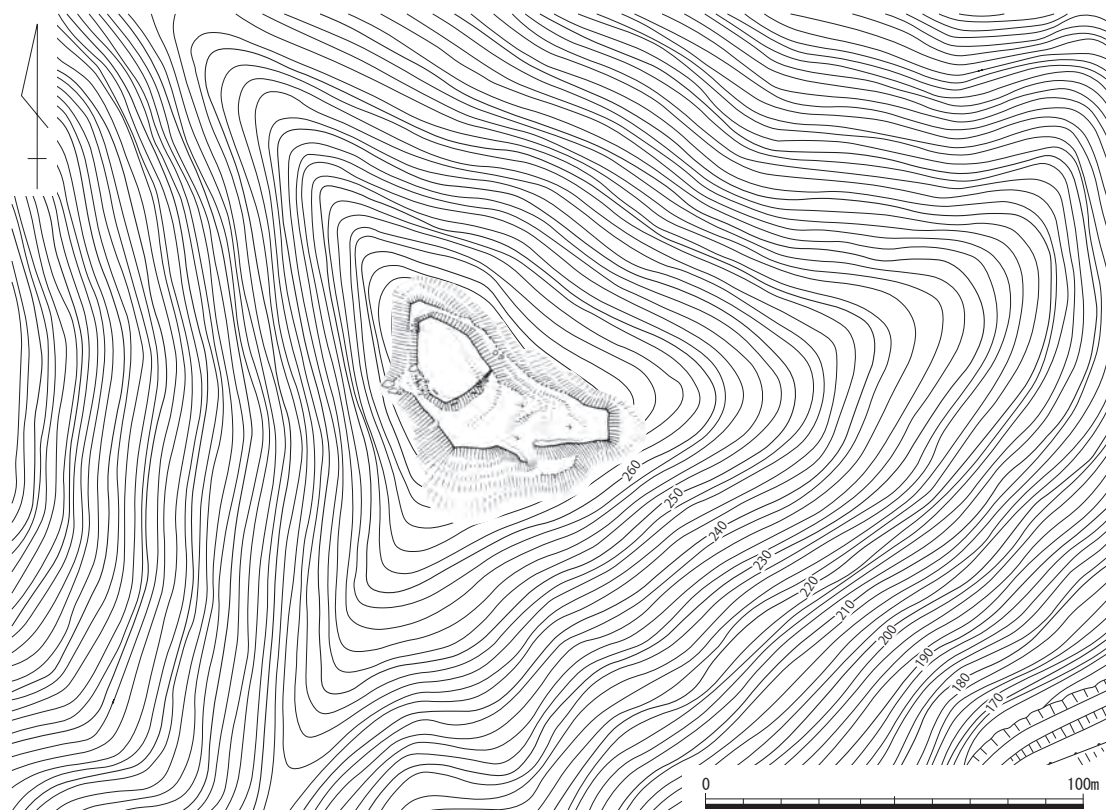
曲輪全体を切岸、虎口周辺は土塁で防御する。

文献・伝承 本城を示すかは特定が難しいが、『東備温故秘録』に「小森城。小森村の末の方にあり。城主しれず。」とある。

(米田)



写真9 頂部南半の曲輪の虎口と土塁
(南東から)



第10図 小森城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

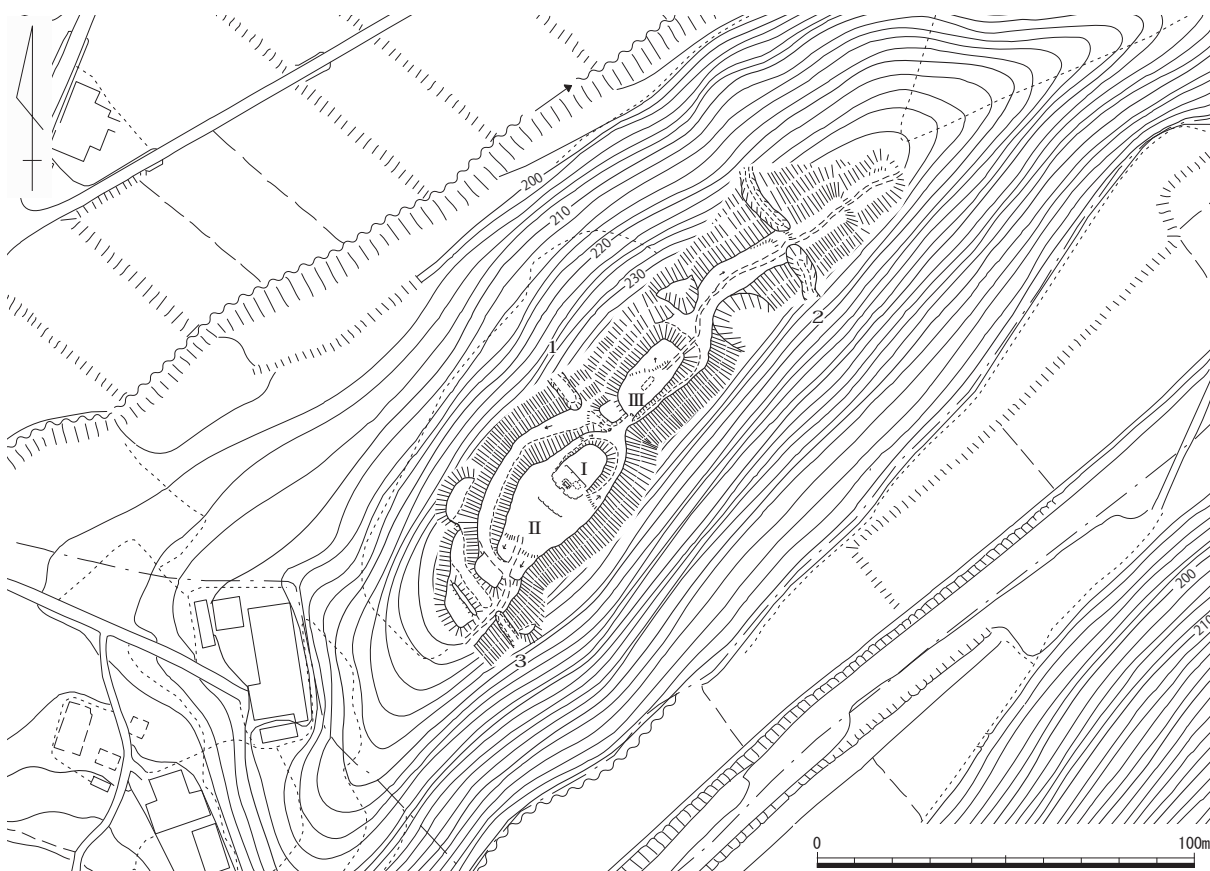
立地 山間の谷地にある北東から南西に細長い独立丘陵の頂部に位置する。片山城跡から南西約2kmの地点を大山道が南北に通る。

概要 最頂部の曲輪Ⅰは前面に石垣が設置され、戦没者の忠魂碑が建つ。曲輪Ⅱは中央部がやや広がる長楕円形状を呈する。南斜面は急峻な天然の要害で、北側斜面は高さ2～4mの切岸を築き、帯曲輪を造成する。この帯曲輪は曲輪ⅠとⅢの間に入る堀切1に連結する。隅丸長形状の曲輪Ⅲの南側斜面は急峻な自然斜面であるが、北側は比較的緩やかに下がる。曲輪Ⅲから北東に続く尾根筋には堀切2を、曲輪Ⅱの南西側には堀切3を掘削して守りとし、さらに堀切3の外側に土塁を築いて守りを嚴重にしていた。片山城跡は独立丘陵に立地しており、比較的緩やかな北東及び南西筋を分断することで守りを固めた構造といえよう。



写真10 曲輪Ⅰ・Ⅱ（南西から）

文献・伝承 片山城跡の踏査は地元情報等に基づいて実施した。（上椀）



第11図 片山城跡縄張り図（1/2,000）

ほそだ
13 細田城跡

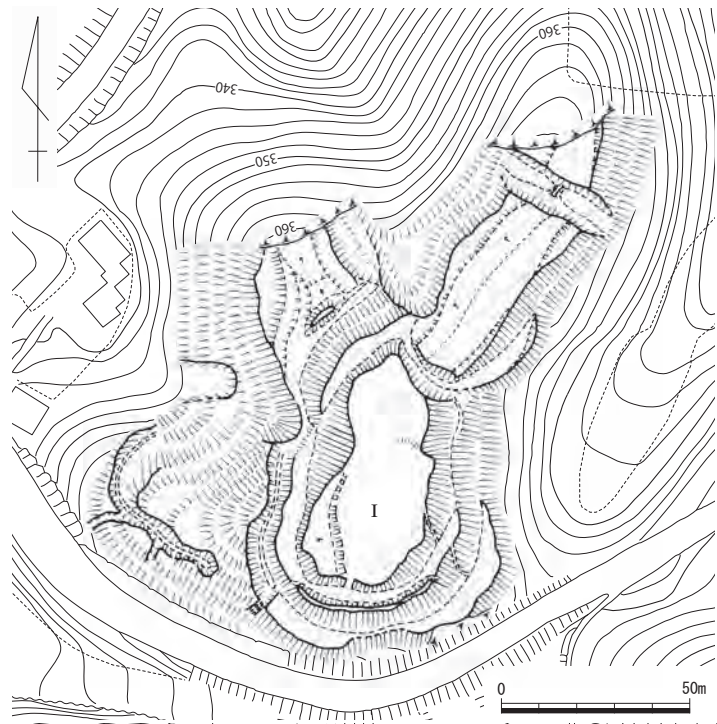
加賀郡吉備中央町細田

地図5左

立地 細田集落のほぼ中央に位置し、下土井・円城・三谷に通じる峠付近の標高約370m、比高約20mの丘陵頂部に立地する。北1.5kmには片山城跡が位置する。

概要 城域は140m四方と規模が大きい。頂部にある約65m×20mの曲輪Iを中心に構成される。曲輪の南半周縁の斜面部には土塁を挟んで帯曲輪2面を配置する。頂部曲輪の北東及び南西を堀切を1条ずつ配置して区切るほか、南西の張り出しに縦堀と連結する横堀が弧状に巡る。北東尾根には狭長の曲輪、その北西に帯曲輪、北東端に堀切がある。

文献・伝承 故事来歴は不明。(米田)



第12図 細田城跡縄張り図(1/2,000)

みょうけんやま
14 妙見山城跡

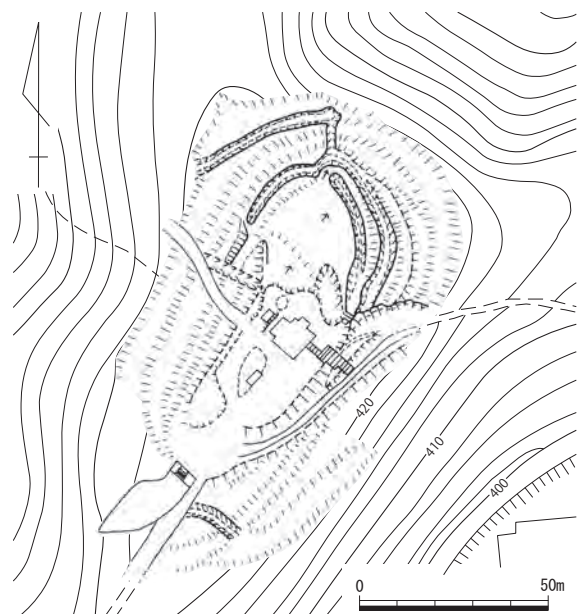
加賀郡吉備中央町細田

地図5左

立地 久保田神社・天津神社が建てられた山頂部に位置する。

概要 単郭式の山城であり、社地造成で削平されている頂部が主郭と推測される。主郭の南西側に1条の堀切、北側には主郭を取り巻くような横堀3条と縦堀2本を確認した。それぞれの堀の深さは50cm～1.5m程度を測る。土塁は確認できなかった。

文献・伝承 津高郡細田村に所在する城館として『和気絹』では「妙見城」、『備陽記』では「明見山古城山跡」、『備陽国誌』では「古城」、『吉備温故秘録』・『撮要録』では「明見山城」、『東備郡村誌』では「城址」がみられ、いずれもこの城跡に比定されると思われる。また、これらの近世地誌類は能勢常陸が居城したとされる。(澤山)

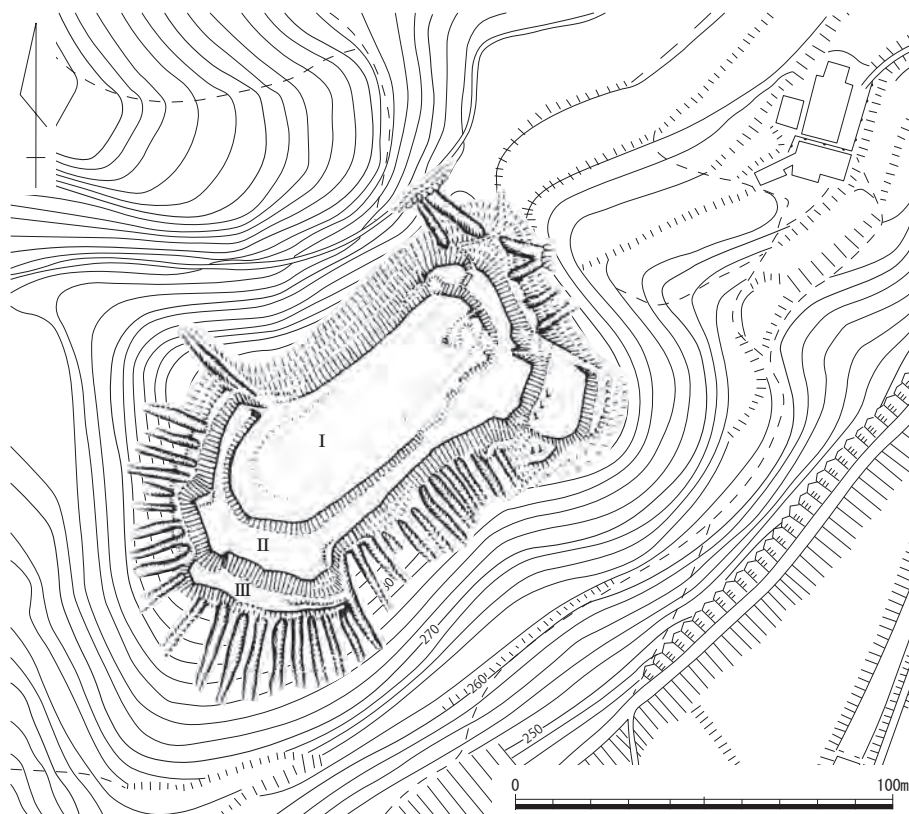


第13図 妙見山城跡縄張り図(1/2,000)

立地 北東から南西に延びる尾根の頂部に位置し、西裾を大山道が南北に通る。

概要 最高所に位置する曲輪Ⅰはやや細長い五角形状を呈する。その北側は切岸状に落ちるが、もともと比較的急峻な地形を利用し、あまり手は加えていないと考える。曲輪Ⅰの東西に1本ずつ豎堀が設けられている。曲輪Ⅰの下段にある曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰの東・南・西方を取り巻く帯曲輪である。北東側に下った尾根鞍部は堀切によりに分断する。曲輪Ⅱの南西端下段には曲輪Ⅲが造成されている。曲輪Ⅲには横堀が掘削され、その南側には土塁が認められた。曲輪Ⅱ・Ⅲの南側から西側斜面にかけて豎堀群が造成されていた。曲輪Ⅱ南側の豎堀は、曲輪Ⅲより高所から掘削されている。曲輪Ⅲに接続する西側3本の豎堀群は上端部を横堀で連結する特徴を示す。曲輪Ⅱの東側斜面にも豎堀4本が確認できる。このうち北側の2本は堀切と連結し、全体として平面「V」字状を呈していた。

文献・伝承 勝山城は「加茂崩れ」で敗走した毛利勢が福山城に代わる拠点とした城で、築城は天正8（1580）年5月3日とされる。毛利譜代の桂源右衛門尉元盛、赤川次郎左衛門大元之、岡宗左衛門大元良が在番し、在地の竹井直定も加わった。天正9（1581）年4月に伊賀久隆は死去するが、これ以降嫡子家久は毛利方に与するようになり、小早川隆景は勝山普請を家久に依頼している（文献113）。（上村）



第14図 勝山城跡縄張り図（1/2,000）作図：畑和良



写真 11 曲輪Ⅱ東側斜面豎堀・堀切端部（東から）



写真 12 曲輪Ⅱ南側（南西から）



写真 13 曲輪Ⅲ土塁・横堀（西から）



写真 14 曲輪Ⅱ南側豎堀群クランク状部分（北から）

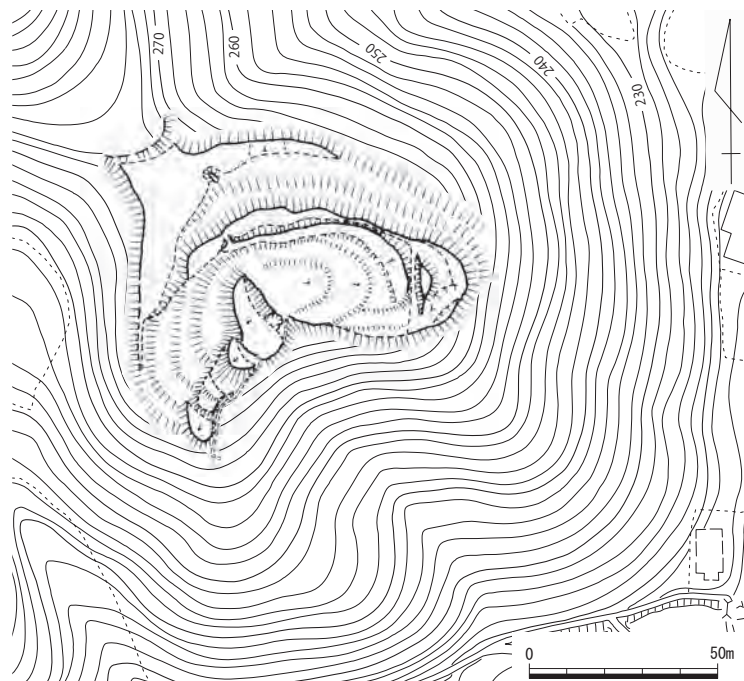
16 ^{ふじさわ}藤沢城跡 加賀郡吉備中央町加茂市場

地図 5 左

立地 宇甘川左岸の標高約 270 m、比高 60 m の山頂部にあり、備中国境まで西へ約 1 km と近い。

概要 城域は東西 90 m、南北 70 m と中規模である。最頂部は狭小な曲輪があり、造作があまい。北斜面には帯曲輪が 2 面巡る。頂部西側には土塁を伴う堀切を挟んで小規模の腰曲輪がある。頂部の南西斜面には小曲輪が 5 面連続する。また、頂部から北西側の鞍部では堀切は確認できないが、尾根筋を切岸状に掘削している。全体的に縄張りは小規模で、防御施設が乏しい。

文献・伝承 故事来歴は不明。(米田)



第 15 図 藤沢城跡縄張り図 (1/2,000)

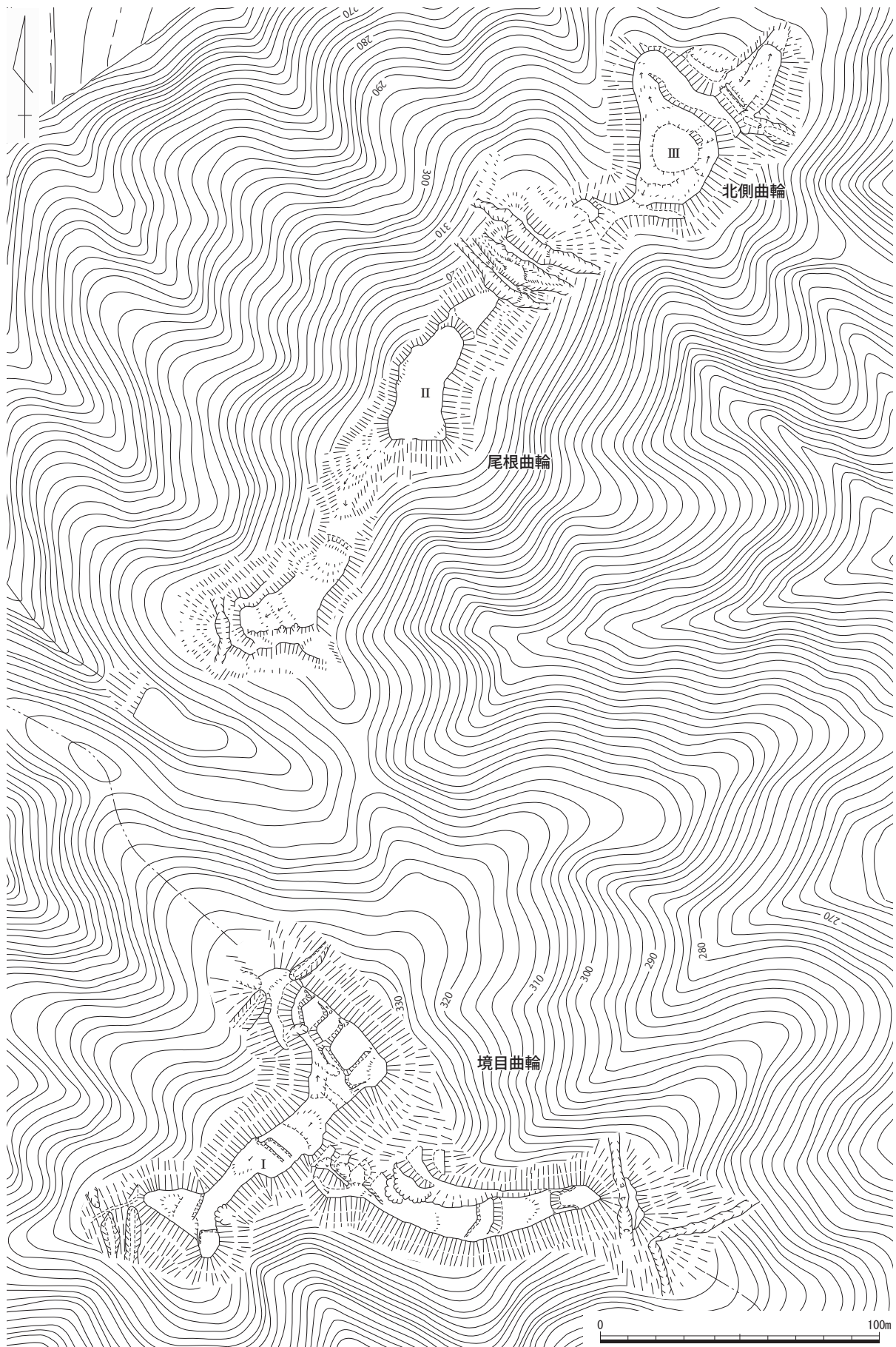
立地 備前・備中の境目付近の山頂部に位置する。藤沢城跡が位置する山裾付近を大山道が通り、宇甘川沿いに北東へ 900 m 程進むと総社宮が位置する。総社宮で毎年秋に開催されている加茂大祭は、社伝によると天喜年中(1053～1058)に始まったとされる。境内にある総社石灯籠は弘安 4 (1281) 年造立で、石造地藏菩薩立像は貞治 4 (1365) 年造立である。総社宮境内には樹齢 500 年を超す杉や檜・銀杏が今も繁る。

概要 宇甘川を南に見下ろす境目山頂部(境目曲輪)と鞍部を挟み北に位置する北側山頂部(北側曲輪)、北側山頂部から北北東に派生する尾根頂部(尾根曲輪)で曲輪を確認した。境目曲輪は、頂部及びそこから派生する尾根筋に複数の曲輪を連郭状に造出する構造である。曲輪 I は長さ 95 m、幅 8～15 m と細長い。中央付近を最高所とし、南北双方に段取りをしながら下がる。北端から北西方向に派生する尾根筋には曲輪を 3 面造成していた。この尾根筋の曲輪は北端に土塁を削り残す特徴がある。頂部の北・南端から北西方向に派生する尾根筋は、堀切を掘削して分断する。頂部の中央付近からも南東方向に派生する尾根にも曲輪を連郭状に造成していたが、後世に石切り場として活用され一部攪乱を受けていた。この尾根でも北西方向に派生する尾根筋の曲輪群と同様に片側もしくは両側端部に土塁を削り残す特徴が確認できた。南東端は堀切を平面「V」字状に掘削して分断する。

境目曲輪の北側にある山頂部には不整形の広大な曲輪 II を造成している。曲輪 II 北側の 1 段低い位置にも曲輪を造成し、その北側は堀切 3 条で分断していた。堀切相互間には土塁を造成し、さらに最北堀切の北側にも土塁を造り出す。土塁から北側は自然に傾斜して下がり、鞍部付近で腰曲輪状の平坦面を確認した。曲輪 II の南側には曲輪を造出せず、下がりきった地点に土塁を設けていた。北側曲輪から北東に派生する尾根頂部には尾根曲輪が位置する。尾根曲輪は略台形状を呈し、北側下段には帯曲輪が巡る。本曲輪から帯曲輪には大きく「U」字状に回り込むスロープで下る。帯曲輪の北東側は堀切で分断し、その北側に土塁を造成していた。堀切は東側斜面へと下る。

北側曲輪と尾根曲輪は一連の城郭の可能性が考えられ、より複雑な境目曲輪より遡ると推察する。尾根曲輪からは宇甘川を北東に望めることから、曲輪 III は曲輪 II の見張り所に相当し、ともに北東方面への守りを意識した構造と評価する。境目曲輪は、派生する尾根筋に曲輪群を連郭状に設営し、それぞれの尾根を堀切で防衛して、さらに曲輪 I 周囲は切岸で守っており、全方位に防御意識が行き届いた構造といえよう。

文献・伝承 『備中集成志』には永禄 2 (1559) 年 9 月に宇喜多直家が備前・備中境目に藤沢の砦を築き、中島加賀守を城番としたとある。『虎倉聞書』・『備前軍記』には虎倉攻めの際に毛利勢が虎倉勢から藤沢城を乗っ取り、兵を配置したことがみえる(参考史料 55)。前著に在番は青屋与十郎とあるが、『備中誌』には毛利氏麾下の肥田淡路守宗房の名がある。『虎倉物語』にも毛利勢が藤沢城を虎倉城進撃への足がかりとしたことがうかがえる(参考史料 53)。他方『虎倉記』には毛利勢が藤沢に城を構えたとし、総大将は葛見宮内少輔と青屋与十郎の両名である。「毛利輝元書状」(岡山県立博物館蔵)には、毛利輝元が和智元次に藤佐井(藤沢城)在番を命じており、書状作成は天正 8 (1580) 年の可能性があるという(一次史料 211)。(上椀)



第 16 図 藤沢城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良に加筆



写真 15 曲輪の土塁（東から）



写真 16 3条堀切（南側）（東から）

18 みのうたに 三納谷城跡

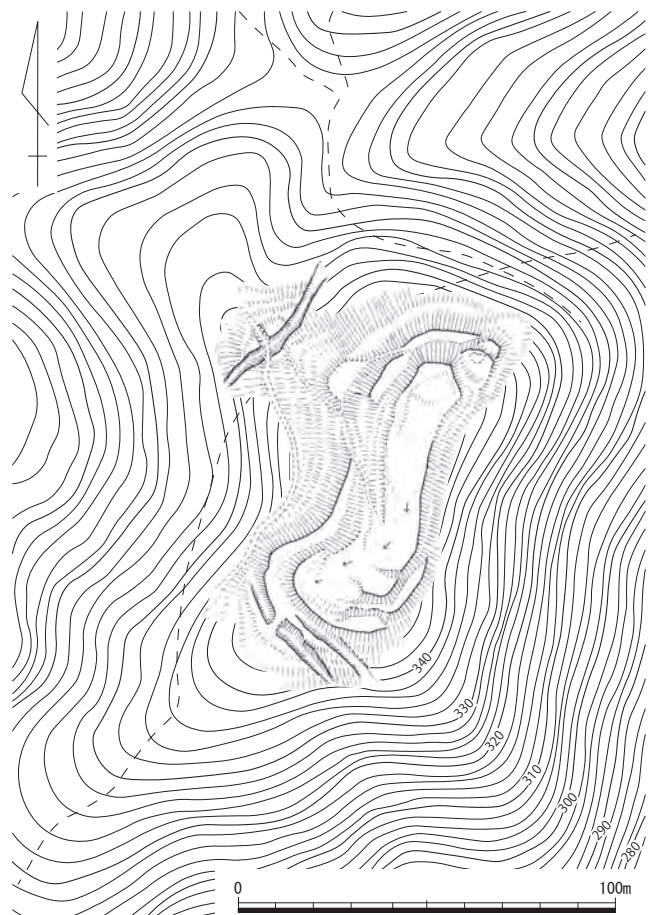
加賀郡吉備中央町三納谷・上田西

地図 5 左

立地 宇甘川左岸の標高約 350 m、比高約 130 m の山頂部、火雷神社から南へ延びる尾根先端に立地する。特に西方に広がる三納谷の平野、宇甘川沿いの南方の眺望に優れる。本地点は畑和良の情報に基づいて確認した。

概要 城域は東西 80 m、南北 120 m と中規模で、山頂部の曲輪を中心に構成される。主郭となる曲輪は東西 12 m、南北 57 m と狭長で、南西端は 2 段階緩やかに下がる。曲輪の南端には帯曲輪を配置し、低い土塁を挟んで堀切 2 条を連続させて南西尾根を区切る。一方、曲輪北側は斜面部に腰曲輪を 3 面程配置する。北西尾根に続く傾斜変換点には堀切 1 条を設け、尾根筋を分断する。全体的には南西と北西を堀切で堅守する縄張りといえる。

文献・伝承 『吉備温故秘録』によると、松田元成の麾下、高見小四郎が居城したと伝える。
(米田)



第 17 図 三納谷城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 宇甘川右岸、総社宮の南東にある標高約360m、比高約160mの山頂部に立地する。旧国では備前と備中の国境付近にあたり、西へ1.8kmには国境に築かれた17藤沢城跡が位置する。

概要 城域は東西430m、南北240mと特に大規模である。西側頂部の曲輪Ⅰを中心し、東側頂部を含めて各支尾根に曲輪群を配置した複雑な縄張りである。西側頂部は福山城公園として一部利用されているが、47m×20mの曲輪Ⅰが広がり、主郭と考えられる。周縁の切岸は急である。頂部の主郭を取り囲むように下段には帯曲輪を配し、主郭の切岸北裾には石積みが断続する。西側頂部の尾根は北西側・南西側・南側の3方向に尾根が延び、それぞれに曲輪群が配置されている。北西側の尾根は1条の堀切で区切り、尾根の北端に向かって小曲輪3面、西端に向かって小曲輪6面が連なる。尾根の北側斜面には計13本の堅堀があり、強固に守る。北西側と南西側の尾根の間は谷部となり、不鮮明ながら5本の堅堀がある。南西側の尾根には土塁を伴う曲輪の南北に1条ずつ堀切を設けたほか、大小の曲輪4面が連続する。また、北側斜面には4本の畝状堅堀を配置する。さらに西側頂部から約200m離れた尾根南西端にも造作があまり曲輪と浅い堀切がある。南西側と南側尾根との間にある谷部には計4本の堅堀がある。南側尾根は曲輪が3面連続し、先端に4本の堅堀がある。

このほか、東側頂部は自然地形に近い曲輪Ⅱがあり、東側に続く尾根は狭い曲輪を挟んで東西を1条ずつの堀切で区切る。このうち東側の堀切には土塁を伴う。頂部から南西側に延びる尾根には曲輪が2面続き、尾根の南西端は浅い堀切2条で区切る。東西頂部の間にある鞍部には狭長の曲輪Ⅱが配置されている。

全体的には西側頂部の主郭を中心として、東側頂部やあらゆる方向に延びた支尾根に多くの曲輪群を配置したうえ、北・西方を畝状堅堀群、東方を連続堀切で堅固する縄張りである。

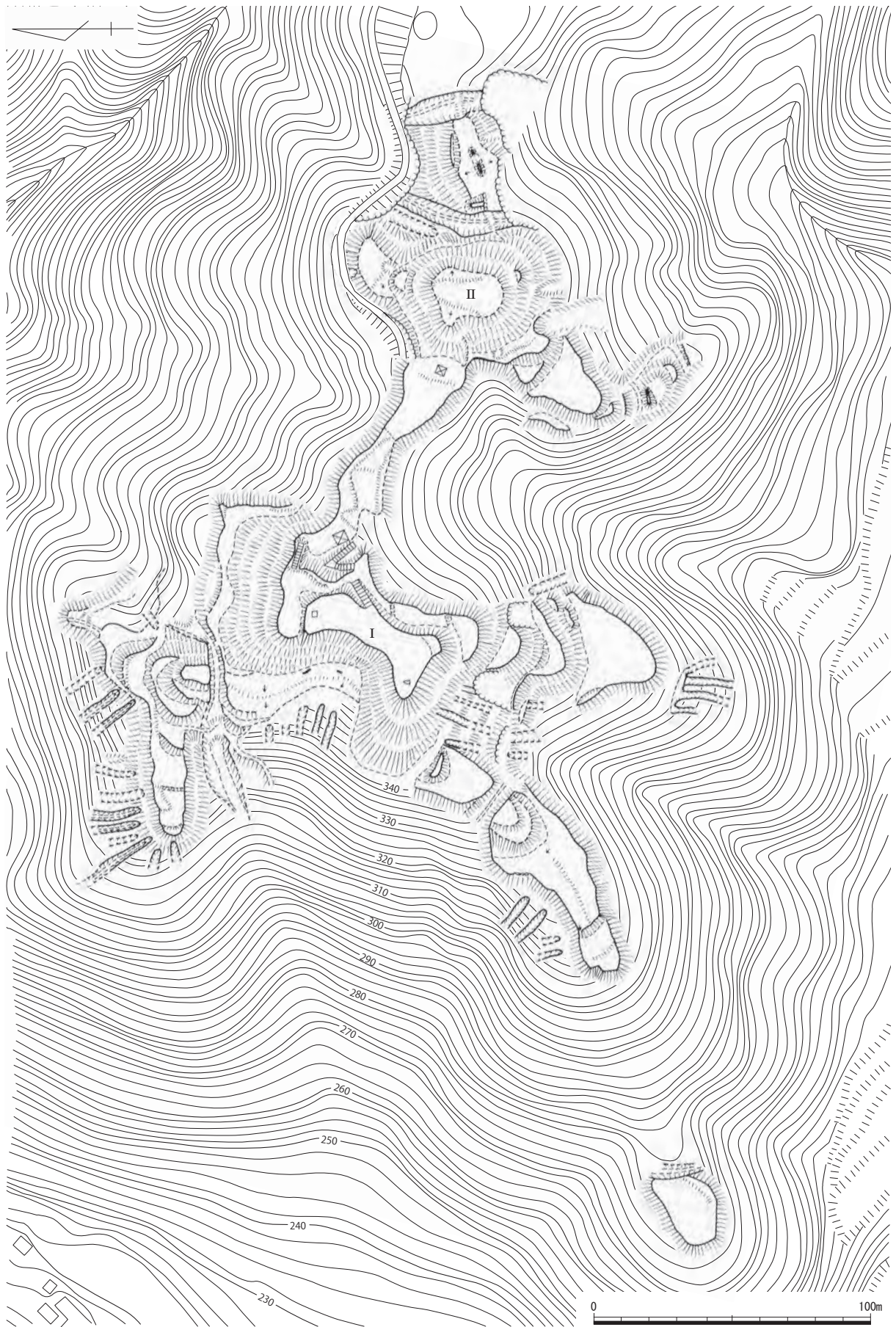
文献・伝承 『吉備温故秘録』によると、伊賀兵庫頭が居城したと伝える。さらに『桂炭園覚書』は、天正年間(1573～1592)の毛利氏と宇喜多氏・伊賀氏の攻防とともに、福山城にも触れている。(参考史料52・56) また、天正七年十二月十一日付の片山久秀書状には、伊賀久隆が福山城に滞在していること、天正八年四月十二日付の毛利輝元書状には、赤川元秀が福山城在番の任務を承諾したこと、天正十年四月五日付の小早川隆景書状には、礮兼景道・手島景繁に対して、毛利軍は福山城に布陣して羽柴秀吉の様子をみることになったことが記されている(一次史料178・192・240)。(米田)



写真17 遠景(北西から)



写真18 曲輪Ⅰ(南西から)

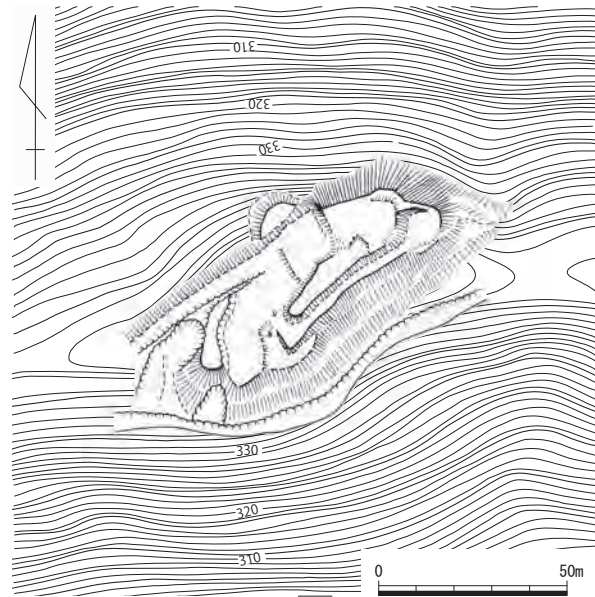


第 18 図 福山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川が著しく蛇行する右岸沿いにある山から東へ細く突き出した標高約 330 m、比高約 180 m の尾根頂部に立地する。宇甘川に面した北・東・南東の眺望に優れ、東 1.5 km に鍋谷城跡、西 1.3 km に福山城跡が位置する。本地点は畑和良の情報をもとに確認した。

概要 城域は東西約 80 m、南北約 30 m と小規模である。頂部東側の最高所には 16 m × 14 m の狭小な曲輪、頂部中央には 12 m 四方の方形の曲輪、その西側には 20 m × 10 m の曲輪が連続して配置される。中央北斜面には小曲輪、頂部東半南辺は幅 4 m の低い土塁を挟んで帯曲輪が東斜面にかけて配置されている。南辺の土塁西端は虎口となり、南斜面にある帯曲輪や南西下段にある小曲輪につながる。曲輪周囲の切岸は急である。

文献・伝承 『撮要録』によると、城主は伊賀伊勢守家頼と伝える。(米田)



第 19 図 十力城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川左岸にある標高約 280 m、比高約 140 m の山頂部に立地する。宇甘川沿いの東西・南方向の眺望が良好であるほか、下加茂から加茂市場・円城に向かう交通の結節点にあたる。

概要 鍋谷城跡の城域は東西約 110 m、南北約 240 m と大規模である。山頂部にある曲輪 I を中心に構成される連郭式で、頂部から南東へ 350 m 離れた尾根上に出丸状の曲輪 II (大手城跡) を伴う。全体的に斜面は険しい。

山頂部には 130 m × 15 m 前後の狭長で「く」の字形を呈する曲輪 I があり、主郭をなす。曲輪の造作はあまい。曲輪 I の中央南寄りには 9 m × 5 m の長方形の土壇があり、櫓台の可能性もある。その北隣には径 2 m 程度の円形の凹みがある。南東側に続く尾根には、小曲輪を挟んで幅 8 m 前後の堀切が 2 条配置され、尾根筋を区切る。南端の堀切の南際には土塁が伴うほか、以南は造作のあまい曲輪が 2 面連続する。曲輪 I より北東側の尾根先端は 1 段下がり、帯曲輪と腰曲輪が接続する。これより北東には堀切がなく、急峻な自然地形となる。

北西側尾根にはそれぞれ幅 7 m 前後の堀切が 2 条あり、北側の山塊から尾根筋を分断する。このうち南東側の堀切は中央が土橋状を呈する。両堀切間の尾根筋は幅狭で、東西斜面が絶壁となる。

曲輪 I のある頂部から南東へ 350 m 離れたところに張り出した狭長の尾根には、狭小の平坦面が 3 か所あり、出丸状の曲輪 II の可能性がある (大手城跡)。このうち山塊からの傾斜変換点にあたる西側の平坦面は 14 m × 5 m とやや狭く、現在石垣を伴う社が祀られている。このほか、尾根の東端

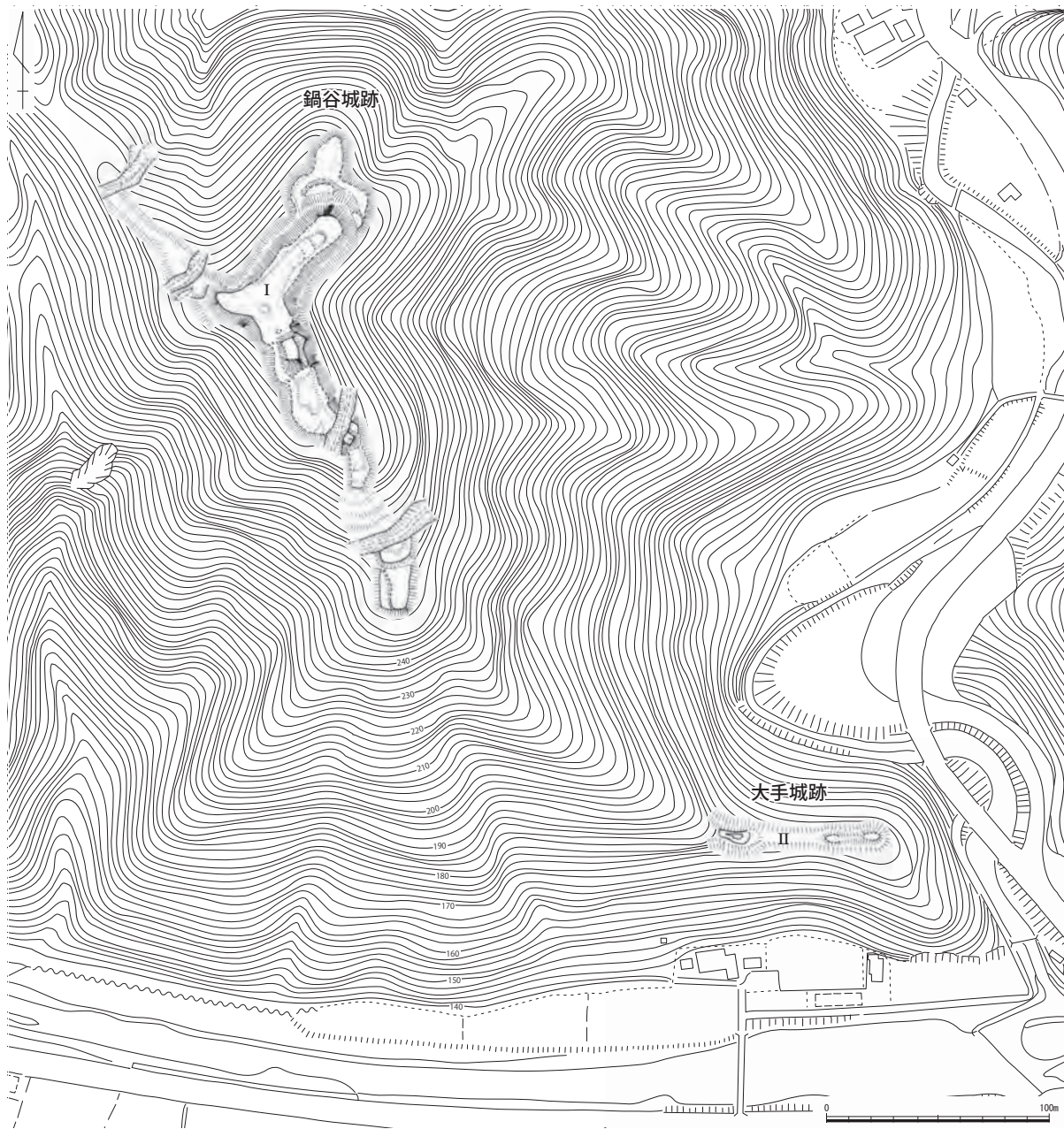
部には平坦面が鞍部を挟んで東西に2か所あり、ともに7m×3mと狭小である。これらの平坦面は東西の眺望が良好であり、見張り台のような役割を想定する。

全体的に頂部の曲輪Ⅰを中心とし、険しい地形を利用して、北西側の山塊と南東側の尾根先端を連続堀切で堅守するとともに、南東端に出丸状の曲輪を置く縄張りである。

文献・伝承 『備陽国誌』によると、城主を河原新太郎とし、大手城ともいう。また、『虎倉物語』には、大永年間（1521～1528）頃、伊賀伊賀守が鍋谷城から津高郡虎倉城へ移転したことが記されている（参考史料22）。（米田）



写真19 遠景（北西から）

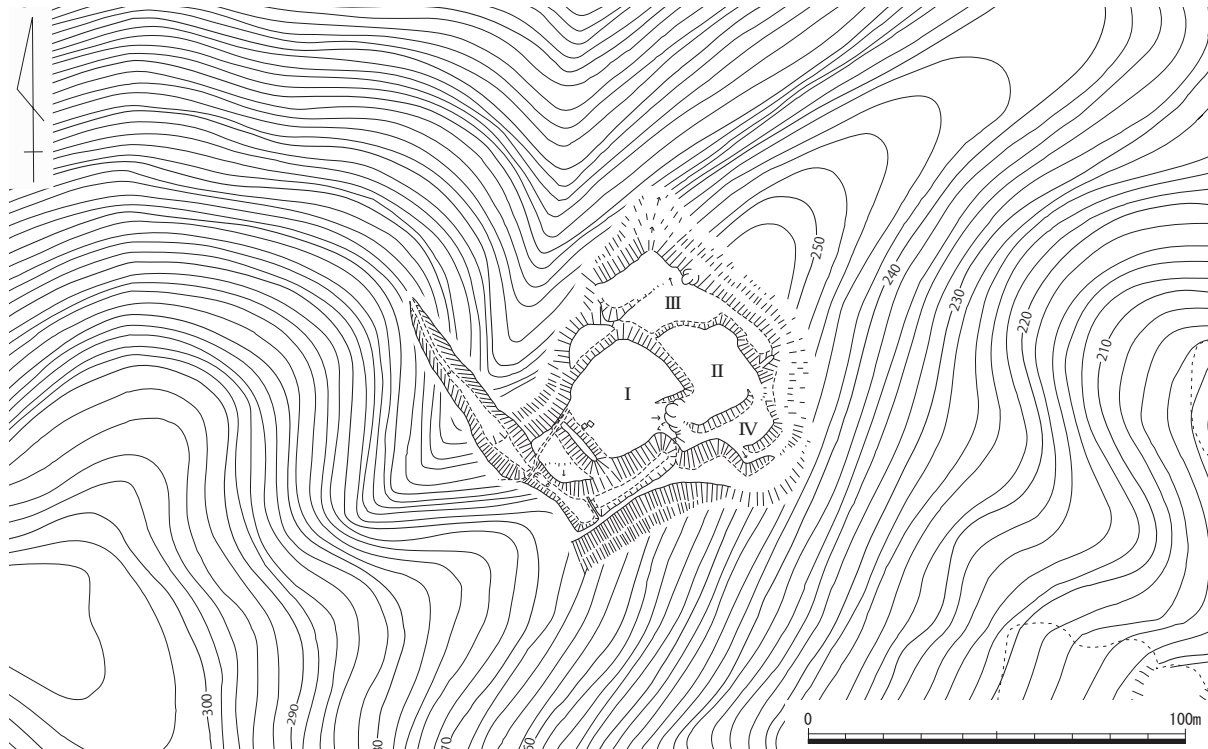


第20図 鍋谷城跡・大手城跡縄張り図（1/3,000）

立地 清常山から北東方向に派生した尾根上に立地し、眼下には加茂川が南流する。南東約3.5kmには虎倉城跡が位置する。

概要 堀切で尾根筋を分断して城郭を築く。堀切の北側は豎堀状に斜面を下るが、南側はわずかに下がって横堀と直角に連結する。略方形の曲輪Ⅰは南西側を土塁で区画し、尾根からの侵入に対する警戒を示す。曲輪Ⅰ南辺中央付近からは横矢掛け状の張り出しがあり、横堀の東端を画する。曲輪Ⅰの南東角には曲輪Ⅱに下がる虎口状の傾斜があるが、後世の改変を受けているため当初の状況は不明である。曲輪Ⅱの南西角から「L」字状に下って曲輪Ⅳに続く。曲輪Ⅱの北側、1段下がった位置にある曲輪Ⅲは平面形が逆「L」字状に屈曲し、南東端を土塁で守る。この土塁は曲輪Ⅱから張り出しており、横矢掛けの機能を合わせ持つと考える。曲輪Ⅳの南端には屈曲したスロープがある。堀切と土塁で尾根筋を分断し、さらに南西から南東側に対して強い防御意識を示した構造である。

文献・伝承 清常城は、天正2（1574）年の毛利勢虎倉攻めの時の本陣と伝えられる。『虎倉物語』には毛利勢の大將である葛見宮内少輔、青屋与十郎が清常山に陣取ったとあるが、『備前軍記』には藤沢村から上加茂村まで進軍したが、敵兵の姿が見当たらず、夜も明けてきたため一挙に虎倉城に攻め寄せたことがみえ、清常山に陣取った記述は認められない。なお曲輪Ⅰには小石室状の石組と方形の基壇があり、前者は粟屋（青屋）与十郎の首塚といわれている。（上榊）



第21図 清常城跡縄張り図（1/2,000）

立地 宇甘川が細かく蛇行する右岸、「城山」と呼ばれる標高約320m、比高約230mの山頂部に立地する。山は全体的に急峻で、特に宇甘川に面した北・東斜面は絶壁となる。周辺の城跡は少なく、南東1.1kmに石原城跡、北西3.3kmに清常城跡が位置する。

概要 城域は東西500m、南北290mと特に大規模である。最頂部の曲輪Ⅰ（「本丸」）を中心として、尾根筋に曲輪Ⅱ～Ⅳ（「二の丸」・「三の丸」など）を構え、各支尾根には「出丸」とされる大小様々な曲輪群を配置した連郭式の構造である。

最頂部の曲輪Ⅰは主郭（「本丸」）と考えられ、一辺30mの梯形を呈する。曲輪周辺には石積み石材やおびただしい数の瓦片が散乱している。南東辺の切岸には小振りの石材による低い石積みが部分的かつ断続的に認められる。曲輪の南西隅には虎口があり、西側の曲輪Ⅱへ通路が続くものと考えられる。石列や勾配の残存状況からみて、枡形及び坂虎口と想定される。周囲の切岸は極めて急である。

本丸の西側には曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲ（「三の丸」）が連続する。曲輪Ⅱの形状は梯形を呈する。土塁は認められないが、周辺の石の散在状況から南辺や西辺には石積みが構築されていた可能性が考えられる。曲輪Ⅱ東側では曲輪Ⅰの切岸直下、曲輪Ⅱ・Ⅲの南側にある帯曲輪では多くの石積み石材が散乱している。曲輪Ⅲの北側には犬走りが東側の曲輪Ⅰに向かって延びる。なお、曲輪Ⅰ～Ⅲ周辺では多量の瓦が散布しているが、特に曲輪Ⅰでの散布が著しい。曲輪Ⅲの西側は急な切岸となり、尾根鞍部には幅12m程の堀切がある。堀切は尾根上のみ切断しており、南北斜面部には延びない。堀切の南北端は高く盛土されており、後世に改変された可能性も否めない。

曲輪Ⅰの東側尾根上には狭長の曲輪Ⅳ（「二の丸」）がある。曲輪はわずかな高低差があり、数面に分かれていた可能性がある。さらに曲輪の東西にはそれぞれ長径8m前後の楕円形を呈する凹みがあり、貯水施設と想定されている。曲輪の南辺中央では南斜面に続く通路があり、虎口の可能性がある。また、南西側の斜面にある犬走りの肩部には低い石積みが部分的に認められる。東側尾根先端の二又に分かれる北東側と南東側の支尾根にはそれぞれ小曲輪があり、両者は東側谷部に面した犬走りをつながる。南東側尾根の曲輪Ⅴの北西隅及び南側には曲輪Ⅳに続く犬走りが2本ある。その南側の犬走りでは鬼瓦の破片（第20図）が散乱しており、「二の丸」の曲輪Ⅳ東端付近から落ち込んだ可能性が考えられる（鬼瓦の破片の散乱地点については、畑和良の情報による）。南東側尾根の曲輪Ⅴからさらに南東に細く延びる支尾根には、狭い鞍部を挟んで尾根頂部に曲輪Ⅵ（「出丸」）がある。曲輪Ⅵは狭小ながら小曲輪が南北に付属し、北から東へ南流する宇甘川沿いの眺望に優れる。一方、北東側に短く延びる支尾根の先端は岩盤が露出して堀切状になっている。

本丸の曲輪Ⅰから北へ細長く延びる尾根には小曲輪が15面程度連続する。しかも曲輪群の西端は幅狭な通路として利用されているものと考えられる。その多くは小規模で平坦面が判然としないものが多いが、北端と中央の曲輪Ⅶは規模がやや大きい。このうち中央の曲輪Ⅶの北西側には石積みが一部で認められる。

曲輪Ⅲの西側の堀切より西側は幅狭い尾根が鞍部まで続くが、鞍部には三角形を呈するやや広い曲輪Ⅷ、その北側に帯曲輪がある。さらに西側の頂部には不整楕円形の曲輪Ⅸがあり、「出丸」と考えられている。ここからは北側の眺望が良好である。その西側斜面には小規模な平坦面がある。西側鞍

部は通路を挟んで南北に谷が開くが、崩落が著しく、現状では堀切の痕跡をうかがうことは難しい。

全体的に、最頂部の曲輪Ⅰ（「本丸」）を中心として、尾根筋に曲輪Ⅱ～Ⅳ、北側と東側に延びた支尾根に大小様々な曲輪群を配置した大規模な連郭式の構造をもつ。険しい地形のためか、尾根筋には堀切が1条しか認められず、防御施設は少ない。また、曲輪Ⅰ周辺には石積みを構築するほか、瓦の散布状況から曲輪Ⅰ～Ⅲ、「二の丸」の曲輪Ⅳ東端には瓦葺きの建物が建てられていた可能性がある。

注目される遺物としては、瓦類がある。なかでも、『御津町史』に掲載されている天正10（1582）年銘の鬼瓦は特筆される。また、虎倉城跡における瓦の特徴や散布域については、本丸におびただしく散布するコビキBによる瓦の検討から、天正10（1582）年に本城建物の瓦葺き化が進んだと考えられているほか、コビキAの瓦の散見から伊賀氏の居城段階にも瓦葺きの建物がごく少数あった可能性も示唆されている（文献102）。

第23図は、南東側尾根の曲輪Ⅳの南辺中央から曲輪Ⅴの北西隅につながる犬走りで、今回表面採集した鬼瓦の破片である。鬼瓦の右側下部の破片にあたり、上部及び左側部が欠損している。残存する破片の大きさは、長さ33.6cm、幅30.3cm、厚さ7.8cmである。破片の表面左端の把手にわずかに残る縦方向の軸線を中軸と仮定すると、第24図のように、全体の形態は長さ44cm（推定）、幅54cm、厚さ8cm程度と復元される。本体は厚さ約4.8cmの地板の裏面を削り込み、器壁が約3.0cm前後になるように仕上げている。裏面にはケズリや指押さえの痕跡が認められる。また、裏面の削り込みは中



写真20 遠景（南東から）



写真21 曲輪Ⅰと虎口（西から）



写真22 曲輪Ⅰ南東側切岸と石積み（西から）



写真23 曲輪Ⅲ西側堀切（南西から）



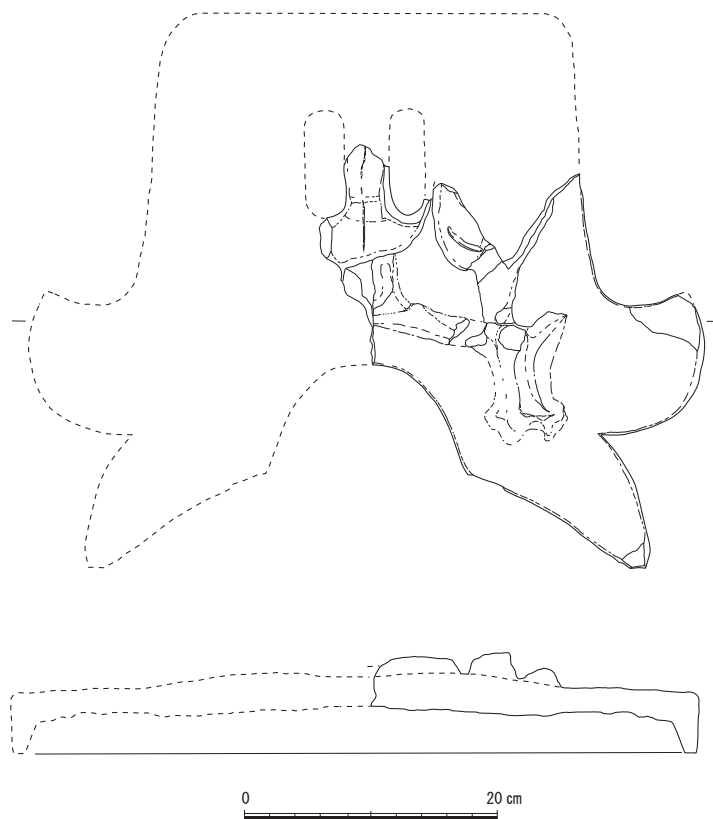
第 22 図 虎倉城跡縄張り図 (1/2,500)



第 23 図 虎倉城跡鬼瓦表採資料 (1/4)

中央部分がやや浅く、周縁部がやや深い。焼成はやや軟質で、炭素の吸着はやや良好である。色調は内外面が灰色(7.5Y4/1)、断面が灰白色(10Y7/1)を呈する(土色は、小山正忠・竹原秀雄編・著『新版標準土色帖』に準じる)。胎土は緻密である。裏面の把手は直線的な棒状を呈するもので、地板のほぼ中央に長楕円形の穴を2つあけることで把手を作り出している。鬼面の紋様は貼り付けによるものであるが、大半が剥がれている。破片中央から左側にかけて木の枝、その上部に丸みのある果実のような造形が認められる。

文献・伝承 『和気絹』によると、伊賀守、岡左衛門久隆らが代々居城していたとされる。また、文明年中(1469～1487)には松田氏家臣、天正年中(1573～1592)には宇喜多氏の重臣長船越中の後、蟹江彦左衛門、鎌田五郎兵衛、長船越中守、石原新太郎、榑崎左近将監が在城したと伝える。さらに、天正8(1580)年の虎倉合戦(加茂くずれ)に関わる史料(一次史料193～206など)があるほか、城主伊賀氏と毛利氏との合戦、宇喜多氏との関係などについて記した『虎倉記』・『虎倉物語』をはじめとする軍記物にもたびたび登場する(参考史料53・55・58・68・70など)。(米田)



第24図 虎倉城跡鬼瓦表採資料復元図(1/6)



写真24 虎倉城跡鬼瓦表採資料表面



写真25 虎倉城跡鬼瓦表採資料裏面

立地 旭川右岸にあって、宮地・市場の平野部を一望可能な標高 90 m の独立山塊に所在する。

概要 城は、頂部に造成された全長 40 m、幅 15 ~ 20 m の長楕円形を呈する主郭 I を中心に、この下段には主郭との比高差 2 ~ 4 m の切岸によって造成された幅 2 ~ 10 m の曲輪 II が全周する。なお、曲輪 II は北側に 3 段と南側に 1 段とそれぞれに低位な段差が認められ、東と西側には径約 1 m の井戸が存在する。一方、この曲輪 II の北側と東側下方 8 ~ 10 m には 2 本の竖堀でつながった中腹を半周する総延長 100 m、幅 10 ~ 15 m の規模の広い曲輪 III・IV の造成がみられる。

文献・伝承 『岡山県御津郡誌』に「天文年中江田左衛門此の城に居りしが尼子晴久に攻められ陥れり」と記載されているのみで、中世に遡る史料は存在しない。
(島崎)

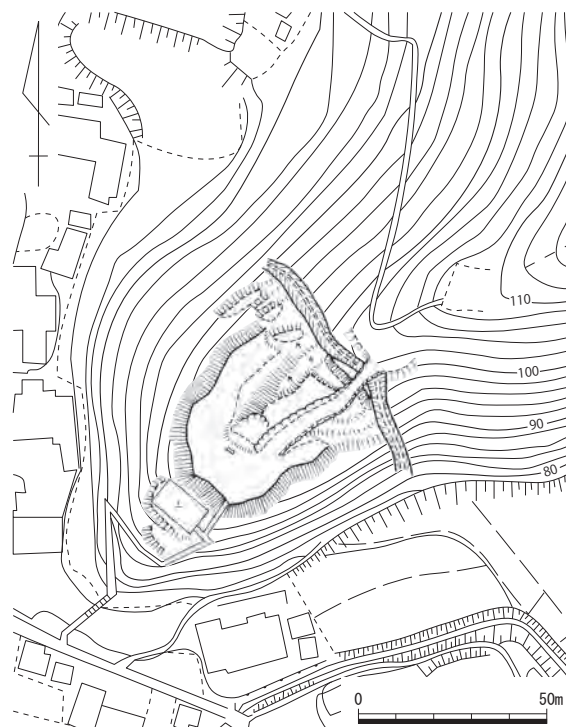


第 25 図 茶臼山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川右岸の標高約 90 m、比高約 30 m の丘陵南端に立地し、大守八幡宮の南西隣にある。宇甘川を挟んで、本城より北西約 1.8km には城ノ段跡、西約 1km には天満城跡、南西約 1.3km には金高城跡が位置する。

概要 城域は東西 70 m、南北 80 m と中規模でも小さい。頂部と下段の曲輪を中心とし、北東側の尾根筋を堀切で防御する縄張りである。頂部の曲輪は狭くて北端に低い土塁を設けるが、東側と南側は後世の削平が著しい。曲輪下段には幅 10 m 前後の「U」字形の曲輪があり、東西は帯曲輪状となる。さらに尾根南端には小曲輪 2 面が連続する。北東側の尾根筋は堀切 1 条で区切る。堀切は幅 4 m 前後で深さ約 2 m、東西斜面まで延長 70 m と長く延びる。

文献・伝承 浄源庵の建立が伝わる。
(米田)



第 26 図 久保城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川が南流から東流へ屈折して流れるところの左岸にある標高約 330 m、比高差約 240 m の急峻な山頂部に立地し、北東を除く各方向への眺望が優れる。本城から宇甘川を挟んで北西約 6 km には虎倉城跡、南東約 1 km には城ノ段跡が位置する。

概要 城域は東西 240 m、南北 90 m と大規模で、頂部の曲輪を中心に東西に延びる尾根に曲輪群を連続的に配置した構造をもつ。頂部には主郭となる約 30 m × 20 m の曲輪 I がある。周縁の切岸は極めて急で険しい。頂部から南東側の尾根上には小曲輪が 7 面連続し、尾根の東西端には幅狭の通路がある。尾根の南東端には、南西へ長く延びる幅 7 m 程の堀切があり、南東斜面を遮断する。また、頂部から北側に延びる尾根には、曲輪は配置されておらず、急な切岸下の鞍部に浅い堀切状の造作が認められるに過ぎない。一方、頂部の西斜面には小曲輪を 2 面配置する。さらに西側に続く尾根の鞍部には平坦面が広がり、南縁には幅 5 m の通路が東西にある。ただ、通路については林道による地形改変の可能性も残る。このほか、西側尾根の鞍部の西側には、径約 5 m の浅い凹みがある。西側尾根の西端頂部は造成があまりいが、頂部の南西半は曲輪状に造成されている。西側尾根西端の北西と南西にはそれぞれ弧状の堀切で区切られている。全体的に宇甘川に面した西側と南東側を堅固に守る縄張りといえる。

文献・伝承 故事来歴は不明である。 (米田)

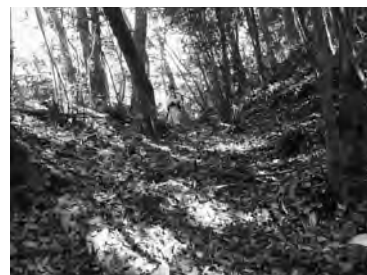
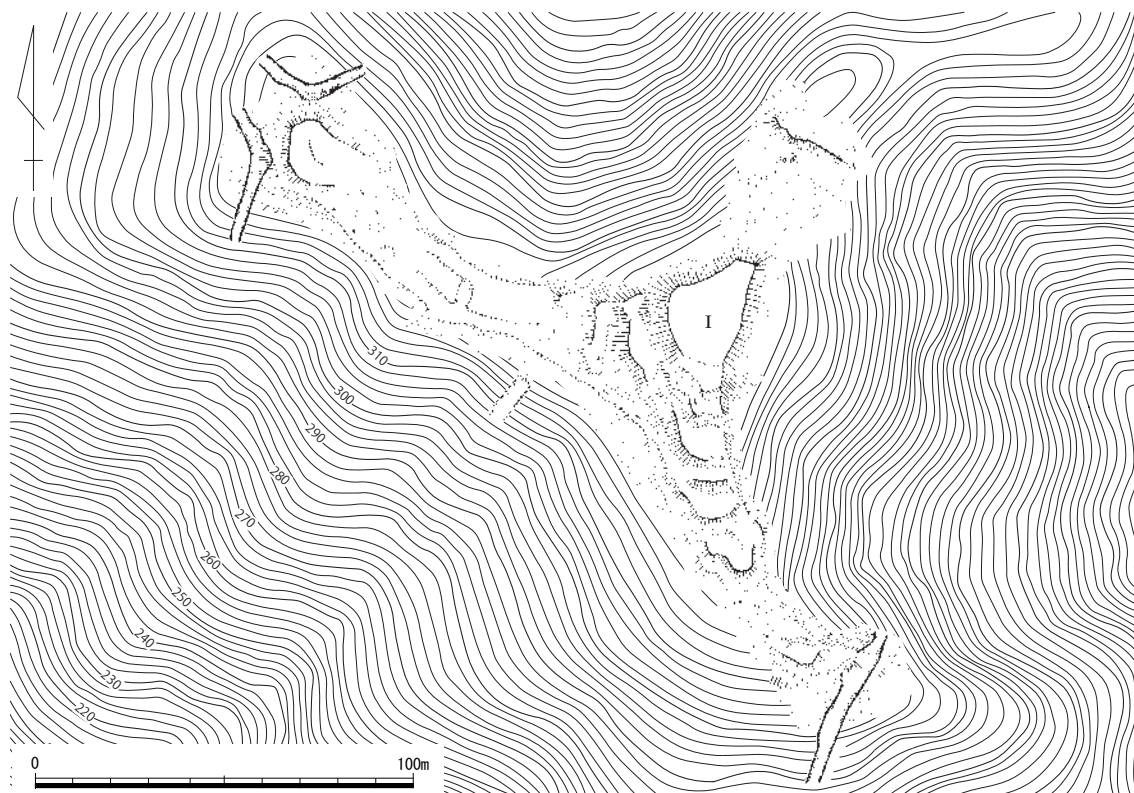


写真 26 西側尾根南西の堀切
(南から)



第 27 図 石原城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 宇甘川及びその流れにより形成された狭い平野を北に見下ろす尾根頂部に位置する。川を挟んで北東 1.1kmには石原城跡が、南東 1.2kmには天満城跡が位置するが、相互を加茂往来が結ぶ位置関係にある。また 400 m 東側、平野の南奥の地点に宇甘神社が建つ。

概要 東に派生する尾根頂部に位置する。尾根頂部を掘削して造成した長い砲弾形の平坦面(曲輪 I)が主郭である。曲輪 I の北・東・南側は自然の急斜面を利用し、西側には曲輪 II の切岸が立ち上がる。曲輪 II もやや掘削して平坦面を造成していた。曲輪 II の背後にあたる西側には土塁・堀切を設け、山体と分断を図っている。土塁は高さ 50cm 程度で、南北端はそれぞれの斜面を下る。堀切は深さ 50cm～2.5 m 程である。曲輪 II の南北側には小曲輪をそれぞれに造成していた。

文献・伝承 地元の伝承をもとに、畑和良の案内で踏査を実施した。城跡が位置する尾根南麓の新池の堤南端に「先祀 伊賀氏之流 河原平内之墓 天正十六年五月」と刻まれた石碑が建つことから、地元には河原平内の居城とする考えもある。(上椽)



写真 27 曲輪 I (西から)

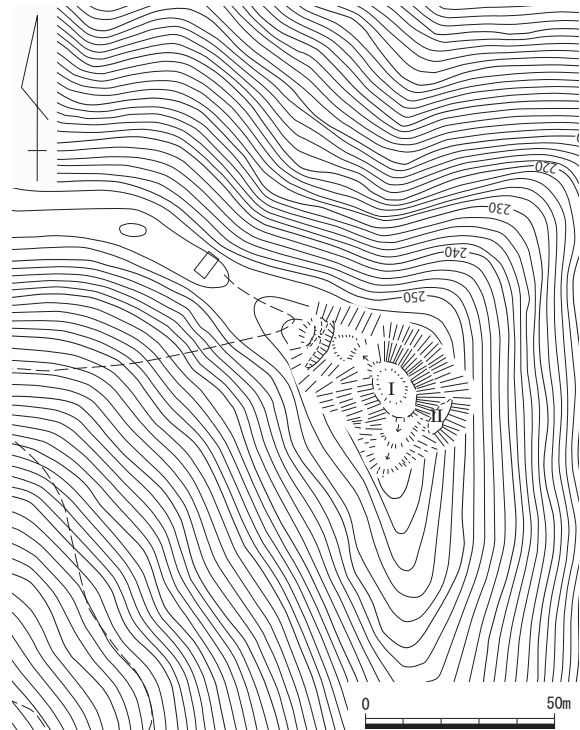


第 28 図 城ノ段跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 宇甘川右岸にある山頂部に位置する。天満城跡が位置する山の南側を西向きに入る谷筋には、勝尾峠を越える備中往来が、宇甘川流域には加茂往来が通る交通の要衝を押さえた立地といえる。なお備中往来が通る谷筋を挟んだ南側の山頂部には金高城跡が位置する。

概要 宇甘川を見下ろすことができる山頂部で平坦面を確認した。平坦面の周囲に切岸を造成している形跡はうかがえなかったが、西に下る尾根筋を堀切で分断していることから、頂部平坦面は曲輪と判断した。また東側斜面にも小規模な曲輪Ⅱを造成していた。曲輪Ⅰから南へは自然地形のまままで防御施設は確認できない。常駐的な城館よりも、見張り所としての機能を想定すべきか。

文献・伝承 天満城跡に関する文献・伝承は確認できない。
(上楯)

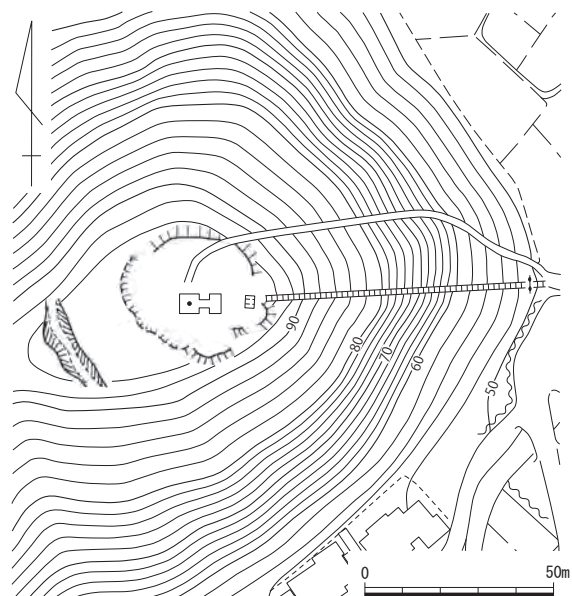


第 29 図 天満城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川を北方に望む山頂部に立地する。

概要 基本的に単郭式の山城と思われる。現況は山林と社地（正八幡宮）であるが、神社建立によって主郭にあたる曲輪面は大きく削平を受けている。ただし、正八幡宮の西側には東方向に延びる尾根筋を切断する深さ 1～1.5 m の堀切が 1 条確認できた。その規模から宇甘川流域の国人の動向を確認する砦程度の性格を有する城跡と思われる。

文献・伝承 正八幡宮には天正 14 (1586) 年に宇喜多孫一郎発願の再建棟札があるとされ、嘉暦元 (1326) 年に山城国石清水八幡宮に勧請したとされる。その場合、この城跡と神社の関係性の検討が必要である。なお、『御津の山城』によると、地元では「菅館砦跡」と呼ばれているようである。
(澤山)



第 30 図 菅館砦跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川右岸にある細長い山頂部に位置する。金高城跡が位置する山の北側を西向きに入る谷筋には、勝尾峠を越える備中往来が、東側を南流する宇甘川流域には加茂往来が通り、交通の要衝を押さえた立地といえる。なお備中往来が通る谷筋を挟んだ北側の山頂部には天満城跡が位置する。

概要 城館関連遺構は大きく東西に分かれて確認できた。両地点の中間部にも尾根の頂部が2か所認められるが、幅は狭く、明確な人工の造作は確認できなかった。平坦面すら認められず、曲輪の中間部は自然地形のままで、連絡通路として利用した可能性はある。ここでは曲輪を確認した地点を基に西曲輪・東曲輪として報告する。

西曲輪は、頂部を基点とし自然地形に即して鍵状に屈曲する。すぐ東側の尾根頂部との境にやや緩やかな堀切状の凹みが確認できた。堀切状凹みから西はごく緩やかな傾斜が頂部平坦面（曲輪Ⅰ）まで続く。曲輪Ⅰの北側には「U」字状に大きく曲がるスロープがあり、北側の曲輪Ⅱに下りる。曲輪Ⅱの西側は山道状に細長くなり、西端は幅3m、長さ4m程度の平坦面を造成していた。この北側に2m程下がった地点にも同様の平坦面が造成されていた。これら平坦面に西側は切岸状に切られていることから、平坦面を横矢掛けとした可能性が推測される。なお横矢掛け状施設の西側は豎堀状の凹みがみられた。頂部平坦面から尾根筋は南に緩やかに下がりながら延びる。この地点の西側は高さ2～3m程の切岸状に切られていた。切岸状に切られた地点の南側斜面には豎堀が斜面を下る。なお、同様の施設は北側斜面には確認できなかった。曲輪の南北斜面に明確な造成はなされておらず、急峻な自然地形のままと考える。なお曲輪Ⅰからは宇甘川から西に入り込む谷筋を南に見下ろすことができる。東端に浅い堀切状の凹みは確認できるが、概して西方への志向性が高い曲輪である。

東曲輪は西から北東方向に鍵状に連なる尾根筋が北に大きく迫り出す頂部を占める。曲輪Ⅲは略方形形状で、南側は切岸状に掘削して東西側は自然地形を要害として利用していた。曲輪Ⅲの北側下段には曲輪Ⅳを造成していた。曲輪Ⅳは曲輪Ⅲの南側から東回りのスロープで下り連結しており、曲輪Ⅰ・Ⅱの構造と近似する。曲輪Ⅳから緩斜面が北に三角状に延びて、自然に落ちる。なお東曲輪からは宇甘川の流れと備中往来を捉えることができる。周囲を切岸で守るが、北から東方の眺望を指向して造作された可能性が高い。

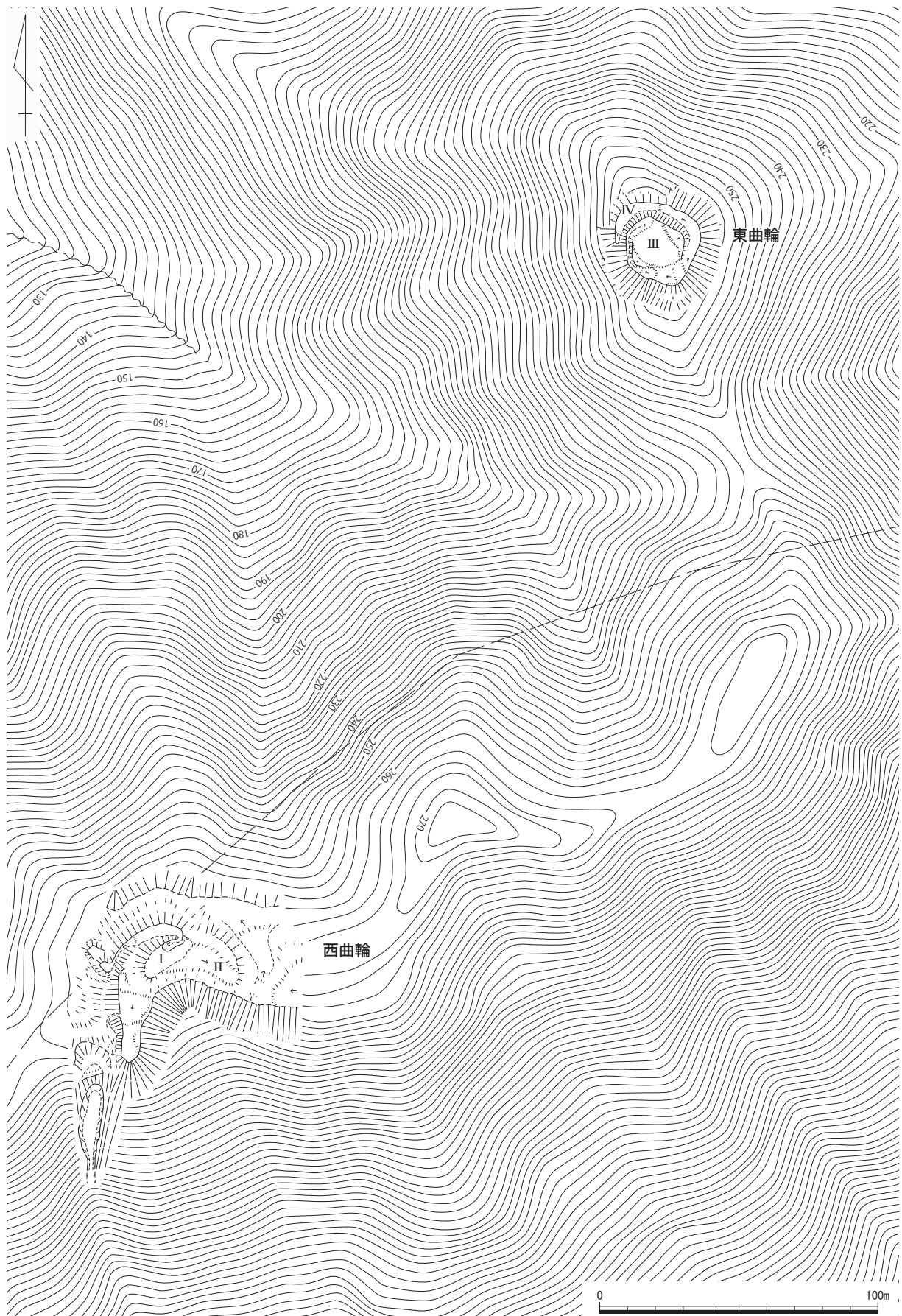
文献・伝承 『吉備温故秘録』には「古城 宇甘上村の江田、九谷の良にあり」という記述があり、金高城が該当すると推測される。 (上村)



写真 28 豎堀（北から）



写真 29 曲輪Ⅲ・Ⅳ（南西から）



第 31 図 金高城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 備前・備中国境の山塊頂部に立地し、谷を挟んだ西方約 300 m の山頂には忍山城跡が位置する。
概要 基本的に単郭式の山城であり、主郭の南西部には高さ約 50cm～1 m の土壇が築かれ、表に「奉修太古地之碑」の銘を残す延享元（1744）年の石碑が立てられている。主郭の東隅は切岸が低く、緩い凹みを持った通路状を呈しており虎口と考えられる。また、主郭の南西側及び南東側約 50cm～2 m 下方の周囲に平面形が「L」字形を呈する曲輪が設けられている。この曲輪の南西端には通路状を呈する土塁が認められる。さらに南西斜面には幅約 1.5 m の犬走りがみられる。

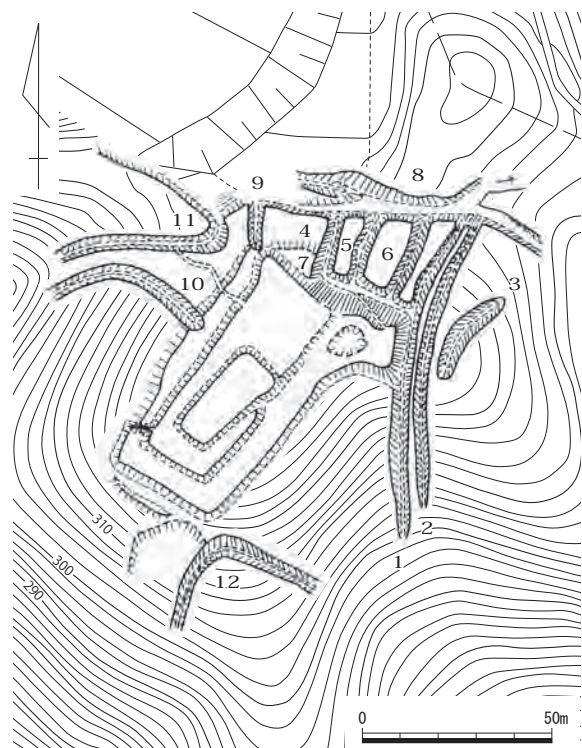
天正 9（1581）年に起きた忍山合戦に際して、宇喜多側の救援・攻撃の防御を意識してか、特に東方側の尾根部の堀切・豎堀群等は秀逸である。東方には深さ約 2 m で急峻かつ密接して配置された 2 条の堀切 1・2 があり、さらに東側にやや長さが短い堀切 3 が掘られている。また、堀切 1・2 と並行して西側に豎堀 4・5・6 が築かれ、それぞれの堀端部が横堀状を呈する堀切 7・8 と連結されている。堀切 8 は、現状から東西端が分岐していると思われ、さらに、主郭の北端から延びる豎堀 9 とつながっている。一方、主郭の北西側の尾根部には、豎堀 10 と平面形が「V」字状を呈している堀切 11 が築かれている。また、主郭の南側の尾根部にも、尾根部で連結されて平面形が「V」字状を呈している堀切 12 が認められる。

文献・伝承 津高郡勝尾村に所在する岡但馬が居城した城館として『備前記』・『和気絹』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備前秘録』・『吉備前鑑』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』では「船（舟）山城」等が記載され、本城跡はこれらに比定される。また、『東備郡村誌』では伊賀与次郎の在城も認められる。城史を示す参考史料（60）がある。

なお、畑和良によれば、城が築かれた山頂は備前国勝尾村では勝尾山、備中国高田村では信倉山と呼ぶとされ、本来「勝尾山城」は「信倉山城」と同一城跡であるとする。（澤山）



写真 30 堀切 1・2（北から）



第 32 図 勝尾山城跡縄張り図（1/2,000）

作図：島崎東

立地 標高 250 m の頂部から北に延びる尾根先端頂部に位置する。北側には東流する旭川を見下ろすことができる。旭川を挟んで北に位置する山の南麓には延文年間（1356～1360）に金川城主松田氏が改造・寄進した熊野神社（旧号：八幡宮）が所在する。また、熊野神社の東側にある蓮光寺は丹生民部の建立と伝わる。

概要 尾根先端頂部に略長方形の曲輪Ⅰを配置し、その南北に複数の曲輪を造成していた。城域の南端は尾根筋を深さ 10 m 程の堀切で分断し、さらにその 10 m 程南側に切岸を造成していた。曲輪Ⅰの南斜面には石積みを確認できた。曲輪Ⅱは西側 5 m 程を 1 段高く造成する構造である。この高い段から土橋状のスロープが曲輪Ⅰに上がる。曲輪Ⅲは北半分がやや高くなっており、その北側で幅 3～4 m の東西に長い凹みを確認できた。東西端部は掘り抜いていないことから、堀切としての機能ではなく、通路を狭める意図がうかがえる。曲輪Ⅰの北側斜面にも複数の曲輪が造成されていた。曲輪Ⅳは曲輪Ⅰから降る尾根筋を横矢掛け状に残すように造成された曲輪である。曲輪Ⅴは南端部に土塁を造成していた。南北斜面では 3～4 段に積み上げた高さ約 50 cm の石積みを確認した。鹿瀬城跡は旭川が東流する北側への眺望を意識して造営された城跡で、背後の南尾根を深い堀切で分断して守りとしていた。北側は断崖で、東西側には深い谷が入り、天然の守りとなっている。

文献・伝承 赤松氏家臣丹生民部が在城したという。（上村）



写真 31 曲輪Ⅰの石積み（南から）



第 33 図 鹿瀬城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 宇甘川が旭川に注ぎ込む合流点を見下ろす臥龍山頂部に立地する。南北を結ぶ旭川の水運と、吉備高原を横断して高梁に至る陸路を押さえた占地である。近世には岡山と津山を結ぶ津山往来が臥龍山の南麓から西回りで通り、金川陣屋が形成された。旭川を挟んで北東に熊谷城跡が、東に寺山城跡がある。南麓の七曲神社は松田の氏神として長禄元（1457）年に神奈川県七曲山から勧請されたと伝わる。永禄 11（1568）年の落城後に別所へ移されたが、寛文 9（1669）年に日置氏が再建した。

概要 臥龍山頂とそこから派生する複数の尾根に曲輪を造成する。従来、「本丸」・「二の丸」・「出丸」・「北の丸」・「道林寺丸」と呼称されてきたため、本報告でもおおよそはそれに準拠したい。

臥龍山頂部にある「本丸」の曲輪Ⅰは北辺がやや張り出した略長形状を呈し、西方に虎口を設ける。緩く傾斜する虎口は、食い違いの虎口を 2 重に設え、その間を枳形としていた。土塁外面には石垣が囲繞する場所がある。石垣が確認できない場所でも石列が認められることがあり、さらに「本丸」内外で石垣に用いたと考えられる石材が曲輪Ⅰ内外に散乱することから、本来は全周を石垣で取り巻く構造であったと推察する。曲輪Ⅰの北下方には岩盤をくり抜いた井戸（天守の井戸）が位置する。また本丸の南下方の曲輪Ⅱには 8 本の豎堀が不定間隔で掘削されていた。この曲輪にも石垣石材が多く散乱する。

「二の丸」の曲輪Ⅲは「L」字形を呈し、中央部北寄りには幅広い土塁で守る。土塁は北東角にもわずかに残存していた。中央付近の凹みには石積みの井戸が設えていた。中央付近の凹みの北側にも浅い凹みがあり、井戸との関わりが示唆される。「二の丸」の北・東下方には「L」字状の曲輪Ⅳが造成される。ここでは石垣に使用したと推測される石材が散乱していることから、曲輪Ⅲの北から東斜面にも石垣を築成した可能性が想起される。

曲輪Ⅱから北に派生する尾根筋には曲輪 13 面を連郭状に造成する。曲輪Ⅴは曲輪Ⅳと接続する。曲輪の規模に大小あるが、いずれにも明確な防御施設は確認できない。「二の丸」の南西側に派生する尾根でも 6 面の曲輪が確認された。面積・形状に規格はなく、さらに明確な防御施設が確認できないなど、北東尾根の曲輪群と共通する特徴といえる。他方、曲輪Ⅲの南側小尾根では堀切と豎堀・土塁が確認できたが、曲輪はあまり明確ではなく、防御施設のみを造作したと考える。

「出丸」の曲輪Ⅵは略長形状を呈し、前面（南東面）には石積みが一部残存していた。出丸の南東側斜面には 14 本の豎堀からなる畝状豎堀群が掘削されていたが、傾斜が特に厳しい地点では豎堀が確認できず、この地点については斜面を要害として活用したものと推察する。

「道林寺丸」は比較的広い曲輪 5 面と複数の小規模な腰曲輪から構成される。曲輪Ⅶ～Ⅷからは宇甘川の流れを西に見下ろせ、曲輪Ⅸからは宇甘川及び旭川を一望できる。曲輪Ⅶの北から西辺には低い土塁が残り、南斜面には石積みが確認できた。曲輪Ⅷの西寄りには平面形が略「L」字形の基壇状高まりがみられる。この曲輪の東辺には現山道に沿うように石垣が残り、現山道が当時の通路を踏襲している可能性を示唆する。さらに南斜面の一部でも石積みを確認した。曲輪Ⅷの南東角から曲輪Ⅸの北東角にかけて横矢掛けが延びるが、山道が大きく迂回するすぐ西側に位置することから、山道からの侵入に対する防御施設と推察する。

「北の丸」の尾根頂部に位置する曲輪Ⅹは南西部が 1 m 程高く、西辺の一部には土塁が造作されて

いた。北端は2条の堀切及び4本の豎堀を掘削して守りを固める。豎堀は尾根筋の東・西斜面に対面するように2本ずつ掘削されていた。そのすぐ南側に2条に堀を掘削して守りを固めていた。これら防御施設の北側は緩やかな尾根筋が続くことから、「北の丸」は尾根筋からの攻撃を強く意識して造成されたことがうかがえる。曲輪Ⅹの北西部から西斜面には豎堀が1本確認できた。曲輪Ⅹの南側には犬走り状の曲輪が東谷筋へと続く。東谷筋における最下段の曲輪Ⅺでは石積み井戸が確認できる。「本丸」斜面と「北の丸」との接合地点には横堀や土塁が造作されており、「本丸」の守りを一段と固めていた。

文献・伝承 『東備郡村誌』には、相模国の松田十郎盛朝が承久の乱の戦功によりこの地を与えられ、承久年間（1219～1222）に城を構えたとある。他方、『松田氏系図』によると、相模国の松田元国が鎌倉時代末の争乱に南朝方につき、倒幕の恩賞として備前国御野郡伊福郷を賜り、備前へ移住して岡山市北区矢坂東町の富山城に居城を構えたとする。元国の子元喬が暦応2（1339）年に金川に移って臥龍山に築城したのが金川城という。永正6（1509）年、元勝は京の三条西実隆に城の名称を求め、「麗水」・「玉松」の二書を授かり、これ以降には玉松城と呼称するようになる。

築城以来、松田氏の本拠となった金川城は、永禄11（1568）年に宇喜多直家による攻撃を受ける。『備前軍記』によると、赤坂郡矢原村に陣を敷いた直家は虎倉城の伊賀久隆に寝返りを持ちかけた。久隆は直家の誘いに応じて道林寺丸に兵を入れ、銃撃しながら本丸に攻め寄せた。城兵これに応戦したが、松田元輝が銃弾に倒れ、指揮は子息元賢の手に渡る。翌日、伊賀勢に直家軍も合流したことで松田勢は押され、元賢は城から脱出して金川城は落ちた。下田村（岡山市北区御津下田）まで逃げ延びた元賢は、虎倉城の伏兵により惨殺され、松田氏は滅亡することになった。直家は弟の浮田春家（文中ママ）を城番に定め、岡山平野の北の押さえとして金川城を利用している。

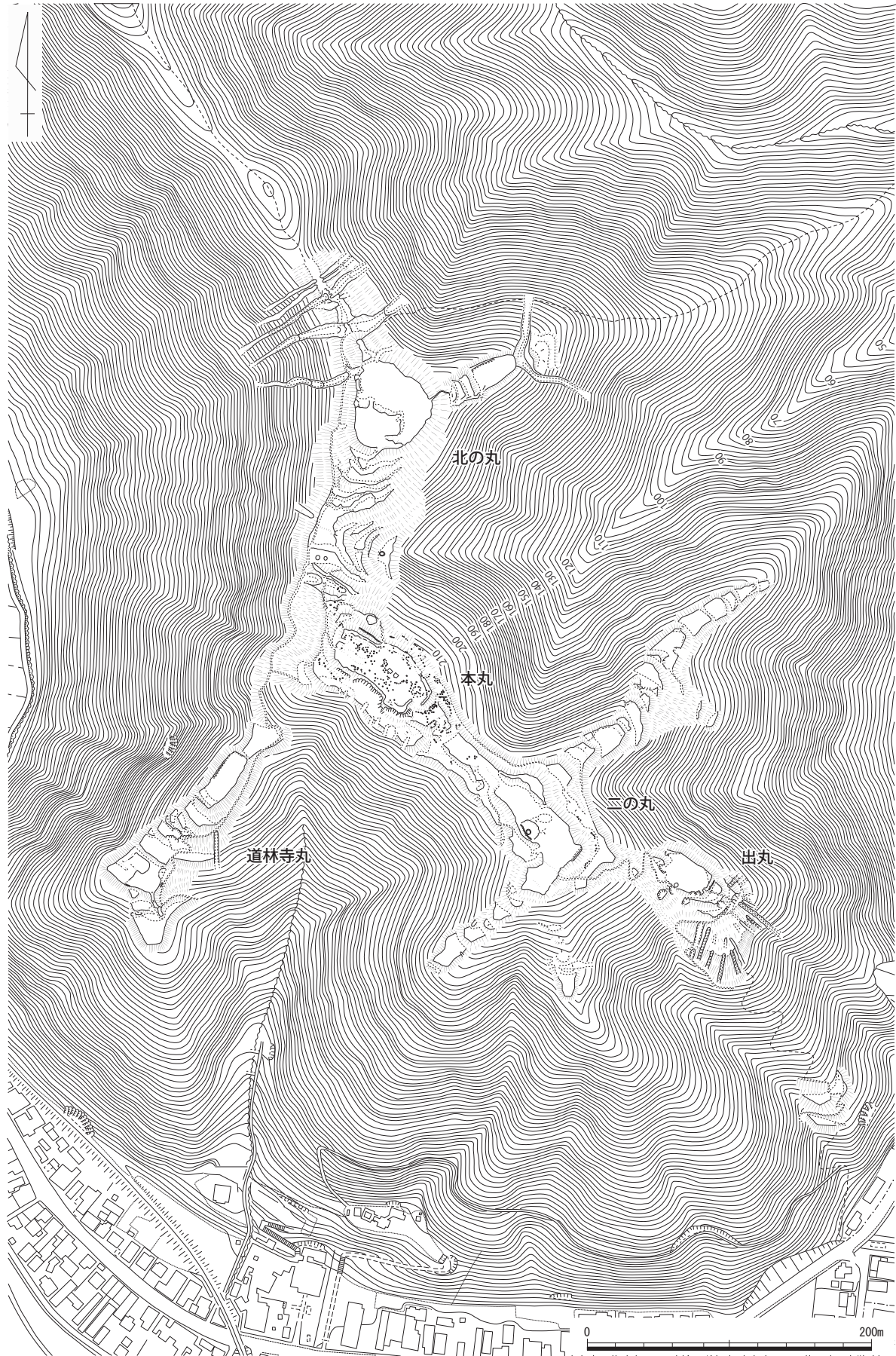
池田利隆が岡山在城の頃（慶長8～18（1603～1613）年）、日置猪右衛門は金川の古城の修築を命じられ、本丸から出丸に至るまで石垣が整備された。慶長20（1615）年には一国一城令に応じ廃城となるが、本丸や二の丸で確認された石垣石材の散乱は破城に伴うと推察される。（上村）



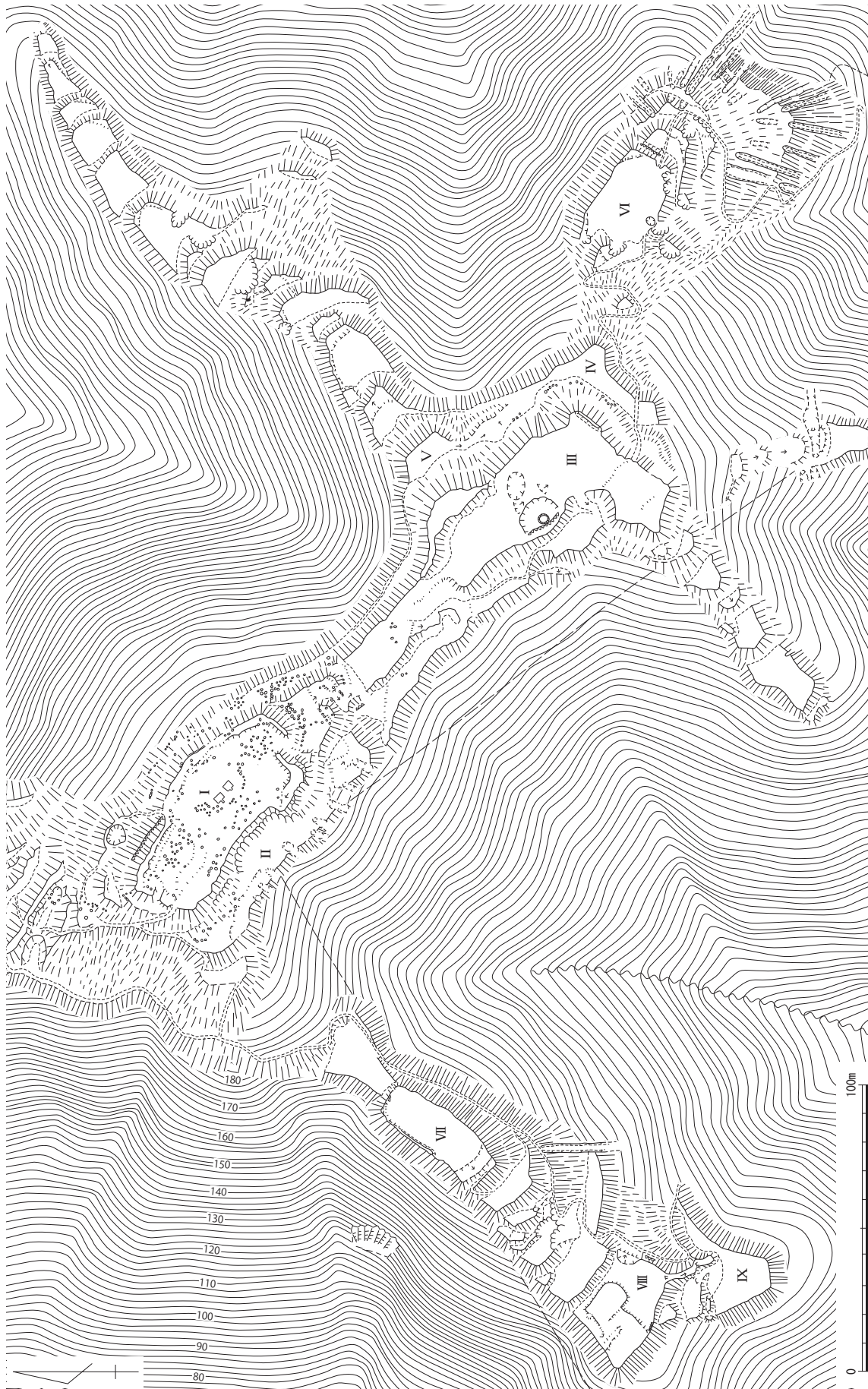
写真 32 曲輪Ⅰ 虎口（北西から）



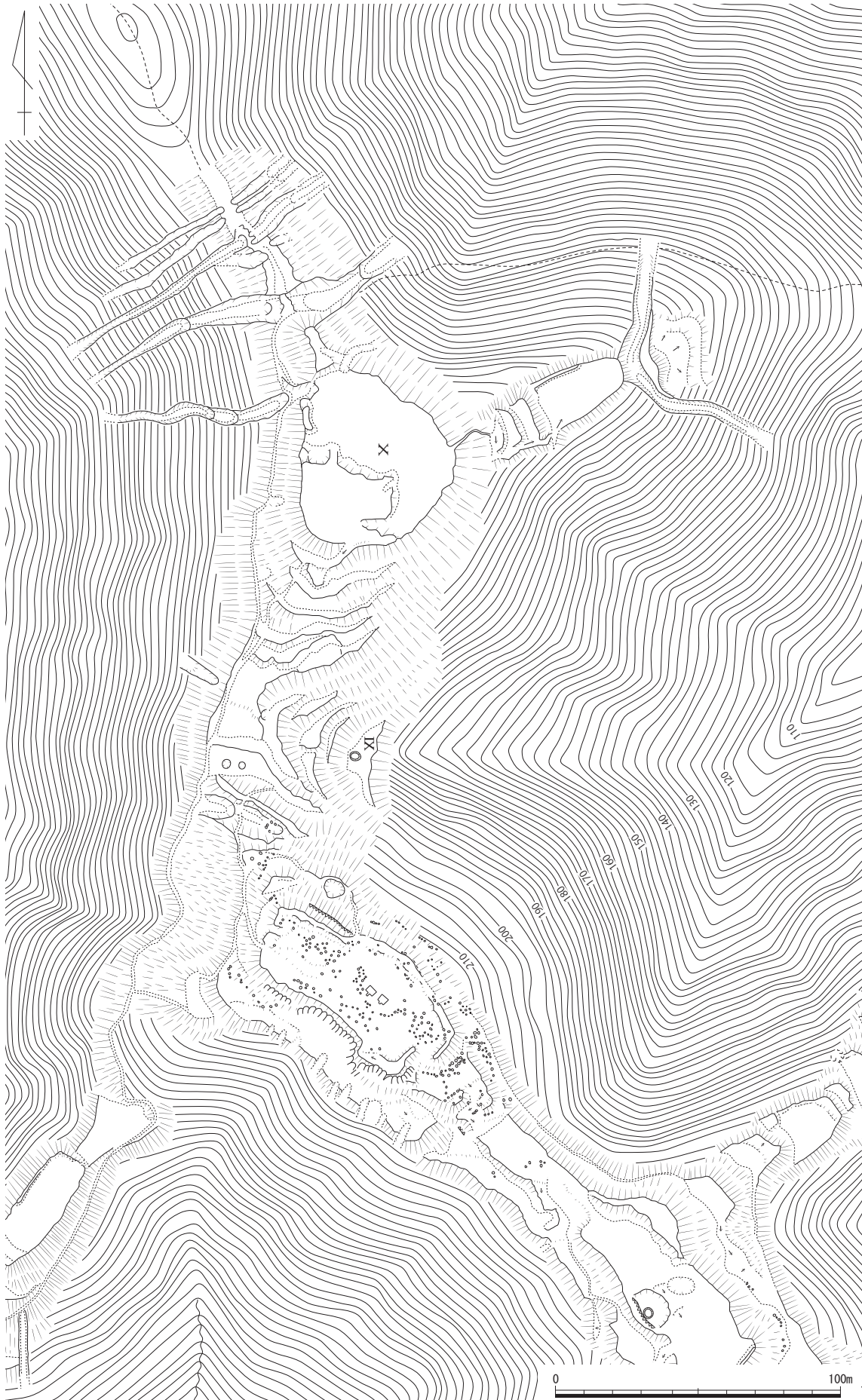
写真 33 曲輪Ⅰ 北西土塁（南東から）



第 34 図 金川城跡縄張り図 (1/4,000)



第35図 金川城跡本丸・二の丸・出丸・道林寺丸縄張り図 (1/2,000)



第 36 図 金川城跡北の丸縄張り図 (1/2,000)

立地 旭川水系の三谷川の右岸に位置する独立的な山塊の山頂部に立地する。

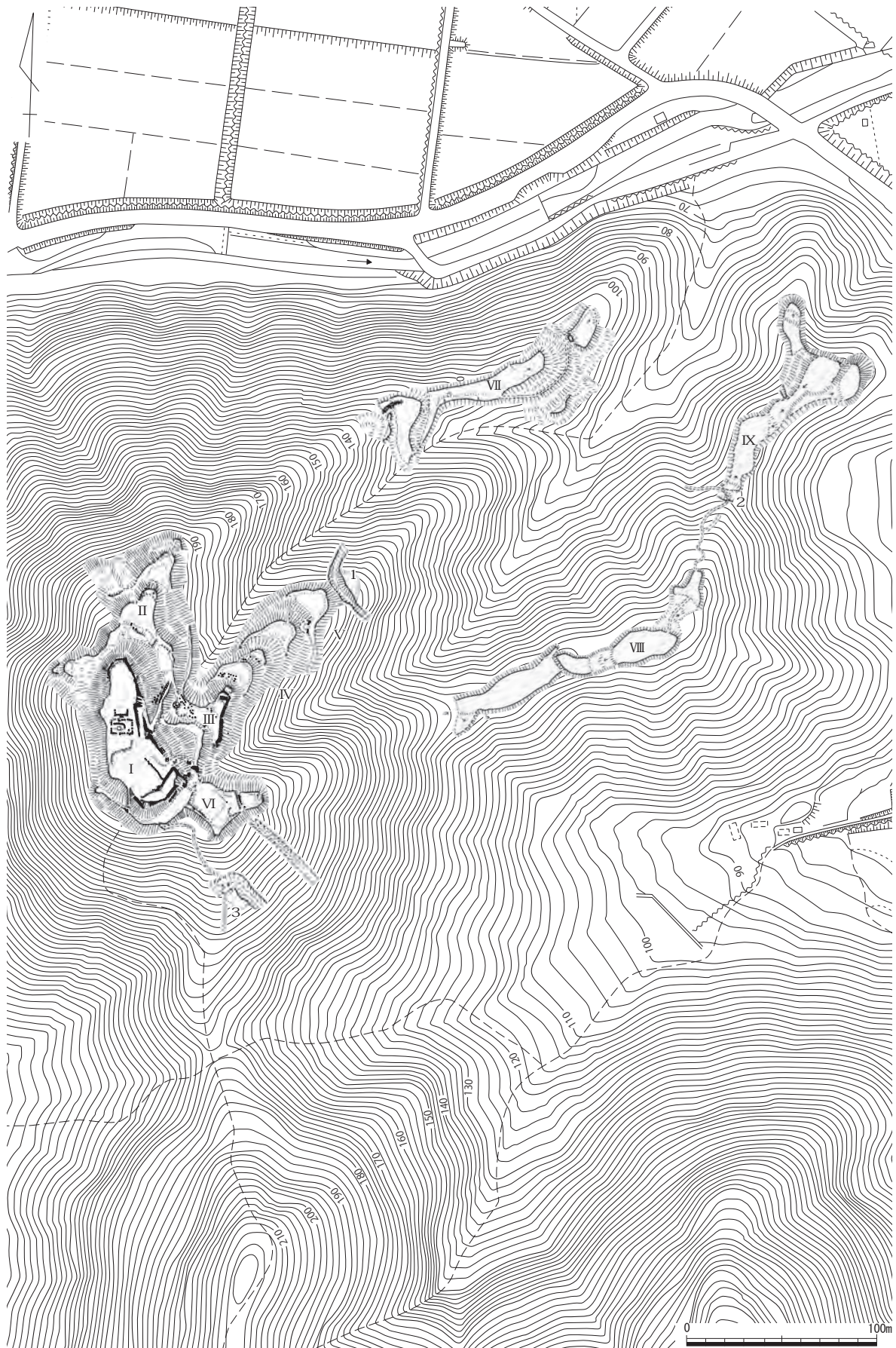
概要 山頂部の「本丸」と呼ばれる曲輪Ⅰを中心に、北方向に延びる尾根上に「出曲輪」と呼ばれる曲輪群Ⅱ、北東方向に延びる尾根上に「二の丸」・「大手曲輪」・「大手出曲輪」と呼ばれる曲輪群Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、南東方向に延びる尾根上に「三の丸」と呼ばれる曲輪群Ⅵを配置している。加えて、曲輪群Ⅱ・Ⅵが築かれたそれぞれの尾根先端部付近には「出丸」と思われる曲輪群Ⅶ～Ⅸが認められる。こうした縄張りから、徳倉城跡は複合的な連郭式山城であるといえる。また、曲輪Ⅰ・曲輪群Ⅲでは瓦片が採集されていることから、何らかの建築物が存在したと考えられ、また、曲輪Ⅰの石垣や虎口の築造は、前代の中世山城を大幅に改修したことを示している。

曲輪Ⅰは南側が広い面積をもつ茄子形を呈する曲輪であるが、縁辺をみると、細かい折れが認められる。曲輪面は北半側が高く、南半側が低くなっているが、妙見宮の建立によって、南半側の平坦面の一部は地形改変を受けていると思われる。北半側には平面形が長方形を呈する石積みで囲まれた土壇が築かれており、時期は判然としないが、何らかの建物が存在した可能性がある。一方、南半側には高さ約 1.5 m のやや弧状を呈する平面形が長方形の土壇が築かれており、その壁面には、南西・南東端付近の一部で欠落が認められるものの石垣が築かれている。また、その内側の中央付近には乗降可能な階段状の石組みも認められることから、櫓や塀などの構築物が存在した可能性がある。

曲輪Ⅰの虎口は3か所設けられている。このうち、曲輪Ⅰの東辺の中央付近から曲輪群Ⅲ方向に通ずるものは、通路が鋭角に屈折する折坂虎口を採用している。この通路の曲輪Ⅰの直下にあたる屈折部はやや広い枡形状を呈しており、横矢が掛かっている。加えて、曲輪Ⅰの北端から東辺を巡る高さ約 4～5 m の石垣とつながることにより、より堅固な防御施設を構築している。一方、曲輪Ⅰの東辺南端から曲輪群Ⅲ及び曲輪群Ⅵ方向に通ずるものは、坂虎口を採用している。曲輪Ⅰ側には「L」字形に囲む石列によって、内枡形状の施設を設けている。通路幅は狭く、曲輪Ⅰの南半側に築かれた土壇壁面の石垣から転落した石材により、現状では曲輪群Ⅲと曲輪群Ⅵの分岐の場所は遮蔽状態となっている。曲輪Ⅰの西辺南端から曲輪群Ⅵ方向に通ずるものは、通路幅が狭い坂虎口を採用しており、通路が屈曲する場所には石積みが認められる。

曲輪群Ⅱは曲輪Ⅰの北側に比高約 3～6 m を測る大小 4 面の曲輪で構成されており、このうち上段の曲輪は曲輪Ⅰの東辺の中央付近や曲輪群Ⅲに取り付いている通路とつながっている。また、上段と中段の曲輪の斜面に石垣の痕跡と思われる石積みが認められる。さらに、曲輪群Ⅱから約 60 m 下方にあたる尾根先端付近には、大小 3 面の曲輪で構成される曲輪群Ⅶが認められる。

曲輪群Ⅲ～Ⅴは、曲輪Ⅰの北東側に比高約 2～6 m で連なる大小の曲輪群で構成されている。曲輪群Ⅲは平面形が「L」字状を呈する曲輪であり、その上方には「V」字状を呈する小曲輪が設けられている。曲輪群Ⅲの中央付近には石列による区画が認められることから、何らかの構築物が存在したと思われる。また、曲輪Ⅰの東辺中央付近に取り付いている通路と曲輪群Ⅱが交差する付近には、岩盤をうがって掘削された井戸がある。曲輪群Ⅲは曲輪Ⅰと比較すると小規模であるが、曲輪の北東端から東辺にかけては石垣が築かれている。さらに、その端部に築かれた虎口状を呈する小曲輪にも、周囲を巡る同様な石垣が設けることによって、曲輪群Ⅲの防御性を高めている。



第 37 図 徳倉城跡縄張り図 (1/3,000)

曲輪群Ⅳは、虎口状を呈する小曲輪の下方に位置し、連続的に築かれた大小2面の曲輪で構成されている。上方に位置する曲輪は比較的大形であり、現状で曲輪群Ⅲの虎口状を呈する小曲輪に向かって、尾根筋に沿うように通路が取り付いていると思われる。一方、下方に位置する付属的曲輪は小規模であり、南東端から台形状の平坦面を造り出している。

曲輪群Ⅴは、曲輪群Ⅳの下方に位置し、比較的大形の2面の曲輪で構成されている。これらの曲輪と曲輪群Ⅳの下方の曲輪までの通路は、これらの西側に位置する谷に沿うように各曲輪の南西端に取り付くように設けられている。また、曲輪群Ⅴの北端では、尾根を切断して幅6m、深さ8mを測る深い堀切1が掘削されている。

曲輪群Ⅵは、曲輪Ⅰの南東側に位置する不整な五角形を呈する曲輪である。曲輪面には方形の土壇状の高まりが認められ、南辺には高さ約1mの土塁が築かれている。この西側上方には細長い曲輪が設けられており、東側下方には曲輪群Ⅵとの間に石垣をもつ小曲輪が築かれている。この小曲輪の南東側斜面には縦堀1本が掘削されている。

この曲輪群Ⅵから北東方向に約100m下方の尾根上に大小3面の曲輪で構成される曲輪群Ⅷが、さらに、この曲輪群から約100m下方の尾根上に大小4面の曲輪で構成される曲輪群Ⅸが築かれ、南端には深さ約1mの浅い堀切2が認められる。このうち尾根最先端に築かれた曲輪の北辺には石積みが見られる。一方、曲輪群Ⅵから山塊頂に向かう南方向に約20m下方の尾根上には、堀切3を設けている。なお、ここから約70m南側には、麓の通じる登山道に沿って長さ約200m以上を測る溝が認められるが、この溝が縦堀として当時の城の防御施設として機能したかは判然としない。

文献・伝承 『備前記』には遠藤河内守が在城した津高郡河内村に所在する「戸倉古城」、『和氣絹』には越後守師秀、宇垣市郎兵衛、遠藤河内が在城した津高郡小田村に所在する「戸倉城」・「土倉城」・「徳倉城」、『備陽記』には遠藤河内が在城した津高郡河内村に所在する「戸倉古城跡」、『備陽国誌』には宇垣一郎兵衛、遠藤河内が在城した津高郡に所在する「戸倉山城」・「徳倉城」、『吉備前秘録』には須々木備前（中）守、浮田河内守が在城した津高郡宇垣村河内に所在する「土倉の城」、『吉備前鑑』には浮田河内（別名遠藤喜三郎）が在城した津高郡に所在する「土倉古城山」、『吉備温故秘録』には越前守師秀、須々木備前守、宇垣市郎兵衛、宇喜多河内が在城した津高郡河内村に所在する「戸倉城」・「徳倉城」、『撮要録』には遠藤河内守が在城した津高郡河内村に所在する「城」、『東備郡村誌』には越後守師秀、宇垣市郎兵衛、遠藤河内守が在城した津高郡宇垣郷河内村に所在する「戸倉の城址」などの記述がみられる。城史を示す一次史料（132・174・266・276）や参考史料（19・30）がある。

（澤山）



写真 34 曲輪Ⅰ北半土壇（北から）



写真 35 曲輪Ⅰ南半土壇（北西から）



写真 36 曲輪 I 東辺石垣 (北東から)



写真 37 曲輪 I 主郭 (南から)



写真 38 曲輪群 III 東辺石垣 (南東から)



写真 39 曲輪群 III 井戸 (北東から)



写真 40 曲輪群 III 北端石垣 (北から)



写真 41 曲輪群 V 北東側堀切 (南東から)



写真 42 曲輪群 VI 土塁 (北東から)



写真 43 曲輪群 VI 東端石垣 (北から)

立地 龍王山の東麓にある梨い凧から鳴谷川（砂川）河川敷にかけて立地し、備前と備中の国境にあたる。鳴谷川は『中国兵乱記』にみえる「長野川」に比定され、現在は砂川とも呼ばれる。周辺には鳴谷川河川敷から梨い凧を越えた南西 3.4kmには備中高松城跡、南東 600 mに長野城跡が位置する。

概要 この遺跡は天正 10（1582）年に羽柴秀吉が備中戦役で水攻めする際、備中高松城の前面に築堤して足守川を堰き止めて水を引き入れると同時に、背後にある峠を開削して水路を設け、鳴谷川を堰き止めて導水しようと計画した施工場所である。峠の開削は全長約 410 mに及び、最大で約 9 m掘り下げるものであったが、開削を約 90 m掘り残したところで、足守川の増水により高松城水攻めの目的が果たされ、工事が中断されてしまったとされる。1964 年 12 月 2 日に「高松城水攻め鳴谷川遺跡 附工事奉行の墓」として県史跡に指定された。指定範囲は 2,089㎡に及ぶ。

鳴谷川は、横尾橋から鳴谷橋の間で北西側の上流から東へ屈曲して流れる。この辺りの河川敷は中州状の集石によって川の流れが二又に分かれる。また、1 m前後の割石や矢穴が残る割石が認められる。なお、鳴谷川の屈曲部分でこの辺りの河川敷は標高 60 m前後である。

一方、龍王山の東麓にある梨い凧は標高約 70 mの峠である。現状では長野浄水場や県道による地形改変が著しく、開削された遺構を現認することが難しい。ただ、長野浄水場や排水場の周辺は不自然な段丘上の平坦面が広がることから、この辺りは峠を開削した範囲に含まれるものと推測される。2007 年に一般県道長野高松線単県道路改築に伴い、当教育委員会が長野浄水場内において確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった（文献 247）。

文献・伝承 長野浄水場の北側の山裾には、所期の目的を達することができないうちに工事が中断したために自刃したとされる工事奉行の墓が移されている。この墓は里人が奉行を供養した塚で、かつては峠の頂上近くに老松とともにあったと伝えられる（文献 104）。
(米田)



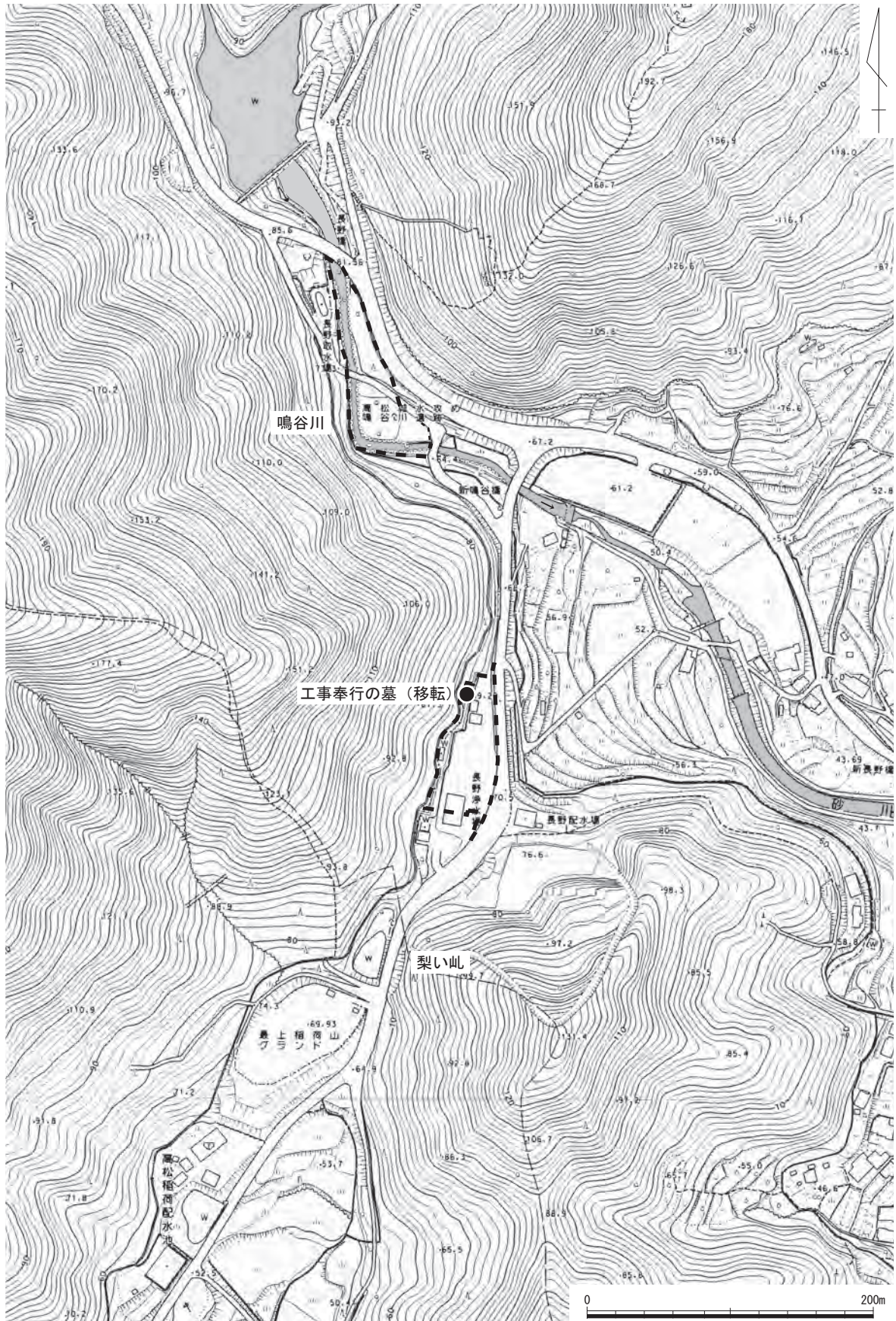
写真 44 高松城水攻め鳴谷川遺跡（東から）



写真 45 梨い凧遠景（北東から）



写真 46 移された工事奉行の墓（東から）

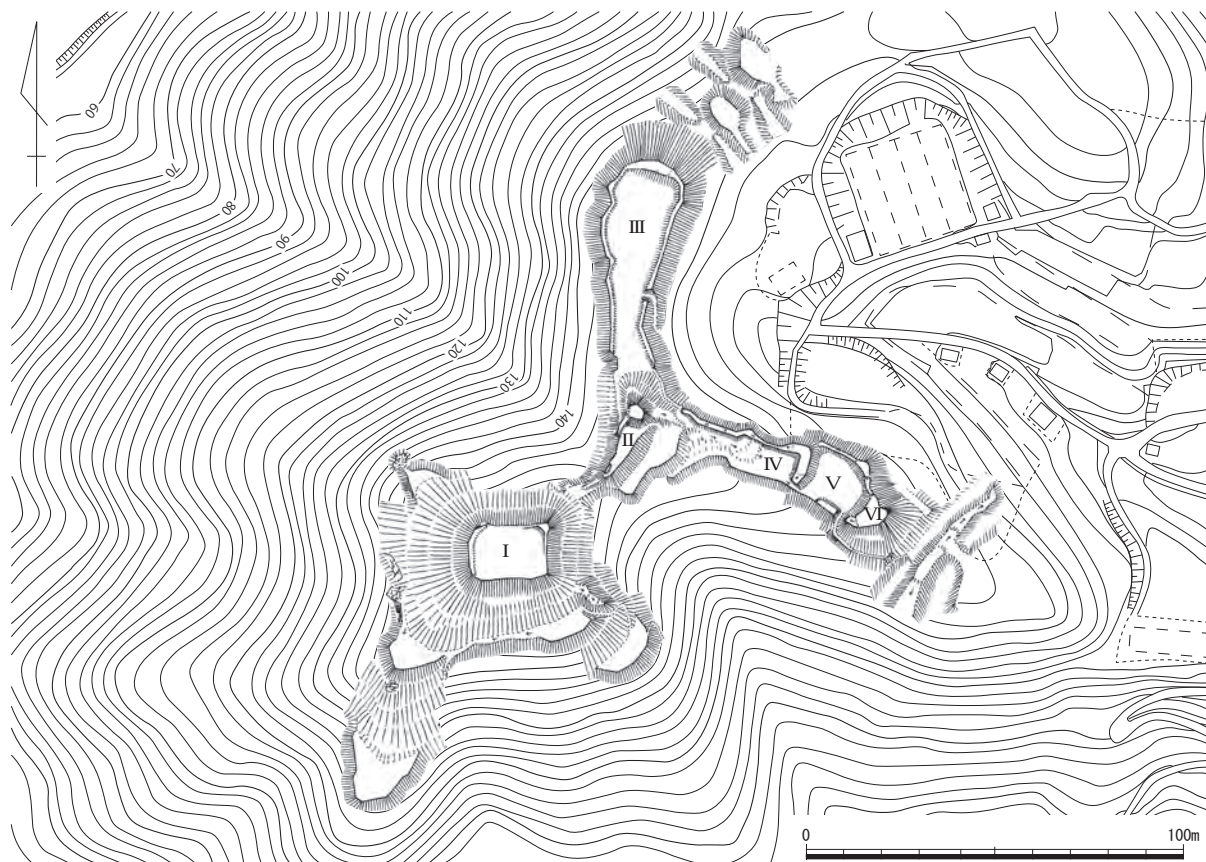


第 38 図 高松城水攻め鳴谷川遺跡周辺地形図 (1/4,000)

立地 砂川の流れを南に見下ろす山頂に位置する。砂川を挟んで 1.3km 南には大善城跡が、600 m 北西側には高松城水攻め鳴谷川遺跡が存在する。

概要 最頂部に位置する長方形の曲輪 I は、東・西辺に土塁を残し、周囲は高い切岸で守る。北西下方に 1 面の、南西・南東下方に 2 面の腰曲輪を造作し、南西上面腰曲輪の北側の西斜面には石垣を構えていた。曲輪 II は北側に低い土塁を持つ細長い曲輪で、南東側 5～6 m 下方にも小規模な曲輪がある。曲輪 II の北端には高さ 1.5 m 程度の円丘がある。この地点を分岐点として尾根は北と東に派生し、それぞれで曲輪群を確認した。北尾根の曲輪 III は北・東・西辺を土塁で囲むが、北土塁が 2.5～3.0 m、東土塁が 1～1.5 m、西土塁が 50～80cm と高さに相違がある。曲輪 III の北側は堀切 2 条を掘削する。曲輪 IV は東西に細長く、西半は自然地形を残す。北から東辺を「L」字状土塁で守り、南側は切岸を造作する。曲輪 V は北側に土塁を巡らせ、南側にも一部低い土塁が残る。南側土塁の東側には虎口が開き、そこを南に下った地点に石積みがある。曲輪 VI は西接する曲輪 V より 3 m 程高い。曲輪 VI の東側下方に堀切 2 条がある。西側堀切は直線状でやや浅めで、東側堀切は中央に土橋を残して深い。

長野城跡は主要 6 面の曲輪から構成されるが、曲輪 I と曲輪 II～VI で様相が大きく異なる。曲輪 I は周囲を高い切岸で防衛し、曲輪面に土塁を築く。曲輪 II～V は土塁を巡らし、尾根筋を堀切 2 条で



第 39 図 長野城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

分断して防御を固めた構造である。土塁の配置や高さから北側に対して防衛意識が高い。構造差を考慮すると、曲輪Ⅰが古い段階で、後世に曲輪Ⅱ～Ⅵを付随させた可能性も考えられよう。

文献・伝承 畑和良によると、当城跡に関する文献・伝承は限られる。『備前記』に「村北ニ長野古城山アリ、城主今田右衛門尉ト云フ」とあるのみとのことである。関連する可能性がある一次史料は1点のみで、年欠三月十三日付け宇喜多直家感状写（一次史料 185）には3月12日に「永野城山下」に「敵」が襲来した折り、防衛に尽力した橋本四郎太郎の功績を称えて恩賞を約したものがあるといふ。花押の特徴から天正8～9（1580～1581）年の史料と評価されている。なお、所在地の字名は城山である。（上村）



写真 47 曲輪Ⅰ南西曲輪（上）北側石垣
（南西から）



写真 48 曲輪Ⅴ虎口南側石積み（南から）

48 ^{からかわ}辛川城跡・49 ^{ねごや}辛川城の根小屋跡 岡山市北区辛川市場・西辛川 地図 15 右

立地 砂川右岸の北側山塊から南へ派生する標高約 90 m の山頂部に立地する。比高は約 80 m で、南から東にかけて岡山平野の眺望が良好である。ここは備前国西端に位置し、備中との国境まで約 1 km と近いほか、南東 1.4 km には備前国一宮の吉備津彦神社が鎮座する。そのうえ、城跡の南 650 m には山陽道が通っていたとされ、交通の要衝にあたる。

概要 縄張りは頂部に曲輪を構える単郭の構造である。城域は東西 70 m、南北 120 m と規模は小さい。頂部の曲輪は 55 m × 35 m と南北に細長く、東西南北のそれぞれの端は横矢掛けを設けて複雑に張り出す。曲輪の東辺と北辺、西辺北半には高さ 50 cm 前後の低い土塁が巡っている。土塁に囲まれた曲輪内部は、中央部分が自然地形を多くとどめるが、土塁付近の周縁は幅 5 m 前後で平坦に造成されている。虎口は曲輪の北側・東側中央・南東隅角に配置されている。曲輪の北側は土塁の一部が途切れて直角に屈曲しており、食い違い虎口と横矢掛けを設けている。また、曲輪の東側中央は土塁が途切れて内側に折れ、平入り虎口となる。さらに、曲輪の南東隅角は土塁の一部が途切れて南端を鍵形に屈曲させ、食い違い虎口となる。このほか、曲輪の西辺中央は 15 m × 5 m の台形状の張り出しがあるほか、曲輪の南西隅角は鍵状に屈曲する。防御施設として、堀切は尾根が続く北側・東側・南側の 3 か所に配置されている。北側の堀切は幅 4 m 前後で、中央には土橋を残す。堀切の東西両端は急に落ちる。東側の堀切は緩斜面に造られており、幅 2 m、深さ 1 m で西肩に低い土塁を伴う。南側の堀切は幅 3 m 前後、深さ 50 cm と浅く、西端は急に落ちる。

全体的には小規模な単郭で、曲輪の造成があまり陣城の形態をもつ。堀切の配置から南北と東からの守りを堅くしているが、特に土塁や虎口から東方向を堅守する意識が高い縄張りといえる。

一方、辛川城跡から南 330 mにある標高 28 mの丘陵頂部では、曲輪状地形が確認されている。頂



第 40 図 辛川城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良



写真 49 頂部曲輪北東側虎口と土塁 (北から)



写真 50 頂部曲輪東側虎口と土塁北側 (西から)



写真 51 北斜面堀切 (東から)



写真 52 東斜面堀切 (南から)

部の西半には東西 50 m、南北 50 mの台形を呈する平坦面があり、さらにその東に 1 段下がったところに東西 50 m、南北 20 mの長方形の高まりがある。なお、辛川城跡の南麓に残る字名「城廻り」・「城ノ前」とともに、丘陵上に存在する台形の曲輪状地形を根小屋と推定し、辛川城と根小屋の二元構造からなる城郭であったことが推定されている（文献 242）。

文献・伝承 『御津郡史』によると、辛川城の城主は虫明市内とされ、浦上氏・宇喜多氏に追随し、一宮周辺を拠点とした国人層の居城と伝えられる。また、天正 8（1580）年に、宇喜多軍と毛利軍が争った辛川合戦に関わる史料がある（一次史料 186～189）。さらに、畑和良は、羽柴秀吉書状（一次史料 244）より、天正 10（1582）年の備中戦役の際、備前・備中国境の監視や警戒のために、羽柴秀吉直臣の高田秀政が入城していたことを説いた（文献 112）。（米田）



第 41 図 辛川城跡縄張り図及び周辺小字分布図（1/2,500） 文献 242 に加筆

立地 中川と砂川に挟まれた標高約 10 m、比高約 4 mの独立丘陵頂部に立地する。北西約 1 kmには辛川城跡が近隣する。

概要 小丸山はかつて周濠を伴う全長約 150 mの前方後円墳であるという意見があったが、1991年に岡山市教育委員会が測量調査を実施したところ、前方後円墳ではなく小規模な城砦である可能性が高まった(文献 242)。

城域は東西 90 m、南北 180 mと規模は大きい。頂部の南北に曲輪 2面を中心に構成される。頂部北側の御崎神社周辺に造られた曲輪 I が主郭で、45 m × 27 mの楕円形を呈する。その南側の 1 段下には 30 m × 20 mの長方形を呈する曲輪 II が続き、南端は削平されている。曲輪の切岸は急勾配である。斜面部中段には幅 10 m前後



第 42 図 小丸山城跡縄張り図 (1/2,000)
文献 242 をもとに作成

の帯曲輪 III が全周していたと考えられるが、南側は改変が著しい。帯曲輪の北端には小規模な土塁が築かれている。このほか、斜面下段には南北に帯曲輪、北東斜面には小規模な腰曲輪 2面が配置される。独立丘陵のため、周縁を防御する縄張りとなっている。

文献・伝承 『備前記』にみえる辛川市場村の「宮山古城山」が比定される。このほか、本城は元治元(1864)年の第一次長州征伐の際に池田茂政が小丸山の北側に土塁を築いたとされるほか、空間的にみて辛川城跡との関連も注視される(文献 242)。(米田)



写真 53 曲輪 (南から)

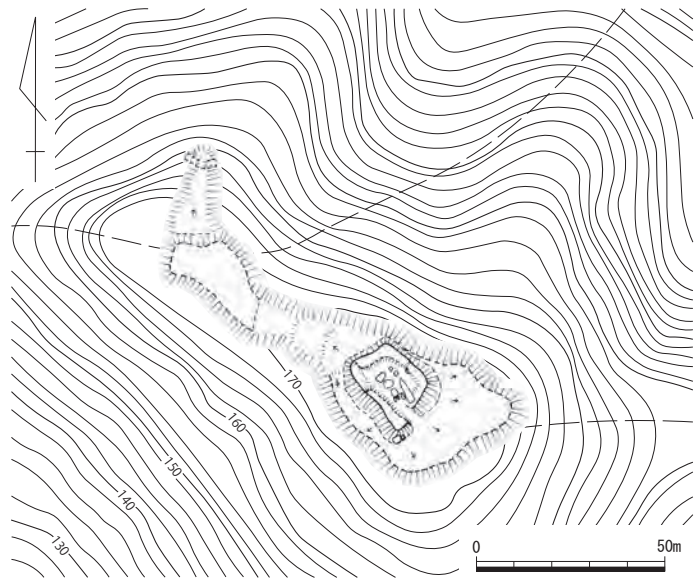


写真 54 北側の帯曲輪 土塁 (南から)

立地 砂川右岸の三光山の頂部から北東に延びる標高約 170 m の山頂に立地する。比高は 150 m である。周辺は北 1.2 km に長野城跡、南 2.2 km に辛川城跡が位置する。

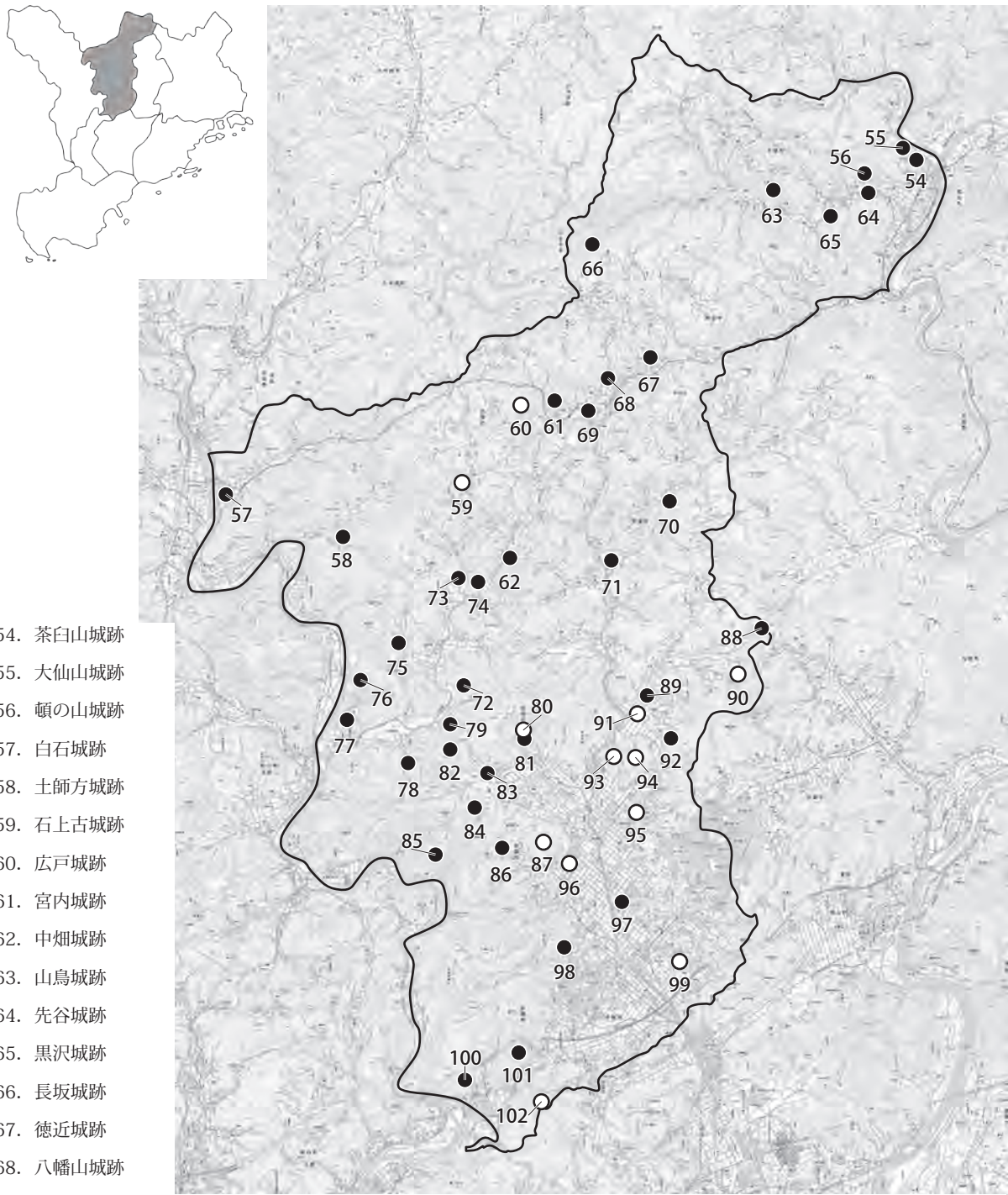
概要 城域は東西 25 m、南北 20 m と小規模で単郭の構造である。曲輪は 13 m × 10 m で、平面形は長方形に近い。曲輪の北辺と西辺・南辺は幅 4 m 前後の幅広で、内高 50 cm 程度の低い土塁の痕跡が残存する。曲輪の南西隅角は土塁が途切れ、平虎口を設ける。規模や構造から、陣城の可能性がある。

文献・伝承 『備陽国誌』にみえる大窪村の「大膳城」に比定される。(米田)



第 43 図 大善城跡縄張り図 (1/2,000)

第2節 赤坂郡



- 54. 茶白山城跡
- 55. 大仙山城跡
- 56. 頼の山城跡
- 57. 白石城跡
- 58. 土師方城跡
- 59. 石上古城跡
- 60. 広戸城跡
- 61. 宮内城跡
- 62. 中畑城跡
- 63. 山鳥城跡
- 64. 先谷城跡
- 65. 黒沢城跡
- 66. 長坂城跡
- 67. 徳近城跡
- 68. 八幡山城跡
- 69. 明田城跡
- 70. 惣分城跡
- 71. 坂辺城跡
- 72. 松撫城跡
- 73. 地頭城跡
- 74. 矢知城跡

- 75. 西谷城跡
- 81. 小屋谷城跡
- 87. 上仁保城跡
- 93. 大久保城跡
- 99. 沼田城跡
- 76. 熊谷城跡
- 82. 木山城跡
- 88. 菖蒲佐古城跡
- 94. 高尾山城跡
- 100. 名称未定
- 77. 寺山城跡
- 83. 金比羅城跡
- 89. 東軽部城跡
- 95. 神田城跡
- 101. 兜山城跡
- 78. 殿谷城跡
- 84. 高光城跡
- 90. 南佐古田城跡
- 96. 高山城跡
- 102. 新田陣跡
- 79. 宇那山城跡
- 85. 瀧ノ城跡
- 91. 宝地城跡
- 97. 正崎城跡
- 80. 八左城跡
- 86. 葛木城跡
- 92. 宮口城跡
- 98. 善応寺城跡

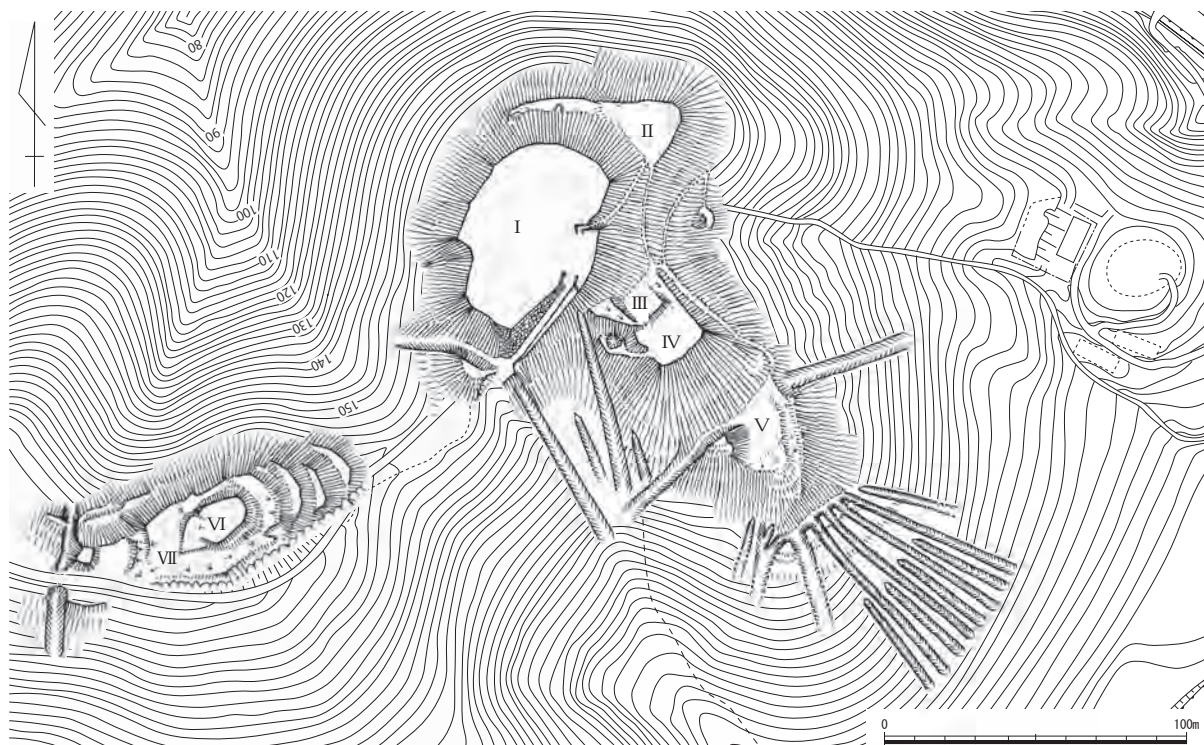
第44図 赤坂郡城館位置図

立地 茶臼山城跡は、吉井川と吉野川の合流する要衝の地（周匝周辺）一帯を見下ろす位置にある茶臼山から東側に派生する尾根頂部に所在する。標高は約 170 m、周囲との比高差は約 100 mである。大仙山城跡南東の丘陵頂部にあたり、両者は一体として機能していたと考えられる。

概要 主郭（曲輪Ⅰ）は南北 55m、東西 38m の不整形円形。虎口を東側側面に設けているが、南から東に向けて進入口を長く取っており、その入口付近は土塁と堀切で嚴重に画する。主郭の北東側に帯曲輪状に巡る曲輪Ⅱ、南東側に上下 2 面（曲輪Ⅲ・Ⅳ）を配し、約 20 m 下方にさらに曲輪Ⅴを設けている。曲輪Ⅴを挟んで東西に堀切を配する。さらに南斜面に畝状縦堀群を配している。井戸は 2 基確認されており、曲輪Ⅱの南下方の小規模な曲輪と曲輪Ⅳの西側にある。一方、主郭（曲輪Ⅰ）から南西に続く尾根上にも遺構が認められる。頂部の曲輪Ⅵを中心として、周囲に帯曲輪（曲輪Ⅶ）を巡らせている。主郭方面（東）斜面を利用して 4 つの腰曲輪を設け、反対側（西）には堀切で尾根を切断し、そのすぐ東に檜台と考えられる高さ約 1 m、幅約 3 m の高まりが配置されている。

1985 年、展望台等建設に伴って、主郭（曲輪Ⅰ）の中央付近を発掘調査した結果、6.5 m × 9.2 m の規模を持ち、深さ約 5 m の竪穴遺構のほか、土坑・柱穴などが確認された。遺物としては、備前焼（壺・甕・すり鉢・德利・水指・椀）、常滑焼甕、青磁碗、白磁碗・皿、染付皿、天目茶碗、高麗青磁碗などの器類、刀・鏢・鉄鏃・鎧金具などの武具のほか、釘類・飾り金具・火箸・硯・砥石・石臼・土錘・古銭 168 枚など多数出土している。現在は城山公園として整備されている。

文献・伝承 『備前記』・『吉備温故秘録』などの近世地誌類では、城主を佐々部（笹部）次郎（勘齋）（浦上宗景家臣）にあてる。1985 年、吉井町教育委員会により発掘調査実施（文献 247・256）。（河合）



第 45 図 茶臼山城跡縄張り図 (1/2,500) 作図：畑和良



写真 55 曲輪V南側豎堀（北から）



写真 56 曲輪IV西側堀切南側（北から）



写真 57 曲輪 I から曲輪 II をみる
（南西から）



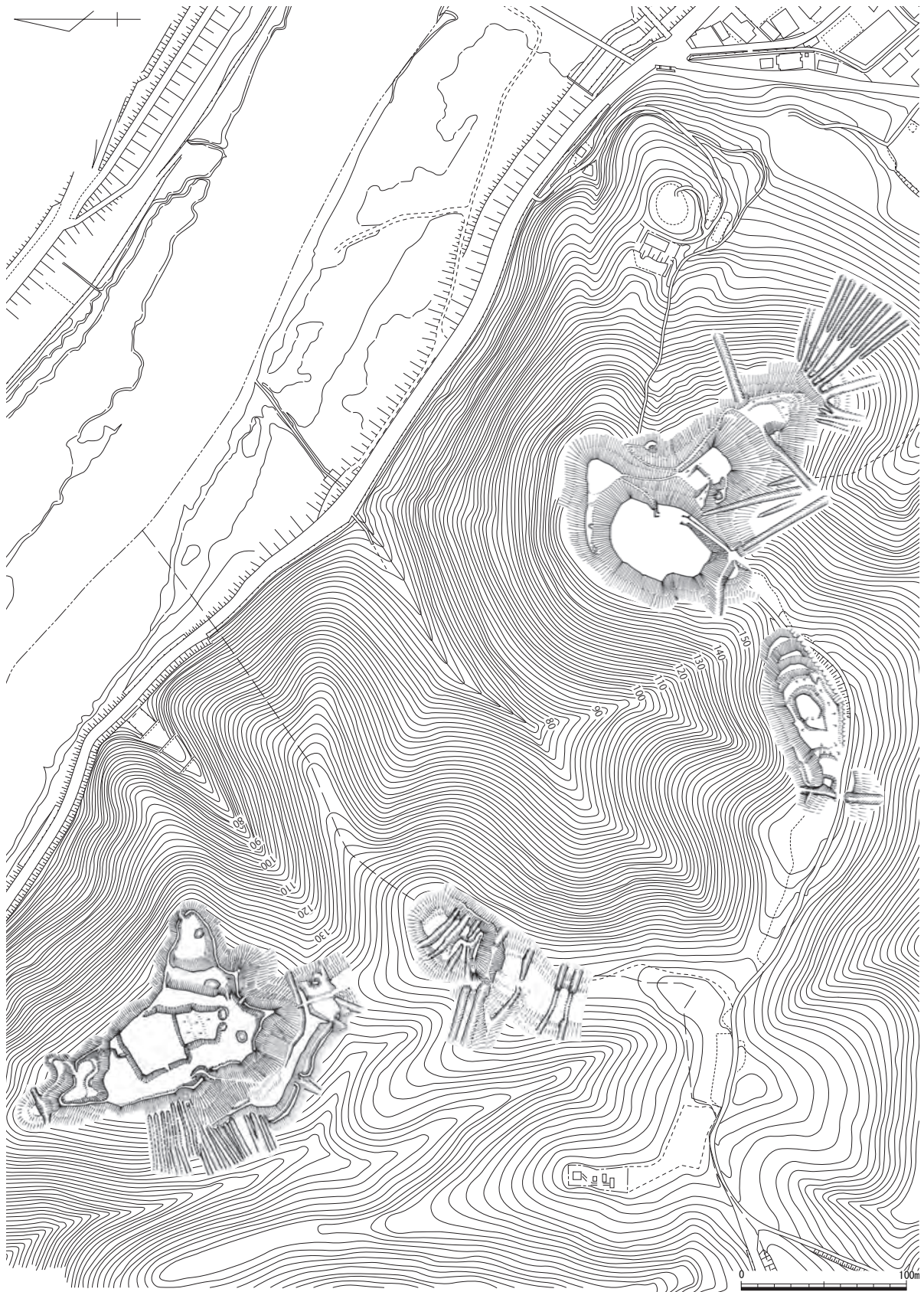
写真 58 曲輪V南西側堀切（南東から）

55 ^{だいせんやま}大仙山城跡 赤磐市周匝・草生 地図3右

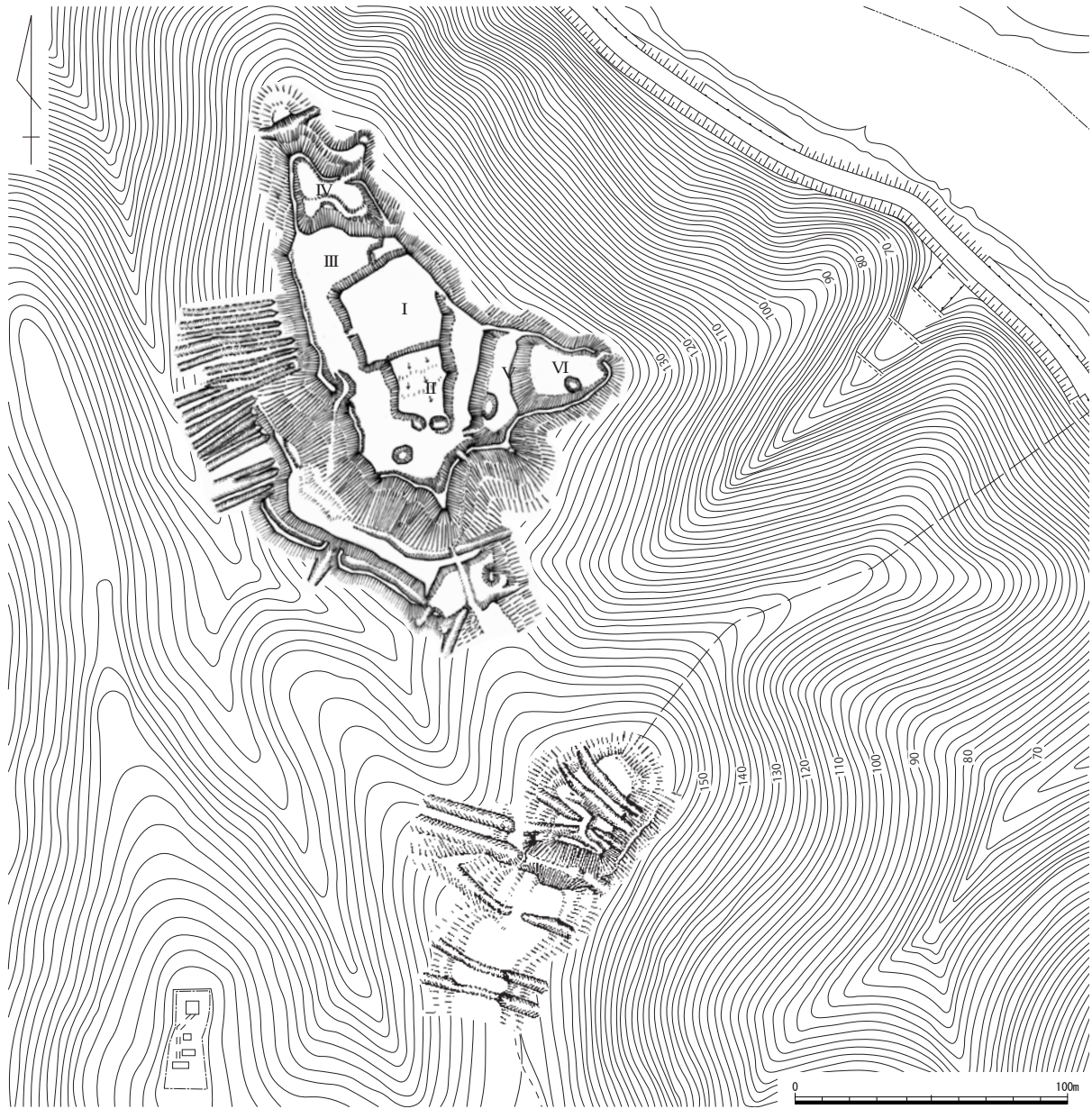
立地 大仙山城跡は、吉井川と吉野川の合流する要衝の地（周匝周辺） 一帯を見下ろす位置にある茶臼山から北側に派生する尾根頂部に所在する。標高は約 160 m、周囲との比高差は約 90 mである。茶臼山城跡北西の丘陵頂部にあたり、両者は一体として機能していたと考えられる。

概要 主郭（曲輪 I）は東西 35 m、南北 30 m の方形を呈し、その南に東西 15 m、南北 25 m の曲輪 II が付属する。それらを囲むように帯曲輪状に曲輪 III が巡っている。なお、『吉井町史通史編 2』では、曲輪 II の西に横堀の表現が見られるが、現状でははっきりしない。曲輪 II と III の境、ないしは曲輪 III の南側には井戸（溜井）が認められ、その東側に階段状に造成された曲輪 V・VI にも井戸（溜井）が設けられている。曲輪 VI の北東部には虎口状に開口する。また、曲輪 III の北下方には、土塁に囲まれた曲輪 IV が配置されており、北東部に虎口を設けている。その北下方に小規模な腰曲輪を設け（横矢掛けとして機能する）、その先に堀切を配置し、尾根を切断している。これら頂上部の曲輪群でも、おもに南西（西―南―東）の縁に土塁を巡らし、守りを固めている。土塁が巡る西側の中央には、周囲よりもさらに土塁を高く盛り上げ、喰い違いに造成された防御性の高い虎口が置かれている。また、南端の土塁は鋭角に造成されており、視界に優れ、防御点としても効果を発揮したと考えられる。これらの土塁が巡らされた下方にあたる南西斜面には、18 本にもなる畝状豎堀群と横堀・土塁を組み合わせ配置しており、この方面の防御への意識の高さをうかがわせる。また、当城から南西方向の茶臼山城跡方面へとつながる尾根上には、尾根を切断するように 8 条の横堀群が配されている。

文献・伝承 『備前記』・『吉備温故秘録』などの近世地誌類では、城主として星賀（保鹿）藤内にあてている。（河合）



第46図 茶臼山城跡・大仙山城跡縄張り図 (1/3,500) 作図：畑和良



第 47 図 大仙山城跡縄張り図 (1/2,500) 作図：畑和良



写真 59 曲輪Ⅲ南側の切岸 (西から)



写真 60 喰い違い虎口に接続する土橋状遺構 (南西から)



写真 61 南から4番目の堀切(西から)



写真 62 本丸西側の虎口(北東から)



写真 63 本丸南端の土塁(南西から)



写真 64 曲輪Vの池(西から)

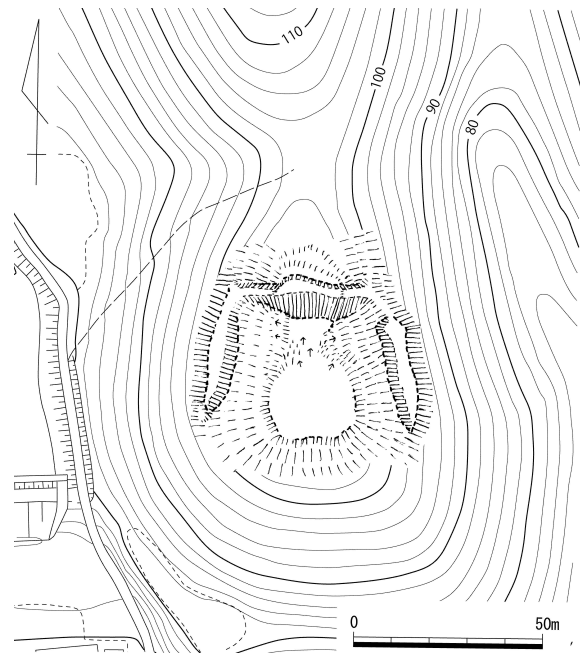
56 ^{とん やま} 頓の山城跡 赤磐市黒本

地図3右

立地 滝山川左岸の山塊から南に延びる尾根頂部に位置する。

概要 主郭は東西約25m、南北約30mの規模を有するが、北側はやや狭小となる。主郭に伴う切岸は急峻で、比高差約6mを測る。また、その東・西側下方には長さ約5～8m、幅約3～4mの細長い曲輪が築かれている。主郭の北側には幅約7～13m、深さ約1～4mの深い堀切がみられ、その北側は2～3面の加工段がみられる。なお、北側の山頂部奥には後世の地形改変と考えられる幅約7mの堀切状の掘削がみられる。

文献・伝承 同城に関係する近世地誌類の記載は確認できず、『改修赤磐郡誌』で赤磐郡山方村黒本の「頓山城」として紹介されている。なお、城主不詳である。(澤山)



第48図 頓の山城跡縄張り図(1/2,000)

作図：畑和良

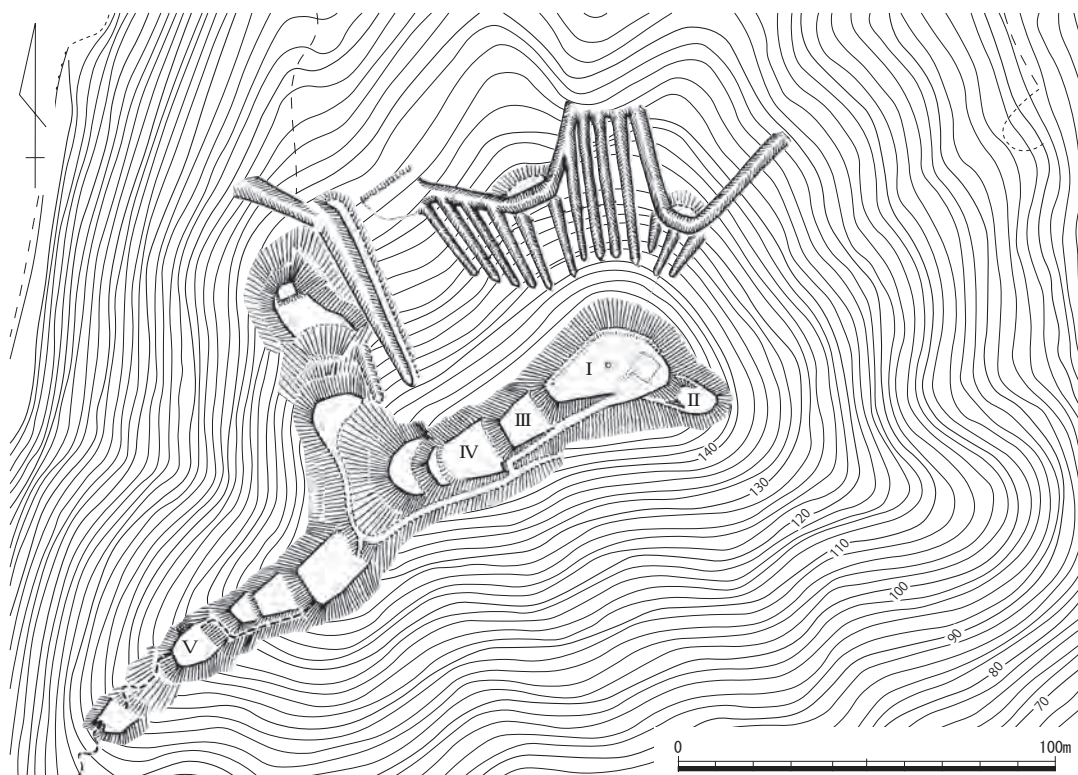
立地 旭川左岸の標高約 140 m の山頂部に立地する。比高は約 80 m である。ここは備前国最北、美作との国境から約 2 km 弱に位置する。旭川の水上交通に加え、東には仁堀を經由して吉井川流域の周匝へ通じる山越えの街道もあり、交通の要衝にあたる。

概要 城域は東西 220 m、南北 90 m と規模は大きい。縄張りは最頂部の曲輪 I を中心に構成される。主郭となる曲輪 I は 45 m × 24 m の規模で、南東の両側に曲輪 II、南辺中央に曲輪 III・IV につながる通路がある。頂部から南西に延びる尾根には小曲輪が 5 面連続する。このうち、曲輪 V の北側切岸には高さ約 1.7 m の石積みが構築されている。また、頂部西側から北に延びる尾根には小曲輪 2 面を東側には急斜面に沿って延長 55 m を超える大規模な土塁を配置し、北端には櫓台様の高まり、その造り、その北西端は 1 本の豎堀で堅固する。さらに、頂部東側から北に延びる尾根には、13 本の豎堀を造った上、その東西下端に弧状の堀切を配置することで嚴重に防御する。全体的に頂部の曲輪 I を中心とし、南西側は連続する小曲輪群、北側は長大な土塁と豎堀、畝状豎堀群と堀切により堅固にする縄張りといえる。

文献・伝承 『和気絹』には、田淵十郎左衛門尉氏光の築城と伝わる。また、天正 7 (1579) 年 11 月頃、宇喜多直家の宿老明石行雄が白石城の普請に携わったとみられる。(一次史料 176) (米田)



写真 65 遠景 (西から)



第 49 図 白石城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良



写真 66 曲輪 I (西から)



写真 67 曲輪 I・III (南西から)



写真 68 曲輪 I 北斜面 豎堀・畝状豎堀 (西から)



写真 69 曲輪 V の石積み (北から)

58 はじかた 土師方城跡 岡山市北区建部町土師方

地図 6 右

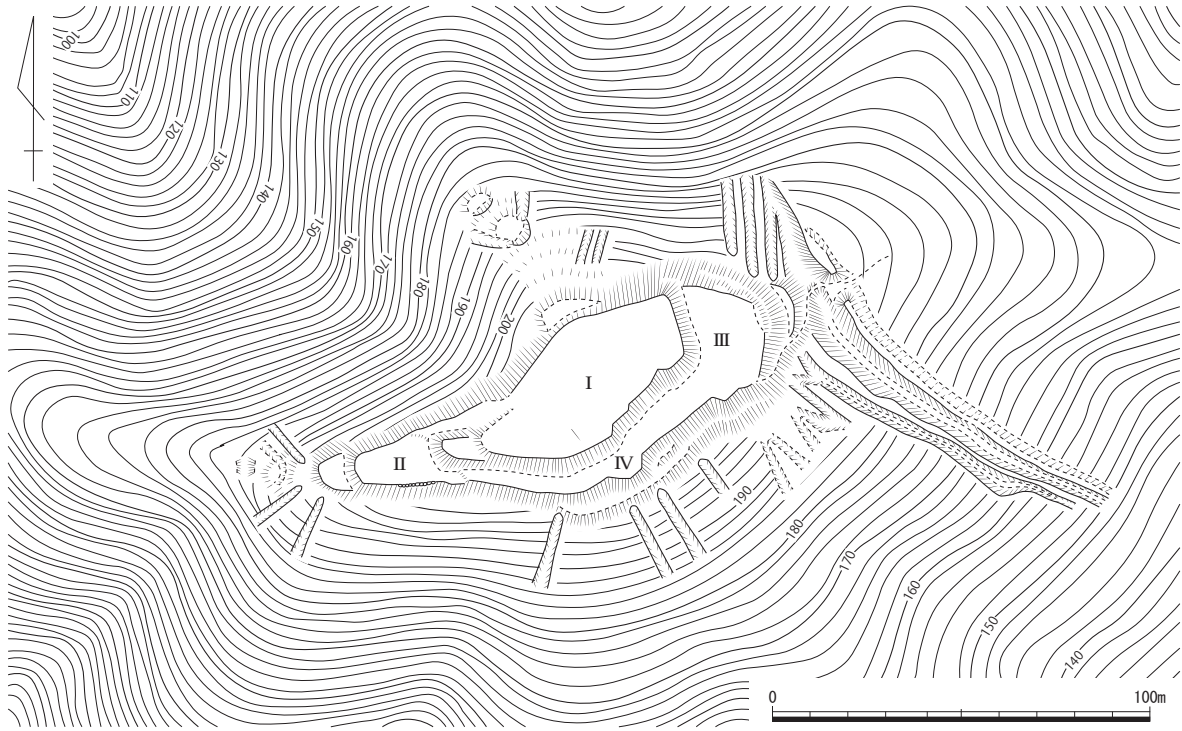
立地 旭川とその支流である土師方川との合流点から東にやや奥まった標高 200 m の山頂に立地する。比高は約 140 m で、北側の土師方川沿いから旭川が大きく蛇行する西側にかけて眺望が良い。近隣には南東 2.8km に西谷城跡、北西 3.0km に白石城跡、南西 3.3km に鹿瀬城跡が位置する。

概要 城域は東西 240 m、南北 135 m と規模が大きい。縄張りは頂部の曲輪 I を中心とし、その東西に腰曲輪、南斜面に帯曲輪、北に延びる尾根には小曲輪を構える。

頂部の中心となる曲輪 I は 60 m × 28 m と広く、南東隅と南辺中央に横矢とその間は折れがある。曲輪 I の北西隅には虎口があり、西側の腰曲輪 II と小曲輪につながる。西側の腰曲輪 II は約 20 m × 13 m で、北東隅は頂部の曲輪 I、南東隅は南斜面の帯曲輪 IV と通じる。さらに西端に小曲輪を構える。一方、頂部の東側には約 25 m × 17 m とやや広い腰曲輪 III が配置され、南斜面の帯曲輪 IV とつながり、頂部の曲輪 I と同様に腰曲輪の南東隅と帯曲輪の南辺中央に横矢を設ける。また、頂部の北側に小曲輪を置く。

防御施設としては、東側の鞍部に土橋や土塁を伴う長大な堀切を配置して堅く守る。この堀切は最大幅 11 m で延長 130 m にも及ぶ。さらに堀切の東肩に上端 2 m、下端 4 m の長大な土塁を設けて防御力を高めている。また、長大な堀切に接するように、頂部の南東から南斜面にかけて 10 本、北東斜面には 3 本の豎堀を配置し、北東と南東を守りを堅くする。対して、西側の守りは小規模な堀切と 3 本の豎堀、北側は弧状の堀切と 2 本の豎堀で防御する。

文献・伝承 『吉備温故秘録』は城主を山口与一兵衛と伝えるほか、『建部町誌（通史編）』などは康正元（1455）年に山名氏により落城したと記す。（米田）



第 50 図 土師方城跡縄張り図（1/2,000）作図：畑和良に加筆



写真 70 曲輪 I・帯曲輪 IV 東側（西から）



写真 71 堀切（北西から）



写真 72 曲輪 II 南側の石積み（南西から）



写真 73 曲輪 II 南側の石積み（南から）

立地 城が所在する赤磐市仁堀西は、倉敷往来と赤磐市周匝から岡山市北区建部町福渡に至る往還の合流地点にあたる。この交通の要衝の地を南方に見下ろす山塊に、宮内城跡は立地している。

概要 城は、愛宕様が祀られている尾根先端頂部から鞍部を挟んで南側の頂部に展開している曲輪群Ⅰ、そこから南へ派生する尾根筋の先端部に所在する曲輪群Ⅱ、曲輪群Ⅰから北北西へ約200m離れた南西方向へ延びる尾根の先端部にある曲輪群Ⅲから構成される。いわゆる本城は曲輪群Ⅰと考えられ、曲輪群Ⅱ・Ⅲは出城的な役割を持っていたと想定される。

曲輪群Ⅰは、頂部に急峻な切岸を備えた曲輪Ⅰを造成し、主郭とする。南西方向に延びる尾根筋には曲輪を3面配し、守りを固める。このうち曲輪Ⅱは、狭い犬走りで曲輪Ⅲと接続している。曲輪Ⅲ北端部からは、曲輪Ⅰ東側の犬走りを経て曲輪Ⅰへと続く通路が延びている。北・南東・北西に延びる尾根筋に開削された堀切は各々大規模で深く、なかでも堀切Ⅰは底面幅4m以上を測る箱堀状を呈する。

曲輪群Ⅱは、中央やや北側に山道による削平が認められる堀切Ⅰを開削している。この堀切Ⅰより北側には、曲輪Ⅰと平坦地2面を設けて曲輪群Ⅰへの守りとする。平面略台形を呈する曲輪Ⅱは、曲輪中央部から南辺中央部にかけて溝が掘削される。この溝は、そのまま曲輪Ⅲ南西辺側を通る横堀状の溝となる。曲輪Ⅳの南西端部は、横矢掛けを意図するように南西に向かって2m程突出させている。この突出部と連動するように、曲輪群Ⅱの西側を通る通路が「L」字に屈曲している。曲輪Ⅳから南側には、幾面かの平坦面が存在しているものの、城に伴うものか判然としない。

曲輪群Ⅲは、北東側尾根続きに曲輪Ⅰとの比高約10mを測る堀切を設け、城域を画している。尾根先端頂部を平坦に造成した曲輪Ⅰは、高さ約5mの切岸を備えている。堀切中央部には、幅約50cmの土橋が設けられ、そこから曲輪Ⅰの北東隅へと至る通路が認められた。曲輪Ⅰの西側には、土塁状の高まりで仕切られた曲輪Ⅱと曲輪Ⅲが帯曲輪状に巡る。

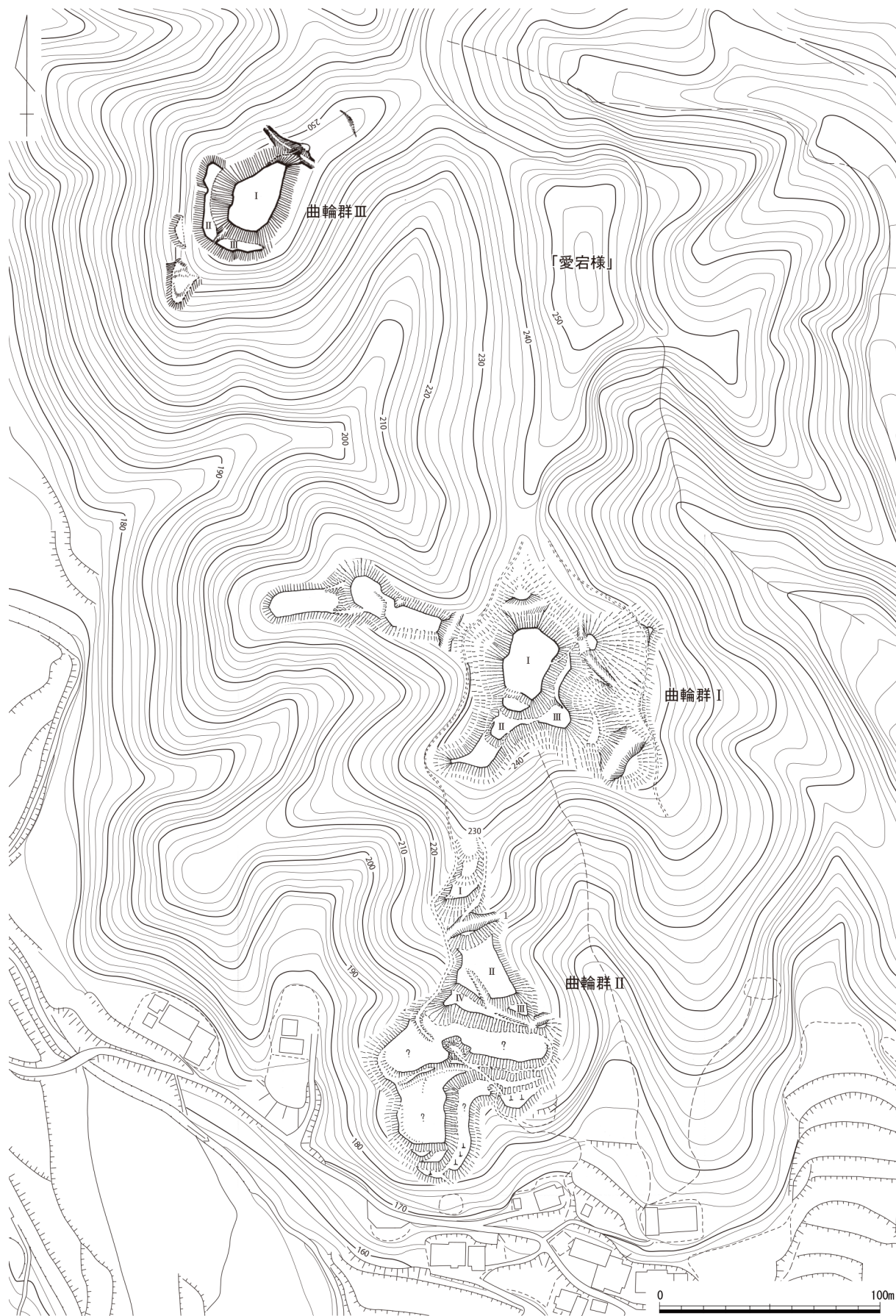
曲輪群ⅠとⅢを結ぶ尾根上には、愛宕様が祀られている平坦な尾根頂部が存在している。切岸などの城に伴う加工痕跡は認められないが、主郭と想定される曲輪群Ⅰの背後であることや、曲輪群Ⅰ・Ⅱと曲輪群Ⅲを有機的に結びつけるためにはこの場所の利用が不可欠なことから、何らかの形で使用されていたものと想定される。

文献・伝承 近世地誌類では、城主を羽床大和貞久とし、尼子氏の家臣であると記載する。しかし畑和良は、この羽床氏について、当初から尼子氏の家臣ではなく、大永年間（1521～1528）頃には浦上兼泰のもとで赤坂郡山手村の代官を務めており、浦上氏麾下の国衆であったと推測している（文献113）。

（小嶋）



写真74 遠景（南から）



第 51 図 宮内城跡縄張り図 (1/2,500) 作図：畑和良

立地 矢知川左岸、標高約 130 m、比高差 30 m の丘陵頂部に立地し、旭川流域と砂川上流域の仁堀地区を山越えて結ぶ要衝に位置する。なお、本城から南東約 1 km には矢知城跡が位置する。

概要 城域は東西 90 m、南北 200 m と規模は大きい。丘陵は南側の山塊から北側に尾根が延び、尾根北端に縄張りがある。頂部の曲輪を中心として、その南北斜面部に小曲輪、北へ延びる鞍部に長曲輪、尾根北端に曲輪を配した構造をもつ。頂部に造られた主郭となる曲輪は 30 m × 15 m の不整楕円形を呈し、中央には一辺約 5 m の方形の基壇状高まりがある。曲輪の南北斜面には小曲輪が群をなしている。北斜面は小曲輪を北西側に 2 面、北東側に 1 面配する。北側尾根に続く鞍部は土橋を伴う堀切 1 条で区切る。一方、南斜面の小曲輪は南側に 2 面、南東側に 1 面、南西側に 1 面を配置している。南東側の小曲輪は北東側の小曲輪及び堀切と犬走りでつながる。南斜面より南東側の鞍部には堀切 2 条が連続しており、そのうち外側の堀切は土橋を伴う。また南斜面から南東側に張り出した尾根にも堀切 1 条を配備して遮断している。これらの堀切は幅 10 m 弱の大規模で、両端は長く伸びる竪堀状となる。

頂部から北側に細く延びる尾根では、鞍部に約 55 m × 5 m の狭長の曲輪を配する。尾根北端には一辺 15 ~ 20 m の不整形を呈する小曲輪が東西に 2 面あり、その間は 1 段低い小曲輪となる。さらに尾根西端は南西に向かって延びる帯曲輪となり、その南北は犬走りが延びる。

全体的に矢知川に面した北側を小曲輪群、南側の尾根筋を 2 方向の堀切で嚴重に防御を固めた縄張りといえる。

文献・伝承 『備陽国誌』による中畑村の「古城山」とみられ、城主は不詳である。(米田)



写真 75 主郭南西側の堀切 (南東から)



第 52 図 中畑城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 滝山川北岸にそびえる山鳥山から東に派生する尾根先端頂部に立地する城で、対岸に所在する先谷城跡や黒沢城跡を一望する。

概要 城は、城域を画する西側尾根続きの堀切や主郭となる曲輪Ⅰの東西辺が後世の改変を受けている。曲輪Ⅰの南辺は明瞭な切岸を備えるが、北辺は自然地形を残す。曲輪Ⅰを取り巻くように築いた曲輪Ⅱ～Ⅴは、各々の比高差がほぼ認められないが、曲輪Ⅲ・Ⅳ間は豎堀で、曲輪Ⅳ・Ⅴ間は低い土塁を設けることで横移動を防いでいる。堀切の東肩部北半には、土塁状の高まりが認められる。

文献・伝承 『東備郡村誌』では、城主を浦上氏家臣の平賀大進と記す。『赤磐郡誌』などでは、平賀氏代々が城主を務め、尼子勢か宇喜多勢により天文（1532～1555）もしくは永祿年間（1558～1570）に落城したと記す。（小嶋）

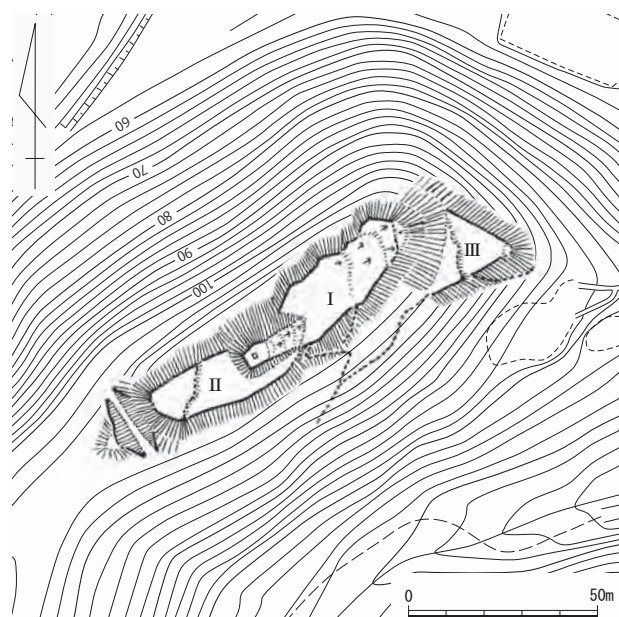


第53図 山鳥城跡縄張り図 (1/2,000)
作図：畑和良

立地 城は、滝山川に向かって張り出す尾根の先端頂部に立地する。周辺には、山鳥城跡や黒沢城跡などが築かれている。

概要 頂部に配された曲輪Ⅰは、西辺を高さ約3mの櫓台によって、それ以外を高く急峻な切岸によって守りを固めるが、その内部は平坦に造成しておらず、北東に向かってなだらかに下がる自然地形を残す。櫓台の頂部は、5m四方の平坦面となっている。曲輪Ⅰから東へ延びる尾根筋に設けた平面三角形を呈する曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰとの比高が10m以上を測る。曲輪Ⅱの西側尾根続きには堀切が開削され、城域を画している。

文献・伝承 『備陽記』に城主を森ハイカと記載するのみであり、それ以外の伝承等は伝わっていない。（小嶋）



第54図 先谷城跡縄張り図 (1/2,000)
作図：畑和良

立地 黒沢城跡は西流して吉井川に注ぐ滝山川が、大きく流路を曲げる地点に張り出した丘陵上に所在。東側は丘陵が所在するため、視界をさえぎられるが、滝山川の作り出した谷の上流部（西側）を広く見通すことができる。また、北側を流れる滝山川周辺についても視界は良好である。

概要 南北に長い曲輪Ⅰ（主郭）を中心として、その南北に曲輪を配置する。曲輪Ⅰは広い丘陵尾根の平坦部を利用し、東面と南面に大規模な土塁を設けるが、視界のきく西面及び北面には築かれぬ。切岸の加工度も西面・北面については高くない。虎口は3か所認められる。搦手側（南側）については、南東虎口から南東に続く尾根線を堀切で大きく区切るが、その中央を土橋状に残して通路とする。その南西に曲輪Ⅱを配置する。曲輪Ⅱは尾根線上に2か所の虎口を設け、その周辺に土塁を築いている。ただし、曲輪Ⅱの切岸の加工度は低く、曲輪中央も自然地形が残る。一方、大手側（北側）では、曲輪Ⅰの北虎口から曲輪Ⅲの間は、自然地形が残る。曲輪Ⅲの東面・北面は切岸により比高差を際立たせるが、曲輪中央は自然地形を残す。曲輪Ⅲの西側下方に曲輪Ⅳを付属する。この曲輪は、盛土で段差をつけており、その中央付近に虎口を設ける。

この城については、細長く簡素な縄張りを持つ主郭(曲輪Ⅰ)の形状などから、元々は南北朝時代に築城が遡る単郭式の山城であったものが、戦国時代頃に曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを南北に加えて、機能性・防御性を向上させた(連郭式の山城に改築した)可能性を考えたい。

文献・伝承 『岡山県通史上編』では、『陰徳太平記』を引用し、城主を宇喜多直家の家臣明石飛驒にあてる。(河合)

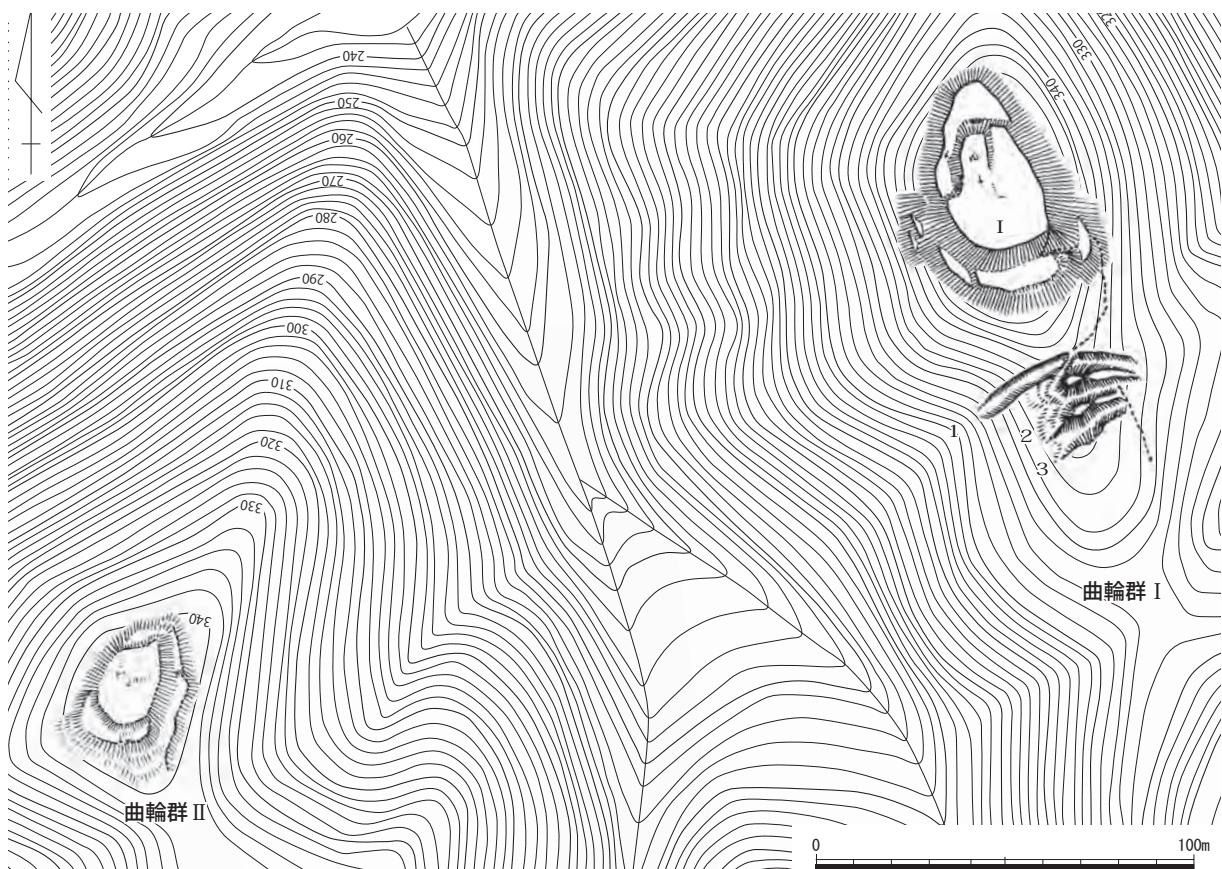


第55図 黒沢城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、北へ延びる尾根の先端頂部に立地し、久米南町全間から赤磐市周匝へ至る往還を北方眼下に望む。

概要 この城は、東側の曲輪群Ⅰ（通称「雄城」）と、深い谷部を挟んで約250m西側の曲輪群Ⅱ（通称「雌城」）で構成されると伝わる。曲輪群Ⅰは、頂部に配された曲輪群とその南側尾根続きに設けた3条の堀切からなる。曲輪Ⅰの北側には長方形を呈する土壇状の高まりが存在し、その北辺には、長さ約1mで2～3段積み石積みの石積みが築かれる。曲輪Ⅰの南側には帯曲輪状に3面の曲輪を配し、これらの曲輪から急斜度につながった尾根鞍部に堀切が開削されている。中央部に幅約1.5mの土橋が認められる堀切1は、両端部が縦堀状に斜面へと続く。堀切2・3は、東西両端に山道による改変が認められる。これら堀切より南側には、城に伴うものかどうか判然としない数面の平坦面が存在している。曲輪群Ⅱは、頂部曲輪を取り囲むように数面の曲輪を配しているが、いずれの曲輪も切岸が明瞭でない箇所や自然地形が残されている場所が認められる。尾根続きの南側は幅10m以上の平坦地形であるものの、堀切等の防御施設が一切認められず、曲輪群Ⅰの入念な防御構造と対照的である。

文献・伝承 『備陽国誌』などでは城主を高松祐膳（禪）と記載する。なお、中勢実集落の北外れに、曲輪群Ⅰの曲輪Ⅰに建てられていたと伝わる石碑が3基所在している。その中に「松平正忠」と刻まれた石碑が1基あり、地元ではこの「松平正忠」が城主であるとも伝わる。（小嶋）

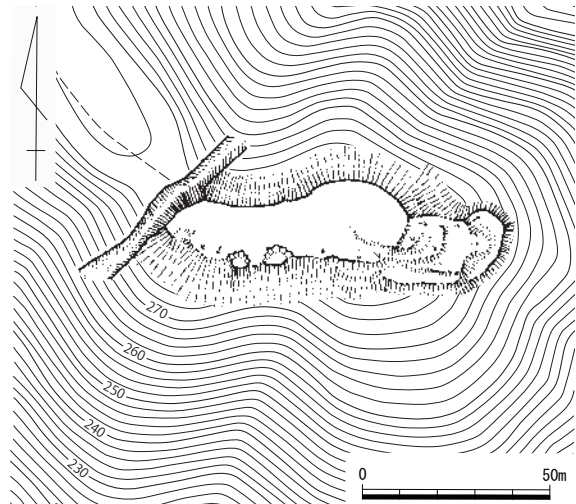


第56図 長坂城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 山塊から南東方向に延びる尾根頂部・端部に位置する。字名は城山である。

概要 主郭は自然地形に沿って築かれており、規模は東西約60m、南北約20mを測る。中央付近には鉄塔が建ち、東端部には小曲輪が6面認められる。一方、西側の尾根鞍部には幅約6～8m、深さ約2mの深い堀切がみられる。

文献・伝承 『備陽国誌』には赤坂郡仁堀東村に「徳近古城」、『東備郡村誌』には赤坂郡仁堀上村に平尾源吾が居城した「徳近古城」が、また『岡山県通史上編』には赤磐郡仁堀村仁堀東に羽床伊賀守、平尾源吾が居城した「徳近城」が所在したとされ、本城跡はこれらに比定される。なお、仁堀東村周辺には『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』に「古城山」と呼ぶ城跡があるとするが、同城との関係は不明である。(澤山)



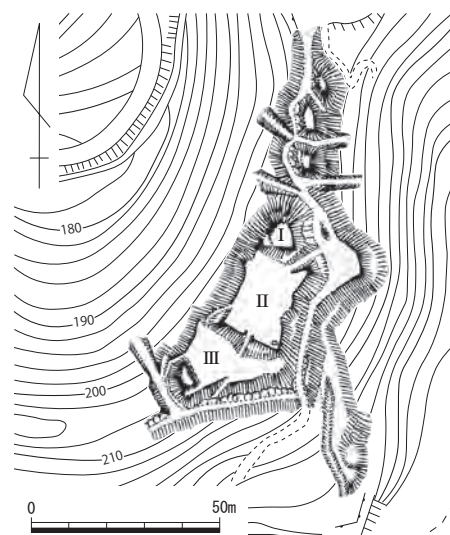
第57図 徳近城跡縄張り図(1/2,000)

作図：畑和良

立地 八幡山城跡は備前と美作の国境の高原から南西に延びる尾根上に位置する。この地点は、周匝から菊ヶ峠を越えて金川・福渡に抜ける街道筋を押さえる上で重要な場所である。

概要 城は丘陵頂部を利用して築かれる。北東側を3条の堀切によって切断し、その南西側を城域とする。主郭(曲輪I)は周囲を切岸で加工する。その北端部には、長さ約5m程の高まり(櫓台)が残される。虎口は南側と北東側に2か所設けられ、それぞれ曲輪II・IIIへと連絡する。曲輪IIは南西端に土塁を設け、その南西部を掘切ることによって城域を限る。虎口は曲輪Iに連絡するものと、南側にもう1か所設けられており、後者は曲輪IIIから南に続く犬走り状の通路に接続する。なお、曲輪IIIの南に竪堀状の凹みがある。

文献・伝承 畑和良によれば、元禄2(1689)年に書かれた『小坂家記』によると、浦上宗景の家臣小坂弥三郎が「備前ノ内赤坂郡仁堀村八幡山と申城」に在城したという。(河合)



第58図 八幡山城跡縄張り図(1/2,000)

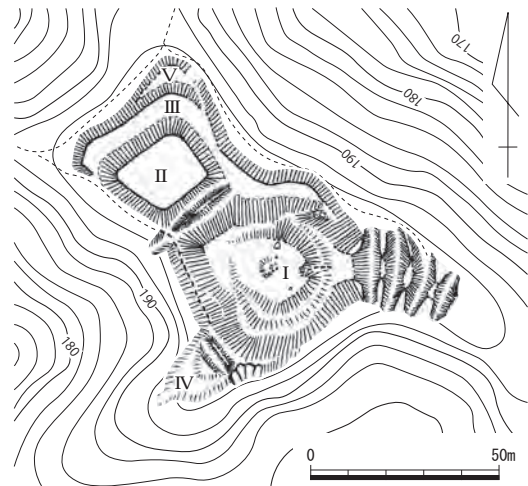
作図：畑和良

立地 明田城跡は標高 200 m の独立丘陵の頂部に位置する。周匝から菊ヶ峠を越えて金川・福渡に抜ける街道と砂川を遡って周匝へ抜ける街道との交点を見下ろす交通の要衝にあたる。

概要 城は丘陵尾根筋を加工し、形成する。頂部に主郭（曲輪Ⅰ）を配し、その周囲は切岸によって帯曲輪状に平坦面を造り出す。さらに、その周囲に切岸を行って比高差 2 m 前後の急斜面を作り出す。北西に続く尾根には 2 条の堀切で区画して、曲輪Ⅱを造成し、その周囲には切岸によって帯曲輪状に平坦面を造り出す（曲輪Ⅲ）。さらに、それらの周囲にも切岸を行い、比高差 3 m 前後の急斜面を作り出す。主郭から尾根が延びる南東側には、4 条の堀切で区切る。また、南側と北側に腰曲輪ⅣとⅤを付属させる。主郭から北東に下った地点には井戸をうがっている。

文献・伝承 浦上宗景の判物（『吉備古簡集』所収）では、天文 21（1552）年 2 月に城主平尾源五郎の所領を没収し、花房次郎四郎に与えたとある。

（河合）



第 59 図 明田城跡縄張り図 (1/2,000)

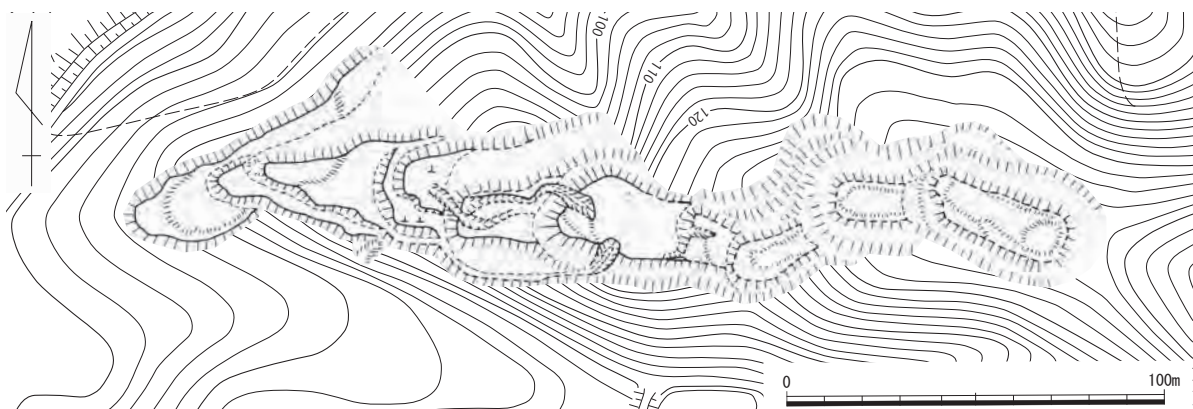
作図：畑和良

立地 山塊から惣分川に向かって西方向に延びる尾根の山裾部に立地する。

概要 西方向に向かって階段状に続く大小 9 面の曲輪が認められる。ただし、土塁や堀切はみられず、特に、高所にあたる東方からの攻撃に対する防御が手薄といえる。また、西側は植林・墓地による地形改変が著しいこともあり、全体的に城としての構造や性格が判然としない。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』で赤坂郡惣分村にある湯原藤内が居城した「古城山」に本城跡は比定される。また、『赤坂町史』は同地番が「惣分城跡」とする記載がある。

（澤山）

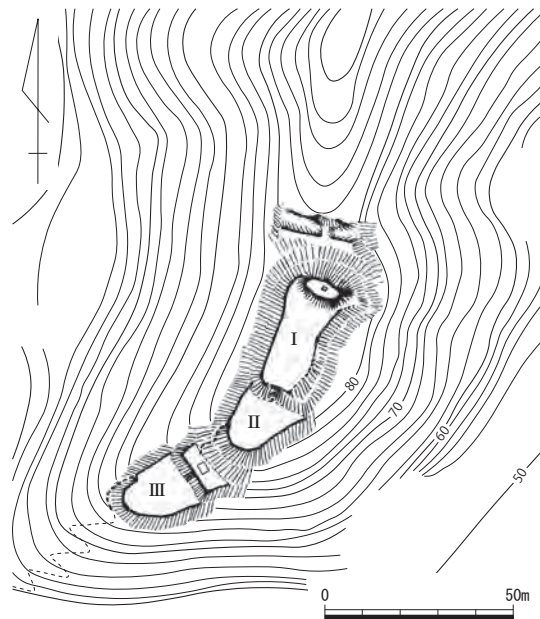


第 60 図 惣分城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 坂辺城跡は岩神山から南に派生する丘陵の南端に位置する。標高は約 80 m、周囲との比高差は約 50 m である。西を流れる砂川流域を広く見渡せる場所に立地し、砂川から吉井川方面（周匝方面）へ抜ける街道を見下ろす交通の要衝に位置する。

概要 城は丘陵南端の尾根頂部を利用して築かれる。北側を堀切によって尾根から切断し、北から南西にかけて緩やかに下る地形に即して曲輪を階段状に 3 面造成する。切岸による曲輪ごとの比高差、ならびに周囲との比高差は大きく、主郭（曲輪 I）の背後（北）に造られた大型の土塁（土壇状遺構？）（高さ約 2 m）から堀切底までの比高差は 5 m を超える。

文献・伝承 『備前記』などの近世地誌類では、城主を湯原甚兵衛と比定する。別称として笠岡古城跡がある。（河合）



第 61 図 坂辺城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 新庄川左岸の山頂部に位置する。

概要 単郭式の山城である。主郭の北・東・西側には高さ約 3 m 程度の比較的急峻な切岸が認められるが、南側は緩やかな斜面を呈している。曲輪面は比較的自然地形を残している。また、土塁・堀切といった防御施設は確認できない。なお、北東方向の尾根上には高まりがあり、出丸の可能性もあるが、構造的にはそうした評価は難しいと思われる。

文献・伝承 赤坂郡伊田村もしくは新庄村に所在する城跡として、『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』に「松撫城」等の記載がみられ、明石飛弾守や浦上伯耆守則国らが居城したとされる。ただし、簡素な城造りから一次的滞在で在城した伝承の可能性も考えられる。なお、別称を瀬戸山城跡という。（澤山）



第 62 図 松撫城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 新庄川と矢知川との合流点の北西側、北にある山塊から南東へ細く延びた標高約 120 m、比高約 40 m の丘陵端に立地し、旭川流域と砂川流域を山越えて結ぶ要衝に位置する。また、矢知川を挟んで東 450 m には矢知城跡が隣接している。城跡の東西は狭い谷があり、眺望は南半のみ開ける。

概要 尾根頂部の曲輪 I を中心とし、尾根の南東側に曲輪を連ねた構造である。北から細く延びた丘陵端の頂部に不整形な曲輪 I があり、中心曲輪と考えられる。曲輪 I は約 35 m × 20 m の規模で、南東側に緩やかに下がる。その北辺には長さ 35 m、幅は 4 m 前後、高さは 2 m 弱の土塁が巡る。土塁の北側には小規模な平坦面が確認できるが、これより北側尾根筋には堀切などの防御施設は確認できない。また、曲輪 I の西辺は緩やかに下がり、不明瞭な平坦面が 2 面程度確認できる。曲輪 I の南東側には約 23 m × 15 m の曲輪 II が続く。曲輪 I と曲輪 II との間は緩やかに下がり、曲輪 II の西辺と南辺は緩斜面となる。曲輪 II から南側に延びる尾根上には約 15 m × 5 m の小規模な曲輪が 3 面連なるほか、最南端には曲輪 III が配置されている。曲輪 III は約 22 m × 20 m とやや広く、北東側は帯曲輪状に延びる。総じて切岸の勾配はやや緩い。防御施設は、曲輪 I の北端を土塁で守るのみで、全体的に防御施設が乏しい縄張りといえる。

文献・伝承 『備前記』には「平岡西村之村北二古城アリ」と記されているが、本城のことを示すかは定かではない。また、『備陽国誌』には平岡西村古城山について、城主浦上与次郎と伝える。(米田)



第 63 図 地頭城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 新庄川と矢知川との合流点の北東側、北にある山塊から南へ細く伸びた標高約 150 m、比高約 80 m の山頂部に立地し、旭川流域と砂川流域を山越えて結ぶ要衝に位置する。また、西 450 m には地頭城跡が隣接する。

概要 城域は東西 40 m、南北 110 m と中規模でも小さい。細い尾根筋の頂部に造られた曲輪を中心とし、北側と南西側の尾根筋を連続堀切で遮断する簡素な構造をもつ。曲輪は造作が極めて不十分で、径 12 m 程度の小規模な円形を呈し、周縁の切岸は緩い。頂部から北側と南西側に細く伸びる尾根筋は自然地形を多くとどめるが、それぞれの尾根筋に幅約 5 m の浅い堀切を 40 m 前後の間隔で 2 条ずつ連続配置して遮断している。全体的に、縄張りは規模が小さく、簡素な構造であり、臨時的な施設とみられる。

文献・伝承 『備陽国誌』による矢知村の「古城山」とみられ、城主は不詳である。 (米田)



写真 76 遠景 (南西から)



第 64 図 矢知城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 鳥越山から東に下りながら延びる尾根先端に位置する。大字西谷は鳥越山とその北の仙高寺山の西側の谷部という意味合いが推測され、城跡が位置する尾根先端から西谷の南北を一望できる。

概要 西から下りながら延びる尾根筋が、鞍部状にやや狭まる地点に堀切を掘削して曲輪 I を造成している。曲輪 I は略長六角形状を呈する。堀切には北側谷部から上がる山道が連結し、さらに内壁が地山露出であることから、山道の造成により堀切に改変を加えたと推察する。堀切は尾根頂部で途切れ、南側にやや下った辺りで再び明瞭となる。北堀切の北端からは曲輪 I に上がる山道が造成されており、さらにその延長部（曲輪 I 東側）にも曲輪 I に上がる山道がみられる。東側山道は「L」字状に南に折れ、再び東に屈曲して尾根東側の谷部を通る道路に続いていた。曲輪 I の北寄りには松田氏の供養塔が立つ。供養塔の建立は天保 4（1833）年である。その南側 2 m 程の地点には楕円形状の凹地がみられる。曲輪 I の東側には帯曲輪が 2 段造成されていた。さらに尾根筋の北東側突端に台形状の腰曲輪が造成されている。

文献・伝承 『松田氏系図』によると、城主は金川城主松田左近将監元澄の弟松田彦次郎元貞という。なお、城館関連地名として殿奥（とんのおく）・城・城ノ下が残る。（上村）



第 65 図 西谷城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 旭川左岸の山頂部に立地する。

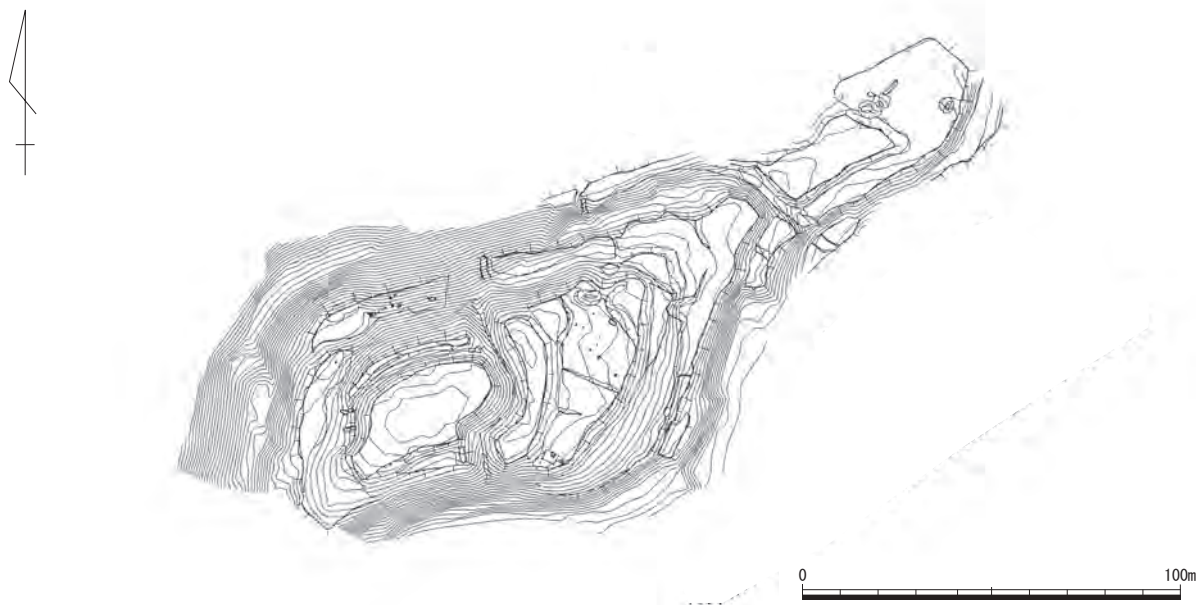
概要 1982年以降の碎石採土工事により「三の丸」・「二の丸」と呼ばれる曲輪群周辺のほとんどが消滅したとされ、1996年の調査時には中心曲輪周辺部分の「本丸」とされる範囲（東西約210m、南北約50m）を残すのみとなっていたとされる。

赤坂郡最大規模を誇る連郭式山城であったと思われ、発掘調査ではほぼ全域から曲輪や堀切・土塁・土坑・掘立柱建物などの遺構を検出しており、備前焼の大甕・摺鉢、瀬戸の卸し皿・碗、土師器の羽釜・椀・小皿等の遺物もまとまって出土している（文献238～241）。ただし、瓦類の出土はないようである。また、北側2面の曲輪から大量の炭化米を確認しており、籠城のための備蓄米としての可能性がある。

出土遺物から、城は13世紀後半から15世紀前半にかけて存続したとされる。しかし、曲輪の削平度が低いなどの中世前半期の特徴を残す一方、曲輪の有機的な配置や切岸や土塁などの防御施設の構築形態から、15世紀前半以降から戦国期まで改修が続いていた可能性も考えられる。

文献・伝承 赤坂郡矢原村に所在した城館として、『備前記』は榑原宗光、『備陽記』は榑村又四郎宗光、服部勘介、『備陽国誌』は榑村又次郎、『吉備温故秘録』・『撮要録』は榑原又四郎、服部勘介が居城した「古城山」の記載があり、『東備郡村誌』は浦上家臣、服部勘介、榑村亦四郎が居城した「城址」の記載がある。これらは本城跡に比定される。また、『岡山県通史上編』では赤磐郡五城村矢原の「矢原古城」との城名が認められるが、これも同一城跡である。

なお、畑和良によれば、熊谷城は旭川右岸で向き合う金川城城主である松田氏の影響下におかれた可能性が高い城跡と位置づけている。（澤山）



第66図 熊谷城跡縄張り図 (1/2,000)

文献101に一部加筆

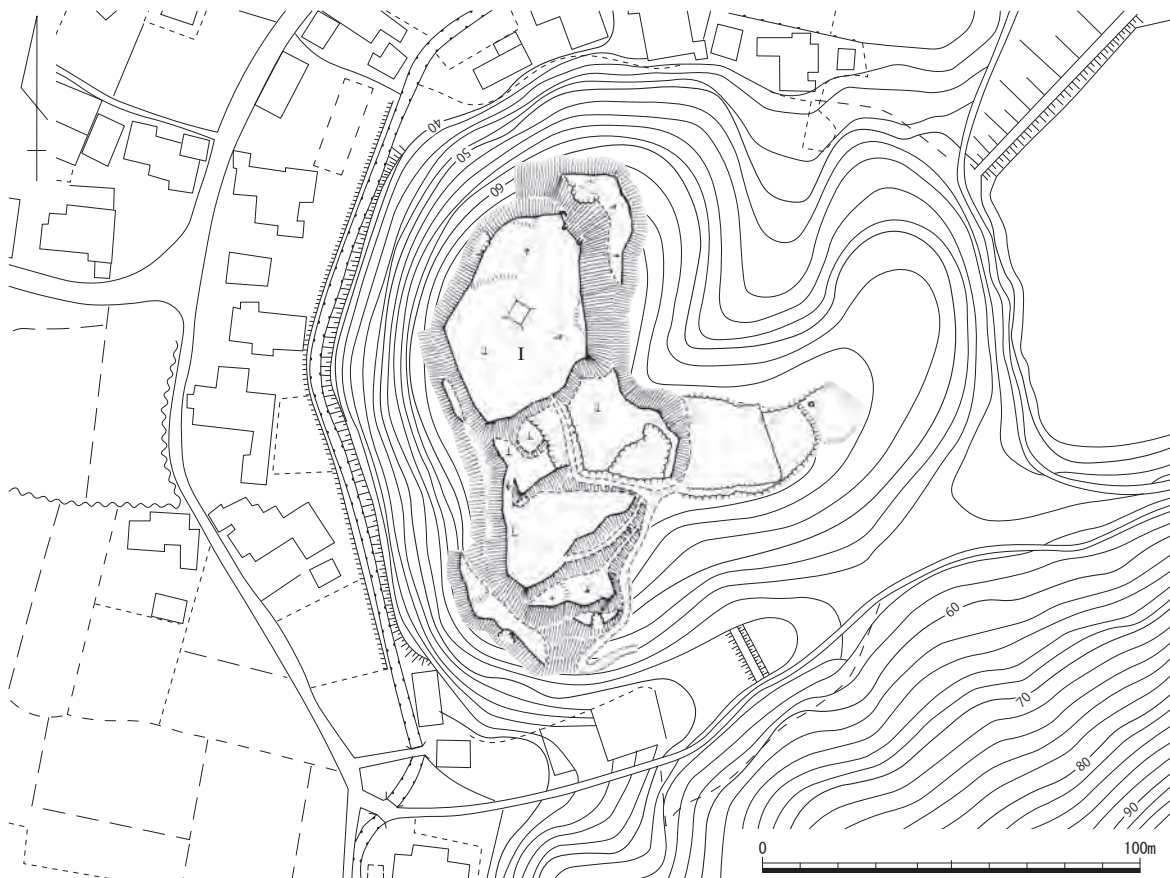
立地 旭川左岸、「赤磐富士」に北隣する標高約 70 m、比高 30 mの独立丘陵の頂部に立地し、旭川を挟んで西 1.2kmにある金川城跡と対峙する。

概要 城域は東西 70 m、南北 130 mと中規模である。頂部北側にある 55 m× 40 mの不整五角形の曲輪 I を主郭とし、南側尾根に複数の曲輪を配する構造をもつ。曲輪 I 北辺には土塁の残痕と小規模かつ部分的な石積みが見られる。南側尾根に配された曲輪 2 面の南西側斜面には小曲輪 2 面と帯曲輪を配する。また、東尾根は平坦面が 3 面あり、東端に素掘りの井戸がある。ただし、これらの平坦面は石垣で方形に区画されており、東側に向かうにつれて斜面が緩やかになって自然の傾斜に近づくうえ、南北の斜面は地形改変が著しい。そのため、これらの平坦面や井戸が城館関連遺構かどうかは定かではない。

文献・伝承 『虎倉物語』によれば、永禄 11 (1568) 年に宇喜多直家が玉松城攻めに際して「矢原の寺に御陣所」を敷いたと伝えられる。(米田)



写真 77 曲輪 I 北辺の石積み (南東から)



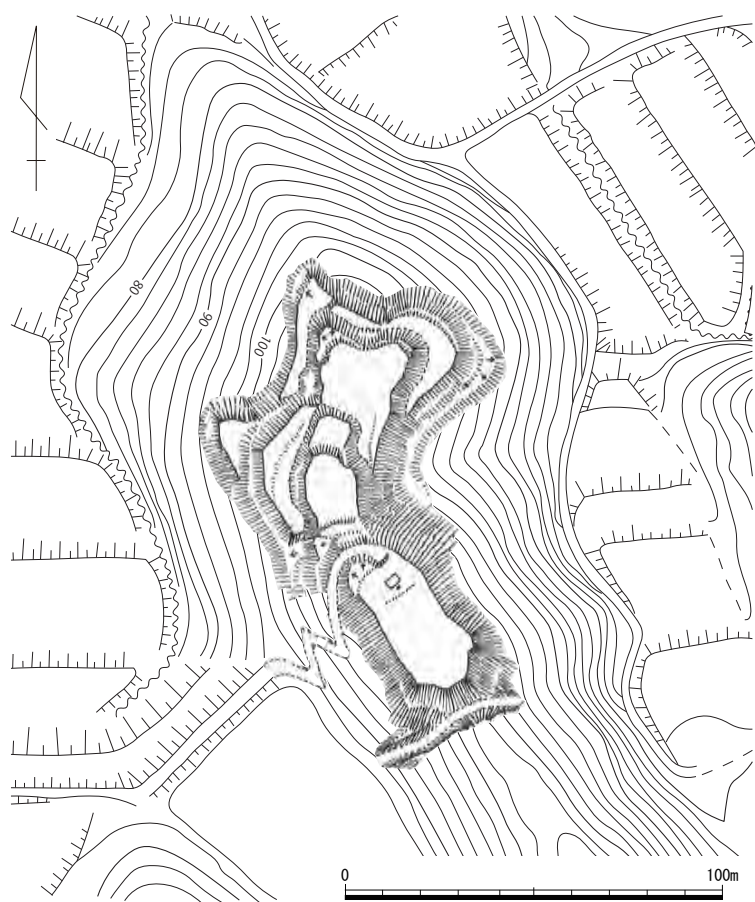
第 67 図 寺山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 新庄川左岸、牛神山から北西へ派生した標高約 110 m、比高約 30 m の丘陵先端に立地し、旭川と砂川流域を山越えて結ぶ要衝にあたる。本城から北東 1.3km に宇那山城跡が位置する。

概要 城域は東西 40 m、南北 130 m と中規模でも小さい。丘陵頂部の曲輪を中心とし、北西に延びる尾根上に大小様々な曲輪群を連ねて配置した構造を持つ。丘陵頂部は 35 m × 16 m の不整楕円形を呈する曲輪があり、主郭と考えられる。主郭南側の切岸は比較的急勾配で、尾根鞍部を 1 条の堀切で遮断する。堀切は幅 7 m 前後である。頂部から北西方向に延びる尾根上には、上段から 18 m × 12 m の曲輪、一辺約 8 m で方形を呈する小曲輪、22 m × 18 m の不整形でやや広い曲輪を連続して配置している。さらに、尾根先端が二又に分かれる北東と北西の張り出しに帯曲輪をそれぞれ配している。また、西側の張り出しには帯曲輪と小曲輪を段々に配している。

全体的に南側の尾根筋を堀切、北西に延びる尾根先端は北東・北西・西側の 3 方向に帯曲輪を配置して防御を固めた縄張りといえる。

文献・伝承 『備陽国誌』によると、難波将監経高より代々居城し、難波八郎左衛門尉経定の時に宇喜多直家によって落城したと伝えられる。また、主郭の曲輪中央には「難波十郎兵衛行豊之墓」と刻まれた石碑がある。(米田)



第 68 図 殿谷城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良



写真 78 遠景 (南西から)



写真 79 主郭 (北西から)



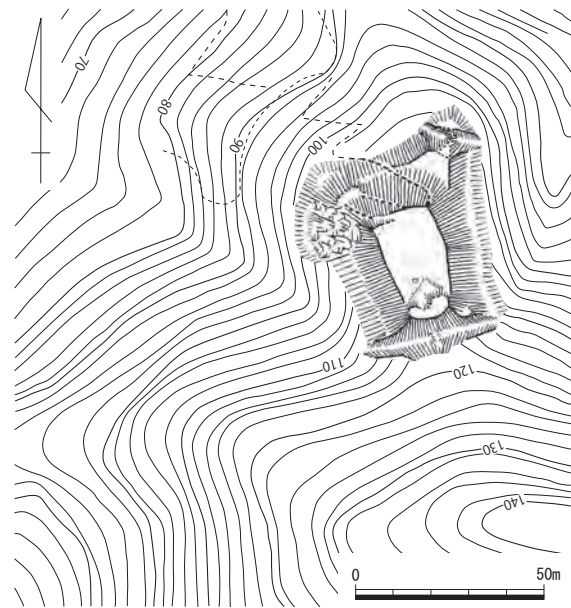
写真 80 堀切 (南西から)

立地 新庄川左岸の山塊から北西に延びる尾根端部に位置する。

概要 単郭式山城であり、主郭背後にある宇那山古墳の墳丘を利用した土塁が肩口となる深さ約3mの堀切を確認した。この堀切の両端は長く延びて豎堀状を呈する。主郭の北側には、寛延2（1749）年に建立した「妙法道智居士」＝長崎行兼の墓がある。

主郭の北・東・西側には、高さ約5mの比較的急峻な切岸が造られ、さらに北東・北西側には腰曲輪が築かれている。また、北東側の腰曲輪の前面には深さ約1mの小規模な堀切を設けており、北西側の腰曲輪には主郭に通じる通路状遺構が取り付く。

文献・伝承 『備陽国誌』・『東備郡村誌』に記載された、長崎四郎左衛門が居城した赤坂郡伊田村の「うな山城」に比定される。別称野良山城跡。（澤山）



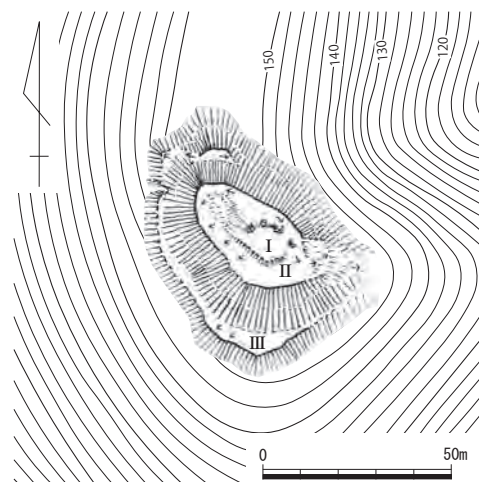
第 69 図 宇那山城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 石寄川が形成した谷底平野を眼下に望む山塊頂端部に位置する。東約2.5kmには砂川が流れ、眼下には砂川流域から伊田岬を越えて旭川（金川）方面に抜ける街道が通る。当城跡からは、西～南～東方向の眺望が開け、特に東南は砂川流域の広い範囲を見通せる。この石寄川流域の谷底平野を取り囲むように高光城跡・木山城跡・金比羅城跡・大久保城跡など多くの城跡が確認される。

概要 頂部を中心に造作が施された単郭の城である。主郭(曲輪Ⅰ)の南辺に石が並び、そこから1段低くなる。この曲輪Ⅰの周囲には簡単な切岸で平坦面を造成し帯曲輪状にする(曲輪Ⅱ)。その南には傾斜を利用して小規模な曲輪Ⅲを配置する(比高差約4m)が、丘陵尾根が延びる北側に堀切を設けていない。

文献・伝承 近世地誌の『吉備温故秘録』では、城主を花房与左衛門とする。また、『赤坂町誌』では、天文18（1549）年頃、北から進入した尼子勢を小屋谷城の花房与左衛門と大久保城の額田与次右衛門が撃退したと記述される。別称に八左城がある。（河合）



第 70 図 小屋谷城跡縄張り図

(1/2,000) 作図：畑和良

立地 赤磐市と岡山市の境界にあたる伊田岬の南側の山塊頂部に位置する。

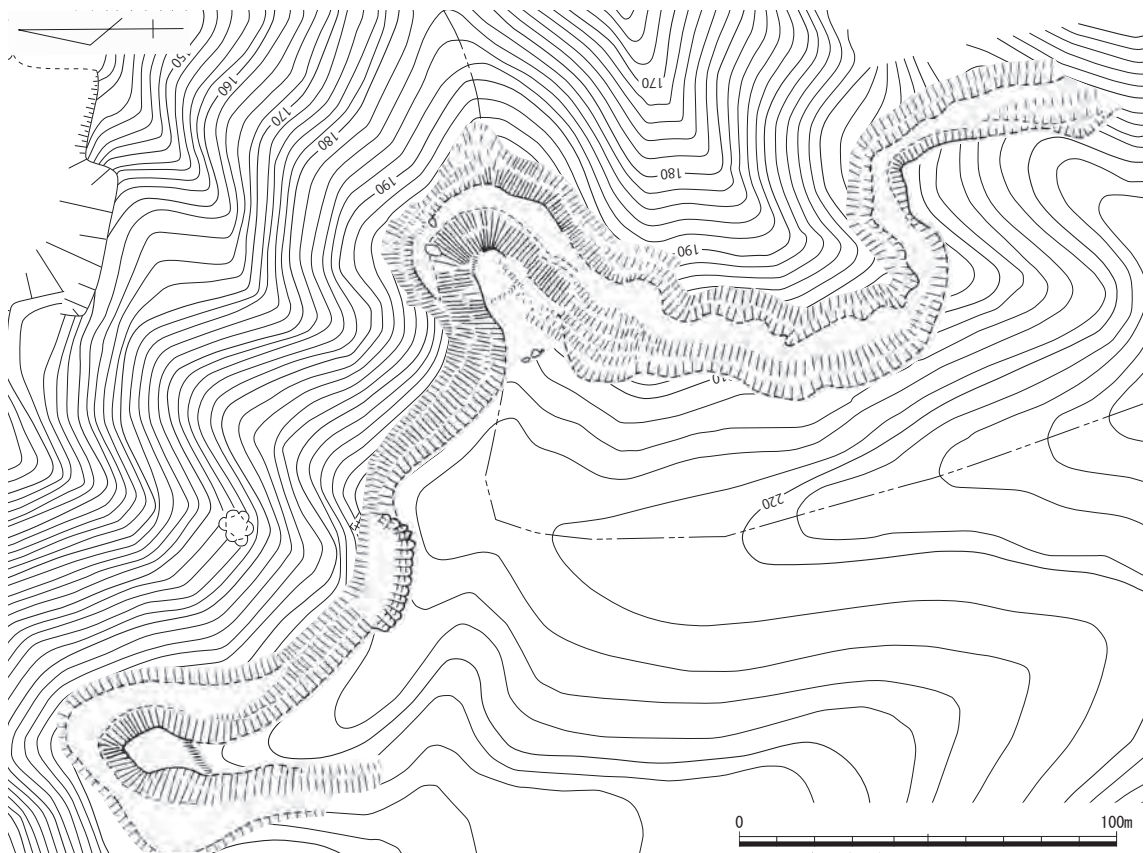
概要 山頂部には自然地形を多く残した比較的広い範囲の平坦面が広がっており、その中央付近には祠が祀られている。ただし、ここでは土塁や堀切のような防御施設はみられない。一方、この平坦地の下方斜面には比高差4～5mを測る切岸がみられ、南北方向に位置する小尾根端部の2か所をつなぐように巡る帯曲輪状の平坦地を確認した。また、この下方には急峻な斜面の自然地形が続いている。

文献・伝承 赤坂郡山口村に所在する城館として『備陽記』・『備陽国誌』・『撮要録』・『東備郡村誌』には城主不詳として「木山城」・「木山古城跡」などの記載があり、本城跡はこれらに比定される。当地は備前西部の松田氏と東部の浦上氏の勢力境にあたり、砦・要害といった役割が想定される。

(澤山)



写真 81 北端尾根切岸 (南から)

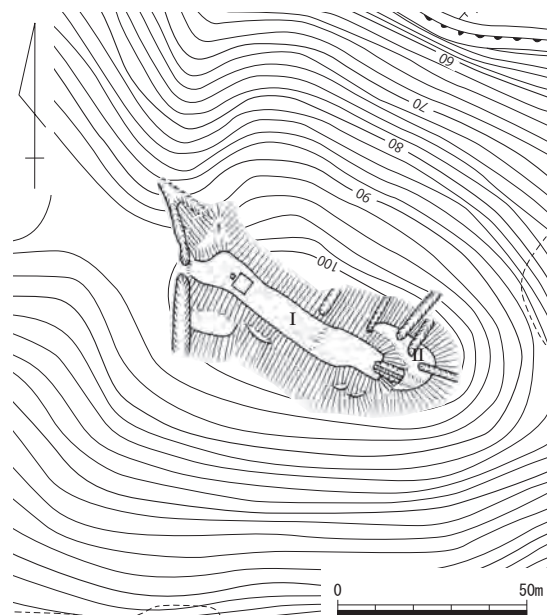


第 71 図 木山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、伊田岬の赤磐市側出口に所在する逆「L」字形を呈した独立丘陵上に立地する。赤磐市由津里の平野部を東方に望み、約 800 m 南には高光城跡がある。

概要 尾根頂部に小祠や建物等によって大規模に改変を受けた長さ 50 m、幅 10 m 弱の長方形を呈する曲輪 I を配置する。西側尾根続きには、尾根上平坦部を土橋状に掘り残した幅 3～5 m、深さ約 2 m を測る堀切が開削され、その両端部は豎堀状に斜面へ続く。曲輪 I の東側には、「L」字形を呈する曲輪 II を配する。この曲輪を切り込むような数本の豎堀状の凹みが認められたが、人為かどうか判然とせず、雨水によるものかもしれない。北側と比べると若干傾斜が緩やかである曲輪 I の南側は、小規模な曲輪が数面築かれている。

文献・伝承 近世地誌類で山口村に所在すると記載される城跡のうちの 1 つと思われる。城主名は伝わっていない。(小嶋)

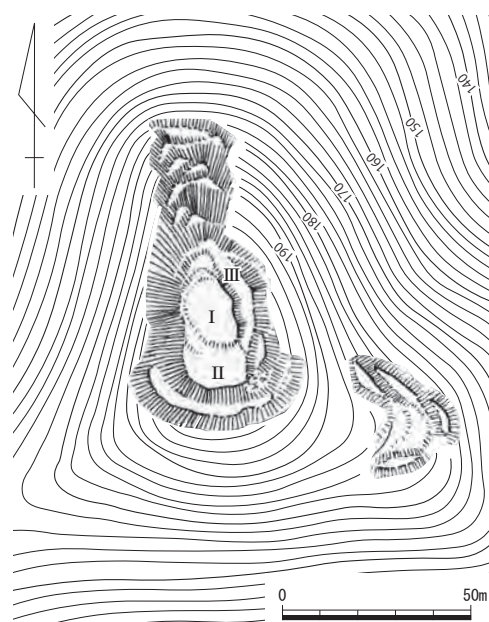


第 72 図 金比羅城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 高光城跡は滝城山から北東に派生する山塊頂端部に位置し、北～東方向の眺望が開ける。東約 2.5km を流れる砂川に合流する石寄川が形成した谷底平野の奥まった場所に位置。眼下には砂川流域から伊田岬を越えて旭川(金川)方面に抜ける街道が通る。

概要 頂部を中心に造作が施されている。主郭(曲輪 I)の周囲に簡単な切岸を行って平坦面を造成し、帯曲輪状にする(曲輪 II・III)。ここから南東方向の傾斜変換点付近に曲輪状の段を確認。主郭の北にも階段状の小規模な曲輪群が認められる。

文献・伝承 近世地誌の『備陽国誌』・『東備郡村史』では岡与右衛門、草賀仁兵衛を、『備前記』・『吉備温故秘録』では花尻助職を城主にあてる。畑和良によれば、『備陽国誌』など記載の「からから城」については、高光の誤読「こうこう」から「からから」が派生した可能性が高いとされ、この城跡と同一と考えられる。(河合)



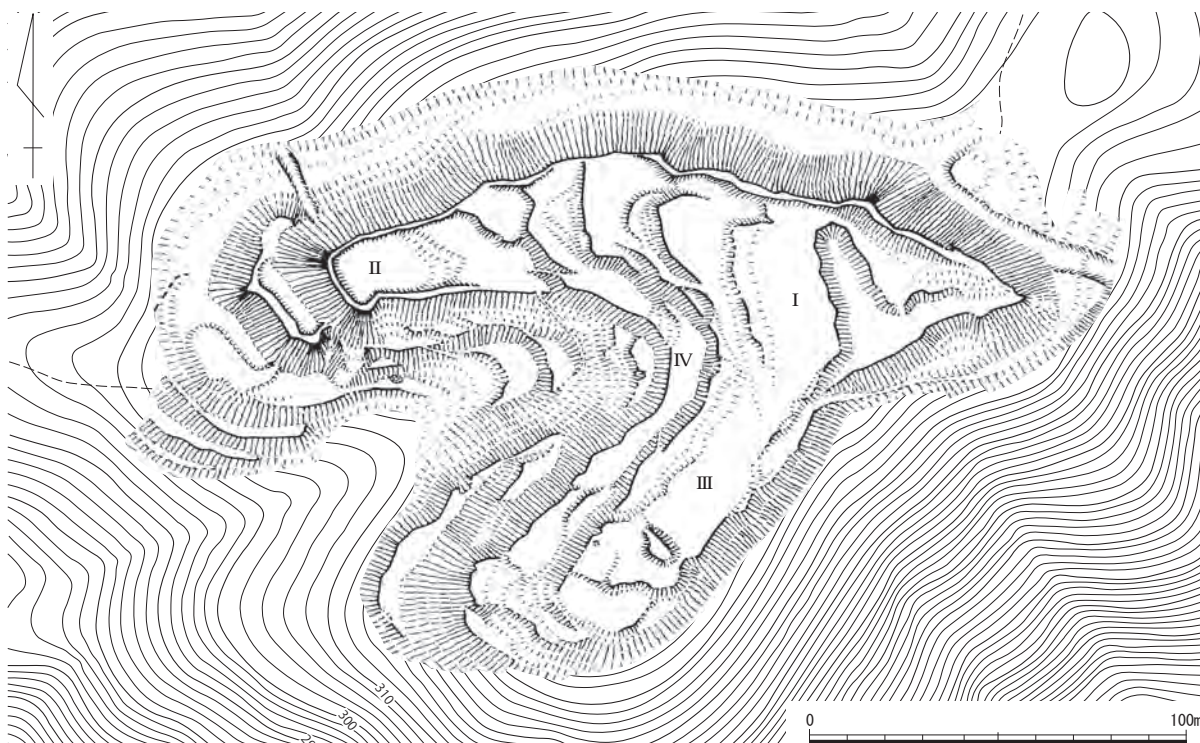
第 73 図 高光城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 標高 342 m の瀧城山頂部に位置する。瀧城山の南を旭川が東流しており、山頂部から南に派生する尾根よりその流れを見下ろすことができる。旭川に並行する道路は銭瓶峠を抜ける。

概要 瀧城山頂部から西・南方向に派生する尾根筋に曲輪を造成し、山頂部北東側は堀切で北から緩やかに続く尾根筋から城を分断する。略三角形の曲輪 I の中央付近には南から堀が掘削されている。堀南端は帯曲輪に接続しているが、北端は掘り切らずに丸く収めて、曲輪面に土橋状に通路が残る。また、この堀と近接する地点のみ、曲輪 I の北辺が北側に張り出していることから、堀は城造成段階で掘削されたことが分かる。堀の性格については曲輪内に造成された堀切と推測する。山頂部から西に延びる尾根筋には連郭状に曲輪が造成される。連郭状曲輪群の北辺には高さ 1～2 m の土塁が確認できる。土塁は曲輪 I 北辺から続くもので、西尾根西端の曲輪 II では西・南辺も画していた。曲輪 II の南西角は横矢掛け状に南に飛び出す。曲輪 II の西側は堀切 2 条を階段状に造成する。いずれも南端部を丸く収めて土橋状にしているが、土橋状部分の南側では 2 条の堀切が連結するような様相を呈する。山頂部から南に延びる尾根筋では、高さがわずかに下る程度の細長い曲輪 III を造成し、南側に高さ 1 m 程度の土塁を造成する。土塁の南側にも曲輪は延びるが、土塁から南側の曲輪は 2 段下がる。最下段の曲輪は西にやや下がり、谷に面した帯曲輪 IV に連結する。曲輪 IV は谷を取り巻いて西尾根まで続く。西・南尾根の間の谷底では備前焼・須恵器・土師器などが確認でき、備前焼の壺・播鉢は鎌倉時代末から南北朝時代に比定できそうである。

文献・伝承 城主は伊賀勝隆と伝えられる。勝隆は文亀頃（1501～1504）虎倉城に移り、草賀五郎兵衛・又平正継が在番する。 (上村)



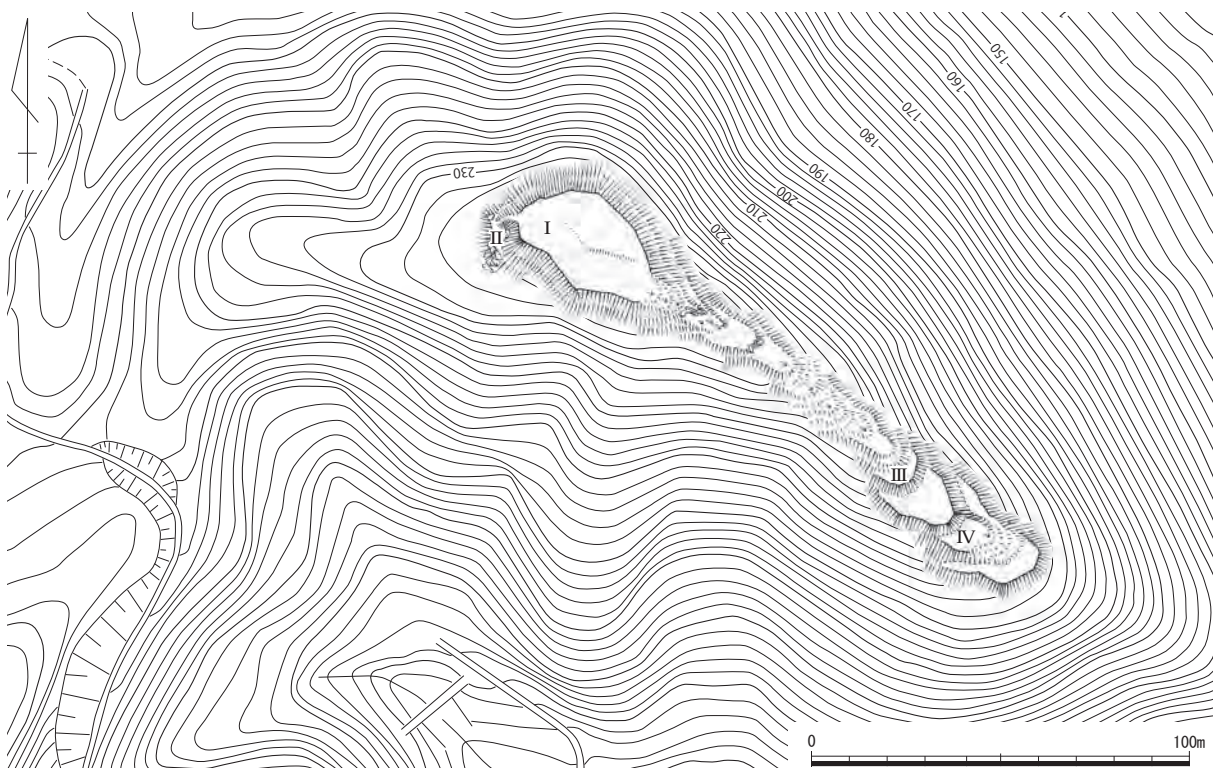
第 74 図 瀧ノ城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 城は、上地山満楽寺地蔵院の背後に所在する山塊から東へ延びる尾根先端頂部に立地する。上二保の集落を一望し、赤磐市山口から上二保へ至る往還を見下ろす。

概要 頂部に占地した曲輪Ⅰは、自然地形の段差を残す。この曲輪の西辺には、地山中の巨石を切岸の一部に取り込んだ曲輪Ⅱからの通路が取り付く。曲輪Ⅱから西方尾根続きは、明瞭な加工痕跡が認められない幅の狭い尾根筋である。曲輪Ⅰから曲輪Ⅲに至る尾根筋には、地山中の巨石が露出した数面の平坦面や自然地形の緩斜面が続く。曲輪Ⅲから東側に配された曲輪のうち、曲輪Ⅳ東辺は自然地形を残す。

文献・伝承 『備陽記』では「村ノ乾に古城山跡アリ城主不知」と記載されているが、『吉備温故秘録』では城主を葛木左京進時景とする。『山陽町史』は、平安末期にこの上二保地域を含む鳥取庄を開発した領主の葛木氏によって築かれ、貞治年間（1362～1368）には葛木四郎次郎左衛門茂綱が居城したと記す。『西山村史』には、曲輪Ⅰに「東南に幅2間、長さ3間半で礎石が残っており、その後について長4間余の天守台の跡とする屋敷跡がある」と記述されているが、今回の調査では礎石等は確認されなかった。また、鉄製茶釜が出土したとも伝えられるが、その所在は不明である。

なお、この城の東麓には、葛木氏居館跡とされる場所が2か所伝えられている。1つは、城の麓にある満楽寺から東側の傾斜地、もう1つは「土井ノ内」や「殿の後」の小字名が残る下二保の集落内である。両者とも現状では、堀跡や屋敷跡と想定されるような地形が認められない。（小嶋）

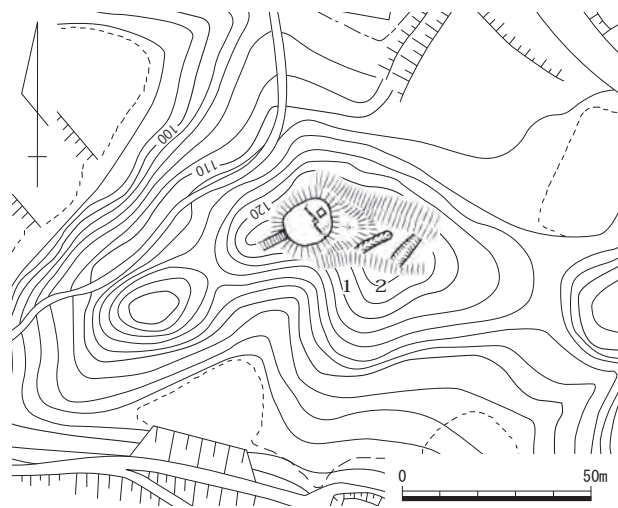


第75図 葛木城跡縄張り図（1/2,000）作図：畑和良

立地 東から延びる尾根の先端に立地するこの城は、赤磐市西軽部から和気町佐伯を結ぶ街道と、赤磐市殿谷から佐伯峠へ至る街道が合流する地点を北方に見下ろす。佐伯峠の和気町側出口には小坂城跡が所在する。

概要 標高約 120 m、比高差約 20 mの尾根頂部に 12 m四方の曲輪を配した単郭の城である。曲輪内には小祠が祀られ、その前面には2～3段積み石列が所在する。この曲輪から南西に延びる尾根筋には後世の石段が築かれており、城館関連遺構が存在していたのか判然としない。一方、東側尾根続きには、やや広い平坦な自然地形と尾根筋に対して斜交した2条の堀切が認められる。幅約 2 m、比高差 2 m強を測る堀切 1 は、尾根東側を土橋状に掘り残している。堀切 2 は幅約 4 mを測るが、深さは浅く約 1 mしかない。

文献・伝承 城主名等、一切伝わっていない城である。
(小嶋)



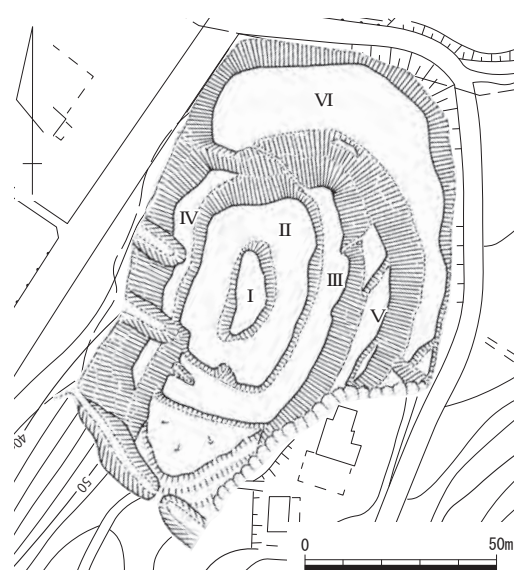
第 76 図 菖蒲佐古城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 東軽部城跡は南北方向に続く丘陵北端に位置する。周囲との比高差は約 20 m。砂川流域から佐伯峠を越えて、和気町方面へ抜ける街道沿いに立地する。

概要 南側を堀切によって切断し、その北側を城域とする。主郭（曲輪 I）の周囲に円形に幾重にも曲輪を配する輪郭式の山城である。曲輪 I～IVは切岸によって周囲との高低差が際立っている。曲輪 IIの南と南端の堀切中央に虎口を設けている。また、2条の縦堀が西側の街道方面にうがたれている。さらに曲輪 Vと VIが東から北に巡らされている。城の南東部は民家造成により破壊を受けているが、城域は南北が約 130 m、東西が約 85 mと推定される。

文献・伝承 1999 年、当教育委員会による分布調査で新規発見された。文献等には記載されない城ではあるが、『備前記』で同一丘陵上に比定されている「古城山」（宝地城）は、この城を示す可能性がある。

(河合)



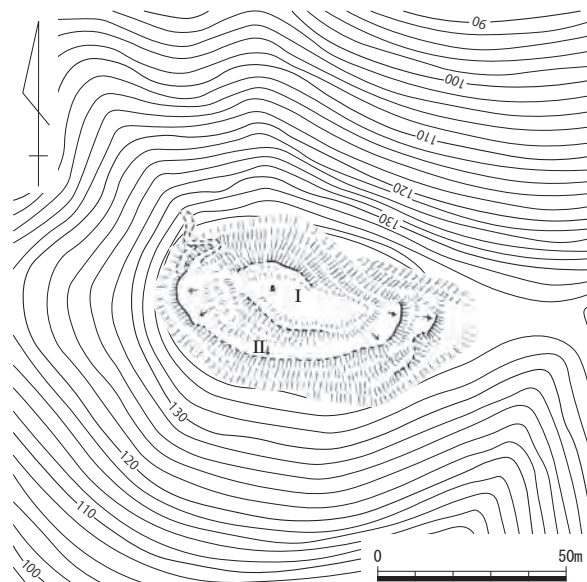
第 77 図 東軽部城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：島崎東

立地 砂川流域を一望できる山塊端頂部に位置する。眼下には砂川流域から野間峠を越えて可真方面に抜ける街道も抜けており、交通の要衝である。視界は北・西・南方面に開けている。

概要 頂部を中心に造作が施される単郭の城である。主郭(曲輪Ⅰ)の周囲に簡単な切岸を行って平坦面を造成し、帯曲輪状にしている(曲輪Ⅱ)。この曲輪Ⅱについても、東西の境は切岸で区画するが、南面は造作が弱めである。虎口はこの曲輪Ⅱの北西部に取り付く。尾根が続く東(搦手)側には地形を生かして段状に小さな曲輪を配置するが、その先に堀切等は認められない。

文献・伝承 近世地誌には城主として福島兵衛(佐)を挙げる。『赤坂町史』に所在地の記載があり、畑和良はこの東軽部城跡のことを示している可能性が高いとする。(河合)



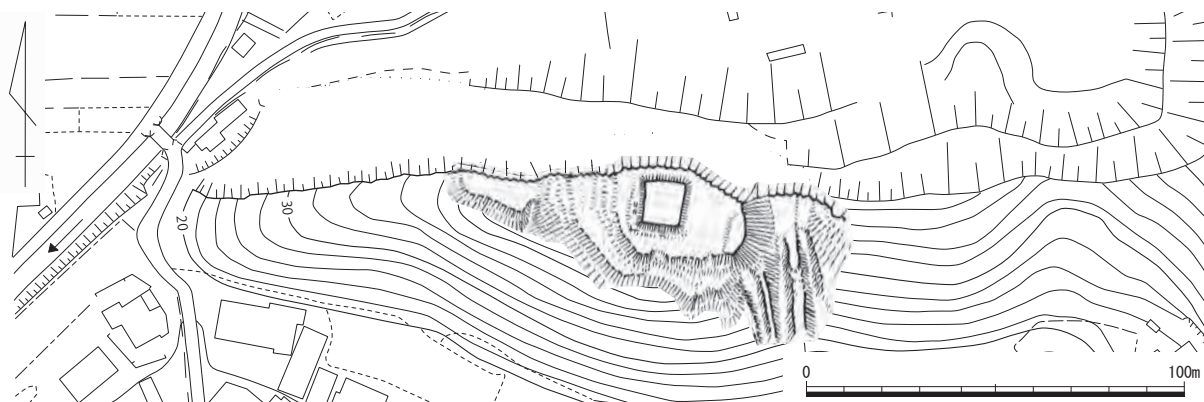
第 78 図 宮口城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 山陽ふれあい公園のある丘陵から西方に延びる尾根頂部に位置する。

概要 山頂部に主郭が築かれるが、中央には後世に造られた高さ約 1 m の土壇がみられる。主郭の西斜面には 4～5 面の加工段がみられ、下方には腰曲輪が認められる。南斜面には急峻な切岸が造られ、下方には東西に細長い帯曲輪を配置している。東側には堀切 3 条が掘削され、これより東方の谷部にも堀切 1 条が確認できる。なお、土取りのため城域の北半が全壊している。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』は苅田万三郎、『吉備温故秘録』は遠藤修理も居城とある。(澤山)



第 79 図 正崎城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 善応寺城跡は標高 262 m の善応寺山から南東に派生した山塊頂端部に位置する。旧山陽道と砂川が交差する下市周辺を眼下に収める交通の要衝にあたる。

概要 頂部とそこから南東に下る尾根上に形成。主郭とみられる曲輪Ⅰは頂部に形成。そのすぐ北には切岸によって曲輪Ⅱを巡らせ、そのさらに北西下には、切岸で帯曲輪状の平坦面を造成する（曲輪Ⅲ）。善応寺山方向へ尾根が続く北西側には堀切を設けることはせず、曲輪状に狭小な平坦面を残すのみである。また、南東に下る尾根上には階段状に曲輪Ⅳ～Ⅵを造成している。曲輪の境には岩が露出しており、それを積極的に取り込んで防御性を高めている。曲輪ⅠとⅣの間は比高差が約 30 m あるが、その間に自然地形を多く残すのは、所々に露出した岩が天然の要害としての役割を果たしたからであろう。

文献・伝承 近世地誌の『吉備温故秘録』では、城主を赤坂備中守と記述される。なお、この城主名にちなんでか赤坂城の別称が残る。 (河合)



第 80 図 善応寺城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良



写真 82 遠景 (北西から)



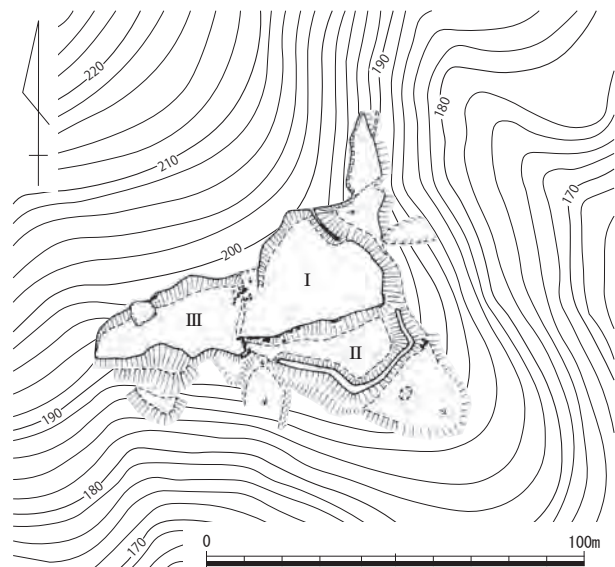
写真 83 曲輪Ⅲ (西から)

立地 旭川下流域で流れが大きく蛇行するところの左岸にある標高約 190 m、比高約 170 m の山中腹に立地する。山は北側の山塊から南東へ尾根が延びる。山の南西麓には山陽道が通るほか、西麓は旭川にも面しており、水陸交通の要衝にあたる。旭川沿いの南西の眺望が良好で、旭川を挟んで南 2.0 km の龍ノ口城跡と対峙するほか、旭川右岸には南西約 3.0 km に船山城跡が位置する。

概要 城域は東西 90 m、南北 80 m と中規模である。城が築かれた標高約 190 m 辺りの山中腹は緩斜面で、等高線に沿うように大小の曲輪 5 面が並列する構造である。中央北側の曲輪 I は中心的な位置にあり、南辺 40 m、南北 25 m の不整形を呈し、山側を削平して平坦面を造成している。東辺は、北東側に低い土塁があり、中央は緩く屈曲する。南辺は南東隅角から西端にかけて 1 段ないし 2 段程度の石列が部分的に認められる。北西隅は山側からの斜路のような高まりが残り、周辺には人頭大の石が多く散在する。南辺と東辺の切岸は 3 m 程度の高低差があるが、傾斜は緩い。中央南側は東西 30 m、南北 10 m の台形の曲輪 II がある。東辺・南辺・西辺を幅 7 m 前後、高さ 1 m 程度の土塁で嚴重に囲んでいるが、西側の一部だけ開放しており、曲輪 III につながる。曲輪 II の南西側は尾根上は緩やかな傾斜をもち、曲輪としての現認は難しい。また、中央北側の曲輪 I の北東側には小曲輪が 2 面続く。西側は東西 40 m、南北 15 m の曲輪 III があり、南東隅角は石列が良好に残存する。北辺中央西寄りには 5 m 前後の大岩が地上に露出しており、一際目立つ。南辺の切岸は緩く、南斜面も傾斜が緩い部分が認められる。

全体的に曲輪が等高線に沿う並列かつ変則的な配置で、南を土塁のみで堅固に守った臨時的な城であったと考えられる。

文献・伝承 故事来歴は不明である。(米田)



第 81 図 名称未定縄張り図 (1/2,000)



写真 84 遠景 (南西から)

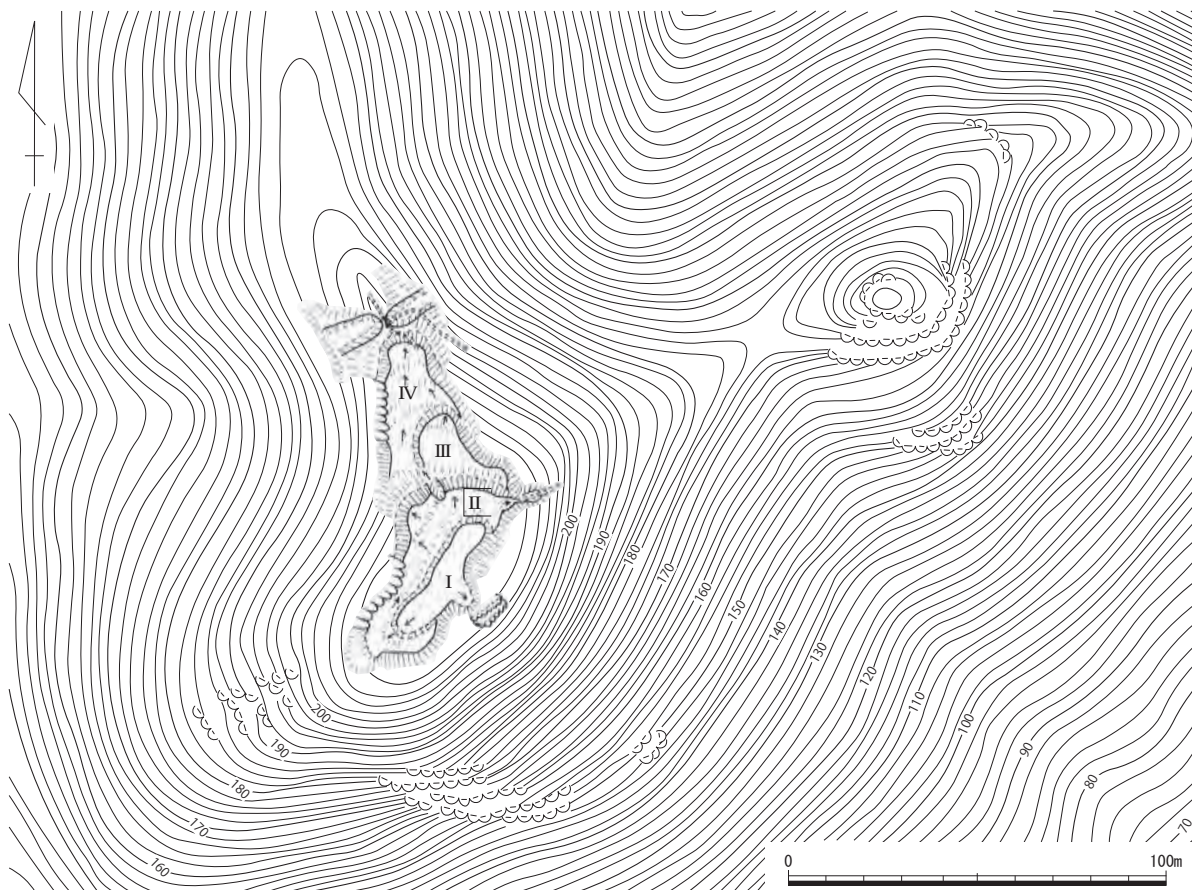


写真 85 曲輪 III (東から)

立地 赤磐市と岡山市の境、北の龍王山塊と南の龍ノ口山塊が最も接近する地点付近の山塊端頂部に所在。この周辺は、狭い谷地形となっているが、旧山陽道が通っているように古来より交通の要衝となってきた場所である。眺望は東西に良好に開け、旧山陽道沿いの広い範囲を見通すことができる。

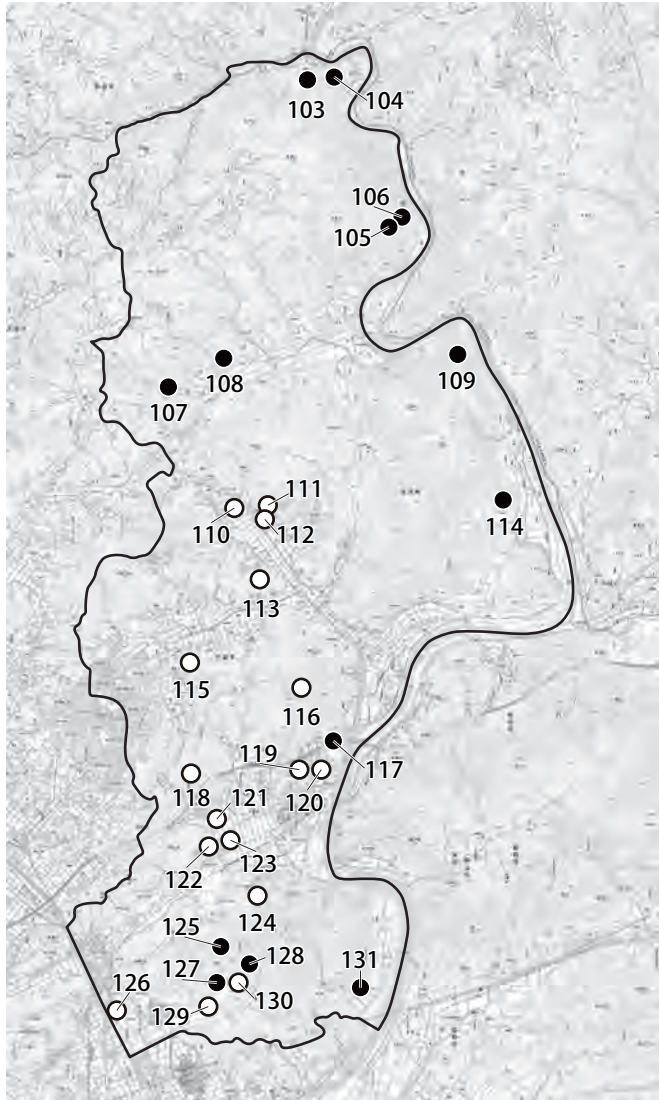
概要 兜山は大兜山（または兜山と呼称）と兜山（または甲山と呼称）と呼ばれる2つの峰からなる。このうち、人工的な造作は、西に位置する大兜山に認められる。こちらでは長さ約35m、幅約7mの細長い主郭（曲輪Ⅰ）を頂部に設け、その周囲を簡単な切岸によって画し、帯曲輪（曲輪Ⅱ）を巡らせる。尾根が伸びていく北側には傾斜を生かして階段状に曲輪Ⅲ・Ⅳを造成する。その先を幅3～4mの堀切で分断するが、尾根頂部は土橋状に残している。主郭の背後（搦手）側は露岩混じりの急傾斜地であり、天然の要害として機能したものと考えられる。縄張り自体は小規模であるが、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの比高差が約3m、曲輪Ⅱと曲輪Ⅳの比高差が約6m、曲輪Ⅳと堀切の底面の比高差が約4mもあり、切岸によって高低差が大きく造成されていることに特徴がある。一方、東に位置する兜山は峰全体が露岩で覆われており、城の造作は認められないが、谷を挟んで尾根伝えに大兜山へ移動ができること、さらに東方面への眺望に優れることなどから城の一部として機能した可能性が高い。

文献・伝承 今回の調査で現状が明らかになった。近世地誌の『吉備温故秘録』では、松田氏の枝（支）城とし、城主を左近太夫にあてている。別称に上田城、上山城、上月城などがある。（河合）



第 82 図 兜山城跡縄張り図 (1/2,000)

第3節 磐梨郡



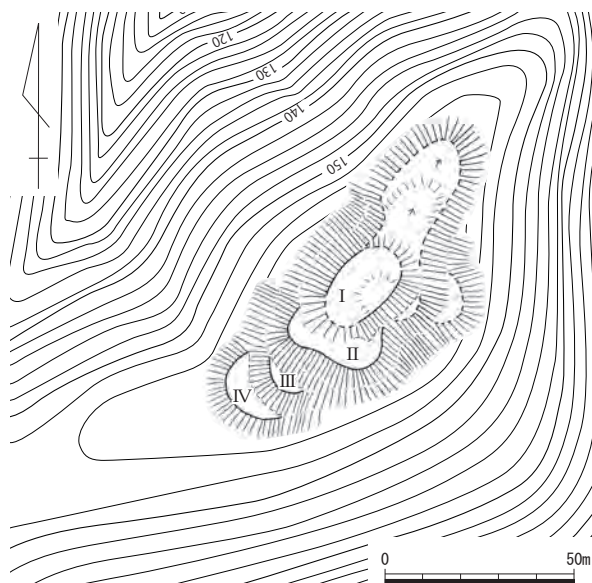
- | | |
|------------|---------------|
| 103. 上田城跡 | 118. 妙見山大森山遺跡 |
| 104. 稲蒔城跡 | (妙見山城跡) |
| 105. 石ヶ谷城跡 | 119. 保木城の砦跡 |
| 106. 坊主山城跡 | 120. 保木風呂屋遺跡 |
| 107. 小坂城跡 | 121. 塩納大日遺跡 |
| 108. 田尻城跡 | 122. 宗堂城山城跡 |
| 109. 城ノ段跡 | 123. 名称未定 |
| 110. 岡城跡 | 124. 南方城跡 |
| 111. 赤尾山城跡 | 125. 物理城跡 |
| 112. 殿谷城跡 | 126. 土井の内寺跡 |
| 113. 可真下城跡 | 127. 肩脊城跡 |
| 114. 西山城跡 | 128. 高尾城跡 |
| 115. 可真上城跡 | 129. 堀ノ内遺跡 |
| 116. 大盛山城跡 | 130. 鳥の奥遺跡 |
| 117. 保木城跡 | 131. 内山城跡 |

第 83 図 磐梨郡城館位置図

立地 城は、北東に延びる尾根の頂部に立地している。谷を挟んだ西側約400mにある尾根上には、稲蒔城跡が所在している。城からは赤磐市周匝の集落や茶臼山城跡が一望でき、さらに稲蒔城跡と比べると高田川沿いの街道の視認性に優れている。

概要 標高約160mの頂部に、自然地形の高まりを東側中央部に残した曲輪Iを配する。この曲輪の東西両辺は明瞭な切岸を設けているが、南北両辺は加工痕跡が認められず、特に北東に向かって下がる尾根筋は自然地形の緩斜面である。南側の尾根続きには、各々高さ約1.5mの切岸を備えた曲輪II～IVを配して守りを固める。曲輪IV以西は幅広い平坦地が続いているものの、堀切などの防御施設は認められない。曲輪Iから南東に延びる小尾根には、小曲輪らしき平坦面が存在する。

文献・伝承 築城時期や城主名などは伝わっていない。(小嶋)

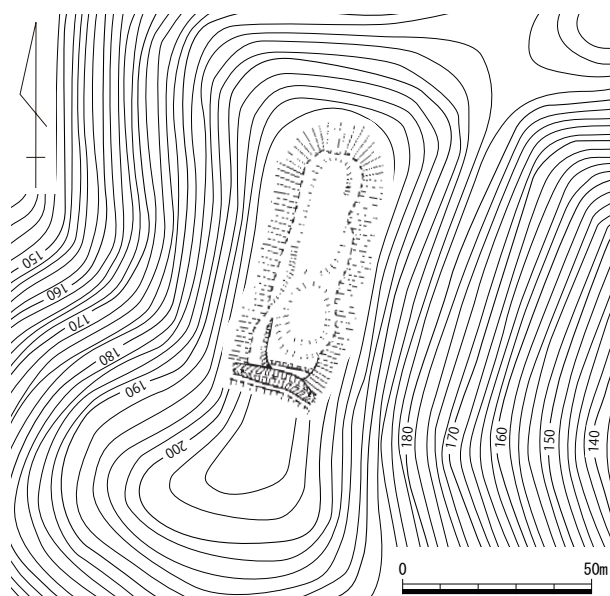


第84図 上田城跡縄張り図(1/2,000)

立地 城は、周匝から南流した吉井川が「S」字状に大きく屈曲している地点に向かって西から張り出した尾根の頂部に立地する。赤磐市周匝の茶臼山城跡と和気町田土の天神山城跡のほぼ中間地点に位置し、吉井川沿いの街道や、これと合する高田川沿いの街道を一望し、北に所在する周匝の集落までも視認する。

概要 頂部にある約90m×20mの平坦地の中央やや南側に、幅約5m、深さ約2m、両肩部に現状で高さ30cm程度の土塁を設けた堀切が掘削されているのみの城である。城域は、堀切西端から北へ向かって延びる幅約1.5mの通路や、周囲への視認性によって、堀切より北側の約65m×20mの範囲と考えられる。ただし、この範囲の縁辺には切岸が認められず、自然地形のままである。

文献・伝承 城主名など全く伝わっていない城である。(小嶋)

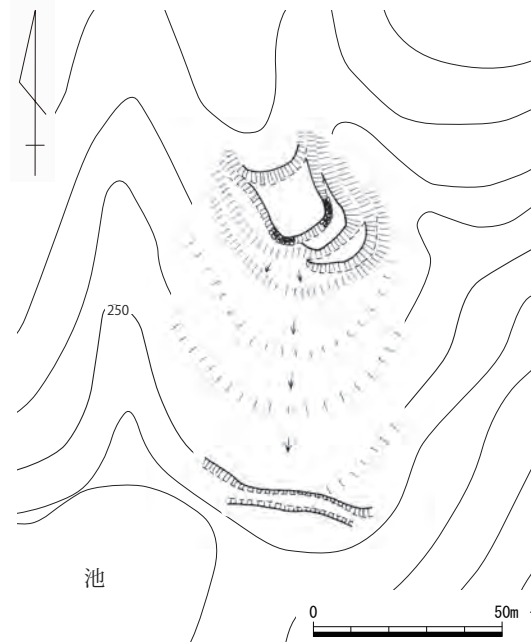


第85図 稲蒔城跡縄張り図(1/2,000)

立地 吉井川を西岸の丘陵地から南の谷筋に向かって舌状に張り出した尾根上に位置する。坊主山城跡とは後述するように一連の城郭遺構であった可能性がある。谷筋に面して築城されたのは、南西にある池との関係で捉えられる可能性がある。

概要 丘陵斜面を加工して曲輪が形成される。主郭を中心に小さい曲輪を付属する。主郭前面の隅には石積みでの補強が認められる。この地点から、南は自然地形を残しつつなだらかに谷へと下っていくが、谷付近で大規模な堀切が設けられている。

文献・伝承 石ヶ谷城跡は新発見の城郭である。初出は明治時代に刊行された『赤磐郡誌』であり、津瀬村石ヶ谷にあったとされる。この城跡は地誌類記載の地点とは若干違う箇所には所在するが、花崗岩の礫が多くみられる谷に面した丘陵上にあり、「石ヶ谷」の名称を考慮すると、こちらが該当する可能性が高いと判断する。
(河合)



第86図 石ヶ谷城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 吉井川西岸の丘陵上に位置し、吉井川流域の広い範囲を見渡せる。また、背後（南西側）の石ヶ谷城跡も見通すことができ、構造も類似していることから、一連の城郭遺構であった可能性がある。

概要 尾根上に簡単な切岸を行い、南西の谷部を切岸で出た排土で谷を埋めて曲輪面を造成する。東側斜面付近では岩盤を井戸状にくり抜く箇所もある。なお、この地点から南東方向に向かって尾根が階段状に下りながら延びており、人為的な加工は認められないが、城としての利用は十分に可能である。

文献・伝承 坊主山城跡は新発見の城郭である。近世地誌類には記載がなく、昭和時代の『日本城郭全集 15』が初出であり、萩原口に所在するとされる。地籍図調査の結果、萩原口の地名は、津瀬集落北西の山裾部を示すことが判明し、その地点に近接することから、この城跡が該当する可能性が高い。
(河合)



第87図 坊主山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、王子川が形成した平野の西端に向かって北から張り出す尾根の先端部に立地する。

概要 南西に延びる尾根頂部に、高さ約 50cm の土壇状の高まりが認められる曲輪 I が占地する。この曲輪の中央部東側には、中央部幅を狭める意図があったかもしれない、約 1 m の深さを測る方形の掘削地が認められる。曲輪 I から南西に延びる尾根筋は急傾斜であるものの、約 10 m 下った場所に先端部を取り巻く自然地形の平坦面が存在する。この平坦面を 3 分割するような竪堀状の落ち込みが 2 本確認されたが、人為的なものかどうか判然としない。曲輪 I から東側に延びる尾根筋は、自然地形の平坦面であるが、東辺のみ切岸が施されている。北側の尾根続きは、2 条の堀切とその間の 2 面の曲輪によって守りを固める。

文献・伝承 『日本城郭全集 10』では、小坂与八郎則高を城主と記す。本地点は畑和良の情報提供により確認した。(小嶋)



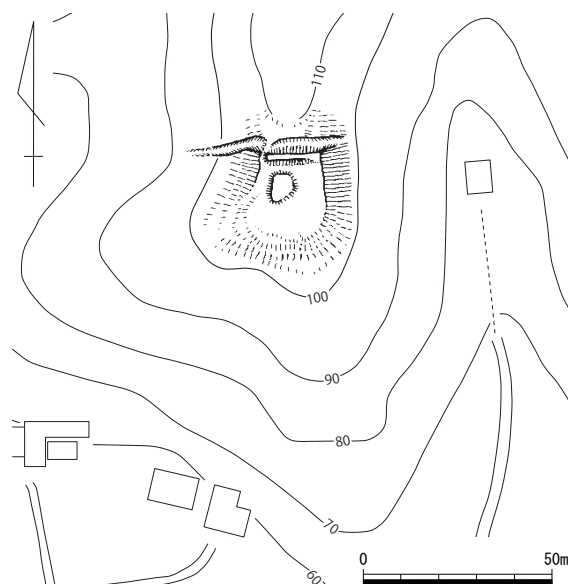
第 88 図 小坂城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 田賀集落に向かって南に延びる尾根先端部に築かれている。

概要 主郭中央の北側には高さ約 1 m を測る土壇が認められる。また、その背後には、高さ約 1 m の土塁が伴う堀切 1 条が掘削されている。

文献・伝承 近世地誌類に記載は認められないが、『改修赤磐郡誌』には「赤磐郡佐伯上村田賀坂本」に田尻城として、「冲合、田尻川と王子川の合流する北岸に、土畔 4 基がある。」との記載がある。また、『日本城郭全集 10』では、標高 140 m の小高山上に最上段を中心にして 3 段に区切られた城地が認められるとある。これらの記述と本城跡の特徴が完全に一致しているとはいえないため、判然としない点がある。なお、同城については畑和良の報告がある(文献 179)。

(澤山)



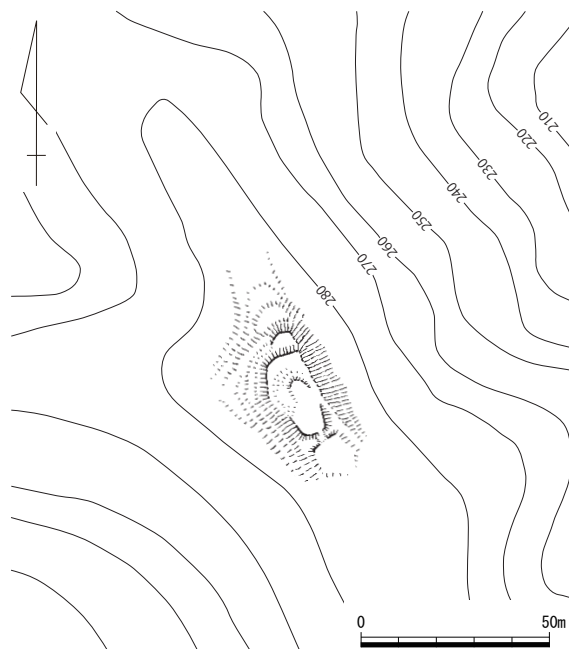
第 89 図 田尻城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 吉井川右岸山塊の山頂部の北に延びる尾根上に築かれている。なお、吉井川の対岸にあたる東方約1kmには天神山城跡が所在する。

概要 中央付近に高まりをもつ自然地形の平坦面を主郭として、南北に急峻な切岸を設ける。南側は深さ約1mの堀切を配置し、北側は小曲輪を1面設ける。さらに北側には、不明瞭ながら2面程度の加工段が認められる。

文献・伝承 近世地誌類には関連記述は認められないが、『改修赤磐郡誌』には天神山城攻撃の際、宇喜多方の陣所として記載されている。また、同城については畑和良の報告がある（文献179）。
(澤山)



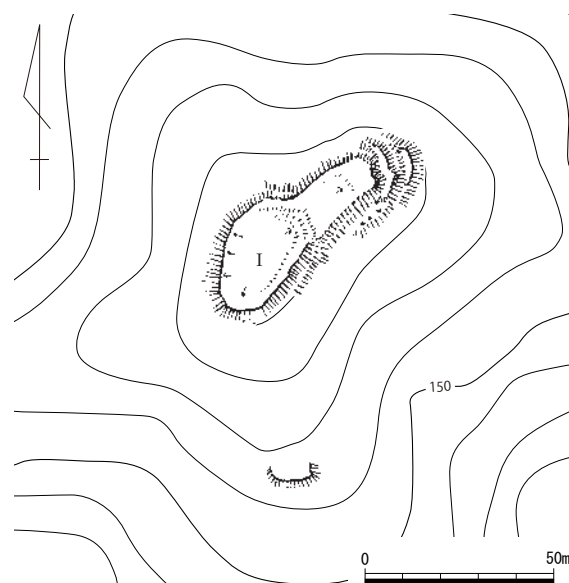
第90図 城ノ段跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 城は、吉井川右岸の山塊南端に位置する城山山頂に立地し、天神山城跡や曾根城跡とは吉井川を挟んで対面する。

概要 標高約190mを測る急峻な山の頂部に築かれた城である。主郭となる曲輪Iは周囲に切岸を備えているものの、その内部は自然地形が残る。この曲輪の北東側には、各々約2mの比高差を測る小規模な曲輪を2面配し守りを固める。また南に延びるやや急斜度の尾根筋の先端部には、南辺にのみ切岸が施された小規模な平坦面が認められる。

文献・伝承 城主は、近世地誌類では宇喜多土佐守、自治体史では宇喜多忠家を記載している。ちなみに宇喜多土佐守の墓は、田原の時正山妙応寺と寺山の本久寺に所在すると伝えられている。この山の中腹には、城主の奥方の墓と伝えられる古墓があるとされる。
(小嶋)



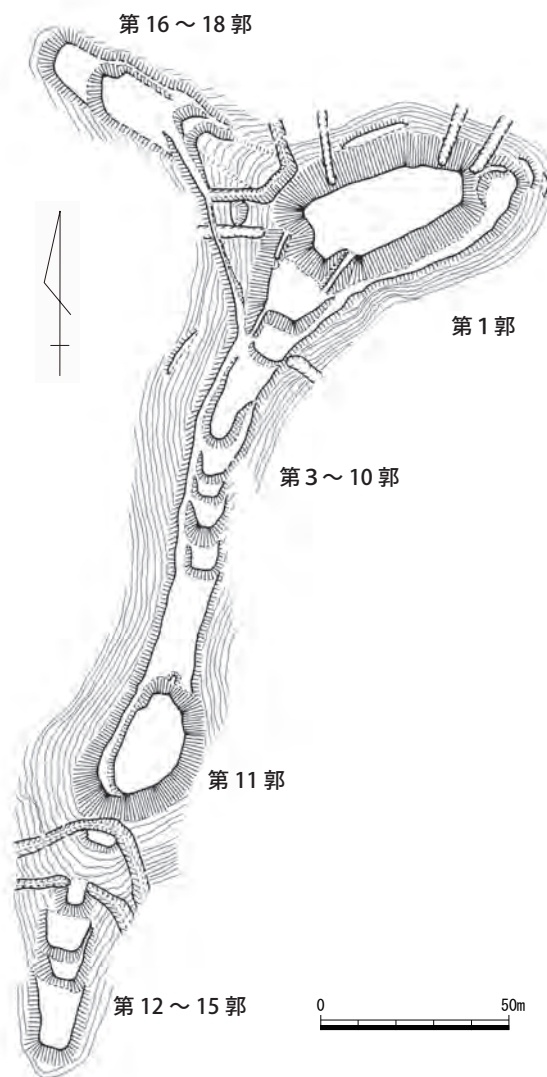
第91図 西山城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

立地 保木城跡は標高 181 m の城山頂部一帯に位置する。眼下を流れる吉井川下流域の広い範囲を一望でき、また南西方向は遠く旧瀬戸町市街地まで見通せる。眺望に非常に優れた交通の要衝上にある。

概要 現在は、採石工事により城の大方は消滅している。ここでは、工事に先立って行われた 1979・1980 年の全面発掘調査当時の所見をまとめておきたい。当城は「Y」字状を呈する尾根上のほぼ全面（長さ約 400 m、幅約 30 m）を利用する連郭式の山城である。城山頂上に形成された主郭とみられる第 1 郭は約 900㎡の広さを持つ。後世の攪乱のため、遺構の保存状態が悪いが、西側部分で柵列に囲まれた礎石建物（規模不明）が検出されている。この曲輪を取り囲むように 4 本の竖堀も認められる。その南東部は切岸で平坦面を作り出し、帯曲輪とする（第 2 郭）。この曲輪の北東端で 1 間×2 間の掘立柱建物（櫓と推定）が検出されている。第 1 郭から南へ緩やかに下る尾根は階段状に整形し、複数の曲輪を造成している（第 3～10 郭）。このうち、第 3 郭では 8 間×10 間の側柱の礎石建物（北に庇、東に入口をもつ）が発見されている。その先の第 11 郭は、周りを切岸で際立たせて 1 段高くしており、「二の丸」跡と推定される場所であるが、鉄塔がすでに立っていたこともあり、礎石が 4 個検出されたにとどまった。第 3 郭から第 11 郭の西側にはスロープ状に通路を確保することで、平常時の移動を容易にしている。この通路は後述する第 16～18 郭にもつながっている。第 11 郭の南には 2 条の堀切を入れて嚴重に区画するが、その先にも階段状に曲輪群を設けている（第 12～15 郭）。一方、第 1 郭から北西に分岐する尾根についても分岐部に堀切を入れて区画し、その先を階段状に整形し曲輪群を設けている（第 16～18 郭）。このほか、斜面にもいくつかの小規模な曲輪を設けるなど、防御力をさらに強める施設が随所に配置されている。

出土遺物には、主に第 10 郭の両斜面から、室町時代後半の備前焼・古銭・石臼・硯・馬具・



第 92 図 保木城跡縄張り図 (1/2,000)
文献 258 に一部加筆

鉄鏃・刀子・鉄釘・鉄砲玉のほか、約 200kg の炭化した穀類（米・麦・粟・豆など）が検出されている。第 7 郭でも炭化した穀類や古銭が出土した。

文献・伝承 『備陽国誌』などの近世地誌には、城主は浦上宗景の重臣である明石源三郎飛驒守、明石飛驒守、明石掃部頭全登の 3 代と記される。1979・1980 年、当教育委員会により全面発掘調査実施（文献 257・258）。『熊山町史通史編』にも詳しい記載がある。現在は大部分が消滅。（河合）



写真 86 出土遺物 1

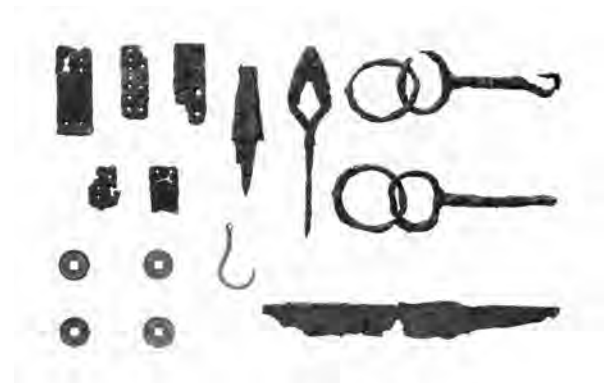


写真 87 出土遺物 2

125 もどろい 物理城跡

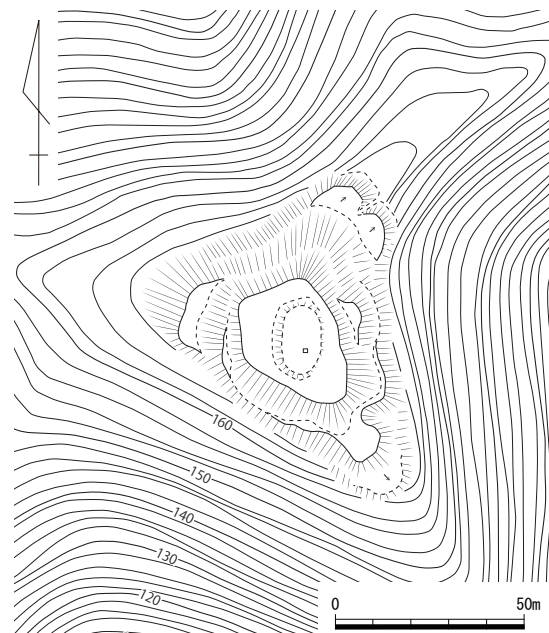
岡山市東区瀬戸町坂根・瀬戸町肩脊

地図 17 右

立地 吉井川右岸の山塊の東西に連なる尾根頂部に位置する。

概要 単郭式山城であり、中央に約 50cm の土壇状の高まりを有する五角形の主郭が最高所に築かれ、周囲に帯曲輪状の平坦面が認められる。また北東・南東・西側 3 方向に延びる尾根部にはそれぞれ小曲輪が造られている。

文献・伝承 『備陽国誌』では磐梨郡坂根村の「古城山」に城主不詳（一説に長船右京）とあり、『吉備前秘録』では磐梨郡坂根村の「物理城」に物理貞茂、宇喜多家臣が、『吉備温故秘録』では磐梨郡坂根村の「物理城」に物理貞茂、左藤将監が、『東備郡村誌』では磐梨郡坂根村に佐藤将監、明石右京、周東飛驒守が居城とある。また、『岡山県通史上編』では赤磐郡吉岡村坂根の城ヶ谷山城として長船左京、物理貞茂、佐藤将監、明石右京、周東飛驒守が居城とある。（澤山）



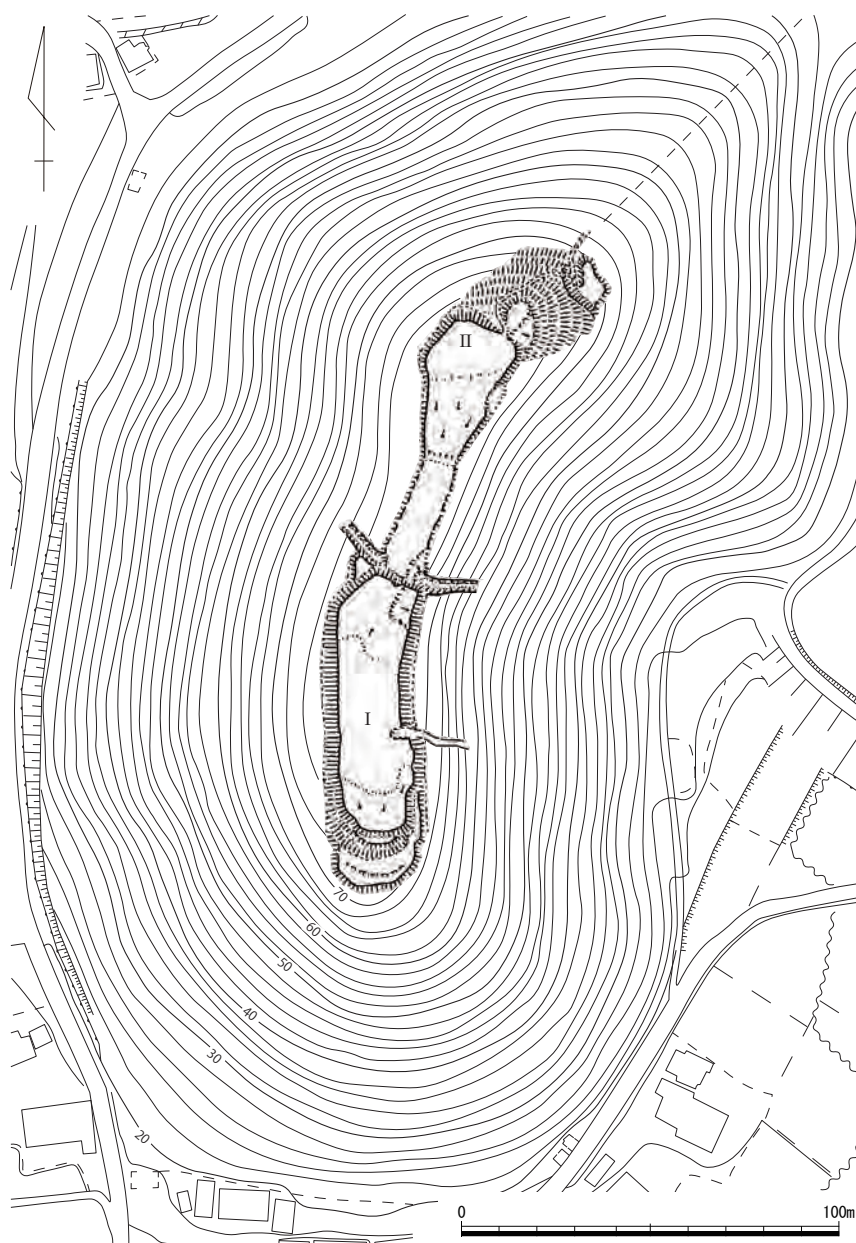
第 93 図 物理城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 肩脊地域は、砂川左岸にあって東の山塊から西に開けた谷筋に形成された平野部で、中世肩脊郷に比定される。東の大内峠を越えれば約 2 km で吉井川流域の大内地区とつながる。肩脊城跡は、この地域を南に一望できる標高 75 m の城山山頂に位置する。また、南約 300 m の地点には南北 95 m、東西 60 m の方形居館跡である堀ノ内遺跡が所在する。

概要 城は、およそ南北に長い楕円形を呈する独立山塊の頂部に全長約 150 m にわたって築かれている。縄張りは単純で、中央部の比較的浅くて短い豎堀が東西両斜面にみられる箇所で大きく北と南に二分される。主郭は、豎堀の存在する上面より 1 m 高い南側に造成された全長 60 m、幅 20 m を測る長い曲輪 I が想定される。曲輪面は全てが平坦ではなく、先端部分は自然地形で緩やかに南方に斜傾してみられる。また東側中央肩口には東麓からの城道の存在をうかがわせる虎口状の凹みが認められる。

一方、北の曲輪 II は全長約 70 m の規模で一見大きくみられるが、詳細にみるとこれも曲輪造成の程度によって二分される。北側上面は削平がよくおこなわれており、周辺肩口下方には造成の結果、土砂が両側に押し出され、勾配の強い斜面が造られている。これに対して南側は北側の曲輪から幅を狭めながら緩やかに下がった所から主郭に至る幅 10 m、長さ 30 m の面がみられるが、ここには顕著な曲輪の造成痕跡は認められない。

なお、曲輪 II に取り付く尾根筋には切岸に



第 94 図 肩脊城跡縄張り図 (1/2,000)

よって造成された横矢を効かせた小曲輪が2か所と、主郭の南肩口から斜面にかけては大小2面の舌状を呈する曲輪が付属するなど、南北両尾根筋の防御を固めている。形式的には南北朝期へ遡る可能性を有する。

文献・伝承 『備陽記』には城主を宇喜多直家の家臣岡豊前守と伝えるが、これを傍証する直接的な史料は存在しない。 (島崎)



写真 88 主郭北側堀切 (北西から)



写真 89 主郭東側虎口状凹み (南西から)

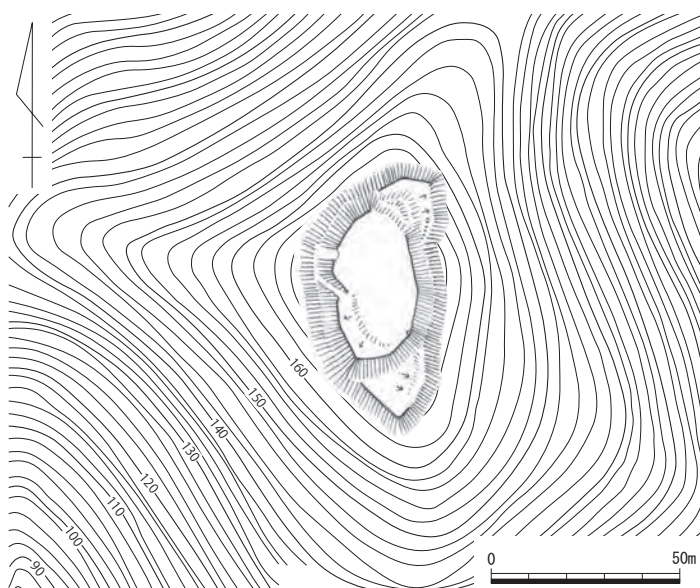
128 ^{たかお}高尾城跡 岡山市東区瀬戸町肩脊

地図 17 右

立地 砂川左岸の谷奥、塩井池の北東にある標高約 170 m の急峻な山頂に立地する。比高は約 130 m である。近隣には本城から谷を挟んで西 650 m の山頂に物理城跡が位置する。

概要 城域は東西 20 m、南北 60 m と小規模である。縄張りは頂部の曲輪とその南北にはそれぞれ腰曲輪を配置する。頂部の曲輪は東西 22 m、南北 39 m と広く、西辺中央に坂虎口を設ける。このほか、頂部から南東へ約 40 m 程下った東斜面には豎堀に類似した痕跡が3本程度認められるが、城跡に伴うかは判断が難しい。

文献・伝承 『備之前州磐梨郡中津山願興寺記』は大永年間(1521～1528)に周藤飛驒守、『備陽記』は佐藤将監が在城したと伝える(文献113)。 (米田)



第 95 図 高尾城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 吉井川右岸にあって、大内集落はもとより吉井川流域に開けた平野部を南眼下に眺望可能な北西から南に延びる標高 40 m の尾根先端部に所在する。

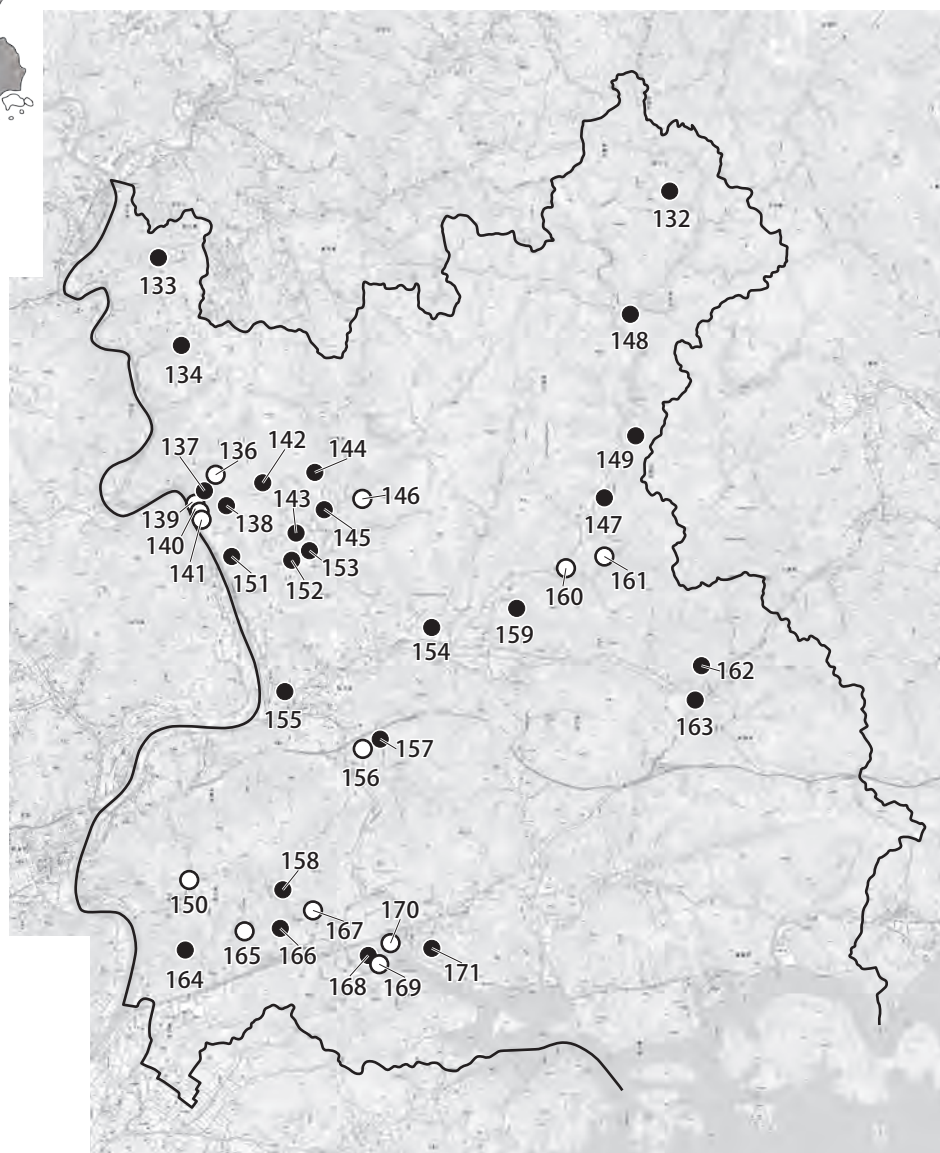
概要 曲輪は、集落との比高差 20 m と比較的低位な頂部を削平して造られた東西 25 m、南北 30 m の楕円形を呈する単郭で、現在ここには祠が祀られている。南端部には集落からの道が取り付き、そこに虎口が想定される。一方、曲輪北側には高さ 70 cm 程の土塁が弧状に造られ、さらにこの北側直下約 3 m には上端幅約 2 m、尾根筋からは深さ 50 cm 程の浅い堀切が、さらにその外側には比較的低い土塁が並行して造られている。なお、南側裾部には幅 2 ～ 5 m 幅の平坦面が带状に存在するが、後世の開墾による可能性が高い。

文献・伝承 近世地誌類にも城名の記載は認められない。
(島崎)



第 96 図 内山城跡縄張り図 (1/2,000)

第4節 和氣郡



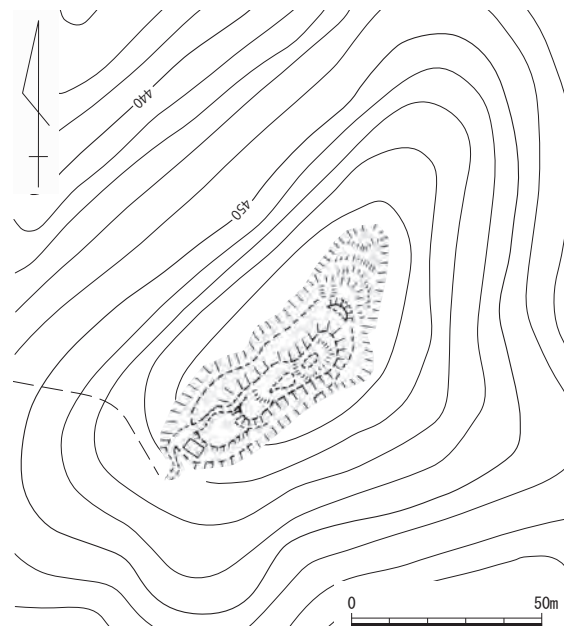
- | | | | |
|--------------------|--------------|----------------|-------------|
| 132. 飯盛山城跡 | 146. 天王久保山城跡 | 155. 曾根城跡 | 164. 香登城跡 |
| 133. 奥塩田茶白山城跡 | 147. 医王山城跡 | 156. 衣笠城跡 | 165. 狐塚城跡 |
| 134. 北山方城跡 | 148. 大股古城跡 | 157. 北山城跡 | 166. 茶磨岩城跡 |
| 135. 観音山城跡 | 149. 惣谷山城跡 | 158. 伊部城跡 | 167. 鬼ヶ城跡 |
| 136. 天神山城跡根小屋 | 150. 熊山城跡 | 159. 東山城跡 | 168. たい山城跡 |
| 137. 天神山城跡 | 151. 龍徳山城跡 | 160. 明石掃部介守重宅跡 | 169. 伝太閤門跡 |
| 138. 天神山城太鼓丸跡 | 152. 上見山城跡 | 161. ろんき山城跡 | 170. 茶白山城跡 |
| 139. 天神山城跡附天瀬武家屋敷跡 | 153. 鹿埴前丸山城跡 | 162. 三石城跡 | 171. 富田松山城跡 |
| 140. 天神山城跡附岡本屋敷跡 | 154. 宮山城跡 | 163. 関川城跡 | |
| 141. 天神山城跡附木戸跡 | | | |
| 142. 名称未定 | | | |
| 143. 大坊山城跡 | | | |
| 144. 北浦山城跡 | | | |
| 145. 青山城跡 | | | |

第97図 和氣郡城館位置図

立地 八塔寺山から約800m南東方向に位置する山頂部に立地する。

概要 主郭は露岩のため平坦面の範囲は少ないが、その下方周囲には小曲輪や加工段が認められる。ただし、明確な防御施設は認められず、臨時の砦のような役割を担っていたと想定される。

文献・伝承 播備国境に位置する和気郡八塔寺村の城館として、『備前記』は「飯森山」、『撮要録』は「飯盛山城」、和気郡瀧谷村の城館として、『備陽国誌』・『吉備温故秘録』は「飯森山城」、『東備郡村誌』は名称未定の城跡の記載がある。また、『備前記』は毛利氏が居城、『備陽国誌』は城主不詳と記し、他の近世地誌類は在城者の記載はない。『岡山県通史上編』には、和気郡三国村の「飯盛山城」に宍粟作十郎則高が居城とある。『美作国の山城』は、同城を飯盛山城と比定している。
(澤山)



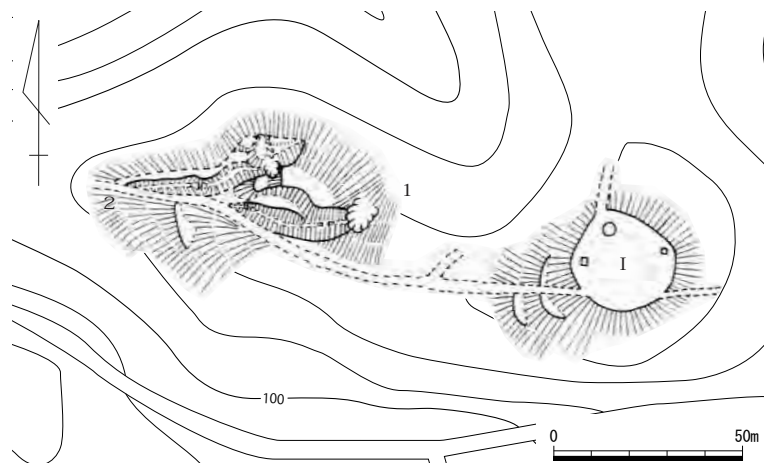
第98図 飯盛山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、吉井川に東から注ぎ込む小河川が形成した谷底平野の東端に位置する。

概要 南北に2か所の頂部をもつ逆「L」字を呈した小丘陵の南側頂部、及びそこから西へ派生する尾根上に曲輪を構えた城である。忠魂碑等によって大規模に改変されている標高約140mの頂部には、径約25mの曲輪Iを配し、そこから西側の尾根斜面部に小曲輪を2面築いている。この尾根筋は、約10m下ると幅広い尾根上平坦地となり、その平坦地西端を画するように堀切1・2を開削している。

両堀切とも、後世の通路によって南西端部が削平されている。堀切1は北側にテラス面、底面に高さ約50cmの土手を2か所設け、堀切2は前面に土塁、堀切内に高さ約50cmの土橋が築かれている。

文献・伝承 赤松氏が備前守護の時に、橋本与三兵衛が城主であったと伝える。
(小嶋)



第99図 奥塩田茶臼山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、吉井川東岸に所在する山塊から西に延びる標高 390 m の尾根頂部に立地している。

概要 頂部に配した曲輪 I は、西半が素戔鳴神社による改変が著しく、さらに東半も削平を受けている。曲輪 I の西側には、曲輪 I との比高約 2 m の曲輪 II と、この曲輪先端部を取り巻く曲輪 III を備える。

この曲輪 III から約 8 m 下がった尾根鞍部には、前面に高さ約 1.5 m の土塁を設けた堀切や曲輪 IV を築く。曲輪 IV 以西には、小曲輪や平坦面が所在する。石段の参道が作られた北東尾根続きには、東辺に土塁状の高まりが認められるものもある曲輪を 4 面造成する。曲輪 II から北西及び南西に延びる尾根筋には、土塁状の高まりを前面に築いた細長い曲輪や小曲輪を築く。

文献・伝承 城主や築城時期などの伝承はない。
(小嶋)

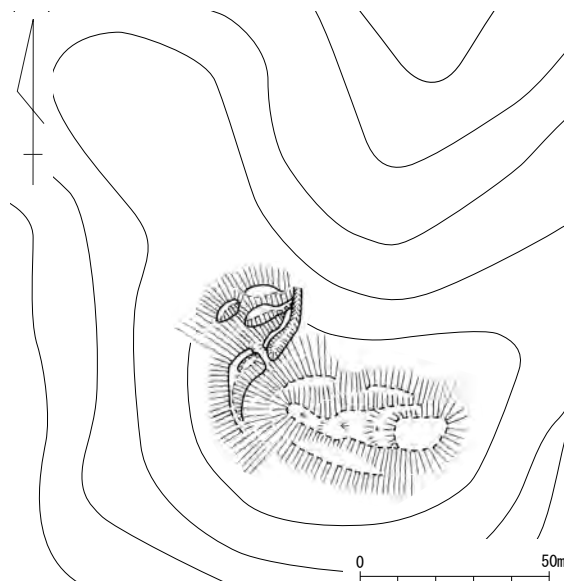


第 100 図 北山方城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、吉井川に向かって東から張り出す尾根の先端頂部に立地している。約 2 km 南東に天神山城跡が所在する。

概要 頂部及び北東側尾根続きには明瞭な加工痕跡はないものの、頂部から北西に下る尾根筋に堀切や曲輪を配している城である。中央部を約 1 m の幅で土橋状に掘り残している堀切には、北辺肩部に土塁状の高まりが認められる。この堀切から下方の北西斜面には小曲輪が 3 面配され、さらにその下にも幾面かの平坦面が認められる。この斜面を下ると、北西に延びる広い平坦地が存在する。加工痕跡は認められないものの、駐屯地などの利用を想起させる。

文献・伝承 『備陽記』で村長の「観音古城山」と記載された城に比定される。『吉備温故秘録』では、浦上宗景の家臣糠田与次右衛門の居城と記す。
(小嶋)



第 101 図 観音山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 岡山県三大河川の1つの吉井川中流域左岸、標高約340mの尾根上に所在する。吉井川が流路を一旦大きく西から東へ迂回して、再び南流する部分を見下ろす位置にあたり、吉井川方面の西から南にかけてと尾根を挟んで反対側に位置する北東の田土方面への眺望に優れた交通の要衝にあたる。

概要 周囲を断崖絶壁に囲まれた長さ450m、幅10～20mの狭い尾根上に、長さ55mの長大な主郭（曲輪Ⅰ）を中心として主な施設が構成されている。畑和良の踏査により、主郭の北下に延びる尾根上にも階段状に大がかりな曲輪を造成していることが注意・図化され、今回の調査では南斜面にも曲輪の存在が明らかとなり、これまで知られていた以上に堅固な造りであることが判明している。

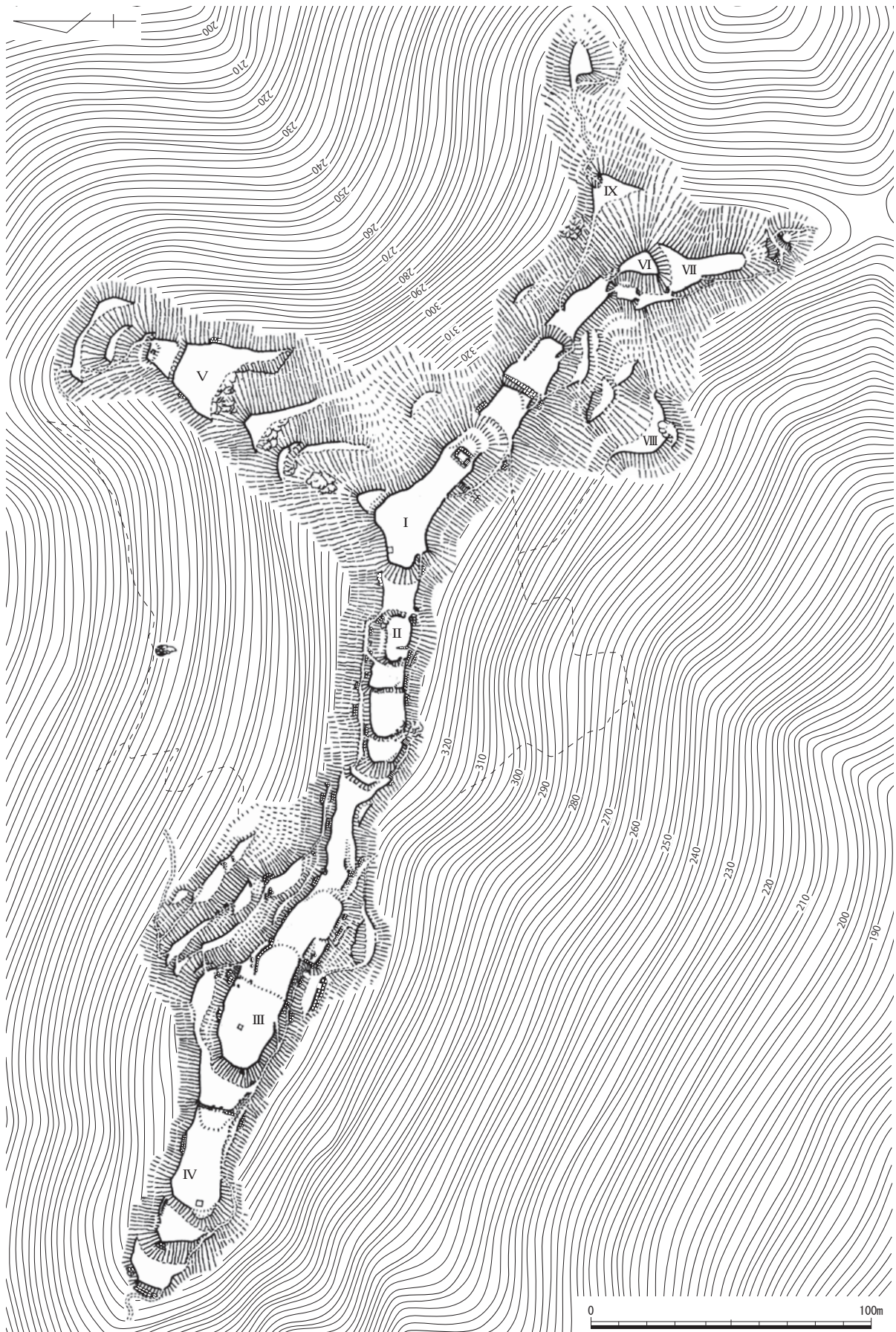
主郭を標高約340mの頂上に構え、切岸で西と南東の段差を際立たせる。特に西側は曲輪Ⅱ（「二の丸」と呼称）との間を幅約10m、深さ3m以上にわたって大規模に尾根を切断し、主郭の威容を高めている。曲輪Ⅱから長さ約120mの長大な曲輪Ⅲ（「桜馬場」と呼称）までは階段状に曲輪を造成する（「長屋の段」と呼称）がその南側に点々と野面積みの石垣が認められる。その北側は帯曲輪状に幅広となる通路があり、その両側にも石垣が認められる。また、部分的に虎口状に石垣を積んだ場所もある。

曲輪Ⅲ周辺は、この尾根の中では幅約20mと比較的広くなる地点であり、また、確認された遺物の多さもあって居館などの施設があった可能性が考えられる。この曲輪の南北にも石垣が認められ、南のものは高さ約1mを測る。この南北には斜面を利用した小規模な曲輪が形成されており、下からの登城口も取り付くことから、北側を大手口と考える意見もある。注目されるのは、今回の調査で南側の狭小な曲輪から表採された瀬戸焼の水注（写真90）である。上半部が残存し、径5.3cmを測る小品である。茶褐色を呈するが、表面には二次的な被熱が認められる。水注は文房具であり、その所持は所有者の身分の高さを示すものであるが、類例が岡山城二の丸跡でみつかり注目される。さらに、製作年代が後述する天神山城落城頃に近いものと考えられ、全面に被熱を受けていることから、落城に関係した遺物である可能性が考えられる。曲輪Ⅲから西は曲輪Ⅳ（「三の丸」と呼称）を含めて階段状に3段の曲輪を設け、その先端に石垣を積み、西限としている。

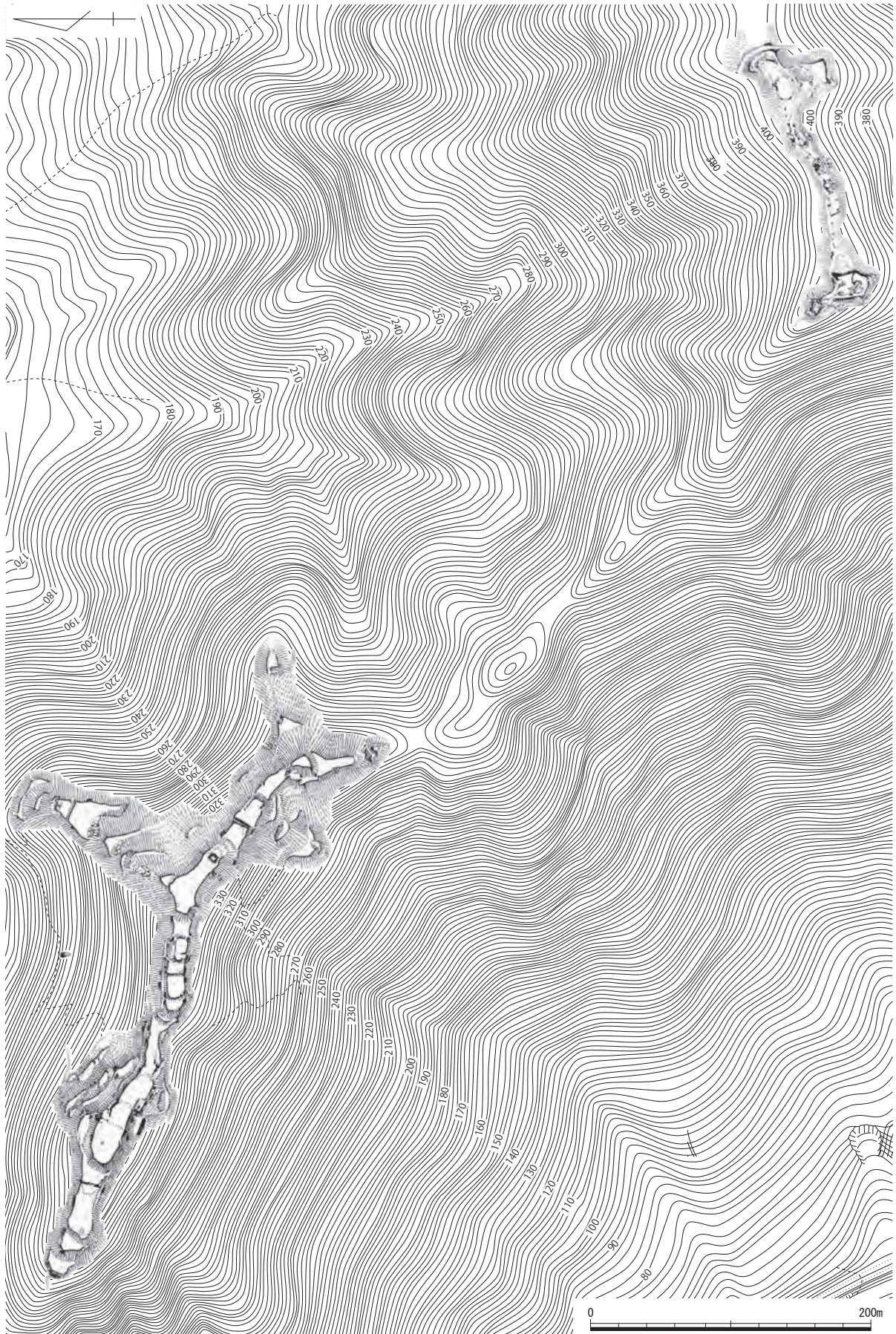
一方、主郭から南東部は階段状に3面の平坦面を造成し、1面目と2面目の間には石垣を積んでいる。3面目は「馬屋の段」とも呼ばれる約20m×10mの狭小な曲輪であるが、ここでは城内で唯一瓦が表採されており、注目を集めている。瓦は軒丸と軒平があり、このうち後者は姫路城などでみつかっているものと同範とみられており、天正8（1580）年前後の製作年があてられている。その年代は、天神山城落城以降であり、宇喜多氏が落城後も支城として利用していたことが想定されている。また、この曲輪の北東斜面には、高級品である青花皿（写真91）が表採され、注目される。

この「馬屋の段」の先に「南櫓台」と呼ばれる切り立った前面幅約10mの曲輪Ⅵを設け、支城とみられる天神山城太鼓丸跡方面から攻め寄せた敵が東南端の曲輪Ⅶに入る際の火点として機能している。この曲輪Ⅵを迂回するように、狭小な虎口としての役割を有する通路を廻し、曲輪Ⅶに接続している。その先に尾根を断ち切る堀切を設けて、城境としている。その先は大きな谷を挟んで直線距離で約430m先に位置する天神山城太鼓丸跡西端に接続する。

さらに、主郭から北東下の尾根上にも階段状に「飛驒丸」と呼ばれる曲輪が造成されており、中心



第 102 図 天神山城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良に加筆



第 103 図 天神山城跡・天神山城太鼓丸跡縄張り図 (1/4,000) 作図：畑和良に加筆

的な曲輪Vは約 25 m× 15 mの広さがある。最下端の曲輪と主郭との比高差は約 70 mある。この最下端の曲輪からは通路が西に続き、約 100 m先に「百貫井戸」と呼ばれる岩盤を直径約 2 mの幅でくり抜いた井戸がうがたれている場所が存在する。そこから南東約 70 mの距離に曲輪Ⅲ北の小曲輪群が存在する。主郭南東の曲輪Ⅵ・Ⅶ周辺にも急傾斜の斜面地に小規模な曲輪Ⅷ・Ⅸなどが造成されており、側面からの攻撃や敵の移動に対応したものと考えられる。

文献・伝承 かつては『備前軍記』・『天神山記』などの江戸時代中期の地誌などから、城主は浦上宗景とし、築城を天文元（1532）年、落城を天正 5（1577）年とする説が主流であったが、同時代もしくは江戸時代前期の古文書の発見・解読から、築城を天文 23（1554）年、落城を天正 3（1575）年とする説が有力となりつつある（文献 32・116 など^註）。各曲輪の名称については、『天神山記』及び岡山大学池田家文庫蔵の絵図に記載がみられる。なお、上述したが天正 8（1580）年前後の製作年が当てられている軒平瓦が表採されており、宇喜多氏が落城後も支城として利用していたことが想定されている（文献 157）。また、城内の各所に配されている石垣については浦上期とみる説と宇喜多期の改修とみる説がある。（河合）

註

- ・寺尾克成「浦上宗景考—宇喜多氏研究の前提—」『國學院雜誌』92-3 国学院大学総合企画部広報課 1991
- ・岸田裕之「小瀬木 平松家のこと 付、「新出沼元家文書」の紹介と中世河川水運の視座」『熊山町史調査報告』4 熊山町史編纂委員会 1992
- ・しらが康義「天神山落城についての一史料」『岡山藩研究』23 岡山藩研究会 1997
- ・森俊弘「備前浦上氏関連説話の研究—説話に見る浦上氏の盛衰—」『東備』9 東備歴史研究協議会 2002
- ・畑和良「浦上宗景権力の形成過程」『岡山地方史研究』100 岡山地方史研究会 2003



写真 90 瀬戸焼水注



写真 92 遠景（西から）



写真 93 曲輪Ⅶ南側堀切
（南東から）



写真 91 青花皿



写真 94 桜の馬場高石垣
（南から）

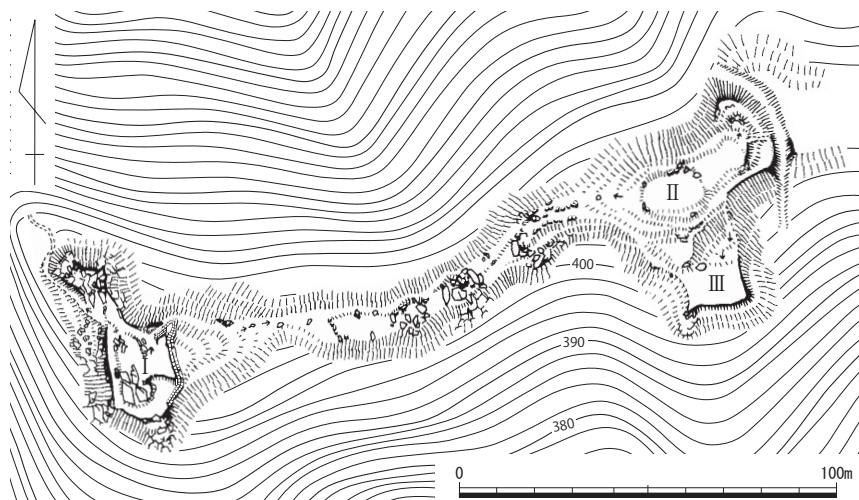


写真 95 長屋の下段と腰曲輪
間の石垣（北西から）

立地 天神山城跡（本城）から南東に約 500 m 離れた天神山主峰尾根上一帯に所在。本城との間に谷を挟み、標高は約 80 m 太鼓丸跡の方が高いため、本城全体を見通せる位置となる。

概要 城は東西に延びる山頂部を利用して築かれている。さらに尾根が延びる東側を堀切によって区切り、その西側一帯を城域とする。城に関係した人工的な構造物は尾根の東西にのみ認められ、その間は基本的に自然地形を残す。このうち、西側の曲輪Ⅰは東辺に嚴重な造りの石垣とそれに接続した虎口が認められる。本城につながる北西部は露岩が認められ、その脇を虎口とする。一方、東側の曲輪Ⅱは自然地形を多く残すが、南側に土砂を押し出し、曲輪Ⅲを形成している。

文献・伝承 天神山城の出城とする説が有力だが、自然地形を残して簡素な造りであるのは、南北朝時代の特徴とも考えられ、曲輪Ⅰの石垣などから戦国時代に改修して利用した可能性を考えておきたい。（河合）



第 104 図 天神山城太鼓丸跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良に加筆



写真 96 曲輪Ⅰ 虎口石垣 (東から)



写真 97 曲輪Ⅰ (北西から)



写真 98 曲輪Ⅱ 東堀切 (南から)



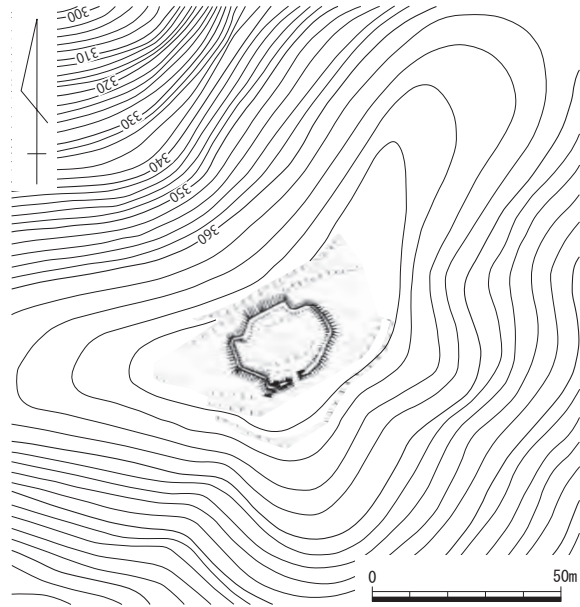
写真 99 曲輪Ⅲ (北から)

立地 木倉昼谷集落の北側で天神山城から東側に延びる尾根部に築かれている。

概要 平面形が長方形を呈する陣城跡である。曲輪の縁辺には外高 80cm、上端幅 70cm程度の小規模な土塁が巡り、南西側を中心に石を配置した部分的な補強が認められる。曲輪の外周には切岸が伴うが、斜面地形となっている北側は急峻である。また、虎口は南側に開口している。塁線は北東・北西・南西隅で直角またはそれに近い折れによって、入角となっている。

城内は土塁築造時の掻き上げの結果、曲輪面は塁線に沿って凹地状となっている。城外は自然地形の状態を残している。

文献・伝承 近世地誌類には記載が確認できない。なお、同城については「木倉田土境の遺構」として畑和良の報告がある（文献 179）。（澤山）



第 105 図 名称未定縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

143 だいぼうやま 大坊山城跡 和気郡和気町木倉

立地 天神山城跡が位置する山塊から南東方向に延びる山頂部に位置する。

概要 平面形が三角形を呈する陣城跡である。曲輪の縁辺には、外高約 1 m、内高約 50cmの土塁が巡り、部分的に石を配置して法面を補強したと思われる約 2 mの切岸が伴う。また、土塁に沿った横堀や東・西・南隅に築かれた 3か所の横矢掛けなどの防御施設を有し、南側の横矢掛け付近には虎口を設けている。同城から約 2 km北西に位置する天神山城跡との関係を検討する必要がある。

文献・伝承 和気郡木倉村の城館として『備陽記』は大坊古城山跡、『吉備温故秘録』は「大坊山城」、『撮要録』は「大坊城」の記載があり、本城跡はこれらに比定される。『岡山県通史上編』にも和気郡日笠村日笠下の「大坊山城」と記されており、日笠太郎左衛門、日笠右京允が居城とある。（澤山）



第 106 図 大坊山城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 100 東側横矢掛け・土塁・東側横堀（北から）



写真 101 西側横矢掛け・土塁（北から）



写真 102 西側横矢掛け・土塁（西から）



写真 103 南側横矢掛け付近虎口（東から）

144 きたうらやま 北浦山城跡

和気郡和気町日笠上

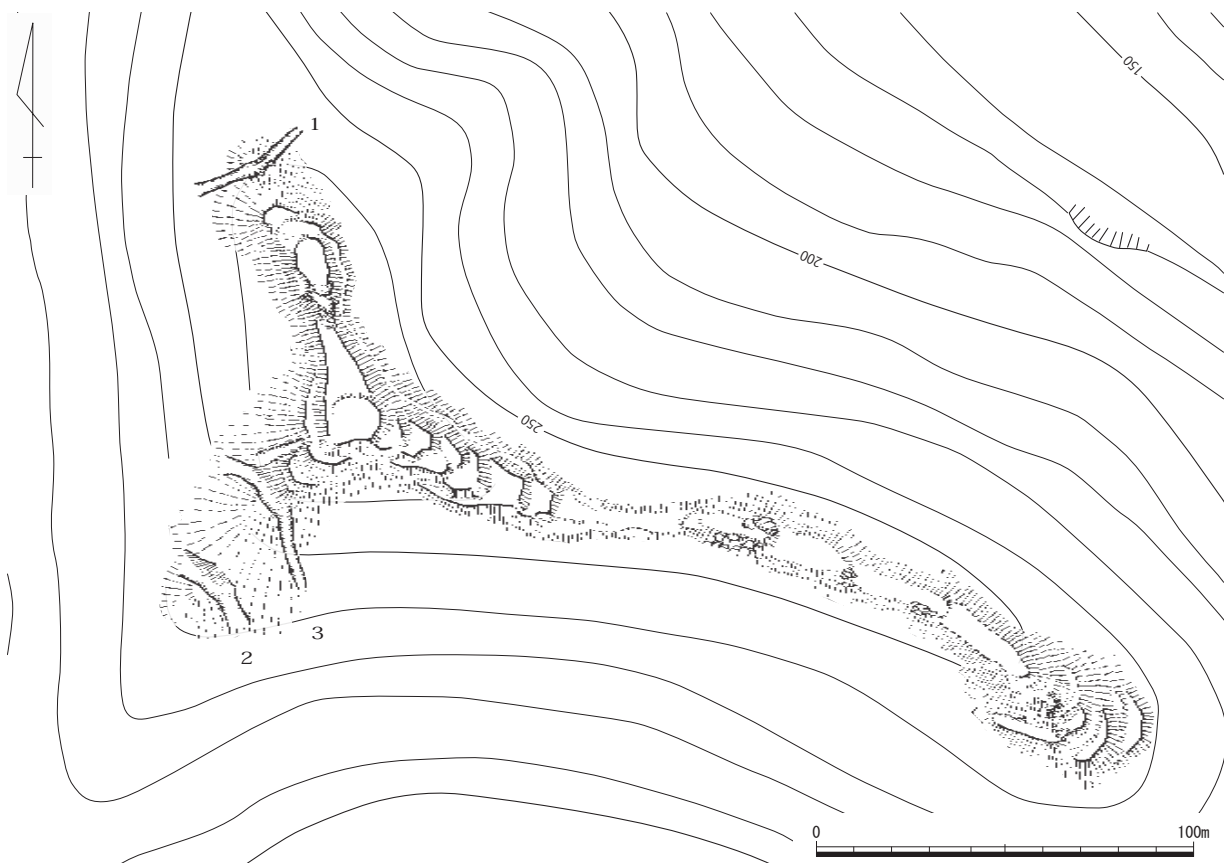
地図 8 左

立地 日笠川の右岸に位置する山塊から南東方向に延びる尾根頂部に位置する。ここから東側約 900 m 南方には、浦上宗景の家臣である日笠頼房が居城した青山城跡が存在する。両城ともに天神山城跡の東方にあたる。

概要 細長く北側に延びた方形を呈する主郭が位置する山頂部を中心に、北・南西・南東側の 3 方向に延びる尾根部にそれぞれ腰曲輪を築いた、比較的規模の大きな連郭式山城である。北側尾根部では主郭から小規模な腰曲輪が 4 面築かれ、端部に堀切 1 が掘削されている。また、南西側尾根部でも同様に腰曲輪 2 面が造られ、端部で深い堀切 2・3 を設けている。一方、細長く延びる南東側尾根部も同じく腰曲輪 7 面を段状に配置されており、さらに約 100 m 続く平坦な自然地形の先端には曲輪と加工段で構成される出丸の造作が認められた。

文献・伝承 和気郡日笠上村に所在する城館として、『備前記』は日笠甚右衛門居城の「古城山」、『備陽記』は日笠甚右エ門居城の「帰当田古城山跡」、『備陽国誌』は日笠甚左衛門居城の「帰当羅山城」、『吉備温故秘録』は日笠甚右（左）衛門居城の「帰当田城」、『撮要録』は日笠甚右エ門居城の「帰当田山城」、『東備郡村誌』は日笠甚右衛門居城の「帰当羅山壘址」などと記されている。一方、『岡山県通史上編』には和気郡日笠村日笠上に所在する日笠甚左衛門居城の「北浦山城」・「帰当羅山城」の記載がみられる。近世地誌類に記載された城名はそれぞれ「北浦」から転じたと思われる、本城跡はこれらに比定される。

（澤山）



第 107 図 北浦山城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良に加筆



写真 104 堀切 1 (西から)



写真 105 堀切 2 (西から)



写真 106 堀切 3 (北西から)

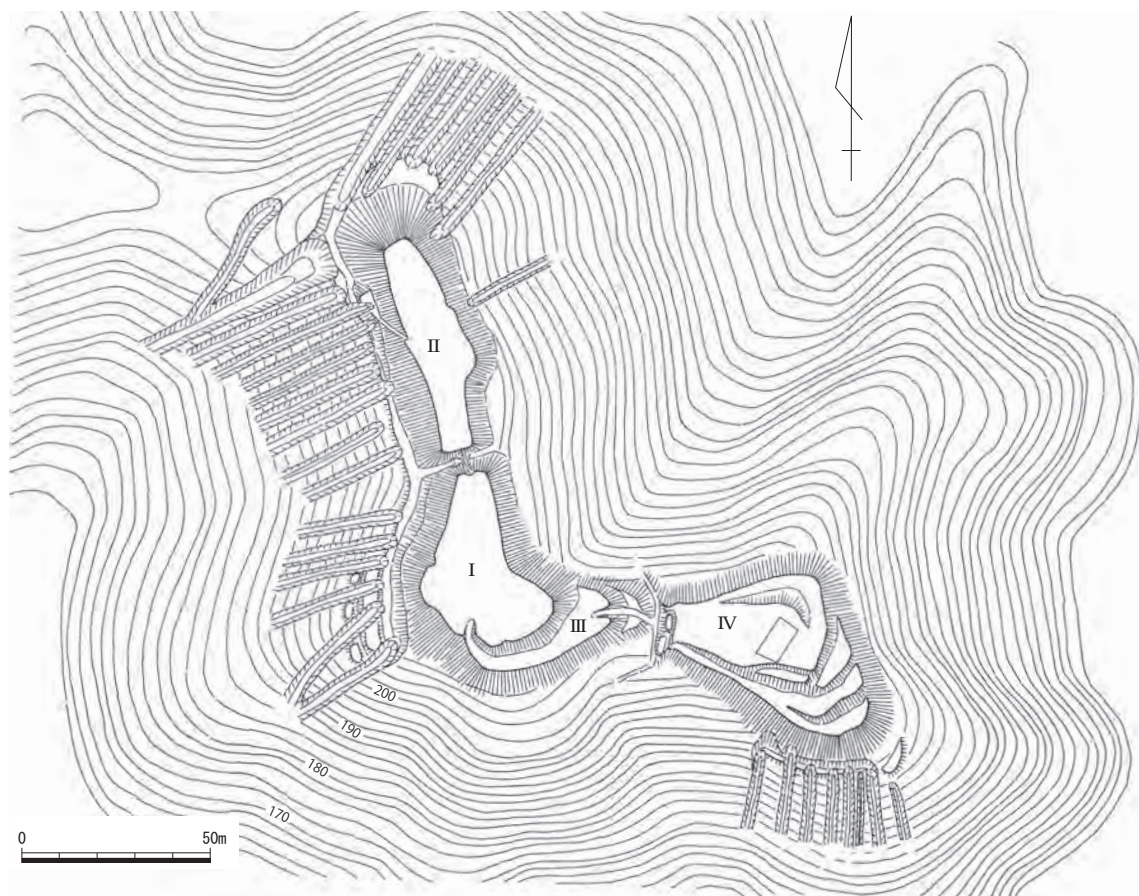


写真 107 南東尾根腰曲輪 (南東から)

立地 青山城跡は天神山山塊から東側に派生する丘陵上に位置する。吉井川の支流金剛川に注ぐ日笠川が形成した狭小な日笠盆地のほぼ中央に位置し、盆地一帯を見渡すことができる環境に所在する。

概要 城は「L」字に折れる丘陵尾根を利用して形成する。頂部に主郭（曲輪Ⅰ）を設け、堀切を挟んで北に細長い曲輪Ⅱを設ける。主郭の東南に腰曲輪（曲輪Ⅲ）が置かれ、主郭に南から入る通路の役割を兼ねている。その東は虎口・堀切と続き、その先に曲輪Ⅳが配されている。曲輪Ⅳと東側の堀切との間には土塁を設け、南東斜面に小規模な曲輪群を設けている。これらの曲輪Ⅰ～Ⅳの周囲には、切岸によって大規模に地形を切り崩している。曲輪Ⅰ・Ⅱの北から西にかけての裾は犬走り状に加工し、その周囲に23本の畝状縦堀群を配し、嚴重に防備を固める。なお、曲輪Ⅳの南斜面にも8本の畝状縦堀群を配置する。曲輪Ⅳは発掘調査の結果、安土桃山時代の掘立柱建物3棟などが確認されている。大量の炭化種子の出土は、穀倉と考えられる建物の焼失を伝えるものであり、青山城が激戦の末、焼き払われて落城したという伝承を考古学的に裏付けるものとして注目される。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』などの近世地誌類では、城主を浦上宗景の家臣日笠次郎兵衛頼房とする。畑和良によれば、このことは、浦上宗景書状（一次史料145～147）や日笠頼房書状（一次史料148）などの同時代資料からも裏付けられるとする。2010年、当教育委員会により発掘調査実施（文献200）。（河合）



第108図 青山城跡縄張り図（1/2,000）作図：島崎東



写真 108 曲輪Ⅳ南豎堀群東から4・5番目
(北東から)



写真 109 曲輪Ⅰ・虎口(南から)



写真 110 曲輪Ⅰ・Ⅱ間堀切東半(西から)



写真 111 曲輪Ⅳ発掘調査区(北から)

147 いおうやま 医王山城跡 備前市吉永町神根本

地図8右

立地 八塔寺川左岸に位置する山塊から北西方向に延びる尾根端部に立地する。

概要 正方形を呈する主郭の北東隅には低い楕円形の土壇が築かれ、西辺を除き高さ約50cm～1mの土塁が巡り、南辺には土塁を伴う喰い違い状の虎口を設けている。また、比高差約4mを測る急峻な切岸をもつ主郭下方の南東・北東側には、豎堀が伴う腰曲輪がみられる。なお、北西に延びる尾根先端部は八塔寺川流域を見渡す場所に最適である。

文献・伝承 和気郡神根本村では、『備陽記』は「イヲウ山古城跡」、『備陽国誌』は「いわふ山城」、『吉備温故秘録』・『撮要録』は「いをう山城」が所在とされ、本城跡に比定される。また、これらの文献と『東備郡村史』には高取備前(守)が、加えて、『備陽国誌』はいわふ次郎忠度が居城とある。(澤山)



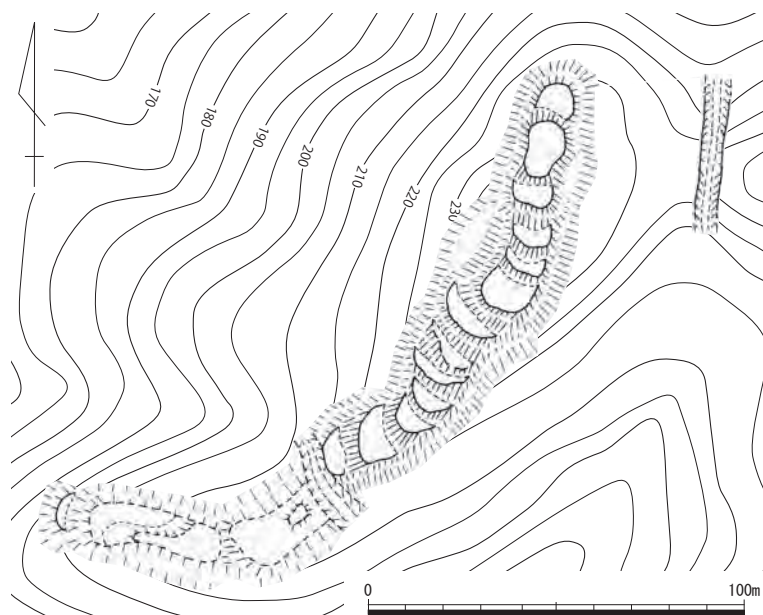
第109図 医王山城跡縄張り図(1/2,000)

立地 八塔寺川左岸の山塊から南西に延びる尾根頂部に位置する。

概要 山頂部の主郭から南西側に段状の腰曲輪が築かれ、端部には浅い堀切が見られる。ここから西側は高さ約2mの高まりと自然地形を残す平坦面が続く。一方、主郭東方の谷部には深い堀切がみられる。

文献・伝承 『備前記』・『和気絹』・『備陽記』・『吉備前秘録』・『吉備前鑑』・『吉備温故秘録』には、和気郡大股村の明石大和守の城館として「大股(俣)城」、「大股(俣)古城山」があり、これらは本城跡に比定される。

(澤山)



第110図 大股古城跡縄張り図(1/2,000)

立地 惣谷山城跡は兵庫県と岡山県を限る尾根筋(オケ峠付近)から東側へ派生した丘陵尾根上に所在する。この丘陵は西側眼下一帯を流れる八塔寺川に向かって突き出しているため、当城からその流域の広い範囲を見通すことができる。

概要 東西に延びる細い尾根の東(搦手側)を幅約5mの堀切で遮断する。また、北西に緩やかに下っていく続く尾根(大手側)についても幅約4mの堀切で遮断し、さらにその前面に掘り切った土を盛って土塁(前面との比高差約1m)を築き、嚴重に防御している。その間の尾根頂部は約110mあまりと、決して広くはないが、後述するように尾根を大幅に切り崩して巧妙に加工を加え、複数の曲輪を設けている。いわゆる連郭式の山城である。

城の構造を詳細にみていくと、東西約40m、幅約10mと広い平坦面をもつ曲輪Ⅰを中心として、平野部側の眺望のきく位置に曲輪Ⅱ(斜面部との境に石積みが見られる)を配し、これらの北側に細長い帯曲輪を設けている。大手側の虎口はこちらに接続している。曲輪Ⅰの東側は幅約10.5m、深さ約3.5mの規模で尾根を大きく切り崩している。空堀または曲輪と考えられるが、北側斜面部との境に小規模であるが土塁を設けていることから後者の機能をもった施設と考えておきたい。その東側に長さ約7m、幅約5mの小規模な曲輪Ⅲに配し、さらにその背後を幅約9m、深さ4mにわたって切り崩している。これも土塁状の施設が附属することから、曲輪と判断したい。このように、曲輪Ⅲの両側を大きく切り崩して起伏を付けることで防御性を高める工夫がなされている。そして、その

東側に直径約 10 m のほぼ正方形を呈する曲輪Ⅳが配されている。曲輪Ⅰから曲輪Ⅳの間は、先述したとおり起伏が大きいが、南側にスロープ状もしくは土橋状に通路を確保することで、平常時の移動を容易にしている。曲輪Ⅳの東には堀切を 2 条設けて防御性を高めているが、曲輪Ⅳに近接する堀切にはしっかりとした土橋を設け、搦手側の虎口として利用している。さらに、その前面（もう一方の堀切との間）には広場を確保している。

東西に細長い尾根を利用して築かれていることを考慮すれば、築城が南北朝時代に遡る可能性もあるが、少なくとも戦国時代に大幅に再利用もしくは改築された可能性が高い。

文献・伝承 城主については、『備陽国誌』などは伊勢新九郎(北条早雲)とするものもあるが、『備前記』・『東作誌』などのように、明石宗運にあてるものが多い。また、『東備郡村誌』のように、高取備前とするものもある。(河合)



第 111 図 惣谷山城跡縄張り図 (1/2,000)
作図：畑和良に加筆



写真 112 曲輪Ⅰ東側の切岸(南から)



写真 113 曲輪Ⅰ東土塁(西から)



写真 114 曲輪Ⅱ石積み(北から)



写真 115 曲輪Ⅳ堀切(南東から)

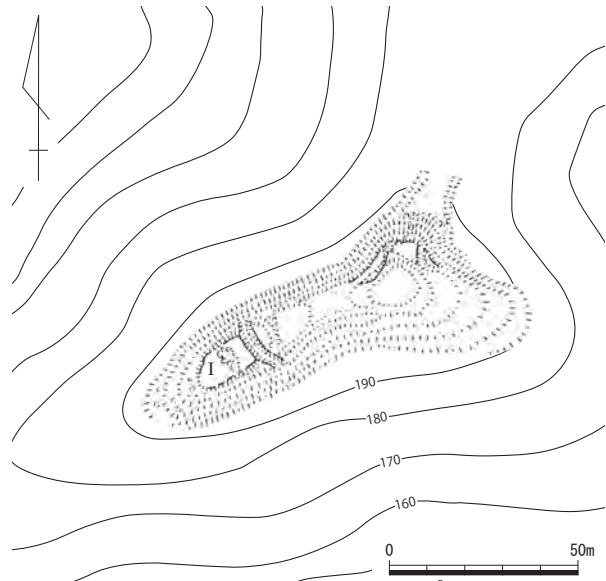


写真 116 北西側堀切・土塁(南西から)

立地 吉井川左岸に連なる南北斜面が急峻な山塊から西にせり出した標高約 190 m の尾根先端部に所在する。頂部からは吉井川下流域の眺望が可能で、上流約 2 km には天神山城跡が位置する。

概要 城の所在する尾根は、南北両斜面が急峻で、比較的緩やかな尾根筋も露岩が切り立ち登坂を困難にする。頂部には先端から約 18 m の地点に幅約 3 m、深さ 70 cm 程度の小規模な堀切が掘られ、その内側に全長 18 m、幅 10 m の曲輪 I が位置する。しかし、その造成は十分とはいえず中央には露岩が存在し、曲輪を分断する。また、曲輪 I から北東 40 m 地点には自然の高まりが存在し、その北西側には部分的に曲輪造成面が存在するが、この間に存在する全長約 30 m の鞍部には平坦面は存在するものいずれも自然地形である。

文献・伝承 『備陽記』には「龍徳古城」の存在が記されるが、詳細は不明である。（島崎）

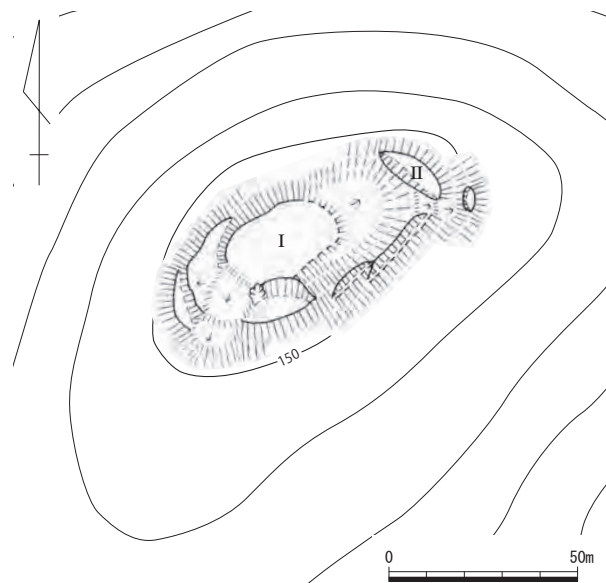


第 112 図 龍徳山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、和気町益原からオノ峠を抜け日笠集落に至る往還の、オノ峠東側出口を眼下に一望する尾根の先端頂部に立地する。大坊山城跡とは谷を挟んで対面し、さらに北方に青山城跡や日笠集落を視認する。

概要 平野部との比高約 60 m の頂部に、北辺以外は人為的加工痕跡に乏しい約 30 m × 15 m の曲輪 I を配する。曲輪 I から北東側には、自然地形の平坦面を挟んで曲輪 II を設け、その曲輪の南東端に接続するような犬走り状の狭い平坦面を城域南東側に巡らす。曲輪 I から南西側には、中央部に自然地形を残す曲輪を 2 面配している。それ以西の尾根続きは、緩やかな傾斜で尾根鞍部に向かって下がるが、堀切などの防御施設は認められない。

文献・伝承 『備陽記』で「日笠下村末方に上見山古城跡あり」と記述された城に比定されるが、城主名等は伝わっていない。（小嶋）



第 113 図 上見山城跡縄張り図 (1/2,000)

153 しりがいまえまるやま 鹿帰前丸山城跡

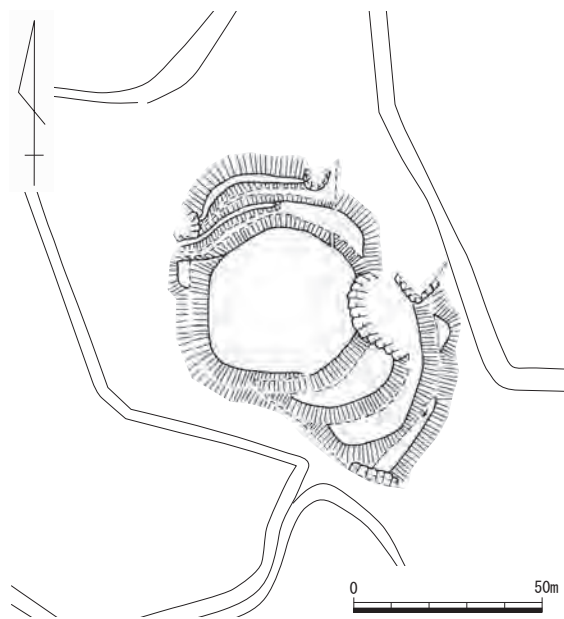
和気郡和気町日笠下

地図 13 左

立地 日笠川右岸に広がる平野部に位置する標高 84 m の独立した丘陵頂部に立地する。

概要 円形に近い主郭の北側には 1 面、南側には 3 面の腰曲輪が高く急峻な切岸を伴って築かれている。さらに北側の腰曲輪の前面には深さ約 2 m の堀切 2 条がやや円弧を描くように並行に配置されている。

文献・伝承 和気郡日笠下村の城館として、『備陽記』では「円山古城山跡」、『備陽国誌』は「鹿帰前丸山城」、『東備郡村誌』は「鹿備前丸山壘址」、『撮要録』は「鹿帰前円山城」の記載がみられ、本城跡はこれらに比定される。なお、これらの近世地誌類では在城者は不明である。ただし、『和気郡史資料編下巻』には日笠太郎左エ門が居城したとされる。(澤山)



第 114 図 鹿帰前丸山城跡縄張り図 (1/2,000)

154 みややま 宮山城跡

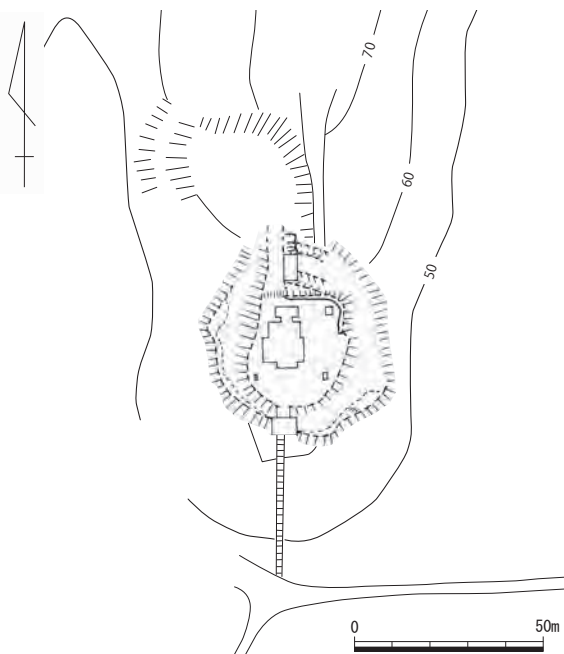
和気郡和気町吉田

地図 13 右

立地 山塊から南側に延びる山端部に位置し、約 1 km 南東方向には八塔寺川・和意谷川と金剛川が合流している。

概要 主郭は山頂部に築かれたと思われるが、吉田八幡宮の造営により地形改変が著しい。主郭の北側に堀切の可能性のある凹みが、わずかに認められる。

文献・伝承 和気郡吉田村に所在する城館として、『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『撮要録』・『東備郡村誌』には明石飛驒守が居城した「宮山城」または「宮山古城跡」の記載があり、本城跡はこれらに比定される。また、『改修赤磐郡誌』には「働城」として紹介している。(澤山)

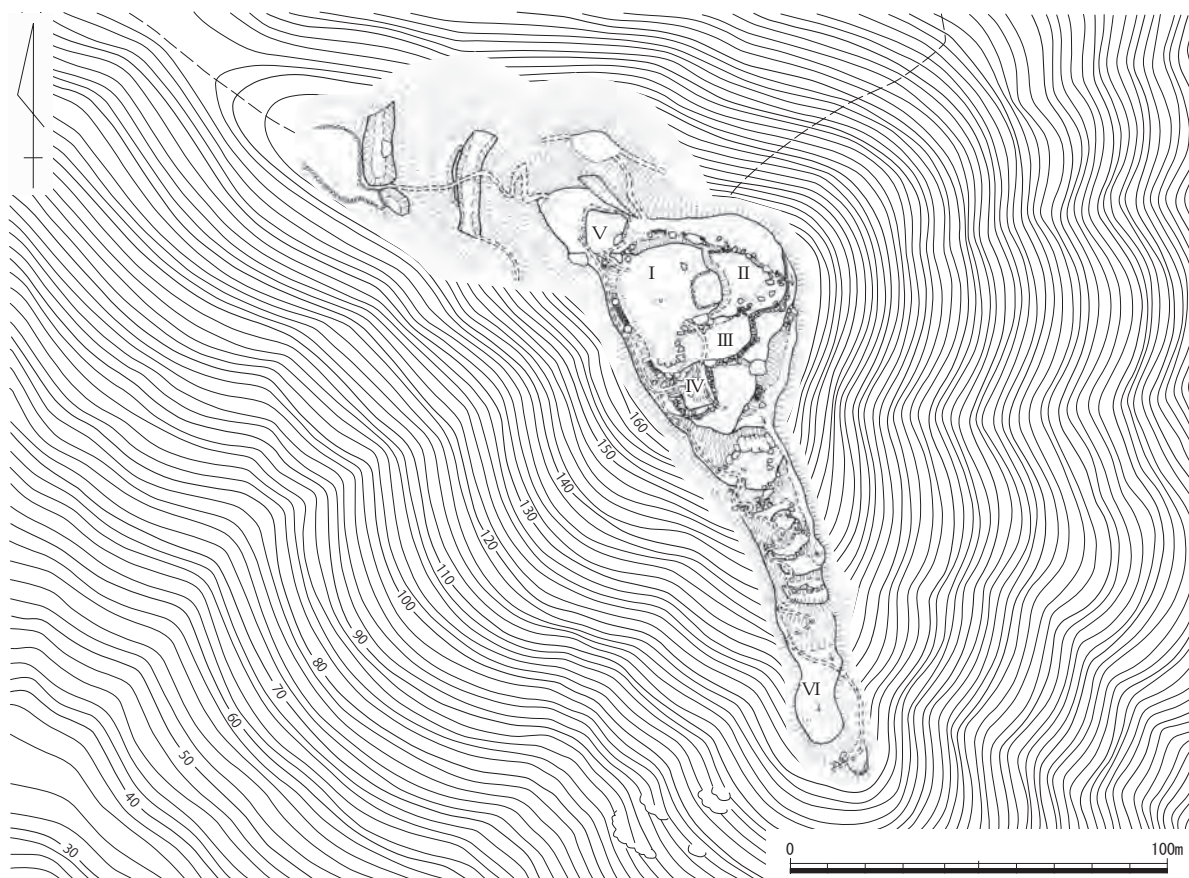


第 115 図 宮山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 南流する吉井川が西に屈曲する地点の東岸の山頂一帯に築かれている。眼下の平野部一帯を広く見渡すことができ、吉井川を約6km北流した地点に位置する天神山城跡を望むこともできる。

概要 最頂部に岩の多い地山を巧みに削り出して、岩肌をそのまま城壁に利用した主郭（曲輪Ⅰ）を造成する。その南西部の1段下がった場所に曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを造成し、これら曲輪Ⅰ～Ⅳを取り囲むように野面積みの石垣を巡らす。こちらが大手側と考えられるが、曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳはそれぞれ横矢掛けとして利用でき、防御性が高い。曲輪Ⅰの北西部にも曲輪Ⅴを削り出しで造成しているが、この曲輪からは遠く天神山城跡を望むことができる。この曲輪Ⅴと曲輪Ⅰの間には巨岩が削り出されており、搦手門として利用された可能性が高い。また、曲輪Ⅰ～Ⅴの周囲には帯曲輪状または犬走状に平坦面が造成される。大手側から南に下る尾根には小規模な曲輪が階段状に造成される。ここでも岩の多い地形を巧みに利用している。尾根南端にはやや広めの曲輪Ⅵを造成する。一方、搦手側から後方へは尾根が北西方面に続くが、2条の堀切で尾根筋を切断する。

文献・伝承 城主については、『吉備温故秘録』に永正年間（1504～1521）には経次（垣次）隼人が居城したとされ、のち天文年間（1532～1555）には明石大和守景行、さらに天正年間（1573～1592）には景行の一族の明石右近宣行が入ったと記される。『吉備前鑑』では宣行の代に山上の城を廃し、麓に館を設けたとする。『備陽記』には朝鮮出兵で右近が亡くなった後、城が破却されたと伝える。名黒山城や北曾根城の別称がある。 （河合）



第 116 図 曾根城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 117 曲輪 I 南西側石垣 (南から)



写真 118 曲輪 I・II (東から)



写真 119 西側 (東) 堀切 (東から)



写真 120 西側 (西) 堀切 (東から)

157 きたやま 北山城跡 和気郡和気町大中山・衣笠

地図 13 左

立地 城は、和気の集落や曾根城跡を北方に一望し、備前市と和気町を結ぶ往還にある傍示ヶ峠の和気町側出口を南方に見下ろす標高約 240 m の城山山頂に立地している。

概要 南西側に小曲輪及び犬走り状の平坦面が認められるが、横「T」字を呈する山頂部だけに曲輪を構えたほぼ単郭の城である。シダ類が繁茂していたため詳細な観察ができなかったが、曲輪内の造成は不十分で、自然地形を残していると推測される。なお、曲輪北辺中央部には、山陽自動車道の法面落石防止ワイヤーのアンカーが設置されており、その際の碎石が周辺に積み上げられている。

文献・伝承 浦上宗景の家臣である中山氏に関する城と伝えられる。『備前記』や『備陽記』では中山善兵衛を、『和気郡史資料編下巻』では中山伊賀守家能、中山善兵衛と記す。(小嶋)

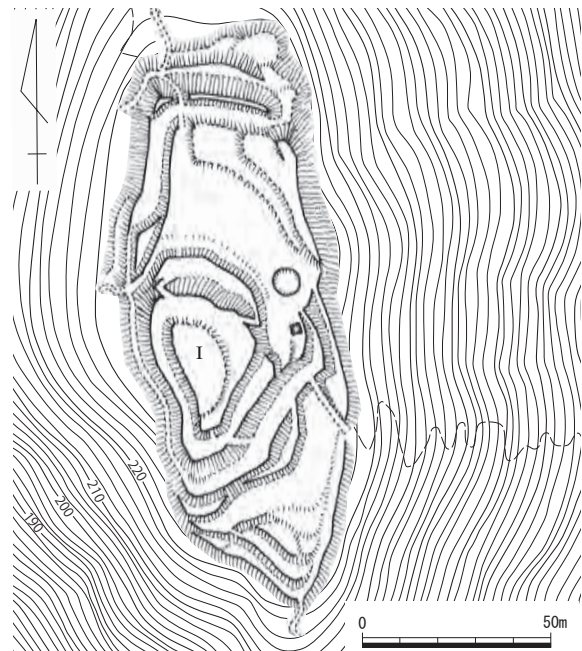


第 117 図 北山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 鬼ヶ城池から北側約 800 m にあたる山塊から南北方向延びる尾根頂部に位置する。

概要 山頂部に築かれた主郭（曲輪 I）には、帯曲輪が 2 重に取り巻いて 3 段構えとなり、2～3 面間の切岸は比高差約 3 m を超える箇所もある。主郭南側には幅広い腰曲輪を配置し、その下方には自然地形の沿う形状を呈する曲輪が数面認められる。主郭北側には曲輪の北縁と東縁の一部には土塁が巡り、その北東隅に虎口を設ける。また、この曲輪の南東側には井戸か溜池と思われる水が溜まった凹地がみられた。

文献・伝承 和気郡伊部村の城館として、『備前記』・『備陽記』では「古城山」、『吉備温故秘録』では「古城」があり、後者は日笠源太、馬場重助が居城とされる。いずれもこの城跡に比定され、宇喜多方が浦上方の守る同城を落した。城史を示す参考史料（43）がある。（澤山）



第 118 図 伊部城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良



写真 121 曲輪 I (北から)



写真 122 虎口 (西から)



写真 123 虎口北側の土塁 (南東から)



写真 124 凹地 (北から)

立地 城は、金剛川と八塔寺川が形成した平野部を東から見下ろす東山山頂に立地する。眼下に旧山陽道とそれと分岐する八塔寺往来を一望し、さらに西方の宮山城跡や曾根城跡まで視認するなど、極めて眺望が良い。

概要 頂部に曲輪Ⅰを造成し、その曲輪から3方向に延びる尾根上に曲輪を配している城である。南西方向に150m以上延びる尾根上には曲輪を幾面も連ね、その北側に曲輪Ⅴから曲輪Ⅶまで続く犬走りが設けられている。曲輪Ⅰの南西辺から曲輪Ⅱにかけて、いくつかの平坦面を持ちながら緩やかな自然地形の傾斜が続くものの、その南東及び北西辺は高い切岸で守りを固める。また、曲輪Ⅱの南西辺は、切岸を備えなくても敵の侵入を十分防ぐことが可能な巨石が露出した急斜地である。犬走りと接する曲輪Ⅲ西辺には、上部が崩落しているものの高さ1m弱で3～4段積みの石積みが存在している。おそらく石垣というよりは、切岸面の保護・補強を意図したものであろう。曲輪Ⅲから南西側は、自然地形の平坦面及び不明瞭な切岸をもつ曲輪を挟んで、南西端部に高さ約50cmで1～2段積みの石列を「コ」字状に配した曲輪Ⅳがある。曲輪Ⅳを取り囲む曲輪Ⅴの南西辺北端には、曲輪Ⅵへと続く通路が接続している。なお曲輪Ⅵ以南の尾根上は、広い平坦面が存在するものの、防御施設が認められない。曲輪Ⅰから龍泉山へと続く東尾根上には、地山中の巨石を取り込みながら切岸を造成している小曲輪や平坦面が存在する。曲輪Ⅶから金毘羅宮に至る北西尾根には、平坦面や堀切状の落ち込みが存在するが、城館関連遺構と断定可能なものはない。

文献・伝承 『備陽国誌』によると、城主は明石三郎左衛門景行で、永禄年間(1558～1570)に城は落城したとされる。明石景行について『吉永町史通史編Ⅱ』は、宇喜多直家が浦上宗景から離反すると兄の明石飛騨守とともに宇喜多氏に味方して、以後宇喜多氏の播磨・美作経略で活躍したが、天正5(1577)年12月、羽柴秀吉が播磨に攻め寄せた際に討死(下村文書)、その後明石掃部の子、明石久兵衛景行が家督を継いで城主となったと記す(文献113)。(小嶋)



第119図 東山城跡縄張り図(1/2,000) 作図：畑和良



写真 125 曲輪Ⅱから見た曲輪Ⅰ（南西から）



写真 126 曲輪ⅤとⅥを結ぶ通路（南西から）



写真 127 曲輪Ⅳ 石列（南西から）



写真 128 曲輪Ⅲ西側の石積み（西から）

162 ^{みつし}三石城跡 備前市三石

<県指定史跡> 地図 14 左

立地 兵庫県境の船坂峠に程近い金剛川右岸の山頂部に立地する。

概要 山頂部の「本丸」と呼ばれる曲輪Ⅰを中心に、南西方向に延びる尾根に沿って1段下った場所に「二の丸」と呼ばれる曲輪Ⅱを構え、さらに1段下がった位置に「三の丸」・「馬場」と呼ばれる曲輪Ⅲ・Ⅳを配置している。一方、曲輪Ⅰから北西方向に下る斜面には数段の帯曲輪を設けて、さらにその下方の鞍部には深い堀切を掘削し、ここから上方に延びる尾根北端の頂部には「鶯丸」と呼ばれる曲輪Ⅵが築かれている。基本的には連郭式山城の縄張りを呈しているといえる。主な施設としては土塁・堀切・畝状縦堀群や「間道」と呼ばれる横堀などがあり、曲輪Ⅰには石積みの土壇、「大手曲輪」と呼ばれる曲輪Ⅴに設けられた虎口や曲輪Ⅲ南側の小曲輪（櫓台）の外周には石垣が伴う。その他、城内に素掘りや石組みの井戸、また、城外南側の斜面地に「千貫井戸」と呼ばれる岩盤をくり抜いた井戸が認められる。

曲輪Ⅰは不整形な楕円形を呈する曲輪である。中央北側には高さ約1～2mを測る南北2面の土壇が築かれており、「L」字状に屈曲する東壁には石積みが組まれている。また、周囲からは瓦片が採取されていることから、この上に瓦葺きの建物が存在していたと推定される。また、曲輪Ⅰの西半側の縁辺には高さ約1mの土塁が巡っている一方で、東半側には土塁が確認できない。これは後世の削平等により消失したのではなく、東半側が急斜面の自然地形のために、当初から築造されなかった可能性も考えられる。

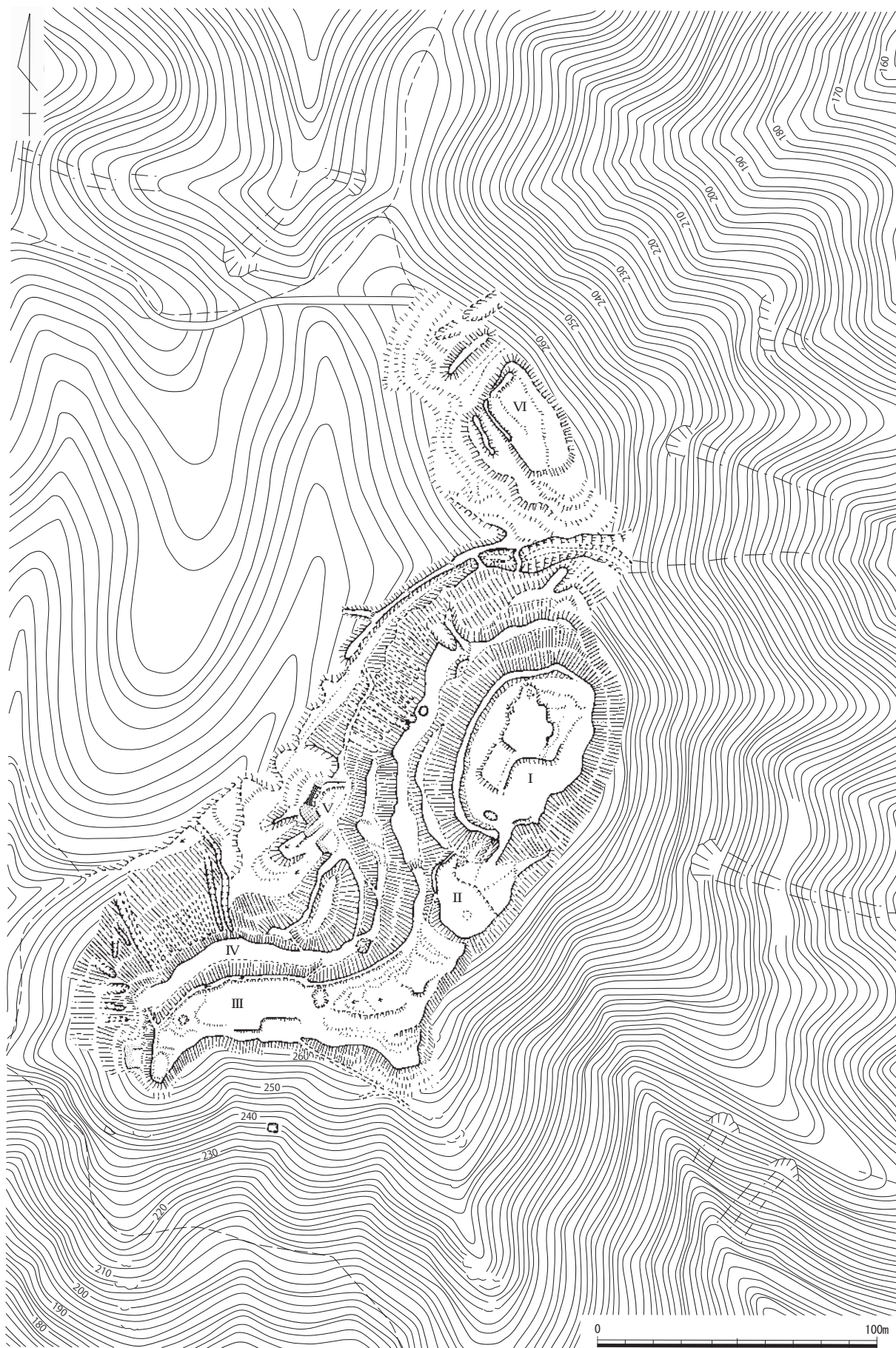
曲輪Ⅱは曲輪Ⅰの南側に取り付く虎口から尾根方向に約5m下がった場所に築かれ、台形状を呈する曲輪である。また、曲輪Ⅰと同様に、西半側の縁辺にのみ緩く横矢が掛かった高さ約1mの土塁が巡っている。この土塁の南端には、曲輪Ⅲにつながる通路が取り付いている。一方、曲輪Ⅱの北西側には、曲輪Ⅰから上段にあたる位置で北東方向に下る斜面に築かれた幅狭の帯曲輪がつながっている。

曲輪Ⅲは曲輪Ⅱから尾根方向に約5m下がった場所に築かれ、緩やかな「S」字状を呈する長曲輪である。ここにも西半側の縁辺にのみ高さ約1mの土塁が巡っているが、上端幅が曲輪Ⅰ・Ⅱよりも幅広であるため、通路の役目も果たしている。曲輪Ⅱの直下から東半にかけては、高さ約1mの方形もしくは台形状を呈する低い土壇が数か所認められ、ここに建物が存在していたと想定される。また、麓から城内に通じる通路を望む南東側に張り出した尾根上には、方形を呈する小曲輪が設けられている。なお、この通路は曲輪Ⅲの西半の南側に築かれた内枳形状を呈する虎口に取り付いている。曲輪Ⅲの西半は緩やかな段を有しながら南側に屈曲しており、大小2か所の水溜め場所が認められる。また、その先端部では、高さ約3mを測る石垣をもつ台形状の櫓台と考えられる小曲輪が設けられている。一方、曲輪Ⅲの北西側には、曲輪Ⅰから中段にあたる位置で北東から北方向に下る斜面に築かれた細長い帯曲輪につながっており、その中央には石組みの井戸1基が認められる。また、これらの帯曲輪の北西斜面には約15本の畝状縦堀群が掘削されているが、縦堀幅は現状で狭く、深さも浅いものが多い。

曲輪Ⅳは曲輪Ⅲの北西側下方に築かれている。その東・西側には曲輪Ⅲの土塁に取り付くように設けられた通路が認められ、さらに、その南端は曲輪Ⅲの先端に築かれた石垣をもつ小曲輪の直下を巡る通路にもつながっている。この帯曲輪の北西斜面には約12本の畝状縦堀群が掘削されており、東側2本と西側1本は幅広で深い、これらに挟まれた縦堀は比較的浅いものが多い。なお、この畝状縦堀群の西方にも約5本の縦堀状の掘削が認められるが、畝状縦堀群との関係は不明確である。この曲輪Ⅳの北側には、曲輪Ⅰから下段にあたる位置で南西方向に下る斜面に築かれた帯曲輪につながっており、その中央付近に水溜め場所1か所が認められる。一方、この帯曲輪にある水溜め場所付近から北側に延びる通路と曲輪Ⅳから北側下方に位置する方形の小曲輪を経由して延びる通路が曲輪Ⅴにそれぞれつながり、結果的にこれらの通路と帯曲輪によって囲まれた長楕円形を呈する大きな池状の落ち込みが形成されている。

曲輪Ⅴは城の北西方向にある谷側に張り出した台形状を呈した土塁囲みの曲輪であり、その周囲は高さ約3mを測る石垣をもつ。また、曲輪の南西側には谷筋に沿う位置で両側を石垣で固めた外枳形状を呈する虎口を設けている。ここから曲輪Ⅰには、先述した大きな池状の落ち込みを巡る通路から、曲輪Ⅲ、曲輪Ⅱと向かったと推測されるが、判然としない。

曲輪Ⅵは曲輪Ⅰの北側の鞍部に掘削された深い堀切の先に延びる尾根上に築かれた出丸と考えられ、平面形が不整形を呈する曲輪である。曲輪の北側と西側下方には土塁が設けられ、後者はこれにより横堀状の防御となっている。曲輪の北辺と西辺の一部には高さ約70cmの土塁が設けられた一方で、東・南辺を含む曲輪面全体は自然地形を多く残す。なお、曲輪Ⅰと曲輪Ⅵを分かち堀切は、曲輪Ⅰの下位を曲輪Ⅴのある南西方向に向かって円弧状に巡る横堀とつながり、曲輪Ⅰと曲輪Ⅵの間には部分的に土橋を設けている。また、横堀の外縁には高い土塁が築かれており、ここからは西側の低湿地側に下る通路も取り付いている。この横堀は「間道」とも呼ばれるが、城の北西方向に対する高い防御意識を示しているといえる。



第 120 図 三石城跡縄張り図 (1/2,000)

なお、「通常、横堀は畝状空堀より内側に設けられるが、ここでは外側に横堀がある。これは畝状空堀の使用が停止され、横堀による防御ラインへ改修されたことを示す。戦国末における縄張りの変遷を読み取ることが出来」とする多田暢久の見解は、石垣の採用も合わせて示唆に富む。

文献・伝承 『備前記』には、浦上五郎左衛門尉村宗が在城した和気郡三石村に所在する「三石古城山」、『和気絹』には、伊藤（東）大和二郎、児島備後三郎高德、尾張左衛門佐、赤松兵部大夫政則、浦上近江守宗助、浦上掃部頭宗村が在城した和気郡三石村の「三石城」、『備陽記』には、浦上五郎左衛門尉村宗が在城した和気郡三石村の「古城山跡」、『備陽国誌』には、伊東大和次郎、児島高德、尾張（石橋）左衛門佐、赤松兵部少輔政則、浦上近江守宗助、浦上掃部頭村宗が在城した三石村の「古城」、『吉備前秘録』には、和気郡三石村の「三石城」、『吉備前鑑』には、浦上村宗が在城した和気郡三石村の「古城山」、『吉備温故秘録』には、伊東大和二郎、石橋左衛門佐、浦上掃部助宗隆、浦上四郎宗安、浦上則宗、浦上喜三郎則国、浦上近江守宗助、浦上掃部助村宗、浦上掃部助政宗が在城した和気郡三石村の「古城山」、『撮要録』には、伊東大和次郎、浦上村宗が在城した和気郡三石村の「古城跡」、『東備郡村誌』には、平太郎良門、伊東大和次郎、児島備後三郎高德、石橋左衛門佐、浦上掃部介宗隆、浦上四郎宗安、浦上則宗、浦上近江守宗助、浦上紀三郎則国、浦上掃部村宗が在城した和気郡三石保三石邑の「城墟」などの記述がみられる。なお、『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には、小玉刑部または尾玉刑部少輔が在城した「鶯丸」・「出丸」などの記述がみられるが、三石城跡の南西に築かれた関川城跡を指している可能性も考えられ、検討を要する。城史を示す一次史料（3～7・18・41・43～53）や参考史料（8～16・21）がある。（澤山）



写真 129 曲輪 I 土壇東側石垣（東から）



写真 130 曲輪 I 西側土塁（北東から）



写真 131 曲輪 II 西側土塁（北東から）



写真 132 曲輪 I 下方帯曲輪石組み井戸（北から）



写真 133 城外南側くり抜き井戸（南西から）



写真 134 曲輪 I 下方畝状縦堀（西から）



写真 135 曲輪Ⅲ檜台石垣（北西から）



写真 136 曲輪Ⅳ下方畝状縦堀（南西から）



写真 137 曲輪Ⅴ石垣（南西から）



写真 138 曲輪Ⅴ虎口石垣（南西から）



写真 139 曲輪 I 下方横堀・土塁（南西から）

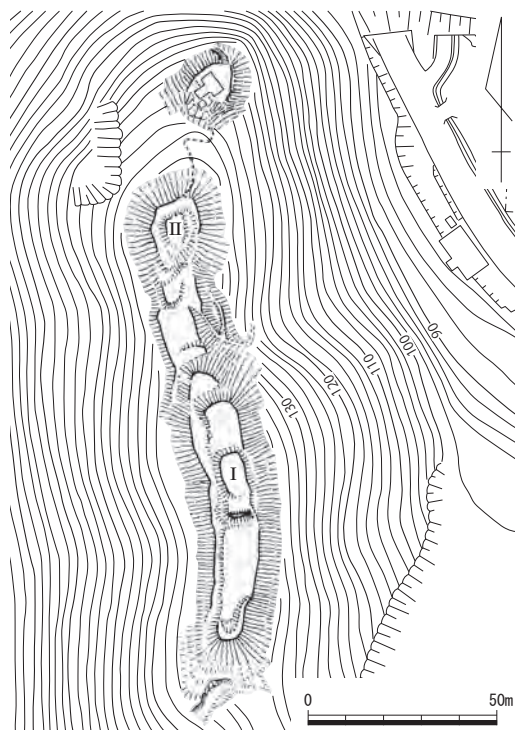


写真 140 曲輪Ⅵ西側横堀・土塁（南東から）

立地 三石城跡から南方向にあたる木野山神社が建つ山頂部の尾根上に位置する。

概要 南辺に土塁が伴う主郭（曲輪Ⅰ）の南側には長曲輪が築かれ、南端に土塁がみられる。この南側には急峻な切岸が造られ、下方に堀切1条が認められる。主郭の北側には大小2面の曲輪が築かれ、西側には帯曲輪が細長く延びる。城域北端には土壇状の高まりが伴う曲輪Ⅱがみられ、その南側下方には加工段が築かれ、鞍部には方形の曲輪がみられる。

文献・伝承 和気郡三石村において、『備前記』は村南の「出丸」に尾玉刑部少輔が、『備陽記』は村南の「出丸」に毛利家の尾玉刑部少輔が、『備陽国誌』は「鶯の丸」に村宗の老臣小玉刑部が、『吉備温故録』は村南の「出丸」に毛利家臣の尾玉刑部少輔、浦上家臣が、『東備郡村誌』は三石城の別堡の「鶯の丸」に浦上村宗家臣の小玉刑部が居城とある。こうした記載は本城跡を示す可能性があるが、検討を要する。（澤山）



第 121 図 関川城跡縄張り図 (1/2,000)
作図：畑和良

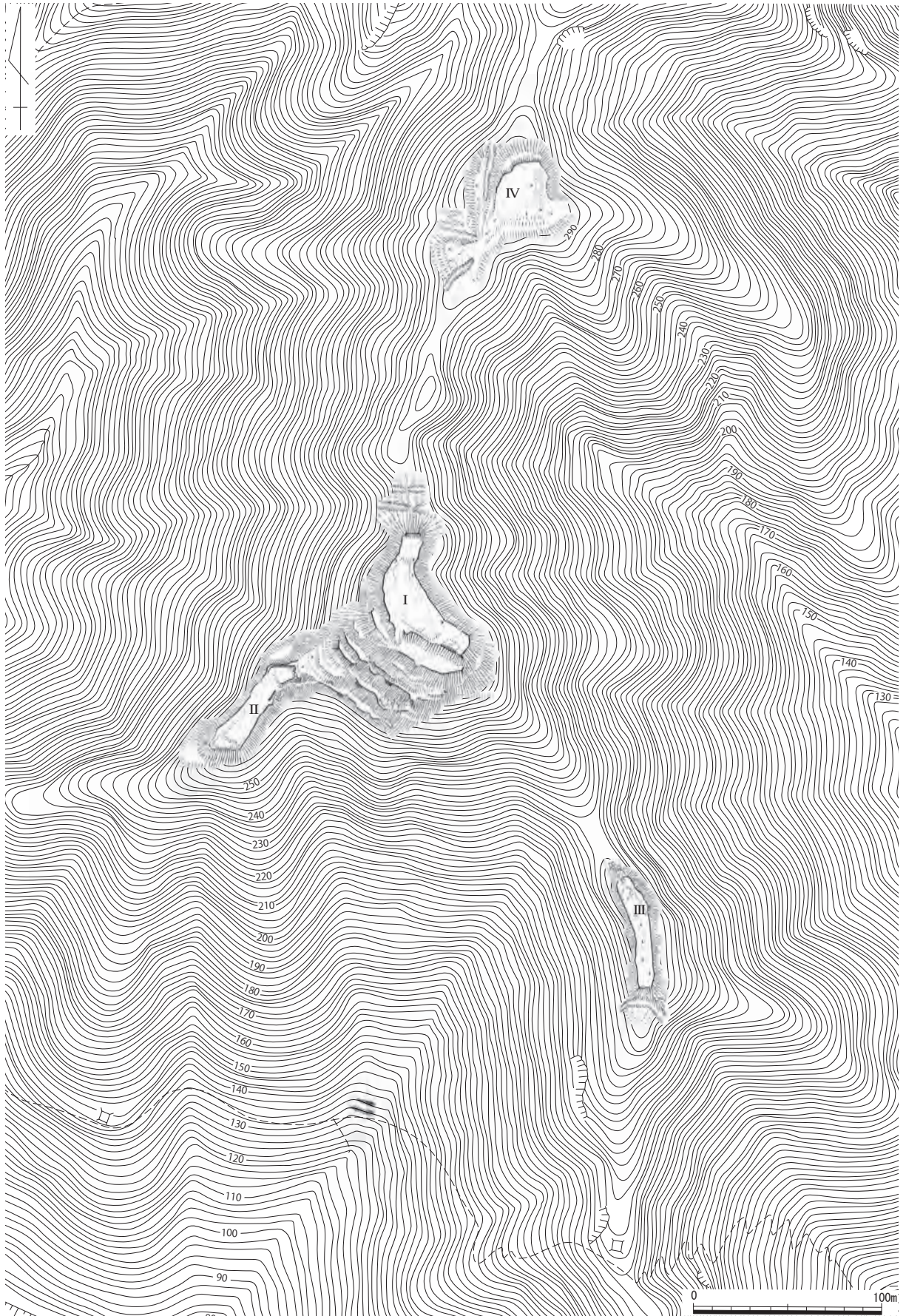
立地 吉井川左岸にある山塊の城山山頂部に位置する。

概要 本城は「本丸」・「二の丸」・「三の丸」と呼ばれる曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと、ここから北方に位置する曲輪Ⅳで構成される連郭式の山城である。

曲輪Ⅰは山頂部に築かれており、地形に沿って「く」の字に湾曲した平面形を呈しており、北半の中央付近には高さ約1m前後の土壇状の高まりが認められる。また北端縁辺には高さ約50cmの土塁が伴い、その北下方に向かって比高差約4～5mを測る急峻な切岸が築かれている。またその直下にはやや深さが浅いながらも2条の堀切を設けて、尾根筋を遮断している。なお、現状では土塁東端が北方から入城するための虎口の役割となっている。

一方、南半には緩い段状を呈する平坦面が認められ、南西端縁辺では掻き上げによると思われる低い土塁状の高まりが伴う。中央付近はやや広い空間をもち、南西端部には南西下方に築かれた帯曲輪群に通じる虎口が取り付けられている。この帯曲輪群は南西方向に築かれた曲輪Ⅱ方向に向かう急斜面に対して基本的に4面配置されており、上段の帯曲輪を除いて細長い円弧状の平面形を呈する。また、その帯曲輪間に派生的な小規模な曲輪が連なる。このうち、帯曲輪の縁辺部下方の切岸には石積みが一部で確認できる。中段に築かれた帯曲輪には井戸状の凹みが認められる。

曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰが築かれた山頂部から南西方向に細長く延びた尾根部に位置する。北東端には土



第 122 図 香登城跡縄張り図 (1/3,000) 作図：畑和良

塁状の通路状遺構が、南東端には通路がそれぞれ帯曲輪群に取り付いている。また 南東端は谷部からの登城に対する虎口的な位置にあたり、一部で石列が認められる。南端縁辺付近には掻き上げによると思われる低い土塁状の高まりが巡っている。なお、この尾根端部には堀切は設けていない。曲輪Ⅲは曲輪Ⅰが築かれた山頂部から南東方向に細長く延びた尾根部に位置する。南端には堀切1条を設けて、尾根筋を遮断している。

この本城から北方向に延びる自然地形の尾根部には、人為的に削平されたとと思われる曲輪Ⅳが広がり、西側に豎堀状の地形が数本認められる。

文献・伝承 和気郡香登西村に所在する城館として『備前記』・『備陽記』・『撮要録』では浦上左衛門が居城した「古城山」または「古城跡」、『吉備温故秘録』では、浦上右衛門、高取左衛門進宗政が居城した「古城」などの記載が認められる。一方、和気郡香登村では、浦上宗久、高取左衛門が居城した城館として『和気絹』は「香々登城」、『備陽国誌』は「古城」、『東備郡村誌』は「古城墟」と記され、『吉備前鑑』は高取左衛門宗政が居城した「古城跡」などの記載が認められる。なお、『宇喜多能家寿像賛』によれば、浦上宗久は兄村宗と断交して香登城に籠城したとされ、一方で同城にいた宇喜多能家は備前西部から精兵を連れて戻り、主君浦上村宗がいた三石城を包囲する赤松義村の播磨方を退けたとする（一次史料 42）。その後の宗久の動向は不明であるが、『備陽国誌』・『東備郡村誌』にある高取左衛門は浦上村宗の子宗景の家臣とされる。城史を示す一次史料（42・142）がある。（澤山）



写真 141 曲輪Ⅰ南半土塁（北から）



写真 142 曲輪Ⅰ南西上段帯曲輪（北西から）



写真 143 曲輪Ⅰ南西帯曲輪石積み（北西から）

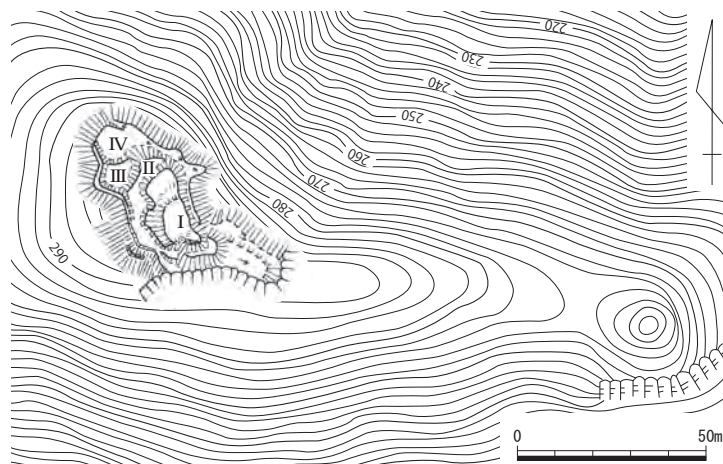


写真 144 曲輪Ⅰ南西帯曲輪井戸（南東から）

立地 伊部集落の北側にそびえる医王山山頂に立地するこの城は、伊部城跡が所在している谷部の南出口を西から見下ろす。城からの眺望は非常に優れており、東はたい山城跡や富田松山城跡、西は香登の集落を越え旧長船町内まで、南西は千町平野の南を画する山塊に築かれた砥石城跡や高取山城跡までも一望する。

概要 城域の東及び南側は、後世の採石によって失われている。標高300mの頂部には、露岩を切岸に取り込んだ曲輪Ⅰを造成している。曲輪Ⅰより北西側には、自然地形を残した曲輪を挟んで帯曲輪状に巡る曲輪Ⅱが配され、さらにその西側には曲輪Ⅲ・Ⅳを設ける。城域の西辺は屏風折れのように屈曲しており、その北半には最大高約1mの土塁が、南半には崩落している場所も多いが3～4段積みで推定高1mの石積みが築かれている。曲輪Ⅳ以西は急斜度で下って尾根鞍部に至り、そこには採石に伴う山道かもしれない幅の狭い溝が認められた。曲輪Ⅰから東側の尾根筋には2面の曲輪を設け、それ以东は幅が狭く自然地形のままの尾根上平坦面が約80m程続き、尾根先端頂部に至る。この先端部からも周囲を一望可能であることから、見張り台として使用されていたかもしれない。

文献・伝承 城名のみ伝わっている城で、築城時期や城主名などは不明である。 (小嶋)



第 123 図 茶磨岩城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 145 曲輪Ⅱ西辺南端の石積み (北西から)



写真 146 遠景 (南東から)

立地 たい山城跡は眼下に旧片上湾を望む山頂に立地。山裾部南端は旧片上湾と接している。旧片上湾を挟んで東には富田松山城跡を正面に望む。眺望は東西に広く開け、東は旧片上湾一帯、西は現在の伊部市街地をそれぞれ見渡すことができる。

概要 田井山山頂部は直線距離で約 350 m の広さを有するが、城の造作は部分的に認められるのみである。ただし、主要な登山口の 3 か所には堀切または土塁を設け、防御性を確保している。主郭と考えられるのは、標高が最も高い北東側の尾根上である。東西に長い尾根(幅約 20 m、長さ約 120 m)を生かし、周囲に簡単な切岸を行い、曲輪を形成している。傾斜が大きく変わる東端はやや強めに切岸を行っているが、土塁などは設けていない。西側は、尾根が続くためか、1 条の堀切とその排土を利用した土塁状の高まりを築き区画している。この堀切の北側には、地形を生かした曲輪状の張り出し部を設けている。曲輪の内部はほぼ自然地形を残していることが特徴で、単郭に近い簡素な縄張りを持つことから、築城は南北朝時代に遡る可能性があり、戦国時代に改修されて使用されたものと考えられる。

主郭への登り口(主郭からの比高差約 10 m)となる北東の尾根上には 3 条の堀切が設けられ、嚴重に動線を遮断する。一方、主郭から南西尾根側の状況については、南西側約 150 m 地点の尾根頂部に向けて緩やかに上るが、基本的に自然地形が続いている。そこからさらに南北と西側に緩やかに下る尾根が派生しているが、その南北に続く尾根筋は山裾へとつながっており、田井山への主要な登り口となっている。この尾根筋を遮断するように防御施設が認められる。南へと下る尾根は旧片上湾側からの登り口ということもあり、堀切などの嚴重な区画施設を持たず、尾根の途中に土塁と簡単な切岸で曲輪を造成している(土塁の基部から頂部までの比高差は約 2 m である)。一方の北側に続く尾根は現・伊部市街地からの主要な登り口にあたることから、堀切や土塁を用いて嚴重に防御している。土塁は山頂部北西端の傾斜変換点付近に設けられているが、その地点は北～西方向(伊部市街地方面)の眺望に特に優れている。土塁の内部をやや平坦に造成することで曲輪を形成しているが、虎口を尾根側と谷側に 2 か所設けるなど、手の込んだ造りとなっている。さらに、ここから西側に下った地点に堀切が設けられている。この堀切は幅約 4 m、深さ約 1 m の規模を有し、尾根線を包み込むように嚴重に遮断している。

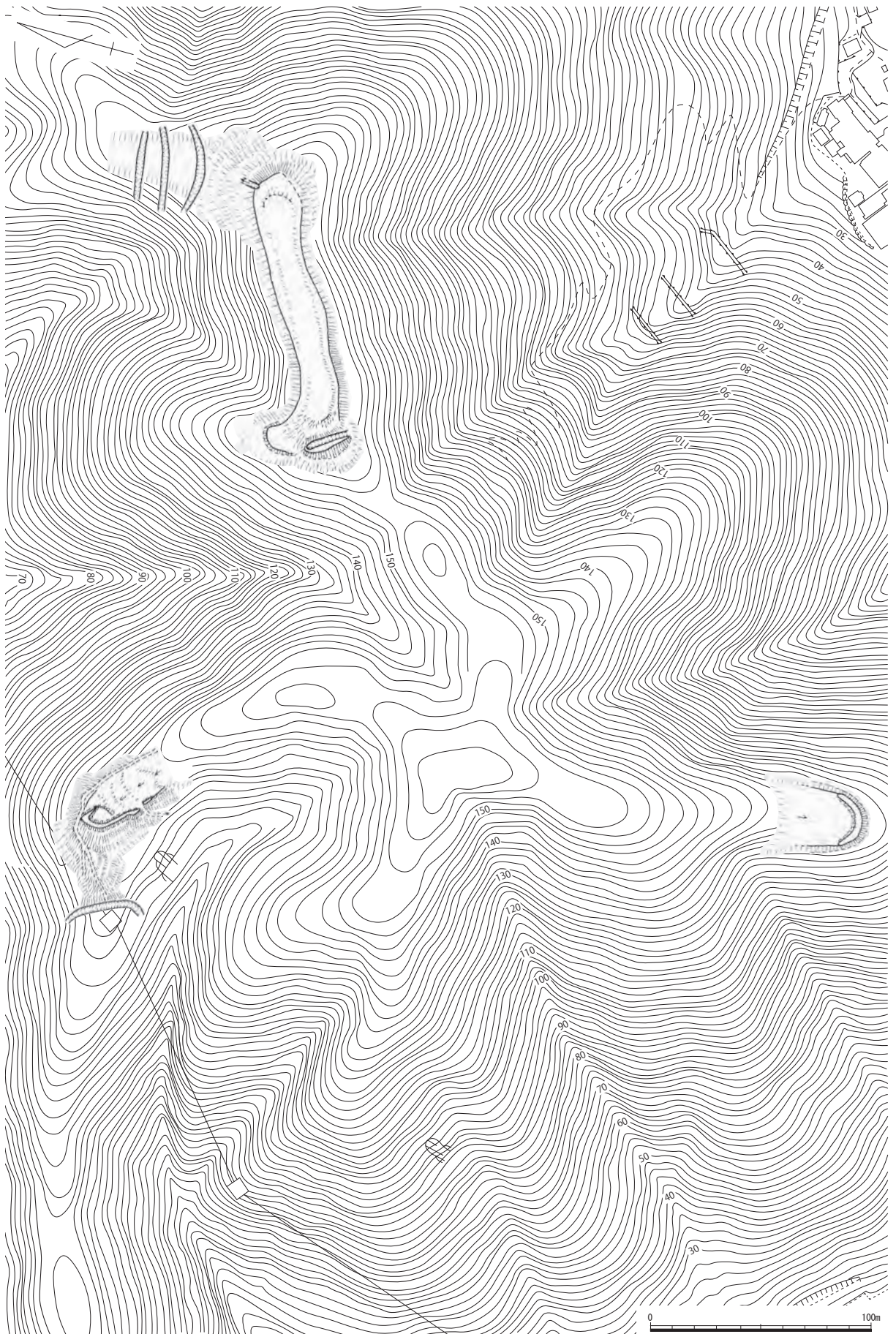
主要な登山口に設けられたこれらの複数の防御施設は、その構造に加え、北西側の曲輪周辺に戦国時代頃の備前焼が多く散布することからも、戦国時代に築造もしくは改築が加えられた可能性が高い。

文献・伝承 たい山城跡は今回の調査によって新たに発見された城郭である。『備陽国誌』・『吉備温故秘録』などの近世地誌類では、城主を安達修理亮(主馬介)と推定する。別称田井山城。

(河合)



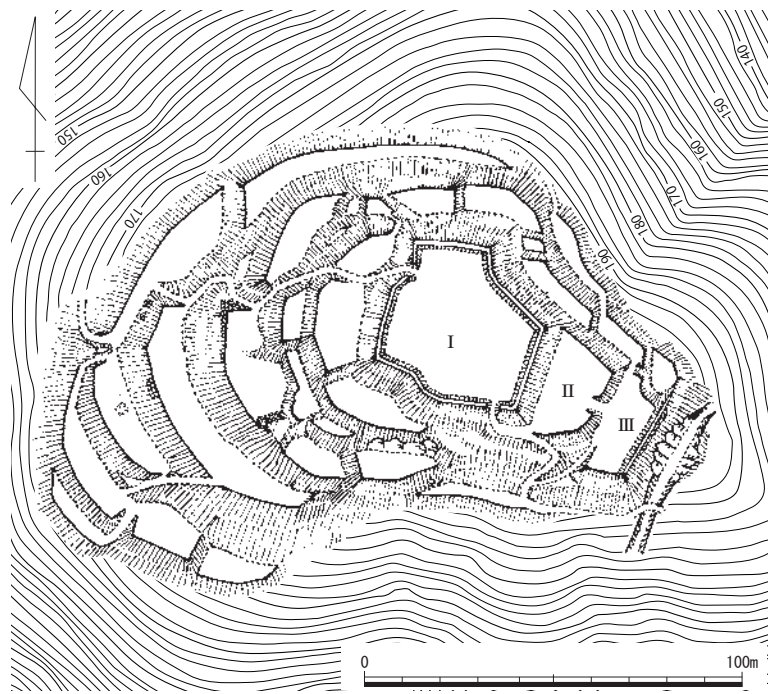
写真 147 北東尾根上の堀切(東から)



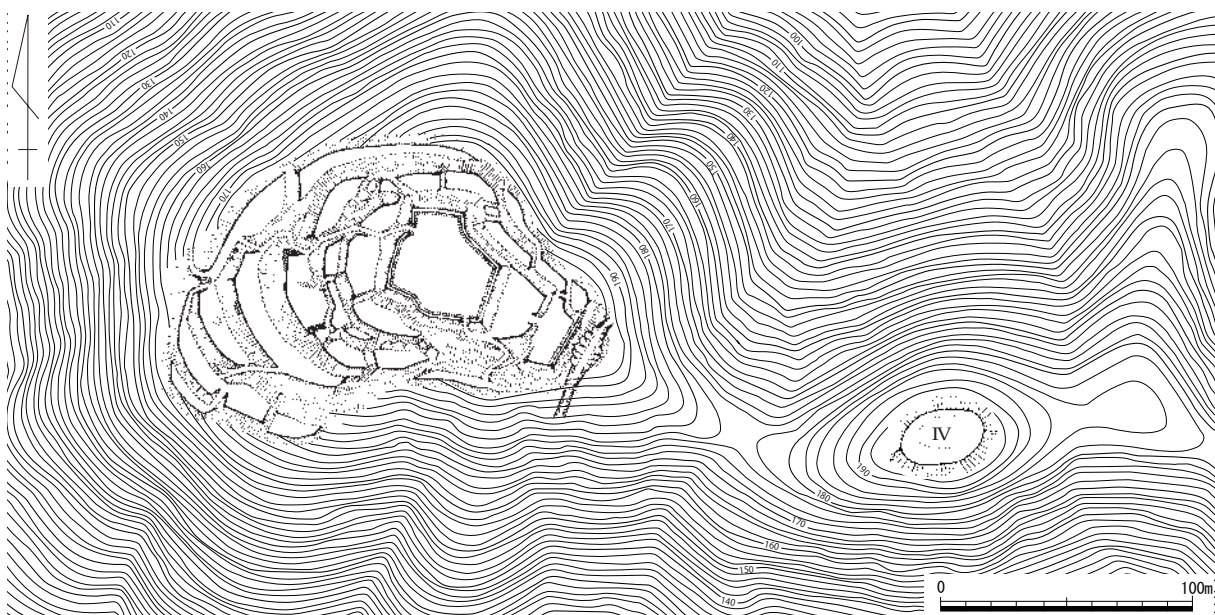
第124図 たい山城跡縄張り図 (1/2,500)

立地 城は、尾根続きである東側以外を海に囲まれた富田松山の山頂に立地する。旧山陽道や片上港を見下ろし、三石城跡を北東に望む。

概要 頂部に多角形の曲輪Ⅰを造成し、その周囲に幾重にも曲輪を配した輪郭式の山城である。曲輪Ⅰ縁辺全周に土塁を設け、その土塁内側には石積みが築かれている場所もある。曲輪Ⅰを取り囲む帯曲輪や腰曲輪は、横移動を防ぐために高低差を持ち、さらに土塁や櫓台を備えているものも認められる。また、これらには石垣や石積みによって切岸が補強されているものもある。曲輪Ⅰ西辺北側の屈曲部には、平入りの虎口が設けられ、そこに接続する城道は帯曲輪群と複雑に連携することで敵の侵入を防いでいる。台形を呈する曲輪Ⅱは、東辺中央部に虎口が存在する。堀切に面した曲輪Ⅲの東辺には、土塁が築かれる。岩盤をくり抜いて開削した堀切は、豎堀状に斜面へと続く。この堀切から鞍部を挟んだ東側の尾根頂部には、曲輪Ⅳが所在する。この曲輪周囲にも土塁が築かれていたと伝



第 125 図 富田松山城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良



第 126 図 富田松山城跡縄張り図 (1/3,000) 作図：畑和良に加筆

えられるが、今回は確認できなかった。

文献・伝承 近世地誌類では、浦上国秀、浦上河内守景行を城主としている。畑和良によると、国秀の後は、永禄年間（1558～1570）に浦上宗景、天正年間（1573～1592）に宇喜多直家、関ヶ原の合戦後に小早川秀家が支配下に置いた可能性が高いとする。（小嶋）



写真 148 曲輪Ⅰ・東辺土塁（南から）



写真 149 大手曲輪石積み・石垣（北西から）



写真 150 井戸石組（北から）



写真 151 堀切（南から）

第5節 御野郡



- 172. 船山城跡
- 173. 妙見山城跡
- 174. 烏山城跡
- 175. 半田山城跡
- 176. 津島福居遺跡
- 177. 辻川城跡
- 178. 富山城跡
- 179. 野殿城跡
- 180. 岡山城跡

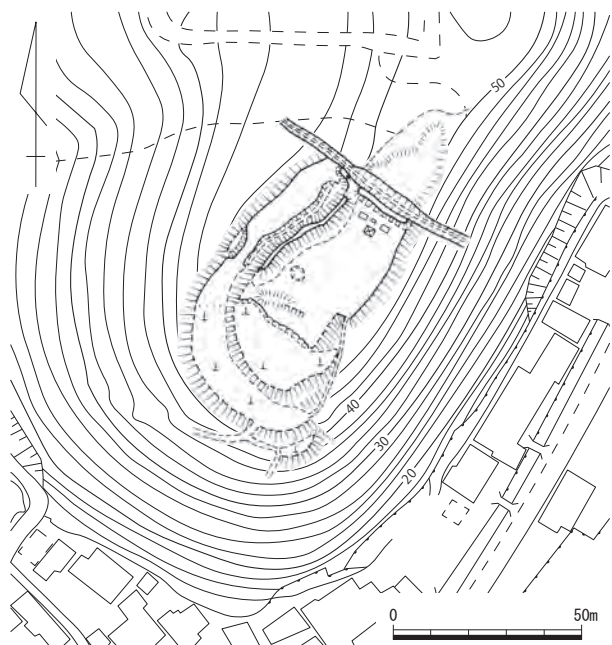


第 127 図 御野郡城館位置図

立地 旭川下流域右岸の標高約 50 m、比高約 40 m の丘陵頂部に立地し、旭川沿いの南方の眺望に優れる。近隣では旭川右岸の南西約 2.1 km に妙見山城跡、北東約 3.0 km に 100 名称未定の城跡、東約 2.1 km の対岸の旭川左岸には龍ノ口城跡が位置する。

概要 城域は東西約 60 m、南北約 80 m と中規模でも小さい。頂部の曲輪を中心とし、北側の尾根鞍部に堀切 1 条、南斜面に腰曲輪、西斜面に帯曲輪を配置する単郭の構造をもつ。頂部の曲輪は東西 20 m × 南北 40 m の平坦面が広がる。土塁は曲輪の北辺と西辺で確認でき、高さは 1 m 前後である。また曲輪の南側でもわずかな高まりが確認でき、土塁の名残である可能性がある。『備前国御野郡原村舟山城図』（池田家文庫）によると、東側の曲輪には井戸が 3 か所、西側の曲輪には井戸が 1 か所描かれているが、曲輪の南西側では径 4 m 程の浅い凹みが確認でき、絵図に描かれた井戸の 1 つである可能性が想定できる。北側の尾根鞍部には最大深 3 m 程度の堀切があり、東西の斜面に延びる。南斜面には腰曲輪・帯曲輪・小曲輪の計 3 面が確認できる。いずれも墓地によって地形改変が著しく、規模や形状は定かではない。このうち帯曲輪は南斜面から西斜面にかけて延びる。曲輪西辺の土塁下は浅い溝状を呈しており、土塁の構築に伴って掘られた可能性がある。全体的には旭川に面した南西及び山腹側の北を堅守した縄張りである。

文献・伝承 『備前記』にみえる「船山古城山」に比定され、須々木豊前が居城したと伝える。また、『日本城郭大系 13』によると、築城時期は不明であるが、戦国期に須々木氏が居館を構え、永正・大永年間（1504～1528）には存在していたと推定されている。須々木豊前は三村氏に従っていたが、永禄 10（1567）年の明禅寺合戦によって宇喜多氏が完勝すると、須々木氏の城と領地を没収させたとある。『備前国御野郡原村舟山城図』に表現された縄張りは、頂部に曲輪と土塁、南西側に帯曲輪、北側に堀切が描かれており、概ね現状の遺構と一致するところが多い。（米田）



第 128 図 船山城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 152 土塁と横堀（北西から）

立地 旭川下流域右岸の標高約 50 m、比高約 40 m の独立丘陵の南側頂部に立地し、北東から南の旭川沿いや南に広がる岡山平野が一望できる。旭川右岸では北東約 2.1 km に船山城跡、西約 2.7 km に半田山城跡、南東約 1.0 km の対岸の旭川左岸には中島城跡が位置する。

概要 城域は東西約 70 m、南北約 130 m で中規模である。縄張りは頂部の曲輪を中心とし、南・西斜面に帯曲輪、北側の尾根鞍部に向かう斜面に腰曲輪 2 面、北側の尾根鞍部に堀切 1 条が配置された単郭に近い構造をもつ。現状では頂部は三野公園の整備により東西 64 m × 南北 43 m の平坦面が広がるが、『御野郡三野村釣古城図』（池田家文庫）によると、もともとは瓢箪形の曲輪が築かれていたようである。周縁の切岸の傾斜は緩い。頂部から北側の尾根鞍部にかけては、腰曲輪 2 面が連続し、さらに北側には堀切が横断する。腰曲輪と堀切は尾根筋の中央部分が造成され、改変が著しい。堀切は幅 10 m 前後と幅広で、東半は良好に残存するが、西半は遺存状況が良くなく、一部で名残がうかがえるのみである。頂部の東斜面では幅狭の犬走り、南東斜面と西斜面には幅 5 m の帯曲輪が延びる。頂部の曲輪の南端には帯曲輪につながる通路がある。また下方の南西斜面にある幅 10 m 前後の平坦面や散策道は、帯曲輪を改変した可能性を残す。全体的には旭川に面した南西を堅守した縄張りといえる。

文献・伝承 『備前記』にみえる「鐘子の釣古城山」に比定され、須々木四郎兵衛が居城したと伝える。また、『日本城郭大系 13』には、天文年間（1532～1555）頃の築城と推定され、永禄 10（1567）年の明禅寺合戦後に宇喜多直家に城と領地が没収されて廃城になったとある。『御野郡三野村釣古城図』は頂部に曲輪、南西側に帯曲輪、北側に堀切を表現しており、現地の状況と概ね一致する。（米田）

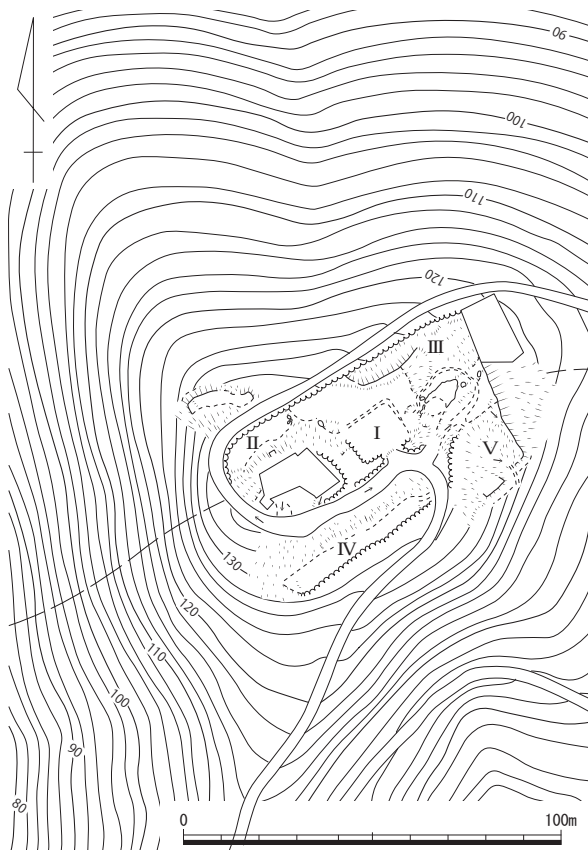


第 129 図 妙見山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 烏山の頂部に立地する。東側 750 m の半田山の西側山頂部には半田山城跡が位置する。南眼下には、東西方向に中世山陽道の存在が推測される。

概要 改変が著しく遺構の残存状況は良好とはいえないが、斜面部を中心に複数の曲輪が確認できる。削り残された曲輪Ⅰが主郭に相当する。曲輪Ⅱは一部鉤状に屈曲し、中程に段を設けて西側を高くする。東側はわずかに段状に下がって曲輪Ⅲとなる。曲輪Ⅱの北側斜面にも小規模な平坦面が造成されていた。曲輪Ⅰの南側にも自然傾斜地を挟んで曲輪Ⅳが造成されていた。西端は削り込みによりわずかな段を造り出している。主郭の北東側はおおよそ自然地形を残したままであるが、東端部はやや緩い切岸を造成していることから曲輪と考える。曲輪Ⅴの南側には円形状に斜面を削り出し、虎口状部分につながる。虎口状部分の東側には横矢掛け状の高まりが南に延び、西側には狭い平坦面が造成されていた。

文献・伝承 『備陽記』には「津島村之内城山村北ニアリ妹尾兼康居城スト云傳兼康墓モアリ」と記述がみえる。『備陽国誌』には烏山城の別称として笹ヶ迫の城をあげ、『御津郡誌』には、寿永2（1183）年の今井四郎率いる三千余騎の追討軍と対峙する妹尾兼康が「伊島村烏山ノ上」にある笹ヶ迫城で応戦したと記される。また、永禄10（1567）年、宇喜多勢と三村勢の間で繰り広げられた明禅寺合戦において、行軍する石川左衛門尉に攻撃を仕掛ける軍勢の中に「笹瀬山の城」から攻撃を仕掛けたとあり（文献 155）、城名は笹ヶ迫城が転訛した可能性が推察される。（上村）



第 130 図 烏山城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 153 曲輪Ⅰ（北から）



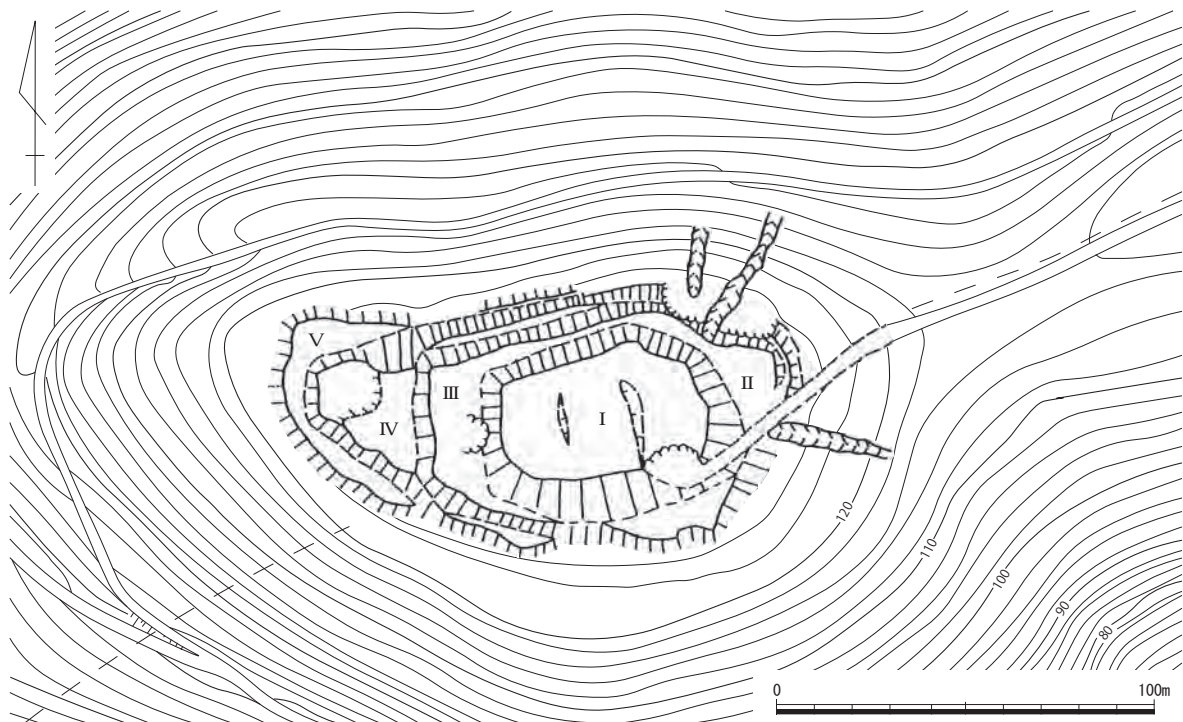
写真 154 曲輪Ⅰ 虎口状部
（南西から）

立地 旭川右岸にある標高 130 m の半田山の西側頂部に立地する。比高は約 120 m である。山頂からは南は岡山平野が一望できるほか、北西の笹ヶ瀬川流域も望むことができる。また、南麓には中世山陽道が通っていたことが推定されるほか、『平家物語』では妹尾太郎兼康が構えた「福輪寺縄手」があったと推測されている。このほか、近隣には西 700 m に鳥山城跡が位置する。

概要 縄張りは頂部の曲輪を中心とし、東西に腰曲輪や帯曲輪を連ねた構造である。城域は東西 170 m、南北 100 m で規模は大きい。頂部の主郭と考えられる曲輪 I は 54 m × 30 m の規模で、東西と中央の 3 つに区画されており、中央は東西の段より 50 cm 程高い。切岸はやや急で高低差が 5 m 近くある。

頂部の東西には曲輪 II・III が配置され、その北側は犬走りでつながる。一方、西斜面には曲輪 III の下方に腰曲輪 IV、さらにその下段に造作があまり弧状の帯曲輪 V を構える。このうち曲輪 IV の南半では 16 世紀代の備前焼の甕片が散布する。このほか、北斜面と南斜面にはそれぞれ帯曲輪が配置される。防御施設として、北東斜面に豎掘 2 本、南東斜面に豎掘 1 本がある。

文献・伝承 『備前記』は城主不明であるが、『岡山市史第 2』では城主を林玄蕃と伝える。『日本城郭大系 13』では平安時代から戦国時代前半にかけて、南麓に所在した福輪寺と関係する城郭施設であった可能性が示唆されている。このほか、城跡に関して、測量調査や考古学・文献・地名による総合的な考察が行われている（文献 176）。（米田）



第 131 図 半田山城跡縄張り図 (1/2,000)

文献 176 に一部加筆

立地 矢坂山頂部に立地する。南麓の旧野殿村には富山城跡と関わる居館跡とされる野殿城跡が、東方 4.5kmには岡山城跡が位置する。中世までの山陽道（西国往来）は矢坂山の北約 2 kmの地点を、近世山陽道は矢坂山の北麓を通る。矢坂山北麓の北向八幡宮は、寛平年間（889～898）に富山重興が万成の山頂に創建したと伝わるもので、1894年に現在地へ遷地されたという。

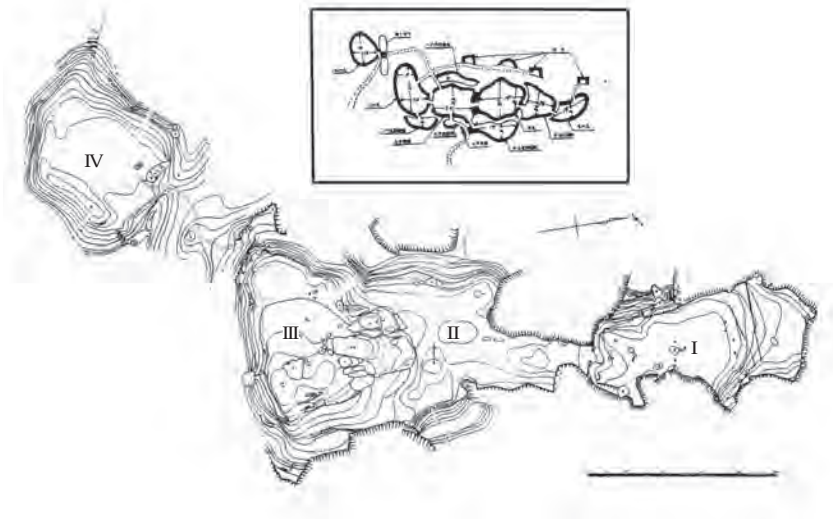
概要 大正時代に矢坂山一帯が採石山となり城跡の一部が破壊されていたため、記録保存の発掘調査が実施されている（文献 251・252）。城は主要曲輪 5 面からなる連郭式山城で、東西斜面に腰曲輪や櫓台を備える。南北を石積みで区画し西側斜面でも石積みを確認できる「本丸」（曲輪Ⅰ）では 3 段階の変遷が確認でき、報告書では松田前期・後期、浮田期とされている。ピット少数を確認した松田前期面の直上に強固な盛土造成を施した松田後期面では、北寄り地点で礎石が検出された。また曲輪Ⅰの北石積みは上下 2 段が確認されているが、上石垣は当段階に築かれた。上石積みの上に版築層が認められることから、石積みは土塀の基礎と評価されている。上石積み北側には堀切を掘削する。後期面に盛土造成して整備された浮田面でも北寄りに礎石が確認された。浮田期には北堀切を埋め戻し、そこに下石積みを築く。南側石垣の中央部は開口し、東に屈曲して曲輪Ⅰに入る枡形構造を持つ。西斜面下方にも上下 2 段の石積みが築かれるが、いずれも中程が鍵状に屈曲する。「大手曲輪」（曲輪Ⅱ）は、北半で松田後期・浮田期の 2 層が確認されている。浮田面には礎石や列石状石積みが築かれ、池が 2 か所掘削されていた。「二の丸」（曲輪Ⅲ）は巨岩が多く露出した曲輪で、南・西斜面に石垣が築かれる。ここでも池が確認されている。曲輪Ⅲと「南の丸」（曲輪Ⅳ）の間の鞍部には堀切を掘削していた。堀切の東側には仕切りのような高まりがわずかに確認できる。

発掘調査では城内全域で遺物が出土しているが、特に「本丸」礎石南側・東側、「大手曲輪」池などに集中する。遺物には瓦片、備前焼、土師器、磁器片、鉄釘、武器・武具、古銭などがある。採石で消失した曲輪Ⅴ北側の「北の丸」では、採石従事者の聞き取りで焼麦や瓦片が出土したことが判明している。

富山城跡は矢坂山頂部を押さえた山城で、全国的に早い段階で発掘調査が実施された。全方位を遠望できる峻険な山の頂部に主要曲輪を連郭式に造成し、東側に腰曲輪を、西側に複数の櫓台を設けて全方位の守りを固めていた。松田後期から瓦葺き礎石建物が築かれ、浮田期に大規模な改修が行われている。松田後期が 1550 年代もしくは 1560 年代初頭、浮田期が永禄 11（1568）年以降とされる。

文献・伝承 富山城に関する古い記録は『和気絹』にあり、築城は富山大椽によるとのことである。応仁元（1467）年には松田元隆が攻撃を仕掛けて奪取し、時の城主富山長頼は自害した。元隆の死後の文明 15（1483）年、城を受け継いだ元成が金川城に移ったため、弟の元親が富山城に入る。明応 6（1497）年には浦上宗助による攻撃を受けるが、元親はこれを退ける。元親の死後には重臣横井土佐守が居城するが、永禄 11（1568）年に金川城を落とした宇喜多直家が富山城も落城させ、横井は自害した。翌年、直家は城を修築し、浮田忠家を在城させる。小早川秀秋入国に際して廃城となる。岡山城西の丸の枡形桜門であった石山門は慶長 6（1601）年に富山城大手門を移築したと伝えられる。

作者・作成年代ともに不詳の『富山城古図』には、発掘調査以前に消失した曲輪が描かれており、調査段階には本丸東帯曲輪や大手馬出、西側斜面の櫓台群が消滅し、本丸北曲輪と二の丸東腰曲輪が半壊、本丸や大手曲輪、大手西帯曲輪が一部破壊を受けていたことが判明している。（上榎）



第 132 図 富山城跡測量図 (1/2,000)
文献 251 から引用



第 133 図 富山城古図
文献 183 から引用



写真 155 曲輪 I 虎口 (南から)



写真 156 曲輪 I 西石積み (北から)



写真 157 曲輪 I 石積み (北西から)



写真 158 曲輪 I 西石積み (北から)



写真 159 曲輪 IV 土塁 (南から)

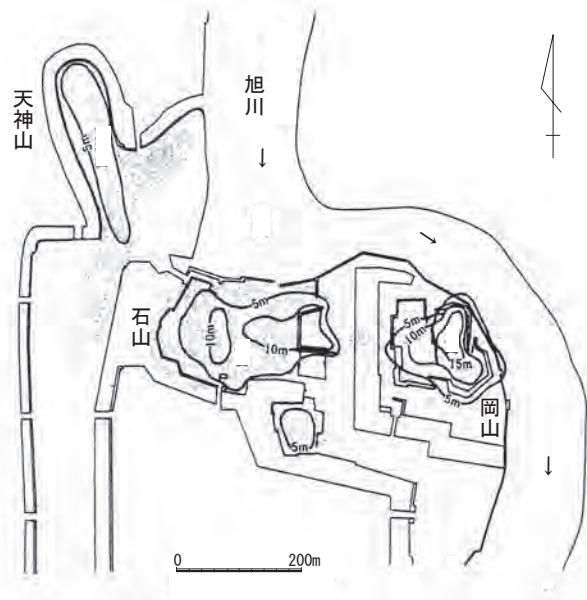


写真 160 堀切 (東から)

180 おかやま 岡山城跡 岡山市北区丸の内1丁目ほか <国指定史跡> 地図 16 左・19 右・19 左

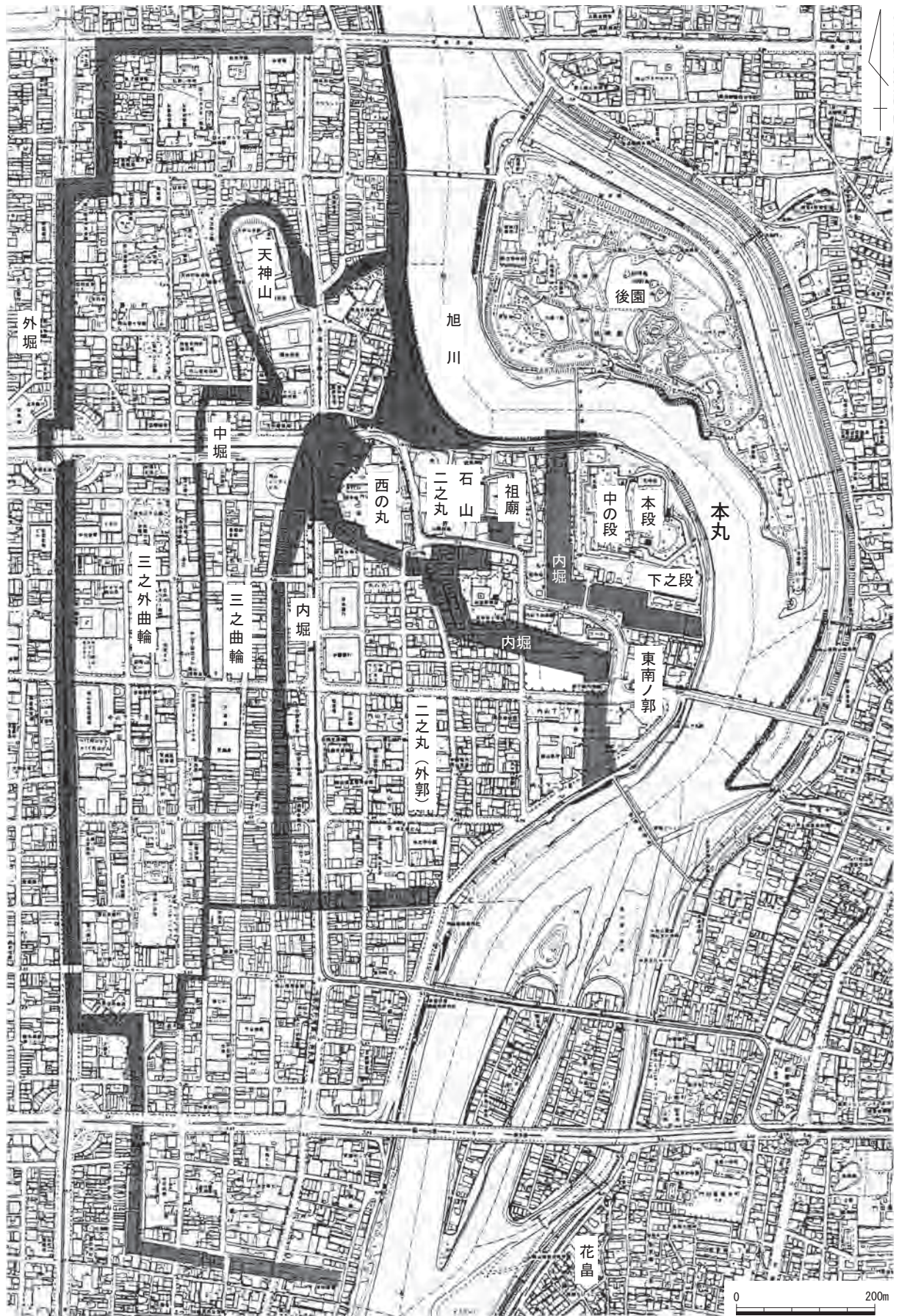
立地 旭川西畔にある東部の岡山、中部の石山、北西部の天神山といった標高約 20 m の独立低丘陵及びその周辺に広がる沖積平野に立地する。これらの丘陵は比高 20 m と低いが、岡山城天守からは岡山平野やかつて城下町であった市街地を一望することができる。

概要 岡山城は本丸を中心とし、二之丸・西の丸・三之曲輪・三之外曲輪・内堀・中堀・外堀・後園で構成され、惣構をもつ。外堀と旭川に画された城域は、東西 1.0km、南北 1.8km と極めて大きく、備前最大の規模を誇る。そのうえ、外堀外を含む城下域は南北長 3.6km、旭川と西川に挟まれた東西長 1.3km にも及ぶ。現在、岡山城は国史跡、月見櫓及び西丸西手櫓



第 134 図 岡山城要部の旧地形 (1/12,000)

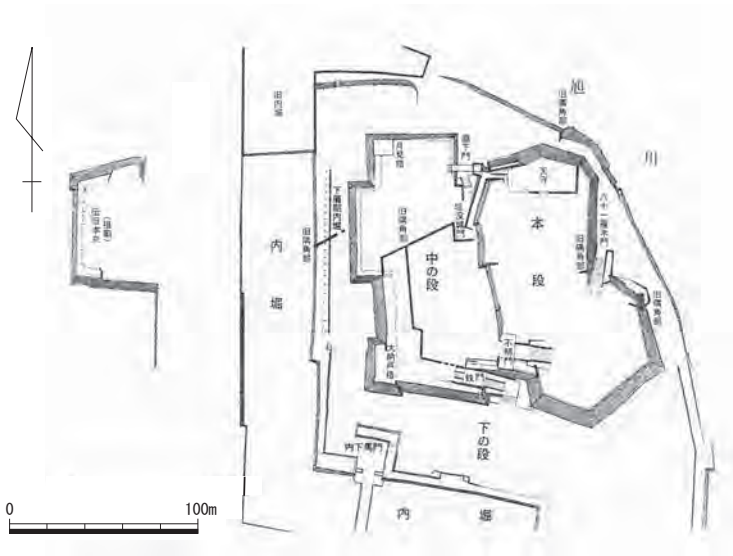
文献 210 に一部加筆



第 135 図 岡山城の構造 (1/8,000) 文献 222 に一部加筆

は国重要文化財、後樂園は国特別名勝に指定されており、保存と活用が図られている。

本丸は城地の北東隅にあたる岡山を中心とし、本段、中（表書院）の段、下の段の三段造りで構成されている。本段には櫓を付随した三重六階の天守のほか、櫓3棟、多間櫓2棟、櫓門2棟、平門1棟、御殿、小庭園、多間長屋、下男部屋、蔵などが建てられた。特に天守は外壁の大部分に黒塗りの下

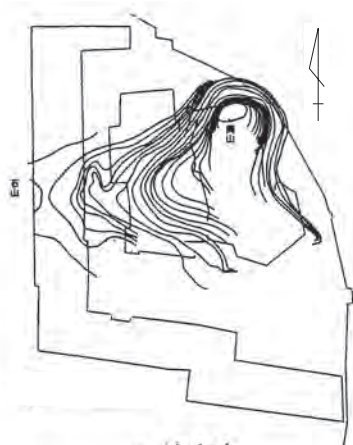


第 136 図 本丸の現役石垣と埋没高石垣 (1/4,000)
文献 210 に一部加筆

見板を張りめぐらしているのが特徴であり、「烏城」とも呼ばれた。また、中の段には櫓5棟、多間櫓3棟、櫓門2棟、表書院の殿舎群、小庭園、平門1棟が置かれた。下の段には櫓10棟、多間櫓3棟、櫓門2棟、長屋門1棟、花畑殿舎、多間屋敷、番所、金蔵・鉄砲蔵、土蔵、厩、平門が林立していた。これらの建物は慶長年間から寛永年間にかけて段階を追って整備され、最終的に各段とも総石垣が築かれた。本丸の正面入口は、下の段南面西側の内下馬門、裏の入口は下の段北面西側の馬場口となっている。本丸の北東は旭川、南西は内堀で囲まれ、堅く防御されている。こうした岡山城の本丸は1590年頃以前から1620年代に至るまで、次のように1～5期にわたって変遷をたどることが明らかにされている（文献210・219）。

まず、1期は16世紀末、宇喜多直家期から秀家の幼少期にあたる。縄張りは旧地形の影響を強く受けて、本丸の塁線が曲線的である。本丸中の段では高石垣は構築されず、大量の瓦の葺く建物は伴わない。中の段では北寄りの最高所に本丸に相当するA郭、南東の尾根筋にB郭、西側の最下層では土塁を縁に廻らせたC郭の配置が復元されている。さらに下の段に相当する北東の高所にD郭、南側にE郭、西側に土塁を挟むようにF郭とG郭が配置されていたことが想定されている。城壁は低い土塁や切岸を主体とする。C郭の南西隅に築かれた土塁の裾には巨石を用いた石組を伴うが、高さは1mに満たない。このほか、近年の岡山城二の丸跡の調査では、二之丸の東側で前期池田期の内堀から南西20～30m離れた位置で石垣を伴わない1～2期に遡る堀が確認されたほか、二之丸の中央で1～2期に相当する銅製品製作遺物がまとまってみつかると、銅細工の工房の存在が示唆される。

2期は文禄年間（1592～1596）から慶長年間（1596～1615）の初め、宇喜多秀家が本格的な織豊系城郭の建設した当初期とみられる。本段と中の段の南東側に高石垣が築かれたほか、大量の瓦が葺かれた建物が伴う。出土瓦は膨大な量で、なかには金箔おし、五七桐文のものを含み、コビキはすべてA技法が認められる。高石垣は旧地形に規制されて石垣角が鈍く、石塁構造をなす。石垣の高さは10mを超えるとともに石材の大形化が進む。城壁線は鉤折れが導入され、石垣上には隅櫓や門が建ち始める。



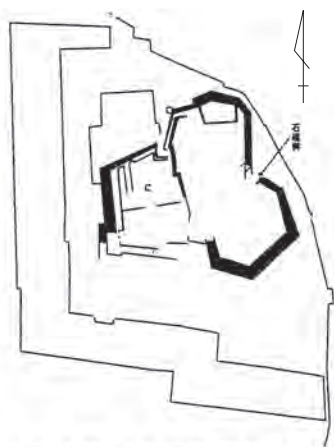
a.地山高



b.1期 (中の段Ⅰ期)



c.2期 (中の段Ⅱ期)



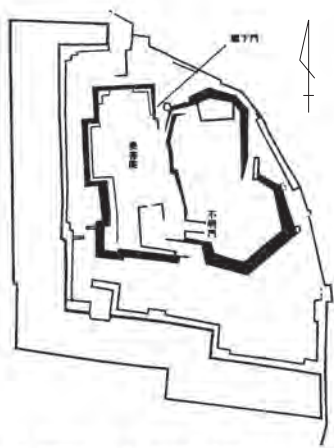
d.3期 (中の段Ⅲ期)



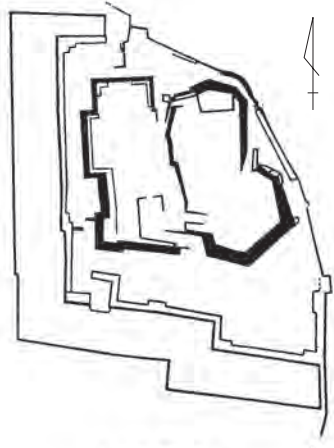
e.4期古 (中の段Ⅳa期)



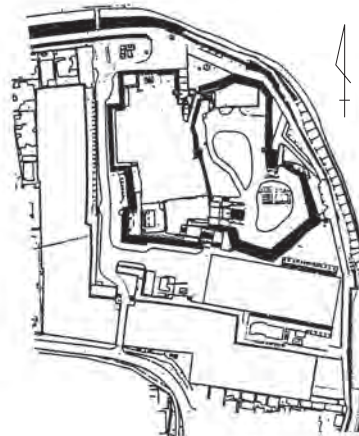
f.4期新 (中の段Ⅳb期新)



g.5期初 (中の段Ⅴ期初)



h.5期新



i.現在

0 200m

※一部未確定

第 137 図 岡山城本丸の変遷 (1/6,000) 文献 219 に一部加筆

3期は慶長年間前半、宇喜多秀家期の最終段階、あるいは小早川秀秋期にあたる。中の段が西側に拡張され、大納戸櫓の前身となる櫓台が成立する。瓦はコビキB技法が採用される。2期の構造を踏襲する部分が多いが、坂下門脇の本段石垣旧隅角が直線的に改造された可能性が指摘されている。

4期は慶長年間前半～後半、池田利隆、忠継、忠雄期に比定され、古段階と新段階に細分されている。中の段では大納戸櫓やその東側の石塁、鉄門が成立する。一方、下の段は墨線が複雑に折れて横矢の機能が高まっていくなか、城門や枡形などが大形化していき、北東部には六十一雁木の石塁や雁木門が成立する。瓦のなかには揚羽蝶文・桐文の棟込瓦が認められる。

5期は元和年間（1615～1624）～寛永年間（1624～1644）初め、池田忠雄期に比定され、当初段階と新段階に細分されている。中の段は北側へ大幅に拡張され、月見櫓、小納戸櫓、数寄方櫓、伊部櫓、廊下門、表書院の御殿が建てられる。また、下の段では生活面の重上げが行われた。

5期以降は石垣の崩落防止のために前面小石垣を構築、中の段では漆喰や豊島石が建材として使用されるが、明治維新に至るまで大きな変化はなく、基本的に5期までの構造を維持する。

二の丸は本丸の南西に内堀を隔てて2つの曲輪で構成される。南から西には鉤手状に東西に細長く延びる内屋敷の郭、南外側には方形の広い郭が配置されている。内屋敷の郭は本丸の外側を固める帯曲輪であり、石山に築かれた城の西の郭と本丸南側の東の郭に区分される。ここには櫓11棟、櫓門4棟、平門1棟のほか、隠居所や祖廟、殿舎、家老級の屋敷が建てられていた。外側面は総石垣となっている。一方、南外側の郭は整然と区画され、櫓7棟、櫓門3棟、平門1棟のほか、評定所、勘定所などの役所、家老級や重臣の屋敷が建ち並んでいた。南側西手には枡形構造の大手門を構えている。また、旭川に面した外側面の東側や南側は石垣が築かれている。

このほか、三の曲輪は二の丸の西半を取り囲むように内堀を隔てて細長く造られている。外周側面には土塁を築き、宇喜多直家期の外堀に相当する堀を中堀として囲む。中堀の外側には三の外曲輪が南北に細長く鉤形に造られており、その外側には外堀を巡らせて城域を区画する。

岡山城の縄張りをみると、二ノ丸より内側は石垣と土塼で堅く守り、外郭施設の要所に隅櫓と櫓門を配置することで、嚴重な防御施設を構えている。それに対して、三の曲輪より外側は外周を堀と土塁で区画する単純な構造である。また、城地の北東は旭川の流路を付け替えることにより天然の外堀とするにとどまっていたが、池田綱政期には旭川を隔てて本丸を巴状に取り囲み、出丸の機能を兼ね備えた曲輪を庭園（後園）として造成した。園内には馬場、矢竹、砥石の庭石、築山、池などが配置され、城地の北東背後の防御を固めた。

岡山城跡における発掘調査及び確認調査は、本丸、二の丸跡、三の曲輪跡、三の外曲輪跡、内堀跡、外堀跡などで当教育委員会、岡山市教育委員会、中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会によって実施されてきた（文献204～208・222・234・235、文献210・212・219・221・228、文献213など）。特に本丸では史跡保存整備事業に伴い、岡山市教育委員会によって1992年から継続的に調査された。これらの一連の調査によって、岡山城の各遺構の構造や規模、変遷などが具体的に明らかになりつつある。

出土遺物は陶器（備前・唐津・肥前・志野・織部・瀬戸・美濃）、磁器（染付・白磁・青磁）、土師質土器、瓦（軒丸瓦、軒平瓦、棟込瓦、鬼瓦、金箔瓦）、土製品、金属製品（銭貨・釘・鏝・刀・鋸・包丁・火箸・鋤先など）、木製品（下駄・木刀・箸・曲物・椀・鉢・木簡・刷毛・木偶・槌など）、石造物、動物遺存体（魚介類、哺乳類、鳥類）などがあり、城内での多様な生活ぶりがうかがえる。

文献・伝承 岡山城はもともと石山に金光氏が築いた城を宇喜多直家が奪い、天正元（1573）年の直家入城に先だって改造されたと伝えられる。天正5（1577）年にかつての主君であった浦上宗景を天神山城から追放して備前全土を掌握した直家は、天正7（1579）年になると毛利方に反旗を翻して、羽柴秀吉の仲介により織田方に付いた。このことは、その後の岡山城の改修や直家の子である秀家の豊臣政権下での出世に多大な影響を与えることとなる。直家の普請は、『吉備温故秘録』によると東部の岡山に本丸を移したとされるほか、寺社などの宗教施設の強制移転、城下町の建設、城下への主要な街道の整備、武士や商工民の城下への集住化など多岐にわたった。

天正9（1581）年に直家が死去した後、翌年に宇喜多八郎が遺領相続を信長に認められ、宇喜多勢は織田方の最前線であった備中高松城水攻めに加わった。八郎は天正13（1585）年に元服して秀吉の養子として秀家と名乗り、豊臣政権下で出世し続け、慶長元（1596）年には大老となった。秀家の普請は天正18（1590）もしくは天正19（1591）に着手され、慶長2（1597）年に完成したと伝えられ、直家が改造した城郭を大規模に拡大し、近世城郭へとつながる構造の基礎を築いた。具体的には、本丸を現在の東方に移し、石垣を築いて金箔瓦をのせた壮麗な天守をあげ、櫓などを造営したほか、旭川を本丸の北と東を鉤形に蛇行するように付け替えるとともに内堀や中堀、城下町の整備も進めた。

豊臣秀吉の没後、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで西軍に付いて敗れた秀家に替わり、小早川秀秋が備前・美作を治めることとなる。秀秋は翌年に岡山城に入り、普請に取り掛かった。主には外堀の掘削や三の外曲輪の創設、本丸には大納戸櫓を亀山城から引くほか、石山門を富山城から移転させたとみられる。

慶長7（1602）年に秀秋が急死し、翌年の慶長8（1603）年に備前は池田忠継に与えられたが、国政は池田利隆が代行した。利隆は石山の西端に西の丸を造成したほか、本丸下の段や内堀を中心に大規模に改修したことが発掘調査によって明らかになった（文献219）。

慶長18（1613）年になると、利隆に替わって忠継が岡山城に入ったが、元和元（1615）年に死去した。その後、忠雄が岡山城に移り、岡山城の具体的な構造を完成させた。本丸では割石積みによって石垣を築いて中の段を西側へ拡張し、月見櫓や廊下門を建設、二の丸外郭の西門や南門を移転させて本格的な枡形を造るなどの改造を行ったほか、旭川東岸の遊興地で郭を兼ねた花島の建設や城下の西限を区画する用水路の西川を掘削したと伝えられる。

寛永9（1632）年に忠雄は死去し、その子の光仲と姫路から鳥取へ移されていた池田光政との間で国替えが行われた。光政以降は、17世紀末から18世紀初頭にかけて本丸北東の搦手にあたる旭川の対岸に後園（後樂園）を造った以外は大きな改造はなく、縄張りや軍事的構造は幕末に至るまで維持された。

こうした岡山城の縄張りを具体的に示す絵図としては、最古の絵図に位置づけられる寛永9（1632）年の『岡山古図』（池田家文庫）をはじめ、正保年間（1644～1648）の『備前国岡山城絵図』（国立公文書館蔵）、慶安年間（1648～1652）頃の『岡山城下之図』（池田家文庫）などがある。

岡山城に関わる史料・文献は多く、以上のような城史をうかがうことができる（一次史料133・136～138・157・167～169・177・220・225・228・230・236・240・242・243・247・250～255・260・263・264・267～275・281、参考史料35・49・58～60・67、文献22・23・31・32・99・103～109・171・197など）。（米田）



写真 161 岡山城跡本丸復元天守（北西から）



写真 162 本丸中の段下層 3 区埋没高石垣
（西から）岡山市教育委員会提供



写真 163 本丸本段南東の石垣
（南東から）

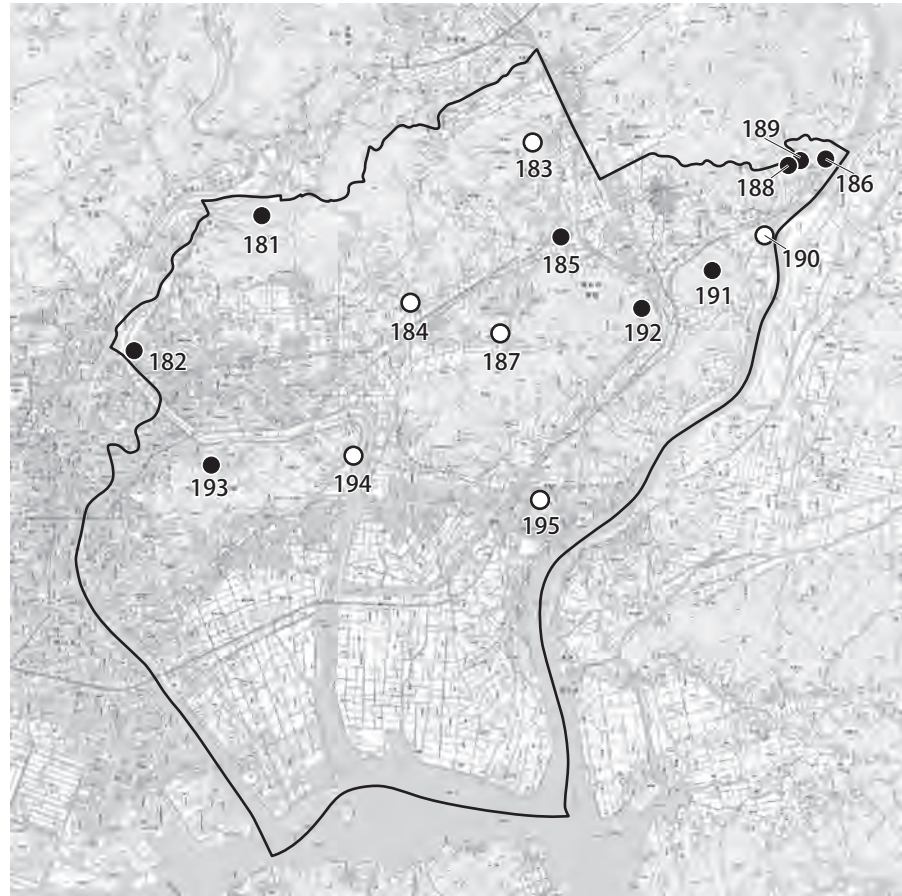


写真 164 岡山城二の丸跡外郭全景
（北西から）



写真 165 岡山城二の丸跡堀 1
（南東から）

第6節 上道郡



- | | |
|-------------|--------------|
| 181. 龍ノ口山城跡 | 190. 福岡城跡 |
| 182. 中島城跡 | 191. 大日幡山城跡 |
| 183. 名称未定 | ・ 大日幡山城跡東出丸跡 |
| 184. 藤井城跡 | ・ 大日幡山城跡北出丸跡 |
| 185. 亀山城跡 | 192. 新庄山城跡 |
| 186. 内山城跡 | 193. 明禪寺城跡 |
| 187. 名称未定 | 194. 正木城跡 |
| 188. 城ヶ辻城跡 | 195. 金山城跡 |
| 189. 吉井城跡 | |

第 138 図 上道郡城館位置図

立地 旭川左岸にある龍の口山の主峰北側にあり、山頂部に位置する。

概要 龍の口八幡宮が造営されている主郭（曲輪群Ⅰ）は、現状で東に段状に下がる小曲輪3面で構成されており、上段の小曲輪には時期不明の井戸が掘削されている。曲輪群Ⅰの西側の切岸下方には堀切または豎堀1条が確認でき、その西側に小曲輪が伴う。そこから尾根筋に沿って約30m西方には平坦面が広がり、眼下に旭川流域を望むことができる。

曲輪群Ⅰの南東側には「二の丸」と呼ぶ帯曲輪や小曲輪で構成される曲輪群Ⅱがみられ、その南縁辺には高さ約2mの土塁が築かれる。さらに、曲輪群Ⅱから尾根に沿って北東側に屈曲して延びる曲輪Ⅲが認められ、その東縁辺には曲輪群Ⅱの土塁と続く高さ約1～2mの土塁が築かれ、その間に虎口が認められる。また、曲輪群Ⅱと曲輪Ⅲが屈曲する谷部に3面程度の小曲輪がある。曲輪Ⅲの東側下方には堀切1・2と畝状豎堀群が掘削され、さらに東に延びる尾根には豎堀や平坦面がみられる。

一方、曲輪群Ⅱと曲輪Ⅲが屈曲する尾根筋に対して、深さ約4～5mを測る堀切3が設けられ、それを挟んだ南側には段状に整形された曲輪群で構成された曲輪群Ⅳが確認できる。ただし、植林などによる後世の地形改変があり、その構造や性格は判然としない。なお、龍ノ口山山頂に出丸が配置されているといわれるが、現状では防御施設など明確な城館関連遺構は確認できなかった。

文献・伝承 上道郡湯迫村に所在した城館として『和氣絹』では最所修理元常、山口与一が居城した「龍口城」、『備陽国誌』は穰所修理亮元常、山口与市が居城した「龍の口城」、『吉備前鑑』では穰所修理亮元常が居城した竜ノ口村の「竜ノ口」、『東備郡村誌』は最莊治部（サイ所治部）が居城した「龍の口山城」が、段原村に所在した城館として『撮要録』は最所治部少輔元常が居城した「竜口城」が、また、『吉備前秘録』は場所不詳（旭川の上）で最庄（穰所）修理亮元常、最庄治部元忠が居城した「龍口城」が記載されている。一方、上道郡段（ノ）原村に所在した城館として『備前記』では最所豊前、最所孫市、最所与市、最所元常が居城した「天神山ノ古城」、『備陽記』は最所豊前、最所孫市、最所与市、最所修理元常が居城した「天神山古城跡」、『吉備温故秘録』は最所源正左衛門、最所豊前守久経、最所治部元常が居城した「天神山城」が記載されており、いずれも本城跡に関する記載と思われる。最（穰）所氏は、中島氏等の旭川下流域の中小領主をまとめていた。なお、『岡山県通史上編』には、宇喜多直家家臣の岡剛介が松田元成に属する穰所治郎元常居城の龍口山城を攻め取ったとあり、『日本城郭大系13』では穰所元常の後、岡与三左衛門、近藤与右衛門が居城したと記す。城史を示す一次史料（81～84・87～89・92）参考史料（29・32）がある。（澤山）



写真 166 堀切 3 (南西から)



写真 167 曲輪群Ⅲ南東斜面畝状豎堀群 (北から)



第139図 龍ノ口山城跡縄張り図 (1/2,500)

立地 中島城跡は、百間川の分流部に近い旭川左岸の自然堤防上に築かれた平地城館である。北東へ4km程離れた竜の口山には龍ノ口山城跡があり、3km南東の操山には宇喜多氏と三村氏が合戦を繰り広げた明禅寺城跡が残る。

概要 中島城跡は、都市計画道路竹田升田線街路改築に伴い実施された発掘調査によってその所在が明らかとなった（文献 253・254）。ただし、調査対象地は城域の東半に限られる。城館遺構が確認されたのは、平成 16～19（2004～2007）年度調査の 1 区である。幅 50 m 河道が流下していたこの地点の下層では、14 世紀後半～15 世紀前半にかけての遺物が出土している。その後に堆積した厚さ 60～90cm 余りの洪水砂層によって周辺より 50cm 程高くなっている場所を利用して、城館は築かれている。城館は南北 50 m の方形をなすものと推定され、西を除く 3 方に幅 7～10 m、深さ 3 m を測る堀が認められた。堀の埋土からは鎧の破片や備前焼などの遺物が出土していることから、その開削は少なくとも 15 世紀後半に遡り、16 世紀末まで機能していたものと推察されている。堀の内側では、掘立柱建物 11 棟、柱穴列 1 条のほか、土坑や柱穴が検出されている。重複する建物には少なくとも 4 回以上の建て替えが認められ、最終段階には 5 間×3 間の中心建物と 5 間×2 間、3 間×1 間の副屋からなる構成が想定されている。これらの建物は区画の北側に偏在しており、南側は空閑地として維持されている。このほか、城館の東側では複数の掘立柱建物が検出されている。城館よりやや低い位置に立つことから、家臣の屋敷もしくは町屋のような性格が想定されている。

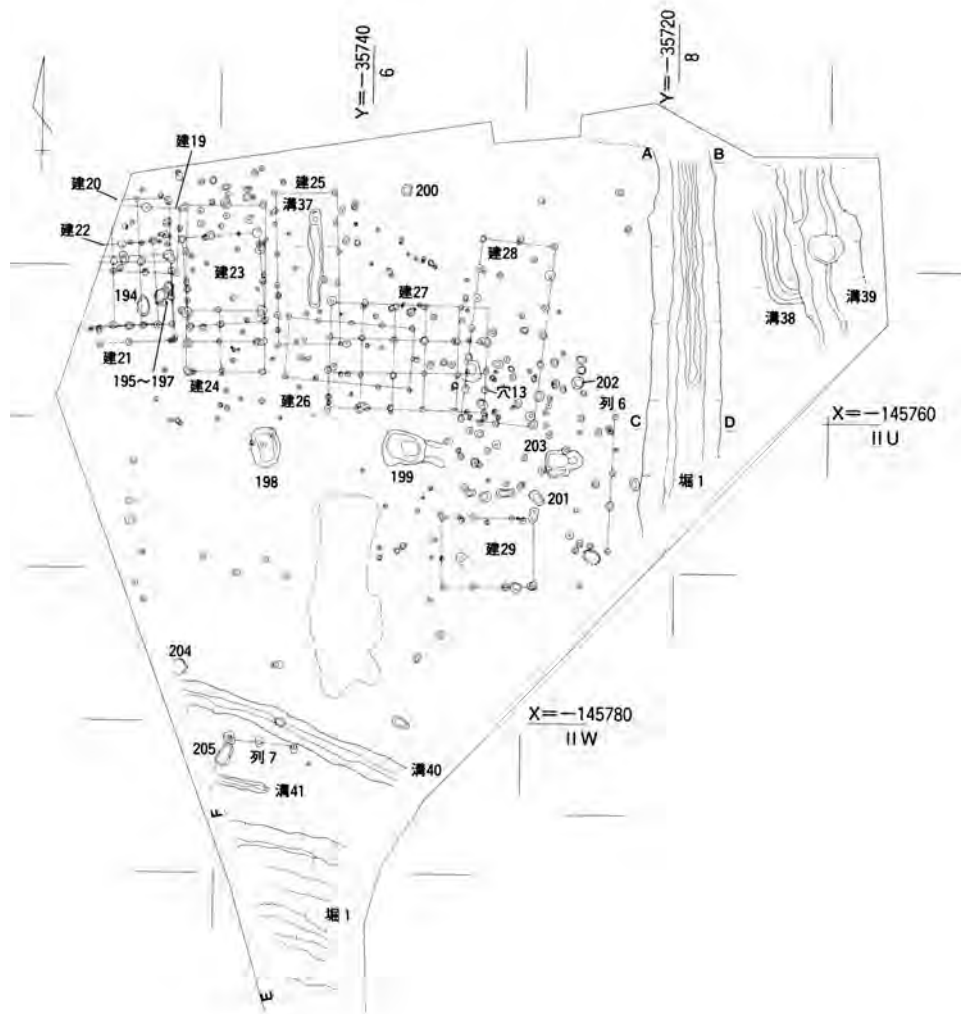
文献・伝承 中島城に関する記述は『備前軍記』にみえる。永禄 10（1567）年、宇喜多直家と三村元親との間で繰り広げられた明禅寺合戦において、城主の中島大炊介は三村氏に味方し、宇喜多氏の居城である沼城進軍の先導を務めた。しかし、三村氏の敗勢が明らかになると、幸山城主石川氏の軍勢を追って首級をあげ、沼城に持参して宇喜多氏に降った。この裏切りを憤った三村方の中島新左衛門は、中島城の辺りにある榎の虚に隠れて大炊の帰城を待ち伏せ、これを殺害した。また一説には、宇喜多直家が龍ノ口城を攻め落とした帰途、中島城に攻め入りこれを落としたともいう。城館遺構の近くには城主の中島大炊介に由来すると考えられる「大炊」の小字が残り、建物群も検出されている。また「屋敷添え」という小字は城館を取り巻く堀の位置とほぼ合致していた。（上村）



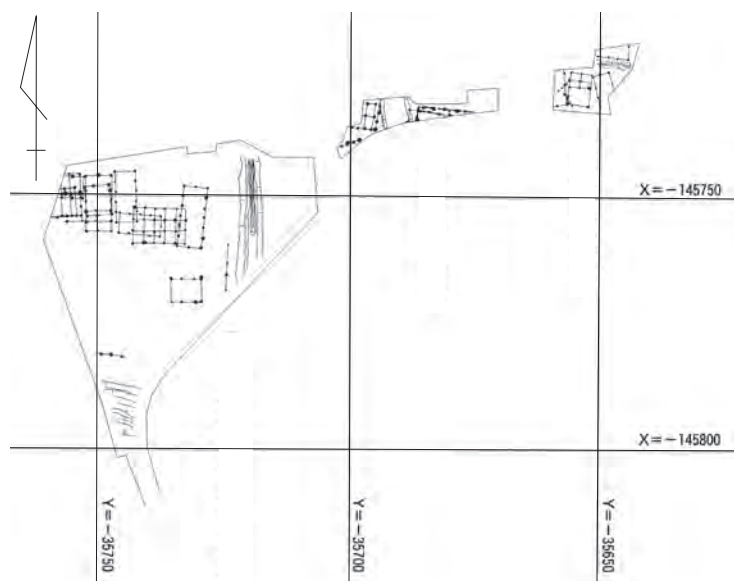
写真 168 堀 1（南から）



写真 169 堀 1 出土 甲冑の脇板



第 140 図 中島城跡遺構全体図 (1/500)
文献 253 に一部加筆



第 141 図 中島城跡周辺建物配置全体図 (1/1,500)
文献 254 に一部加筆

立地 砂川の氾濫源の沼地に囲まれた弁天山とその西側にある丘陵頂部に位置する。

概要 本城は弁天山に「本丸」と呼ばれる曲輪群Ⅰとその東方にあたる「二の丸」と呼ばれる曲輪群Ⅱ、そして最下方にあたる「三の丸」と呼ばれる曲輪群Ⅲの3段構造を有し、また西側の丘陵には「西の丸」と呼ばれる2段構造を有する曲輪群Ⅳが築かれており、高い切岸と天然の沼地が主要な防御であった平山城といえる。

弁天山に築かれた曲輪群Ⅰには弁財天神社が造営されており、その北西端には比高差約2mを測る櫓台と考えられる広い土壇があり、東端は土塁状になっている。畑和良によれば、西側縁辺にも土塁の基底部と思われる微地形が存在したとされる。切岸は高く急峻である。曲輪群Ⅰの下方には周囲を段状に巡る帯曲輪が築かれ、それぞれ高く急峻な切岸が伴う。南側の帯曲輪は地形改変が著しいが、現状で細長い段状の平坦面が確認できる一方、西・北側は比較的高い削平度をもって作り出している。また、帯曲輪北側の櫓台下方には凹みが認められ、井戸の可能性がある。さらに、この帯曲輪の北側下方には細長い犬走りを作り出している。この帯曲輪の西側縁辺には約50cm大の自然石を用いた基本的に1～2段積みの石列が認められる。この石列は帯曲輪の東側や西下に築かれた小曲輪にも一部認められる。このように総じて曲輪群Ⅰは北・西側の防御構造が固く構築されたといえる。

曲輪群Ⅱの西側には曲輪群Ⅰの帯曲輪に続いて方形の曲輪が造られ、東側には高さ約1.5mを測る曲輪が築かれている。その下方にも周囲を段状に巡る帯曲輪が築かれているが、東側の端部は削平を受けているため、現状ではやや狭小となっている。曲輪群Ⅲは丘陵裾部を全周する帯曲輪であるが、北側を除くそのほとんどが現在宅地化している。ただし、北側には高さ約2～3mで急峻な切岸が認められるので、本来はこの帯曲輪全体に同様な防御がなされていたと思われる。なお、畑和良によれば、虎口は曲輪群Ⅰを囲む帯曲輪の西南、帯曲輪西下の付属郭北端、本丸北西下、犬走の突端の曲輪に認められ、曲輪群Ⅰを囲む帯曲輪の西南については、江戸時代に描かれた古図にもここから城内に入る道が描かれていることから、主要な城門の1つがここに存在した可能性が高いとされる。

弁天山西側の丘陵にある曲輪群Ⅳは地形改変が進み、現状で頂部に築かれた主曲輪と西側下方の帯曲輪程度が確認できる。この帯曲輪北側の縁辺には低い石垣がみられる。作者・作成年代ともに不詳の『亀山城古図』では曲輪群Ⅳの西方にも曲輪群が描かれているが、今回の調査では現認できなかった。なお、この古図には本城東側の砂川を渡った場所に「出丸」を表現しているが、当地は「櫓部」という名の集落であることから、最近の研究ではここに「奈良部城」が存在したという説がある。宅地化が進んで詳細は判然としないが、宇喜多氏居城期の城の縄張りを検討する上で重要な描写といえる。

文献・伝承 上道郡沼村に所在した城館として『備陽国誌』では中山備中守、宇喜多和泉守直家、宇喜多七郎兵衛晴家、宇喜多左京亮忠家が、『吉備温故秘録』は中山備中信正、宇喜多直家、宇喜多春家、宇喜多氏家臣が、『東備郡村誌』は中山備中、宇喜多直家、宇喜多与太郎基家、宇喜多七郎兵衛晴家、宇喜多左京亮忠家が居城した「亀山城」が記載され、これらは本城に比定される。また、上道郡沖益村に所在した城館として『備前記』・『備陽記』では中山備中守、宇喜多直家、宇喜多春家が居城した「沼古城山」、『和気絹』は中山備中、宇喜多直家、宇喜多七郎兵衛晴家、宇喜多左京亮忠家が居城した沼村の「沼城」、『吉備前鑑』は宇喜多直家が居城した沼村の「沼の古城山」、『吉備前秘録』は宇喜多

和泉守直家が居城した上道郡の「沼城」、『撮要録』は中山備中守、宇喜多直家、宇喜多春家が居城した上道郡の「沼城古城跡」などが記載されている。これらも本城跡に関する城館と思われる。なお、『備陽国誌』によれば、亀山城城主の中山備中守（信正）が主君浦上遠江守の命令に背いたため、宇喜多和泉守直家に命じ討たせて、本城と領地を賜ったとされる。直家は永禄年中（1558～1570）居城したが、その後は岡山城に移ったため、舎弟の七郎兵衛晴家あるいは左京亮忠家が居城したとされる。城史を示す一次史料（58・65・246）や参考史料（27～29）がある。（澤山）



写真 170 曲輪群 I 土壇（櫓台、北東から）



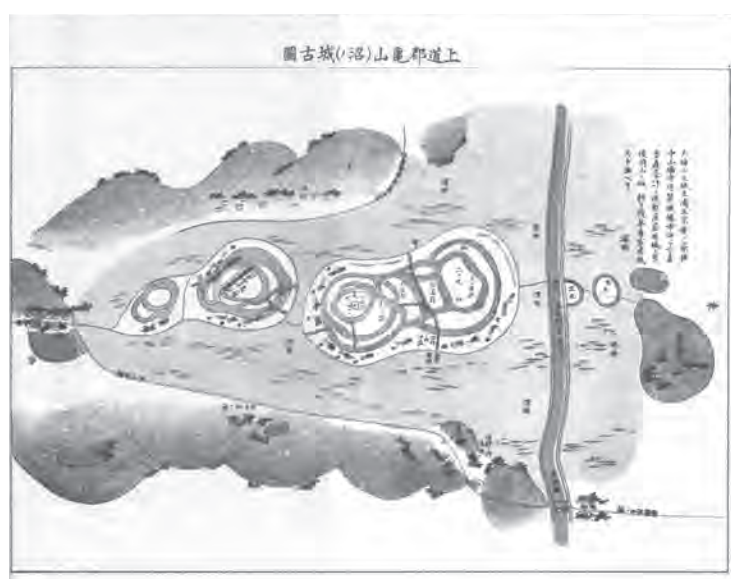
写真 171 曲輪群 I 井戸（北西から）



写真 172 曲輪群 I 縁辺石列（南西から）



写真 173 曲輪群 II 中央付近（北西から）



第 142 図 亀山城古図
文献 183 から引用



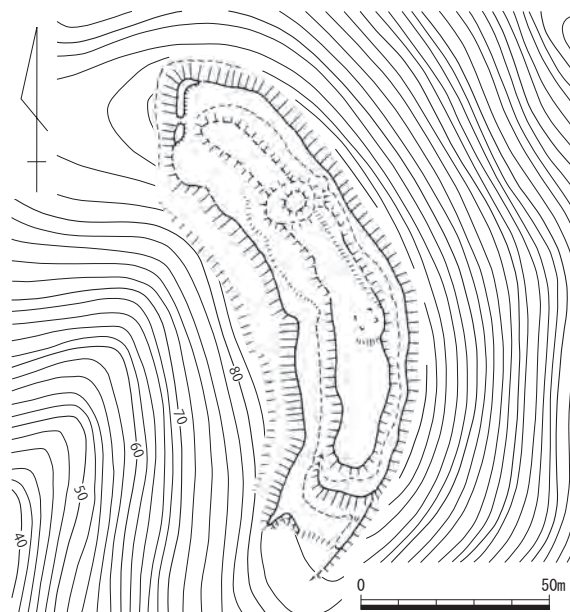
第 143 図 亀山城跡縄張り図 (1/2,000) 作図：畑和良

立地 山塊から南北方向に延びる山頂部に位置する。

概要 主郭は自然地形に沿って南北に細長く、北端に高さ約 50cm の低い土塁をもつ。また、中央付近には径約 12 m、高さ約 1.5 m の古墳が築かれており、これも防御機能を果たした可能性もある。この付近の東・西約 2 m 下方には帯曲輪が巡っており、その切岸は比較的急峻となっている。

城跡の北西側にもやや広い平坦地が認められるが、城館関連遺構は確認できなかった。全体的には簡素な造りの城跡といえる。なお、南端は鉄塔の造成により一部損壊している。

文献・伝承 『備陽国誌』・『東備郡村誌』に記載された中山備中守が居城したとする上道郡南方村の「内山城」に本城跡は比定される。(澤山)



第 144 図 内山城跡縄張り図 (1/2,000)

187 名称未定 岡山市東区吉井

立地 山塊から吉井川に向かって南側に延びる細い尾根の先端部に位置する。

概要 やや幅広の尾根部に対して、3 条の堀切が設けられている。特に南側の堀切の掘削は深く、最大約 2 m にも及ぶ。尾根の南東端には急峻な切岸が伴う小曲輪が認められるが、曲輪面の削平度は低い。堀切の北西側には平坦面が広がっているが、城館関連遺構は認められない。そうした状況から、当地は物見台程度の役割をもつ場所であったとも推測できる。

文献・伝承 城館跡を示す近世地誌類はみられないが、位置的からみると『改修赤磐郡誌』に記す吉井水門の上に所在する「城山」に該当する可能性がある。この山塊には吉井城跡や城ヶ辻城跡が存在することから、こうした城館跡と連動して防御機能を果たしたと思われる、福岡合戦との関連も推察される。(澤山)



第 145 図 名称未定縄張り図 (1/2,000)

立地 吉井川右岸の山塊の山頂部に位置する。
概要 山頂部に築かれた主郭の北東側には、高さ約 50cm の低い段状を呈する平坦面が数か所認められる。その下方には小曲輪と帯曲輪がみられ、それぞれの切岸の高さは約 1.5 m 程度を測る。

主郭の南西側にある帯曲輪は広く、特に南側は緩やかな平坦面を呈する。帯曲輪の南西端には高さ約 3 m の急峻な切岸が造られている。総じて、この城跡の防御は尾根筋側に設けられた切岸が主たる施設と思われる。

ただし、この城跡が位置する山頂部から南方に伸びる尾根上の約 200 m 離れた位置に幅約 10 m、深さ約 2 m を測る堀切 1 条を配置しており、この城跡と同一尾根に連なる吉井城跡の登城を防いだ施設の 1 つとも考えられる。

なお、主郭中央にかつて鉄塔が築かれていたようであり、その基礎工が認められることから一部損壊した状況である。

文献・伝承 近世地誌類ではこの城館を比定する記述は認められないが、『改修赤磐郡誌』には上道郡御休村大字吉井・瀧瀬村大字肩脊に「城ヶ辻山城」が所在すると記され、福岡合戦において松田元成が布陣した場所としている。
 (澤山)



写真 174 南東側切岸 (南西から)



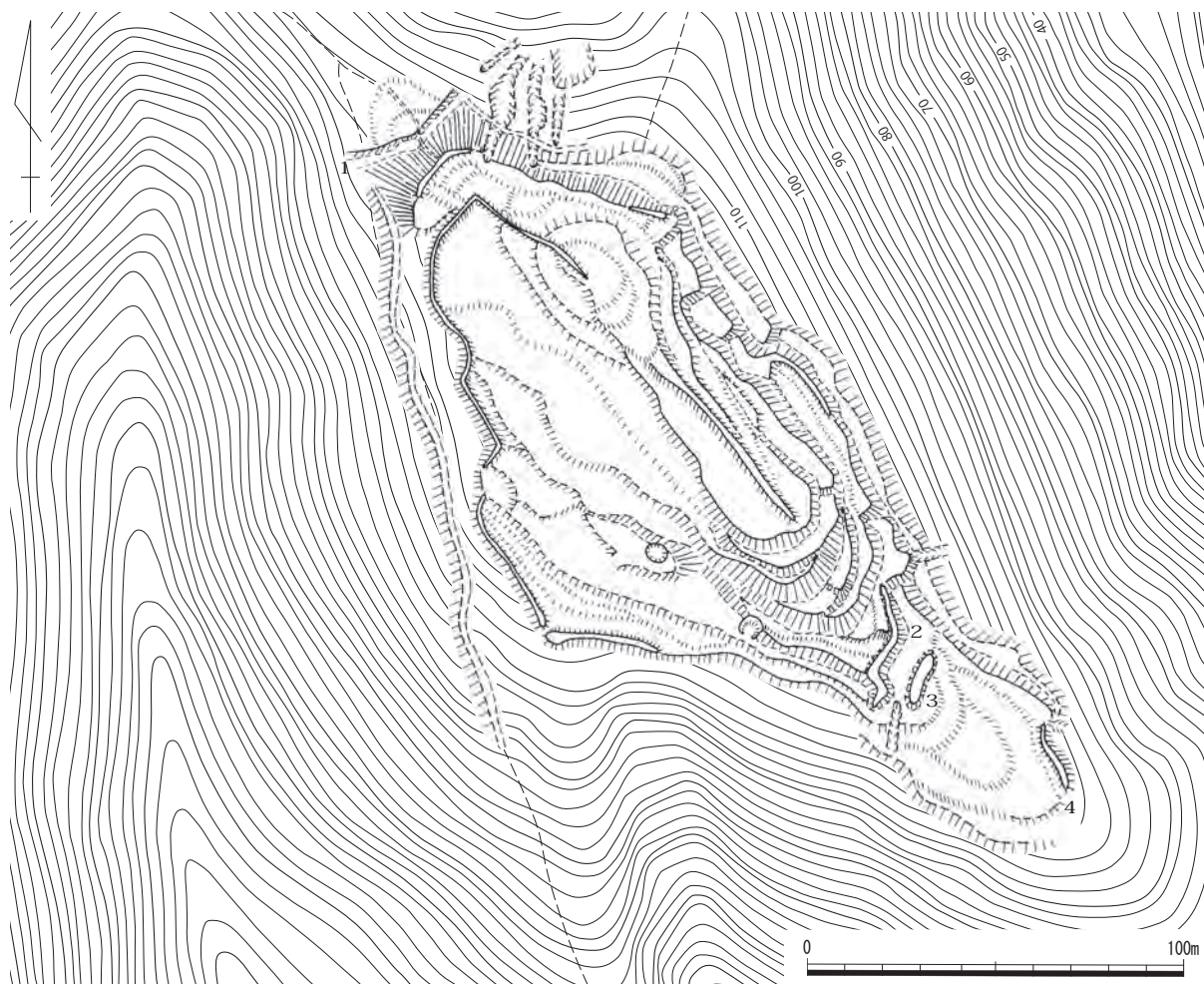
第 146 図 城ヶ辻城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 吉井川右岸の山塊の山頂部に位置する。

概要 山頂部に築かれた主郭は東側にやや緩やかに傾斜している。城域北西側には深さ約 4 m の堀切 1 が設けられ、その肩口には掻き上げによって築造されたとされる高さ約 50 cm の土塁が伴う。この周辺の切岸は高く急峻であり、また、性格は判然としないが、3～4 本程度の縦堀状の地形がみられる。一方、城域北東側では高さ 1～3 m の切岸をもつ小規模な帯曲輪が数面確認でき、一部に土塁状の高まりがみとれる。これらの帯曲輪は南西側にも巡っているが、切岸の高さは次第に低くなっている。城域南東側には横矢掛けが認められる高さ約 2 m の土塁 2 とそこから約 5 m 南東方向に高さ約 1 m の土塁 3 や縦堀を築き、さらに下方にも段状の平坦面や土塁 4 を設けている。

なお、尾根筋の一部に築かれている境界土手より南西側は、植林による後世の地形改変によって緩い傾斜をもつ段状を呈しており、その縁辺には南端部に出入口が伴う高さ約 50 cm の土塁が折れをもって巡る。また、この中央付近では石組み井戸が認められるが、時期不明である。

文献・伝承 近世地誌類には記載が認められないが、文明 15 (1483) 年の福岡合戦の松田元成の本陣跡とされ、「城ヶ辻城跡」などとともに重要な役割を担ったと思われる。(澤山)



第 147 図 吉井城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 175 主郭（北西から）



写真 176 北西側土塁（南東から）



写真 177 堀切1（北東から）



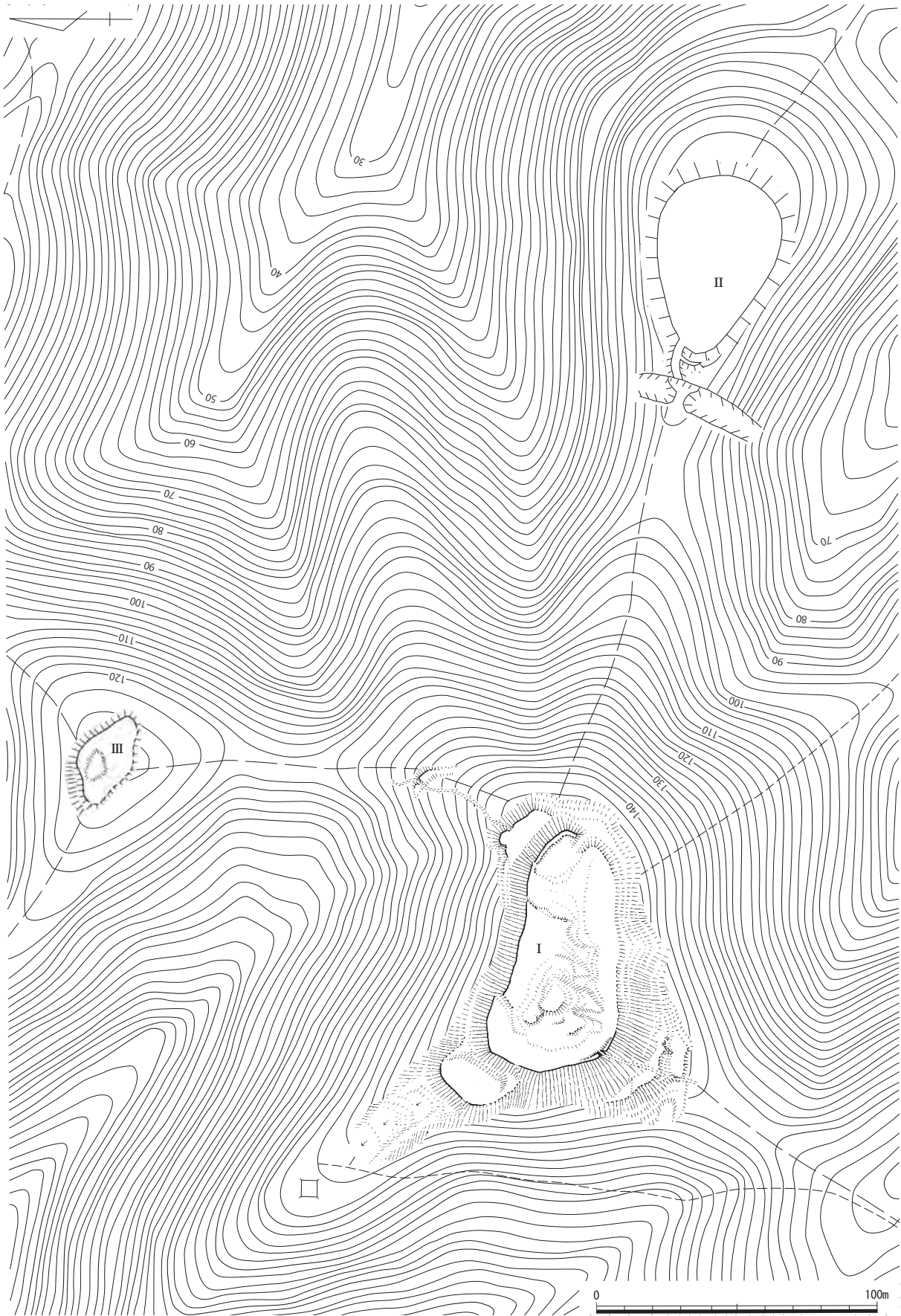
写真 178 土塁2（南東から）

191 おおひばたやま 大日幡山城跡ほか 岡山市東区浅川・内ヶ原・寺山・楯原 地図 17 右

立地 吉井川右岸に位置する大日幡山の山頂部に立地する。

概要 本城の主郭（曲輪群Ⅰ）の中央付近には、隅丸方形を呈する高さ約3mの土壇が認められ、その周囲には小規模で曲輪面の削平度が低い帯曲輪が確認できる。曲輪群Ⅰの南西側には虎口を伴う土塁が築かれ、下方にある小曲輪に向かって浅い凹みを呈する通路が延びている。一方、北東側には高さ約6mの切岸が造られた下方に、方形を呈する腰曲輪が築かれている。ここからさらに急峻な切岸が築かれ、東方には東出丸（曲輪Ⅱ）、北方には北出丸（曲輪Ⅲ）が設けられている。また、北西側にも高さ約6mの切岸が造られた下方に、やや広い腰曲輪が築かれている。さらに高さ約4mの切岸が造られた下方に、緩い傾斜をもつ平坦面が連続して連なる。ここから北西に延びる尾根部には、傾斜をもった平坦面が連続して認められた。なお、北辺にも一部に土塁状の高まりがみとれるが、判然としない。

曲輪Ⅱは平成7（1995）年度に岡山浄水場建設に伴う発掘調査が実施され、現況はタンク施設などが造られており、出丸自体は消滅している。曲輪は土坑や多数の柱穴が検出されており、主郭の西側では堀切・土塁・土橋などを確認している。遺物は土師器椀・皿、備前焼大甕、平瓦・丸瓦、砥石、鉄釘、永楽通宝などが出土している（文献202）。曲輪Ⅲは削平度が低い曲輪面であり、北側に高さ約50cm～1mの高まり（土壇）が確認できる。北側切岸は急峻であり、その下方には狭い平坦面がみられる。一方、南斜面は自然地形であり、明瞭な加工は認められず、主郭との間にも堀切はみられ



第 148 図 大日幡山城跡ほか縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良・文献 202 に加筆

ない。また、曲輪Ⅲから北西・東方向に延びる尾根部には明確な遺構は確認できなかった。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』では上道郡浅川村、『備陽国誌』・『撮要録』・『東備郡村誌』では上道郡栢原村に「火鉢ヶ城」または「火鉢山城」が存在し、城主不詳あるいは（島村）三河守観阿弥などが居城したと記す。『岡山県通史上編』では、上道郡御休村に所在する「火鉢山城」に赤松喜三郎、島村貫阿弥が居城したと記す。『改修赤磐郡誌』には山名俊豊の名がみられる。『日本城郭大系 13』では、文明 15（1483）年の福岡合戦に松田方の陣地となり、その後、浦上宗景に従う島村貫阿弥が在城したとある。これらは本城に比定される。城史は二次的史料であるが、『備前文明乱記』に記されている。
(澤山)



写真 179 曲輪群Ⅰ土壇付近（北東から）



写真 180 曲輪群Ⅰ（南西から）



写真 181 曲輪Ⅱ発掘調査状況（南西から）



写真 182 曲輪Ⅲ北側切岸（北東から）

立地 砂川の右岸に位置する山塊から北方向に延びる新庄山の山頂部に立地する。ここから約 1.5km 北東方向にある大日幡山の山頂部には、大日幡山城跡が築かれている。

概要 石鉄神社がある主郭は山頂部北端に築かれ、ここから南に延びる尾根に沿って腰曲輪を段状に配置し、主郭の西側には帯曲輪が巡る連郭式山城である。また、城域南端には幅約 10 m の堀切を伴っているが、この堀切は遊歩道整備のため造成により埋められており、深さなど詳細は不明である。なお、城跡南側の尾根鞍部で土師器の破片がまとまって出土する地点があるとされる。

文献・伝承 上道郡竹原村の城館として『備前記』・『備陽記』では新庄助之進が居城した「新庄古城山」、『備陽国誌』・『撮要録』では中山備中守、新庄助之進が居城した「新庄山城」または「新庄城」があり、『東備郡村誌』では新庄助之進が居城した城があると記載され、本城跡はこれらに比定される。

なお、『吉備温故秘録』では新庄助之進、中山備中、浦上宗景家臣、宇喜多直家、宇喜多直家家臣が居城した「新庄山城」があり、「奈良部の城」とする記載がある。このことは浦上宗景が戦功として宇喜多直家へ与えた「奈良部城」と同一であるとする拠り所と思われるが、史実の検討を要する。また、『岡山県通史上編』では、上道郡角山村竹原に新庄助之進が居城した「竹原城」とする記載がある。城史を示す一次史料（74・75）がある。

（澤山）



第 149 図 新庄山城跡縄張り図 (1/2,000)

作図：畑和良

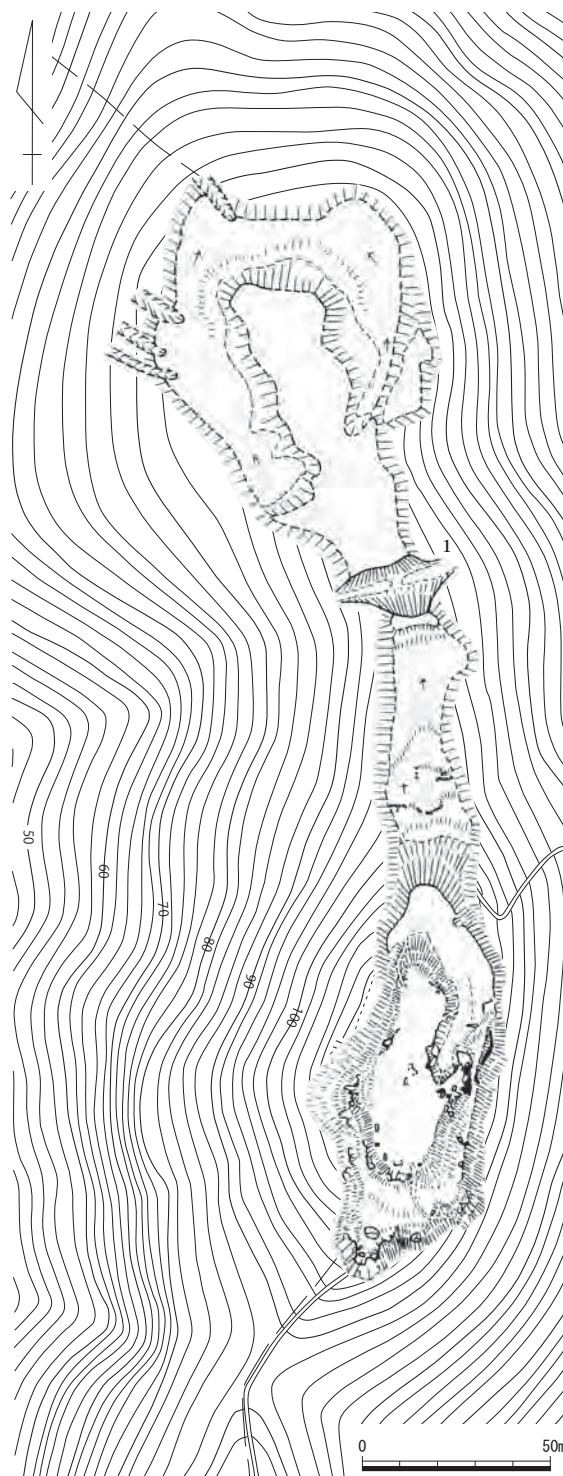
立地 操山山塊から北方向に延びる尾根頂部に位置する。

概要 主郭は自然地形に沿った南北に長い曲輪であり、北東側には巨石が組み合って虎口を想起させる採石跡がみられる。その斜面には、採石時に切り出されたと思われる残石を数段重ねた石積みが認められる。また、主郭南側の帯曲輪南端では急峻な崖状の地形が認められ、同所がかつて石切場跡であったことを表している。また、北側帯曲輪でも同様に大きく破碎した多くの残石が点在している。

一方、この主郭から北方向に延びる尾根には曲輪が段状に続くが、削平度は高くなく切岸もあまり明瞭でない。ただし、北端の曲輪との間には高さ約50cmの低い土塁状の高まりが伴う深さ約2～3mの堀切1が認められ、一応の防御施設を設けている。北端の曲輪は広い平坦地で、周囲に帯曲輪が伴うが削平度は低い。曲輪の切岸は場所により急峻であるが、総じて不明瞭であり、帯曲輪の切岸も同様である。なお、この帯曲輪の北西端には、数条の縦堀状の凹みが延びているが、自然地形の可能性が高い。

なお、主郭の南側帯曲輪から南方向の尾根頂部には深い谷が入り込み、堀切も想定されるが、判然としない。また、南方向の尾根頂部も細長い曲輪と想定されるが、自然地形と思われる。

文献・伝承 上道郡沢田村の城館として『備前記』は薬師寺弥五郎、中島大炊居城の「妙善寺ノ古城」、『備陽記』は薬師寺弥五郎、中島大炊居城の「妙善寺古城山跡」、『備陽国誌』は「妙善寺城」、『吉備前秘録』は「妙善寺城」、『吉備温故秘録』は根屋与七郎、薬師寺弥七郎居城の「明禅寺城」、『撮要録』は宇喜多和泉守直家居城の「古城跡」、『東備郡村誌』は根矢与七郎、薬師寺弥七郎居城の「明禅（妙善）寺城址」が認められ、本城跡はこれらに比定される。「妙善寺崩」の概要は『備陽国誌』に記載されている。城史を示す参考史料(31・32)がある。(澤山)



第150図 明禅寺城跡縄張り図(1/2,000)

第7節 邑久郡



- | | |
|-------------|-------------------|
| 196. 長船城跡 | 210. 向山城跡 |
| 197. 福岡奥之城跡 | 211. 乙子城跡 |
| 198. 丸山城跡 | 212. 長沼城跡 |
| 199. 智満城跡 | 213. 城島城跡 |
| 200. 堀城跡 | 214. 砥石城跡 |
| 201. 油杉城跡 | 215. 高取山城跡 |
| 202. 高松山城跡 | 216. 上山田城跡 |
| 203. 高山城跡 | 217. 茶屋城跡 |
| 204. 虫明城跡 | 218. 作州山城跡 |
| 205. 光明寺城跡 | 219. 名称未定 |
| 206. 今木城跡 | 220. 西大寺一宮育苗園公園遺跡 |
| 207. 尾張城跡 | 221. 大附城跡 |
| 208. 浜城跡 | 222. 朝日山城跡 |
| 209. 射越城跡 | 223. 佐井田城跡 |

第 151 図 邑久郡城館位置図

立地 吉井川左岸の平野部に位置する。

概要 後世の地形改変が著しいが、高い土塁が残存する居館跡であり、周囲の水田畦畔から大きく円弧を描く堀（河道）が存在したと推測される。

文献・伝承 邑久郡長船村は、『備前記』・『備陽記』では長船越中居城の「古城跡」、『和気絹』は長船左衛門尉兼光居城の「長船城」、『備陽国誌』は小笠原金光、長船長左衛門尉兼光居城の「古城山」、『吉備温故秘録』は長船長左衛門尉、長船右京亮、長船左京進居城の「古城」、『撮要録』は長船紀伊守居城の「築地城」があり、『東備郡村史』は小笠原金光、長船長左衛門尉兼光、長船右京亮、松田孫次郎が居城したとの記載がみられ、本城跡はこれらに比定される。同所は伝兼光屋敷跡とも呼ばれ、「城ノ内」・「築地」の字名を残す。（澤山）



第 152 図 長船城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 183 北側土塁（北西から）



写真 184 北側土塁（北から）



写真 185 西側円弧状畦畔（北東から）

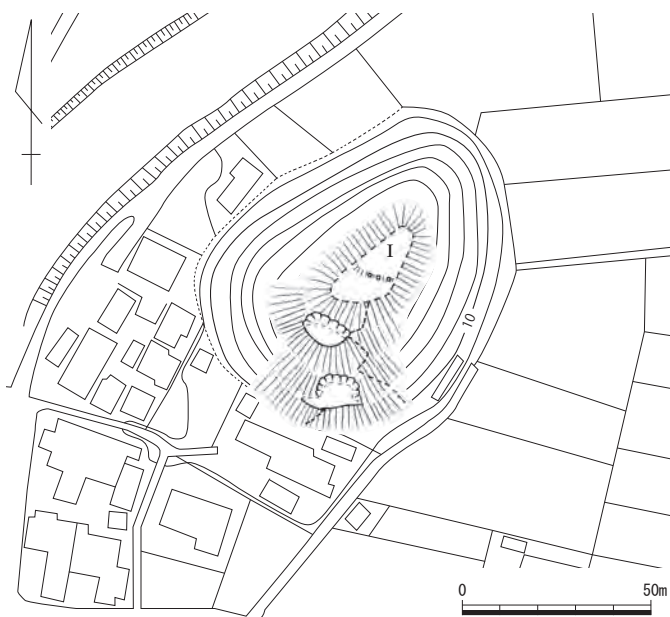


写真 186 西側土塁（西から）

立地 城は、吉井川に注ぐ千田川やその支流の油杉川などによって形成された平野の北側に所在する小丘陵上に立地する。約 1 km 北方には、福岡城跡が所在する。

概要 丘陵頂部に曲輪 I を造成するが、後世の改変によって切岸は不明瞭である。また、南側尾根筋に長軸約 10 m の半円を呈する平坦面が 2 面存在するが、小祠を祀っているものもあり、城に伴うものか確証はない。

文献・伝承 『吉備温故秘録』には、海佐介の後、虫明亦左衛門、虫明市左衛門、虫明攝津の三代が居城すると記載される。また、『改修赤磐郡誌』では、山名氏が備前守護であった頃に天野左亮、宇喜多氏が邑久郡を支配下に置いた後は虫明氏が居城したと記す。 (小嶋)

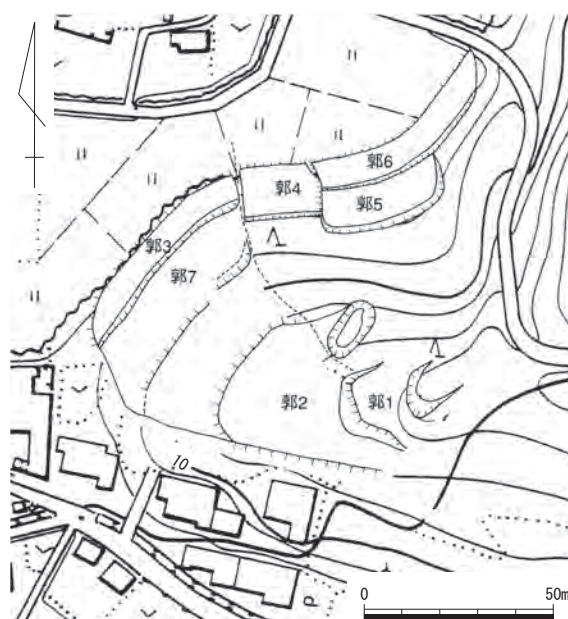


第 153 図 丸山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 吉井川左岸にある北東から南西方向に延びる山端部に位置する。

概要 山端部の奥部に主郭が築かれ、その西側に比高差約 2 m となる広い曲輪を配置し、さらに下段には地形に沿った細長い 5 か所の曲輪を確認した。それぞれの切岸は比較的急峻である。吉井川に近接しており、西方からの攻撃に対する防御の固めとしての機能を果たした城館と推測される。なお、主郭の東側にも加工段が認められるが、現代の地形改変の可能性が高いと判断した。

文献・伝承 近世地誌類には比定される城館跡は認められないが、『邑久町史考古編』では智間氏と関係するものと記す。また、『岡山市史第 2』では、ここから約 300 m 南東側に「知万屋敷跡」と伝わる場所があると記す。 (澤山)



第 154 図 智満城跡縄張り図 (1/2,000)

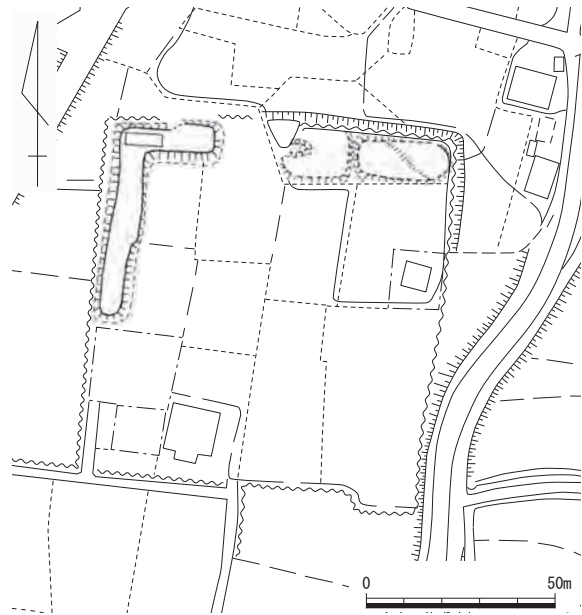
文献 38 に一部加筆

立地 磯上川右岸の近接する平地に立地する。

概要 約 90 m 四方の規模をもつ居館跡であり、北・東・西辺には土塁が残存している。特に西辺土塁は残存状況が良好であり、現状で幅 7～8 m、高さ約 2 m を測る。

また、築城当時は周囲を巡る堀が存在していたと推測され、北辺には土橋が取り付けいていた可能性がある。

文献・伝承 『吉備前鑑』に記載された島村観阿弥が居城した邑久郡磯上村の「屋舗跡」に本城跡は比定される。(澤山)



第 155 図 堀城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 187 西側土塁 (北から)



写真 188 北側土塁 (西から)



写真 189 北側土塁頂部高まり (東から)



写真 190 東側土塁痕跡 (南から)

立地 稗田池の西方に位置する独立丘陵の頂部に立地する。

概要 単郭式の山城であり、主郭の周囲には帯曲輪と小曲輪を配置するが、これらに伴う土塁や堀切はみられない。一方、主郭の北側縁辺には時期不明の低い石積みが見られるが、性格は判然としない。

なお、主郭南側には直径 8.5 m を測る横穴式石室を主体部とする城山古墳が所在しているが、墳丘は大きく削平を受けて平坦面を形成している。

文献・伝承 『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』に記載された邑久郡磯上村に所在する城主不詳の「古城山」または「城墟」に本城跡は比定される。(澤山)

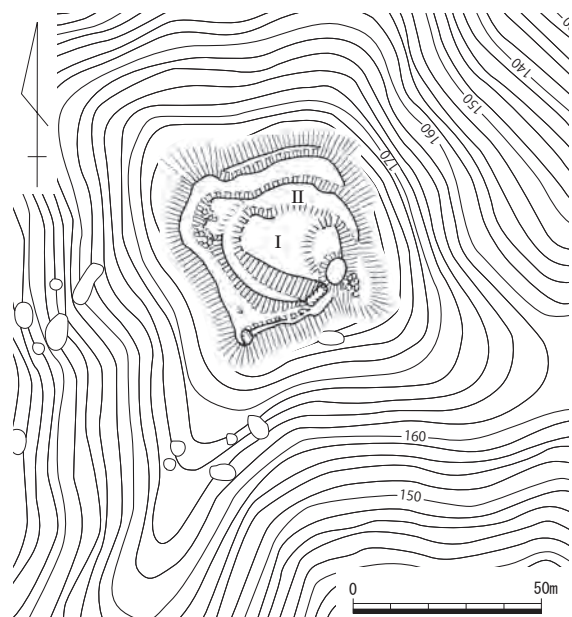


第 156 図 油杉城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、標高約 180 m の高山山頂に立地する。千町平野やこの平野の南を画する山塊に所在する砥石城跡を西方に望み、備前市鶴海から千町平野に至る往還を北方に見下ろす。

概要 東辺に約 1 m の檜台状の高まりがある曲輪 I 周囲に、2 重の帯曲輪を配した輪郭式の城である。曲輪 I 南辺には約 1.5 m の切岸が認められるが、北辺には自然地形を残す。城域の南東辺には、高さ約 50cm の土塁を設けて守りを固める。尾根続きの東辺は、地山中の巨石を利用した非常に急峻な切岸を設けている。曲輪 II には、その北西側に露岩を利用して築いた突出部が存在する。南西に派生している尾根上に広い平坦地が認められるが、加工痕跡は確認されない。この平坦地に至る斜面は、巨石が露出した急斜な地形となっている。

文献・伝承 『備陽国誌』では、鳥山左馬充を城主と記述する。(小嶋)

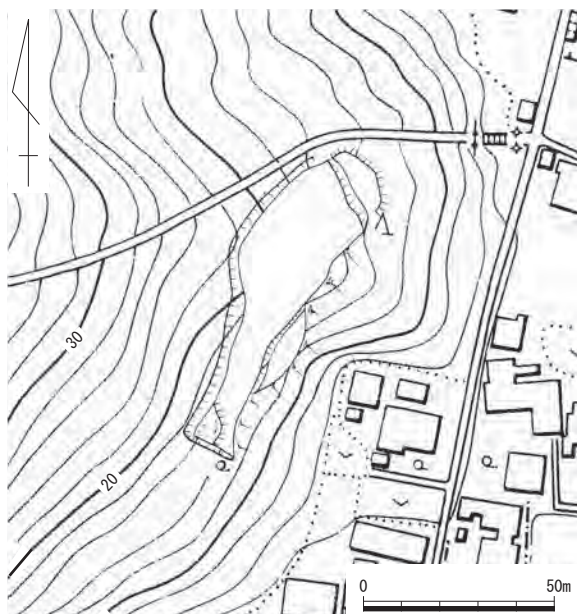


第 157 図 高山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 千田川左岸にある山塊東側の端部に位置する。

概要 単郭式の山城であると思われ、長さ 80 m、最大幅 20 数 m を測る。ただし、土塁や堀切は認められず、近世地誌類に記された陸や過去の現地調査で若干残存しているとする石垣も確認できなかった。また、ここから北東方向に延びる尾根部の広い平坦面も合わせて踏査したが、人為的な加工痕跡は認められなかった。いずれにしても築城当時の状況が判然としない。

文献・伝承 邑久郡大富村の城館として、『吉備前秘録』では大富太郎幸範が居城した「光明本城」、『吉備温故秘録』では大富大師幸範が居城した「光明寺城」があり、『東備郡村誌』では大富太郎幸範が居城したとの記載が認められる、いずれもこの城跡に比定されると思われる。(澤山)

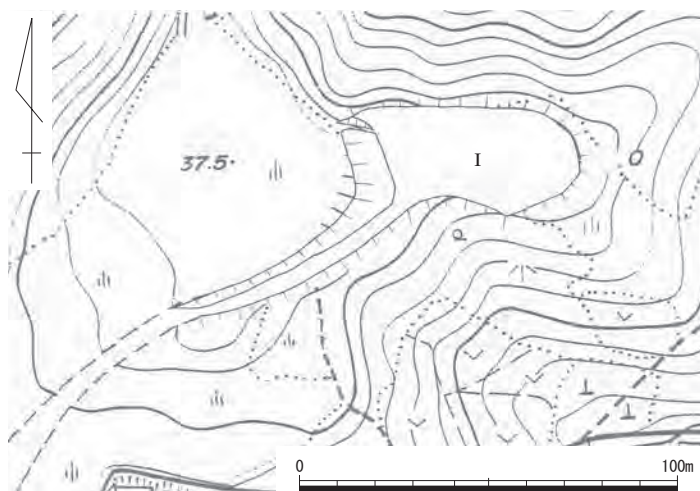


第 158 図 光明寺城跡縄張り図 (1/2,000)
文献 38 に一部加筆

立地 城は、千町平野の西端を画する南北に長い低丘陵上に所在している。東方への眺望に優れており、千町平野を眼下に一望する。

概要 主郭が所在していたと想定される丘陵頂部は、近年に大規模な削平を受け、城館遺構の様相が不明である。また、曲輪 I の西端やこの曲輪の南西端部から西へ延びる犬走り状の平坦面もこの削平排土に覆われており、本来の姿を失っている。

文献・伝承 『東備郡村誌』には今木太郎範秀、今木次郎範仲を城主と記す。なお「今木城」と名付けられた城の所在地は、近世の地誌類や絵図、さらに各自治体史でも異なっている。今回は『邑久町史考古編』に従いこの城跡を「今木城」としたが、今後の研究によっては別の場所が「今木城」跡となるかもしれない。(小嶋)



第 159 図 今木城跡縄張り図 (1/2,000)
文献 38 に一部加筆

立地 吉井川の東側に広がる平地に立地する。

概要 堀跡の可能性のある水路が認められるが、宅地化の進行により縄張りは判然としない。ただし、周囲より約5m高い場所に所在する城稲荷神社の周囲には、「城ノ内」・「城廻り」・「居屋敷」といった城館関連地名が認められ、この周辺に平面形が方形を呈する居館址が存在した可能性が考えられる。

また、この範囲の南側には「堀ノ内」、西側には「堀内」・「堀」・「川角」・「堀西」といった字名がみられ、主郭周辺を取り囲んでいた堀を想定できる。一方、この範囲の東側には「保止」・「保止前」・「保止東」・「居屋敷」といった字名がみられる。『邑久町史考古編』によれば、「保止」は古代～中世の所領単位の「保」を管理した責任者「司」である「保司」に関わると推測している。

文献・伝承 邑久郡尾張村の城館として、『備陽記』は城主不詳の「古城跡」、『備陽国誌』・『撮要録』・『東備郡村誌』は鷲見越中が居城した「古城」または「古城跡」・「城蹟」、『吉備温故秘録』は鷲見越中、長瀬七郎が居城した「古城」などが記され、本城跡はこれらに比定される。(澤山)



写真 191 城稲荷神社 (南東から)



第 160 図 尾張城跡縄張り図 (1/3,000) 文献 38 に一部加筆

立地 吉井川左岸の独立した山塊頂部に立地し、南方に児島湾・児島半島を望む。

概要 山塊西側頂部の主郭とその南東方向に段状に築かれた腰曲輪4面で構成されている。また、それぞれの腰曲輪には高さ約2～3mの切岸が伴う。このうち上から2段目の腰曲輪南端の肩部には、約1m大の自然石を用いた石列が認められる。ただし、これらは高石垣のようなものではなく、土留めの役割を果たしたと思われる。土塁の痕跡は主郭・腰曲輪ともに確認できなかった。

一方、この山塊西側頂部から南側に広がる谷部には墓地造成や畑の開墾が、山塊の東側頂部には乙子神社の造営が行われており、築城当時の縄張りの状況が判然としなかった。なお、立地から海城の可能性も考えられ、児島郡の小串城に長らく対峙していたと推測される。

文献・伝承 邑久郡乙子村に所在した宇喜多氏の城館として、『備前記』は直家の「乙子古城山」、『和気絹』は興家・直家の「乙子城」、『備陽記』は直家の「乙子古城山跡」、『備陽国誌』は興家の「古城」、『吉備前秘録』は能家の「乙子城」、『吉備前鑑』は直家の「古城山」、『吉備温故秘録』は直家・忠家の「音湖城」、『撮要録』は直家の「古城跡」、『東備郡村誌』は直家・忠家の城跡との記載がある。本城跡はこれらに比定される。城史を示す参考史料(24)がある。(澤山)

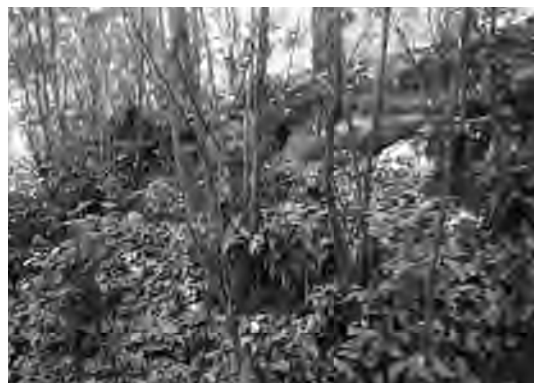


写真 192 腰曲輪2段目先端石列(南から)

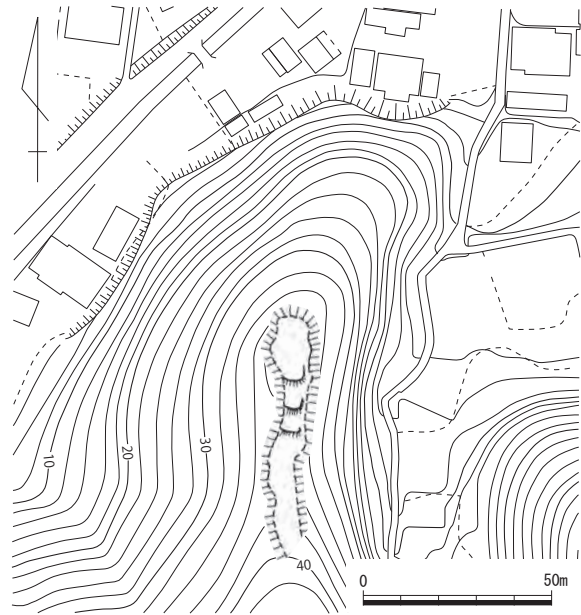


第 161 図 乙子城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 砥石城跡や高取山城跡が所在する山塊から北側に延びる尾根端部に位置する。

概要 尾根の先端部に主郭が築かれ、その南側にやや急峻な切崖をもつ2面の腰曲輪が認められる。その周囲や南下方にも平坦面がみられるが、後世の墓地造成によるものと考えられる。その規模から砦程度の城跡と思われる。

文献・伝承 邑久郡長沼村には『備前記』・『備陽記』に宇喜多勘兵衛が居城した「古城山」が、『吉備温故秘録』に宇喜多管（勘）兵衛が居城した「高尾城」が、また『岡山県通史上編』には邑久郡豊原村長沼に和田範長の第二子の今木高久や宇喜多勘兵衛が居城した「長沼古城」が所在したとされる。ただし、この城館跡の検討には、同一山塊に位置する「砥石城跡」や「高取山城跡」の関係性を整理が必要である。(澤山)

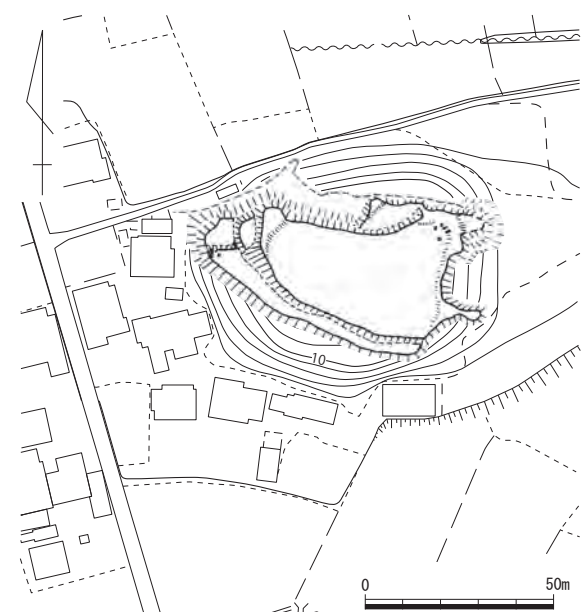


第 162 図 長沼城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 独立した丘陵の頂部に位置する。

概要 頂部を中心にほぼ平坦で広い主郭と南側に帯曲輪、北側に腰曲輪が配置されている。また、西端では主郭と帯曲輪の間に小曲輪が認められる。現状では主な防御施設は認められないが、丘陵の麓付近の海拔が 0 m 前後を示すことから、当時は周りを海で囲まれた海城の可能性が考えられる。

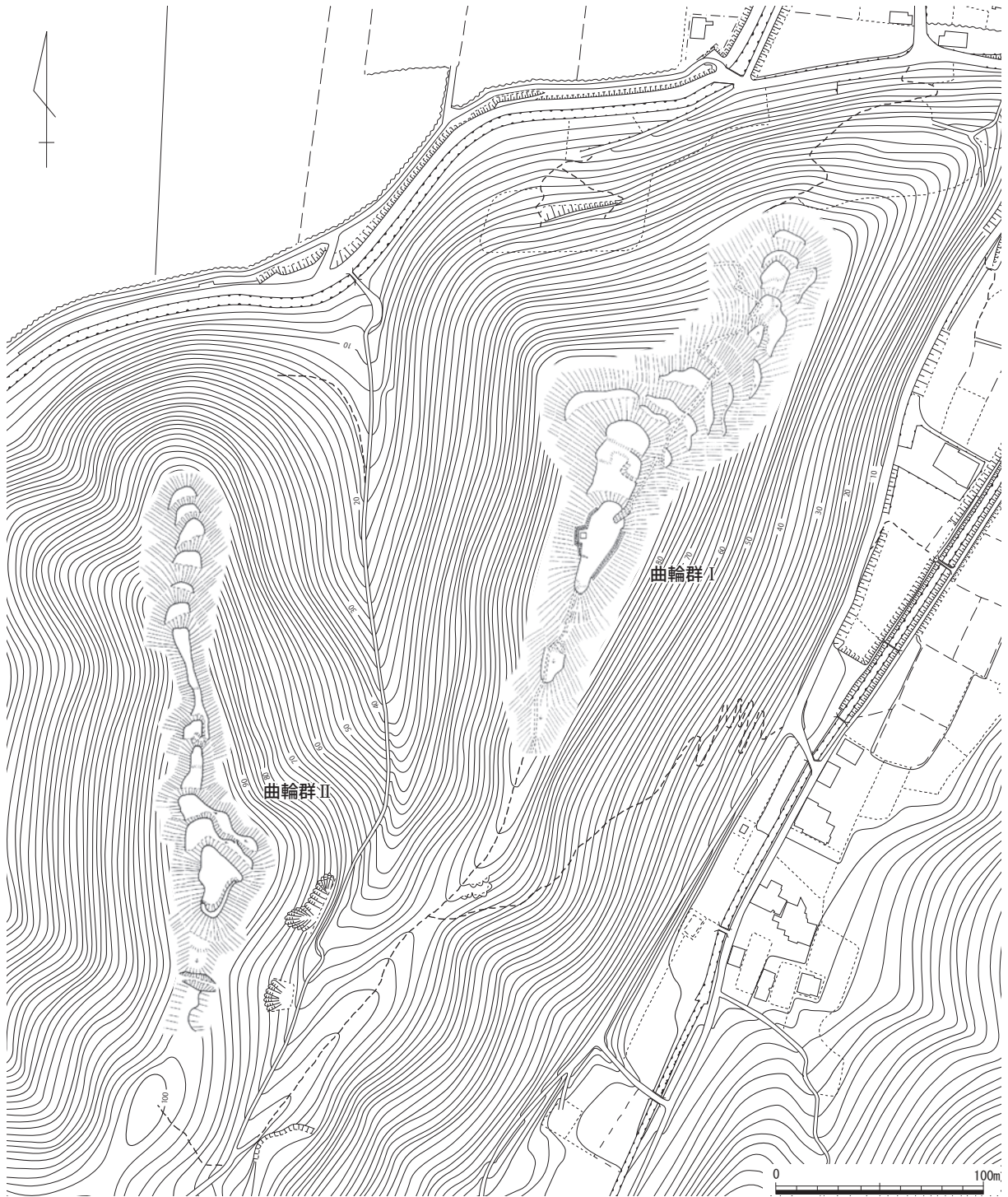
文献・伝承 『吉備温故秘録』では、邑久郡邑久郷村に城主不詳の「城島」が、『撮要録』で、邑久郡邑久郷村城島に宇喜多氏が居城した「古城跡」があると記す。本城跡はこれらに比定される。同城が「幸島」を指すならば、城史を示す一次史料 (170～172) がある。(澤山)



第 163 図 城島城跡縄張り図 (1/2,000)

214 ^{といし}砥石城跡 瀬戸内市邑久町豊原・邑久町東谷 <市指定史跡> 地図 20 右

立地 城は、千町平野の南を画する山塊の北に張り出した2つの尾根に立地する。千町平野を取り囲むように所在する城を一望し、さらに北に目を向けると福岡城跡まで視認する。



第 164 図 砥石城跡縄張り図 (1/3,000)

概要 標高 100 m の砥石山に曲輪群 I を、深い谷を挟んだ西方の尾根筋に曲輪群 II を構えた城である。従来、曲輪群 I は砥石城、曲輪群 II は砥石城出丸ないしは出城と呼ばれていた。

曲輪群 I は、西辺中央部が突出した略長方形の曲輪 I を頂部に造成し、主郭とする。この曲輪の東西両辺には、石垣が築かれている。西辺の石垣は、突出部及びそれより北側の石垣が切石積みで、突出部より南側の石垣が野面積みで構築されている。前者は山頂に祀られた金毘羅宮に伴うものと想定されるが、後者の築造時期は不明である。東辺の石垣は現代に改修されたものであるが、『日本城郭大系 13』に掲載された改修前の写真には、西辺南側と同様な野面積みの石垣が写っている。曲輪 I の北側には、高さ約 7 m の切岸を備えた曲輪 II を配し、それを取り巻くように曲輪 III・IV を設け、さらに下方には小曲輪を含みながら連続して曲輪を築き守りを固める。一方、曲輪 I の南側、笠松明現宮へと至る尾根続きは、地山中の巨石を切岸に取り込んだ曲輪 V を配したのみで、その他の防御施設は認められない。ただし、この尾根続きは幅が狭く、その東西両側は急崖である。

曲輪群 II は、尾根筋最高所に東辺から南辺にかけて高さ約 1 m、幅約 2 m の土塁を築いた曲輪 I を配する。曲輪 I 北辺の切岸は高さ約 2 m、南辺の切岸は高さ約 6 m を測る。曲輪 I の北側を取り巻くように曲輪 II・III を築く。曲輪 III から北に向かって延びる幅約 2 m の尾根筋にも曲輪 IV～曲輪 VI が設けられ、さらにこれらから北に下る尾根筋にも 2～5 m の切岸を備えた 6 面の腰曲輪を配しており、北方への防御意識の高さがうかがえる。一方、曲輪 I から笠松明現宮へと至る尾根続きには、自然地形の平坦面南側に開削された幅約 8 m、深さ 2 m 弱の堀切のみであり、尾根鞍部平坦面を狭くするようにその東側を深さ 1 m 程度掘削していた痕跡は、城館に関連するものか判然としない。

なお、笠松明現宮から北東へやや下った場所に現在も水をたたえる井戸があるものの、往事に存在していたのか不明である。

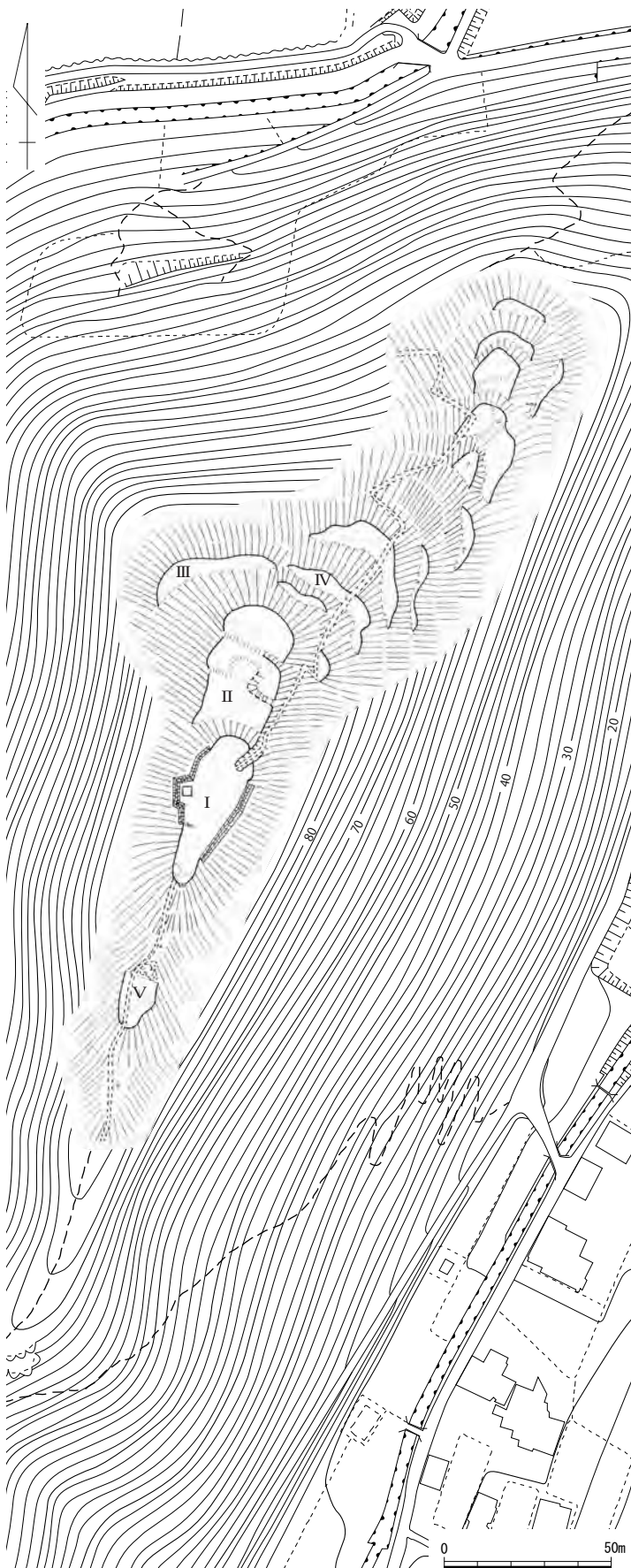
文献・伝承 宇喜多能家・興家・直家の居城として近世地誌類や軍記物に頻出するが、管見の限り同時代史料でその在城は確認できない。史料に現れる最初の城主は浦上則国で、『蔗軒日録』には、福岡合戦から 1 年後の文明 17 (1485) 年に起こった山名・松田氏と赤松・浦上氏の争いに際して、赤松・浦上氏方に与した則国が砥石城で討ち死にしたと記載される (一次史料 29)。その後、天文 (1532～1555) 末頃に宇喜多大和守が城主であったことが『馬場家記』より判明している。『馬場家記』には、浦上政宗と宗景の争いに際して、兄政宗方に付いていた大和守を、弟宗景は宇喜多直家に命じて攻撃させ、弘治 2 (1556) 年頃に大和守を滅ぼしたとされる (参考史料 23・24・26・27)。 (小嶋)



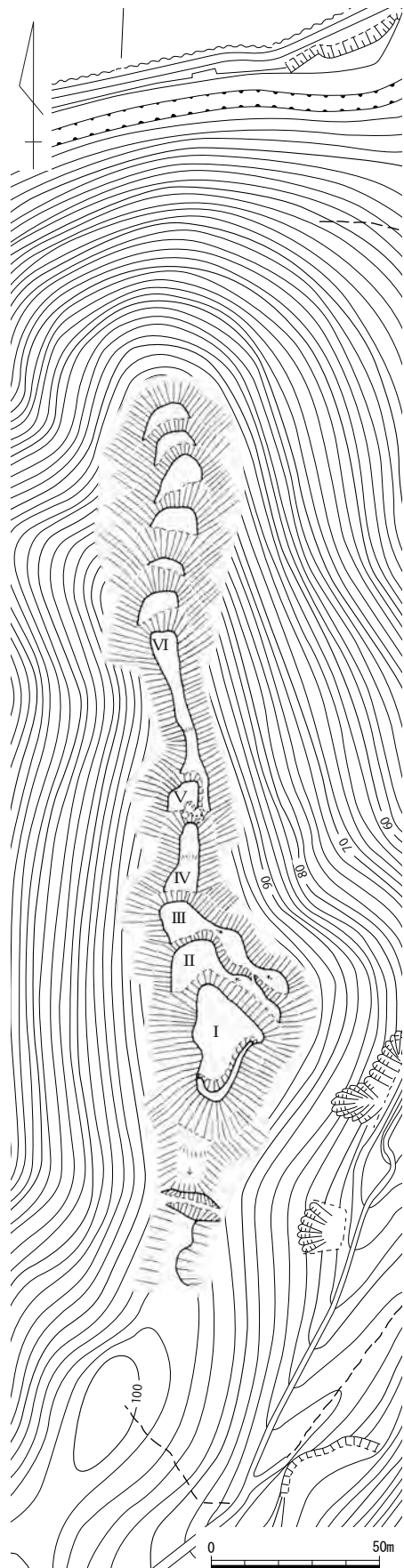
写真 193 遠景 (北西から)



写真 194 砥石城跡から千町平野を望む (南から)



第 165 図 曲輪群 I 縄張り図 (1/2,000)

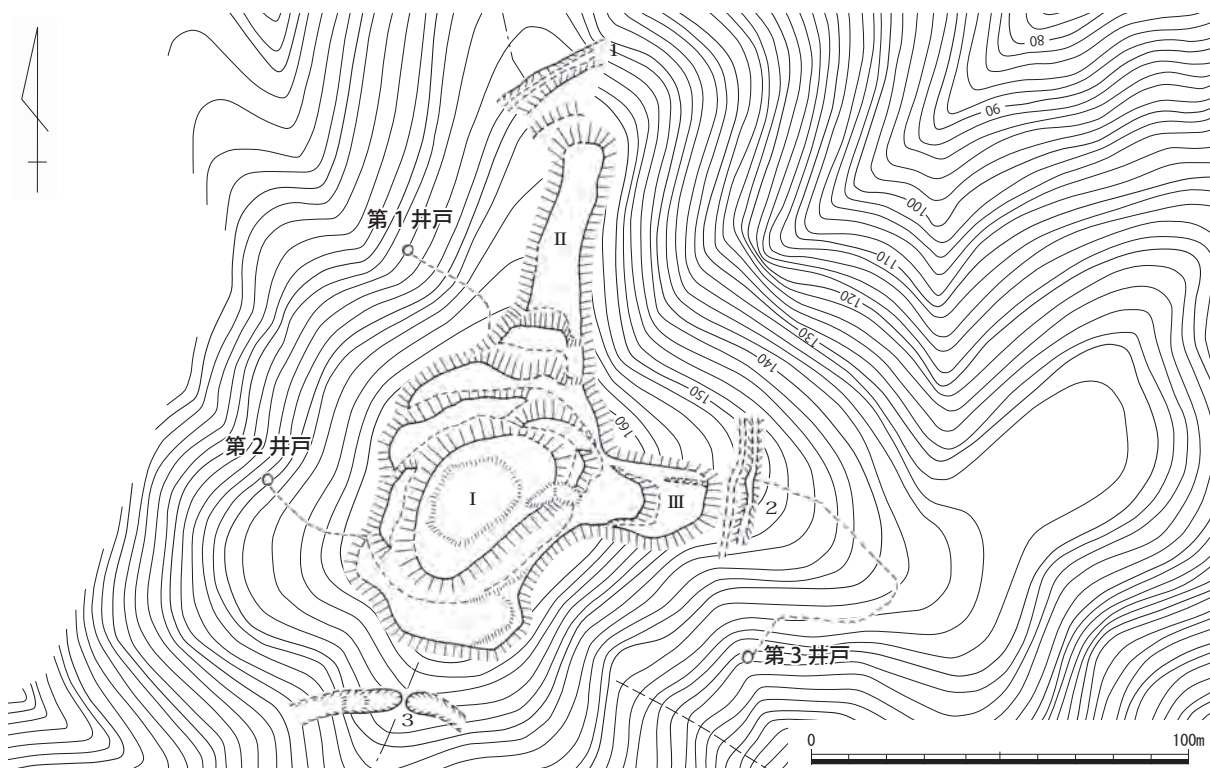


第 166 図 曲輪群 II
縄張り図 (1/2,000)

立地 岡山市と瀬戸町の市境に立地し、千町川左岸に立地する山塊から北方向に延びる尾根頂部に位置する。また、約1km東方の山頂部には砥石城跡が築かれている。

概要 「本丸」と呼ばれる曲輪Ⅰの主郭は不整な楕円形を呈し、中央部には低い土壇状の高まりを有する。その南半には帯曲輪が巡り、北側には自然地形に沿って築かれた4面の腰曲輪が認められる。「二の丸」と呼ばれる曲輪Ⅱは、曲輪Ⅰから北方向に延びる主尾根に沿って築いており、長方形を呈する。また、「三の丸」と呼ばれる曲輪Ⅲは、曲輪Ⅰから東方向に延びる支尾根に配置している。山腹には3基の井戸が認められる。また、曲輪Ⅱの北側と曲輪Ⅲの東側には、深さ約4mを測る堀切1・2を設けており、切岸も急峻である。一方、曲輪Ⅰの南側にも堀切3がみられるが、規模・構造ともに前2者と比べて防御性は劣る。

文献・伝承 ここでは『日本城郭大系 13』・『邑久郡史考古編』に従い、同城を「高取山城」として扱った。しかし、『和気絹』や『備陽国誌』にある「砥石城三丁計西の山也。高取備中守居城、高山共云ふ。後に浦上の老臣島村観阿弥、是に居す。」の記述に従うと、「高取山城」は本書の「砥石城」の曲輪群Ⅱに比定できる。一方、『東備郡村誌』には邑久郡長沼村の東谷の東側に高取備中、島村豊後入道観阿弥、島村弾正貴則、宇喜多勘兵衛が居城した「高尾城」あるいは「高取山」・「高山」が所在とあり、これにしたがえば、本城は「高尾山城」と称したことになる。さらに『岡山県通史上編』では、邑久郡豊原村長沼に高取備中、島村豊後守、島村弾正左衛門貴則の「高取山城」、島村豊後の「高尾（雄）城」、今木高久、宇喜多勘兵衛の「長沼古城」が所在とある。本城の名称や位置の比定には、こうした問題点をもっている。
(澤山)



第167図 高取山城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 195 曲輪 I (北から)



写真 196 曲輪 II 堀切 (南西から)



写真 197 曲輪 III 堀切 (南から)



写真 198 第 2 井戸 (南東から)

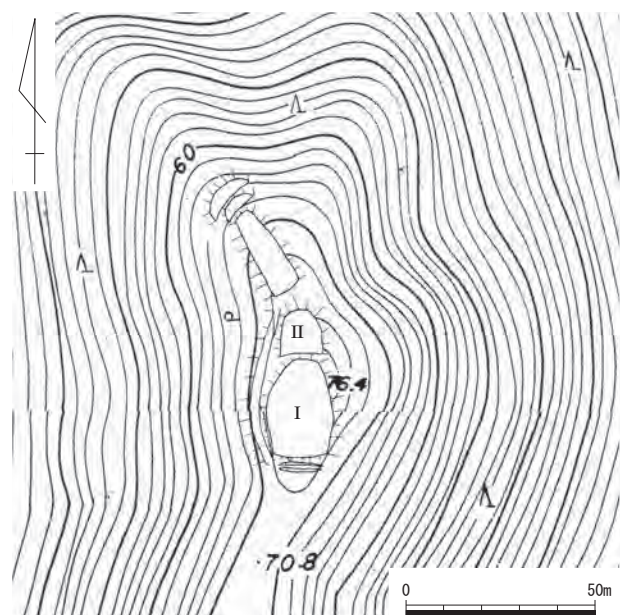
216 かみやまだ 上山田城跡 瀬戸内市邑久町上山田

地図 20 右

立地 城は、城山という小字が付けられた標高 70 m の尾根先端頂部に所在し、千町平野の南東端から続く狭長な平野部を南から見下ろす。この尾根の北麓には、千町平野の東端から岡山市東区下阿知へと至る往還と、瀬戸内市牛窓町牛窓へと続く往還が合流しており、交通の要衝を足下に控えた城といえる。

概要 切岸が明瞭でない胴張り形の曲輪 I を頂部に配し、その南側尾根続きに浅く狭い堀切を開削し城域を画している。曲輪 I から北側に延びる尾根筋には、数面の曲輪を設けて守りを固める。曲輪 I・II の西側に、犬走り状の平坦面が認められる。

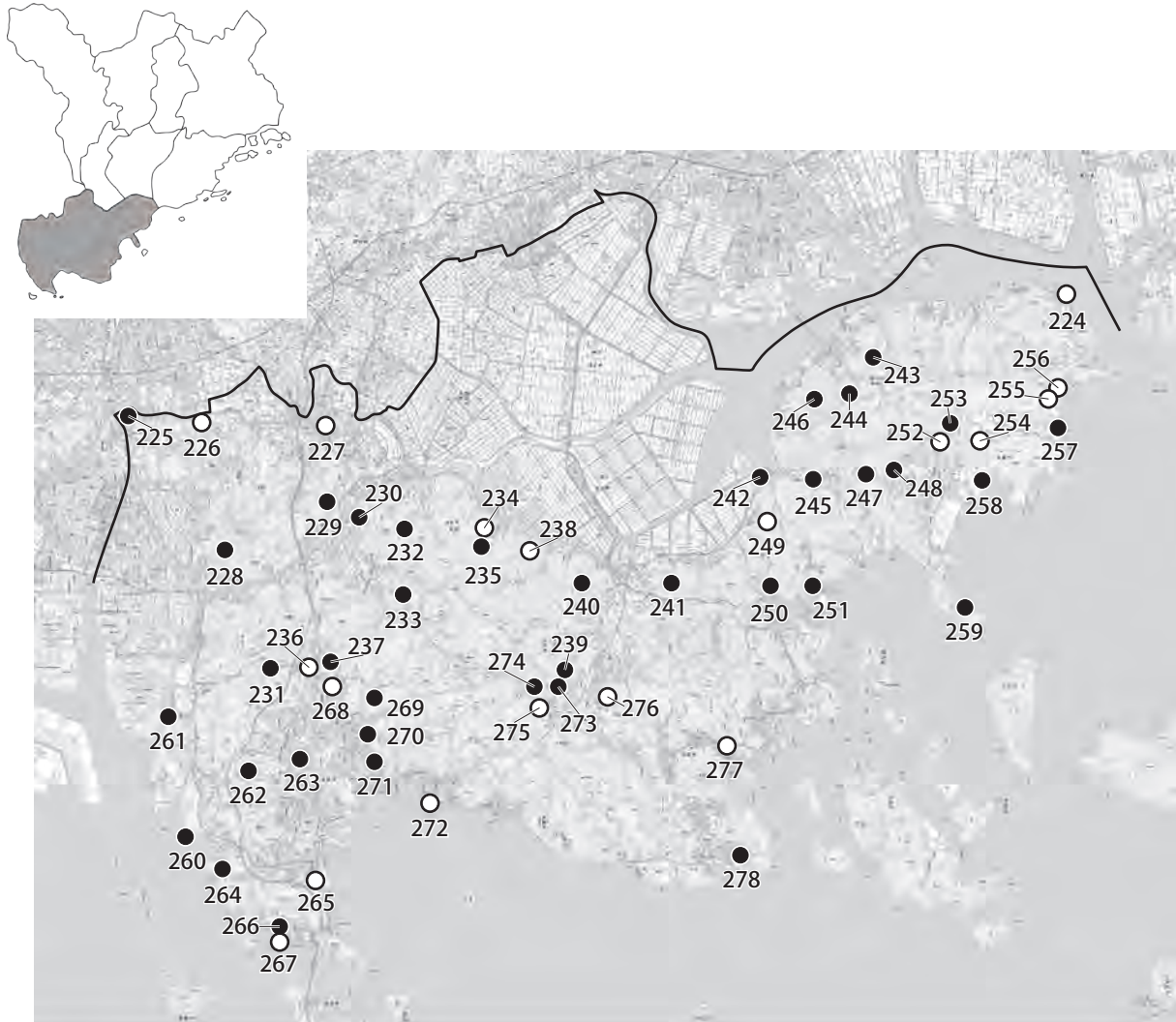
文献・伝承 近世地誌類で上山田村に所在する古城山とのみ記載されている城で、城主名も伝わっていない。(小嶋)



第 168 図 上山田城跡縄張り図 (1/2,000)

文献 38 に一部加筆

第8節 児島郡

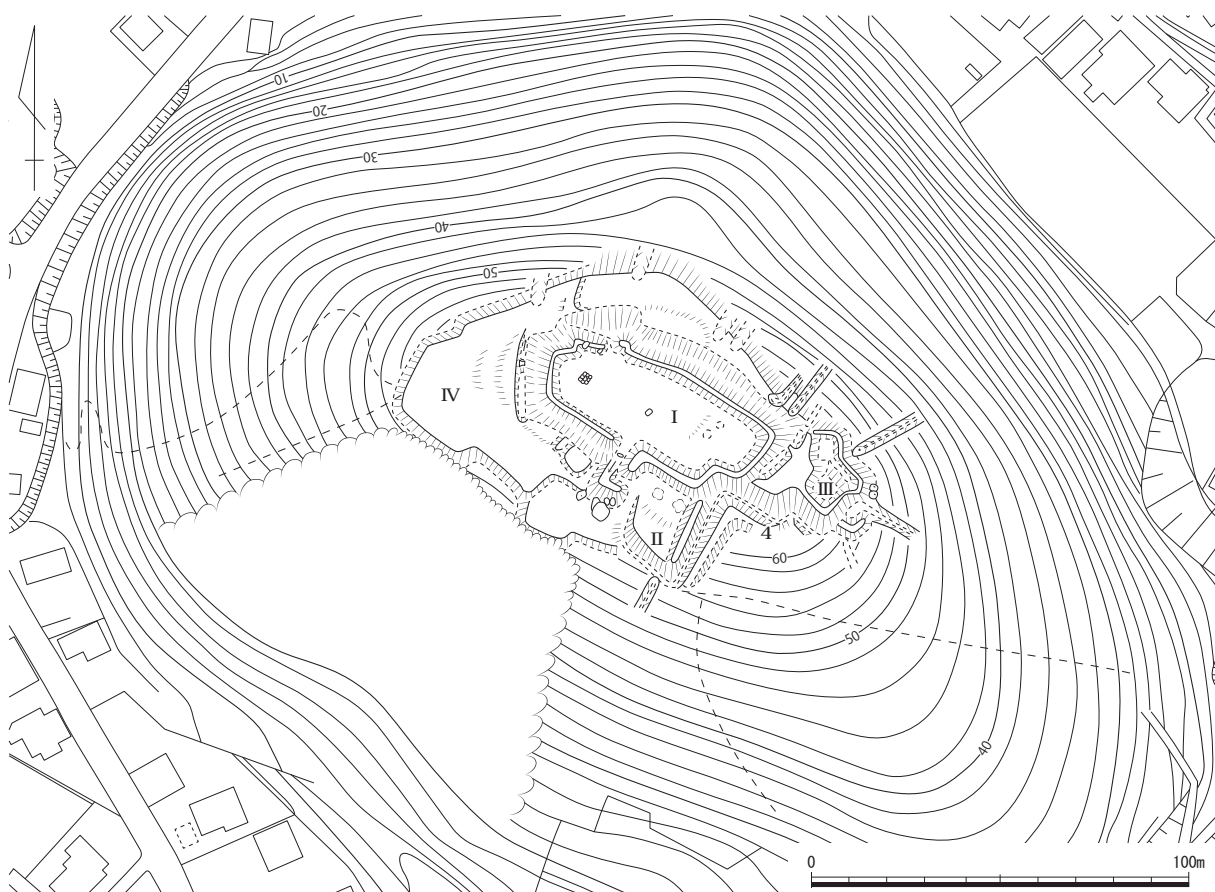


- | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|------------|
| 224. 小串城跡 | 236. 稗田土井ノ鼻城跡 | 248. 西田井地城跡 | 260. 宮の鼻城跡 | 272. 向山城跡 |
| 225. 黒山城跡 | 237. 暇城跡 | 249. 楠城跡 | 261. 本太城跡 | 273. 鍛冶山城跡 |
| 226. 城い山城跡 | 238. 迫川城跡 | 250. 駿河山城跡 | 262. 神水城跡 | 274. 寺上山城跡 |
| 227. 桜山城跡 | 239. 滝城跡 | 251. 見能城跡 | 263. 小川城の辻城跡 | 275. 滝の古城跡 |
| 228. 川越山城跡 | 240. 常山城跡 | 252. 屋敷山城跡 | 264. 湊山城跡 | 276. 鬼味城跡 |
| 229. 鼻高山城跡 | 241. 麦飯山城跡 | 253. 高島城跡 | 265. 城山城跡 | 277. 玉城跡 |
| 230. 福岡山城跡 | 242. 両児山城跡 | 254. 梶岡城跡 | 266. 下津井城跡 | 278. 向日比城跡 |
| 231. 稗田城跡 | 243. 高山城跡 | 255. 杭原遺跡 | 267. 古下津井城跡 | |
| 232. とんきり城跡 | 244. 古城山城跡 | 256. 相引城跡 | 268. 稗田城ノ辻城跡 | |
| 233. 戸山城跡 | 245. 丸山城跡 | 257. 番田城跡 | 269. 岩山城跡 | |
| 234. 丸山城跡 | 246. 怒塚城跡 | 258. 胸上城跡 | 270. 内田城ノ辻城跡 | |
| 235. 片岡城跡 | 247. 砂山城跡 | 259. 丸山城跡 | 271. 熊城山城跡 | |

第169図 児島郡城館位置図

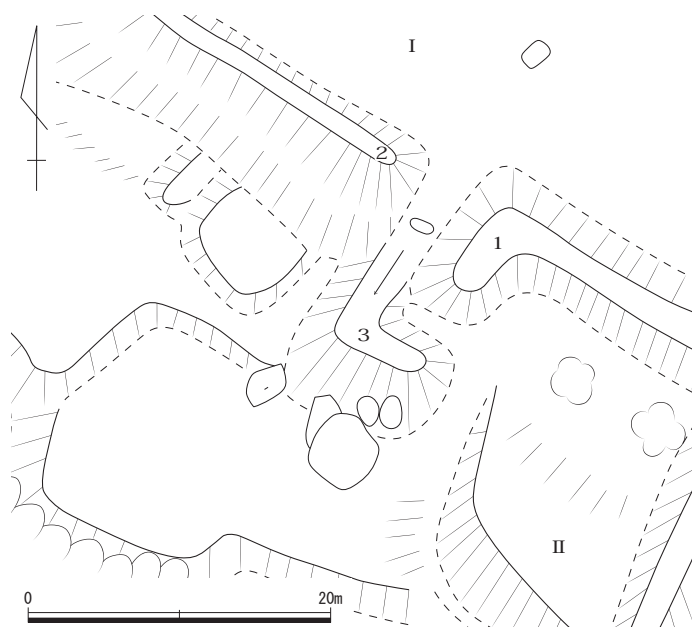
立地 倉敷市福田町浦田にある通称「城山」の山塊頂部に位置する。この地点は児島半島の最北西部に突き出た箇所である。現在、周辺は宅地化が進み現況から推し量ることは難しいが、児島半島は戦国、安土桃山時代にはいまだ独立した島嶼部であった。よって本城は城の東側のみが陸続きとなり、北から西・南部にかけては吉備の穴海と瀬戸内海に囲まれた、海城の観を呈していたと思われる。城からみて西にあたる連島は備中国浅口郡に属しており、備前国児島郡の最北西部にあたる本城は、まさしく境目の城として機能していたものとみられる。また、城からは北～北東側の眺望に優れ、阿知（旧高梁川河口地帯）・早島・天城方面を監視する上で、要衝にあたっている。

概要 本城は南西部に土取りに伴う損壊が一部認められるものの、その保存状態は良い。城域は南北100 m、東西140 mを測る中規模城郭ながら、この城には中世山城に設けられるあらゆる遺構を駆使した、技巧的な縄張りを認めることができる。主郭Ⅰを最高所に配し、周囲には高さ約2 mの土塁がほぼ全周している。土塁は単に主郭を防御するのではなく、北西及び南東で入隅となっており、さらに下の切岸及び横堀底もこれに呼応するように折れをみせており、横矢を掛けることができる。また、東側の土塁下には小さな堀切を設けることで、侵入者の足止めとして機能していたものとみられる。また主郭の北東端と、南側には2か所の虎口が認められ、いずれも喰い違い虎口となっている。北東側の虎口は一折れして城内に侵入する構造であるが、南側の虎口は2折れして侵入するものと



第 170 図 黒山城跡縄張り図 (1/2,000)

なっている。ここでその詳細について述べると、南東から延びる土塁1が、虎口部分を境に南西方向へ折れる。土塁への受け部分には土塁2が築かれている。虎口からは南西方向に向かって土塁3が続くが、その先端は、南東方向に90度折れをみせる。したがって、先程の土塁1との間で横矢が掛かる構造となっている。現状、土塁部分が高まっているため判然とはしないが、従来はこの部分が主郭から突出した外柵形空間であった可能性も指摘できる。加えていうならば、武者溜まりとも思える曲輪Ⅱが虎口南西部に併設されていることから、防御だけでなく、出撃施設として想定されていた可能性がある。



第171図 黒山城跡虎口周辺拡大図 (1/500)

さて、主郭Ⅰの東に位置する曲輪Ⅲは、周囲を扇形に累線を描く土塁により囲まれている。この扇形の折れ部分に呼応するように縦堀が掘削されており、横矢が掛かる構造となっている。さらに、城域最東部へ延びる縦堀先端は「L」字形に折れ曲がっているだけでなく、その南西部を取り囲むように土塁を伴っており、閉じた柵形状空間となっている。この柵形状空間を避けて城へ近づこうとしても、鍵折れをみせる横堀4の底を進まざるを得ない。その間、曲輪Ⅱ・Ⅲ、そして先述の通り曲輪Ⅰからの横矢が掛かり続ける。以上、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは土塁・虎口・堀切・縦堀・横堀を組み合わせた戦術的機能を持つ曲輪といえる。

一方、城域の西側にあたる曲輪Ⅳは平面三角形の平坦面となっている。主郭Ⅰの西側には堀切がみられるが、高さは1m以下と、大規模なものではない。この曲輪の累線は何か所かで扇形に折れ、横矢を効かせることができるよう工夫がされているが、これ以外に明確な防御施設がみられない。切岸も2m以下と低く、防御には不適である。こうした特徴から、この曲輪はおそらく居住域、あるいは駐屯地として機能していた曲輪とみられる。曲輪Ⅳと戦術施設として明確な機能を持つ曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとの差異は明確であり、曲輪間の機能分化の進行をうかがうことができる。

ここまでをまとめると、本城の縄張りの特徴は曲輪間の機能分化が明瞭なだけでなく、横堀と柵形状空間、2折れを伴う虎口空間の存在などにみい出すことができる。これらの特徴から、明らかに戦国時代でも最末期の様相をみせる城といえる。

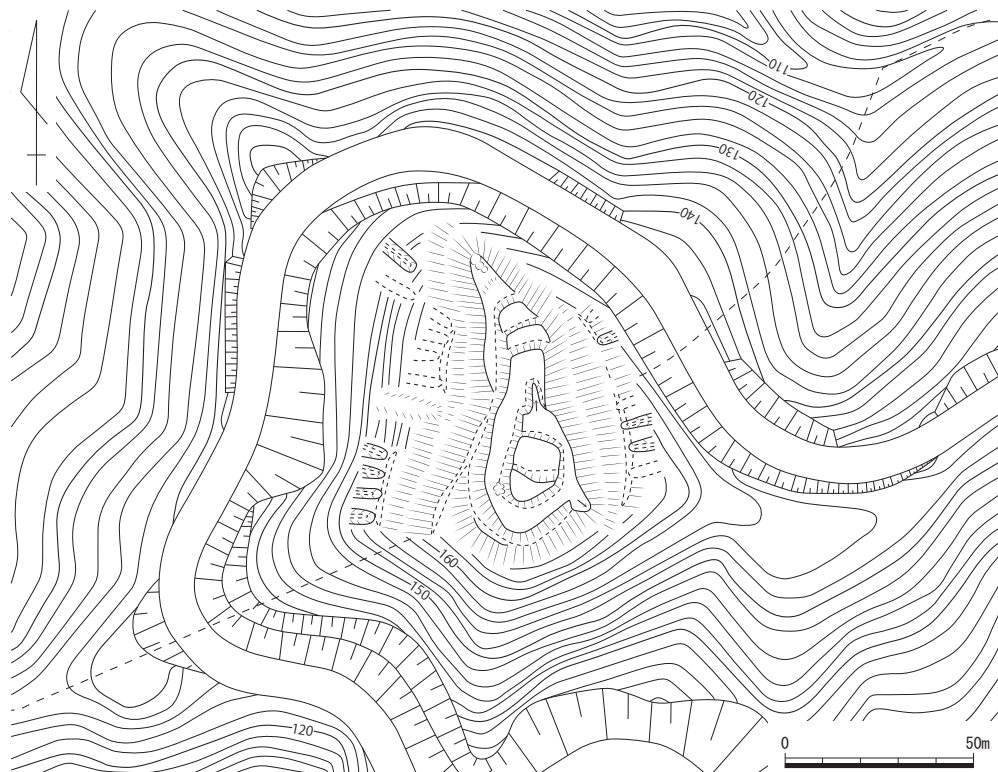
文献・伝承 これだけの優れた縄張りを持つ城ながら、一次文献には一切記述がみられない。一方、岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫にある『内田玄綾先祖書』には天正2～3(1574～1575)年に勃発した備中兵乱に際し、三村方として戦った国侍、内田牛介が本城に居住し、毛利方の攻勢により戦死したとされる。以後、毛利方の在番として塩津三河守が入城し、内田九郎兵衛が相番を務めたとする。しかし、『新修倉敷市史2』ではこの城の技巧的縄張りから、その築城は天正7(1579)年に勃発した宇喜多氏・毛利氏間の軍事的緊張発生以降のこととしている。(和田)

立地 旧広江村の北側には東西に長い山塊が広がっている。その西端、城山頂部の標高およそ 170 m に立地する。

概要 南北に長い山頂を中心に曲輪を連ねた山城である。範囲は南北 80 m、東西 90 m を測るが、山裾の西・北・東を巡って種松山に続く舗装道路が作られ、その法面によって後述する豎堀が一部失われている。

頂部には北に 50cm 低くなる段を持つ南北 17 m、東西 13 m の主郭 1 面がある。主郭周りは帯曲輪で、その北側には主郭から北へ突き出した斜路のような通路があり、南東隅には突出部を持つ。また、帯曲輪南西の主郭側切岸に接して井戸状の凹みがみられる。帯曲輪の北側には 1～1.5 m の切岸を伴う 3 面の曲輪が位置し、最下段の曲輪からは細い帯曲輪が西斜面を南へ巡っている。これら曲輪群の東西斜面は切岸を施しているが、斜面が緩やかになった地点に東側で 6 本、西側に 5 本以上の豎堀を掘削している。いずれも道路法面で下側を削られているため、長さは約 10 m が残存しているにすぎない。城の東側には緩い尾根が続いているが、地形の改変はみられない。

文献・伝承 『備陽記』は「広江村之内村北二古城山跡アリ城主不知」と伝える。『備陽国誌』の児島郡中では「川越山城 広江村。 古城山 同村。」と記される。旧広江村内で現在他の城館が確認されていないので、『備陽記』の「古城山跡」が『備陽国誌』の「川越山城」で、『備陽国誌』の「古城山」は「川越山城」の伝聞違いの可能性が考えられる。また、『新修倉敷市史 2』では、曲輪が埋蔵金狙いの盗掘で攪乱を受けたことが記載されている。(氏平)

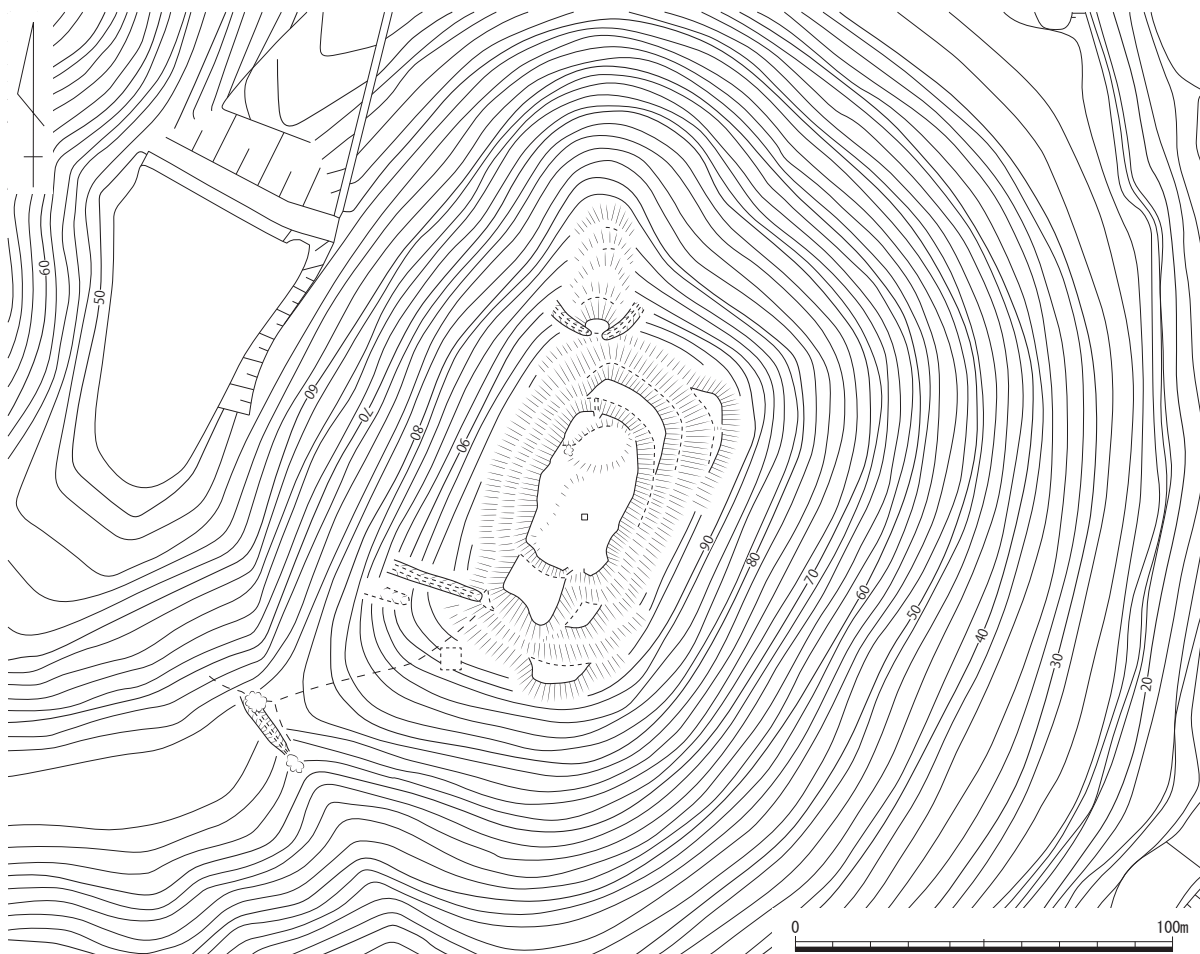


第 172 図 川越山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 当城は、標高約 250 m級の種松山から東へ派生した尾根先端の頂部に位置する。南から北へ流れる郷内川の西側畔にあり、この川の流域を広く見渡せる位置に立地している。

概要 頂部に長さ約 40 m、幅約 25 mと比較的規模が大きい主郭を置き、その両側に曲輪を配した山城である。尾根先端方向は、長さ約 5 m、幅約 25 mの曲輪を1面築き、そこから2方向へ延びる尾根筋に遺構を配する。北東方向には腰曲輪1面、北方向は「U」字形の堀切と土塁の組み合わせにより比較的なだらかな尾根筋を遮断する。尾根鞍部方向にあたる南西側は、長さ約 10 m、幅約 15 mの曲輪とその下にもう1面の曲輪を配している。主郭とその直下の曲輪間には、虎口状の施設が存在する。また直下の曲輪の西側には、豎堀が1本ないし2本配され守りとする。さらに尾根鞍部には、現在道となっている箇所小さな堀切が1条築かれている。また当城の周囲は急峻な地形であり、この地形も城の守りとして大きな役割を果たしている。

文献・伝承 『備陽国誌』には、元亀3（1572）年に毛利氏が築き、城主は上野源次郎兼次で、後に沖左衛門兼忠になったとする。『萩藩閥閥録』には、元亀2（1571）年に毛利氏は、浦上・三好連合軍との戦いの際に庄元資らを当城に派遣し守りを固めたと書かれる（一次史料 124）。（小林）



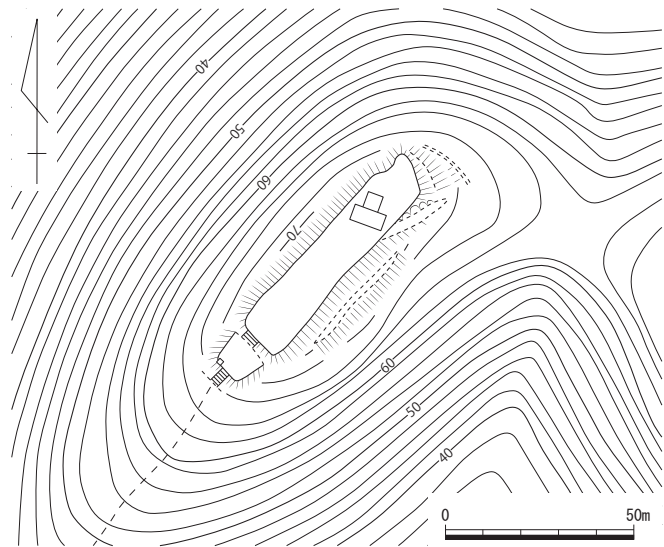
第 173 図 鼻高山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 児島半島の付け根付近、北へ向かって流れる郷内川の東岸で、蟻峰山から連なる尾根が南西に突き出す標高 70 m の丘陵端頂部に立地する。郷内川の対岸約 1 km 西には鼻高山城跡が存在する。

概要 城域は長さ(東西)90 m、幅(南北)25 m の範囲である。頂部ほぼ全体が 62 m × 14 m を測る長方形の曲輪で、南西側尾根下方に 10 m × 10 m の曲輪を 1 面設ける簡素な作りである。北西側斜面は自然傾斜のままだが、南東側斜面には高さ 2 m の切岸と犬走りが確認できる。

現在頂部全体が神社の敷地となっているため、頂部曲輪は後世の改変が想定される。東側の尾根鞍部は現代の林道などにより破壊され、掘切などの有無は不明である。また南西側の曲輪には神社参道の石段が取り付けられている。

文献・伝承 故事来歴は伝えられていない。(氏平)

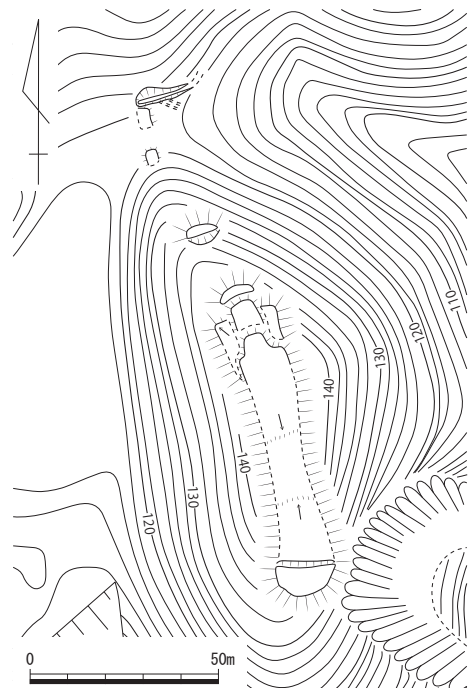


第 174 図 福岡山遺跡縄張り図 (1/2,000)

立地 児島半島中央付近の山塊で、宇野津と稗田を東西に結ぶルート上の峠部東側にあたり、北から突き出した丘陵頂部標高 140 m に立地する。眺望は南と西に限られ、東に御前道集落を望む。

概要 南北に細長い丘陵の中央部に南北 60 m、東西 10 m 強の曲輪を設け、南側に曲輪 1 面、北側は階段状に曲輪 4 面を配する。各曲輪の切岸は斜面が緩く、最大の曲輪は中央部が凹んだ形状を呈する。これら曲輪群から 10 m 北に離れて切岸を伴う小曲輪 1 面があり、さらに鞍部を越えて 30 m 北に幅 15 m、深さ 2 m の堀切 1 条がある。

文献・伝承 故事来歴は伝わっていない。資材置き場造成工事に伴い、掘切と最大の曲輪間に 4 か所のトレンチを入れて確認調査が実施されている。その結果、最大の曲輪は地山削り出しで造成されたことがわかった(文献 255)。(氏平)



第 175 図 稗田城跡縄張り図 (1/2,000)

文献 255 に加筆

立地 標高 240 m の熊山から北に派生した比較的細い尾根筋にあって、その端頂部の標高 170 m に位置する。城からは北眼下に児島湾及び彦崎集落の眺望が開ける。

概要 城の所在する山頂部は全長 110 m、幅 10 m 前後と細長く、東西両斜面は急峻であるが、南北両尾根筋は緩やかな斜面である。

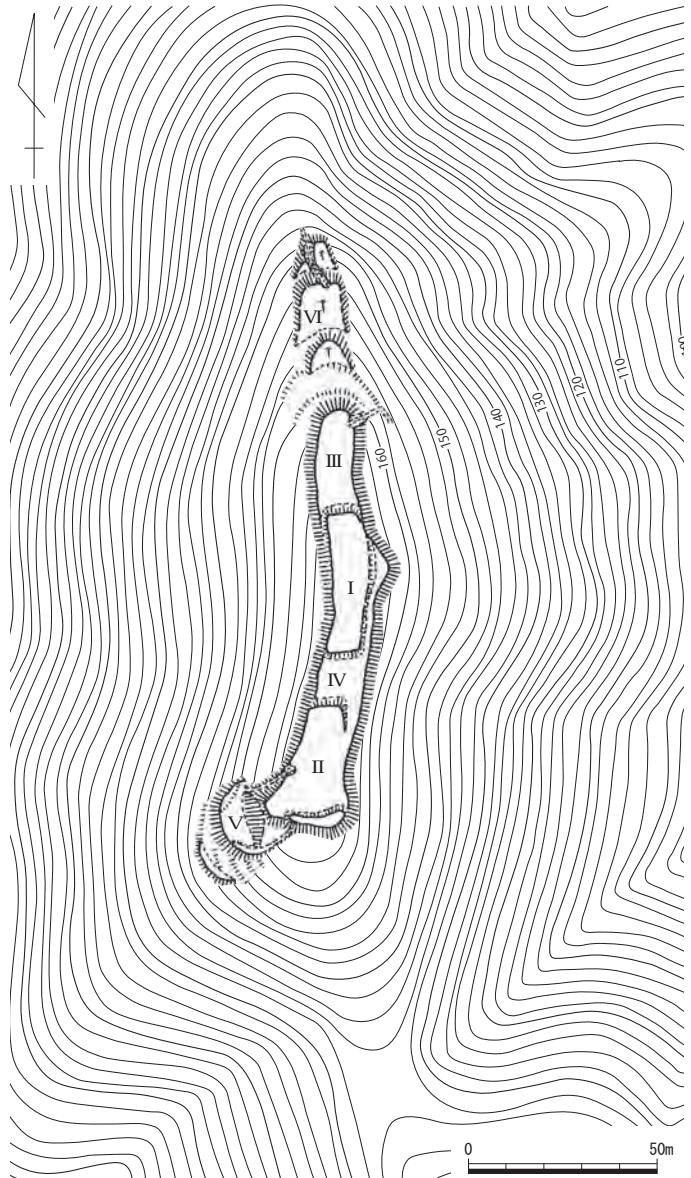
曲輪は、この長い頂部全域と南北両尾根筋に配置がみられる。ただし尾根筋には堀切等防御施設はみられない。頂部の曲輪は、南側尾根鞍部から緩やかに比高差 20 m の斜面を上った頂部の端から北端 110 m にわたって、幅も尾根幅いっぱいの 10 m 前後と狭い中に 1 m 前後の段差をもって曲輪 4 面の連続が確認される。

主郭は、中央部に見られる長さ 35 m、幅 10 m の長方形を呈する曲輪 I と考えられる。これを挟むように曲輪 III・IV 2 面が約 1 m 下段に配置される。

防御面で注目されるのが南側にある長さ 30 m、幅 10～20 m の曲輪 II で、南端部には長さ 15 m、上端幅 2～4 m の土塁が構築されている。また、この南西下段の尾根筋には舌状の曲輪 V が高い切岸と相まって防御を固めている。

一方、北側の曲輪 VI は、「大手筋」とされる古道が取り付く地点で、虎口周辺を固める意図で造成されたと考えられるが、面的には緩やかで自然面を多く残す。

文献・伝承 とんきり城に関して、中世に遡る史料は存在しない。『岡山県通史上編』には「とんきり山城三村の同族一説児島高德」とされ、『灘崎町史』には、城主は常山城主の一族とされる三村弥太郎行清とあり、常山合戦の出城として考えられている。



第 176 図 とんきり城跡縄張り図 (1/2,000)



写真 199 遠景 (北から)

(島崎)

立地 西側に郷内川が流れる谷筋、北側に岡山市迫川方面へつながる谷筋に挟まれた倉敷市木見地区にある独立丘陵頂部に位置する。頂部からは、2つの谷筋を広く見渡せる位置に立地している。

概要 標高約 190 m のやや高低差のある頂部付近を中心に遺構を築いた山城で、規模は東西約 160 m、南北約 100 m である。それほど大きくない山城であるが、各遺構の造りはしっかりしており、遺構の種類も多彩である。頂部にある主郭は、長さ約 30 m、幅約 20 m の規模で、広い平坦地を呈する。頂部から尾根筋が3方向へ派生し、そこに曲輪が築かれる。北方向には2面、南東方向には3面、鞍部方向にあたる西側には大きい曲輪1面と露岩まじりの小さい曲輪が数面続く。各曲輪間は、3～4 m と比較的高い切岸が築かれ、石積みが随所に残っている。特に西側尾根筋にある大きい曲輪斜面が良好である。また曲輪群の北西斜面に3本、北東斜面には1本の縦堀を配している。主郭東にある帯曲輪には、井戸状の凹みが存在している。これら城域は、鞍部にある2条の堀切で画している。

本城の規模と構造などは、同じ児島郡の中でも岩山城跡と類似している。また川越山城跡や鼻高山城跡なども、規模や造りに共通点が残っている。

文献・伝承 『備陽国誌』は、「木見戸山城」で木見村にあって城主備後三郎高德とする。立地場所から『吉備温故秘録』などに書かれた「木見城」の可能性もある。 (小林)

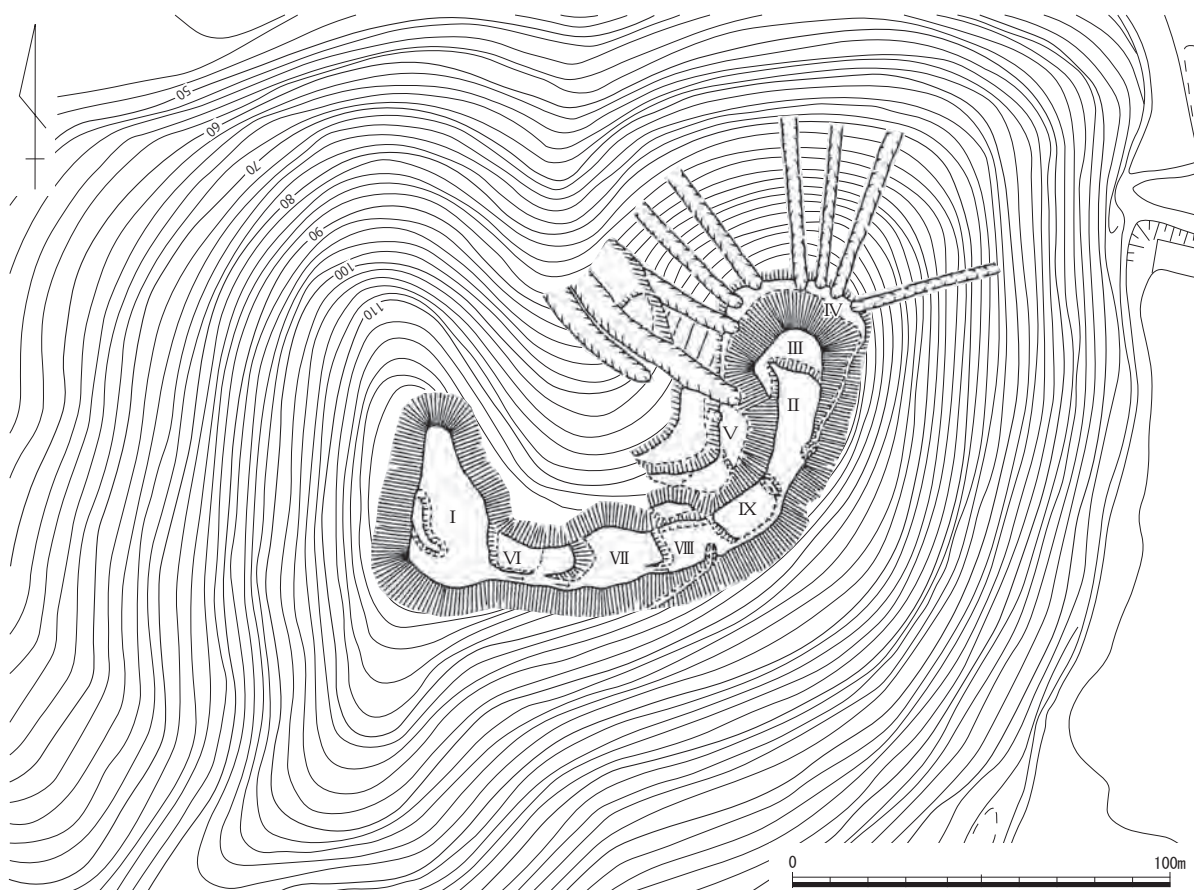


第 177 図 戸山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 片岡城跡は常山城跡の西約 3 km にあって、片岡集落の最も奥まった標高 124 m の山塊頂部に所在する。北眼下には児島湾及び片岡の集落が一望可能で、北西約 500 m には丸山城跡が九十九山頂に位置する。

概要 城は、北側の谷筋を挟んで「U」字状を呈する頂部のおよそ標高 110 m より上位に東西長 110 m、南北幅 40 ～ 60 m の範囲に大小 7 面の曲輪が連結して配置されている。主郭 I は西側の頂部にあって鞍部となる中央部からは約 7 m 高所に構築された南北長 40 m、最大幅約 20 m を測るもので、西肩の一部に土塁が存在する。一方、嚴重に防御が固められているのが北東側先端部にある全長 40 m、幅約 10 m の曲輪 II とその北側下段にある舌状を呈する曲輪 III である。北端の曲輪 III からさらに約 3 m 下がった所には、特に北曲輪群周辺の北側先端から谷部である西側にかけて幅 2 m 前後の帯曲輪 IV が造成され、ここからは東から西に 1・3・3 本と規模の異なる豎堀が放射状に、またその西側谷部には曲輪 V を伴ってみられる。なお、東西曲輪の間であって比較的平坦な鞍部には長さ 10 ～ 30 m、幅 10 ～ 15 m の規模の曲輪 VI ～ IX がそれぞれ 1 ～ 2 m と比較的高低差の少ない段差をもって密接に連結する。虎口は、中央の鞍部に、曲輪 VII と IX に挟まれ、柵形を呈する曲輪 VIII に存在する。

文献・伝承 『岡山県通史上編』によると城主は「三村弥太郎行清（孫太郎）或作三村源兵衛行清」、『灘崎町史』では城主を「三村弥太郎行清、或いは串田鼻高山城主沖佐衛門尉兼忠」とする。（島崎）



第 178 図 片岡城跡縄張り図 (1/2,000)

237 ^{なわて} 暇城跡

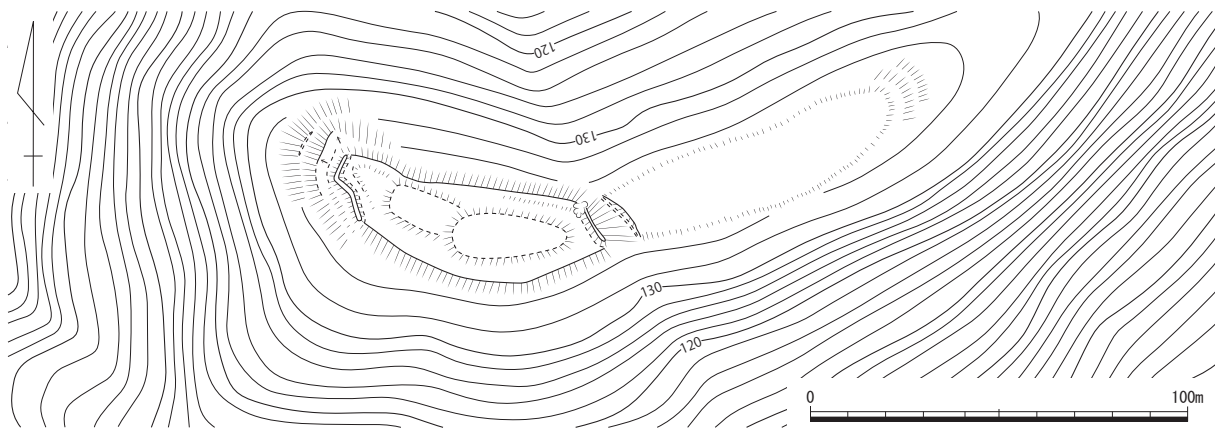
倉敷市児島稗田町

地図 22 右

位置 倉敷市児島稗田集落を西に見下ろす山塊端頂部に位置する。

概要 城域は東西 180 m、南北 50 m を測る城域のほぼ中央に深さ 2 m を測る堀切が掘削されているが、そこを境に東側は自然地形となる。一方、堀切の西に土塁が構築され、さらに 1 面の曲輪が配される。曲輪中央には自然地形が残り、造成は完全ではない。曲輪の西端にも土塁が築かれる。

文献・伝承 この城に関する文献、伝承はない。 (和田)



第 179 図 暇城跡縄張り図 (1/2,000)

239 ^{たき} 滝城跡

玉野市広岡・木目

地図 23 左

立地 山塊から南東に延びる山頂部に位置する。

概要 金比羅宮の設置により地形改変が認められるが、主郭は山頂部に築かれており、現状で 5 面の小曲輪で構成されている。また、これらの下方には帯曲輪が 3 面認められた。

この主郭から北西側には段状に配置された腰曲輪が 3 面みられ、この間には土塁と組み合わせた堀切が 2 条掘削されている。また、この腰曲輪の縁辺部には通路状の低い土塁が伴い、特に南側の切岸は急峻で、比高差は約 8 m を測る。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』・『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』など多くの近世地誌に記載された児島郡広岡村もしくは滝村の「古城山」・「古城址」に本城跡は比定される。城主は不明である。 (澤山)



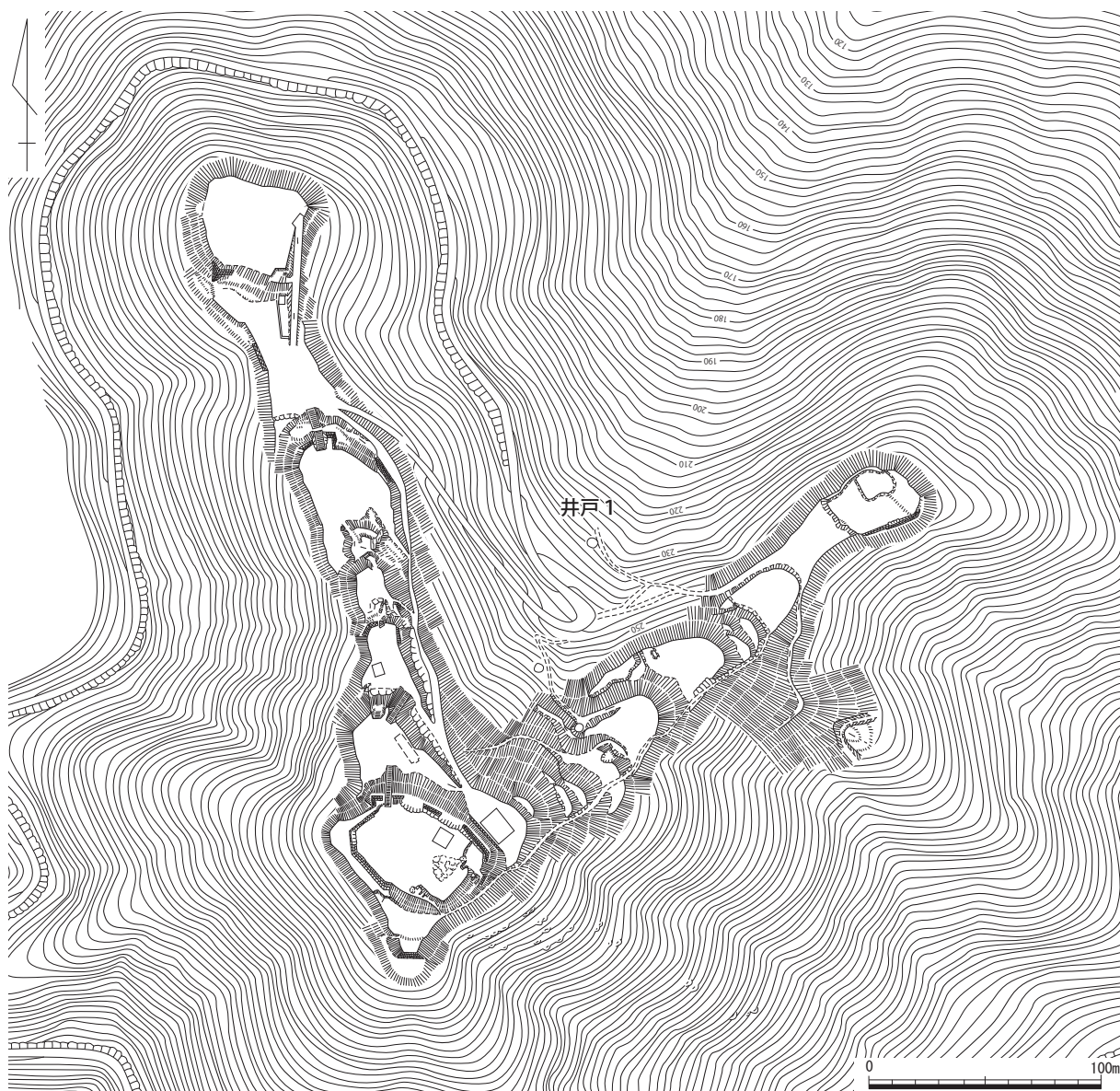
第 180 図 滝城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、児島半島の中央部、旧児島湾を北方に見下ろす標高約 300 m の常山山頂に立地する。山頂からは、北の岡山平野を一望し、さらに南に目を向けると瀬戸内海や四国まで眺望する。約 2 km 東に麦飯山城跡、約 6 km 北東に両児山城跡が所在する。

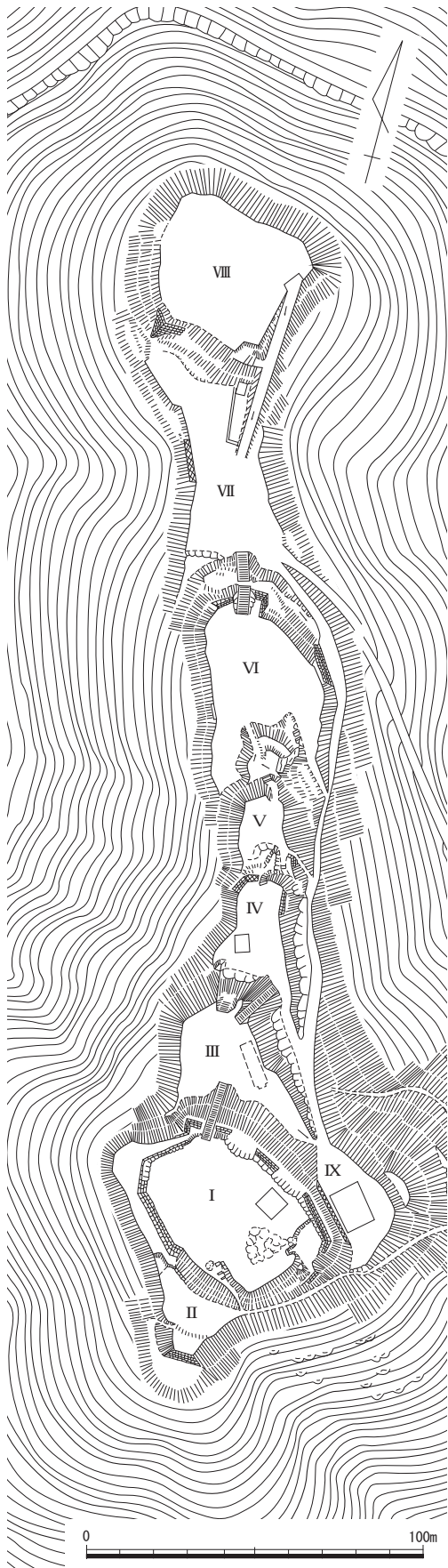
概要 常山山頂から北及び北東に「V」字を呈して延びる尾根筋に曲輪を連ねた連郭式の山城である。北に延びる尾根筋の曲輪群は駐車場・通信施設・石段等による改変が著しい一方で、北東に延びる尾根筋の曲輪群は曲輪Ⅸ（「東二の丸」と呼称）に無線中継所が建てられている以外は、大きな改変を受けていない。山頂に築いた曲輪Ⅰ（「本丸」と呼称）は、南東辺から南西辺東半以外を石垣で圍繞する。石垣は北西辺を除き高さ 2～3 m、8～9 段の野面積みを基本とし、屈曲箇所については算木積みを意識したような積み方が認められる。しかし、破城によるものか、石垣の天端石から 2～3 段目までが崩れ落ちている箇所や、石垣自体が存在しない場所もある。曲輪Ⅰ内は平坦に造成されているものの、南東側では地山の巨石が露出し、西側では古図で水をたたえたような表現がされている径約 10 m の穴が存在している。さらに東角には、8 m×9 m の方形を呈し、周囲より約 1 m 低い凹地が認められる。現在、曲輪Ⅰへ至る通路は、曲輪南角に取り付く曲輪Ⅱから続く通路と、曲輪北角にある曲輪Ⅲから構築されている石段があるが、これらは、前者が近代に保勝会が作ったもの、後者が 1937 年に建設されたものであるという。おそらく往時の通路は、凹地南角から南東に向かって約 3 m 下がり、そこから 90 度南西に向かって南東肩部に 2～3 段積みの石垣が 4 m 程続く幅約 1 m のものであったと考えられる。よって、この通路が取り付いている凹地は破城によって壊された内枳形虎口の残骸かもしれない。また、草木の繁茂のため現地では確認できなかったが、曲輪Ⅲから曲輪Ⅰへ至る通路は、曲輪Ⅲの南西端から曲輪Ⅰ北辺に設けた 3 方に石垣が築かれている突出部を経て、曲輪Ⅰ西側の犬走り状の平坦面に取り付くらしい。となれば、この突出部は横矢掛けを意識したものであろう。曲輪Ⅱの南辺には、13 段積みで高さ 4 m 以上の石垣が築かれている。曲輪Ⅲは、女軍の墓と石碑が建てられ、さらに北辺を曲輪Ⅳへの石段によって改変を受ける。曲輪Ⅳの北辺に認められる石垣は、終戦直後に築かれたものであるという。この曲輪の前面には、五輪塔が 1 基祀られている方形の小曲輪が設けられる。曲輪Ⅵ北辺には西半が後世の石段によって破壊されている石垣構築の櫓台、東辺中央部には現状で 13 段の野面積みの石垣が認められる。曲輪Ⅶは駐車場、曲輪Ⅷは無線中継所によって大規模に改変を受けるが、曲輪Ⅷ南西側に野面積みの石垣が一部残存している。無線中継所が建設されている曲輪Ⅸは、曲輪Ⅶから続くアスファルト道路が曲輪北端で取り付き、さらにその背面の崖面をコンクリート擁壁とするなど大きく改変を受ける。この無線中継所建設の際に当教育委員会によって 1979 年に発掘調査が行われており、調査区の西半で曲輪造成土が確認され、その上面から掘立柱建物 1 棟や配石土壇 2 基を検出している。出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦・備前焼などで、軒平瓦には岡山城 2 式の瓦と同範関係にあるものも認められた（文献 248・249）。曲輪Ⅸから小曲輪を 3 面挟んで通称「東三の丸」と呼ばれる曲輪Ⅹに至るが、この曲輪の北端から曲輪Ⅲ・Ⅳ方向に向かう通路が所在する。この通路が往時のものであり、現在の曲輪Ⅹから曲輪Ⅰに続く山道は後世のものである。曲輪Ⅺの北端には井戸状の落ち込みがあるが、ここで売店を営んでいた人が天水を貯めるために掘ったものであるという。曲輪ⅩⅢ（通称「惣門二の丸」）には、石仏が並んでいる。曲輪ⅩⅣ（「惣

門丸)は、約60m×20mを測る大きさで、その南辺東端には高さ約1mで3～4段積みの石積み
が築かれる。また、北辺東半には土塁痕跡が認められる。この曲輪の南西端から南東斜面へ下る道が
あり、その先には堀切が所在する。

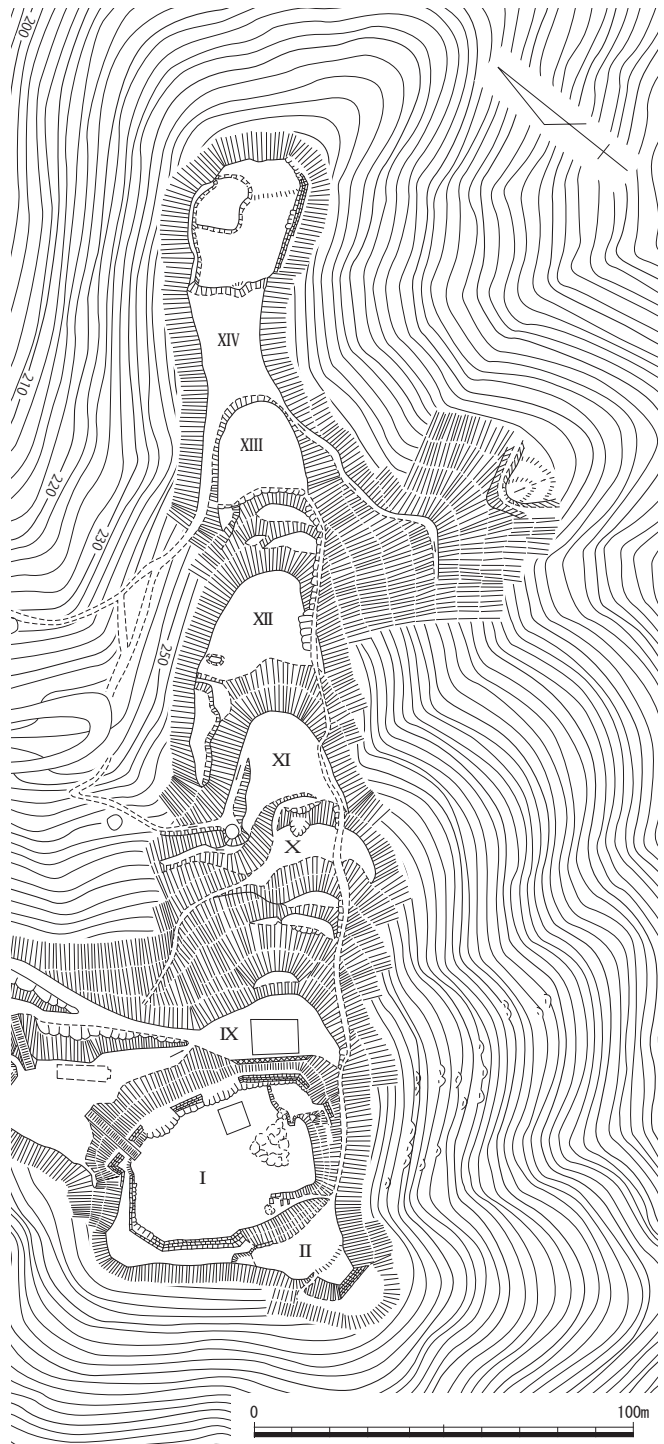
文献・伝承 応仁の乱頃に上野氏が築いたと伝わる。天正3(1575)年に起こった常山合戦では、
毛利氏に攻め込まれ、城主の上野隆徳は自害したと伝える。この合戦で、上野隆徳が家臣の「喜八」
の働きを褒めた書状が残されている(一次史料144)。以降、毛利氏が城番・城将を置いて支配して
おり、天正10(1582)年の八浜合戦の直前には、城の普請を命じるつもりであるという穂田元清の
書状が残されている(一次史料229)。天正11(1583)年の「中国国分け」によって、児島郡は宇
喜多領となり、宇喜多氏重臣の戸川氏が在城する。慶長4(1599)年の宇喜多家中騒動で戸川氏が
宇喜多氏から退散した後は、川端丹後守が在番する(一次史料275)。慶長5(1600)年の関ヶ原の
合戦後、備前国を領した小早川氏は、重臣の伊岐氏を城主とした(一次史料278)。小早川氏が慶長
8(1603)年に改易され、池田氏が備前国を治めると、廃城となった。(小嶋)



第181図 常山城跡縄張り図(1/3,000)



第 182 図 北尾根縄張り図
(1/2,000)



第 183 図 北東尾根縄張り図 (1/2,000)



写真 200 曲輪 I 南辺から郭内部を見る(南から)



写真 201 曲輪 I 柵形虎口? (西から)



写真 202 曲輪 I 南西石垣の隅角部 (南西から)



写真 203 曲輪 II 南辺の石垣 (南から)



写真 204 曲輪 XIV 石垣北側の隅角 (南東から)



写真 205 曲輪 VI 檜台 (北から)



写真 206 曲輪 VI 東辺石垣 (南東から)



写真 207 麦飯山城跡・両児山城跡を望む(南西から)

立地 麦飯山城跡は眼下に旧児島湾を見下ろす麦飯山山頂に位置し、山裾部北端は旧児島湾と接している。山頂は鞍部を挟んで東西に高まり（峰）があり、東西両峰を含めると、直線距離で約 600 m の長さがある。その東西両峰に城の造作が認められる（東郭・西郭と呼称）。

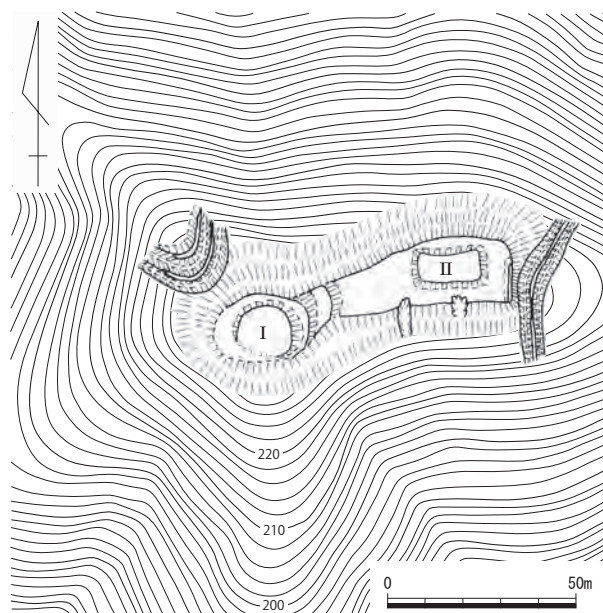
概要 東西に長い尾根の両端の地形が高まっており、そこが堀切によって周囲と画される。その間の鞍部については、部分的には階段状に加工された可能性があるが、ほぼ自然地形のまま残されている。

西郭は最頂部に円形の曲輪Ⅰを造成し、1 段下がった東側に長方形の曲輪Ⅱを造成する。そのさらにその東端には約 50cm の高さをもつ土塁を盛土で形成する。この西郭の北西と東が 2 重の堀切で嚴重に画されているが、この堀切は、ともに岩盤を 1.5 ～ 2.5 m 近く掘り抜いている。

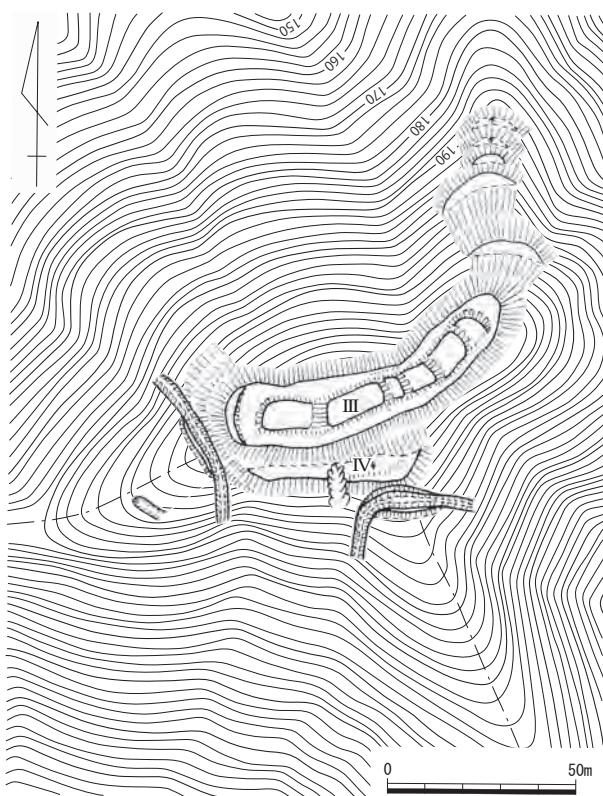
東郭は最頂部に曲輪Ⅲを中心として東西に階段状に曲輪が造成され、その周囲を平坦に整形し、帯曲輪状にする。西端には盛土による土塁を形成する。北東に続く下りの尾根上は階段状に造成し、小規模な曲輪を設けている。西と南の 2 か所に堀切が設けられ、岩盤を掘り抜き嚴重に分断する。

西の堀切の前方には土塁を設ける。さらにその前方を浅い堀切で区切っている。南の堀切の背後には曲輪Ⅳを造成している。南堀切の底面と曲輪Ⅳの比高差は約 3 m であり、その南に続く尾根への視界もよく、強力な防御性を発揮したと思われる。

文献・伝承 天正 10（1582）年の八浜合戦の際に毛利方の穂田元清が布陣したと伝えられる城であり（一次史料 230）、主戦場とされる常山城跡、両児山城跡方面をよく見通すことができる。一方で、城主について、『和気絹』・『備陽国誌』・『中国太平記』などでは明石源三郎とし、天正 4（1576）年に毛利

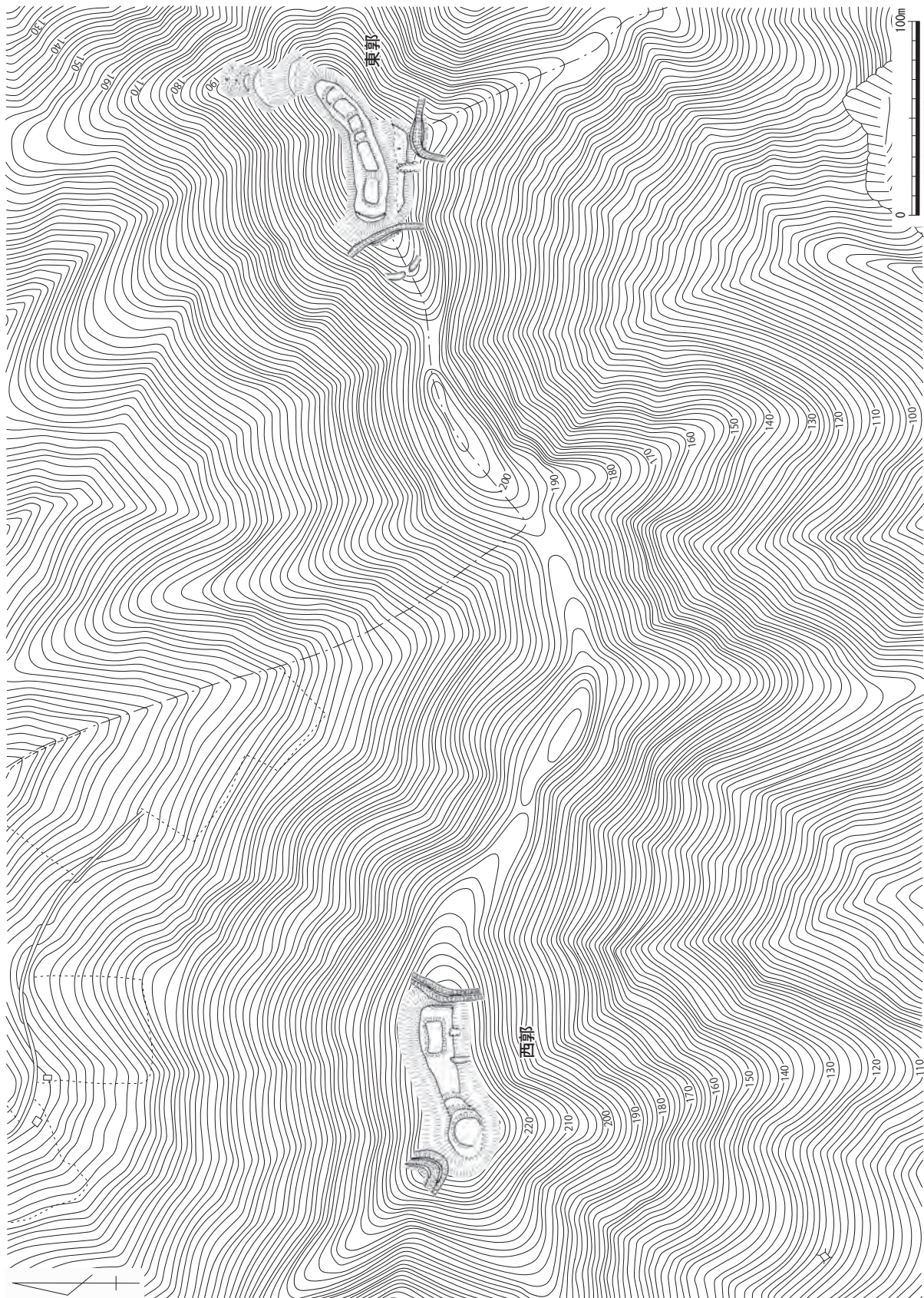


第 184 図 麦飯山城跡（西郭）縄張り図（1/2,000）



第 185 図 麦飯山城跡（東郭）縄張り図（1/2,000）

方と戦ったとあるが、それを裏付ける同時期の資料に欠ける。なお、西郭を横田山城（または雨乞山城）、東郭を麦飯山城と呼び分ける見解もある。（河合）



第186図 麦飯山城跡縄張り図 (1/3,000)



写真 208 東郭東端（東から）



写真 209 東郭南東尾根堀切（V字）（北西から）



写真 210 東郭西端堀切（南から）



写真 211 西郭東端東・西2重堀切（北西から）

242 ふたごやま 両児山城跡

玉野市八浜町八浜

地図 23 右

立地 両児山城跡は旧児島湾に突き出した独立丘陵上に位置する。一方、背後（東）側には庄田川が形成したやや広めの谷が広がっており、現在の八浜集落が展開している。両児山城跡とともに八浜合戦（後述）の主要な舞台となった麦飯山城跡、常山城跡とは旧児島湾越しに相互に見通しが効く位置に所在する。

概要 丘陵は南北にそれぞれ高まり（峰）があり、その両峰を中心に城の造作が認められる。それぞれを北郭、南郭と称し、説明を加えたい。北郭は主郭と考えられる曲輪Ⅰを中心として、曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲが高さを違えながら帯曲輪状に巡っている（曲輪Ⅲは現状では通路の造成による破壊のため、一部の確認にとどまるが、昭和時代作成の縄張り図などを参考にすると、西側にも曲輪が巡ることを確認できる）。さらに、曲輪Ⅰの北東にも地形に即して階段状に小規模な曲輪群を造成しているが、この曲輪群と曲輪Ⅰ・Ⅱを含めた山頂部の周囲に切岸を行って、高低差を際立たせることで、防御力を高めている。なお、曲輪Ⅰは現在、神社（八幡宮）の境内となっており、この前面や周囲に積まれた石垣が当初のものであるかどうかは不明であるが、八幡宮の棟札の中に、八浜合戦が起きた天正 10（1582）年に近い、天正 16（1588）年の紀年銘が認められることが注目される。曲輪Ⅰ・Ⅱから南東部は浅い谷が入っているが、10本の畝状縦堀群を配置することで、防御力を高めている。曲輪Ⅲから南東は自然地形を残しながら下り、南郭との間の鞍部につながっていく。また、この斜面が緩くなった南東部の中央に井戸状の大きな凹み（深さ約 4 m）が認められることも注意される。



第187図 両児山城跡縄張り図 (1/2,000)

南郭は、北郭と対照的に明瞭な曲輪を持たずに自然地形を多く残している。頂部付近には土塁状の囲いが認められることに特徴があり、その内部は江戸時代以降の墓地として利用されている。丘陵斜面が特に緩やかな南～南東側には、幅約5～6mの横堀と土塁を鍵形に組み合わせており（「横矢掛け」としての機能をもつ）、堀の底面は堀毎に高さを変えるなど手の込んだ造りとなっている。さらに、その南に18本の畝状空堀群を組み合わせるなど、防御性を最大限に高める努力が払われている。反対側の北西斜面は遊歩道などで削平を受けていることもあるが、顕著な防御施設が認められないのは、当時の海岸線がこの付近まで迫ってきていたことによることが大きいと判断される。また、丘陵先端部の南東部においては、最大約7mの幅の堀切を設けて遮断している。堀切のすぐ西側に築かれた土塁の上面から堀切の底面までの比高差は約3mにも達する。なお、この堀切についても、昭和時代に作成された縄張り図を参考にすると、現遊歩道を越えて南に続く可能性が高いが、園路の造成のためか現状では堀切状の凹みを確認できない。この南東部についても、防御施設が堀切と土塁のみといった比較的簡素な状況であるのは、当時の海岸線に面していたことで理解できる。北郭・南郭の構造の違いは、もともと北郭のみに防御施設が作られていたところに、八浜合戦を契機に南郭の防御施設を構築（増設）したことが原因と理解できるかも知れない。

文献・伝承 天正10（1582）年の宇喜多氏と毛利氏との間で起こった八浜合戦の際に宇喜多春家・基家などが当城に布陣したとされる（一次史料230～235・238・239）。また、『備陽国誌』や『備前軍記』などの近世地誌にも同様の記載がある（年号には諸説あり）。なお、北郭に所在する八幡宮の棟札の中に、八浜合戦の年代に近い天正16（1588）年の紀年銘をもつものがあり、注目される。別称八浜城。 （河合）



写真 212 北郭八浜八幡宮正面（南から）



写真 213 南郭南側付近（南西から）



写真 214 南郭南側畝状空堀群（北東から）



写真 215 南郭東横堀・土塁（北から）

立地 児島半島の山塊北側に山頂部に位置し、北方に児島湾を望む。

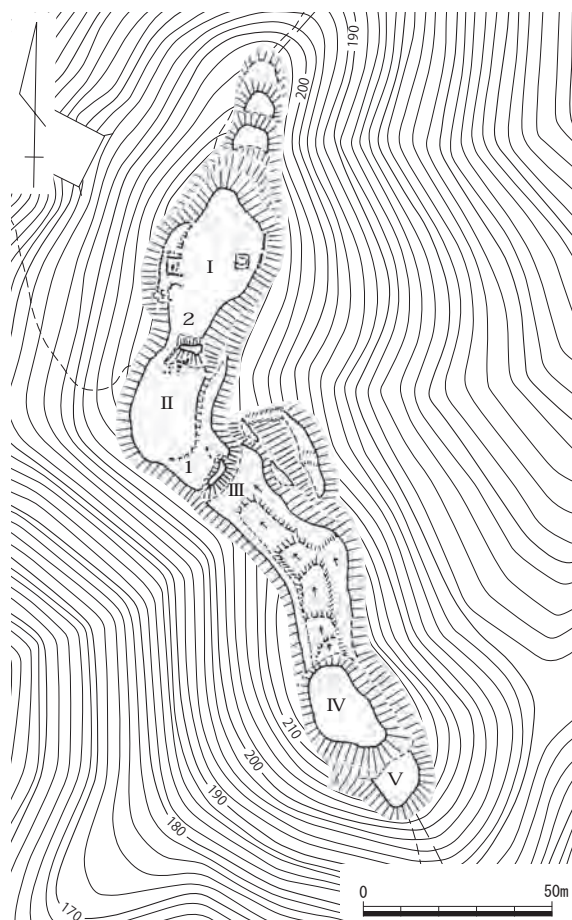
概要 「く」字状の尾根部に築かれ、北側山頂部の曲輪Ⅰ・Ⅱと南側山頂部の曲輪Ⅳ・Ⅴ、そして南北山頂部の鞍部に築かれた曲輪Ⅲで構成された連郭式山城であり、規模的には曲輪Ⅰが主郭と想定される。曲輪Ⅰの北側には小曲輪が3面確認できる。周囲は急峻な切岸が認められ、高い防御性をもつ。

曲輪Ⅰには石組み基壇を持つ祭祀施設が2か所あり、その関係と考えられる石積みが曲輪縁辺の一部に巡る。西側に築かれた祭祀施設の下方には細い平坦地があり、一見虎口にもみて取れるが判然としない。曲輪Ⅱの東側には帯曲輪状の平坦面が認められ、南端には高さ約50cm～1mを測る土塁1があり、これに沿って塁線が屈曲している。また、曲輪Ⅰ・Ⅱの境界には高さ約1～2mを測る土塁2が築かれている。

曲輪Ⅲは曲輪Ⅱの南側約1m下方に位置し、南側から緩く下がる比高差約50cmの段状を呈した5面の平坦面で構成される。東側には自然地形に沿った帯曲輪などが伴う。

曲輪Ⅳは曲輪Ⅲの南側約2m上方にあり、曲輪Ⅳの2m下方に曲輪Ⅴが位置している。曲輪Ⅳ・Ⅴは曲輪Ⅰ・Ⅱと同様に山頂部に築かれているが、それぞれの規模は狭い。曲輪Ⅴの南端は断崖絶壁であり、天然の防御施設となっている。なお、ここから約130m離れた南東側の山頂部にも平坦地があるが、明確な城館関連遺構は確認できなかった。ただし、見通しがよいので見張り台の可能性はある。

文献・伝承 児島郡の城館として『備前記』は郡村の「古城山」、『備陽記』は郡村の「高山古城山城」、『備陽国誌』は飽浦村の飽浦三郎左衛門尉信胤、土持弾正親成居城の「高山城」、『吉備温故秘録』は郡村か飽浦村の飽浦三郎左衛門尉信胤、出将（羽）弾正新成居城の「高山城」、『撮要録』は郡村の「高山城」、『東備郡村誌』は飽浦村の飽浦三郎左衛門尉信胤、飽浦美濃、飽浦美作守、大持弾正少弼親成居城の「高山城」の記載があり、本城跡に比定される。ただし、実際は後代の可能性が高い。（澤山）



第 188 図 高山城跡縄張り図 (1/2,000)

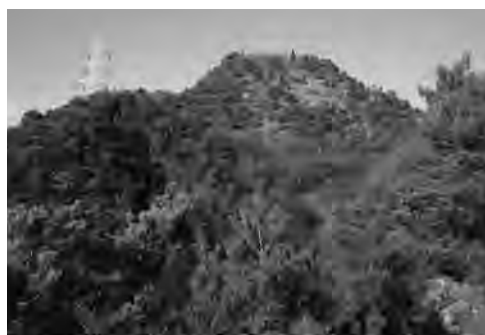


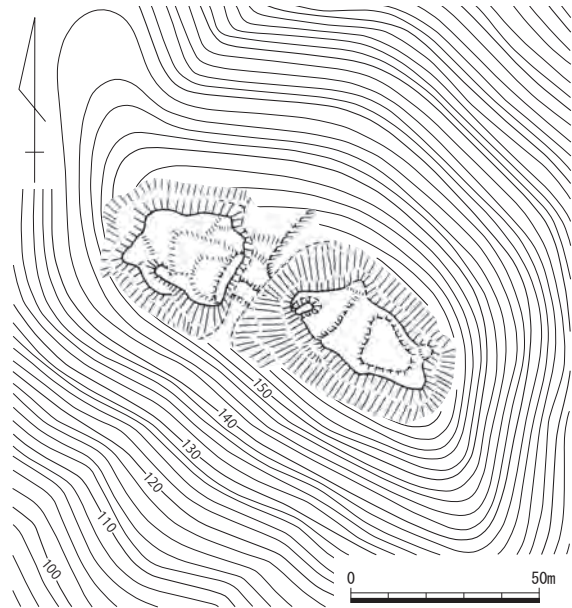
写真 216 遠景 (南西から)

立地 山塊から北側に延びる「城山」と呼ぶ尾根の頂部に位置し、眼下には児島湖・湾を望む。

概要 山頂部南側が主郭と考えられ、その北端には高さ約1mの土塁が認められる。曲輪は南側から北側に向かって緩い段状を呈するが、削平度は低い。その一方で切岸はどの方向も急峻であり、特に山頂部北側の曲輪との間に築かれた堀切は深さ約8mを測り、高い防御性を持っている。

山頂部北側の曲輪も北側に向かって緩い段状を呈するが、自然面を多く残している。ここから北西方向には部分的に緩斜面となる細長い尾根が延びるが、城館関連遺構は確認できなかった。

文献・伝承 児島郡郡村所在の『備前記』・『備陽国誌』の「古城山」、『備陽記』の「南谷古城山跡」、『吉備温故秘録』・『撮要録』の「南谷城」に本城跡は比定される。(澤山)

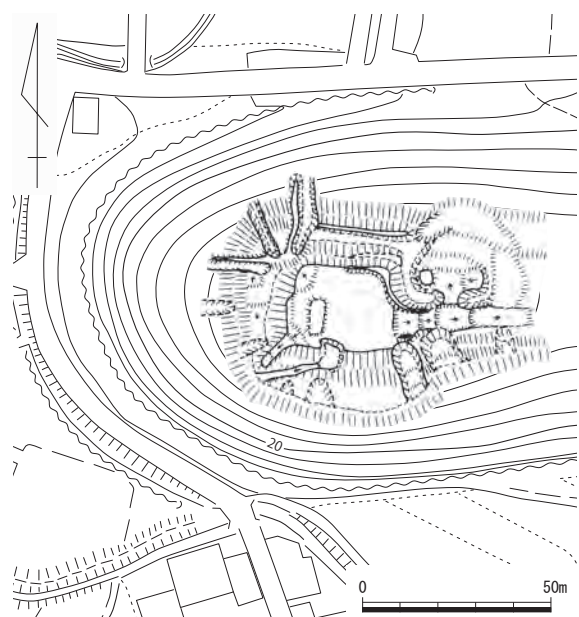


第 189 図 古城山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 両児山城跡から約1.4km東方に位置する低い丘陵頂部に立地する。

概要 単郭式の山城である。主郭はほぼ正方形を呈し、中央西側付近には高さ約50cmを測る方形土壇が築かれ、北・東辺には低い土塁が巡っている。また、南西隅には下方とつなぐ通路状遺構が取り付く。主郭の北・西・南斜面には比高差約3～5mを測る急峻な切岸が造られており、その下方にあたる北・東側には縦堀や横堀・横矢掛けを組み合わせて多様な防御施設を構築している。東斜面には一部に地形改変が看取されるが、虎口が設けられており、その南側には深い縦堀が掘削されている。

文献・伝承 『備陽国誌』・『吉備温故秘録』等に記載された佐々木盛綱が居城したとする児島郡波知村の「小丸山城」に本城跡は比定される。ただし、実際は後代のものと考えられる。(澤山)



第 190 図 丸山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 当城は眼下に旧児島湾を見下ろす怒塚山山頂に位置し、山裾部北西端は旧児島湾と接する。視界はほぼ 360 度確保でき、東～南側に瀬戸内海、西～北側に旧児島湾が眺望可能である。また、八浜合戦の主要な舞台となった両児山城跡、麦飯山城跡、常山城跡を一望できるため、これらの山城と関連性をもつ可能性もある。

概要 城は山頂部を中心に形成されている。主郭と考えられる曲輪Ⅰは、周囲に帯曲輪状に平坦部を削り出すことで中央の高まりを造成している。その南端部には土塁を巡らせている。主郭から北へは下りのなだらかな斜面が続き、その先に曲輪Ⅱを設け（曲輪Ⅰとの比高差約 5 m）、その北端を土塁で囲っている。虎口はこの曲輪の北西部に接続する。曲輪Ⅰ・Ⅱの東西は切岸によって急斜面となっているが、東側がより急傾斜である。曲輪Ⅱから北は比較的緩斜面が続くが、傾斜が大きく変わる辺りで等高線に沿って広く切岸を行うことで約 50 m の長さをもつ帯曲輪（曲輪Ⅲ）を造成している。西側に接続する尾根伝いの道から山裾を北回りで巡ってくれば（現在の登山道はこのルートを通る）、この曲輪に接続するため、通路としての役割も考えられるが、

特に眼下からの眺望を意識して設置されたものと判断される。主郭から南へは金甲山方面へ尾根が続くが、2 本の堀切で嚴重に遮断している。2 本とも掘削した排土を利用して南側に土塁を設けている。このうち、北側の堀切は幅約 5 m、深さ 2.5 m であり、一部岩盤を掘り抜くなど大規模なものである。

文献・伝承 怒塚城跡は今回の調査によって構造が明らかになった。『備陽国誌』・『吉備温故秘録』などの近世地誌には「いか塚山城」と出てくるが、城主名などの詳細は不明とされる。なお、幕末に編まれた『東備郡村誌』では、城主を南北朝時代の佐々木三郎左衛門信郷（「信胤」の誤植か）とするが、城の構造などから判断される年代と合致しない。（河合）



第 191 図 怒塚城跡縄張り図
(1/2,000)

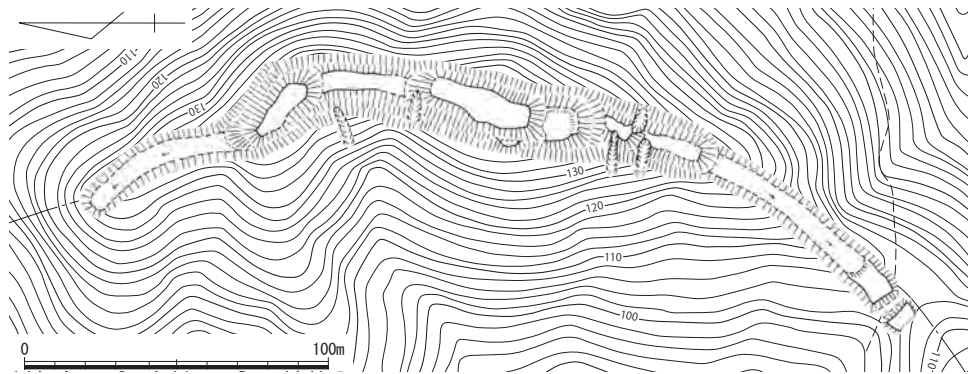


写真 217 南の堀切（北西から）



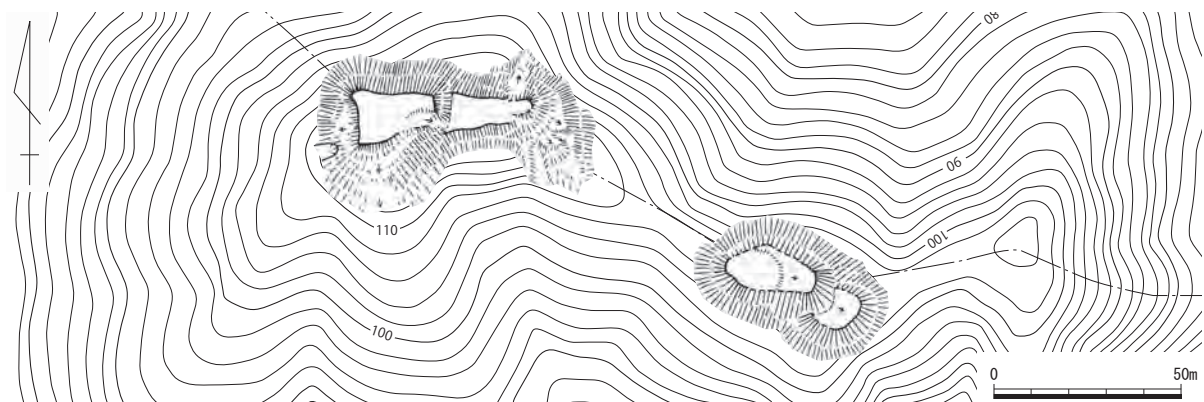
写真 218 曲輪Ⅱ土塁（南から）

立地 南北に細長く延びる尾根の山頂・鞍部に位置し、児島湖と瀬戸内海を結ぶ中間地点にあたる。
概要 山頂部に主郭を築き、その南・北下方に2～3面の腰曲輪が配置されている。また、豎堀や堀切も確認できる。尾根南側の鞍部には土塁状の高まりが伴う堀切がみられるが、峠越えの道として機能したようである。なお、尾根の南・北斜面の一部に段状地形がみられるが、性格は判然としない。
文献・伝承 『備前記』・『備陽記』では児島郡波知村に所在した「古城山」、『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』では佐々木盛綱が居城した「砂山城」に本城跡は比定される。ただし、実際は後代のものと考えられる。(澤山)



第 192 図 砂山城跡縄張り図 (1/2,500)

立地 東西方向に延びる尾根の頂部に位置し、南東方向には瀬戸内海を望む。
概要 主郭の東下には高さ約3mの切岸が伴う腰曲輪が配置される。さらにその東下にも高さ約3～4mの切岸が造られて平坦地が広がる。ここから尾根鞍部は自然地形が続くが、端部には曲輪が確認でき、その南東下に高さ約4～5mの切岸が伴う小曲輪が認められた。土塁や堀切はみられない。
文献・伝承 本城跡は、『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』記載の児島郡山田村に所在する三宅源左エ門（源左衛門尉信虎）や同掃部らが居城した「古城山」に比定される。(澤山)

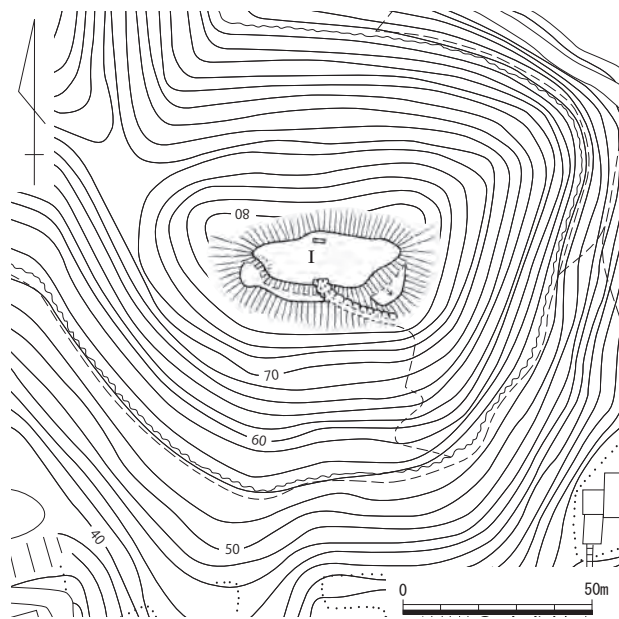


第 193 図 西田井地城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、田井集落の背後に所在する山塊から南に延びる尾根先端頂部に立地する。北西尾根続きは、頂部から 20 m 近く下がる鞍部となっており、独立丘陵のような山容を呈する。

概要 比高約 50 m の頂部に高さ 2～3 m の切岸を設けた約 40 m × 15 m の曲輪 I を造成する。この曲輪は、北側中央部に金比羅宮の小祠が祀られ、さらに南辺中央部に麓からの参道が取り付く鳥居が建てられるなど、若干改変を受ける。曲輪 I の南東側に約 10 m × 5 m の曲輪を設けるが、その削平は不十分である。南西側には、犬走り状の平坦面が取り付く小曲輪を配している。

文献・伝承 『備前記』や『備陽記』に記された「古城山」に比定される。城主は、『吉備温故秘録』で梶原三郎の子孫、『岡山県通史上編』で田井新左衛門信高と記す。(小嶋)

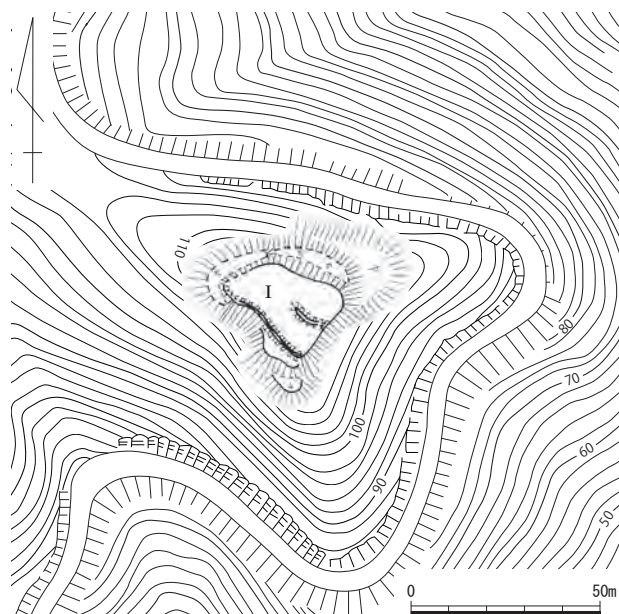


第 194 図 駿河山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、田井集落の背後に所在する尾根の頂部に立地し、南に瀬戸内海を一望する。約 1 km 西に駿河山城跡が所在する。

概要 比高約 110 m の頂部に占地した曲輪 I は、南西辺に最高所で約 2 m の高さを測る土塁を築いている。この曲輪内には、曲輪造成に際して意図的に残されたと思われる高さ約 1.5 m、幅約 1 m の土塁状の高まりが存在していた。曲輪 I の北東及び南東側は高さ 2～3 m の切岸を設け守りを固めるものの、尾根続きとなる北西側は、尾根鞍部まで緩やかな斜面が続き、堀切や明瞭な加工痕跡が認められない。南西辺土塁の前面には、2 面の小曲輪を築いている。

文献・伝承 『備前記』や『備陽記』に、田井村の村東に所在すると記載された「古城山」が比定されると思われる。(小嶋)



第 195 図 見能城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 山塊から東側に延びる尾根頂部に位置し、南方に瀬戸内海を望む。

概要 南側に低くなる比高差約 50cm～1 m の切岸が伴った 3 面の方形を呈する曲輪で主郭を構成しており、その北東・南側縁辺には低い土塁が巡る。この主郭から下方に向かって最大比高差約 10 m を測る急峻な切岸が設けられ、高い防御性を示している。また、この切岸下方には主郭を囲む大小の曲輪を配置しており、このうち、北西方向に延びる尾根に築かれた曲輪の下方には、平面形が「V」字状を呈する堀切が認められる。主郭中央の曲輪の北東・西隅には虎口が認められ、下方に配置した曲輪とつながる通路が取り付いているが、特に北西隅の通路は豎土塁状を呈している。

この本城から約 120 m 東方の尾根端部には、現在金比羅宮が造営されており、地形改変が進んで削平度も高いが、立地的に出丸が存在していたと推測され、特に南方向の眺望が良好である。

文献・伝承 児島郡上山坂村では、『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』は高畠右近が、『備陽国誌』・『東備郡村誌』は高畠和泉守が、『撮要録』は高畑和泉守、高畑右近が居城した「古城山」などの城館を記しているが、本城跡はこれらに比定される。



(澤山) 写真 219 主郭切岸と豎土塁状通路 (西から)

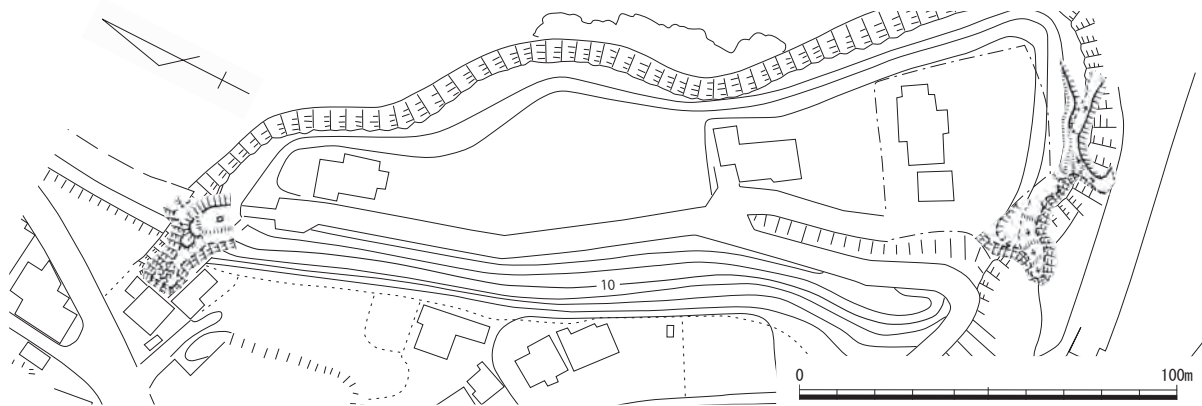


第 196 図 高畠城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 北西から南東方向に延びる丘陵頂部に位置し、東方が瀬戸内海に面している。

概要 丘陵南端部には曲輪や通路状遺構と推測される遺構がわずかに遺存している。丘陵北東端にも平坦地が認められるが性格は不明である。全域に地形改変が著しく、縄張りは判然としない。

文献・伝承 『東備郡村史』の高畠右近が児島郡番田村に居城した「壘址」は、本城跡に比定されるが、『備前記』・『備陽記』の浦兵部が同村に居城した「古城山」と同一かは不明である。(澤山)



第 197 図 番田城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 北西から南東方向に延びる丘陵頂部に位置し、南西方向に瀬戸内海が広がる。

概要 後世の地形改変が及んでいるが、胸上金比羅神社が建っている主郭やその周囲を巡る帯曲輪が認められる。また、主郭の北西側に配置された堀切は、現状で幅 15 m、深さ 5 m 程度を測り大規模である。ただし、全体的に半壊状態であり、築城当時の状況が判然としない。さらにこの堀切から北西側にも中央付近に平坦地が広がり、その周縁部に加工段が伴う地形が認められるが、地形改変が著しいため城館関連遺構としての評価が難しい。

文献・伝承 『備前記』・『備陽記』に記す児島郡胸上村の城館に本城跡は比定され、『備陽国誌』・『吉備温故秘録』・『東備郡村誌』には、高畠源太兵衛、高畠源兵衛などが居城とある。(澤山)

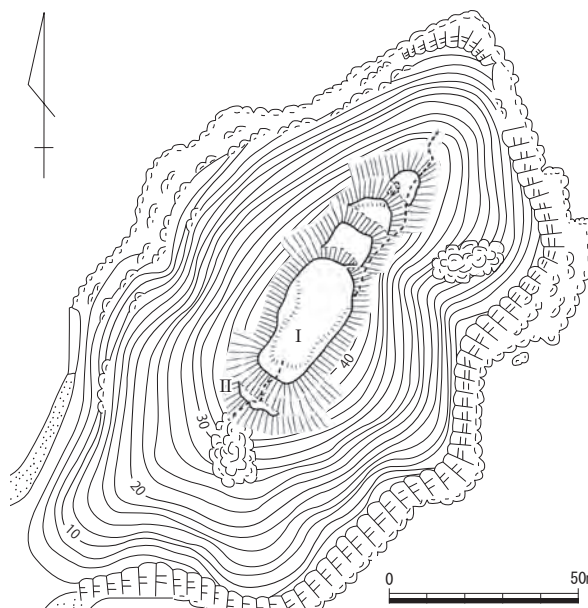


第 198 図 胸上城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、出崎半島中央部やや南側に位置する小丘陵上に立地する。南西側のみ陸地とつながっており、その他の3方は海に面する。

概要 標高約40mの頂部に高さ1～2mの切岸を備えた曲輪Ⅰを築く。この曲輪の内部には、緩やかな地形の下がりが見られる。陸続きの南西側は、風雨による崩落や土砂流出が激しいため人為的な加工段を認めづらく、唯一曲輪Ⅱのみ城館遺構と想定した。曲輪Ⅰから北東に延びる尾根筋には、地山中の巨大な露岩を切岸の一部に取り込んでいるものもある曲輪を3面連ねている。

文献・伝承 『東備郡村誌』や『備陽国誌』では、明田日向守を城主と記す。『山田村誌』では元亀年間(1570～1573)に緋田日向守貞信が居城し、その後、子の祐信、孫の則信が城主となったと記載する。(小嶋)



第199図 丸山城跡縄張り図(1/2,000)

立地 龍王山から西へ派生して瀬戸内海に突き出た尾根先端頂部に位置する。

概要 頂部に1面とその西側に1面の、計2面の曲輪で構成される全長70m程の小さな城である。頂部にある曲輪の規模は、長さ約45m、幅約25mである。規模の割に平坦地の造成はあまく、北東側は地形に影響されて凹む箇所がある。頂部は現在公園として整備されているが、北西側に岩盤が露出した箇所があり、ここが本来の曲輪の範囲になるのかもしれない。この曲輪の南側には、土塁状の高まりが築かれているが判然としない。西側にある1面の曲輪は、長さ約5m、幅約20mと規模が小さい。これらの東側鞍部には、高さ約6mの露岩によって落差をつけ、さらに堀切を築いて尾根筋を遮断する。

文献・伝承 故事来歴は不明である。(小林)



第200図 宮の鼻城跡縄張り図(1/2,000)

位置 倉敷市児島塩生に位置する。この地点は、最大幅 150 mを測る細長い半島の先端にあっている。現在、周囲はコンビニナートとなっているため旧観を留めない。しかし、築城当時は城の南・北・西の3方が瀬戸内海へ突き出た、海城の様相を呈していたものとみられる。城の周囲は急峻な崖となっており、城の東側のみ、児島半島（戦国時代当時はいまだ独立した島嶼部であった）と陸続きとなっている。やや俯瞰的に城の周囲を見渡せば、城域から北東へ約 2 kmの位置にあたる宇野津は、児島の中央部にあたる稗田地区まで続く山道の入り口にあっている。稗田地区からは、熊野神社の門前町にあたる郷内地区を経て、吉備穴の海に接する天城・彦崎地区へと続く間道が延びており、児島における陸路の要衝にあっている。したがって、本太城跡は瀬戸内海へ通じる海城としてだけでなく、児島を東西南北に貫く陸路の入り口を押さえる要地でもあり、その地政学的な地位は高い。

概要 城域は東西約 170 m、南北 200 mを測る。細長い半島上のほぼ全域が城域化されており、そ



第 201 図 本太城跡縄張り図 (1/2,000)

の最高所に主郭Ⅰが位置する。主郭は東西 50 m、南北 30 mを測る大形の曲輪で、その西面及び南面に石積みが見られる。石積みの高さは 60cm～1.5 m程を測るが、一部の石積みの上端は曲輪の天端にまで達しており、戦国時代当時のものであるかどうかについては検討の余地がある。また、主郭Ⅰの北東には平面方形で高さ 2 mの高まりがあるものの、これは太平洋戦争時下において使用された高射砲の陣地跡と伝わる。ただし、位置などから見て、もともと櫓台、あるいは司令所であったものを改変している可能性は残るのではないか。その是非については、さらなる調査にゆだねたい。

主郭から北西へ向かっては計 5 面の曲輪が連なる。この地点において注視すべきは曲輪ⅡとⅢの間にある凹地である。この地点は曲輪Ⅱ、Ⅲからみて 5 mも低い。この凹みの底部には湧水がみられ、池状の湿地となっている。また、凹みの南北に大形の縦堀が取り付くことから、『新修倉敷市史 2』では、これらと一連となった堀切状の遺構であると判断している。この説にしたがうならば、曲輪ⅡとⅢの間に、城域をほぼ完全に切断する堀切が存在していたこととなる。享保年間（1716～1736）に成立した軍記物、『南海通記』によれば「彼城（＝本太城）は三方を海岸にして巖石丈十丈に堀りをほり」とあり、あるいはこの堀のことを指すものか。曲輪Ⅲは城域でも屈指の規模を誇る曲輪で、東西約 50 m、南北約 30 mと、主郭に匹敵する大きさである。曲輪Ⅲの北西にはさらに曲輪が連なるが、最先端の曲輪の標高は 10 m程度となっており、主郭からは 20 m近い比高差がある。主郭の北西と南東には縦堀が掘削されている。また、南西側の縦堀近くには井戸が位置しているが、これも後世のもの可能性がある。主郭の南へも 3 面の曲輪が連なり、それぞれ腰曲輪、あるいは犬走りを伴う。城域の最南端は土取りによる削平を受けているため、判然としないが、こちらへも曲輪が連なっていた可能性は高い。主郭南に連なる曲輪群もその規模は大きく、特に曲輪Ⅳは南北 40 m、東西 30 mを測る。城域全体を見渡すと、主郭Ⅰを中心として、北西と南に続く尾根上を大規模に削平して曲輪を設けていることがわかる。その土木量は、莫大なものであったことが推察される。こうした大形の曲輪は兵の駐屯地であるだけでなく、海から船で運び込んだ兵糧の置き場としても利用されたのであろう。なお、地表面の観察に努めたが、礎石は発見できなかった。主郭Ⅰの東側には 1 面の曲輪がみられるものの、そのさらに東側の尾根上は削平を受けているため、旧状は判然としない。ただし、『備前軍記』には本太城の城域東側の尾根上に、堀切が存在したことが記されており、この削平地が堀切であった可能性を指摘しておく。

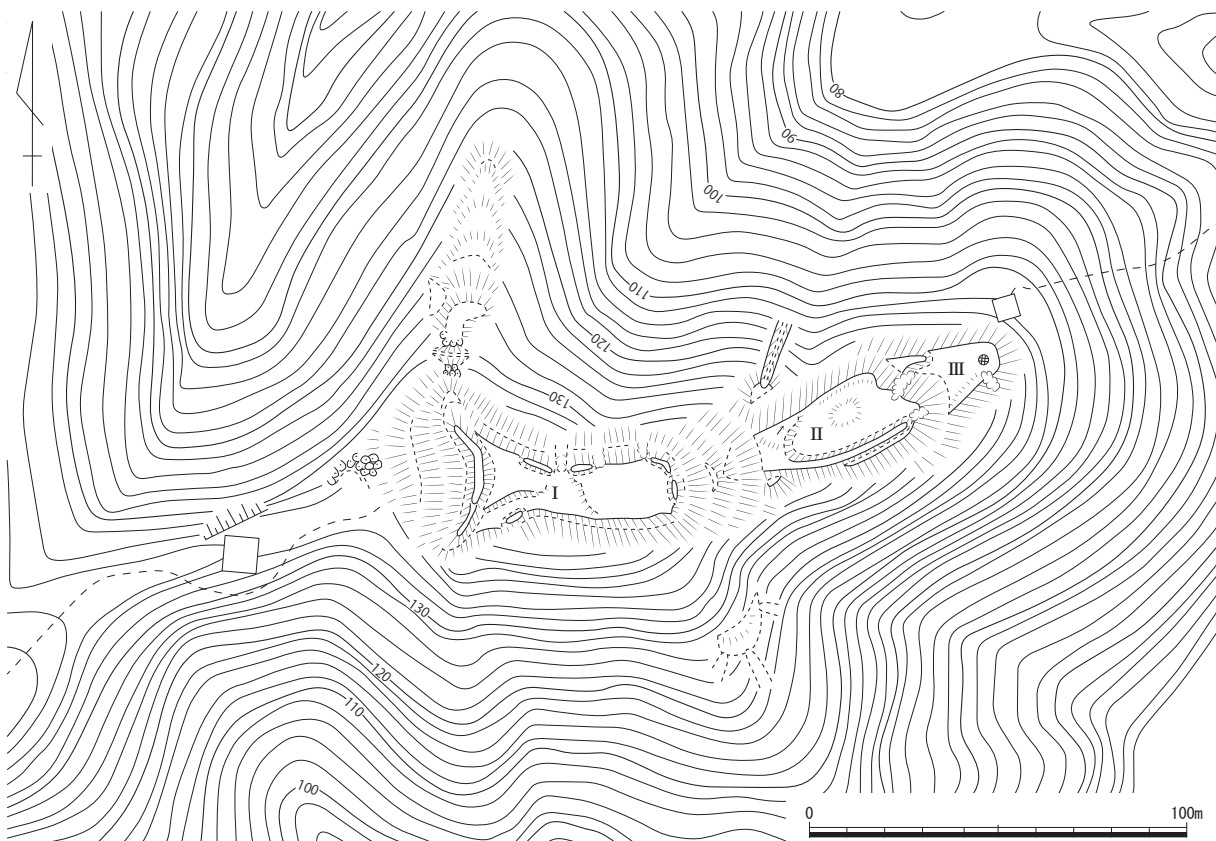
文献・伝承 本太城は永禄年中（1558～1570）には毛利氏の支配下となった。永禄 11（1568）年には讃岐国の国人で阿波三好氏の配下であった、香西氏と毛利氏との合戦がこの城を舞台として勃発している。この際九月二十九日付で小早川隆景から、本太城の在番であった村上武良あてに、香西一族を討ち取ったことに対する感状案が残る（一次史料 101）。ただ、この時、武良自身は本太城に籠もっていたわけではないようで、武良配下の島（嶋）吉利が在番を務めたという。しかし、武良は元亀 2（1571）年までには毛利氏と手を切り、浦上氏、三好氏と同盟する。同年三月十日付け小早川隆景書状によれば、隆景自らが本太城に出陣し、阿波三好氏の水軍に備えるとしている（一次史料 118）。この際、本太城は落城したようであり、毛利輝元が隆景あてに発給した祝意を述べる文書が伝わる（一次史料 121）。その後、本太城の帰属は毛利氏と三村氏との間で揺れ動いたようであるが、天正 2（1574）年、毛利氏と三村氏の間で勃発したいわゆる「備中兵乱」以後に、本太城は再び毛利氏の支配下となった。天正 8（1580）年には隆景が入城し、宇喜多氏との戦いに備えた。このように、本太城は毛利氏の児島進出の拠点的な城であった。（和田）

位置 倉敷市児島味野に所在する、通称城山の山塊端頂部に位置する。標高 140 m、周囲からの比高は 50 m を測るが、やや奥まった位置にあり、西側の瀬戸内海方面への眺望は優れない。逆に、城域の東にあたる味野集落方向を広く見渡すことができる。

概要 城は主郭とみられる東西 60 m、南北 30 m を測る曲輪 I を最頂部に位置付け、東へ 2 面の曲輪を連ねる連郭式山城である。城域の西端は岩山となっており、一部が平坦に削平されている。この地点が堀切であった可能性はある。曲輪 I は周囲から 6 m を超える切岸により突出しており、その西端に高さ 1.5 m の土塁を設けて遮断している。土塁は主郭北側と南側、及び東端にも一部残存しており、元々は全周していたものか。主郭の東に曲輪 II、さらにそこから 3 m 程下がった位置に曲輪 III が位置する。いずれの曲輪の周囲にも土塁と思われる高まりが残存しているほか、曲輪 III の東端付近に井戸と思われる凹みがみられる。曲輪 II の北西には豎堀が 1 本みられるが、これに対応する明確な防御線が存在せず、城道であった可能性がある。現状、曲輪 I の北側の斜面に豎堀状の凹みがみられる。この凹みを挟んで、東西には土塁が残存している。形状から推察して、この部分が虎口を形成していたものと考えられる。また、曲輪 I から南方向に続く尾根上にも平坦部があり、豎堀かとみられる遺構が取り付いているものの、あまり明確なものではなかった。

文献・伝承 この城に関する文献、伝承等は知られない。

(和田)

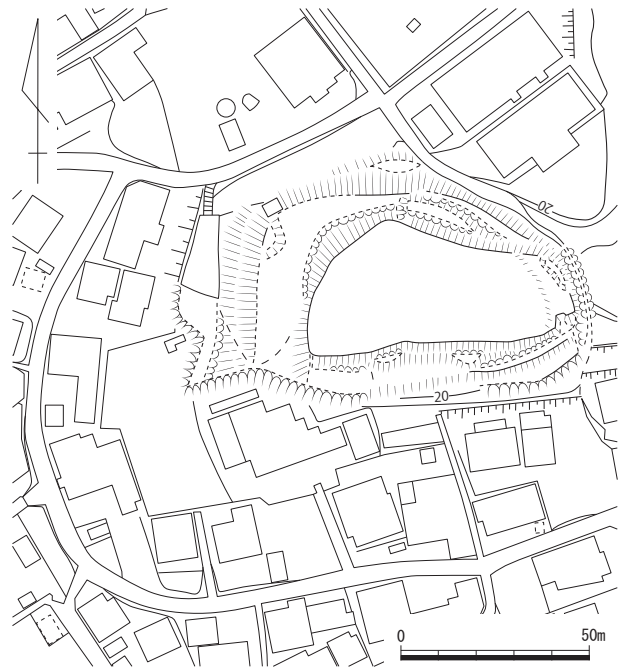


第 202 図 神水城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 児島港の近くにある児島下の町と児島小川付近に立地する丘陵の西側端部に位置する。

概要 頂部にある主郭から西側の尾根筋に曲輪を連ねた全長 110 m 程の小さな城である。頂部にある主郭は、長さ 70 m、幅 35 m の規模で東西方向に長い。ここから西側筋に連なる曲輪は 2 面ある。1 面目は長さ 15 m、幅 40 m で、2 面目は長さ 10 m で墓地によって北側半分は判然としない。どちらも段差が 5 m 近くあり高い。主郭を含めた曲輪群は改変が著しく、主郭南北にある段差も帯曲輪を形成していた可能性がある。主郭の東側には現在切り通しがあるが、これが堀切として機能していた可能性が高い。

文献・伝承 故事来歴不明。(小林)



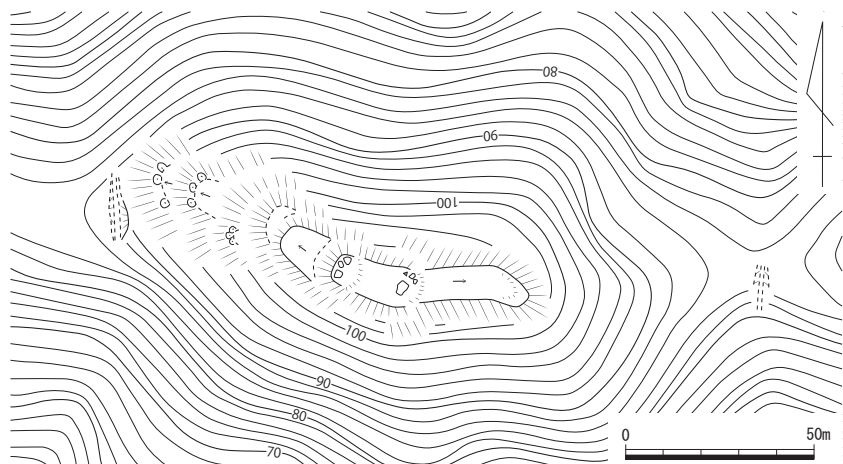
第 203 図 小川城の辻城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 児島半島の西岸、瀬戸内海に向かって西に張り出した湊岬の頂部標高 100 m に立地する。西に水島灘を望み、北の海岸に湊、南に高室の集落がある。北西 1.4km の岬上に宮の鼻城跡が位置する。

概要 中央は東西 52 m、南北 10 m の曲輪で、曲輪上に高さ 2 m 程の自然石の立石を残す地点が 2 か所程認められる。その西側に不明瞭な曲輪が 4 面連なっている。このうち下側 2 つの曲輪先端には、

1 ~ 2 m の大きさの自然石が重なっている。これら曲輪群西側と東側の丘陵鞍部で、堀切状の不明瞭な痕跡を 1 条ずつ確認した。さらに西側に離れた地点にも平坦面があり、曲輪として使っていた可能性がある。

文献・伝承 故事来歴は伝わっていない。(氏平)



第 204 図 湊山城跡縄張り図 (1/2,000)

位置 下津井港と塩飽諸島を南に見据える標高 90 m の丘陵状に位置する。城からは瀬戸内海方向の眺望に優れ、海を行き交う船を見張るには絶好の位置にあたる。城から四国までは幅 10km の海峡となっている。さらに、城下にあたる下津井港は古代より潮待ちの港として要港であった。以上、下津井城は瀬戸内水運を押さえる上で、重要な要衝に位置する。

概要 城域は東西約 600 m、南北 90 m を測る。東西及び南側は切り立った崖となっている。城は西から「西の丸」・「二の丸」・「本丸」・「三の丸」・「中の出丸」・「東の出丸」という 5 つの曲輪からなっている。部分的に土塁や堀切、土橋など中世城郭的な縄張りが認められるが、ほぼ全ての曲輪が石垣化された近世城郭である。破城のため、石垣の残存状況は良くないが「三の丸」の南には現状高さ 5 m を超える石垣が残されているだけでなく、曲輪の天端付近に栗石の散布が認められることから、築城当時は 8 m を優に超える高石垣により、侵入者を強力に遮断していたと思われる。城の最も西にあたる「西の丸」の北側と西側、そして最も東にあたる「東の出丸」北側には野面積みの石垣が残っている。いずれも高さも 2 m 程度と低い上、「東の出丸」では隅角が鈍角に開く鎬積となる。しかし、この部分の隅石はノミによる加工痕跡を残す割石となっており、いわゆる野面積みの石垣ではない。「本丸」及び「二の丸」では、倉敷市教育委員会により発掘調査が行われている。本丸及び天守台付近の調査では城の機能時のものと考えられる唐津焼や土師器皿、貝類などが出土している（文献 243・244）。なお、「本丸」や「二の丸」の各所で岡山城跡と同范となる瓦が出土しているほか、姫路の心光寺と同范となる平瓦も出土している。「二の丸」の調査では門柱跡と考えられる柱穴が検出されている。位置関係からみて幅 2 間の門であったと推測されている。また、門が検出された位置から考えて、本丸への侵入ルートは現在のように「三の丸」の南東隅から直線的に入城するのではなく、「二の丸」の南にあったとされる大手から、数度の折れを経由して入城していたとする。

文献・伝承 下津井城の築城時期について、明確に記した文献はない。年欠ではあるが、小早川隆景から村上武吉あてた文書中に「下津井」の名が見える。このことから毛利期に何らかの城郭が存在していた可能性がある。以後、慶長 6～7（1601～1602）年には小早川秀秋の重臣である平岡頼勝が入城し改修を開始するも、秀秋夭折により頓挫した。続く慶長 8（1603）年、備前国は播磨国姫路城主の池田輝政の子、忠継に与えられる。この時、輝政の実弟であった池田長政が、播磨国赤穂城より転じて下津井城に入り、翌慶長 9～11（1604～1606）年にかけて、改修を実施した。石垣の特徴からみて現在「本丸」と「二の丸」、「三の丸」など、下津井城の中心となる曲輪はこの時期に改修を受けたものとみて良いだろう。長政死没後、慶長 14（1609）年に池田氏の門閥家老である池田由之が城主となった後、家老交代により荒尾成房・成利がその跡を継ぐ。その後、寛永 16（1639）年に破却されたとする。ただ、朝鮮通信使の記録によれば、元和 3（1617）年にはすでに毀撤、すなわち城は壊され城兵も撤退していたとする（一次資料 283）。よって城郭としての機能は、元和初頭には失われていたものか。（和田）



写真 220 「三の丸」の石垣（南東から）



第 205 図 下津井城跡縄張り図 (1/3,000)

立地 南に下村川が東から西へ流れる谷を見下ろす山塊頂部標高約 180 m に立地する。南側の谷は由加山へ向かう道筋で、東へ由加山を通り過ぎ、峠を越えて約 10km 進むと岡山市・玉野市に所在する常山城跡に達する。また北西 1.5km に暇城跡がある。

概要 頂部に大きな主郭 1 面を設け、3 方向に延びる尾根筋には曲輪を設置し堀切で切断、さらに斜面の傾斜が緩くなった部分には豎堀を掘削するなど手の込んだ防御施設となっている。

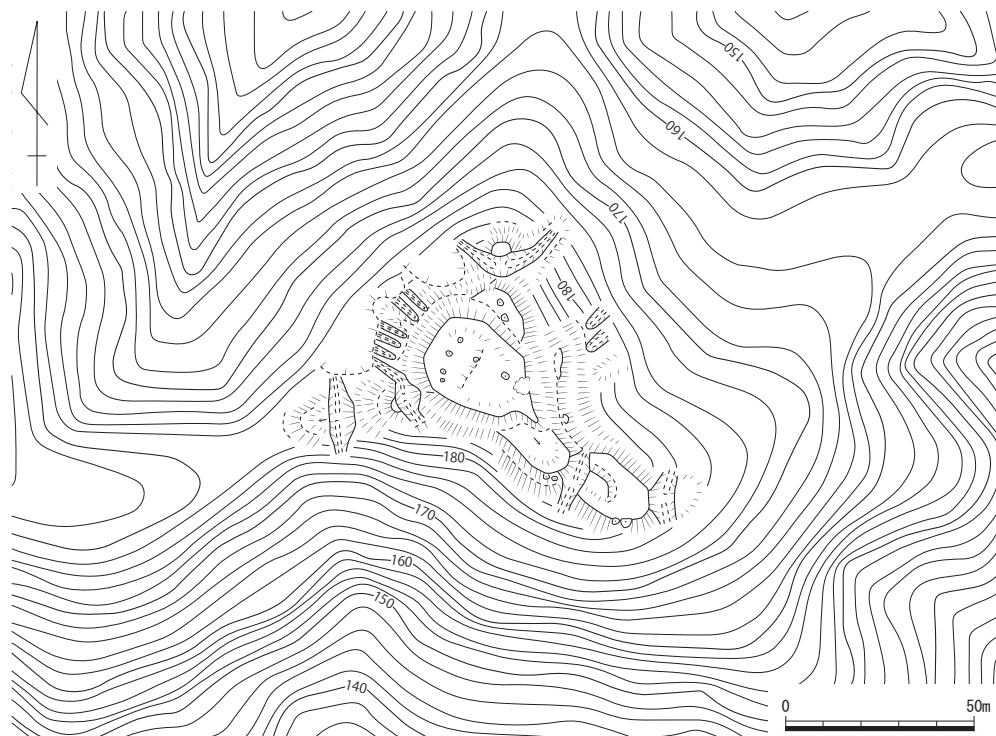
頂部主郭は東西 30 m、南北 22 m の多角形状で、南東尾根に向かい舌状に突出する部分を設ける。

主郭からは 3 方向に尾根が伸びている。北側の尾根は、頂部から 1 m 下に長さ 6 m、幅 16 m の曲輪 1 面があり、続いて深さ 3 m、東西 27 m を測る三日月形の堀切で切断する。西側の尾根は、深さ 3 m、南北 15 m の堀切、次に深さ 2 m、南北 22 m になる堀切と 2 重の堀切を掘削している。南東～東側の尾根には長さ 17 m、幅 10 m の曲輪 1 面、続いて深さ 3 m、南北 18 m の堀切、さらには東西 20 m、南北 14 m の曲輪、最後は深さ 2 m、南北 15 m の堀切で尾根上を切断する。主郭から 2 段下で堀切に挟まれる曲輪には中央西側に高まりがあり、これを避けて西へ進むと北側へ斜面を進むように仕組まれている。

頂部曲輪の西側斜面下方 5 m に、西側の最初の堀切から続くものを含めて 6 本の豎堀、東側には切岸と帯曲輪状の平坦面を経由して 2 本の豎堀を確認している。

文献・伝承 『備陽記』は「上村之内村北二岩山古城跡アリ城主不知」と伝える。

(氏平)



第 206 図 岩山城跡縄張り図 (1/2,000)

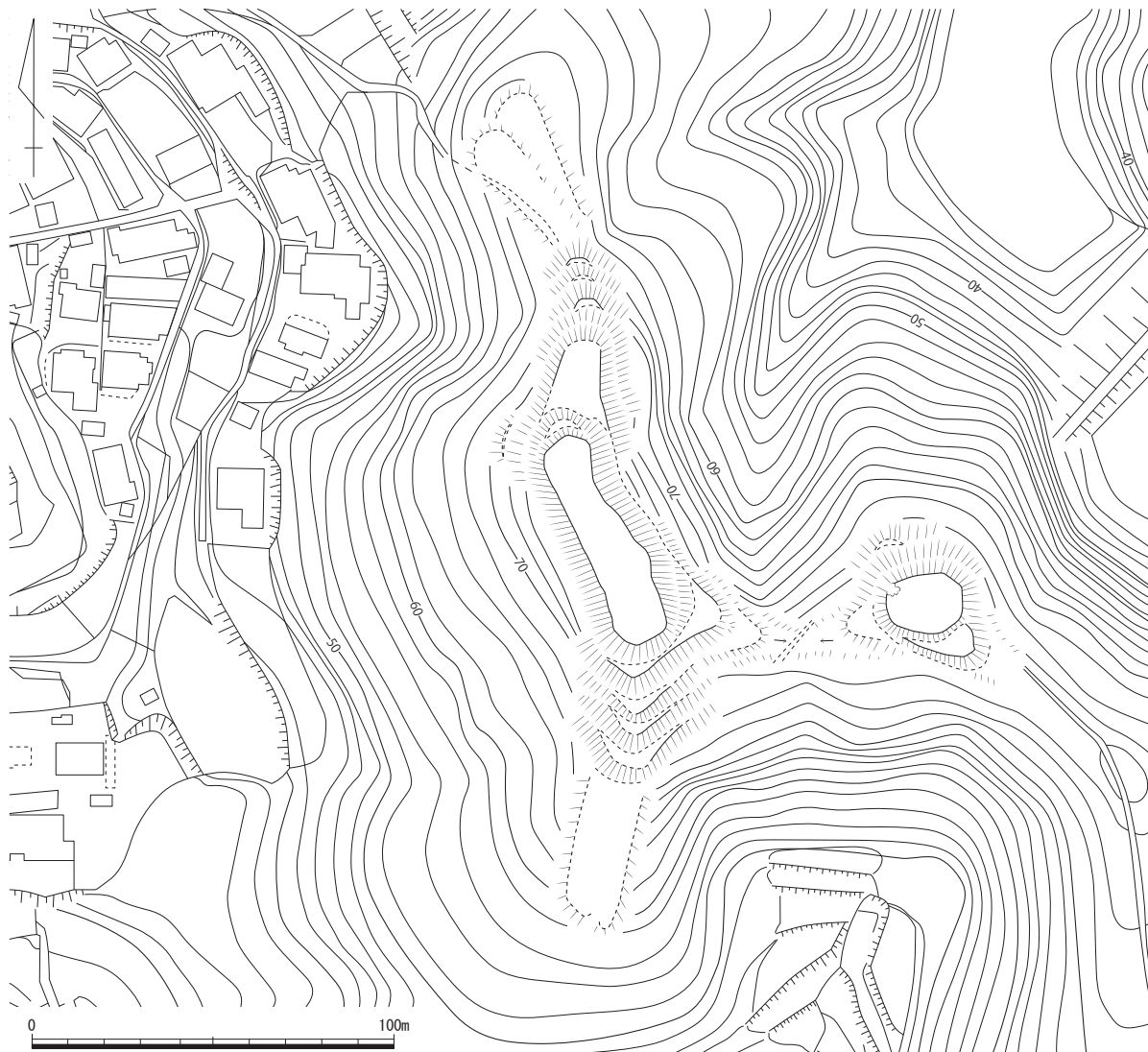
立地 仙随山から西へ派生する尾根の先端頂部にあり、当地の北側から西側付近に向けて流れる下村川の麓にあたる。当地の標高は約 70 m である。

概要 南北方向に細長い尾根上と、さらに東側へ延びる尾根上に曲輪を築いた山城で、南北長約 150 m、東西長約 120 m の規模である。平面的には「L」字形を呈している。南北方向の尾根筋頂部にある主郭は、長さ約 60 m、幅約 15 m の規模で、細長く平坦である。この主郭の南北両端に曲輪を連ねるが、特に北側には大小数面が存在する。主郭南側は小さい曲輪が 4 面程続く。西側尾根筋にある頂部には、長さ約 20 m、幅約 15 m の曲輪があり、その周辺にも曲輪を配している。

当城の周辺は、後世の畑地や竹林による改変が著しく、上記の遺構以外にもいくつか平坦地が存在している。これらがどこまで曲輪として機能したか、判然としない部分がある。

文献・伝承 故事来歴は不明である。

(小林)

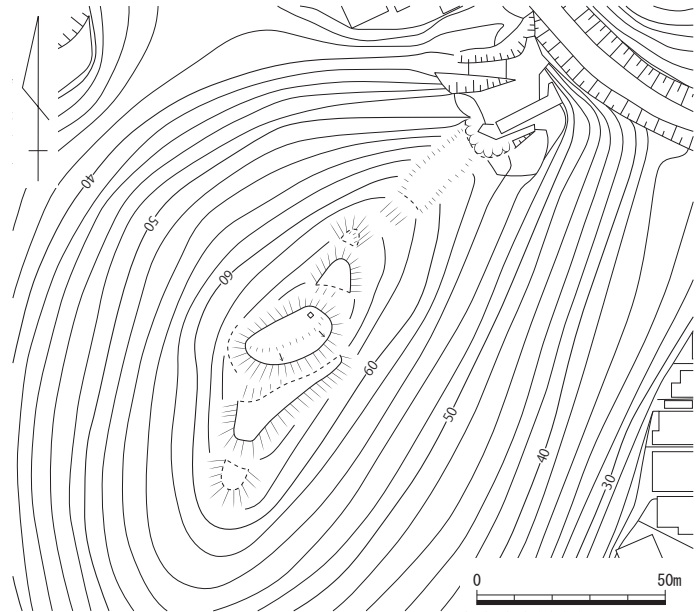


第 207 図 内田城ノ辻城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 仙随山から西へ派生する尾根の先端で、下村川へ向かい南西に突出した丘陵頂部標高 65 m に位置する。

概要 全域は南北 110 m、東西 20 m を測る。頂部は東西 23 m、南北 10 m を測る楕円形の曲輪で、曲輪面は南へ緩やかに下り、切岸は傾斜が緩い。北側に曲輪を 2 面連ね、南側は帯曲輪 1 面とその下方にも不明瞭だが曲輪 1 面がある。さらに尾根続きの南側は尾根が緩やかに下がり、石材採取と思われる穴が開いているが山城関連の地形改変はみられない。北側は急斜面の後約 20 m 平坦な自然地形が続く。

文献・伝承 『備陽記』の児島郡で「下村之内村東二古城山跡アリ城主不知」とあるのが当城と考えられる。(氏平)

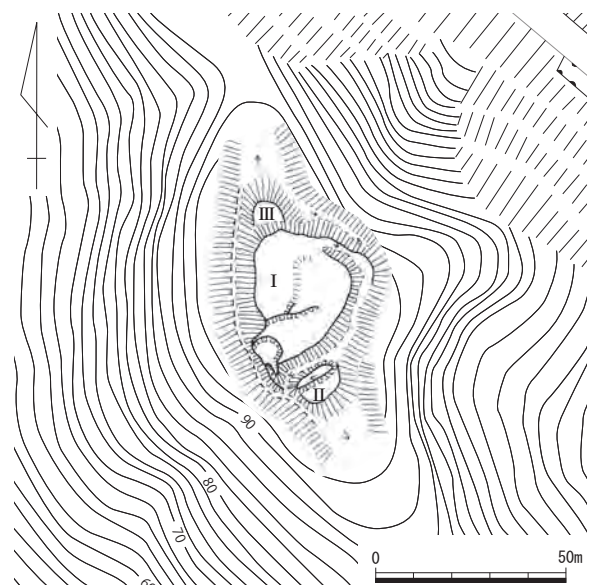


第 208 図 熊城山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、玉野市滝集落の西方背後に所在する山塊から南東へ延びる尾根頂部に立地している。玉野市滝から倉敷市由加山へ通じる往還や滝集落を眼下に一望し、谷を挟んで北東に滝城跡、西に寺上山城跡が所在している。

概要 頂部に占地した曲輪 I は、周囲に高さ 2～3 m の切岸を備える。堀底西端からの通路が取り付く曲輪 I 南西隅は 1 段低い方形を呈し、枡形虎口であったかもしれない。曲輪北東隅にも坂虎口が認められ、それに接続する通路は犬走り状平坦面を経て、堀切東端に至る。堀切の南側には、高さ約 50 cm の土塁を設け、さらにその南に曲輪 II を築く。それ以南には、明瞭な加工痕跡が認められない。尾根続きである北側は曲輪 III を造成する。

文献・伝承 城主や築城時期等については、一切伝わっていない。(小嶋)



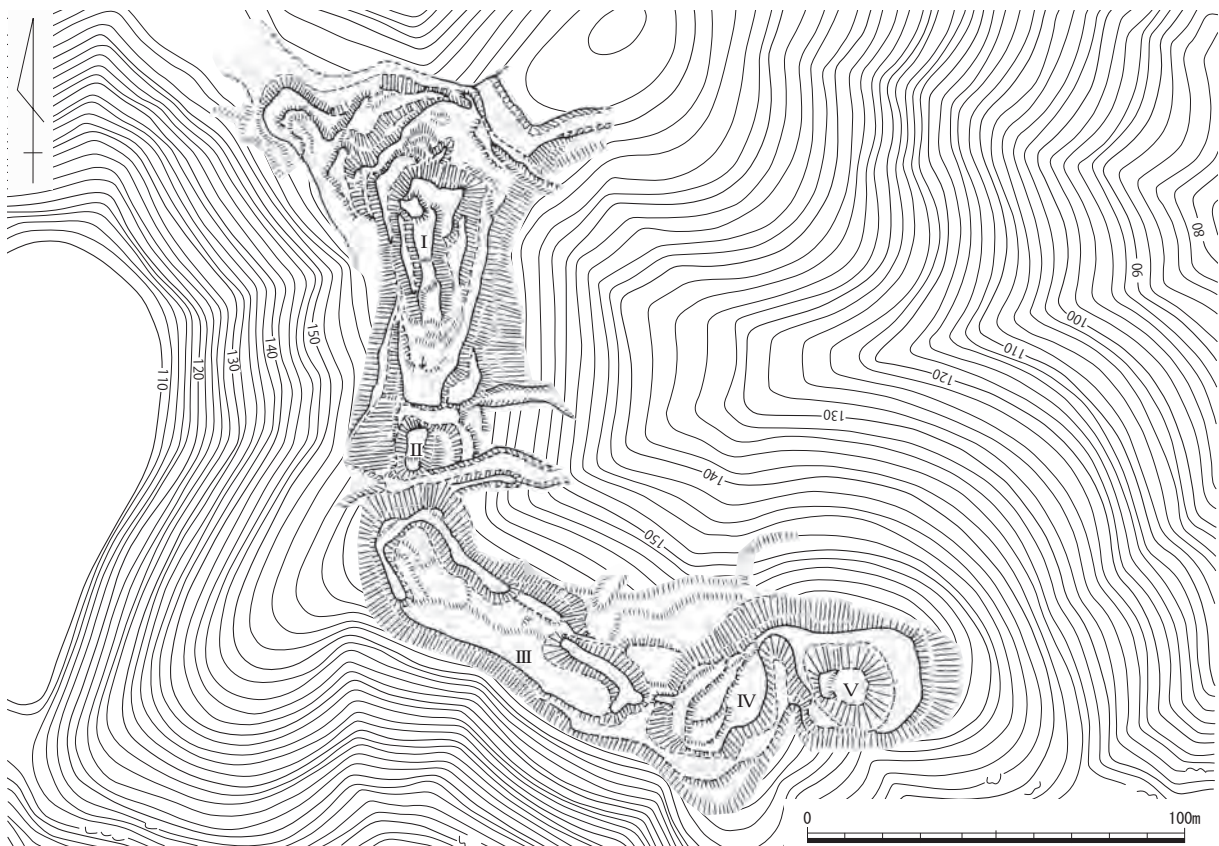
第 209 図 鍛冶山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 倉敷市との市境にある島池北東側の山塊上に位置し、南東方向に延びる尾根頂部に立地する。

概要 北から東方向に湾曲している自然地形に沿って築かれた連郭式の山城と思われる。尾根頂部の平坦面に対して4か所の堀切・豎堀等によって、大小5つの曲輪群が構成されている。

曲輪群Ⅰから北東・北西方向に延びる尾根には、堀切や切岸による防御がうかがえる。また、各曲輪は低い切岸が伴う細長い平坦面を段状に造り出している。曲輪群Ⅱは東側に自然地形を残す狭い平坦面を造り出し、その南・北側に堀切の掘削が行われている。曲輪群Ⅲの北・東・南辺には内側を削り出した土塁が巡り、これらに急峻な切岸が伴う。この土塁の上端は約2mと広く、通路としても使用されたようであり、曲輪群Ⅳにもつながっている。また、東辺中央の土塁では虎口が認められ、下方とつなぐ通路が取り付けられている。曲輪群Ⅳは自然地形を残す4面の小曲輪が認められ、西・東側にはそれぞれ南側に下る豎堀が認められる。尾根最南端にあたる曲輪群Ⅴは、大形の露岩が重なり合った状態であり、その頂部は狭い平坦面が形成されている。また、その南側下方には帯曲輪がみられる。全体として人為的な加工が認められるが、城館類似遺構の可能性もあり、城としての評価が難しい。

文献・伝承 児島郡滝村の城館として、『備前記』・『備陽記』・『吉備温故秘録』には城主不詳の「古城山」が記載される一方、『備陽国誌』には城主不詳として「寺上山城」と「鍛冶山城」の2城が記されている。ただし、城名の由来となった「正蔵院」は本城の東麓に建立されていることから、「寺上山城」は本城跡を示すものと推測され、地元でも現在このように呼ばれている。(澤山)



第 210 図 寺上山城跡縄張り図 (1/2,000)

立地 城は、旧児島郡のほぼ最南端に位置する城山に立地している。この城山は、フタコブラクダのような山容を呈し、北側峰部は標高約 85 m、南側峰部は標高約 70 m、鞍部は標高約 50 m を測る。『兵庫北関入船納帳』にも記載された日比の停泊港を足下に押さえ、瀬戸内海を一望するのみならず、対岸の香川県までも視認する。

概要 北側頂部（北群）と南側頂部（南群）に曲輪を配している。北群は、最高所に 45 m × 15 m の長方形を呈する曲輪Ⅰが占地し、その北西及び南東側に曲輪Ⅱ・Ⅲが配置される。曲輪Ⅰは平坦に造成されているが、北側の 1/3 付近で自然地形の段差と判断した下がりが見られる。曲輪周囲の切岸は高く急峻なもの、風雨によって土が流出したためか、緩やかな傾斜となっている場所もある。

南群は、最高所に地山中の巨石を取り込みながら 20 m × 15 m の曲輪Ⅳを造成しているが、一部自然地形が残る。これより南に向かって下がる尾根上には、城館関連遺構が存在しなかった。中央の鞍部へは急傾斜で下がるのみで、尾根筋に加工痕跡は認められない。

文献・伝承 『備前記』に記された向日比村の北にある古城山が比定され、同書では城主を四ノ宮行清と記す。『玉野市史』では、この城の遠景写真に「向日比四宮城趾」とキャプションを付け、四国香西氏一族の四宮隠岐守が弘治・永禄（1555～1570）の頃日比に進出し、向日比の城山を本城としたと記載する。

（小嶋）



写真 221 遠景（西から）



第 211 図 向日比城跡縄張り図（1/2,000）

第4章 歴史史料調査

凡例

- ・城が機能していた当時、関係者や見聞した人間が記した書状・日記その他の記録については、一次史料一覧表にまとめた。
- ・関係者自身やその子・孫が近世初頭に入って記述した覚書、比較的信頼できる中世軍記、近世初頭段階の地域住民の記憶を伝える文書など、リアルタイムの記録ではないが一次史料に準じる価値をもつ史料については、参考史料一覧表にまとめた。
- ・近世軍記については、史実に対する編集・改変や誤解・創作などを多く含んでおり、安易な利用が遺構の編年に齟齬を生じさせる恐れがあること、一つの出来事に関する叙述が大部に及び抽出自体が困難であることなどを踏まえ、本一覧表では調査・採録を行っていない。本報告書には軍記類の目録も掲出されると思われるので、その目録にしたがって各自で掲載書を読書されることをおすすめする。
- ・史料の配列と年月日について。史料には作成年代と内容年代とが一致しないものがある。例えば、史料の作成者が去年または数年前の出来事を振り返って記したもの（『鶴庄引付』など）、史料の作成者が老年になって自身の履歴や自身の関与した出来事についてまとめたもの（『赤松記』『牧左馬助覚書』など）、領主から依頼された禅僧などがある時点でその領主の履歴をまとめて記した賛文（『宇喜多能家寿像賛』）などがある。書状であっても、部下の去年の武功を翌年になって賞したようなものは、当然作成年と内容年にズレが生じる。こうした性質の史料が存在する点を考慮し、本一覧表では史料の配列・年月日覧の記載について、以下のような統一基準を設け、配列・年代記入を行っている。
 1. 一次史料・参考史料ともに、史料内に記されている出来事の発成年次（以下、内容年）に沿って配列した。
 2. 一次史料のうち、作成年と内容年にズレのあるもの、および参考史料の全てについて、年月日覧に内容年（作成年）と記入した。
 3. 賛文や覚書のように、一つの史料中に特定の人物が経験した出来事が一括して記述されているような史料については、出来事ごとに抽出した内容をそれぞれの発成年次に割り振った。
- ・史料の採録範囲について。古いものは平安末期の源平争乱期の記録（1100年代後半）、新しいものは織豊期から近世初頭に活躍した人物がおおむね死去する17世紀中盤ごろ（1650年代）までの史料を取り扱った（宇喜多秀家が死去するのが明暦元年＝1655年である）。新しいもののうち、内容が一次史料と一致し信憑性の高さが窺える記録については、一部17世紀後半にかかるとも採録した。特に池田家文庫に含まれる岡山藩士奉公書のうち、寛永～貞享年間に作成されたものには城館関係の有益な情報が豊富に含まれていることから、積極的に採録を行っている。18世紀以降については、それ以前に成立した各種史料・伝承の編纂期に当たり、完全に二次史料の範疇に入るため、調査・採録ともに見送った。

- ・近世まで存続する城館に関する史料の扱いについては、城の起源が確実に中世・織豊期に溯るものに限定して収録対象とした。近世を通じて存続した岡山城については、全時代の史料を網羅することは困難かつ本書の扱う範囲を超えているので、中世・宇喜多・小早川氏段階の史料に限定して収録している。備中松山城についても、今のところ小堀氏段階までの史料に限って収録している。津山城については、中世史料が全く残されておらず先行する中世城館があったかどうか確証がないこと、実質的に近世初頭の新規築城であることを鑑み、史料の採録を見送った。下津井城のごとく近世初頭の段階で廃絶した事例については、現在把握できる史料を悉皆的に採録した。なお、陣屋・代官所・台場については、今回史料の採録そのものを実施していない。
- ・中世文書においては、城名をもって城主の代名詞とする文法がしばしば用いられる。これらは本来城主の動向を示す史料ということになるが、城主の動向は城の歴史・使用主体と直結するものであるため、こうした文法で城名を記す史料についても全てではないがその多くを収録している。
- ・加茂崩れ・八浜合戦など、一部の著名な合戦関係史料については、文中に城名が記されていないものも参考までに収録している場合がある。
- ・都市・城下町にかかわる史料、城・陣として利用された実績のある山岳寺院の史料、荘園経営の拠点である政所に関する史料も一部収録した。特定の領主と結びつく可能性のある屋敷・土居などの記述がみえる史料も採録したが、必ずしも居館的なものを表現したものではない可能性もあり、あくまで参考史料と考えていただきたい。
- ・中世文書のうち、書状類のほとんどには年紀が記載されていない。一覧表収録にあたっては、これらの史料を収載する資料集の年代比定に従って各史料の年代を決め配列しているが、近年の研究進展で年代比定がより確実なものに改められたものについては、最新の成果を反映させて配列を行った。また、特に研究成果のないもの・既存の研究成果が存在するものでも編者の検討の結果従来の年代比定を改めるべきと判断したものについては、適宜よりふさわしい年代を与え、配列を行った。
- ・上述のような作業によっても現状では確実な作成年を特定できない史料については、発給者の死去・没落時や勢力交代の画期など適宜の時点で、年未詳文書としてまとめて掲載している。
- ・本来縦書きの史料を横書きで表記するため、次のような基準を設けた。
 1. 引用した史料原文に割注・傍注・挿字が含まれる場合は、割注・傍注が付されている語句の直後に《割注：〇〇》《傍注：〇〇》、挿字箇所には《〇挿字：〇〇》と表示した。
 2. 古文書独特の長い繰り返し記号（「く」を縦長にしたような記号）は、「\」に置き換えて示した。合字「㍊」（より）については英小文字「y」に置き換えて示した。
 3. 刊本に編者による注が施されている場合は、注の対象となる文字列の直後に〔 〕で括った注記を挿入している。校訂注によって異本の語句を示している場合は、〔異本：〇〇〕と表記した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入している場合は、挿入箇所に〔〇異本：〇〇〕と表記した。
 4. 本資料編の編者が独自に注を付す場合は、注の対象となる文字列の直後に【 】【異本：〇〇】と記述して示した。底本の本文に異本にしかない語句を挿入する場合は、挿入箇所に【〇異本：〇〇】と表記した。
 5. 見せ消しについては、訂正後の語句のみ二重下線引きで表示した。訂正前の語句については出典書を確認願いたい。

- ・各史料については、専門家・研究者のみならず広く一般の読解の便をはかるため、抄録部分について逐一現代語訳を載せている。わかりやすさを優先して大きく意識を進めており、編者の能力の問題もあって万全の訳となっていないと思われるが、史料内容の大まかな把握は可能になっているはずである。
- ・以上のような編集状況をふまえ、利用者諸賢におかれては、年代比定・内容意識など各自適否を検討された上で利用されることを希望する。
- ・一次史料一覧表、参考史料一覧表に続いて、引用文献一覧表を掲載した。一次史料一覧表、参考史料一覧表の再右列にある文献番号は、この引用文献一覧表の番号に準じている。なお、文献番号は史料読み仮名を50音順に並べたものである。(畑 和良)

表5 一次史料一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
1	藤原兼所領議状案/東寺百合文書へ函15	讓渡 孫太郎範長所 合 (中略) 一備前国光延・国富兩名内屋敷寺所田島《割注：坪付在別紙、》事 (中略) 右、所領等者、範兼相伝当知行無相違之地也	藤原範兼こと寺田範兼が、家督の範長に対し、備前国光延・国富名の内にある屋敷を相伝の所領と共に譲ったもの。	備前国光延・国富兩名内屋敷 (場所未詳)	右兵衛尉(藤原範兼=寺田範兼)	正和二年九月十二日	1313年	27
2	尼阿一代覚恵重訴状/飯野文書	阿一子息松田七郎三郎構城郭、語置所々悪党人等、打入福輪寺村、惣領知行分百姓等家々連日致濫妨狼籍(藉)之間、訴申刻、怨彼七郎三郎所犯、致造沙汰云々	尼阿一の子息松田七郎三郎が城郭を構え、所々の悪党を語らって福輪寺村に打ち入り、百姓の家々に連日乱暴狼籍を行った、との訴えがあった。しかしこの訴えは七郎三郎を怨む側の作り話である、との内容。	松田七郎三郎城郭 (場所未詳。福輪寺村周辺)	備前国則安名内福輪寺村地頭尼阿一代覚恵	元徳二年後六月	1330年	12・99
3	足利尊氏御判御教書案/肥前深堀文書	備中国福山・備前国三石・播磨国赤松凶徒等、去十八日没落	備中国福山城・備前国三石城・播磨国白旗城を囲んでいた敵軍が、去る五月十八日に撤退した。	備前国三石 (162三石城跡)	(足利尊氏)	建武三年五月二十五日	1336年	104
4	少式頼尚書状案/肥前深堀文書	備中国福山・備前国三石・播磨国赤松凶徒等、十八日(日)没落	備中国福山城・備前国三石城・播磨国白旗城を囲んでいた敵軍が、五月十八日に撤退した。	備前国三石 (162三石城跡)	太宰少式頼尚	(建武三年)五月二十五日	1336年	104
5	安養寺衆徒申状/備前安養寺文書	去年三月比、当国大將軍尾張左近將監殿自兒島可奉致 將軍家御祈禱之旨被相触之間、始同十一日七ヶ日間、(中略)御祈禱之處、同十七日相当結願日、於社頭白幡三流現虚空(中略)同廿日將監殿御入三石城之時御逗留于当寺之間、件白幡者山王三聖定被頭御方可令乘勝給之瑞相歟之由、衆徒等令言上(中略)依之三石城郭無為、將軍家御上洛無事矣	去年三月ごろ、備前国の大將軍尾張左近將監(石橋和義)が足利尊氏のために祈禱するよう触れを出したので、七日間祈禱したところ、社頭の虚空に白幡三流が現れた。三月二十日、石橋和義が三石城に入った時、安養寺に逗留したので、例の白幡は味方勝利の瑞相であると言上した。これにより三石の城郭は無事で、尊氏も無事に上洛できた。	三石城 (162三石城跡)	(安養寺衆徒)	(建武四年)	1337年	7
6	大乗院日記目録一	正二位大納言尊氏為將軍中国進發、師直・師泰兄弟相共、十一月十九日備前国福岡二著給	足利尊氏を將軍として中国地方に進發し、高師直・師泰兄弟と共に十一月十九日備前国福岡に到着した。	備前国福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)		(貞和)六年	1350年	68
7	足利尊氏御内書/荻野惣次郎氏所蔵文書	ちんせいほうきにて、八つかうする所なり、すてにひせんの国三いしまてつきて候なり	鎮西で敵が蜂起したので、これを鎮圧するため発向したところである。既に備前国三石まで到着した。	ひせんの国三いし (162三石城跡)	(足利尊氏)	「観応元年」十一月十八日	1350年	4
8	松浦相知秀言上状/松浦文書七	去年十月廿八日、令中国御共、致夙夜奉公之忠、同十二月卅日自備州福岡御入洛御共仕	松浦相知秀は観応元年十月二十八日に足利尊氏の供をして中国地方に赴いて昼夜奉公し、同年十二月三十日、備前福岡を發って上洛する尊氏に従った。	備前国福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	松浦相知治部左衛門尉秀	観応二年七月	1351年	82
9	三吉覚弁着到状/鼓文書	去十一月十六日、自備後国馳参当国《割注：備前》山口御陣以来、迄于今惣領備後守相共、所令在陣也	三吉覚弁は、去る十一月十六日、備後国から備前国の山口御陣に馳参じて以来、今に至るまで惣領三吉秀経と一緒に在陣している。	当国備前山口御陣 (場所未詳。鳥取庄山口分のうち)	三吉少納言坊覚弁	文和元年十二月七日	1352年	12・83

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
10	三吉覚弁軍忠状／鼓文書	去年《割注：文和元》十月、(中略)山名左馬権頭打越備前国取鳥庄之間、被召向陣畢、仍令在陣(中略)当年《割注：文和二》正月十日、備前国迫山合戦、備前・備中両国御方軍勢等打負、及難儀之間、大将御懸之時、惣領秀経相共、入替依致軍忠、御敵等引退了	文和元年十月、山名師義が備前国鳥取庄へ侵入してきた。石橋和義は山名軍を迎え撃つ陣を構え、三吉覚弁もこれに従って在陣した。文和二年正月十日に備前国迫山の合戦で味方軍勢が敗れ、困難な状況にあったので、大将が攻めかかった際に覚弁も惣領三吉秀経と一緒に軍忠を尽くし、敵を退却させた。	(取鳥庄) 向陣 (史料9「山口御陣」と同一) 備前国迫山 (場所未詳。諸説あり)	三吉少納言 房覚弁	文和二年正月	1353年	12・83
11	道ゆきぶり	其日はふく岡につきぬ、家ども軒をならべて民のかまどにぎはひつゝ、まことに名にしおひたり	備前国福岡に到着した了俊が、家が軒を連ね飯を炊くカマドの煙がたくさん立っているという表現で集落の繁栄ぶりを記録したものの。	ふく岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	今川了俊	応安四年	1371年	49
12	毛利元春自筆事書案／毛利家文書一	観応元年(中略)、同七月高越州中国二下向、同八月世上乱之間、大將軍福岡御下向	観応元年七月に高越後守(師泰)が中国地方に下向し、八月から世上が乱れるようになったので、大將軍(足利尊氏)が福岡に下向した。	福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	毛利元春	永和二年五月(観応元年)	1376年(1350年)	12・81
13	室町幕府管領(斯波義将)施行状／八坂神社文書	備前国散在斗餅田領主千代寿丸申当領主職事、重解状如此、所詮、熊山靈仙寺并熊野山大武坊致押領云々、頗招其咎贖、可止彼等違乱之由、度々被仰候	備前国に散在する斗餅田が、熊山靈仙寺と熊野山大武坊に押領された状態なのは大変罪深いことなので、彼らの違乱を止めるよう何度も將軍の下命があった。	熊山靈仙寺 (150熊山城跡)	左衛門佐(斯波義将)	嘉慶二年十二月十二日	1388年	136
14	華鬘箱墨書銘／弘法寺文書	備前国熊山靈仙寺本堂花鬘箱常住物也	熊山靈仙寺本堂で行う法要に使う華鬘を保管する箱の銘文。	熊山靈仙寺 (150熊山城跡)	別当祐円(斯波義将)	康徳元年十一月十五日	1389年	9
15	伊予法眼縁親書状／東寺百合文書又函261	棟別事、委細承候、(中略)守護代之事を被副候てすり候へく候を、連々申候へハ、屋形へ尋申候はんなど候て、それ二延引候き、連々福岡へ人を遣、京都の御左右承候はんと申候へハ、いまた無左右など返事候、	備前国内の荘園・公領から棟別銭を徴収するため活動していた縁親が、状況を報告したものの。徴収を円滑に行うため、縁親は備前国守護代の助力を請うたが、守護代(小寺伊賀入道)は屋形(守護赤松氏)に尋ねてみる、などと言うので、その返事待ちで棟別銭徴収が延引している。守護代のある福岡へ使者を派遣して、京都(幕府周辺)の情勢を教えてくれ、と申し出たが、未だに特段の報せもない、と返事されたという。	福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	(伊予法眼) 縁親	(応永二十五年) 六月九日	1418年	3・11
16	伊予法眼縁親書状案／東寺百合文書又函311	一、棟別事、守護方にもとかく申候て延引候、妻出候候てといふ事にありけに候、守護使出候へハ、所々承引候ましきよし申候程二、守護使をたひ候へと申て候へハ、屋形へうかゝい候へきよし被仰候、今月十日福岡へ罷出候て礼を申て候、料足礼馬など用意候て罷越候へハ、やかて対面候、(中略)一、先々不致沙汰在所を、小寺方より注文を出候、うらに小寺判候、此注文の在所、皆国中大庄にて候、是を除候者、いか程にも取候はんする分ハ候ましきよし申候、	上記史料に関連。縁親が棟別銭徴収について守護赤松氏に助力を願っているが、あれこれ言って延び延びになっていた。守護側は、妻が実るまで待てと言いたげであった。縁親は、守護使を出してくれないと、諸所の荘園公領は棟別銭徴収に応じてくれないので、守護使を派遣してほしいと守護代に願い出たが、屋形(守護赤松氏)に伺いを立ててから、と返答された。今月十日に縁親は、福岡へ出向いて守護代に挨拶に行き、金品や馬などを贈ったところ、対面してもらえたという。また、守護代小寺氏より、以前から租税を納めていない在所のリストをもらった。これに書かれている在所は、どれも備前国内では大規模な荘園ばかりだった。これらを免租地として除外してしまつたら、棟別銭は少ししか集められないようだった、という。	福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	(伊予法眼) 縁親	(応永二十五年) 月日欠	1418年	3・11
17	細川氏奉行入連署禁制写／『吉備温故秘録』巻之四十六 古簡三 寺院二 照光山安養寺所蔵文書	禁制 備前国新田庄安養寺(中略)(裏書)細川治部少輔殿制札《割注：赤松礼時七、嘉吉元年九月九日福岡にて是を取也、年行事奥坊英秀》	嘉吉の乱の際、赤松満祐追討のため備前国守護細川氏久の軍勢が備前国へ侵攻した。安養寺の寺僧奥坊英秀は、福岡に進駐する細川軍のもとに出向き、交渉して寺の安全を保証する禁制をもらった。禁制裏書はその経緯を記したものの。	福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	左近将監・甲斐守(庄氏)・沙弥(石川満経)	嘉吉元年九月日	1441年	35

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
18	承礼書状／足利時代古文書	抑治部少輔□〔殿カ〕当国へ御発向候間、[]【三石カ】城懸て□落候、播州も落居候間、目出度令候、我ら今月十一日三野新庄へ入部仕候、地下人備中宮内まで追々罷出候 ※国会図書館デジタルアーカイブズ掲出の原本画像によって、欠損部分の文字を推定した。	承礼なる者が嘉吉の乱中の備前国の状況について、春熙軒に報じた書状。細川氏久（治部少輔）が備前国に出陣してきたので、三石？城もやがて陥落するだろう、播磨国での戦闘も落ち着いたので目出度い、と述べている。また、承礼自身は九月十一日に備前国三野新庄へ入部したこと、地下人が備中国宮内まで出向く予定であること等を伝えている。	[]城（162三石城跡カ）	承礼	(嘉吉元年)九月十七日	1441年	54
19	三宅時実寄進状写／『黄薇古簡集』巻第十五・児島郡八浜村両見山金剛寺所蔵文書	右件免田者、依京都仰寄進申也、(中略)波知政所 三宅時実(花押)	児島郡波知政所の三宅時実が、京都（細川氏か）からの命令に従って金剛寺に免田を寄進したものの。	波知政所（場所未詳。玉野市波知・八浜地内か）	波知政所 三宅時実	文安五年三月二十五日	1448年	14
20	大内政弘感状／山口県文書館蔵右田毛利家文書	七月八日備中国下津井、八月四日播州越清水、(中略)去四日北小路室町、於彼所々合戦之時、御手人々太刀討分捕被疵之条、承候了	周防・長門守護の大内政弘が、安芸国人天野弘氏（讃岐守）に与えた感状。応仁元年七月八日の下津井合戦、八月四日の越水合戦、十月四日の洛中での合戦にて、天野氏の手勢が挙げた数々の殊勲について委細承知した旨を伝えている。	備中国下津井（267古下津井城に関連か）※備中国は備前国の誤り	(大内)政弘	(応仁元年)十月十日	1467年	142
21	備前国熊山靈仙寺鐘銘	奉鐘鑄 備前熊山靈仙寺 大工左衛門尉 新田庄内寺見村 大檀那祐長	靈仙寺の梵鐘の銘文。大工（鑄造者）は左衛門尉で、新田庄寺見村の祐長が寄進したことを示す。	備前熊山靈仙寺（150熊山城跡）		応仁二年十一月十五日	1468年	84
22	吉備津宮旧記／吉備津神社文書	文明七年十二月廿九日歟、金台院へ久昌庵屋敷二段、(中略)永代被活候処、正月十四日二久昌庵屋敷二反迄無候とて、備前富山使山本三郎左衛門と申者嘸越、地を踏、一反廿代と申(中略)社務理性院菅方へ約束とて、備前へ被越候、城のかまへ共候とて先預申候とて、十三貫七百八十文二郎三郎にて持越候を預候(後略)	金台院へ売却した屋敷地二反につき、実際にはそんなに面積はないはずと言って、備前国富山の使者山本氏がやってくるまで測量したところ一反二十代しかないとのことだった。理性院が吉備津宮の社務職を松田菅氏に任命すると約束していたので、備前国へ行くこと、城を築城しているのとおりあえず(持参金を)預かっておくといわれ、十三貫文余を預けた。	備前富山、城のかまへ(178富山城跡)		文明八年三月二十九日	1476年	8
23	難波行豊軍忠状／備前難波文書	同年五月、播磨国難入御手、備前州事、於福岡小鴨太〔大〕和守構用菅、依国中相踏、御退治急度難叶之間、行豊於京都、浦上美作守相談、愚兄掃部助并同名等、可致計略之由申下之處、小鴨一族被官等、為山名修理大夫調談、美作国打越之時、掃部助并同名等、於路次懸合、宗者十余人討捕之、依其利、国中御被官衆同心、差寄小鴨館、追散	応仁元年五月、備前国では小鴨大和守（山名氏重臣）が福岡に要害を構築し、国中を掌握していたので、すぐに退治することは難しかった。そこで、赤松方の難波行豊は京都で浦上則宗と相談し、兄の掃部助や一族に計略をめぐらすよう指示した。ちょうど小鴨一族と家臣たちが、山名政清と相談するため美作国へ向かったため、掃部助らは路次で小鴨一党を襲撃して勝利し、その勢いに乗って小鴨を館から追い散らした。	於福岡小鴨太和守構用菅、小鴨館（190福岡城跡・197福岡奥之城跡）	難波十郎兵衛尉行豊	文明十三年四月七日(応仁元年)	1481年(1467年)	11
24	上原祐貞過書／東寺百合文書た函150	備中国下向人式人之事、御役所上下無相違、被逐御意候者、可為祝着候	備前国守護赤松政則の在京奉行上原祐貞が、備中国新見庄へ下る東寺の使者二人に与えた過書(通行手形)。宛所は備前国三石の御役所(関所)になっており、使者が往復するにあたり無事に三石の関を通行できるよう配慮せよと記されている。	備州三石御役所（162三石城跡および番号なし出丸に関連）	上原次郎左衛門□〔尉〕祐貞【貞】	(応仁元年～文明十三年ごろ)七月二十六日	1467～1481年ごろ	11・117
25	蔗軒日録	備之福岡嶋田越中入道、平頭七十也、今春避乱在児島、近日入京	備前福岡の島田（島村の誤り）越中入道は、七十歳である。今年の春に戦乱を避けて児島にあり、近日京都にやってきた。	備之福岡（190福岡城跡・197福岡奥之城跡）	季弘大叔	文明十六年六月二日	1484年	98
26	山名政理書状写／『閩閩録』巻百廿一一周布吉兵衛	就赤松兵部少輔出張之儀、去年十月二日御発足事申候キ、然間去月廿六日備前国福岡城江牢人等取懸候、当国江も可打入由にて、備中国堺目二相集候、如此条不時替、罷上候者、可為祝着候	赤松政則（兵部少輔）の出陣に對抗するため、去年十月二日に山名政豊も出馬した。赤松牢人たちは一月二十六日に山名方の備前国福岡城に攻めかかり、美作国へも侵攻するため備中国境付近に集まってきた。これらの戦況を受け、美作国院庄館にいる山名政理が、石見国の周布興兼に対し、時日を移さず急いで美作国へ駆けつけるよう要請したものの。	備前国福岡城（190福岡城跡・197福岡奥之城跡）	(山名)政理	(文明十七年)二月一日	1485年	12・112

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
27	山名政豊感状 ／田総家文書 (『閩閩録』巻八十九 田総惣左衛門に写しあり)	去廿二日、於備前国福岡合戦之時、父豊里討死畢、尤以神妙也	二月二十二日、備前国福岡の合戦で、田総豊里が山名軍に属して戦い、討死した。その功績を賞した山名政豊が、豊里の遺子新次郎(好里)に与えた感状。	備前国福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	(山名政豊)	文明十七年二月二十七日	1485年	12・85・111・142
28	蔗軒日録	或者告曰、先月廿二日、備之福岡合戦、松田一門死者過半、使人問之富那宇屋之宗元居士、々々出死者注記、菅一門披官十四人	ある人の報告によると、二月二十二日の備前福岡合戦で、松田一族の過半が死去したとのことだった。人をやって富那宇屋の宗元居士に質問すると、死亡者の注記を送ってきた。松田菅氏の一門・家臣十四人が死去したとあった。	備之福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	季弘大叔	文明十七年三月一日	1485年	12・98
29	蔗軒日録	或者至告、浦上紀三郎於備之戸石城戦而死、今日五日也	ある人の報告によると、浦上則国(紀三郎)が備前戸石城で戦死したとのことだった。今日五日のことという。	備之戸石城 (214砥石城跡)	季弘大叔	文明十七年閏三月九日	1485年	12・98
30	蔭涼軒日録	此日備前福岡敵退散云々	この日、備前福岡にいた敵(山名軍)が退散したという。	備前福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	亀泉集証	長享二年七月二十日	1488年	12・66
31	蔭涼軒日録	山名右金吾公、去十八日亥脱出奔坂本、備後衆悉没落之由、自堀出雲守方告之、(中略)浦上三郎四郎、入備前福岡之代云々、	山名政豊(右金吾)が去る十八日の亥の刻に播磨国坂本から出奔し、備後の軍勢も全て撤収したと堀秀世(赤松家臣)から報告があった。浦上宗助(三郎四郎)も備前福岡の城に入城したという。	備前福岡之代 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	亀泉集証	長享二年七月二十一日	1488年	12・66
32	蔭涼軒日録	夜来禅孝自備前福岡来、去月廿日浦上三郎四郎入福岡之代、上下二百人許有之、一夜之中千余人相集也、敵一人亦無之、作州亦同前、浦上伯耆守在院庄之代猛勢云々、	夜来に禅孝が備前国福岡からやってきた。七月二十日に浦上宗助が福岡の城に入った時は二百人ほどの人数だったが、一夜のうちに千余人の人が集まったという。敵は一人もいなくなった。美作国も同様で、浦上基景(伯耆守)が院庄の城にあって猛勢をふるっているという。	福岡之代 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	亀泉集証	長享二年八月七日	1488年	12・66
33	蔭涼軒日録	就備中之事有広説云、去月廿八日有大合戦、太守上総介殿見獲勝利、庄伊豆守捨城没落、玄蕃亦被五ヶ所疵、与庄同没落、香西五郎左衛門尉於城切腹、自讃岐香西所召具之軍兵大半討死、備前之合力勢致功如此云々、然者菅城亦可敗績云々、	三月二十八日、備中国で大合戦があり、守護細川勝久(太守上総介)が勝利した。庄元資(伊豆守)は城を捨てて没落し、上野元氏(玄蕃)も五ヶ所の傷を負って庄と一緒に敗走した。香西五郎左衛門尉は、城に残って切腹した。讃岐国から香西氏が連れてきた軍勢の大半が戦死した。備前国浦上氏の援軍が手柄を立てたのだと言う。そうであれば、菅城もまた敗北するだろうと言われている。	菅城 (43金川城跡)	亀泉集証	延徳四年四月六日	1492年	67
34	蔭涼軒日録	(前略) 禅孝僧備之福岡、勸以盃、浦上伯州、同三郎四郎方江伝一行、以賀金河合戦高名、且於江州築瀬合戦浦作高名賀之、(後略)	僧の禅孝が備前福岡へ帰るといので、盃を交わし、浦上基景(伯州)・浦上宗助(三郎四郎)あての手紙を託した。手紙は、両人の金川合戦での手柄と、近江国築瀬合戦での浦上則宗(浦作)の手柄を祝う内容である。	金河 (43金川城跡)	亀泉集証	延徳四年五月二日	1492年	67
35	実隆公記	松田城名事先日所望之間、麗水、玉松二書遣之了	松田氏から居城の名付けを依頼された三条西実隆が、「麗水」「玉松」の二つの城名を書いて松田氏に提供したものを。	松田城 (43金川城跡)	三条西実隆	永正六年閏八月二十七日	1509年	12・86
36	浦上宗次書状 ／備前難波文書(『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡伊田村小十郎所蔵文書に写しあり)	播州之儀付而、福岡などへ日□遣[]□(取)乱候	浦上宗次(右衛門大夫)が難波田兵衛に与えた書状。破損箇所があつて意味が取れないが、播磨国の情勢に対応するため、福岡へ人を派遣するなど慌ただしくしていることを伝えている。	福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)	浦上右衛門大夫宗次	(永正九年)閏四月十七日	1512年	11・14
37	氏未詳秀□判物 ／平井家文書	今度入城神妙候間、十郎衛門仁如相計候、屋敷分共外参町扶持候	旭川河口地域の在地領主平井小四郎が、付近の城館に入城して活躍することがあった。そのことを発信者の「秀□」が喜び、平井氏の屋敷に関連する権益と三町の土地を小四郎に与えたもの。	屋敷 (番号なし 平井殿屋敷)	秀□	永正九年七月二日	1512年	21

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
38	月村抜句／宮内庁書陵部蔵本	松田豊後守山城にして卯花も雲井の月の高根かな	連歌師宗碩が周防・九州方面への旅行の途次、松田元藤（豊後守）が居城する山城に立ち寄った際に詠じた連歌の発句。「山頂の辺りに咲く卯花が月ほどに高く見える臥龍山である」の意（余語敏男の訳に依る）。	松田豊後守山城（178富山城跡または43金川城跡）※当時すでに金川城が築かれていたが、宗碩の旅行経路からは富山城の可能性も考慮される	宗碩	永正十三年四月	1516年	145
39	再昌草／桂宮本	備前国松田なにかしとかや、山口の城といふ所にて、千句の連歌の発句とて申せし千世のかけ山口しるし筆の水	京都の公家・歌人三条西実隆の歌集。備前国の松田某が「山口の城」での千句連歌開催にあたって、実隆に発句を詠んでほしいと依頼した。これに応じた実隆は、「千世の影山口しるし筆の水」という句を詠じ、松田某に提供している。	山口の城（85瀧ノ城跡カ）	三条西実隆	永正十三年十月	1516年	25・120
40	伊勢貞陸書状案／蜷川家文書	今度依当城弥堅固之儀、於所々被得勝利之由候、尤以珍重千万候	室町幕府政所執事の伊勢貞陸が、松田元陸（孫次郎）に送った書状の案文。元陸が居城を堅固に守り、所々の戦いで勝利したことを祝賀している。	当城（178富山城跡または43金川城跡）	(伊勢貞陸)	(永正十三～十七年ごろ)十一月二日	1516～1520年ごろ	78
41	宇喜多能家寿像賛／岡山県立博物館蔵『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡邑久郷村吉弥所蔵文書に賛文の写しあり	永正十五年、紀村宗、以事入三石壘、群下有隴氷、不決一焉、能家寧為牛後、卒不作他方臣、誓帰村宗 ※『岡山県立博物館蔵優品図録』掲載図版により校訂	永正十五年、浦上村宗がある事件によって三石城に入城した。浦上氏に従う人たちの心に迷いが生じたが、宇喜多能家は他人の家臣になるつもりはないと決め、村宗に従うことを誓った。	三石壘（162三石城跡）	九峰宗成	大永四年八月(永正十五年)	1524年(1518年)	14・16・87
42	宇喜多能家寿像賛／岡山県立博物館蔵『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡邑久郷村吉弥所蔵文書に賛文の写しあり	十六年、村宗舎弟宗久在香々登壘、与阿兄絶矣、能家在彼焉、乃通書告諭乎村宗而曰、臣若出壘、則必有事矣、一夕脱而往備西泉矣 ※『岡山県立博物館蔵優品図録』掲載図版により校訂	永正十六年、浦上村宗の弟宗久は香登城にいて、兄とは断交していた。宇喜多能家は当時この城にいたが、村宗に書状を送り「私がこの城を出たら、必ず事件が起こるはずだ」と告諭した。そして、ある日の夕方能家は、香登城から脱出して備前国西部（備西県）へ向かった。	香々登壘（164香登城跡）	九峰宗成	大永四年八月(永正十六年)	1524年(1519年)	14・16・88
43	鶴庄引付／斑鳩寺文書	永正十七年《割注：庚辰》十一月廿七日、地家名主百姓等与東西政所問答在之、其故ハ、浦上掃部助村宗ヲ可有対治、依御憤リニ、御屋形義村様、去年十一月九日ニ御馬ヲ可被寄ニテ、浦上福立寺迄御出陣、然ハ村宗ヲ備前ノ三石城ニ被桶籠所工詰寄、御自身火水ニ雖諸軍勢ヲ御攻候、終ニ不落居候間、俄ニ和与ノ勢ヲ被成、同年十二月晦日ニ、御屋形様ヲ始テ悉以御歸陣、	浦上村宗を退治すべしと憤った守護赤松義村は、去年（永正十六年）十一月九日に出陣し、村宗が立て籠もる備前の三石城に攻め寄せ、義村自らが指揮して苛烈な攻撃を加えた。しかし、ついに攻め落とせぬまま和睦となり、十二月晦日に義村らはことごとく帰陣した。	備前ノ三石城（162三石城跡）	西政所実藏・東政所信譽	永正十七年十一月二十七日(永正十六年)	1520年(1519年)	71・89
44	年会五師頼憲申状案／宮符宣記	赤松兵部少輔義村之被官仁 浦上掃部助村宗、不慮仁傍輩之依議言、近年号有不忠之子細、無謂被停止出仕、猶其上仁、為成敗、去永正十六年卯十一月八日仁、兵部少輔義村率数千騎之軍勢、浦上城仁押寄、数月之間尽武略、雖攻戰、城墉嶮難而、四圍之捧輒以依難破却、遂不達本意、同十七年庚辰正月二日仁、義村無力被退散畢	赤松義村の家臣浦上村宗は、思いがけない同輩の讒言によって不忠者扱いされ出仕停止処分とされた。そのうえ村宗を成敗すると称して永正十六年十一月八日に赤松義村が数千騎の軍勢を率いて浦上城に押し寄せ、数か月の間武略を尽して攻撃した。だが、城郭は險難で攻略に難航し、ついに本願を達しないまま同十七年正月二日、義村は力なく退散した。	浦上城（162三石城跡）	年会五師頼憲	(永正十八年)三月／永正十六年	1521年／1519年	89・121
45	宇喜多能家寿像賛／岡山県立博物館蔵『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡邑久郷村吉弥所蔵文書に賛文の写しあり	同年十二月、能家將精兵二千余、陣乎新田安養寺、侵掠圍三石播軍之後、而勦力乎村宗焉、播軍忽解圍而退矣	永正十六年十二月、宇喜多能家は二千余の兵を率いて新田庄安養寺に陣取り、三石城を包囲する播州勢（赤松軍）の背後を襲い、村宗を助けようとした。赤松軍はたちまち包囲を解いて退散した。	三石（162三石城跡）	九峰宗成	大永四年八月／永正十六年	1524年／1519年	16・89

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
46	浦上村宗感状写『黄薇古簡集』巻第十三・和気郡下三石村某所蔵文書	去年十一月晦日、至三石要害御屋形様被寄御馬、三ヶ国軍勢圍、既難儀之刻、松田方合力之段為可申渡、為後詰十二月廿一日至可真郷石蓮寺令出張、同廿四日新田庄安養寺迄着陣仕、明石家来之族私宅放火候、因之号和う【与】之儀候	浦上村宗が宇喜多能家(和泉守)に与えた感状。永正十六年十一月晦日、村宗の本拠三石城に守護赤松義村(御屋形様)が出馬し、播備作三ヶ国の軍勢をもって三石城を包圍したため、浦上氏は難儀に陥った。そのとき、宇喜多能家は備前松田氏に協力を要請し、その上で三石城を救援するため後詰めの軍勢を率いて十二月二十一日に可真郷石蓮寺まで出陣した。能家の率いる後詰め勢は二十四日には新田庄安養寺まで着陣し、付近にあった明石氏の家来たちの私宅に放火した。こうした能家の働きにより、合戦は講和(和与)となって終結した。	三石要害 (162三石城跡) 明石家来之族私宅 (場所未詳)	(浦上) 村宗	(永正十七年) 正月十二日 / 永正十六年	1520年 / 1519年	14
47	鶴庄引付／斑鳩寺文書	同明ル年十七年三月二、美作国中村 從御屋形依可有御対治御墳〔嶺〕二、義村様御自身著〔務〕崎取福寺迄御出陣、其□〔後カ〕白幡城工御馬ヲ被寄、御一家已下ノ諸勢ヲ作州中村館工被遣処仁、在所ヲ取退、岩屋ノ城構桶籠間、数日雖被攻無落居所仁、浦上掃部助村宗元ヨリ中村一味ノ間、後詰ニ自身從三石城打立テ、色々計略ヲ被廻間、寄手ニ意替ノ衆在之テ、俄寄手ノ陣同キ十月六日二破、少〔小〕寺加賀守ヲ始テ、数百人被打畢、	守護赤松義村による岩屋城攻撃。永正十七年三月、義村は美作国の中村氏を退治するため、自ら播磨国白旗城まで出馬して御一家衆以下の将兵を美作国の中村氏の館へ差し向けた。中村氏は館から撤退して岩屋城に立て籠もったので、赤松軍は数日間攻めたが落ちなかった。その間に浦上村宗が自分に味方する中村氏を助けるため、自ら三石城を出陣し、いろいろ計略を仕掛けた。すると、赤松軍の中に心変わりする者が現れ、十月六日に赤松軍は浦上軍に敗北し、小寺則職(加賀守)をはじめ数百人が戦死した。	三石城 (162三石城跡)	西政所 実厳・東政所 信誉	永正十七年十一月二十七日	1520年	71・90
48	宇喜多能家寿像贊／岡山県立博物館蔵『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡邑久郷村吉弥所蔵文書に贊文の写しあり)	十月三日、村宗人作陽、陣乎岩山南、能家將二千余徒、敵軍如雲、其勢難当、士卒皆散、纒残者七十人、同四日、能家一戦而勝、同七日、敵軍瓜潰矣、村宗斬数百人首、歸于三石	十月三日浦上村宗は美作国に入り、岩山の南に陣取った。宇喜多能家は二千余の兵を率いていた。士卒は敵軍の多さに驚いて散り散りになったが、十月四日、能家は残った者を率いて一戦を挑んで勝ち、敵軍を瓦解させた。村宗も数百人を討って三石に帰った。	三石 (162三石城跡)	九峰宗成	大永四年八月 / 永正十七年	1524年 / 1520年	14・16
49	鶴庄引付／斑鳩寺文書	同十八年正月廿八日、御屋形義村様、東方賀古マテ御出帳、同二月二日二、下野守村秀・広岡殿已下大田ノ城マテ御出帳、然共御屋形様若君様ヲ御供ニテ御着ノ城工御馬ヲ被寄、同七日ニ浦上掃部助方、從備前ノ三石ノ城室津マテ上洛、然ハ既当庄近辺一円可為合戦甚由必定	永正十八年正月二十八日、守護赤松義村は東播磨の賀古庄まで出陣し、二月二日には義村に味方する赤松下野守村秀・広岡氏以下の軍勢が大田城まで出張してきた。義村は足利亀王丸(若君様。後の足利義晴)を随伴して御着城まで出馬した。こうした動きに対抗するため、二月七日、浦上村宗は備前国の三石城から播磨国室津まで進出した。そのため、鶴庄近辺全体が合戦の渦中に巻き込まれることは避けられなくなった。	備前ノ三石ノ城 (162三石城跡)	実厳・胤厳	永正十八年	1521年	71・91
50	鶴庄引付／斑鳩寺文書	当国内輪取合而、小寺殿、備前之因州、去年春比ヨリ牢人ト而、淡州二被座畢ヌ、然ニ去九月廿四日仁、福トマリヨリ出張ア〔リ〕脱カテ、北ノ山元ヲノキ并高峯山ニ在陣在之、則村宗ハ、同晦日ニ、坂元へ出陣次第二被取懸畢ヌ、御曹司様ハ三石城ニ御座ナリ	大永二年当時の赤松氏分国の内紛状況について記したもの。小寺村職・浦上村国(備前之因州)は去年春ごろから浪人となって淡路国に居たが、この九月二十四日に福泊から播磨国へ上陸し、北の山裾にあたる大貫・高峯山に布陣し、浦上村宗に反抗した。そこで村宗は、九月晦日に播磨国坂本へ出陣して反乱軍討伐に当たった。このころ守護赤松政村(御曹司様)は村宗の本拠三石城を御座所としていた。	三石城 (162三石城跡)	西政所 快親・東政所 猛海・筆取 快栄	大永二年	1522年	71・92
51	春日社司祐維記	別所小三郎と浦上取アキ也、自浦上方別所館攻寄之処、浦上方打負之時分、別所方・小寺方、書写法花ト云所迄、三千人ハカリニテ入之処、浦上モ打負テ、三石ノ城迄退之	大永二年当時の赤松氏分国の内紛状況について記したもの。別所村治(小三郎)と浦上村宗が対戦し、浦上軍が別所氏の館(三木城カ)に攻め寄せたものの、敗北した。別所・小寺軍は書写山(円教寺)・法花山(一乗寺)まで三千人ほどの軍勢で押し寄せたので、浦上軍は負けて三石城まで退却した、という。	三石ノ城 (162三石城跡)	祐維	大永二年十月六日	1522年	92

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
52	宗登書状／大徳寺文書	瑞首座老足にて備前、播磨、三石、室津かなたこなた、浦上殿嶋村方前後二相副、機嫌をまふり、御公事之儀催促被申	老年の瑞首座が、備前三石や播磨室津をあちらこちらと浦上村宗・島村弾正に付き添い、機嫌をうかがいながら、荘園に関する訴訟(御公事)について催促した。	三石 (162三石城跡)	宗登	(大永四年)十一月二十六日	1524年	77・124
53	経書状／朽木文書	幡州儀、定而其方へも可有其間候、浦上一味衆名城にて有ける有田令出陣、同名城を引破候て出候て落居候、然間浦上も三石へ打掃候由申候	播州の情勢について。浦上村宗の一味衆が名城として名高い有田氏の城を攻め落としたので、浦上村宗も三石へ帰還した。	三石 (162三石城跡)	経	(享禄二年)六月二十日	1529年	57・125
54	実隆公記	宗頌来、今日可移庵云々、常桓去十六日著備前松田城、尼子相伴云々、	三条西実隆が連歌師宗頌から聞いた話によれば、前管領細川高国(入道常桓)が尼子経久に伴われ、去る九月十六日に備前国松田氏の居城に到着したという。	備前松田城 (43金川城跡)	三条西実隆	享禄二年九月二十日	1529年	12
55	氏未詳職貞沽券写／『黄薇古簡集』巻第十三・和氣郡下 日笠村猪八郎所蔵文書	重弘屋敷之上山事、百疋分にて落居候、如前々可相抱者也	重弘彦次郎の屋敷の上の山を銭百疋で売り戻し、以前のように所持するよう伝えたもの。	重弘屋敷 (場所未詳)	職貞→重弘彦次郎	天文元年十二月六日	1532年	14
56	浦上虎満丸(政宗)感状／平井家文書『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡山田庄又三郎所蔵文書に写しあり)	今度弥延備前守構被入城、殊於攻口粉骨之条、忠節神妙候	浦上政宗が旭川河口地域の在地領主平井朝能(右兵衛)に与えた感状。浦上氏に従う平井朝能は、近隣の弥延備前守の居城に入城し、敵方の攻撃にさらされている箇所を守って奮戦した。こうした朝能の忠節ぶりを、政宗が褒めたもの。	弥延備前守構 (445湯迫城)	虎満(浦上政宗の幼名)	(天文五～八年)四月十四日	1536～39年ごろ	14・21
57	浦上国秀書状写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六尾上町山口文三所蔵文書	当構へ兵糧差籠度候之間、人足四五人并船事可申付候、頼入候	浦上国秀が備前国西大寺の有力者山口小次郎に与えた書状。国秀が在城している城(当構)に兵糧を搬入したいと思っているので、人足4、5人と船を出動させてほしいと依頼している。	当構 (171富田松山城跡カ) ※播磨国室山城など、別の浦上氏拠点を指す可能性もあり	(浦上)国秀	(天文八年カ)閏六月四日 ※永禄元年の可能性もあり	1539年カ	14
58	民部少輔頼景書状案／『言継卿記』天文十四年八月八日条	去年以使者申候処、無通路之由中空罷上候、先以御入城之由、千万珍重此事候、仍雖輕微至候、筆管進候	公家の山科言継の家司頼景が、中山備中守に送った書状。去年使者を備前国へ派遣したものの、戦争状態で通路が絶え空しく引き返してしまったことを伝え、とりあえず戦争が収まり中山備中守が居城に復帰できたことを祝っている。その祝儀として筆20管を進呈する旨、伝えている。	(185亀山城跡カ)	民部少輔頼景	天文十四年八月八日	1545年	102
59	浦上政宗書状写／『黄薇古簡集』巻第十四・邑久郡山田庄又三郎所蔵文書	就今度尼子乱入事、国中之輩依別心、税所豊前守申談至中島致罷退候条、忠儀無比類	尼子軍が備前国に乱入した際、国中の人たちが心変わりしたことを受け、平井朝能(右兵衛)とその子与三・与太郎は税所久経(豊前守)と相談して中島まで撤退した。この行動を政宗が褒めたもの。	(182中島城跡)	(浦上)政宗	(天文二十年)十月十二日	1551年	14
60	浦上宗景書状／阿波坪井文書	すさい城於切取者、別而可為忠儀候、然者来年事以彼方内三十貫文可遣候物【者】也	宗景が坪井弥三に対して周匝城の攻略をうながし、その代償として来年から周匝方面で所領を給与する旨、約束したもの。	すさい城 (54茶臼山城跡・55大仙山城跡・番号なし 周匝城跡)	(浦上)宗景	(天文二十年カ)十二月九日	1551年カ	41
61	日現曼茶羅／妙覚寺蔵	備前国金川道林寺住侶大貳公日興関東学問之時依所望也	金川道林寺の住僧だった大貳公日興が、関東に遊学した際に日蓮僧日現に依頼してこの曼茶羅をもらったことを示すもの。	金川道林寺 (43金川城跡に関連) ※道林寺は金川城中にあり	日現	天文二十一年六月二十八日	1552年	133
62	浦上宗景書状写／『東作誌』東北条郡青柳庄塔中村牧氏所蔵文書	今度天神山取出、普請等不相調之刻、雲伯江諸軍勢取向候条、則幡籠昼夜辛勞之段無比類候	このたび宗景が天神山へ出張し、城普請もまだ完成していない時に尼子軍が出陣してきた。これを受け、天神山城に立て籠もり昼夜問わず尽力した牧八郎次郎の働きを、宗景が賞したものの。	天神山 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上)宗景	(天文二十三年)正月九日	1554年	41・101
63	入谷景藤判物写／『東作誌』東北条郡青柳庄塔中村牧氏所蔵文書	今度御牢籠折能、殊二天神山江遂入城候条、神妙至極	真木(牧)八郎次郎が困難な状況の中、天神山へ入城したことを、浦上方の国衆とみられる入谷景藤が褒めたもの。	天神山 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	入谷景藤	天文二十三年正月二十日	1554年	41・101
64	尼子晴久書状写／『黄薇古簡集』巻第七・御野郡河原村善八所蔵文書	先日倉淵於在番者、可為祝着と申候キ、入城候哉、羽宗方へ働之由候間、留守用心等干要候	尼子晴久が、「倉淵」なる城館に在番として入城した長崎与七郎・難波職経ら四名に与えたもの。羽床氏攻略のため出撃する際は留守の用心を厳重にするよう指示している。	倉淵 (場所未詳)	(尼子)晴久	年未詳二月十二日		14・41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
65	浦上宗景感状／池木正衛旧蔵文書(岡山県立記録資料館所蔵。『黄薇古簡集』巻第二・城府二穴甘宗三所蔵文書にも写しあり)	今度者至沼城雲州衆取懸候処、則遂入城、昼夜粉骨段、忠節無比類候	尼子軍が沼城に攻め寄せた際、すぐに入城して昼夜奮戦した穴甘与三左衛門尉の功勞を、宗景が称えたもの。	沼城 (185亀山城跡)	(浦上) 宗景	年未詳 八月十二日		13・14・41
66	浦上政宗書状／『黄薇古簡集』後篇 邑久郡虫明村医某預元和氣郡稲坪村神崎某所蔵文書	与二郎此方半之事、今度不慮外及義絶候、就其政宗事、雲州無二申談、人質急度可差下之分候、然時者本意眼前被仰其意、天神山通路等之儀、可相留候行簡要候	浦上政宗が与二郎こと浦上宗景を義絶し、尼子晴久と同盟を結んで出雲国に人質を差し出す旨、通達したもの。尼子氏と結んだ上は政宗方の勝利は間違いないので、宗景の籠る天神山城につながる通路を遮断するよう、森九郎左衛門・恒次新左衛門に命じている。	天神山 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 政宗	(天文二十三年) 二月一日	1554年	14・116・136
67	浦上宗景書状／阿波坪井文書	今度備中衆至富山表在陣候条、為談合与出候間、同名將監与引切、当城懸入候節、既二羽床替覚悟候処、以無二之心中、要害相戦候条神妙候、然間宗景儀、凌通路逐掃城候条、満足候	宗景が富山城に陣中の備中衆と談合するため出かけた時、何らかの異変があり、それを坪井弥三が解決した。そのおかげで宗景は天神山城に帰城できた、との内容。	富山 (178富山城跡) 当城・要害 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	(天文二十四年) 六月九日	1554年	41・116
68	浦上宗景感状／阿波坪井文書	今度雲州衆・政宗相談、至当城押寄難儀之節、昼夜尽粉骨候、既於尾頸宗景以鉄砲、日笠被官矢田藤二郎射伏候、御内懸付頸討取候条、忠儀神妙候、然而翌日者敵退散令祝着候	天神山城の戦い。尼子軍と浦上政宗が相談し、宗景の籠る天神山城に押し寄せてきた。宗景は尾頸(城と尾根が接続する場所)で鉄砲を放って敵方日笠氏の家来を射殺したところ、坪井弥三が駆けつけてその首を取り、翌日には敵軍を退けた。こうした坪井弥三の軍功を宗景が称えたもの。	当城 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	(天文二十三年) 七月十七日	1554～1555年	41・116
69	浦上宗景感状／三宅文書	今度雲州衆・政宗相談、至当城押寄難儀之節、昼夜尽粉骨条、忽敵退散祝着候	同上。天神山城に尼子・浦上政宗連合軍が押し寄せた際、籠城に参加し昼夜奮戦して敵を退けた三宅弥三右衛門尉の功勞を、宗景が称えたもの。	当城 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	(天文二十三年) 七月十七日	1554～1555年	55
70	浦上宗景感状写／東北条郡青柳庄塔中村牧氏所蔵文書	今度雲州衆・政宗相談、至当城押寄難儀之節、昼夜尽粉骨候条、忽敵退散祝着候	同上。これは牧八郎次郎の武功を宗景が褒めたもの。	当城 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	(天文二十三年) 七月十七日	1554～1555年	101
71	浦上宗景感状写／『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡神田村重左衛門所蔵文書	今度雲州衆・政宗相談、至当城押寄難儀之刻、昼夜尽粉骨条、忽敵退散祝着候	同上。これは花房与左衛門の武功を宗景が褒めたもの。	当城 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	(天文二十三年) 七月十七日	1554～1555年	14・41
72	毛利元就・隆元連署書状／井原家文書(『閩聞録』巻四十 井原藤兵衛に写しあり)	一其表之事、被寄近陣、剩當日固屋被切崩、敵数多被討捕之由、以一書注進、具披見候、一敵城落去不可有程之由、大慶此事候、如承候其表一途候者、備前国之儀者可為平均候、殊松田も懇望之由候(中略)一本丸落去之御左右兩山待申候	備前国出陣中の井原元造(毛利氏家臣)らが、敵城付属の「固屋」を切り崩して籠城衆を数多討ち取り、敵城陥落が目前である旨、毛利元就父子に報告した。この報せを受け、元就父子が元造に対し、松田氏も降伏を申し出ているとのことなので、その城が落ちれば備前国は平定できるだろうから、本丸落城の報が届くのを待っている、と返書したものの。	固屋＝敵城＝本丸 ※備前松田氏関連の城	(毛利) 元就・(毛利) 隆元	(天文二十四年) 八月十三日	1555年	41・111・142
73	毛利元就・隆元連署書状／井原家文書(『閩聞録』巻四十 井原藤兵衛に写しあり)	今度其表固屋被仕崩候事、一円外郡衆計之粉骨之由候、或敵数多被討取、或内衆手負等多之由候、幾度申候而も無比類外聞実儀於我等本望此事候	上記と同じ戦いに関する史料。この城攻めで「固屋」を攻め落とすことができたのは、備後国外郡衆の奮戦があったからこそで、その比類ない働きを元就・隆元父子が褒めている。	固屋 ※備前松田氏関連の城	(毛利) 元就・(毛利) 隆元	(天文二十四年) 八月十三日	1555年	41・111・142

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
74	浦上政宗書状 ／旧鳥取藩士 山田家資料	今度元堅如先々依被得御意、至金河御上之由、可然候、自去月六日山越構備中衆取詰、昼夜戦、(中略)後巻之事、松將被立退以來作州衆切々相催候へ共、無其曲候、宇和・角八懸御目候哉、新城之儀、昨日今日ニも可為落去存候処、昨夜兩度出人、山越申事二、今五日六日之事者、堅固ニ可相踐候、鳥取口被放火候者、敵中も退屈之跡候条、敗北不可有疑由申越候(中略)山越仕腹候者、忽金河表へ可被引懸候哉、同者新城堅固之間二、以御兩人御心遣、鳥取口御動事、一日も御急可為本望候	浦上政宗が、八月六日から備中衆に包圍されている山守越前守の構=新庄山城を救援するため、勝屋淡路入道・仲左衛門尉に協力を求めたもの。美作国の味方に援軍を出すよう求めているが思うようにならないこと。新庄山城主山守越前守が「あと五六日は堅固に守り抜ける。敵も戦いに退屈しはじめているので、鳥取庄の入り口に放火して脅せば撤退させることができる」と述べていること。山守氏が切腹してしまったら敵軍はたちまち金川城へ攻め寄せる可能性があるため、新庄山城が堅固なうちに勝屋・仲左衛門の配慮で鳥取口へ軍事活動が実現するよう依頼している。	金河 (43金川城跡) 山越構=新城 (192新庄山城跡)	浦上帯刀左衛門尉政宗	(天文二十四～弘治二年)九月一日	1555～1556年	31・41
75	浦上政宗書状 ／旧鳥取藩士 山田家資料	鳥取表御動事、度々申候処、江見・後藤依被相催、御延引之通、宇喜多大和守・角田八郎左衛門尉申越候、敵中悉新城表取詰候条、何之口御動候共、相与儀不可有之候、御兩三人被仰合、於御打出者、宇和兄弟共無人候共、先懸仕、放火之儀可申付之条、更不可有異儀候、(中略)一今朝も自城中出使者候、(中略)就此儀凌通路、使者差出候条、是非為御兩三人鳥取面御動事、御急頼存候	浦上政宗が新庄山城救援のため、宇喜多大和守・角田八郎左衛門尉を使者として松田元堅・伊賀氏に鳥取表への出動を要請したもの。松田氏は、美作国の江見・後藤氏が出陣することを理由に、今回の出陣は延引したいとの考え。政宗は、敵軍は新庄山の包圍に集中しているため、松田氏がどこへ出陣しても問題は起こらない、出陣してくれば宇喜多大和守らに先陣を勤めさせるからと、説得する。	新城 (192新庄山城跡)	浦上帯刀左衛門尉政宗	(天文二十四～弘治二年)九月一日	1555～1556年	31・41
76	宇喜多直家書状 ／備前西大寺文書	当城普請之儀、本村百姓中ニ申付候処、御家来中江申懸由候、言悟道断曲事二候、御寺之儀者、自先々諸公事高除之儀候条、一切被仰付間敷候	宇喜多直家が居城の普請工事への参加を本村百姓中へ命じたところ、その百姓たちが清平寺(西大寺塔頭)の家来にも普請に参加するよう強要した。それを知った直家が百姓の行いを非難し、寺院は賦役免除の方針を改めて伝えたもの。	当城 (454 奈良部城カ)	宇喜多三郎右衛門尉直家	弘治三年二月四日	1557年	9
77	刀銘 祐定	備前長船祐定 天神之門岡本為重代作之 永禄二年二月日 代十貫文米八石	備前長船の刀鍛冶祐定が、天神山城の家中(天神之門。天神之内の誤謄カ)である岡本氏(岡本氏秀カ)の求めに応じて作った刀の銘文。	天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	祐定	永禄二年二月	1559年	146
78	刀銘 源兵衛尉祐定	備前国住長船源兵衛尉祐定 天神於山下作之 永禄三年八月吉日	備前長船の刀鍛冶源兵衛尉祐定が、天神山城の山下に駐在し作刀していたことを示す銘文。	天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	源兵衛尉祐定	永禄三年八月	1560年	132
79	尼子晴久書状写 ／『閩閩録』卷五十 飯田与一左衛門	其城涯分堅固可被相抱候、万一不成子細候而被取退儀候者、於伯州南谷四百石、(中略)引合千石之辻可進之候	晴久が備前国虎倉城主伊賀三郎五郎(久隆カ)に与えた書状。三郎五郎に居城を堅固に維持するよう要請し、万が一不慮の事態があっても、伯耆国南谷などで合計1000石の所領を進呈する旨を伝えている。	其城 (25虎倉城跡カ)	(尼子)晴久	(～永禄三年)四月二十九日	～1560年ごろ	111
80	尼子晴久感状写 ／『黄薇古簡集』卷第十・津高郡小森村又次郎所蔵文書	其表籠屋堅固被相踐、粉骨之由神妙之至	晴久が備前国津高郡小森の在地領主菱川与兵衛尉に与えた感状。与兵衛が付近の「籠屋」(立て籠もり用の軍事施設。城館)を堅固に守り、粉骨碎身していることを晴久が褒めたもの。	籠屋 ※備前菱川氏関連の城	(尼子)晴久	(～永禄三年)十一月八日	～1560年ごろ	14
81	石川久智書状写 ／『黄薇古簡集』卷第五・城府五中島三季之助所蔵文書	昨日旁以存分籠口城一形御持、上下之覺無申付候、雖于今不始候、御心懸之至、頼母敷存候	五月十日、石川氏配下の櫛屋与七郎が守る籠口城に宇喜多直家が攻め込んだ。これに対し、与七郎は城を堅固に持ちこたえ宇喜多軍を撃退した。本書状は、戦勝の報せを聞いた石川久智が、与七郎の心がけを褒めたたえたもの。	籠口城 (181籠ノ口山城)	(石川)久智	(永禄六～七年ごろ)五月十一日	1563～64年	14・64

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
82	宇喜多直家感状／柏原家文書	去九日夜、龍口於二三丸度々戦、翌日日本丸至攻口抽粉骨、刺引退時被殘後陣被及合戦段、忠節無比類、必可有褒美由候也	上記と同じ合戦について、攻城側の宇喜多直家が鴨重兵衛に与えた感状。五月九日の夜、重兵衛は宇喜多軍の一員として龍口城の二・三の丸で合戦を繰り広げ、翌日の本丸攻めの際も奮戦した。城攻めに失敗した宇喜多軍が退却する際も、重兵衛は後陣に残ってしんがりとして龍口城兵の追撃を防いだ。こうした重兵衛の忠節を直家が褒めたため、必ず浦上宗景より褒美がくだされるであろう、と伝えたもの。	龍口 (181龍ノ口山城)	(宇喜多)直家	(永禄六～七年ごろ)五月十五日	1563～64年	115
83	三村家親書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五中島三季之助所蔵文書	今度は至龍口城敵及行、既二三ノ丸迄伐入候処、薬師寺殿・与七郎殿、以御粉骨被伐退、刺可然衆数人被討捕之由、一味中面目之至、大慶不過之候	上記と同じ合戦に関して、三村家親が欄屋七郎兵衛・土屋四郎左衛門に与えた書状。備中方の龍口城に敵(宇喜多軍)が攻撃をしかけ三の丸まで侵入してきた際、薬師寺氏と欄屋与七郎は、城を守って奮戦し宇喜多軍を撃退した上、敵の重要な武将を数人討ち取った。三村家親はこうした薬師寺・欄屋氏の活躍を、一味中の面目を施すものと激賞している。	龍口城 (181龍ノ口山城)	(三村)家親	(永禄六～七年ごろ)五月十九日	1563～64年	14・64
84	某書状写／『閨聞録』巻五十二 兼重五郎兵衛	三村事備作之衆相率、多勢にて伯州罷出候、彼口可為大勝候と敵味方あてかい候処、備前撮所表之儀出来候	毛利元就の要請を受けた三村家親が、備中・美作の大軍を率いて伯耆国に出陣した。これで伯耆方面の合戦は毛利方の大勝になると敵も味方も予想していた時、備前国撮所領に異変が発生した、との意味。	(181龍ノ口山城)	(毛利元就)カ	(永禄七年ごろ)	1564年	12・111
85	毛利元就書状写／『閨聞録』巻三十三 粟屋勘兵衛	一從能島もとふとへ状共遣候て、我等もとふとの儀、等閑有間敷と申之由申事候、彼状を何方より遣候哉、家親所へ来候間、就其弥此方をうたかひの由候、此時者尤候、雖然我等左様之操者有間敷と、推量も候はん哉と存候、其上にて如此神文遣事にて候間不及申候、	毛利氏側の使節として三村家親との交渉を担当していた粟屋就方(木工允)に対し、元就が指示を与えた書状。「能島」=村上武吉が児島本太城を所有することについて毛利氏が保証を与えた、という書面が偶然三村家親の手元に届き、これが原因で家親は毛利氏に対し疑いをもっていた。この事態を受けて元就は、自分がそのような手管を使うことはないかと家親にも推察してほしいところだが、その上さらに神文(起請文)を家親に与えて偽りないことを誓ったのだから、もう言うことはないとして述べている。	もとふと (261本太城跡)	(毛利)元就	(永禄七年)正月十三日	1564年	110
86	毛利元就書状／原川家文書(『閨聞録』巻三十三 粟屋勘兵衛に写あり)	一家親出張相定、旧冬至松山歸宅之由、香 左被申越候之間、誠可然本望候(中略)一從家親就兄嶋天神山之儀、対光景以ヶ案疑心之趣被申候間、弥以神文申遣候、此半何と様二中妨和議候て、家親ハ疑候共、於此方者些子毛頭程も表裏有間敷候之間、心安可申事肝要候	三村家親が伯耆国出陣を決心し、旧冬松山城に帰宅したとの報を受けた元就が、これを調整した粟屋就方に喜びを伝えたもの。また、家親が児島郡や天神山=浦上宗景の処遇について、毛利方の香川光景に疑念を抱いているとのことだったので、毛利氏として毛頭も表裏をかまえるつもりはない旨の起請文を家親に送ることを伝えている。	松山 (備中158) 備中松山城跡) 天神山 (137天神山城跡)・138古天神山城跡)	(毛利)元就	(永禄七年)二月三日	1564年	12・110・142
87	宇喜多直家感状／柏原家文書	於符中表、立口面々与被及合戦、横鎧被疵、無比類働之段、不浅忠節	府中表(国府市場周辺)において宇喜多軍が「立口面々」(龍口城衆)と戦った際、鴨重兵衛は敵軍に横槍を入れて奮戦し、負傷した。こうした重兵衛の働きを直家が賞したものの。	立口 (181龍ノ口山城)	(宇喜多)直家	(永禄七年)七月二十日	1564年	115
88	宇喜多直家感状／柏原家文書	於符中表、立口面々与被及合戦之義、横鎧之由神妙候	上記と同じ合戦に関する史料。宇喜多軍が府中表(国府市場周辺)で龍口城衆と交戦した際、敵軍に横槍を入れる活躍をした鴨与介に対し、直家が与えた感状。	立口 (181龍ノ口山城)	(宇喜多)直家	(永禄七年)七月二十日	1564年	115
89	浦上宗景感状写／『閨聞録遺漏』巻五之二 小川権左衛門	去廿日於龍口山下及合戦、徑鎧被粉骨段尤神妙、恩賞之事追而可相叶〔計カ〕候	上記と本来セット関係にあった史料。七月二十日、龍口城の山下で城方の軍勢と合戦し、横槍の手柄を立てた鴨重兵衛に対し、宗景が後日の恩賞給与を約束したものの。	龍口 (181龍ノ口山城)	(浦上)宗景	(永禄七年)七月二十四日	1564年	114
90	刀銘 孫右衛門尉清光	備前国住長船孫右衛門尉清光 於天神山為浦上与次郎宗景末代作之 永禄八年二月吉日	浦上宗景の所持刀に刻まれた銘文。備前長船の刀鍛冶孫右衛門尉清光が、浦上宗景が末代まで家宝とする刀剣を天神山城において鍛刀したことを示すもの。	天神山 (137天神山城跡)・138古天神山城跡)	孫右衛門尉清光	永禄八年二月吉日	1565年	22

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
91	刀銘 孫右衛門尉清光	備前国住長船孫右衛門尉清光 於天神山為宗景御重代作之 永祿八年二月吉日	上の刀と同時に作られた刀の銘文。備前長船の刀工孫右衛門尉清光が、天神山城にて浦上宗景が重代の家宝とする刀を製作したことを示すもの。	天神山 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	孫右衛門尉清光	永祿八年二月吉日	1565年	147
92	宇喜多直家書状／岡山県立博物館所蔵文書(『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡伊田村小十郎所蔵文書に写しあり)	三郎九郎殿御下向候条、珍敷儀も候かと下之者ハ存候処、龍口御籠城之躰、安之外に候、三修此表可有出張様二金川辺沙汰候歟、不審ニ存候、(中略)自伯州此間歸陣之由候条、沼元構被取詰候者、定後巻可在之間、以一戦、備中・当国弓矢可被相澄分にて、被取詰候へ共被見捨要書一途候上ハ、自他分別之前二候	宇喜多直家が最近の戦局について赤坂郡伊田の領主難波職経(難三)に書き送ったもの。浦上三郎九郎(誠宗)が備前国に下向してきて龍口城に籠城したのは意外だったこと。三村家親(三修)が備前国に出陣してくるとの噂が金川付近でささやかっているとのことだが、不審に思っていること。家親はこのあいだ伯耆国から帰国したとのことなので、三村方が沼元構を包囲すれば、必ず救援に向かい、一戦をもって備中・備前両国の争いに雌雄を決するつもりでいること。沼元構が取り囲まれても自分たちが見捨て、結果落城した場合は、どうするか思案に考えていること等を伝えている。	龍口 (181龍ノ口山城跡) 沼元構 (美作278) 沼元構跡・(美作277) 小松城跡・(美作281) 大植城跡)	宇喜多直家(宇喜多三郎右衛門尉直家)	(永祿八年)八月二十七日	1565年	14・18・41
93	宇喜多直家感状写／『武家聞伝記』巻第八 野村吉兵衛所持文書	從船山至草部夜中騒動之處、懸合吉田与捨郎討捕之由、忠節神妙	直家が野口甚五郎に与えた感状。船山城から草部郷へ夜襲をかけてきた敵軍に、野口甚五郎が応戦して吉田与捨郎を討ち取った。この手柄を直家が褒め称えたもの。	船山 (172船山城跡)	(宇喜多)直家	(永祿七～十年ごろ)二月十三日	1564～67年ごろ	19
94	上月満秀書状／上月文書	先日宗景より使者、姫路をハ服部備後守と申つる、はや罷下候、(中略)近日、從備州宗景罷上候者申候者、只今、金光要害事、毛利方被放候間、宇喜多人数八千計にて取詰、攻候由申候、彼城落候ハ、宗景可有上国之由、慥申候	播磨国守護赤松義祐の重臣上月満秀が、三木城主別所安治に送った書状。先日、備前国の浦上宗景が使者(服部備後守久家)を姫路に派遣してきた。その使者の口上によれば、宗景は毛利方に見放された岡山城(金光要害)を宇喜多直家率いる八千人の軍勢で包圍攻撃しているという。岡山城が落城次第、宗景は播磨国へ進出する予定である旨、使者を通じて赤松氏に通告している。	金光要害 (180岡山城跡)	上月左近将監満秀	(永祿十年)八月二十三日	1567年	125
95	日典書状／法泉寺所蔵文書	金川内輪依不慮、延世・為安・宇一各退出候、不及是非事候、乍去何茂安泰之儀珍重候	日蓮僧の日典が、松田氏家臣榎原三郎左衛門尉からの書状に返信したもの。金川城の松田家中の内紛によって、大村入道延世・某為安・宇垣秀興(宇一。宇垣一郎兵衛の略)らが城から退出してしまっ。これを知った日典は、やむを得ないことだが、いづれもとどろあえず安泰なのはよかった、と返事している。	金川 (43金川城跡)	日典	(永祿十一年カ)六月一日	1568年カ	130
96	日典書状／備前妙覚寺文書	今度かな川不慮候て、蓮盛御事言語道断次第候	金川城で不慮の事件があり、松田元堅(法名蓮盛)が死亡したことを示すもの。	かな川 (43金川城跡)	日典	(永祿十一年)八月五日	1568年	9
97	日典書状／宮内勇氏所蔵文書	今度かな川不慮之事、殊蓮盛御事言語道断不及是非次第候、其付、横井又七金河入城候て、直二至島各半人之由候、(中略)乍去元帰無事二御取退候間珍重存候、櫓越御供被申由候、此砌梅先非、和与二成候へかしと存計候	日蓮僧の日典が、松田氏関係者の某に与えた書状。金川城での不慮の事件によって松田元堅(法名蓮盛)が死去し、これにともなう松田氏宿老の横井又七が金川城へ入城したものの、すぐに退散し半人になってしまったという。ただし、松田元堅(元堅子息と推定)が「櫓越(櫓村越中守か)をともない無事に城から脱出した。こうした経緯を聞いた日典は、松田一門が先非を悔いて和睦が成立することを願うばかり、と記す。	かな川・金河 (43金川城跡)	日典	(永祿十一年)八月五日	1568年	130
98	伊賀久隆感状／備前片山文書(『黄薇古簡集』巻第十・津高郡平岡村伝兵衛所蔵文書に写しあり)	今度金川松田方城忍取、片山八郎左衛門ト渡合、致組打、即頭打取候事、無比類候、為褒美、自直家、はちかた之内吉田村被遣候	片山与一兵衛は、宇喜多・伊賀軍による金川城攻略戦に参加し、敵將片山八郎左衛門を討ち取った。こうした与一兵衛の活躍を伊賀久隆が褒め、褒美として宇喜多直家から赤坂郡土師方のうち吉田村が与えられる旨を伝達したもの。	金川松田方城 (43金川城跡)	(伊賀)久隆	(永祿十一年)八月十一日	1568年	11・14

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
99	氏未詳秀朝書状／洗心齋古文状(水原岩太郎氏所蔵備前難波文書)	難波万寿殿事、此度御供などハ成間敷候条、中間三人被仰付候へと可被仰遣候、(中略)然者自伊田金川へ出合申候て可然候	松田氏関係者かと思われる秀朝(勝屋氏か)が、難波又二郎に軍役に関する指示を与えたもの。難波万寿自身の従軍は許可せず、中間三人分の軍役負担をするよう難波氏惣領と思われる又二郎に伝え、難波氏本拠の伊田から金川へ出向くよう指示している。	金川 (43金川城跡)	淡路入道秀朝	(年未詳) 正月三日		24・36
100	宇垣秀興・樺村宗永連署書／洗心齋古文状(水原岩太郎氏所蔵備前難波文書)	天神・此方之儀付而、切々御辛勞之由にて、以捻被申入候、猶以入魂、様々御分別可為簡要候由候	松田氏宿老の宇垣・樺村両氏が、天神山城の浦上氏と松田氏との関係調整にあたって努力した難波職経(三郎右衛門尉)に対し、今後さらに入魂の関係を維持したいとの主君松田元堅の意向を伝達したものの。	天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	宇垣一郎兵衛秀興・樺村佐渡入道宗永	(年未詳) 九月三日		37・133
101	小早川隆景感状／屋代島村上家文書(山口県文書館蔵寄組村上家文書。『関関録』巻廿二之二村上図書にも写しあり)	児島本太之儀、千万無御心許存候処、早々被得太利、今度人跡為初、香西数輩被討果之由、御太慶察存候	備前国児島の本太城が三好方の香西氏に攻撃された。このことで隆景は随分心配していたが、村上武吉の活躍で勝利を得、敵の総大将をはじめ香西の将兵をいくらか討ち取った。この武吉の功績を隆景が称賛したもの。	児島本太 (261本太城跡)	(小早川) 隆景	(永禄十一年) 九月二十九日	1568年	4・12・61・110・142
102	毛利元就書状写／『関関録』巻廿三 村上一学	至今度其表、阿州衆取懸候処、堅固被遂防戦、剩敵陳被仕崩、数人被討果候、無比類段中不及申候	児島に阿波三好氏の軍勢が攻め込んだ際、本太城を堅固に守って防戦し、敵軍を切り崩して数人を討ち果たした本太城衆に対し、毛利元就が称賛の意を伝えた書状。	元太御城衆中 (261本太城跡)	(毛利) 元就	(永禄十一年) 十月一日	1568年	61・110
103	小早川隆景感状写／山口県島家文書(『関関録』巻百六十九 村上図書家来嶋藤三郎にも写しあり)	至今度児島元太阿州衆取懸候刻、有籠城被尽粉骨、被仕退之候、誠御忠節之段、無比類候	上記と同じ合戦に関する史料。本太城が三好氏の軍勢(阿州衆)に攻められた際、籠城して敵を退けた嶋吉利(越前守)の功績を、隆景が称えたもの。	児島元太 (261本太城跡)	小早川隆景	(永禄十一年) 十一月九日	1568年	4・12・61・113
104	毛利元就・輝元連署書状／屋代島村上家文書(山口県文書館蔵寄組村上家文書。『関関録』巻廿二之一 村上図書に写しあり)	幾度申候而も児島元太表之儀、是又御家来衆に堅固之御覚悟之[ママ]、阿州衆被切崩之、彼境除明候事、不一方御馳走不忘却候	毛利元就・輝元父子が、本太城防衛戦について村上武吉に感謝の意を伝えた書状。児島の本太城を武吉の家来衆が堅固に守備し、攻め寄せた阿波国三好氏の軍勢を撃破したおかげで、児島方面の戦闘が一段落した。こうした村上水軍の一方ならぬ働きを今後忘れることはない、と伝えている。	児島元太 (261本太城跡)	(毛利) 元就・(毛利) 輝元	(永禄十一年) 十一月十二日	1568年	4・61・110・142
105	村上武吉感状案／山口県東和町島家文書	今度元太為在番申付候之由、阿州衆取懸候、別而被尽粉骨、敵陣切崩、為香西又五郎宗徒之者共、不其数知討果并頸二被討捕候、誠忠儀無比類候	能島村上水軍の棟梁村上武吉は、配下の島吉利(越前守)を在番として児島の本太城を守らせていた。そこに阿波国の三好軍が攻め寄せたが、吉利が奮戦して敵陣を切り崩し、敵軍の大將香西又五郎をはじめ主立った者を多数討ち取った。この感状は、こうした活躍によって本太城を守り切った吉利の功績を、武吉が褒めたもの。	元太 (261本太城跡)	村上掃部頭武吉	永禄十一年霜月十四日	1568年	4・61
106	足利義昭御内書写／下関文書館蔵細川家文書	今度者於備前児嶋粉骨之由、無比類候	足利義昭が細川通董(下野守)に与えた御内書。備前国児島での戦い(本太城合戦)における通董の奮闘を称えたもの。	(261本太城跡)	義昭公御判	(永禄十一年) 十一月二十四日	1568年	28・143
107	細川藤賢副状写／下関文書館蔵細川家文書	阿讃衆至備前児嶋打越候処、被懸着、被及一戦、香西初而千余被討捕之由、則達 上聞候処、被成 御内書候、御面目之至候	幕臣細川藤賢が、上記の義昭御内書に添えて細川通董(下野守)に送った副状。阿波・讃岐の軍勢が備前国児島(本太城)に進出した際、細川通董は戦場に駆けつけて四国勢と一戦を交え、香西氏をはじめとする千人余りの敵を討ち取った。この戦勝の報告を足利義昭に上申したところ、義昭が喜んで上記御内書を発行したことを通董に伝達している。	(261本太城跡)	細川右馬頭藤賢	(永禄十一年) 十一月二十五日	1568年	28・143
108	金光安芸守書状／吉備津彦神社文書	酒下神領出入之儀付而、国富方より金川へ進進被仕候	岡山酒折宮の所領をめぐる紛争について、国富氏が金川城に注進を行った。そのことを、金光氏が吉備津彦神社社家大守筑前守に報じたもの。	金川 (43金川城跡)	金芸守政□(金光安芸守政□)	(永禄十一年以前) 七月二十日	1568年以前	39

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
109	岡山神主某書状／社務大守家文書	以前徳藏殿・金光殿より御扱ノ時御折紙、金川へ御上ケ候つ	岡山酒折宮の神主が、吉備津彦神社神主の大守氏に送った書状。岡山近辺での紛争につき、以前徳藏氏（徳倉氏）・金光氏が仲裁した時の証文を、金川城の松田氏に提出したとの意味。	金川（43金川城跡）	岡山神主□□	(永禄十一年以前) 九月十二日	1568年以前	39
110	浦上宗景書状／備前松田文書『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡新庄村六右衛門所蔵文書に写しあり	今朝敵至其構際相動候処、堅固被申付、殊即座二追崩、数輩討取之段、御忠節二候	朝方、松田彦次郎の「構」の際に敵軍が攻め寄せたが、彦次郎が堅固に守って即座に敵を追いやった。このことを宗景が褒めたもの。	構（75西谷城跡）	浦上宗景	(永禄十二年) 七月二十日	1569年	14・41・138
111	宇喜多直家書状／阿波鳥山文書	昨日敵働懸、以一戦実否可相果与存、人数差出候処、額田構江敵取入候条、不有是非候、作岳崩和・江原・原田・貴志・沼元以下迄悉加■候て昨日之跡候条、心得ハはや聊も無氣遣候、令安堵候、(中略) 今朝平岡へ相働、郷中大形打果候	直家が鳥山弥三左衛門(鳥弥)に与えた書状。昨日浦上軍が仕掛けてきた際、直家は一戦で勝敗を決しようと考え軍勢を進めたところ、浦上軍は額田氏の居城に引き籠り、勝負をつけられなかった。浦上軍には崩和・江原・原田・貴志・沼元氏ら美作国衆が大勢加わっているのに、このような体たらくなので、ほとんど心配することもない。今朝は平岡郷に侵攻し、郷内の敵方をほとんど討ち果たした、との意。	額田構（91宝地城跡・93大久保城跡・94高尾山城跡・337佐古谷城跡・350高尾山城跡・番号なし たんら山城跡）	宇喜多直家(宇喜多和泉守直家)	(永禄十二年) 七月二十日	1569年	41・138
112	朝山日乗書状案／益田家文書	為備作兩國御合力、木下助右衛門尉、同助左衛門尉・福島両三人二池田被相副、別所被仰出、是茂日乗為検使罷出、二万計にて罷出、及合戦、(中略) 即時二小寺・宇野申付、野州一統候て三石二在陣仕、宇喜多・三村と申談、天神山根切可被仰付候	織田軍の播磨・備前方面進出につき、検使として従軍中の日乗が毛利元就以下13人に報じたもの。織田軍は木下助右衛門尉らを將とし、摂津国の池田勝正・播磨国の別所氏の軍を合わせ、二万人ほどの軍勢で播磨国へ出陣した。すぐに小寺氏や宇野氏の攻略を申しつけ、播磨国を赤松政秀(野州)に統一させた上で備前国三石に進軍し、宇喜多直家・三村元親と相談して天神山城の息の根を止めるよう織田信長が命じるであろう、と述べている。	天神山（137天神山城跡・138古天神山城跡）	(朝山) 日乗	(永禄十二年) 八月十九日	1569年	12・41・79・138
113	浦上宗景書状／『黄薇古簡集』巻第二・城府二山内仲次所蔵文書	今朝敵至其構際相働之処、堅固被申付、殊即座二追崩、数輩討取之段、御忠節二候	宗景が松田彦右衛門(彦次郎の父)に与えた書状。今朝、敵軍が松田氏の「構」の側に攻め込んだが、彦右衛門らは堅固に城を守り、即座に敵軍を追い散らし、数人を討ち取った。このことを宗景が褒め称えたもの。	構（75西谷城跡）	(浦上) 宗景	(永禄十二年) 八月二十日	1569年	14・138
114	毛利元就・小早川隆景連署書状／『閩閩録』巻三十三 粟屋勘兵衛	児嶋表江動儀定候て、今日廿八日元資其外渡海之由、如此申来候、此時者先諸勢之儀、彼表江差出可然候、鼻高之儀、則時落去候へ者尤珍重候、自然少も相支候者、至幸山表備前衆可罷出事眼前候、幸山表弱々敷事共候へハ、一大事之儀候間、此方人数迫々差つ、け、児嶋表存分候へて不叶儀候、得其心備後衆へ之事、一時片時茂催促仕立可罷出事、千万ノ肝要迄候、一昨日申所ハ、児嶋へ共、多治部へ共すめ候へて、於深山両方を相向、可急方へと申事二候つれ共、此分申来候間、重々申遣候、其方所より元資・元親江早飛脚を遣、はや渡海候者何かも不入、備後衆之事うつしかけ、幸山表江可罷出候、如是ハ被申候へ共、もし旨儀相違候而、五三日も延引候て、未無渡海候者、備後衆之事も先深山表在陣候て、彼渡海之節、幸山へ被出候て可然候	毛利氏と浦上・三好連合軍との戦いにつき、元就・隆景が現地にいる家臣粟屋就方に作戦を指示したもの。備前衆の児島出兵が決定し、庄元資らの軍勢が渡海するとの報告を受けた元就・隆景は、鼻高山城を早期に落城させることを重視し、この城が少しでも持ち堪えたらその間に浦上軍(備前衆)が幸山城へ攻め寄せるに違いないと予測する。幸山城が弱体では一大事なので援軍を差し向ける予定だが、児島での合戦が上手くいかねばそれも難しいから、備後国衆を催促して出陣させるのが肝要と述べる。毛利氏は以前、児島にも多治部城(=塩城山城)にも軍勢を差し向けず、深山に陣取って急ぐべき方面を見極めてから進軍する予定だった。しかし、庄元資・三村元親ら備前衆へは早急に児島へ渡海するよう命じ、備後衆は幸山城救援に向かわせることとし、もし備前衆の渡海が遅れる場合は備後衆も深山へ向かわせ、備前衆が渡海する際に幸山城へ向かわせるのがよいことなどを指示している。	鼻高（229鼻高山城跡） 幸山（備中414）幸山城跡 多治部（備中58）塩城山城跡 深山（備中127）阿部深山城跡カ）	(毛利) 元就・(小早川) 隆景	(元亀二年) 正月二十八日	1571年	12・110

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
115	毛利元就・小早川隆景・毛利輝元連署書状写／『関関録』卷三十三 粟屋勘兵衛	児島表江働之儀、今日廿八日二儀定候て、元資其外渡海之由、如此申来候、此時者先諸勢之儀、彼表江差出候て可然候、鼻高之儀、則時二落去候へ者珍重候、自然五日十日茂相支候者、至幸山表備前衆可罷出事可為案中候、(中略)今度児島表之儀、三家仕損候者、諸口覚可為相違候条、備後衆之事、其方催促候て継夜於日、被懸付候様可申達候、(中略)遅候て幸山表弱々敷之儀共候ハハ、一大事之儀と存候、(中略)一昨日申所者、児島表へ共、多治部表へ共すめ候ハて於深山両方を相同、可急方へと申事二候つれ共、此分二申来候条、重々申事候、從其方所早飛脚を元資・元親江遣之、はや渡海候者何かも不入、備後衆うつしかけ幸山表江可差出候、(中略)五三日も延引候て、いま無渡海候者、備後衆之事茂先深山二在陳候て、彼表渡海之節幸山表江被出候て可然候	毛利氏と浦上・三好連合軍との戦いにつき、元就・隆景が現地にいる家臣粟屋就方に作戦を指示したものの。前出史料と多少語句・表現は異なるが、内容はほぼ同じ。	鼻高 (229鼻高山城跡) 幸山 (備中414) 幸山城跡) 多治部 (備中58) 塩城山城跡) 深山 (備中127) 阿部深山城跡カ)	(毛利)元就・(小早川)隆景・(毛利)輝元	(元亀二年)正月二十九日	1571年	61・110
116	毛利輝元書状写／『関関録』卷百廿三 大多和惣兵衛	其方事、今度元太表馳走肝要候、雖不及申兒 蔵同前罷出、何篇可談合候	輝元が大多和就重(惣兵衛尉)に対し、児玉就方(児蔵)と共に出陣し、本太城への対応に尽すよう命じたもの。	元太 (261本太城跡)	(毛利)輝元	(元亀二年)二月二十二日	1571年	12・112
117	小早川隆景書状写／『関関録』卷五十七 飯田平右衛門	元太表之儀付而、警固整之銀子之事、粟蔵・木次兵并鶴新婦之時、得御意候つる間、逗留にて此返事被聞候而、可被帰候	隆景が飯田尊継(三位)に与えた書状。本太城に関して水軍(警固)を準備するために要した銀子について、粟屋元種(内蔵丞)らが帰宅した際に言い分を聞く旨、伝えている。	元太 (261本太城跡)	(小早川)隆景	(元亀二年)二月二十九日	1571年	61・111
118	小早川隆景書状／三原城城壁文書	就元太表之儀、先日者預御尋于今本望候、(中略)彼表之儀、詰口堅固二仕寄等申付之由候、急度可有一途趣候、雖然阿州衆事、此砌出津候而、後巻必定由到来候、此時者非可致油断候之条、我等事出張候て、追々人数并舟短息候而、後詰之覚悟候	本太城の戦いについて熊谷信直から質問された小早川隆景が、現状を報じたもの。毛利軍は仕寄などを設けて本太城を嚴重に包圍しており、すぐに決着する状況だったが、阿波三好氏の水軍が出航し、本太城の救援に向かうのは必定、との報告が到来した。これに対抗して、隆景も出陣し追々軍勢や水軍を増援する覚悟でいる旨を返答している。	元太 (261本太城跡)	(小早川)隆景	(元亀二年)三月十日	1571年	61・128
119	毛利輝元書状／三原城城壁文書	就元太表之儀、先日以使者申入候処、一左右次第可預御馳走之通、誠乍毎事本望之至候、然者阿州衆後巻仕候之由、此時者非可致油断候条、隆景事不日中途出張可被仕候、御方様之儀(中略)来十六日於御打出者、可目出候	毛利氏から本太城攻略戦への参加を打診された某は、毛利氏に協力する旨回答した。これを喜んだ毛利氏は、阿波三好軍による本太城救援を阻止するため小早川隆景がほどなく中途まで出陣するので、これに合わせて来る十六日に陣出してくれよう某に依頼している。	元太 (261本太城跡)	差出人欠損(毛利輝元カ)	(元亀二年)三月ごろ	1571年	61・128
120	毛利輝元書状／三原城城壁文書	就元太表之儀、先日申入候処、御懇之御返事にて本望候、然者彼要害之儀大剛在之候条、此儘詰口差寄可申候、兼而如申談候、(中略)来十六日被成御出張候者可為本望候	上記史料とほぼ同内容。本太城は非常に堅固な城なので、このまま包圍して城に軍勢を寄せていくつもりであると某に伝えている。また、某に対して、以前話したとおり来る十六日に陣出してくれるとありがたい、と述べている。	元太 (261本太城跡)	差出人欠損(毛利輝元カ)	(元亀二年)三月ごろ	1571年	61・128
121	毛利輝元書状／三原城城壁文書	元太之儀頓落去候、誠御心遣御短息故候、大慶此事候	小早川隆景の心づかいと努力によって、本太城が早期に落城したことを、輝元が喜び褒め称えたもの。	元太 (261本太城跡)	(毛利)輝元	(元亀二年)卯月六日	1571年	61・128
122	小早川隆景書状／因島村上家文書(『関関録』卷百三十二 村上太左衛門にも写しあり)	今度元太動之時、敵船被懸、頸(割注：三井)一人被生捕、殊御自身御高名無比類存候	本太城合戦の際、敵の軍船に攻めかかって首級を挙げ、自らも手柄を立てた因島村上水軍の将村上祐康(左衛門大夫)の活躍を、隆景が褒め称えたもの。	元太 (261本太城跡)	(小早川)隆景	(元亀二年)五月三日	1571年	4・61・112
123	毛利元秋書状写／『関関録』卷百十五之三 湯原文右衛門	備州本太之儀、頓落去候而自他太慶候	元秋が湯原春綱(右京進)に対し、備前国本太城が早期に落城したことに対する喜びを伝えたもの。	備州本太 (261本太城跡)	少十元秋(毛利少輔十郎元秋)	(元亀二年)五月四日 ※年次比定は出典の光成論文に依る	1571年	12・134

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
124	小早川隆景自筆書状／小早川家文書	一上口之儀、兒島無正跡候、高島・郡之事、はや／可破趣候、敵も見候ハぬ二、阿讃備前衆ニおとされ候て、無正儀聞候(中略)常山鼻高、通董元資人数追々被差籠候、城主表裏たになく候ハ、不審等者無之候へ共、以手柄仕崩候儀ハ有間敷之条、可相拘候哉、兵糧以下者、追々差籠候、何も弱々敷辻迄二候、一今保妹尾、是又一大事二候、宗景福林島まで出張之由候、宇喜多是又浮出候	毛利氏と浦上・三好連合軍との戦いについて、隆景が重臣乃美宗勝に報じたもの。兒島は混乱しており、阿波・讃岐・備前の連合軍に脅されて高島城や郡の城は早くも攻め破られる様子であること、常山・鼻高山城には在来の「城主」に加え、細川通董・庄元資の軍勢を追って入城させることを伝えている。常山・鼻高山城主に離反の気配はないが、進んで手柄を立てる様子もなく、弱々しいと評されている。また、浦上宗景自身と宇喜多軍が「福林島」まで出陣し、今保・妹尾が危ないと認識されている。	高島 (253高島城跡カ) 郡 (244古城山城跡カ) 常山 (240常山城跡) 鼻高 (229鼻高山城跡) 今保 (279今保城) 妹尾 (備中442) 須浜城跡カ)	(小早川) 隆景	(元亀二年) 五月七日	1571年	12・76
125	毛利元就・輝元連署書状写／『閨閩録』卷廿五 清水宮内	当城之儀、弥堅固可被相抱之由、誠御覚悟無比類候、(中略)仍篠原以下兒島可罷渡催付而、彼表一味中心遣之由候間、至渡口先勢差上候	毛利元就・輝元父子が、今保城を堅固に維持している横井左衛門尉の覚悟を褒めたたえた書状。阿波国の篠原長房が兒島に侵入し、兒島の毛利方が動揺しているとの報に対しては、援軍の先発隊を渡口まで差し向けたことを伝えている。	当城 (279今保城)	(毛利) 元就・(毛利) 輝元	(元亀二年) 五月八日	1571年	61・110
126	毛利元就書状写／『閨閩録』卷九十六 岡与三左衛門	浦上重而幸山表罷出、可致行之由候付而度々示給候、御懇之儀候、然間庄元資事、早々帰宅候て、幸山表外郡之覚悟可為肝要候通、従我等も申遣候、又細川野州人数被残置、此間無異儀候之条、可被打歸之由示給候、尤二候へ共連御入魂之儀候間、今聊御在陣候而、幸山表之趣可被御覧候、浦上行実否可見候と御返事申候、(中略)就中今度警固事、各馳走候由承候、(中略)唯今之儀、兒嶋高島表江せめて警固懸置度と高島申由候、何とぞ御思案候て、兩人御操候て可有御覧候、(中略)是非共高島所にハ警固少成共懸置度事候、(中略)從此方も備後衆数人、敷名兵部大輔為大将差出候条、警固之段御短息可為祝着候	浦上軍が幸山城を攻撃するため出陣したとの報告を受け、元就が水軍の将岡就栄・渡辺房に対応を示した。常山・鼻高山城にいる庄元資は早々に猿掛城へ帰宅させ、幸山城や備中国外郡の守備を任せると。細川通董(野州)は兵のみを常山・鼻高山城に残して帰宅したいと言ってきたが、もうしばらく在陣して幸山城をめぐる情勢や浦上軍が実際に動くかどうか見極めるよう返事したこと。高島氏が自分の領内に水軍を配置して守りたいと言っているとのことなので、岡就栄・渡辺房の兩人で思案して少しでも高島氏のために水軍を配置できるよう工夫してほしいこと。こちらからも敷名元範(兵部大輔)を大将とする備後衆を派遣したので、海上での活躍を期待していることを伝えている。	幸山 (備中414) 幸山城跡) 高島 (224小串城跡・257番田城跡・258胸上城跡)	(毛利) 右馬頭元就	(元亀二年) 五月十三日	1571年	12・112
127	毛利元就書状／『思文閣古書資料目録』155号所載文書	至兒島為動、阿州衆至宇多津罷出由、示給候、常山儀手弱由、其間候間、無心元候、(中略)可被添御力事、肝要候	渡辺房(出雲守)・柚木但馬守から阿波三好軍の動きについて報告を受けた毛利元就が、兩人に返信したもの。三好軍が備前国兒島へ攻め込むため讃岐国宇多津まで進出してきているが、これを迎え撃つ常山城は頼りない様子で心もとなく感じられるので、力添えするよう兩人に命じている。	常山 (240常山城跡)	(毛利) 右馬頭元就	(元亀二年) 六月二十四日	1571年	60
128	毛利輝元書状写／『閨閩録』卷廿五 清水宮内	去月三日敵一城取付、日々御取相之由、寔御忠儀無比類次第候、御辛勞之至候、(中略)仍為兵糧合力銀子廿枚、燧筒式十斤、鉛式貫目進置候	六月三日、横井左衛門尉の籠もる城(今保城カ)に敵(浦上・宇喜多軍)が付城を構築したため、左衛門尉はこれと日々交戦していた。輝元はこうした左衛門尉の忠義をねぎらい、兵糧購入用の銀子と鉄砲の弾薬(燧筒・鉛)を提供する旨、伝えている。	(279今保城カ) 敵一城	(毛利) 輝元	(元亀二年カ) 七月二十日	1571年カ	110
129	毛利輝元書状写／『閨閩録』卷廿五 清水宮内	就今度佐井田表之儀、某許別而御心遣奉察候、当城之儀以御覚悟堅固二被相拘候、誠無比類存候	毛利輝元が佐井田城合戦の結末をみて気遣いする横井左衛門尉の心情を汲みつつ、「当城」(今保城)が左衛門尉の心がけて堅固に保たれていることを褒めたもの。	佐井田 (備中76) 才田城跡) 当城 (279今保城跡・280松田屋敷跡カ)	(毛利) 輝元	(元亀二年) 九月九日	1571年	110
130	小早川隆景書状／山田家古文書卷六	作州三星儀、最前敵及行候刻、手前堅固候て、勝利之処、其以後天神之衆以武略三丸仕取、難儀之由不及是非候、(中略)其元之儀ハ方角之事候間、別而此節被成御短息、三星堅固候様、御才覚頼存候	毛利方の美作国三星城はこれまで味方が堅固に守備して籠城戦で勝利を収めていたが、天神山城の浦上宗景の軍勢(天神之衆)が武略を用いて三の丸を攻め取ったため、難儀に陥っていた。こうした状況を受け、小早川隆景が山田出雲守に対し、三星城が堅固に保たれるよう才覚をめぐらすよう指令したもの。	三星 (美作350) 三星城跡) 天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	小早川隆景	「元亀三年カ」 三月七日	1572年	12・93

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
131	某書状写／『美作国諸家感状記』吉野郡壬生村七郎右衛門所持文書	爰許之儀明日三星出張、輝元義至中途被罷出候間、備作栗茂多分被申越候、其表之義者草三被仰談之御手合肝要候、(中略)後藤・天神間之義及鉾桶之由承知候、先以可然候	毛利方の何者かが、美作国東部近隣の誰かに送った書状。毛利軍が明日三星城に向けて出陣し、毛利輝元自身も途中まで出向く予定を伝え、宛名の人物も草刈景繼と相談し毛利軍に合わせて行動するよう求めている。また、後藤勝基と天神山城の浦上宗景とが争っていることを聞き、自分たちにとって都合だと答えている。	三星 (美作350) 三星城跡) 天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	未詳	(元龜三年)	1572年	41
132	宇喜多直家書状／備前松田文書(『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡新庄村六右衛門所蔵文書に写しあり)	芸州衆至神辺・笠岡、自去月中旬比着陣候、因茲、境目分等申付故、不得寸隙、近日無沙汰候、(中略)万端從十倉可申候条、不克愚筆候	宇喜多直家が松田氏に与えた書状。神辺・笠岡あたりに着陣した毛利軍に対応するため、境目への指示命令に忙殺されて無沙汰を重ねたことを詫び、詳しくは徳倉城主から伝達する旨申し送ったもの。	十倉 (44徳倉城跡)	宇泉直家(宇喜多和泉守直家)	(元龜三年)九月三日	1572年	11・14
133	小早川隆景書状／乃美文書	一、岡山去廿八日〔 〕残諸城等之儀、悉可渡置之由候間、一昨日以来至内□□檢使等差上候、 一、今任【保】之儀、依為備前之内、最前之約談横井在所をも可易之由申組二付而、此条公事半候、	隆景が乃美宗勝(乃兵)に与えた書状。岡山城の宇喜多直家から九月二十八日に知らせがあり、毛利氏と浦上・宇喜多氏の和睦条件として毛利方に明け渡すことになっていた諸城のうち未了となっていた分について、全て引き渡すことに決したので、一昨日以来毛利氏側から城を受け取るための檢使を派遣している旨、報じている。ただ、今保城については備前国の内に含まれるので、城主横井氏を毛利領内へ転出させるよう浦上・宇喜多氏側から要求され、このことについて係争している最中であるという。	岡山 (180岡山城跡) 今保 (279今保城)	(小早川)隆景	(元龜三年)十月二日	1572年	59
134	吉川元春・小早川隆景連署起請文写／『閩閩録』巻廿五 清水宮内	今度芸備和平之儀、雖非本意候、京都御下知之条、不能違背、応上意候、然所当城破却之儀申之処、御同心尤本望候、近年对芸州御忠儀次第、輝元并兩人事、於向後聊不可有忘却候	元春・隆景が今保城主の横井左衛門尉に捧げた起請文。このたびの浦上・宇喜多氏との和睦は、毛利氏の本意ではないのだが、京都(將軍足利義昭)の命令だったので無視することも出来ず、將軍の上意に応じて講和することになったと伝えている。そして、講和の条件となっていた今保城の破却・撤収に横井氏が同意してくれたことに感謝の意を伝え、横井氏の芸州(毛利氏)に対する忠節を今後少しも忘れたいし、と誓約している。	当城 (279今保城)	吉川元春・小早川隆景	元龜三年十月二十九日	1572年	110
135	毛利輝元自筆書状／長府毛利家文書	信長への儀、安国寺先度ハ難罷上之由候つか、いかゞ候哉、又可罷上之由候、就夫於安木隆景被相談、安木より拵之趣、音物等之儀被申越候間、任其儀致短息候、我等若輩のわらんへきの存にハ、先越州被任存分祝儀かるゝと申上せ、天神の儀ハ不取合、使僧上せ候て、さて安国寺二人相副差上、此方之存分理速二申分度事候	毛利輝元が叔父の元清に対し、織田信長・浦上宗景・宇喜多直家への対応について私見を述べたもの。安国寺恵瓊が上洛するとのことなので、小早川隆景と相談し織田方との調整方針・贈答品などのことを踏まえて努力するつもりであるという。輝元自身の考えとしては、信長に対し越前国平定の祝儀を申し述べ、信長から天神山城の浦上宗景の件について問いただされても取り合わず、安国寺恵瓊に使僧を一人添えて上洛させ、毛利氏側の存念をすみやかに織田方へ説明したい思っている、という。	天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(毛利)輝元	(天正元年カ)九月晦日 ※天正三年の可能性もあり	1573年カ	62・94
136	日笠頼房書状／備前松田文書(『黄薇古簡集』巻第十一・赤坂郡新庄村六右衛門所蔵文書に写しあり)	金川より御取分正礮之事、代官衆難洪之由、最前承候間、今度岡山へ參候時、申理候	浦上宗景の宿老日笠頼房が、松田彦次郎(松彦)に送った書状。松田彦次郎は宇喜多氏の代官を介して金川の所領から年貢(正礮)を得ていたが、なぜか代官衆が難洪して年貢の納付がなされない状況になっていた。そのことを松田氏から相談された頼房が、今度岡山城へ行った時に宇喜多直家に折衝してみると返答している。	金川 (43金川城跡) 岡山 (180岡山城跡)	日次(日笠次郎兵衛尉)頼房	(天正元年カ)十月朔日	1573年カ	11・14・138

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
137	小早川隆景書状写／『関閩録』卷四十七南方九左衛門	草刈江被申合、一城被取出候者可為入魂候、此調儀肝要候、(中略) 俄之様候而城取之事けに、／不成候者、至奥津・才原一勢可被打出候、此方檢使彼表差出待可申之条、於于時行之儀者、可被任申旨之通、岡山江申遣候	小早川隆景が吉川元春らと因幡国鹿野城攻めについて意見交換した書状。草刈景繼と相談して城を一ヶ所築くのが肝要だが、にわかので城取り(=築城)が難しい場合は、奥津・才原まで軍勢を出してほしいと伝えている。また、檢使を奥津・才原で待機させ、作戦行動実施の際はその指示に任せて動くよう岡山城の宇喜多氏に連絡した、と伝えている。	岡山 (180岡山城跡)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正元年) 十月十三日	1573年 年カ	41・111
138	安国寺恵瓊書状／吉川家文書	京都之儀如形相調、今日十二、至備前岡山罷着候(中略) 播州広瀬之事、(中略) 今日十二直家と面談仕、来春先広瀬江被取懸候へと申事に候、内々直家も其望にて候	京都で信長との交渉を整えた安国寺恵瓊が、十二月十二日備前岡山に立ち寄り、宇喜多直家と面談して、来年の春播磨国広瀬に攻め込むよう直家に勧めている。	備前岡山 (180岡山城跡)	(安国寺) 恵瓊	(天正元年) 十二月十二日	1573年	75
139	毛利輝元書状／橋崎文書	備前江檢使之儀、松山・幸山先兩所へ可遣由候、松山へ申分候条、羽仁又右衛門尉・黒杭周防守罷上候て、羽又右事者返事聞候て一旦可罷下候、黒杭周逗留肝要候、幸山へハ八幡原孫兵衛尉罷越可逗留候、久芳兵庫助事者、備後外郡衆四人江為元太一礼可罷越候	毛利輝元が備前松山城・幸山城へ派遣する檢使について指示を与えた書状。申し分があるという松山には、羽仁・黒杭両名が向かい、羽仁氏は相手の意向を聞いたら一旦帰還し黒杭氏のみが松山に逗留すること、幸山へは八幡原氏が赴いて逗留することを指示している。また、元太城の一件で活躍した備後外郡衆四人に礼を述べるため、久芳元和(兵庫助)を派遣すると述べている。	松山 (備中158) 備前松山城跡 幸山 (備中414) 幸山城跡 元太 (261本太城跡)	(毛利) 輝元	年末詳 卯月十八日		61・128
140	宇喜多直家判物／備前河公文書(『黄薇古簡集』卷第六・城府六下之町総代万介所蔵文書にも写しあり)	去三日、於鳥取高尾山表、天神山衆及合戦、抽粉骨之段、神妙候、必恩賞可相計候	六月三日、鳥取高尾山において宇喜多軍と浦上軍(天神山衆)が合戦した際、河口左馬進は宇喜多軍に属して奮戦した。この左馬進の働きを直家が称え、恩賞授与を約束したものの。	鳥取高尾山 (94高尾山山城跡・350高尾山山城跡・番号なし 高尾城跡)	(宇喜多) 直家	天正二年六月五日	1574年	11・14
141	宇喜多直家判物写／『芸備郡中土筋者書出』西城町庄屋茂兵衛所持文書	去三日、於鳥取高尾山表、天神山衆及合戦、抽粉骨神妙候、必恩賞可相計	六月三日、鳥取高尾山において宇喜多軍と浦上軍(天神山衆)が合戦した際、祇園弥太郎は宇喜多軍に属して奮戦した。この弥太郎の働きを直家が称え、恩賞授与を約束したものの。	鳥取高尾山 (94高尾山山城跡・350高尾山山城跡・番号なし 高尾城跡)	(宇喜多) 直家	天正二年六月九(五カ)日	1574年	119
142	小早川隆景書状／神原文庫毛利氏関係文書	從岡山吉田への進注状、明飛現形以来終無之候、安国寺油断にて候(中略) 加賀戸之要害令現形之由誠太利此事候、天神家来弥不可有正義候	小早川隆景が重臣桂景信・井上元勝に送った書状。岡山城の宇喜多直家から吉田郡山山城の毛利氏に対する戦況報告が届かなくなっているのは安国寺恵瓊の油断であると責める。また、香登城が毛利・宇喜多方に寝返ったのは大変喜ばしいことで、天神山城の浦上家臣団はかなり動揺しているだろう、と述べている。	岡山 (180岡山城跡) 加賀戸之要害 (164香登城跡) 天神 (137天神山城跡・138古天神山城跡)	(小早川) 隆景	(天正二年) 九月五日	1574年	29・41・119
143	大友宗麟書状／上利文書	其堺之儀、宇喜多依逆意、所々令違交、浦上宗景籠城之由、無是非候	大友宗麟が美作国の三浦貞広(次郎)に送った書状の一節。宇喜多直家の反逆によって浦上宗景が籠城する事態になっていることを伝え聞き、是非なきことと感想を述べている。	(137天神山城跡・138古天神山城跡)	(大友) 宗麟	(天正三年) 正月三十日	1575年	5・41
144	上野隆徳書状／木村家文書(『黄薇古簡集』卷第十五・児島郡木見村喜八所蔵文書に写しあり)	籠城相屈段神妙口候、五反可遣候	上野隆徳が常山籠城に参加した喜八を褒め、褒美として五反の土地を与えたもの。	(240常山城跡)	(上野) 隆徳	天正三年二月十四日	1575年	14・61
145	浦上宗景書状写／『黄薇古簡集』卷第十一・磐梨郡土生村某所蔵文書	去十二日、於日笠青山之下、單合戦時、鏑脇刺被疵之段、粉骨無比類	四月十二日、浦上軍に属して日笠青山山下で合戦し、奮戦して負傷した竹内九兵衛の働きを浦上宗景が褒めたもの。	日笠青山 (145青山山城跡)	(浦上) 宗景	(天正三年) 四月十四日	1575年	14・41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作者名	年月日	西暦	文献番号
146	浦上宗景書状写／『黄薇古簡集』卷第十二・和氣郡上日笠村神職近藤左大夫所蔵文書	去十二日、於日笠青山之下、單合戦候処、從後競懸射鏑脇之高名、無比匹	四月十二日、浦上軍に属して日笠青山城下での合戦に参加し、槍脇の高名を挙げた日笠牛介の働きを、浦上宗景が褒めたもの。	日笠青山 (145青山城跡)	(浦上) 宗景	(天正三年) 四月十四日	1575年	14・41
147	浦上宗景書状写／『黄薇古簡集』卷第十二・和氣郡上日笠村神職近藤左大夫所蔵文書	去十二日、於日笠青山之下、及合戦、令分捕、高名無比類	四月十二日、浦上軍に属して日笠青山城下での合戦に参加し、敵を討ち取る手柄を立てた日笠助十郎の働きを、浦上宗景が賞したもの。	日笠青山 (145青山城跡)	(浦上) 宗景	(天正三年) 四月十四日	1575年	14・41
148	日笠頼房書状写／『黄薇古簡集』卷第十二・和氣郡上日笠村神職近藤左大夫所蔵文書	今度於青山之下、及合戦、原助一郎被討捕、粉骨無比類候、然者以新知之内三町分、於日笠田畠三段之通、令合力候	青山城下の戦いで原助一郎を討ち取る手柄を立てた日笠助十郎に対し、日笠頼房(浦上氏宿老・青山城主)が恩賞として所領を給付したもの。	青山 (145青山城跡)	(日笠) 次郎兵衛頼房	(天正三年) 四月十五日	1575年	14・41
149	宇喜多直家感状写／『黄薇古簡集』後篇伊木長門家土三宅七左衛門所蔵文書	今度城山依攻崩、頓切入、城主額田与次右衛門尉討捕之段神妙	宇喜多軍が浦上宗景方の「城山」を攻め落とした時、いち早く城内に切り込んで、城主額田与次右衛門尉を討ち取った渡辺紀右衛門の殊勲をたたえたもの。	城山 (135観音山城跡カ)	(宇喜多) 直家	天正三年五月朔日	1575年	14・119
150	浦上宗景判物／額田文書	父八郎兵衛尉・舎兄新三郎、今度於城山、額田同前之致討死候段、忠節無比類候	浦上宗景の家臣弥延八郎兵衛・その子新三郎は、「城山」で宇喜多軍と戦い、額田与次右衛門尉と一緒に戦死した。本史料は宗景が八郎兵衛尉の遺児弥延平三に宛てたもので、八郎兵衛尉父子の忠節を賞揚し、その労に報いている。	城山 (135観音山城跡カ)	(浦上) 宗景	天正三年五月三日	1575年	24・119
151	浦上宗景判物／阿波坪井文書	今度籠城相届条、竹原庄内弥五郎名并次郎三郎名事相計候訖	天神山籠城に参集した坪井佐介に対し、浦上宗景が備前国上道郡竹原庄の土地を所領として給付したもの。	(137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	天正三年五月九日	1575年	41
152	浦上宗景判物／備前松田文書(『黄薇古簡集』卷第十一・赤坂郡新庄村六右衛門所蔵文書に写しあり)	今度籠城被相届忠節条、作州吉井分事、申談訖	天神山籠城に参加した松田久兵衛尉の忠節を褒め、美作国で所領を与えることを約束したもの。	(137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	天正三年五月二十八日	1575年	11・14
153	浦上宗景判物／備前松田文書(『黄薇古簡集』卷第十一・赤坂郡新庄村六右衛門所蔵文書に写しあり)	今度籠城被相届之条、大村左衛門大夫分之事、申談訖	天神山籠城に参加した松田久兵衛尉の忠節を褒め、大村左衛門大夫の旧領を与えることを約束したもの。	(137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	天正三年五月二十八日	1575年	11・14
154	浦上宗景判物写／『黄薇古簡集』卷第十一・磐梨郡土生村某所持文書	今度籠城相届、忠義不浅条、以弓削庄段銭之内参拾貫文、令扶持訖	天神山籠城に参集した竹内一郎大夫に対し、浦上宗景が美作国弓削庄の段銭を恩賞として給付したもの。	(137天神山城跡・138古天神山城跡)	(浦上) 宗景	天正三年五月二十八日	1575年	14
155	浦上宗景判物／阿波坪井文書	建部郷内江田三河土居分之事、相計訖	浦上宗景が坪井又四郎に対し、備前国津高郡建部郷の領主江田三河守の土居に付属する所領を恩賞として給付したもの。	江田三河土居 (場所未詳。岡山市北区建部町内)	(浦上) 宗景	天正三年六月四日	1575年	41
156	小早川隆景書状／乃美文書	常山之儀、阿讃之加勢相頼候上、駈相堪候条、至浜・藏敷昨日差寄候処、今朝卯刻令落居、隆徳父子三人・兄弟孫次郎悉討果候、太慶此事候	隆景が乃美宗勝(乃兵)に戦況を報じた書状。常山城は阿波・讃岐の加勢を頼って頑強に持ちこたえていた。毛利軍はこれを攻略するため、昨日浜・倉敷付近に兵を進めたところ、今朝の卯の刻に常山城が陥落し、上野隆徳父子三人と隆徳の弟孫次郎を全て討ち果たすことが出来た。大変喜ばしいことである、と述べている。	常山 (240常山城跡)	(小早川) 隆景	(天正三年) 六月八日	1575年	59

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
157	瓶井山禅光寺 安住院仁王像 背板墨書銘	仁王再興京都大仏師右京□□之 天正三年歳次乙亥七月廿一日始 之(中略)当代檀那宇喜多和泉 守岡山城切取十年前仁居住了 (後略)	天正三年に京都から仏師を呼ん で安住院の仁王像を再興した際、 その背板に書き込まれた墨書。 当時の安住院の檀那は宇喜多直 家(和泉守)で、彼は岡山城を 攻略し十年ほど前から居住して いる、とある。	岡山城 (180岡山城跡)		天正三年七月	1575年	17・ 139
158	浦上宗景書状 ／倉敷市所蔵 龜山家文書	大松番之義、小嶋・岡崎新丞以 下置候へ共、急用候て明後日未 明二可罷歸候と申付候条、造作 辛勞之儀二候へ共、兄弟衆二十 人ほど相添、明後日払晝二可差 遣候	宗景が美作国衆の中嶋吉右衛門 尉に送った書状。宗景は「大松」 の在番として小嶋・岡崎氏を配 置していたが、急用で明後日未 明にこの二人を呼び戻すことにな った。そこで宗景は吉右衛門 尉に指示して、彼の兄弟に20人 ほど兵を添え明後日明け方に大 松へ向かわせようとしている。	大松 (59石上古城カ) ※備前国赤坂郡石上の 大松山、またはその周 辺と推定	(浦上) 遠江 宗景	(天正二～三 年カ) 七月晦 日	1574～ 75年	148
159	織田信長朱印 状／花房文書	今度天神山落城事、無是非題目 候、然而浦上宗景、至其地引退 候由、先以可然候、就其居所相 拵為可置之、差越荒木摂津守候	織田信長が小寺政職に与えた朱 印状。今度の天神山落城は仕方 ないことだったと述べ、浦上宗 景が播磨国へ無事退却できたの はとりあえずよかった、宗景の 居所を造るために荒木村重を派 遣した、と伝えている。	天神山 (137天神山城 跡・138古天神山城跡)	(織田) 信長	(天正三年) 九月十二日	1575年	41
160	毛利輝元書状 ／『閩閩録』 卷六 毛利伊 勢	天神山落去之儀ハ委細申候キ、 作州高田之事、去十一日令落去 候、於子今者無残所申付候間、 可御心安候	毛利輝元が吉見正頼に備前・美 作・因幡の戦況を報じたもの。 天神山城の落城については詳し く述べた通りで、美作国高田城 も九月十一日に落城し、今は残 るところなく毛利氏の命令が行 きとどくようになったので安心 してほしい、と伝えている。	天神山 (137天神山城 跡・138古天神山城跡) 高田 (美作33) 高田 城跡)	(毛利) 少輔 太郎輝元	(天正三年) 九月十四日	1575年	110
161	興了書状／法 隆寺文書	一当国ノ儀、宗景為御合力、信 長御人敷乱入之由切々儀候(中 略)一天神山落居付、備前衆近 日仁出勢可有由候	播磨国船庄にいた興了という僧 侶が、船庄の莊園領主法隆寺に 播磨国の状況を報じた書状。浦 上宗景に助力するため、織田信 長の軍勢が乱入してくる模様で、 天神山落城の余勢を駆って宇喜 多軍(備前衆)も近日中に播磨 国へ出陣してくる様子であると 伝えている。	天神山 (137天神山城 跡・138古天神山城跡)	興了	(天正三年) 九月十六日	1575年	71
162	氏未詳家吉書 状／来住家文 書	舟上源五郎于今半人候事、於岩 屋失面目候、(中略)源五郎方 之儀は、在所へ御なをし候て可 然候哉、無御同心候ハ、かたか 三天神山人躰於相留可被申之由 候	片上港と淡路国岩屋港の相論に ついて。淡路国岩屋側は、半人 中の舟上の源五郎を在所に戻す ことに片上側が同意してくれな い場合、片上や天神山家中の人 間を人質として抑留するつもり でいた。	天神山 (137天神山城 跡・138古天神山城跡)	三郎右衛門 尉家吉	(天正三年以 前) 八月十七 日	1575年 以前	10
163	桜間佐永書状 ／来住家文書	尚々、服辺[]書状、若 天神御座候者、御届候ハん哉(中 略) 仍御方岩屋被仰詰候事、勝事 千万候、内々承儀候之條、若天 神衆など江六借存分可申之由承 及候	片上港と淡路国岩屋港の相論に ついて。岩屋側が天神山の家臣 たちに難しい要求をしていると の伝聞。追神部分は、片上の六 郎左衛門に対し、もし天神山城 へ行く機会があったら書状を届 けてほしいと依頼したもの。	天神 (137天神山城 跡・138古天神山城跡)	室次郎左衛 門入道佐永	(天正三年以 前) 十二月 十四日	1575年 以前	10
164	桜間佐永書状 ／来住家文書	岩屋・片上之出入事候て、今度 日笠次郎兵衛尉殿御湯治之時、 從岩屋目付能理をも可申覚悟候 処、折節、拙子御供中、陸路罷 上候条、無其儀候、重而御用之 儀候て、從天神、御人躰又御使 を御上候時、於兵庫津、何角候 へは如何御座候	岩屋港と片上港との相論につ いて。浦上宗景の宿老日笠頼房が 湯治に出かけた際、岩屋側が頼 房に直訴する覚悟でいたところ を、桜間佐永が頼房の供をして 陸路を進んだので、無事に済ん だ。次回以降も御用で天神山城 から一族家臣や使いの者が上方 へ向かう際、兵庫港で何かあつ たら大変だ、との趣旨。	天神 (137天神山城 跡・138古天神山城跡)	桜間次郎左 衛門入道佐 永	(天正三年以 前) 十二月 十四日	1575年 以前	10
165	毛利輝元書状 ／冷泉家文書 (『閩閩録』卷 百二之二 冷 泉五郎にも写 しあり)	御方之儀、乍御辛勞至常山早々 被罷上、堅固之在番頼存候、片 時可被差急候	輝元が冷泉元満(民部少輔)に 与えた書状。元満に対し、早々 に常山城へ出張して堅固に在番 を務めるよう依頼している。	常山 (240常山城跡)	(毛利) 右馬 頭輝元	(天正四～ 十一年) 五月 十六日	1576～ 83年	112・ 141
166	毛利輝元書状 ／冷泉家文書 (『閩閩録』卷 百二之二 冷 泉五郎にも写 しあり)	常山在番之儀申入候之処、御同 心祝着之候、内々有支度可有御 上事肝要候	上記に関連して、輝元が冷泉元 満(民部少輔)に与えた書状。 常山城在番の依頼を元満が了解 したことを喜んだ輝元が、内々 に支度して同城へ出張するよう 伝えている。	常山 (240常山城跡)	(毛利) 右馬 頭輝元	(天正四～ 十一年) 六月 十六日	1576～ 83年	112・ 141

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
167	後藤元政書状写／『閩閩録』巻十一之二 浦函書	至其表御着陣之由、從岡山被申越候間、態申入候、(中略)直家相談、来十六日至播州罷出候、道等不可存由断候	岡山城の宇喜多直家から、毛利軍の着陣について報せを受けた元政が、小早川隆景に送った書状。直家と相談して三月十六日に播磨国へ出陣することを伝え、進軍ルートなどへの配慮も油断なく行っている旨を報じている。	岡山 (180岡山城跡)	(後藤カ) 元政 ※宛名の書式・内容から後藤氏と推定	(天正五年) 三月十五日	1577年	110
168	福田盛雅書状写／『閩閩録』巻十一之二 浦函書	理昌・岡山所縁之儀、重而蔵田殿江得貴意候間、可被仰上候	福田盛雅が同族の福田理昌と岡山城主宇喜多氏の所縁について、井上春忠を取次として小早川隆景に対し何事かの申し開きを行ったもの。	岡山 (180岡山城跡)	(福田) 盛雅	(天正五年) 閏七月十八日	1577年	110
169	小早川隆景書状写／毛利家文書	上辺之趣、(中略) 夜前岡山ヨリ実左右候条、富平、下刑法注進状、先入御披見候	上方の状況について、岡山城から実状の報告を受けた小早川隆景が、富川秀安(富平。宇喜多氏家老)・下間頼廉の執筆した注進状を毛利輝元の側近粟屋元種に示したものの。	岡山 (180岡山城跡)	(小早川) 隆景	(天正六年) 十一月十四日	1578年	74
170	浦上宗景書状／阿波坪井文書	長々牢籠相屈、殊於幸島、晝夜辛勞忠節不淺候	長年困窮した状況にもかかわらず浦上氏に従い、幸島でも晝夜間わず活躍した坪井又右衛門尉の功勞を、浦上宗景が褒めたもの。	幸島 (213城島城カ)	(浦上) 宗景	(天正六年カ) 十二月十六日	1578年カ	41
171	浦上宗景書状／青江文次氏所蔵文書(『黄薇古簡集』巻第八・上道郡西大寺村中屋万次郎所蔵文書に写しあり)	長々牢籠相屈、殊於幸島、辛勞忠節不淺候	同上。長年の困窮に耐えて浦上氏に従い、幸島でも忠節を遂げた馬場源丞の行動を、宗景が褒めたもの。	幸島 (213城島城カ)	(浦上) 宗景	(天正六年カ) 十二月十六日	1578年カ	14・41
172	浦上秀宗書状／阿波坪井文書	長々牢籠相屈、殊於幸島、晝夜番等辛勞忠節不淺候、此節何二成共、誠忠相統被出刻、早々罷越奉公肝要候	同上。宗景の一族浦上秀宗が、幸島在番として忠節した坪井又右衛門尉の功勞を謝し、今後どのようなようになっていっても誠忠を貫き、秀宗が出向いた際は早々に出仕するよう伝えている。	幸島 (213城島城カ)	(浦上) 秀宗	(天正六年カ) 十二月二十日	1578年カ	41
173	長船貞親書状／水原岩太郎氏所蔵文書	明飛も吉岡二逗留之由候	宇喜多氏宿老明石行雄(明石飛驒守=明飛)が、備前国吉岡庄に滞在していることを示すもの。吉岡庄は明石氏居城と伝わる保木城の所在地。	(117保木城城)	長又貞親(長船又左衛門尉貞親)	(天正三～六年) 十月十一日	1575～1578年	9
174	小早川隆景書状／熊谷家文書	佐井田可有御在番之申候処、御分別可然存候、向後之儀者、徳良御望之由得其心候	毛利輝元が熊谷就真に佐井田城在番を要請したところ、就真はこれを了承した。こうした就真の分別に輝元が感謝し、今後の戦局進展後に徳良(徳倉城カ)を申し受けたいという就真の希望を容認したもの。	佐井田 (《備中76》才田城跡) 徳良 (44徳倉城跡カ)	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正七年) 十月八日	1579年	128
175	吉川元春書状写／『譜録』神保市郎右衛門常知	我等存事にハ、盛重一人此口ニ残申候て悉打丸、四畝表へ罷出、彼山之儀ハ則可被任御存分候、其御願二、宮山・寺畑之城、湯山之儀可落去候、左候て、作州葛下の城此方被成取付候者、祝山江成相、作州之儀者、多分一色可見せ候(中略)此方御短束候ハすハ、作州之儀も、備前境之儀も、岡山より仕堅候ハハ、御手間も人成かね候すると存候	宇喜多直家の離反を受け、吉川元春が長男元長・志道元保に対し、今後の織田方との戦争の方針について述べた書状。元春は、山陰方面には杉原盛重一人を残し、毛利軍を結集させて四畝城を攻めれば、すぐにこの山城は落ちるであろう、と予測する。その余勢をもって宮山・寺畑・湯山城を落城させ、葛下城までたどり着くことが出来れば、祝山城と呼応して美作国での形勢をおおよそ決することができるだろう、と述べる。ただ、毛利側が努力しなければ、美作国も備前国境も岡山城の宇喜多氏によって堅められてしまい、手間が要ることになるだろうと述懐している。	四畝 (《備中93》四ツ畝城跡) 宮山 (《美作56》宮山城跡) 寺畑之城 (《美作78》大寺畑城跡) 湯山 (《美作75》湯山城跡) 葛下の城 (《美作122》葛下城跡) 祝山 (《美作179》医王山城跡) 岡山 (180岡山城跡)	(吉川) 元春	(天正七年) 十一月三日	1579年	128
176	明石行雄書状／美作沼元家文書	至白石罷出、普請之躰見及候、存外之躰候、急度人数差出普請等可申付覚悟候	宇喜多氏の宿老明石行雄が某(沼元氏カ)に送った書状。白石城へ出向いた行雄が、城普請の状況を見分したところ、思っていたほど工事が進んでいなかった。そこで行雄は、必ず人員を派遣して普請を命じる心づもりであることを、某に伝えている。	白石 (57白石城跡)	明飛行雄(明石飛驒守行雄)	(天正七～八年カ) 十一月六日	1579～1580年カ	9

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
177	小早川隆景書状写／『関閩録』巻百二之二 冷泉五郎	爰許之儀、来十二日輝元我等事、内郡出張候、然問旁之御事、十三日某元御出船候て、為岡山押沖口可被相動候、從此方茂警固申付候、左候条、先至庭妹近辺浦被懸御舟候て可然候	毛利氏による宇喜多氏攻撃。来る十二日に毛利輝元と隆景が備中内部に出陣することになった。隆景は水軍の将冷泉元満(民部大輔)に対し、自分たちの出陣に合わせて、十三日に軍船を出して沖口、とくに庭瀬城近辺の海岸に船を停泊させ、岡山城を牽制するよう指示している。	岡山 (180岡山城跡) 庭妹 (備中402) 庭瀬城跡	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正七年) 十一月八日	1579年	12・112
178	片山久秀書状写／『美作国諸家感状記』真島郡関村鈴木九右衛門所持文書	於佐井田近辺、頭二ツ被討捕早々御持由候、可然候、何ヶ度申候ても各御高名之段難申候由御意候(中略) 諸境目為下知、福山へ被成御逗留候	伊賀久隆の重臣片山宗兵衛久秀が、鈴木孫右衛門に送った書状。佐井田城近辺で毛利軍と戦って首二つを討ち取った孫右衛門の働きに対し、主君久隆からの賞賛の意を伝えている。また、現在久隆は諸境目に指示を与えるため、福山城に滞在していることを報せている。	佐井田 (備中76) 才田城跡 福山 (19福山城跡)	片山久秀(片山宗兵衛尉久秀)	(天正七年) 十二月十一日	1579年	41
179	吉川元春書状／『關島野坂文書』	此表之儀昨廿四至四畝近陣差寄候之処、即今夜落去候、然処只今又申越候趣者、先様新山与申城茂落居之由注進候	吉川元春が厳島神社の神宮棚守房顕・元行に備作の戦況を報じたもの。毛利軍が昨日四畝城近辺に陣を寄せたところ今夜落城したこと、今飛び込んできた注進によれば新山という城も落城したことを伝えている。	四畝 (備中93) 四ツ畝城跡 新山 (8新山城跡)	吉川元春	(天正七年) 極月二十五日	1579年	126
180	宇喜多直家書状／新出沼元家文書	原三、其元於着城ハ、御帰候へと申候つれ共、虎倉之事、無異儀候、(中略) 然間、福渡表氣遣不入候条、其儘有御在城、普請之事、別而頼存候、来三日二両川、木山・神村へ陣替之由候、宮山之事ハ普請諸支度堅固候条、無機遣候、篠葺新普請二候条、弓削之百姓申悉被呼寄、別而普請頼存候	直家が篠葺城を守備する沼元新右衛門尉に各地の戦況を伝え、指示を与えたもの。以前、原田氏が着城したら帰宅していい、という話をしたが、虎倉城ほかに異常はなく、福渡地域に気遣いはいらぬ状況なので、そのまま篠葺に在城して普請に努めるよう依頼している。篠葺は「新普請」なので弓削の百姓中を全て呼び出して念入りに普請するように伝えている。一方、「両川」＝吉川元春・小早川隆景の軍勢が木山・神村に陣替えするとの噂だが、これに対峙する宮山城は普請も諸支度も万全なので心配ないと伝えている。	虎倉 (25虎倉城跡) 宮山 (美作56) 宮山城跡 篠葺 (美作88) 篠向城跡	(宇喜多) 直家	(天正七年) 十二月晦日丑の刻	1579年	32・42
181	吉川元春書状写／『関閩録』巻百十五之三 湯原文左衛門	此表四畝一着儀者先日申候、定而可為參着候、伊賀要害山下迄悉討果、付城数ヶ所取付、明隙候之条、不日至寺畑・宮山取懸、即時可仕崩候、吉左右鱧而可申入候	吉川元春が祝山城番湯原春綱(湯右)に戦況を報じたもの。四ツ畝城を攻略した後、毛利軍は伊賀久隆の持ち城の麓を全て討ち果した。この伊賀氏の城を包囲する付城を数ヶ所築いて手隙になったので、ほどなく寺畑城・宮山城に攻めかかり、即時に攻め落としたい、と伝えている。	四畝 (備中93) 四ツ畝城跡 伊賀要害 (19福山城跡) 付城 寺畑 (美作78) 大寺畑城跡 宮山 (美作56) 宮山城跡	(吉川) 元春	(天正八年) 正月六日	1580年	12・112・41
182	吉川元春書状写／『関閩録』巻百 児玉惣兵衛	此表之儀四畝之事者頓落去候て、至備前内賀茂御陳易候而、伊賀城畑作州苜田悉討果放火候、一二ヶ所要害被申付、近日至高田陣易候而、寺畑と申敵城、可被及御行之由候、吉さ右追々可申述候	元春が淡路国岩屋城に駐留中の児玉就英(内蔵大夫)に戦況を報じたもの。毛利軍は四ツ畝城を攻略した後、備前国賀茂に陣替えて伊賀氏の城の周囲や美作国鹿田(苜田)をことごとく討ち果たして放火し、一二ヶ所の要害を築城した。近日中には高田城へ転陣し、寺畑という敵城の攻略に取り掛かる予定である旨を伝えている。	四畝 (備中93) 四ツ畝城跡 伊賀城 (19福山城跡) 一二ヶ所要害 高田 (美作33) 高田城跡 寺畑と申敵城 (美作78) 大寺畑城跡	(吉川) 駿河元春	(天正八年) 正月十七日	1580年	12・112・41
183	吉川元春ほか三名連署書状写／『関閩録』巻百十五之二 湯原文左衛門	爰許陣易之儀、片時茂可指急之由、被申越候、於各無油断候、此口之儀先書二如申遣候、伊賀左衛門尉城山下迄、無残令放火、為初鹿田悉討果、要害二ヶ所申付、番衆指籠隙明候条、明日二至月田令陣易、則寺畑取懸候、落去不可有程候間、可心安候、一 兵糧之儀、追々可指上候条、是又可心安候、於榎鉢者、至寺畑切々可被申越候	毛利氏に救援要請してきた祝山城番湯原春綱(右京進)に対し、元春らが戦争の進捗状況を報じたもの。毛利軍は伊賀久隆(左衛門尉)の城の麓を焼き払い、鹿田をはじめ伊賀氏に關係する在所をことごとく討ち平らげたと、要害を二ヶ所構築し番衆を籠めて守らせた。隆景らは明日には月田まで転陣し、すぐに寺畑城に攻め寄せる予定だが、落城まで時間はかからないと思うので安心するよう伝えている。また、春綱の元に兵糧を追々輸送するのでこれも安心してほしい、そちらの様子を寺畑の陣まで報せるように、と伝えている。	伊賀左衛門尉城山 (19福山城跡) 要害二ヶ所 月田 (美作54) 月田城跡 寺畑 (美作78) 大寺畑城跡	(吉川) 元春・(福原) 貞俊・(口羽) 通良・(小早川) 隆景	(天正八年) 二月一日	1580年	12・112・41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
184	小早川隆景書状写／『譜録』渡辺三郎左衛門直	然者境目諸番衆等可重候之条、房御事乍御辛勞早々常山御上候而御在番可為肝要候、殊普請等嶋中之衆へ相催候間、彼是以頼存候	隆景が備後国衆の渡辺房（出雲守）・渡辺源八郎に与えた書状。備前・備中境目地域に番衆を配置することになったので、早々に常山城に入って在番を勤めるよう、渡辺房に指示している。城普請についても児島にいる味方の人々（嶋中之衆）に動員をかけるので、あれこれ頼りにしている、と述べている。	常山（240常山城跡）	（小早川）左衛門隆景	（天正八年カ）二月十八日 ※出典の光成氏見解による	1580年	128・134
185	宇喜多直家感状写／『黄薇古簡集』巻第十三・和氣郡下 日笠村猪八郎所蔵文書	昨日十二日、至永野城山下、敵取懸候処、及防戦於鍾下分捕、誠無比類	三月十二日に、永野城（長野城の当て字）の山下に敵が攻め寄せてきた。この時宇喜多軍に属して城の防戦し、槍働きに努めた橋本四郎太郎の功勞を、宇喜多直家が褒めたもの。	永野城（47長野城跡）	（宇喜多）直家	（天正八年カ）三月十三日 ※出典の畑論文見解による	1580年	14・118
186	宇喜多直家判物／蜂谷家文書	去拾三日、至辛川敵相動之条、懸合及合戦刻、抽粉骨、剩令分捕之段、忠節無比類	三月十三日、備前国辛川表に毛利軍が進出してきた時、宇喜多軍に属して奮戦し、分捕りの手柄を立てた蜂谷神左衛門尉の戦功を、宇喜多直家が賞したものの。	辛川（48辛川城跡）	（宇喜多）直家	（天正八年）三月十五日	1580年	2・41
187	宇喜多直家判物／備前難波文書	去〔 〕〔 〕及合戦刻、抽粉骨、剩令分捕之段、忠節無比類	大きく破損しているが、史料186とほぼ同文で難波氏の辛川合戦における戦功を賞した宇喜多直家の感状である。 ※出典の『久世町史』を参照	（48辛川城跡）	（宇喜多）直家カ	（天正八年）□月□□日（三月十五日カ）	1580年	11・41
188	宇喜多直家判物写／備前一宮社家大守家文書	去拾三日至辛川、敵相動之条、懸合單合戦刻、抽粉骨、剩令分捕之段、忠節無比類	天正八年三月十三日の辛川合戦で、宇喜多氏に属して合戦に臨んだ吉備津彦神社の社家大森助七郎の奮戦を、宇喜多直家が称えたもの。	辛川（48辛川城跡）	（宇喜多）直家	天正三月十五日 ※「天三」は写本作成時の追記。本来は天正八年のもの。	(1580年)	10
189	小早川隆景書状写／山口県文書館蔵豊田町松村家文書	今度小田助五郎事、於備前辛河表被立御用候、誠不便之至候、跡目無相違被仰付候様、可申上候	隆景が毛利氏重臣の児玉元良（三郎右衛門尉）に送った書状。備前国辛川の合戦で毛利氏の御用に役立って戦死した小田助五郎について、その跡目が相違なく関係者に引き継がれるよう毛利輝元に進言してほしいと伝えている。	辛河（48辛川城跡）	（小早川）左衛門佐隆景	（天正八年）三月二十四日	1580年	142
190	桂景信書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書『閩閩録』巻百四之二 湯浅権兵衛に写しあり	先月十三日日幡・鴨・松島被相催、俄辛川口被相動、不調儀付而彼失行候、然者当城衆旁御家来衆与今保表被及行、無比類御動御息、殊更湯浅殿御家来之旁御忠儀之由、留守之者共申候	小早川隆景の重臣桂景信が、湯浅将宗・長井就安・栗原某に送った書状。三月十三日に、日幡・鴨・松島城の守備隊が辛川口に進軍したものの、作戦の不備で宇喜多軍に敗退した。その際、景信配下の庭瀬城衆（当城衆）と湯浅氏らの家来衆とが協力して今保に攻め込み、比類ない働きをしたとの報告を、留守番の者から景信が聞いた、とある。	日幡（〈備中431〉日畑城跡）	桂右衛門大夫景信	（天正八年）閏三月九日	1580年	61・112・142
			鴨（〈備中427〉加茂城跡）					
			松島（〈備中436〉松島城跡・番号なし 射越山城跡）					
			今保（279今保城跡・280松田屋敷跡カ）					
当城（〈備中402〉庭瀬城跡）								
191	桂景信書状／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書『閩閩録』巻百四之二 湯浅権兵衛に写しあり	其表長々御在番、御辛勞無申計候、何ヶ度申候て茂、去比之辛川口行付而、此口之儀今保為御手合、旁被仰談被差寄候処二、将宗御家来衆別而被遂御粉骨之段、則從留守之者、所至沼田申下候、（中略）上勢少々罷下候由、風聞之趣候、（中略）何茂諸城御普請被仰付、無御緩段專一候	小早川隆景の重臣桂景信が、長期間備中岩山城に在番している湯浅将宗を褒めたもの。先日の辛川口での合戦の際、庭瀬城の将兵は岩山城の将兵と相談して今保城に攻め寄せたが、将宗とその家来が特に尽力した。景信は留守だったが、その様子を庭瀬城の留守居から隆景に報告したことを伝え、織田軍がいくらか出陣したとの噂があるので、諸城の普請を緩みなく行うよう命じている。	辛川（48辛川城跡）	桂右衛門大夫景信	（天正八年）閏三月十一日	1580年	12・112・142
				今保（279今保城）				
192	毛利輝元書状写／『閩閩録』巻三十二 赤川勘解由	今度福山在番之儀、可令馳走之由祝着之至候、然者以備作一着之上、四百貫之地可遣候	福山城に在番の任務を承諾した赤川元秀（十郎左衛門尉）に対し、毛利輝元が備作平定の後に400貫の給地を与える旨、約束したものの。	福山（19福山城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）四月十二日	1580年	110
193	毛利輝元書状写／『閩閩録』巻六十一 宇多田十兵衛	宇多田藤右衛門尉事、一昨日於賀茂口立用候、不便之儀候、子共有之由候間、無忘却可相届之通、為其方能々可申候	一昨日、宇多田藤右衛門尉が備前国賀茂で毛利氏の役に立って戦死した。そのことを知った輝元が、児玉元良（三郎右衛門尉）に対し、藤右衛門尉の遺児に父のことを忘れず奉公するように申し聞かせよと命じている。	（25虎倉城跡）	（毛利）輝元	（天正八年）四月十二日（十六日カ）	1580年	41・111

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号	
194	房顕覚書	四月十三日粟屋余十郎、児玉小次郎、神田宗四郎、此若輩衆我手勢七八百、三沢衆何哉かや千五百ニテ竹庄ト言在所へ言(被力)勲、粟屋余十郎討死シ、名ヲ高〔後〕代上ル、児玉小次郎三ヶ所ニ手ヲハル、(中略)其外四五人打死ナリ	「賀茂崩れ」の関連史料。天正八年(1580)四月十三日、粟屋元信(余十郎)・児玉元兼(小次郎)・神田宗四郎(三浦元忠)ら若輩衆の率いる7、800の兵と、三沢為虎の兵などを合わせた1500人ほどの毛利軍が、竹庄という場所へ出陣した。粟屋元信は討死して名を後代に残し、児玉元兼は3か所ほど手傷を負った。その他4、50人が討死した、という。	(25虎倉城跡)	棚守房顕				126
				(19福山城跡)					
				(24清常城跡)					
				(17藤沢城跡)					
195	伊賀久隆感状／西江氏所蔵阿賀郡中津井村室家資料	去十四日至下賀茂表、芸州衆執出之刻、則被及防戦、抽粉骨首一討捕高名無比類候	虎倉合戦(加茂くずれ)に関連して、虎倉城主伊賀久隆が室与五郎に与えた感状。四月十四日、虎倉城攻撃のため下賀茂まで毛利軍(芸州衆)が進出した際、室与五郎はすぐに防戦に努め、奮戦して敵の首一つを討ち取る手柄を立てた。こうした与五郎の高名を、久隆が称えたもの。	(25虎倉城跡)	(伊賀)久隆	天正八年四月十五日	1580年	135	
196	伊賀久隆感状／西江氏所蔵阿賀郡中津井村室家資料	去十四日至下賀茂表、芸州衆相勤候処二、則及防戦、組打之仕、首ヲ執、得疵、被抽粉骨之忠儀不浅候	虎倉合戦(加茂くずれ)に関連して、虎倉城主伊賀久隆が室六右衛門に与えた感状。四月十四日、毛利軍(芸州衆)が下賀茂まで進出した際、室六右衛門はすぐに防戦に努め、敵を組み討ちにして首を挙げ、自らも負傷した。こうした六右衛門の働きを知った久隆が、その奮戦を褒めたもの。	(25虎倉城跡)	(伊賀)久隆	天正八年四月十五日	1580年	135	
197	吉川元春書状写／『閨閨録』巻百十五之一湯原文左衛門	輝元賀茂表出張二付而、我等事茂十日十五日之逗留にて、可罷出之由候条、明日令陣易候、驥而隙明此表可令帰宿候間、重畳可申談候、直家事茂為賀茂・小倉之加勢、福渡表陣易之由其間候、其内之儀、当城弥堅固之御心遣肝要候	元春が祝山城番湯原春綱(右京進)に戦況を報じたもの。毛利輝元の備前国賀茂出陣に合わせ、元春も明日陣替えすること、宇喜多直家も賀茂・虎倉城に加勢するため、福渡表まで転陣したらしいことを伝え、祝山城を堅固に維持するよう春綱に命じている。	小倉 (25虎倉城跡) 当城 ((美作179) 医王山城跡)	(吉川)駿河守元春	(天正八年)四月十五日	1580年	12・112	
198	毛利輝元書状／山口県文書館蔵奈古屋家文書(『閨閨録』巻六十三奈古屋九郎右衛門に写しあり)	与七郎事、至賀茂面為動昨日罷出、立用候、誠不便不及是非候、朦朧之段不及申聞候	輝元が奈古屋元賀(左近助)に与えた書状。昨日、元賀の子与七郎が備前国賀茂へ出陣し戦死したことを悼み、元賀の憔悴にかけける言葉もない、と伝えている。	(25虎倉城跡)	(毛利)輝元	「天正八」四月十五日 ※年号は異筆	1580年	111・142	
199	毛利輝元書状写／山口県文書館蔵奈古屋家文書	まつ／／与七郎事、昨日はたらしきに出候て、ようにたち候、まことに／／ふひんの時候	上記に関連。昨日の合戦(虎倉合戦)に出陣して手柄を立て戦死した奈古屋与七郎を悼んだ輝元が、その類縁者と思われる中尾局(なかをつほね)に送った見舞い状。	(25虎倉城跡)	てる元(毛利輝元)	(天正八年)四月十五日	1580年	142	
200	毛利輝元書状写／『閨閨録』巻十九 児玉四郎兵衛	昨日若衆鴨口江働二罷越候処、及一戦与七郎事用立候、不及是非候、其方曝氣之段令察候	輝元が児玉就光(児豊)・児玉元村(児四兵)に与えた書状。昨日、輝元近習の若衆たちが「鴨口」＝備前国加茂方面へ攻め込んだところ、敵方と戦鬨になり、児玉与七郎元房が毛利家への役割を立派に果たして討死してしまった。何ともしようのないことで、元房の親族である就光・元村らの落胆を察するに余りある、と述べている。	(25虎倉城跡)	(毛利)輝元	天正八 四月十五日	1580年	110	
201	毛利輝元書状写／『閨閨録』巻七十三 粟屋孫次郎	今度惣四郎儀、一手之為大将差越、手負乗馬難、草難儀之処、御方勇力弓力を以通其場段、寔弓力古今例有間敷候、殊其方乗馬二乗せ退候段、旁無比類働、軍忠感悦無此上候	輝元が粟屋孫二郎に与えた感状。虎倉城を攻撃するため、神田元忠(惣四郎)が一軍の大將となって備前国賀茂へ出陣したが、負傷して乗馬にはぐれ、困難な状況に陥った。これのみつけた粟屋孫二郎は、勇気と優れた弓射の能力によって神田元忠の危機を救い、元忠を自分の乗馬に乗せて無事退却させた。こうした孫二郎の活躍に対し、輝元が最大限の賛辞を贈ったもの。	(25虎倉城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)四月十五日	1580年	111	
202	毛利輝元書状写／『閨閨録』巻七十三 粟屋孫次郎	昨日惣四郎手負候処二、其方相働、殊乗馬貸候故、無異儀之由誠有ましき事候、对我等別而祝着候、／／	同上。備前国賀茂の戦いで負傷して乗馬を失った大将神田元忠を助け、乗馬を貸して異儀なく退却させた粟屋孫二郎の働きを、褒め称えたもの。	(25虎倉城跡)	(毛利)輝元	(天正八年)四月十五日	1580年	111	

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
203	児玉元良書状写／『閨閥録』卷六十一 宇多田十兵衛	今度於賀茂口、藤右衛門方被立御用候、不及是非候、对我等如此御書、別而被加御詞、御懇被仰出候	毛利氏重臣の児玉元良が、宇多田右衛門丸に送った書状。備前国賀茂の戦いで父藤右衛門を失った右衛門丸に対し、毛利輝元より格別の声かけがあったことを伝達している。	(25虎倉城跡)	(毛利) 輝元	(天正八年) 四月十六日	1580年	111
204	神田元忠書状写／『閨閥録』卷六十一 宇多田十兵衛	宇多田藤右衛門尉方事、今度我等同道申罷越被立御用候、不及是非之候、上様江遂披露候	毛利輝元の重臣神田元忠が、宇多田右衛門丸に送った書状。右衛門丸の父藤右衛門尉が元忠と同道して出陣した先で戦死を遂げたことについて、毛利輝元に報告したと伝えている。	(25虎倉城跡)	神田惣四郎元忠	(天正八年) 四月十八日	1580年	111
205	毛利輝元書状写／『閨閥録』卷百六十二 齋藤八郎右衛門	父左衛門尉事、今度於賀茂表動之時立御用候、不便之次第候、(中略) 然者跡目之儀、对其方不可有相違候	輝元が齋藤才寿丸に与えた書状。才寿丸の父左衛門尉が賀茂での戦い(虎倉城攻め。いわゆる加茂崩れ)で戦死したことを惜しみ、才寿丸に左衛門尉の跡目を相違なく安堵することを伝えている。	(25虎倉城跡)	(毛利) 輝元	(天正八年) 四月十八日	1580年	113
206	毛利氏奉行入連 署奉書写／『閨閥録』卷百六十二 齋藤八郎右衛門	父左衛門尉事、去十四日於加茂表動之時被立御用候、不被思召之由被仰出之、被成御書候、就其跡目之事、对其方被仰付候間、給地等全知行不可有相違候	毛利輝元の奉行人が、四月十四日の「加茂崩れ」で戦死した齋藤左衛門尉の子才寿丸に対し、父の跡目と給地の相続を許す旨の主命を伝達したものの。	(25虎倉城跡)	国司右京亮元武・粟屋右京亮元勝・児玉三郎右衛門元良・粟屋掃部助元真	天正八辰四月十八日	1580年	113
207	宇喜多直家感状写／『備前記』二 御野郡高柳村六太夫所持文書(『黄薇古簡集』卷第七・御野郡高柳村仁大夫所蔵文書にもあり)	去廿二日於今保表、抽粉骨、分捕高名忠節無比類、必恩賞可相計者也	四月二十二日の今保での合戦において奮戦し、分捕りの手柄を挙げた浅沼又兵衛に対し、直家が恩賞給与を約束したものの。	今保 (279今保城)	(宇喜多) 直家	(天正八年) 四月二十五日	1580～81年	14・123
208	毛利輝元書状写／『閨閥録』卷百七 赤川次郎左衛門	当山在番之儀可令所勤之由喜悦之至候、然者以備作一着之上、四百貫之地可遣之候	輝元が家臣赤川元之(次郎左衛門尉)に与えた書状。元之が勝山城への在番勤務を受諾したことを喜び、備作平定後に400貫の給地を恩賞として与える旨、約束している。	当山 (15勝山城跡)	(毛利) 輝元	(天正八年) 五月一日	1580年	112
209	毛利輝元書状写／『閨閥録』卷九十五 柳沢九左衛門	今度当城在番二付而、別而於下百石可遣候、先五拾石之地遣之候	輝元が岡元良(岡惣左)に与えた書状。当城(勝山城カ)に在番することになった元良への褒賞として、「下」(周防・長門方面)で100石の給地を与えること、まずその内50石を給与する旨伝えたもの。	当城 (15勝山城跡カ)	(毛利) 輝元	(天正八年カ) 五月三日	1580年	112
210	毛利輝元書状写／『閨閥録』卷九十五 柳沢九左衛門	原田給四拾石之事、就当城在番仕遣之候、相残拾石之儀引合纏而可申付候	上記に関連して輝元が岡元良(宗左衛門尉)に与えた書状。当城(勝山城カ)に在番への褒賞として、原田氏旧領のうち40石を与えること、残る10石分も都合してまとめて与えることを伝えたもの。	当城 (15勝山城跡カ)	(毛利) 輝元	(天正八年カ) 五月五日	1580年	112
211	毛利輝元書状／岡山県立博物館所蔵文書	藤佐井在番申付之候、然者、以備作一着之上、五拾貫之地可遣之候	毛利輝元が和智元次(主水允)に藤沢城(藤佐井)に在番を命じ、その見返りとして将来の備作平定後に50貫の給地を与える旨、約束したものの。	藤佐井 (17藤沢城跡)	(毛利) 輝元	(天正八年) 五月二十五日	1580年	41
212	小早川隆景書状写／『譜録』井上孫兵衛勝政	井又右事、小申普請為見合明日差渡候条、乍辛勞同前二可被罷越候、(中略) 蔵敷へ被出相候て可被申談候	隆景が家臣の井上就正(孫兵衛尉)に与えた書状。井上春忠(井又右)が小串城の普請工事を見分するため、明日渡海するので、就正も春忠と一緒に小串へ向かってほしい、と伝えている。小串への渡海にあたっては、まず蔵敷(倉敷)で春忠と落ち合って相談するよう述べている。	小串 (224小串城跡) 蔵敷 (備中) 422小野城跡カ)	(小早川) 隆景	(天正八年カ) 七月一日	1580年カ	134

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
213	小早川隆景書状写／山口県文書館今川家文書『防長風土注進案』七十四三田尻宰判 真尾村農仙右衛門所持文書にも写しあり)	備前浦邊一行、来廿六日乗船、則一城可取付候、普請以下五六日之可為御逗留候間、小船被相集、舟数御人数別而御馳走此時候、潮さかり此御候間、陸地之行二相違候条、右之日限不可有御延引候、(中略)大船にてても小串迄者可有御上候	隆景が阿曾沼元秀の配下甲田秀安(美作守)に対し、備前国沿岸の作戦について指示した書状。七月二十六日に乗船して備前国へ向かい、すぐに城の構築に取りかかるよう命じ、普請工事を監督するため五六日は逗留してほしい、と述べている。出張に当たっては、小船を集め船数・軍勢とも特に整えること、小船の数がなければ大船でもいので小串まで出張してほしいことを伝え、この潮時を逃すと陸上の作戦にも影響するので、日限どおり延引なく行動するよう求めている。	一城・小串 (224小串城跡)	(小早川) 左衛門隆景	(天正八年) 七月十八日	1580年	131・142
214	毛利輝元書状写／『閩閩録』卷九十五 柳沢九左衛門	今度至虎倉表、竹井下人内通之儀共候哉、相糺各申談之、討果頸注文到来候、尤可然候、(中略) 弥彼通路可差切事、不可有緩候	毛利軍が虎倉城攻略に向かった際、竹井惣左衛門尉の下人に敵方内通の嫌疑がかかった。勝山城番の桂元盛(源右衛門尉)・岡元良(宗左衛門尉)・赤川元種(又七郎)はこれを糾弾し、相談の上で処断して、輝元のもとへ頸注文を提出した。この件につき、輝元が三人の判断を了とし、虎倉城への通路遮断に努めるよう命じたもの。	虎倉 (25虎倉城跡)	(毛利) 輝元	(天正八年) 七月二十四日	1580年	12・41・112
215	小早川隆景書状写／『閩閩録』卷八十 岡吉左衛門	昨日十三至下賀茂擲衆被差出候処、敵擺出懸合、一人被擲取被討果、頸到来一覽祝着候	隆景が岡元良(宗左衛門尉)に与えた書状。元良が昨日備前国下賀茂まで手勢を出勤させたところ、虎倉城から伊賀軍が出撃してきた。元良はこれと渡り合せて敵将一人を擲め捕って討ち果たし、その首を隆景のもとへ届けた。こうした元良の働きを、隆景が称えたもの。	(25虎倉城跡)	(小早川) 左衛門隆景	(天正八年) 八月十四日	1580年	111
216	毛利輝元書状写／『閩閩録』卷九十五 柳沢九左衛門	其方事打つゝき遂苦勞候事無忘却候、弥御太儀、当城在番之事可為祝着候	輝元が岡元良(惣左衛門尉)の働きを慰労し、大変だと思うのが当城(勝山城)の在番を続けてくれると幸い、と伝えている。	当城 (15勝山城跡) ※『萩藩閩閩録』第三巻の比定による	(毛利) 輝元	(天正八年) 九月十七日	1580年	112
217	毛利輝元書状写／『閩閩録遺漏』式之一 赤川二郎左衛門	伊賀事頓死必定候哉、就夫彼家来、無正儀候由尤候、趣聞合追々可申越之候	虎倉城主伊賀久隆が変死し、その家来たちが混乱しているとの報せを勝山城番の桂元盛(源右衛門)・岡元良(惣左衛門)・赤川元種(又七郎)から受け取った輝元が、様子を聞き合わせて追加報告するよう命じた書状。	(25虎倉城跡) (15勝山城跡)	(毛利) 輝元	(天正九年) 卯月十七日	1581年	41・114
218	小早川隆景書状写／『黄薇古簡集』卷第十五 備中	兒島衆之事、當時至岩屋・洲本為警固表(罷カ)上之条、島中諸城人数相加候間、御方之儀、至常山来六日登城肝要候	小早川隆景が明石兵部大輔に与えた書状。このころ兒島の毛利方諸將は、淡路国岩屋・洲本に水軍を率いて出陣していた。留守になった兒島島中の諸城に代わりの守備兵を入れることになったため、隆景は明石兵部大輔に対し、来る六日に常山城へ登城するよう命じている。	常山 (240常山城跡)	(小早川) 隆景	(天正九年) 卯月晦日	1581年	14・61
219	福原貞俊・口羽春良・福原元俊・穂田元清・小早川隆景連署起請文写／『閩閩録』卷廿九 井原孫左衛門	一御身上永々無心疎可申談事、一以打渡進置当知新知、聊以向後不可有相違事、一一家重而懇望之時、雖令赦免、家久御事差放申聞敷事	毛利氏首脳が、宇喜多氏を離れて毛利方に味方することを決めた虎倉城主伊賀家久に捧げた起請文。家久の身の上について保証し、本領を安堵し新知行の給与することを約束した上、宇喜多直家が降伏を願い出れば毛利氏は許すつもりだが、そういう事態になっても家久を見捨てたりしないと誓っている。	(25虎倉城跡)	福原出羽守貞俊・口羽中務大輔春良・福原式部少輔元俊・穂田治部大輔元清・小早川隆景	天正九年八月十九日	1581年	41・110
220	檜崎元兼書状写／吉川家中并寺社文書四	至竹庄表隆景御着陣候、就其伊賀方御味方被申、無残所被任御存分候、岡山無正儀之由候、公私御大慶此事二候	毛利方の檜崎元兼が塩屋左助に近況を報じたもの。竹庄に小早川隆景が着陣すると、虎倉城主伊賀氏が味方に参じ、この地域は残すところなく毛利氏の支配下に入った。こうした状況に、岡山城=宇喜多氏は混乱して正体を失っていると噂されており、毛利氏にとって大慶とはこのこと、と述べている。	岡山 (180岡山城跡) (25虎倉城跡)	備州ノ檜崎正元兼(檜崎弾正忠元兼)	(天正九年) 八月二十二日	1581年	41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
221	小早川隆景書状写／『閩閩録』卷五十飯田与一左衛門	就勝山普請之儀、先度申候之処被成御分別、可預御合力之由從猿懸申越候、誠境目之儀候間、從是社可遂馳走之儀候處、結句如此御造作之至申入候事、雖斟酌千万候、御方角之条得御扶助儀候	隆景が伊賀家久（与三郎）に与えた書状。毛利氏から勝山城普請への協力を打診された家久は、その趣旨を納得して城普請に合力することになった。この家久の返事を猿掛城の穂田元清から聞いた隆景が、勝山は境目の城なので本来毛利氏自身で手入れすべきところ、このような申し入れをするのはどうかという面もあるが、伊賀氏のいる方角に位置しているので支援をお願いすることになった、と家久に事情を説明している。	勝山（15勝山城跡） 猿懸（備中）227猿掛城跡	小早川隆景	（天正九～十年ごろ）八月二十三日	1581～82年	111
222	織田信長黒印状写／蜂須賀家文書	□□□〔小早川〕備中面へ罷出、備前堺伊賀令同心相動之旨候、字喜多由断故如此思食候	織田信長が蜂須賀正勝（彦右衛門尉）からの戦況報告に回答したもの。小早川隆景が備中国へ出陣し、備前国境の伊賀氏がこれに同心したとのことだが、このような事態になったのは宇喜多直家の油断のせいだ、と断じている。	(25虎倉城跡)	(織田信長) 御黒印	(天正九年) 八月二十九日	1581年	65・41
223	毛利輝元書状／岡家文書	賀茂之儀令一着、先以肝要候、追々彼境可任存分候、(中略) 賀茂不令一着間之儀、其方事別而昼夜無緩短束仕候由、喜悅候	輝元が岡元良（惣左衛門尉）に与えた書状。虎倉城主伊賀氏（賀茂）の毛利氏への帰属が決着したことを喜び、追々備前国の境目近辺における戦争に勝利できるだろうと述べ、賀茂（伊賀氏）の帰趨が定まらない間、元良が昼夜ゆるみなく尽力してきたことを褒めている。	賀茂（25虎倉城跡）	(毛利) 輝元	(天正九年) 八月三十日	1581年	142
224	毛利輝元書状写／『閩閩録』卷百六 楊井神平	今度天木在番暫時申付之処、替依延引数日逗留、辛勞之至候	毛利輝元が暫時の約束で楊井武盛（弥七）に天城の城の在番を命じた。ところが、代替を用意するのが延び延びになり、武盛が数日逗留することになったため、輝元がその労を謝したものの。	天木（227桜山城跡カ）	(毛利) 輝元	年未詳十二月十八日		112・12
225	毛利輝元起請文写／『閩閩録』卷廿九 井原孫左衛門	去年其境隆景指出候之処、頓被成御一味本望候、然間、各以書立進置之御本地当地之儀、聊不可有相違候、自然於此上岡山之儀雖現形候、御方之事、見放申間敷候	去年、小早川隆景が出向いた際、宇喜多氏を離れて毛利方に一味した伊賀家久（与三郎）に対し、輝元が捧げた起請文。伊賀氏の本領を安堵するだけでなく、今後岡山城の宇喜多氏が毛利氏と和睦するようなことがあっても、伊賀氏のことを見捨てないと誓約している。	岡山（180岡山城跡）	毛利輝元	天正十年正月二十一日	1582年	12・41・110
226	小早川隆景書状写／『閩閩録』卷十一之一 浦図書	唯今從猿懸此数通到来候、然刻弥常山へ之人數肝心迄と存候、不及申候へ共、誠被打振候て、御指上せ肝要迄候（中略）一大崎衆はたゞと候間、是非共常山へ可罷籠由、早船被差遣、可被仰候、一不及申候へ共、是非共吉充・亮康短束候様二能可被仰候	小早川隆景が乃美宗勝（乃兵）に与えた書状。猿懸城の穂田元清からの書簡を受けた隆景が、常山城の在番増員が肝要であるとし、乃美宗勝から村上吉充・亮康に対し常山へ向かうことを指示するよう依頼している。また、児島郡大崎の人たちを常山に収容するよう、早舟でもって連絡せよと伝えている。	猿懸（備中）227猿掛城跡 常山（240常山城跡）	(小早川) 隆景	(天正十年) 正月晦日	1582年	12・110
227	羽柴秀吉書状／黒田家文書	備前児島内高島色立、人質宇喜多方へ相渡由、尤候、弥立間可有注進候	羽柴秀吉が備前国情勢に関する黒田孝高（官兵衛尉）からの注進に返書したもの。備前国児島の小串城主高島氏が毛利氏から離反して宇喜多直家に味方し、宇喜多家に人質を渡したことを聞き、喜んでいる。	(224小串城跡)	(羽柴) 筑前守秀吉	(天正十年) 二月六日	1582年	48・137
228	小早川隆景書状写／『閩閩録』卷百二之二 冷泉五郎	爰元之儀来十三日藤戸渡口打出候而則及行候、於于今者高島一分二罷成候間、先一動申付候、岡山罷出候者一安否可申付候	隆景が冷泉元満（民部少輔）に戦況を報じた書状。隆景は来る二月十三日に備前国藤戸の渡し口まで移動し、すぐに宇喜多氏に戦いを挑むつもりであると述べ、今は小串城の高島氏が毛利氏に敵対するに至ったので、まず同氏に攻撃をしかける予定であると述べている。もし岡山城から宇喜多軍が出陣してきたならば、そこで勝敗を決するつもりであると伝えている。	(224小串城跡) 岡山（180岡山城跡）	(小早川) 左衛門佐隆景	(天正十年) 二月八日	1582年	112・137

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
229	穂田元清書状 ／萩市郷土博物館蔵湯浅家文書(『関関録』巻百四之二 湯浅権兵衛にも写しあり)	天城普請相調候条、各同道候而、昨日至児島令陳〔陣〕替候、島中無相替儀候、不日常山普請可申付存候、郡・波智浜無珍取沙汰候哉	元清が湯浅将宗(治部大輔)に児島方面の戦況を報じたもの。天城の城の普請工事が完了したので、元清は他の武将と同道して児島に転陣したこと、島の中に異変はみられないこと、近々常山城の普請を命じる心づもりであることを報じ、宇喜多方の郡や八浜に変わった噂が出てないか気にしていることを伝えている。	天城 (227桜山城跡カ) 常山 (240常山城跡)	(穂田) 治部太輔元清	(天正十年) 二月十五日	1582年	12・61・112・142
230	穂田元清書状 ／岡家文書(『関関録』巻八十 岡吉左衛門に写しあり)	誠小串不慮付而、渡口天城之城取付、則児島取渡候處、麦飯山敵取付之由、櫓從敵方内通候条、去十八日取上候處、忠家自身罷出、雖切懸候、於両口及戰、敵追散、頸五ツ討捕之、則時大崎村令放火、取居候而当城普請申付候處、去廿一日岡山衆罷渡、当陣籠差寄候条、諸陣より打下、及合戦、於樋下為始宇喜多与太郎宗徒之者数十人討捕、敵追崩得太利、大慶此事候	いわゆる「八浜合戦」について、穂田元清が岡元良(宗左衛門)に報じたもの。小串城が宇喜多方に寝返ったことを知った元清は、児島への渡口にあたる天城の城を築き、これを足掛かりに児島へ渡ったところ、「麦飯山に宇喜多方が築城しようとしている」と内通者から通報があった。そこで二月十八日に元清が機先を制して麦飯山に上ったところ、宇喜多忠家が自ら出馬して攻めかかってきた。元清は両口で防戦して宇喜多軍を退散させ、首級五つを討ち取った。その後すぐに大崎村に放火し、麦飯山に居座って城普請を命じたところ、二十一日に岡山城から宇喜多軍が渡海してきて、麦飯山の麓に攻め寄せた。元清らは山上の陣から攻め下って合戦を挑み、宇喜多元家(与太郎)をはじめ主立った者数十人を討ち取り、宇喜多軍を追い崩して大勝した。大変喜ばしいことだ、と伝えている。	小串 (224小串城跡) 天城之城 (227桜山城跡カ) 麦飯山・当城・当陣 (241麦飯山城跡) 岡山 (180岡山城跡)	治太元清(穂田治部太輔元清)	(天正十年) 二月二十四日	1582年	12・111・137・142
231	小早川隆景書状 ／冷泉家文書(『関関録』巻百二之一 冷泉五郎に写しあり)	今度者至当陣籠敵出候處、則時御打下之故、太利之合戦誠大慶此事候、至輝元遂注進候条、追而可被申入候	上記史料と同じ合戦に関して、隆景が冷泉元満(民部少輔)に与えた感状。宇喜多軍が「当陣籠」(麦飯山城の麓)へ攻め寄せた際、毛利方の冷泉元満が即刻山から攻め下ったおかげで、毛利軍は大勝利を収めることができた。隆景はこうした元満の働きを褒め称え、毛利輝元にも報告すると伝えている。	当陣 (241麦飯山城跡)	小早川左衛門佐隆景	(天正十年) 二月二十五日	1582年	112・141
232	毛利輝元書状 ／『関関録』巻六十八 湯川平左衛門	う喜多与太郎討捕候、勝利申も疎候、吉左右追々可申候	輝元が家臣の湯川元常(平左衛門)に対し、宇喜多元家(与太郎)を討ち取り勝利したことを伝え、追々吉報を届けるであろう、と述べた書状。	(242両児山城跡)	(毛利) 輝元	(天正十年) 二月二十七日	1582年	111
233	穂田元清書状 ／『関関録』巻百五十七 石部善右衛門	鉄砲衆一段心地能、今度中敵数崩候、取分去廿一日合戦之時、五郎兵衛・源七郎両人事、馬武者射落候、小次郎・彦三郎事茂人射申候、可被加御褒美事肝要存候	穂田元清が毛利輝元の重臣国司元武(国右)に差し出した書状。二月二十一日の八浜合戦で、五郎兵衛・源七郎は宇喜多方の騎馬武者を撃ち落とし、小次郎・彦三郎も敵兵を射殺する活躍をした。元清は元武に対し、この四人に対して毛利家から褒美を与えるべきであると上申している。	(242両児山城跡)	(穂田) 治部太輔元清	(天正十年) 三月五日	1582年	113
234	毛利輝元書状 ／冷泉家文書(『関関録』巻百二之一 冷泉五郎に写しあり)	今度児嶋防戦之刻、頓被打下被入御精之由候、誠勝利大慶御短束之段無申計候	史料231に関連して、輝元が冷泉元満(民部少輔)に与えた感状。毛利軍が児島で防戦した際、元満は麦飯山から素早く攻め下って奮戦した。このことについて伝え聞いた輝元が、元満の精励のおかげで合戦に勝利できて喜ばしい、と感謝の意を述べている。	(241麦飯山城跡)	(毛利) 右馬頭輝元	(天正十年) 三月八日	1582年	112・141
235	毛利輝元書状 ／『小田郡誌』上巻所載長府毛利家文書	於今度児島勝利之段、誠大慶不遇之候、被碎御手御粉骨之至、申茂疎候、殊宇喜多与太郎事御家来之衆被討捕候、無比類候	毛利輝元が穂田元清に与えた書状。元清が粉骨して児島八浜合戦に勝利したことを喜び、特に宇喜多元家を元清の家来が討取ったことは比類ないことと賞賛している。	(241麦飯山城跡・242両児山城跡)	(毛利) 輝元	(天正十年) 三月八日	1582年	23

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
236	小早川隆景書状写／『関閩録』巻五十 飯田与一左衛門	上勢至岡山罷下之由候て、此表同前之到来候、実説為可承、居諸勢爰元相扣候	隆景が伊賀家久(伊与三)に送った書状。織田軍が岡山城に向かって移動しているとのことだが、同じような情報がこちらにもたらされており、本当かどうか確認するため、諸勢をこちらに控えさせている、と伝えている。	岡山 (180岡山城跡)	小左衛門隆景(小早川左衛門佐隆景)	(天正十年)三月十五日	1582年	12・111
237	小早川隆景書状／山口県文書館蔵寄組村上家文書(『関閩録』巻廿二之一 村上図書に写しあり)	上警固之儀、一昨晚以来比々・下津井相働候、雖然船数等不甲斐二候之条、不可有珍儀候歟	隆景が村上水軍の将村上武吉に対し、備前国近海の戦況を伝えたもの。織田水軍(上警固)が一昨晚から日比・下津井に攻め寄せているが、軍船の数が多いので大した異変もないだろうと伝えている。	下津井 (267古下津井城跡カ)	(小早川)左衛門佐隆景	(天正十年)三月二十四日	1582年	12・110・142
238	毛利輝元書状写／『関閩録』巻百五十三 悪喜右衛門	中間小次郎事、於今度八浜合戦之時、敵一人射取之由候、神妙之趣可申聞候	八浜合戦のとき、二宮就辰の中間小次郎が宇喜多方の将兵一人を射殺したことが毛利輝元の耳に入った。そこで輝元が、自分が感心していることを小次郎に伝えるよう就辰に命じたもの。	八浜 (242両児山城跡)	(毛利)輝元	(天正十年)三月二十八日	1582年	12・113
239	毛利輝元書状写／『関閩録』巻百五十七 石部善右衛門	〇〇五郎兵衛事、於今度八浜合戦之時、馬武者一人射取之由候、神妙之趣可申聞之候	上記史料に関連して毛利輝元が二宮就辰(太郎右衛門)に与えた書状。八浜合戦のとき、宇喜多方の騎馬武者一人を射殺した五郎兵衛に対し、その働きに輝元が感心していることを伝えるよう就辰に命じている。	八浜 (242両児山城跡)	(毛利)輝元	(天正十年)三月二十八日	1582年	113
240	小早川隆景書状写／『関閩録』巻百三十六 礮兼求馬	羽筑事昨日岡山着候、今日相働之由候之間、諸勢福山にて可見合調儀候	隆景が家臣の礮兼景道(礮左)・手市(手島景繁)に対し、羽柴秀吉(羽筑)が昨日岡山城へ到着し、今日にも軍事行動に移る模様なので、毛利軍は福山に在陣して様子を見ることになったと伝えている。	岡山 (180岡山城跡) 福山 (備中415) 福山城跡)	(小早川)隆景	(天正十年)四月五日	1582年	12・112
241	羽柴秀吉下知状写／『黄菰古簡集』巻第八・上 道郡 築地山村浄楽寺禪定院所蔵文書	築地山并多田屋敷、其外郷内之所、敵取廻之城用可取探候之条、剪採者在之者、忽可加成敗者也	秀吉が築地山常楽寺と多田屋敷、草部郷内の竹木を、毛利方を包囲する陣城(敵取廻之城)の築城用材として採取することを定め、もし織田軍以外で勝手に竹木を伐採するような者があれば、たちまち成敗すると触れたもの。	多田屋敷 (場所未詳。岡山市東区草ヶ部地内か) 敵取廻之城 ※備中国足守・高松周辺の陣城群に関連	筑前守(羽柴秀吉)	天正十年四月	1582年	14・144
242	羽柴秀吉提書写／諸名將古案	一於岡山町うりかい物之事、ありやうのことく、かほりを取かへし、買可申事、一町中におみて在陣のものとも、下々慮外不可有之事、一当国衆と喧嘩口論於在之者、理非に不立入、在陣のもの曲事たるべき事、	岡山城に着陣した秀吉が、在陣中の将兵向けに定め、弟の一小一郎秀長に与えた提。岡山城下町での物品購入の方法を定め、町中での町人への狼藉を禁じ、備前国の住人と喧嘩や口論になった場合は理由の如何にかかわらず在陣衆を罰する旨を申し渡している。	岡山町 (180岡山城跡) ※城下町形成に関連	筑前守(羽柴秀吉)	天正十年四月	1582年	103・139
243	小早川隆景書状／乃美文書	内々如風聞、羽柴去二日罷立昨日四岡山着、今日山見申付由候、定而明日聊働仕候歟、一城取詰候歟、何當行不可指延候、(中略)諸城普請并諸支度之儀者随分申付候、(中略)爰許諸城へ人数相加候故、無人之段可有御推量候、其外作州表伊賀辺之儀も無相易事候間可御心安候	隆景が乃美宗勝(乃兵)に近況を報じた書状。風聞の通り、羽柴秀吉が四月二日に出陣してきて昨日(四月四日)岡山城に到着し、今日は「山見」を行うとの報告が、隆景のもとに入っていた。これを受け隆景は、羽柴軍が明日にも軍事行動を起こすのではないかと、毛利方の城を取り囲むのではないかと予測し、毛利方としても軍事行動を延期することは出来ない情勢になった、と述べている。また、味方の諸城の普請や籠城の支度を念入りに申し付け、守備兵を増加させたので、手元の軍勢が少なくなっているという。一方で美作方面や伊賀氏の勢力範囲では異変もなく、安心してほしいと述べている。	岡山 (180岡山城跡) 諸城 ※毛利方の備中諸城 (備中350) 守福寺裏山) ※秀吉の「山見」に関連	(小早川)隆景	(天正十年)四月五日	1582年	59

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
244	羽柴秀吉書状 ／富田仙助氏 所蔵文書	辛川之城請取、掃地以下申付候 由尤候、たゞ見などの事、蜂須 賀所へ申遣候間、其方ニ無之候 ハ、取寄可申候、随而境目敵方 之様子無正躰之由申越候、定而 可為其分候	羽柴秀吉が家臣の高田秀政（長 左衛門尉）に与えた書状。秀政 は宇喜多氏から備前国辛川城を 受け取り、城内の掃除・整備を 行っていた。豊などの資材は蜂 須賀正勝に準備を命じてあるの で、そちらで足りないようなら 取り寄せるよう命じている。ま た、備前・備中境目の敵方が動 揺しているとの報告に対し、き つとそうにちがいないだろうと 応じている。	辛川之城（48辛川城 跡）	（羽柴）筑前 守秀吉	（天正十年） 卯月七日	1582年	118
245	小早川隆景書 状写／『閩関 録』卷百二之 一 冷泉五郎	鴨城之儀、逆意之者在之付而、 羽柴自身至外構詰寄、終日雖及 防戦候、甲丸以堅固之三合力、 即切崩敵数人討捕之、太利此事 候、就夫悉打入、于今無珍儀候、 （中略）当城之儀、弥御用心等 頼存計候	隆景が冷泉元満（冷民少）に対し、 常山城を用心して守備するよう 伝えると共に、鴨城合戦について 報じたもの。鴨城には離反者 が現れ羽柴秀吉自身が「外構」 まで攻め寄せたので、終日防戦 に努めた。その結果「甲丸」を 堅固に守って織田軍を切り崩し、 敵数人を討った。大勝利とはこ のことであり、と述べている。	鴨城（〈備中427〉加 茂城跡） 当城（240常山城跡）	（小早川）左 衛門佐隆景	（天正十年） 五月四日	1582年	12・ 112
246	羽柴秀吉書状 ／撰津梅林寺 文書	尚々、の殿迄打入候之処、御状 披見申候、今日成次第、ぬま迄 通申候	中川清秀（織田氏家臣）からの 手紙に羽柴秀吉が返答したもの。 秀吉が野殿まで撤収したところ で清秀からの書状を読んだこと、 今日は出来れば沼まで帰る予定 であることを報じている。	ぬま（185龜山城跡）	羽柴秀吉（羽 柴筑前守秀 吉）	（天正十年） 六月五日	1582年	95
247	毛利輝元ほか 二名連署起請 文写／『閩関 録』卷廿九 井原孫左衛門	去年以来、別而御入魂、殊今度 上勢打下、此表及鉾桶候之処、 以無二御覽期、中筋被相押、無 異儀候故、任存分候、於各令満 足候、然間、向後自岡山、御身 上之儀雖被申候、無忘却見放申 間敷候	毛利氏が天正九年以来味方して いる伊賀家久（与三郎）に対し、 秀吉の備中攻め最中も「申筋」 を異常なく守ったことを褒め、 もし今後岡山城の宇喜多氏が伊 賀氏の進退について文句を言っ てきても見捨てないと約束した もの。	岡山（180岡山城跡）	毛利輝元・ 吉川元春・ 小早川隆景	天正十年六月 九日	1582年	41・ 95・ 110
248	長船秀光（貞 親）書状／洗 心齋古文状 （水原岩太郎 氏所蔵備前難 波文書）	金川御屋敷之事承候、与次郎と 申者居申候哉、一円不存候、御 主蔵所へ相尋趣自是可申入候	難波三郎右衛門尉（難三右）か ら金川にある屋敷について問 い合わせを受けた長船秀光（貞親。 宇喜多氏宿老）が、返答したもの。	金川（43金川城跡）	長又左秀光 （長船又左衛 門尉秀光） ※長船貞親 と同一の花 押	（年未詳）七 月三日	年未詳	24・38
249	小早川隆景書 状写／『閩関 録』卷百三十六 磯兼求馬	元太搦警固之儀付而、替相触候 之条、早々付可遣候	小早川隆景が、磯兼景道（磯左）・ 井上春忠（井又）に対し、本太 城に派遣している水軍（警固） の交替について何らかの指示を 与えたもの。	元太（261本太城跡）	（小早川）隆 景	（年未詳）九 月晦日	年未詳	61・ 112
250	氏名未詳書状 ／竹田家文書	彼御和平之儀付而、安国・岡平 御上り之由候間、今度者何之様 にも、可相証迄御座候、各申事 候、定貴辺様にも御同前之可為 御取沙汰と致推察候、江又四、 去六日二歸城候、彼御兩所御下 向にて候者、則時又岡山へ被罷 出之由候	差出人・宛名ともに欠。秀吉・ 宇喜多氏と毛利氏との和平協議 のため、安国寺恵瓊（安国）と 岡家利（岡平）が上京したこ とが記されている。江原親次（江 又四）が去る六日に歸城したが、 恵瓊と家利が戻ってきたらすぐ にまた岡山城へ出頭する予定で あるという。	岡山（180岡山城跡） （〈美作88〉篠向城跡）	（欠）	（天正十一～ 十二年ごろ）	1583～ 1584年	12・41
251	吉川元春・元 長連署書状写 ／藩中諸家古 文書纂十五 森脇繁生	京芸和平之儀、弥相調候、就夫 侍傍之儀為可被申談候、従上 蜂須賀彦右衛門尉・黒田官兵衛 尉至岡山被差下候、從吉田茂渡 石・児三右、限日從愛元茂井又・ 児市指上せ候	元春・元長父子が森脇春方（飛 騨守）に対し、羽柴・毛利両氏 の和平成立にともなう交渉につ いて伝えたもの。両者の領界に ついて相談するため、上方から 蜂須賀正勝（彦右衛門尉）・黒田 孝高（官兵衛尉）が岡山城へ下 ってきた。彼らと談合するため、 毛利輝元（吉田）からも渡辺長（渡 石）・児玉元良（児三右）が派遣 され、元春も井上春忠（井又）・ 児玉元貞（児市）を遣わしている。	岡山（180岡山城跡）	（吉川）元 春・（吉川） 元長	（天正十一年） 十二月四日	1583年	62・ 105

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
252	吉川元春書状写／吉川家中并寺社文書十	今度京芸和談之儀二付而、南北分目之儀為可申談、至岡山蜂須賀・黒田被差下候条、從吉田・渡石見・児三、從隆景・我等、并又右・児市差出候、重置此間申談之由候、然者於南表ハ、児島之常山・松山・高田之儀、何と被申候共相渡間敷之由被申遣事候、(中略) 備中外郡之儀茂、庭妹・松島・幸山・宮山・妹尾之儀、早被相渡之由候	元春が重臣の今田経高に、羽柴・毛利講和交渉(京芸和談)の状況を報じた書状。山陰・山陽における羽柴・毛利両勢力の境界(南北分目)を定めるため、秀吉が岡山城に蜂須賀正勝・黒田孝高を派遣してきた。毛利輝元・吉川元春・小早川隆景もそれぞれ重臣を派遣し、蜂須賀らとずつと相談させていた。毛利氏としては、備前児島の常山城・備中松山城・美作高田城は、秀吉が何を言ってきたりも渡さないが、備中外郡の庭妹城・松島城・幸山城・宮山城・妹尾城については、早々に秀吉側へ引き渡す方針であった。	岡山 (180岡山城跡) 常山 (240常山城跡) 松山 (備中158) 備中松山城跡 高田 (美作33) 高田城跡 庭妹 (備中402) 庭妹城跡 松島 (備中436) 松島城跡 幸山 (備中414) 幸山城跡 宮山 (場所未詳) 妹尾 (備中442) 須浜城跡カ)	(吉川) 駿河守元春	(天正十一年) 極月十一日	1583年	41
253	安国寺恵瓊・林就長連署書状／毛利家文書	一備中外郡諸城之事、悉引渡申候、無是非存候(中略) 一作州江一兩日中二峰彦右、黒官可罷越之由候、(中略) 高田一城被相残、早々御渡専一存候、一虎倉之儀、尽善美侘言罷申候、一円無分別候、於虎倉岩屋之儀者、第一岡山相障候、自然上衆兩人当座分別候ても、八郎母所より直文にて申上せ候へは、兩人失面目之由候、退城日限相延候やうにと雖申候、是も無分別候、やう\来廿二三日ニしかと可有退城之由申候(中略) 一児島、松山、高田之事、ちと多過たる御愁訴にて候、中にも児島之儀共ハ、曾分引仕間敷由にて候、雖然、此一所二底意被縮候て可有御侘言候哉一つ、高田新見江かけ候て可被仰候哉一つ、松山城領所共二可被仰候哉一つ、此三つにて候(中略) 去年南表、冠山、宮路山責落、高松二三重二取巻候後、やう\猿懸河辺あたりまで御打出候、又当年来年と候ても、上衆八十日十五日之間二可罷出候(中略) 世上不被御覽衆之御目とハちと違可申候、然共、芸州の御旁ハ底慢心御座候て、世上之者を御見こなし候	毛利氏と秀吉との間で行われた領界確定協議について、毛利側の交渉担当者が所見を述べたもの。備中国外郡の城は全て秀吉に引き渡した。一兩日中に秀吉側の交渉役黒田・蜂須賀氏が美作国へ向かうので、高田城以外の城を早々に明け渡すこと。虎倉城については言葉を尽して毛利側に残すよう交渉しているが、秀吉側は全く聞き入れてくれないこと。虎倉城と岩屋城とは、岡山城の宇喜多氏にとって障害になるので、宇喜多秀家の母親が秀吉に直訴すれば話が破綻してしまうこと。秀吉側は、来る二十二日か二十三日には虎倉・岩屋両城から退城するよう言ってきたこと。毛利側が児島と松山・高田両城の留保を求めているのは、要求が多すぎるので、どれか一つに絞って要求した方がよいこと。毛利氏は去年、冠山・宮路山両城が落ち、高松城が何重にも包圍された後、ようやく猿懸城・川辺宿あたりまで出陣できた程度で行動が遅い。上方の軍勢は十日か十五日あれば動ける。このように秀吉と毛利氏には力量の差があるのに、世間知らずの安芸国の人々は慢心して状況を理解していない、と述べる。	備中外郡諸城 (備中414) 幸山城跡など 高田 (美作33) 高田城跡 虎倉 (25虎倉城跡) 岩屋 (美作189) 岩屋城跡 岡山 (180岡山城跡) 松山城 (備中158) 備中松山城跡 冠山 (備中373) 冠山城跡 宮路山 (備中353) 宮路山城跡 高松 (備中393) 備中高松城跡 猿懸 (備中227) 猿掛城跡)	安国寺恵瓊・林就長	(天正十一年) 十二月十五日	1583年	41・74
254	黒田孝高書状写／『黄薇古簡集』巻第五・城府五中島三季之助所蔵文書	上下御和平之儀二付而、至岡山、蜂須加・我等式罷下候、然者其御国之儀、河切姿に候、就其、御身上之事具蒙仰候、尤存候、然共、一先之儀者芸州へ被成御座候て可然候	孝高が毛利方の備中国侍欄屋七郎兵衛尉に送った書状。羽柴・毛利和平交渉のため、孝高が蜂須賀正勝と一緒に岡山城へ下向した。備中国が「河切」＝高梁川を基準に羽柴・毛利両方に分割されることを伝えている。それを受け、羽柴方宇喜多領に組み込まれる地域に居住する欄屋氏に、ひとまず安芸に滞留するのがよい、と提案している。	岡山 (180岡山城跡)	黒田官兵衛尉孝高	(天正十一年) 十二月二十日	1583年	14・41
255	安国寺恵瓊・林就長連署書状／山口県文書館蔵毛利家文庫所収文書	去月廿六日岡山罷越被仰聞条々、彼両使江申渡候之処、一円合点不申、存之外之被仰さまと申、仰天仕候	毛利輝元の家臣佐世元嘉(佐与三左)・伊源・鶴飼元辰(鶴新右)に対し、恵瓊らが秀吉との国分交渉について報じた書状。当時恵瓊らは岡山城に駐留中。去月二十六日に岡山城にやってきた元嘉らから託された交渉条件を恵瓊らが秀吉方に両使(黒田孝高・蜂須賀正勝)に伝えたところ、全く了解が得られず、思いの他の言い様だと突き放され、仰天した、と報じている。	岡山 (180岡山城跡)	(安国寺) 恵瓊・林木工(就長)	年月日欠(天正十一年カ)	1583年カ	142

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
256	羽柴秀吉書状／小早川家文書『関関録』卷十之三 堅田安房に写しあり	一虎倉升形城請取由、尤候事、一伊賀与三郎城事、入念可請取事、一草苜城是又可被入念事、(中略) 一高田、松山、児島、八橋等事、只今又可侘言由、沙汰限事候	秀吉が毛利氏から受け取る諸城について、黒田孝高・蜂須賀正勝に指示したもの。虎倉城・枳形城を無事受け取ったことをよしとし、伊賀与三郎家久の城・草刈重継の城(矢管城)を入念に受け取ること、高田城・松山城等について今更毛利氏が明け渡ししたくないと言ってきているのは言語道断であることなどを伝える。	虎倉 (25虎倉城跡)	(羽柴) 筑前守秀吉	(天正十二年) 正月二日	1584年	41・76・110
				升形城 (美作141) 枳形城跡				
				伊賀与三郎城 (25虎倉城跡カ) ※重複?				
				草刈城 (美作157) 矢管城跡				
				高田 (美作33) 高田城跡				
松山 (備中158) 備中松山城跡								
257	安国寺恵瓊書状／毛利家文書	外郡諸城之儀、引渡申候、乍勿論、至川西聊無其煩候、(中略) 一虎倉、岩屋、其外作州衆之儀、引付之段、種々雖申候、曾以無分別候、先虎倉之事、急度請取候て、作州江可打越之由候、先書二如申上候、早々作州城々の儀、高田一城被相残、被成御渡候事専一存候 (中略) 一高田、松山、児島、其外外郡之儀、川東之内、過分之儀候 (中略) 一高田、岩屋、宮山、高仙江自是申遣候儀、曾以不成候条、從其方可被仰遣候	安国寺恵瓊より、秀吉側への城明け渡しの件で報告・要請。備中国外郡の諸城の引き渡しが済み、高梁川西岸にはトラブルが起らなかったこと、虎倉城・岩屋城そのほか美作国衆の件について秀吉側に種々要請しているが理解してもらえないこと、秀吉側は速やかに虎倉城を受け取って美作国へ赴くと云っているので、早々に高田城のみ残して美作国の諸城を明け渡すべきこと、高田城や松山城の残留を望むのはぜひたくであること、高田城・宮山城・高仙城へこちらから話しても事が進まないの、毛利氏首脳部から話してほしいこと、など。	外郡諸城 (備中414) 幸山城跡など	安国寺恵瓊	(天正十二年) 正月十一日	1584年	41・74
				虎倉 (25虎倉城跡)				
				岩屋 (美作189) 岩屋城跡				
				高田 (美作33) 高田城跡				
				松山 (備中158) 備中松山城跡				
宮山 (美作56) 宮山城跡								
高仙 (美作95) 高仙城跡								
258	小早川隆景・福原貞俊連署書状写／『関関録』卷廿九 井原孫左衛門	以都郡和睦成行、御退城之事被申入候之処、御同心誠以難述言語候、然間雖少分候、於神辺領之内、一所可被遣置候	毛利氏と秀吉との和睦の結果を受け、虎倉城が秀吉側に明け渡された際の史料。虎倉城主伊賀家久(与三郎)が毛利氏からの申し入れに同心して退城したことを深謝し、代償として備後国神辺城領のうち一か所の所領を与えたもの。	(25虎倉城跡)	(小早川) 隆景・(福原) 貞俊	(天正十二年) 九月九日	1584年	41・96・110
259	毛利輝元書状／冷泉家文書『関関録』卷百二之二 冷泉五郎に写しあり	今度至雑賀諸警固差上候、御方之儀右同前令申候之処、可有御馳走之由令祝着候、然者近年常山在番付而、彼是休誼之通無余儀候	毛利輝元が紀伊国雑賀に水軍を差し向けるにあたり、冷泉元満(民部少輔)に出勤を命じたところ、元満がこれを了承したことに満足の意を示したもの。当時、冷泉元満は常山城に在番していたとある。	常山 (240常山城跡)	(毛利) 右馬頭輝元	(天正十三年) 三月六日	1585年	97・112・141
260	豊臣秀吉朱印状／小早川家文書『関関録』卷十之三 堅田安房に写しあり	今日六、至備前岡山着陣候、早々其面へ可打越候	九州征伐の途に就いた秀吉が、行軍中に岡山城に到着し、そこから小早川隆景に通信したもの。	備前岡山 (180岡山城跡)	(豊臣) 秀吉	(天正十五年) 三月六日	1587年	76・110
261	楠長譜九州下向記	五日、備前岡山留。執政様被仰出、彼城留守之輩両所へ振る舞ひあり。	朝廷から九州征伐中の秀吉のもとへ派遣された勅使広橋兼勝・橋本実勝が帰京する際、これに随行した長譜の日記。五月五日に一行は岡山城へ到着した。宇喜多氏家老(執政様)の指示で、岡山城留守居役の人たちが勅使兩人を饗応した。	備前岡山・彼城 (180岡山城跡)	(楠) 長譜	天正十五年五月五日	1587年	100
262	楠長譜九州下向記	七日、片上泊。万岡山より申沙汰。亭主発句所望、(中略) まへ片上にも打ちつづき六年在城し侍り。	上記史料の続き。五月七日、勅使と長譜の一行は片上に宿泊した。ここでも岡山の人たちが一行の世話を差配した。宿泊先の亭主から連歌の発句を依頼された。長譜はかつて、片上の城に六年間続けて在城したことがあり、馴染みの土地であった。	片上…在城 (171富田松山城跡)	(楠) 長譜	天正十五年五月七日	1587年	100
263	花房秀成書状／新出湯浅家文書(萩市郷土博物館蔵湯浅家文書)	其元普請之事、大石如何程取置候成、承度候、岡山之詰衆徒二戻申候間、其方御呼越候て、普請可被仰付候	宇喜多秀家の重臣花房秀成が、国元にいる父親の道悦に送った書状。岡山城の普請工事の進捗状況について、大石をどれくらい確保できているか教えてほしいと述べている。また、岡山城に勤番する詰衆を呼び出して普請に従事させるよう伝えている。	岡山 (180岡山城跡)	花房又七(秀成)	(天正十六年) 七月二十六日	1588年	30・139・142

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
264	長船貞親書状写／『黄薇古簡集』巻第十三・和氣郡下尺所村某所蔵文書	西の番屋と下台所とハ被作候ハて不相叶候	宇喜多秀家の宿老長船貞親が、国元にいる岡家利(岡豊)に送った書状。岡山城の普請の一環として、西の番屋と下台所とは建造しないといけない、と述べている。	(180岡山城跡)	(長船) 貞親	(天正十六年カ) 八月七日	1588年カ	14
265	来住法悦讓狀案／来住家文書	一、家屋敷・山林・土居不残渡申候也	備前国和氣郡浦伊部の富豪来住法悦が、後継者の弥三兵衛に家産を譲る旨したためたもの。家屋敷と土居も譲っている。	家屋敷・土居 (169伝太開門跡・番号なし法悦城跡)	(来住) 掬圓齋法悦	天正十七年三月吉日	1589年	10
266	日典筆曼茶羅銘	天正十七年春老今日 備前十倉住人宇喜多弥七郎	日蓮僧日典が、宇喜多弥七郎に授与した曼茶羅の銘。当時弥七郎が徳倉城にいたことが示されている。	備前十倉 (44徳倉城跡)	日典	天正十七年春老	1589年	130
267	多聞院日記	一太閤モ備前ノ岡山ニ御座、ナタ【コカ】ヤヘハ無御越由也	朝鮮出兵に向かう秀吉が、岡山城に滞在して肥前国名護屋城へは行かない、との風聞を記したものの。	備前ノ岡山 (180岡山城跡)	多聞院英俊	天正二十年十月二十三日	1592年	70
268	平塚瀧俊書状写／『内外経緯伝草稿』第四	岡山と云城、是は浮田伊賀殿御在城に而候、見事、京にもおとり不申、しっかりきやうの様候、	常陸国の佐竹義宣の家臣平塚氏が、朝鮮出兵のため東国より九州へ向かう路次で見聞きした風物を記したものの。岡山城が宇喜多氏の居城で、城下町は京都風にしつらえられ、京都と比べても大きく劣らない見事な町並であると記す。	岡山と云城 (180岡山城跡)	(平城) 山城守瀧俊	(文禄元年) 九月朔日	1592年	122
269	宇喜多秀家判物写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六片上町竹田屋十郎右衛門所蔵文書	一、あましの内、さふらいのほか、商売人一人も不可居住事、一、しやうはい人之事、よき家をつくり候ハハ、新町をはしめ、いつれの屋敷にかきらす、あしき家をこぼさせ可遣、但二かひつくりたるへき事、一、大河に橋を可懸之あひた、川東へなり共、心まかせに、や敷とりすへし、(後略)	宇喜多秀家が岡山城下町整備についての指針を定めたもの。天瀬(あまし)は武家屋敷街とし、商売人は一人も居住してはならないこと。商売人で立派な家を造ろうという者には、新町などの老朽化した家を壊した跡地を提供する。ただし、新築の家は二階建てにすること。旭川(大河)に橋を架ける予定なので、川の東岸でもどこでも、好きな場所に屋敷を構えてよいこと、などを定めている。	(180岡山城跡)	(宇喜多秀家)	(文禄二年カ) 五月二日	1593年カ	14
270	宇喜多秀家判物写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六尾上町山崎屋彦右衛門所蔵文書	岡山普請、町替二付而、屋敷之事、申上通一段感覚候、中島におゐて、望次第、屋しき可遣申候者也、	宇喜多氏による岡山城・城下の普請にともなう「町替」について。秀家が那須半入の希望に任せ、中島に新しい屋敷を与えている。	岡山 (180岡山城跡)	(宇喜多) 秀家	文禄二年八月二十一日	1593年	14
271	宇喜多秀家判物／来住家文書(『黄薇古簡集』巻第十三・和氣郡下浦伊部村伊八所蔵文書に写しあり)	岡山ニ唯今有之屋しき異儀有へからず	来住法悦が岡山城下に保有している屋敷を、宇喜多秀家が安堵したものの。	岡山 (180岡山城跡)	(宇喜多秀家)	文禄三年四月七日	1594年	10・14
272	宇喜多秀家判物写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六二日市町小松屋宝次郎所蔵文書	作州高田一養事、岡山在城可仕之旨申来候、無異儀相越候やう可被申付候也	美作国高田城にいる青木一養から岡山に在城したいとの申し出を受けた秀家が、異常なく岡山へ引越すことができるよう指示せよと角南太郎右衛門に命じたものの。	作州高田 (〈美作33〉高田城跡) 岡山 (180岡山城跡)	(宇喜多) 秀家	文禄三年十一月十五日	1594年	14
273	宇喜多秀家判物写／『黄薇古簡集』巻第六・城府六片上町久志屋善次郎所蔵文書	分國中、さけつくり候事、おか山の外にてハ令停止候、酒作度ものハ岡山へ可罷出候、於岡山つくらせ可申候、然者来八月中二岡山へ致在宅候様二可申付候	宇喜多秀家が分国内での酒造業を岡山城下に限定して他所での醸造を禁じ、酒がつくりたい者に岡山へ来るよう呼びかけるよう伏見新介に指示し、来る八月中に酒造希望者を岡山城下へ定住させるよう命じたものの。	岡山 (180岡山城跡)	(宇喜多) 秀家	文禄四年五月八日	1595年	14
274	宇喜多秀家判物／来住家文書(『黄薇古簡集』巻第十三・和氣郡下浦伊部村伊八所蔵文書に写しあり)	法悦家うり度之由申候間、此志人之儀者、家之うり買をハゆるし可申候間、分國中不可有異儀也	宇喜多秀家が岡山町奉行の浮田覚兵衛に対し、来住法悦が家を売りたいと言っているのを、分国全体での家の売買禁止の原則は変えないが、彼一人については特例的に売買を認めることを伝えたものの。	(180岡山城跡)	(宇喜多秀家)	(文禄～慶長五年ごろ) 八月六日	1592～1600年	10・14

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
275	宇喜多秀家書状写／新出沼元家文書	一其元番等之儀、此刻肝用之候間、不可有由断、然ハ各手前うたかい候て申遣にてハなく候へ共、為外間候間、其方面々人質之儀被差越尤候、一岡山在番之儀ハ六四・六太御座候間、此兩人人質之儀早々差上尤候、四郎左衛門事むす子を早々差上可申候、(中略)一常山在番丹後事、是又遣候人質差上尤候、自然実子無之候て養子成共差のぼらせ可申事、一小串在番新右衛門事ハ、せかれ爰元二有之事候へ共、今一人差のぼせ尤事、一小倉長田右衛門丞事、左近、越中守所二有之事候へ共、今一人せかれ於有之ハ、此方へ差越可申事、(中略)一高田中務事、助兵弟於有之ハ早々差越候可申候、慥成人質差上可申候、(中略)一倉敷四郎兵衛事、是者せかれ此方二居申候間、今一人も人質として差出尤候、(中略)右之通、早々何待及、むすめ子などハ差上事、堅無用候間、可有其心へ候事、	宇喜多秀家が、関ヶ原合戦直前に備前・美作・播磨の諸城の留守居を務める家臣に人質提出を命じた書状。岡山城在番の六甘四郎左衛門には息子を、実子のない常山城在番の川端丹後守には養子を、高田城在番の小瀬中務正には一族の弟を差し出すよう命じている。すでに子息を秀家に添えて出陣させている小串城の沼本新右衛門・小倉城の長田右衛門丞・倉敷城の明石四郎兵衛にも、もう一人別人質を出すよう申しつけている。また、人質は男子に限り、娘などを差し出すことを禁じている。	岡山 (180岡山城跡) 常山 (240常山城跡) 小串 (番号なし 丸山城跡・224小串城跡) 小倉 (25虎倉城跡) 高田 (〈美作33〉高田城跡) 倉敷 (〈美作389〉林野城跡)	(宇喜多秀家)	(慶長五年) 九月十日	1600年	41
276	妙本寺大堂常什回向帳 八日の条／妙本寺文書	七月 備前十倉遠藤内蔵助母儀 妙悦	七月八日を命日とする妙悦は、備前徳倉城在任の遠藤内蔵助の母であることが記されている。	備前十倉 (44徳倉城跡)	(日愷)	(天正十六年～宝永四年)	(1588～1707年)	6・133
277	妙本寺大堂常什回向帳 廿一日の条／妙本寺文書	金川城元妙寺常光坊日円	金川城内、または金川城の麓に元妙寺という日蓮宗寺院があったことが記されている。	金川城 (43金川城跡)	(日愷)	(天正十六年～宝永四年)	(1588～1707年)	6・133
278	小早川秀詮(秀秋)黒印状写／『岡山県通史』下編所載文書 ※国文学研究資料館蔵「藩中古文書」に良質の写本あり	一 二百三十五石一斗三升 備前児島迫川村(中略)合四千八百六石四斗三升一合 右、児島常山之城預置付而、為加増遣之訖	小早川秀詮(秀秋)が、児島郡の常山城を重臣伊岐遠江守に預け、迫川村などで知行を4806石余加増する旨、伝えたもの。	常山之城 (240常山城跡)	(小早川)秀詮	慶長七年七月十七日	1602年	15
279	小早川秀詮(秀秋)知行目録写／『古文書』第一巻 林左京正富書上古文書	一、五百八拾壹石 備前和気郡片上村(中略)合六千九百貳拾五石七斗三升九合、右、片上之城預ヶ置候二付、為加増遣候訖	小早川秀詮(秀秋)が、片上城を重臣林正利(丹波守)に預け、片上村ほかで知行6925石余を加増する旨、伝えたもの。	片上之城 (171富田松山城跡カ)	(小早川)秀詮	慶長七年七月十七日	1602年	40
280	小早川秀詮(秀秋)判物写／『古文書』第一巻 林左京正富書上古文書	請取銀子之事、五月廿七日 一、七百枚者 但、松山運上之内、	小早川秀詮(秀秋)が、銀子を納入した重臣林正利(丹波守)に与えた請取状(領取書)。そのうち銀700枚は「松山運上」と呼ばれており、片上村などから林氏が在番する富田松山城へ上納されたものと推定されている。	松山 (171富田松山城跡カ)	(小早川)秀詮	慶長七年九月廿七日	1602年	40
281	舜旧記	金吾殿備前岡山城死去、同月二兄弟三人病死也、諸人不思議申了	小早川秀秋が岡山城で死去したことを伝えたもの。同じ月に兄弟三人が病死したことが不思議に思われている。	備前岡山城 (180岡山城跡)	梵舜	慶長七年十月十八日	1602年	58
282	海棧録	過備中州前洋、行一百里許、到下津地名也、是備前州地方、而家康養増池田左衛門熙政之子池田右門熙元管下也、新築城子於峯頭	朝鮮の使節団で副使を務めた慶運が、旅行中に実見した様子を記した紀行文。「備中州」の前の海を過ぎ百里ばかり行くと「下津」(下津井)という場所に到着した。ここは「備前州」に属しており、徳川家康の増池田輝政の子「池田右門熙元」(右衛門督利隆のこ)の管理下において、「峯頭」に城郭が新築されていた、とある。	城子 (266下津井城跡)	慶運	慶長十二年四月三日	1607年	45
283	扶桑録	下津、亦是形勝之地、山城亦為毀撤	朝鮮使節従事官李景稷が旅行中に見た状況を書き綴った紀行文。「下津」は景勝の地だが、山城は破却・撤去されていたと述べている。	山城 (266下津井城跡)	李景稷	元和三年八月十五日	1617年	45

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日	西暦	文献番号
284	東槎録	過白石島、日没抵下津村前、止宿船上、下津是海口要衝、秀吉為関白時、設險把守、而今則撤兵、只余空城云	朝鮮通信使の副使姜弘重の紀行文。姜弘重が乗船した船は白石島を過ぎ、日没ごろ「下津村」(下津井村)の前に到着し、船上で宿泊した。この下津井は海上の要衝で、豊臣秀吉が関白だった時に堅固な「把守」(城砦)を設けていたが、今は撤収してしまい、ただ空き城が残るのみになっている、という。	空城 (266下津井城跡)	姜弘重	寛永元年十一月七日	1624年	46
285	東槎録	行過下津、有山城基址、即秀吉時関防地、而家康撤毀、凡州郡地池有数三処、存其一而尽罷之云々	朝鮮通信使従事官の黄(戸+木)が記した紀行文。下津井を船で通過したが、ここには山城の基礎の跡が残っている。この山城は秀吉の時に海路の関門の守りとして築かれたが、家康によって撤廃された。日本にはおよそ州郡ごとに三ヶ所ほど城郭が存在したが、その一つのみを存続させ残りはことごとく罷めた(いわゆる一國一城令を指す)という。	山城 (266下津井城跡)	黄(戸+木)	寛永十三年十一月六日	1636年	46
286	癸未東槎日記	過下津、水辺人家頗多、山上有一城址、秀吉以下津為海要衝、設險把守、而今関白尽毀諸州城郭、故此城荒廢已久矣	筆者未詳の朝鮮通信使紀行文。「下津」(下津井)は水辺に人家がすこぶる多く、山上には一つの城址がある。秀吉が下津井を海の要衝として取り立て、堅固な「把守」(城砦)を設けたが、今の関白(徳川将軍のこと)が諸州の城郭をことごとく壊したため、この城も荒廢してすでに久しい、という。	一城址 (266下津井城跡)	著者未詳	寛永二十年五月二十九日	1643年	47
287	日置忠治何書写ノ板津利男氏所蔵文書	彼地ノ義は武蔵守岡山在城ノ時分、私親豊前被申付、金川ノ古城ヲ取立、本段出郭等迄石垣相調候、因州より備前へ国替の節、任先規又金川豊前二被申付候処、嶋原事ノ節、一國一城之御触二付、彼地も石垣ヲハ割崩申候、右城山之根ニ私居屋敷御座候、山際に候故土留之石垣東南兩方高一丈二三尺往古より付石仕置候、(中略)宮内少輔殿備前在城ノ節、金川は荒尾志摩知行二被申付候、其節ハ右之屋敷ニ妙国寺と申法花寺ヲ立置故一度ハ寺屋敷ニも罷成候	池田光政の家老日置忠治が、金川陣屋の石垣修築について幕府関係者の意向を伺うため、金川城とその関連施設の石垣構築の経緯について説明した史料。池田利隆(武蔵守)が岡山に在城していたころ(慶長八~十八年)、忠治の父親日置忠俊(豊前守)に命じて金川の古城を修築し、本丸から出郭に至るまで石垣を整備した。その後、国替えによって池田光政が因幡国から備前国に入った時も、以前のとおり金川は日置忠俊に任された。ところが、島原の乱が起きた際、幕府から一國一城の御触れが出されたため、金川城の石垣を割り崩した。この城山の麓に日置忠治の屋敷があり、山際なので土留めのため高さ一丈二、三尺の石垣を東面と南面に設けてある。池田忠雄(宮内少輔)が備前国を支配していたころ、金川は荒尾志摩守が知行していたが、そのころこの屋敷地には妙国寺という日蓮宗寺院が建てられていた、という。	金川ノ古城 (43金川城跡)	日置猪右衛門(忠治)	(寛文十三年五月カ)	1673年カ	56・133

表 6 参考史料一覧表

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献 番号
1	平家物語 巻八 妹尾最期	都合其勢二千余人、妹尾太郎を先として、備前国福ろうじ繩手、さゝのせまりを城塚にかまへ、口二丈ふかさ二丈に堀をほり、逆もぎ引、高矢倉かき、矢さきをそろへて、いまや＼と待かけたり。(中略)妹尾太郎篠のせまりの城塚を破られて、引退き、備中国板倉川のはたに、かいてかいて待懸たり。	妹尾太郎兼康の呼びかけに応じて集まった平家方の人数二千余人は、兼康を先導に備前国福隆寺繩手・篠の迫りという場所を城郭化し、幅二丈深さ二丈の堀をつくり、逆茂木を引き、高矢倉を建て、矢先を揃えて木曾義仲の軍勢の到来を待ち構えた。その後、妹尾兼康は篠の迫りの城郭を木曾軍に破られて退却し、備中国板倉川の川端に橋を掛けて敵軍を待ち構えた。	篠のせまりの城塚		寿永二年(建久～承久年間)	1183年(1190～1221年ごろ)	12・106
2	源平盛衰記古巻第三三木曾備中下向斉明被討並兼康討倉光事	兼康は西河裳佐の渡を打渡り、福輪寺阨を堀切て、管植逆母木引などして、馬も人も通難く構たり。彼阨と云は遠さ二十余町、北に巖々たる山、人跡絶たるが如し。南に渺々たる沼田、遙に南海に連なりたり。西には岩井と云所あり。是をば打過て当国の一宮をも過佐々迫に懸。此佐々迫と云所は、東西は高き山、谷に一の細道あり。左右の山の上に弩多く張り立たり。後には津高郷とて、谷口は沼也ければ、究竟の城也。敵何万騎向たり共輒く攻落し難き所也。此には兵共を指せて、我身は唐河の宿、板蔵城に引籠て、今や＼と木曾を待けり。	妹尾兼康は牟佐の渡で旭川を越え、福輪寺の阨(ちまた)を掘り切り、先の尖った木や逆茂木を設置して、人馬が通いにくいような施設をつくった。この場所は、北に高峻な山があり、南は広々した沼田がはるかに海まで連なっていた。西の岩井というところを過ぎ、備前国の一宮も通り過ぎると佐々の迫りという場所に差し掛かる。ここは東西に高い山があり谷間に一つの細道通っている。その左右の山には谷間の細道を往く者を攻撃できるよう、弩弓を多く設置した。津高郷を後ろに控えるこの谷口は沼になっており、屈強の城地だった。兼康はここを軍兵に守らせ、自分自身は辛川宿近くの板蔵城に籠って、木曾義仲の軍勢が来るのを待ち受けていた。	城 板蔵城		寿永二年(鎌倉中・末期)	1183年(13世紀中～後期)	1・12
3	源平盛衰記古巻第三三兼康板蔵城戦事	木曾三百余騎にて(中略)和気の渡を打渡し、可真郷へ打入て福輪寺阨を見れば、堀堀切て逆母木引、たやすく爰を難通、如何して関道を知らんとて、其辺を打廻て里人を探るに、可真郷の住人に、惣官頼隆と云者を尋出して云けるは、(中略)彼を責んとするに、きと道を得ず、通り道ありなんやと宣へば、候なんとて即頼隆山しるべして先陣に進み、北路に懸り鳥岳と云所を廻て、佐々の井より時を咄と造懸て、佐々が迫を責たりけり。(中略)佐々迫を攻落して、唐皮宿、板蔵城に押寄て時を造る。妹尾思儲たる事なれば、矢たばね解て散々に射る。	木曾義仲が三百余騎を率いて和気の渡を越えて可真郷に入り、福輪寺の阨を見ると、堀を掘り切つて逆茂木が引いてあり、たやすく突破できそうになかった。何とか関道を探そうとして可真郷の惣官頼隆なる者を尋ね出し、通り道はないかと聞くと、ありますと言うので木曾軍は頼隆を先陣として鳥岳という場所を廻り、笹ヶ瀬川の井堰付近から関の声を挙げて佐々が迫の妹尾軍を攻めた。木曾軍は佐々の迫を攻め落とし、辛川宿、板蔵城に押し寄せた。妹尾兼康はこうなると予測して心づもりしていたので、矢を散々に射て応戦した。	板蔵城		寿永二年(鎌倉中・末期)	1183年(13世紀中～後期)	1・12・61
4	源平盛衰記古巻四一盛綱渡藤戸児島合戦 附海佐渡海事	同十八日に平家讃岐屋島に乍有、山陽道を打靡し、左馬頭行盛を大將軍として、飛驒守景家以下侍を相具して、二千余艘にて備前国児島著。三川守範頼も、室泊に有けるが、舟より上、同国西河尻、藤戸渡に押寄て陣取。源平海を隔て撃へたり。(中略)源氏は勝に乗、汀をまはりて是も散々に射ければ、平家は児島の城を落て、讃岐屋島へ漕返れば、源氏は馬を游がせて、藤戸の陣へ帰にけり。	十八日、平家は讃岐国屋島にいなながら山陽道を打ちなびかせ、平行盛を大將軍とし飛驒守景家の侍を添えた2000余艘の軍勢で備前国児島に着陣した。源範頼も播磨国室津(室泊)にいたが、陸が上がって備前国西川の河口付近、藤戸の渡に押し寄せて陣取り、源平両軍が海を隔てて向き合った。(中略)源氏は勝ち戦の勢いに乗り、水際を回って散々に矢を射かけたので、平家は児島の城から落ち延びて、讃岐国屋島へ漕ぎ帰ったので、源氏軍も馬を泳がせて藤戸の陣地へ引き返した。	児島の城		元暦元年(鎌倉中・末期)	1184年(13世紀中～後期)	1・61

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
5	源平盛衰記 卷四一 義経 解纜四国渡 附資盛清経頭 可上京都由事	備前児島城は、去し冬土肥次郎 実平、塩干に渡瀬を求て、暗夜 五十余騎を率して、責寄て閨 を発ければ、平氏の軍兵不計け る程なれば、防戦に不及して、 船に静乗て逃けるを、或虜或頭 を切ければ、其後は備中備前之 輩、悉官軍に相従ひける処に、 此春又平氏二百余艘の兵船を調 へて、夜半に彼城へ寄せて合戦 しける程に、実平軍敗て、息男 遠平疵を蒙り、家人多く被討捕 けり。	平家方の備前児島城をめぐる攻 防(藤戸合戦の前哨戦)。去る冬、 源氏の将土肥実平は、塩干の際 の浅瀬を伝って、闇夜に50余騎 を率いて児島城に攻め寄せ、閨 の声を挙げたところ、平家の軍 勢は不意のことで防戦もできず、 船に争うように乗って逃げた。 源氏の軍勢はこれを捕らえたり 斬首したりしたので、その後備 中・備前国の人々はみな源氏方 に従った。ところが、今春平家 軍が200余艘の兵船でもって、夜 半に児島城へ押し寄せて合戦し たところ、土肥実平の率いる源 氏軍は敗北し、子息遠平が負傷 し、家来が多く討ち取られた、 という。	備前児島城		元暦元年(鎌 倉中・末期)	1184年 (13世紀 中～後期)	1・61
6	吾妻鏡	平氏左馬頭行盛朝臣。引率五百 余騎軍兵。構城郷於備前国児島 之間。佐々木三郎盛綱為武衛御 使。為責落之難行向。更難凌波 濤之間。浜潟案轡之處。行盛朝 臣頻招之。仍盛綱勵武意。不能 尋乘船。乍乘馬渡藤戸海路「三 丁余。」	元暦元年(1184年)十二月七日。 平行盛が五百余の軍兵を率いて 備前国児島に城郭を構えたので、 佐々木盛綱が発向し乗馬で藤戸 の海峡を渡った。	城郷		元暦元年(文 永年間ごろ)	1184年 (1264～ 75年ご ろ)	12・52
7	一遍聖絵	同年の冬、又備前国藤井といふ 所の政所におはして、念仏すゝ め給けるに、家主は吉備津宮の 神主が子息なりけるが、ほかへ たがひたり、其妻女聖をたとび て、法門など聴聞し、俄に発心 して出家を遂げけり	弘安元年の冬、一遍上人は備前 国藤井の政所にて念仏信仰を勧 めた。この政所の家主は吉備津 彦神社の神主の子息だったが、 他出していた。その妻女が一遍 上人を尊敬して、法話を聴き、 突然発心して出家を遂げた、と の意。	藤井といふ所の政所 (220西大寺一宮育苗公 園遺跡カ)	聖戒	弘安元年(正 安元年)	1278年 (1299年)	12・69
8	太平記 卷七 赤松蜂起事	赤松二郎入道円心、播磨国若鞆 ノ城ヨリ打テ出デ、山陽・山陰 ノ両道ヲ差塞ギ、山里・梨原 ノ間ニ陣ヲトル。爰ニ備前・備 中・備後・安芸・周防ノ勢共、 六波羅ノ催促ニ依テ上洛シケル ガ、三石ノ宿ニ打集テ、山里ノ 勢ヲ追払テ通ントシケルヲ、赤 松筑前守舟坂山ニ支テ、宗トノ 敵二十余人ヲ生捕テケリ。然共 赤松是ヲ討セズシテ、情深ク相 交リケル間、伊東大和二郎其恩 ヲ感ジテ、忽ニ武家与力ノ志ヲ 変ジテ、官軍合体ノ思ヲナシケ レバ、先己ガ館ノ上ナル三石山 ニ城郭ヲ構ヘ、壘ヲ熊山ヘ取上 リテ、義兵ヲ揚タルニ、備前ノ 守護加治源二郎左衛門一戦ニ利 ヲ失テ、児島ヲ指テ落テ行。	赤松円心は播磨国若鞆城から出 撃し、山陽道・山陰道を封鎖し、 山ノ里・梨ヶ原の間に陣取った。 備前・備中・備後・安芸・周防 の軍勢は、六波羅探題の催促に 応じて上洛の軍を起し、三石 宿に集結して山ノ里の赤松軍を 追い払って通行しようとした。 それを、赤松貞範(筑前守)が 舟坂山で防ぎ、敵の主だった者 二十人余りを生け捕りにした。 しかし、赤松氏は生け捕りにし た彼らを殺さず、情けをかけ親 しく交わった。これに恩義を感 じた伊東大和二郎はたちまち武 家方への協力をやめて後醍醐天 皇方に合流する気持ちを固め、 自分の居館の上にある三石山に 城郭を築き、しばらくして熊山 へ登って挙兵した。備前国守護 の加治源二郎左衛門は伊東氏を 討とうとしたが、一戦で敗北し てしまい、児島を目指して落ち 延びていった。	三石山 (162三石城跡) 熊山 (150熊山城跡)		元弘三年(応 安四年ごろ)	1333年 (1371年 ごろ)	61・ 107

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
9	太平記 卷七 先帝船上臨幸事	閏二月下旬は、佐々木富士名判官が番にて、中門の警固に候けるが、如何が思けん、哀此君を取奉て、謀叛を起さばやと思心ぞ付にける。(中略) 或夜御前より官女を以て御盃を被下たり。判官是を給て、よき便也。と思ひければ、潜に彼官女を以て申入けるは、「上様には未だ知し召れ候はずや、(中略) 備前には伊東大和二郎、三石と申所に城を構て、山陽道を差塞ぎ候。播磨には赤松入道円心、宮の令旨を給て、摂津国まで貢上り、兵庫の摩耶と申処に陣を取候。其勢已に三千余騎、京を縮め地を略して勢近国に振ひ候也。(中略) 御聖運開べき時已に至ぬとこそ覚て候へ。義綱が当番の間に忍やかに御出候て、千波の湊より御舟に被召、出雲・伯耆の間、何れの浦へも風に任て御舟を被寄、さりぬべからんずる武士を御憑候て、暫く御待候へ。(中略) 馳て御方に参候べし。」とぞ奏し申ける。	元弘三年(1333) 閏二月下旬、佐々木富士名判官義綱が番役となり、後醍醐天皇の配所の中門警固に当たっていたが、何を思ったか義綱は、天皇を取り立てて擁立し、鎌倉幕府に謀叛を起こそうと思うようになった。或る夜、天皇から官女をもって盃を給わった際、義綱はよい機会だと思い、密かに官女を通じて天皇に提言した。「上様はまだご存じないかもしれませんが、備前国の伊東大和二郎が三石という場所に城を築いて山陽道を封鎖し、播磨国の赤松円心は護良親王に令旨をもらって摂津国まで攻め上り、兵庫の摩耶山に布陣しております。その軍勢はすでに三千騎あまりに増え、京都を萎縮させ敵地を侵略して近国に勢力を振るっております。上様の運を開くべき時はすでに来たったと思われます。この義綱が当番の間に隠岐島を忍び出て、千波の湊より舟に乗り、出雲・伯耆のうちどの浦でもよいので風に任せて着岸し、しかるべき武士を頼って、しばらく御待ちください。すぐに味方に馳せ参じます」と天皇に申し上げた。	三石と申所に城 (162三石城跡)		元弘三年(応安四年ごろ)	1333年(1371年ごろ)	53・107
10	太平記 卷十四 諸国朝敵蜂起附義貞掃落事	同十一日、備前国住人兒島三郎高德カ許ヨリ、早馬ヲ立テ申ケルハ、去月二十六日、当国住人佐々木三郎左衛門尉信胤、同田井新左衛門尉信高等、細川卿律師定輝カ語ヒヲ得テ、備中国ニ打越、福山城ニ橋籠ル間、彼国ノ目代、先手勢計ヲ以合戦ヲ致トイヘトモ、國中ノ勢催ニ從ハス、無勢ナルニ依テ引退ケ刻、朝敵勝ニ乗シ間、目代カ勢数百人討死畢、其翌日ニ小坂、河村、荘、真壁、陶山、成合、那須、市川以下、悉朝敵ニ馳加ハル間、程ナク其勢三千余騎ニ及ヘリ、爰ニ備前国ノ地頭御家人等、吉備津宮ニ馳集リテ、朝敵ヲ相待処ニ、浅山備後守、備後国守護職ヲ賜テ、下向スル間、其勢ヲ合テ、同二十八日、福山ニ押寄テ、攻戦シ日、高德カ一族等大手ヲ攻破テ、已ニ城中ニ打入刻、野心ノ国人等、忽ニ翻テ御方ヲ射ル間、目代浄智カ子息七条弁房、小周防大弐房、藤井六郎、佐井七郎以下三十余人、搦手ニ於テ討シ候畢、官軍遂ニ戦負テ、備前国ニ引退、三石城ニ橋籠ル処ニ、当国守護松田十郎盛朝、大田判官全職、高津入道浄源、当国ニ下著シテ已ニ御方ニ加ハル間、又三石ヨリ國中ヘ引返、和氣宿ニ於テ、合戦ヲ致ス刻、松田十郎敵ニ属スル間、官軍数十人討シテ、熊山城ニ引籠ル、其夜当国住人内藤弥二郎、御方ノ陣ニ在ナカラ、竊ニ敵ヲ城中ヘ引入攻切ス間、諸卒悉行方ヲ知入、没洛シ候畢、高德カ一族等、此時僅ニ死ヲ免ル者、身ヲ山林ニ隠シ、討手ノ下向ヲ相待候、若早速ニ御勢ヲ下サレハ、西国ノ乱、御大事ニ及ヘシト申タリケル	建武二年(1335年)十一月二十六日、備前国の住人佐々木信胤・田井信高らが足利尊氏方の細川定輝と結んで備中国に入り、福山城に立て籠った。備中国の目代が合戦を挑んだが、無勢で引き返した。備前国の地頭御家人等が備後国守護浅山備後守の軍勢と合同して十一月二十八日に福山城に押し寄せ攻め戦った。兒島高德の一族も大手を攻め破って城中に突入したが、味方から裏切り者が出て、搦手方面から攻撃中の武将が討死した。官軍は福山城攻めに失敗して備前国に退却し、三石城に立て籠った。官軍は備前国守護松田盛朝らを味方に加え和氣宿で合戦したが、盛朝らが敵に寝返ったため、熊山城に引き籠った。ここでも内藤弥二郎が敵軍を城中に引き入れたので、官軍は没落した。	福山城 (備中415) 福山城跡 三石城 (162三石城跡) 熊山城 (150熊山城跡)		建武二年(応安四年ごろ)	1335年(1371年ごろ)	12・61・108

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
11	梅松論	当津に一兩日御逗留有て、御合戦の評定区々也けるに、或人の云京勢は定て襲来へし、四国九州に御著あらん以前に御うしろをふせかむ為に、国々に大将をとめらるへきかと申ければ、尤可然と上意にて、(中略)播磨は赤松、備前は尾張親衛、松田の一族を相隨て、三石の城にとめらる	延元元年(1336年)二月十二日。室津に逗留中に軍議を行った足利尊氏が、ある人の進言に従い、後醍醐方が背後から襲来するのを防ぐため、石橋和義に松田一族を添え、三石城に留め置いた。	三石の城 (162三石城跡)		建武三年(南北朝時代末期)	1336年(14世紀後半ごろ)	50・80
12	太平記 卷十六 尊氏下向筑紫事	建武三年二月八日、尊氏卿兵庫ヲ落給ヒシ迄ハ、相從フ兵僅ニ七千余騎有シカ共、備前児島ニ著給ヒケル時、京都ヨリ討手馳下ラハ、三石辺ニテ支トテ、尾張左衛門佐氏頼、田井、飽浦、松田、内藤ニ附テ留メラレ、(後略)	建武三年(1336年)二月八日。足利尊氏が兵庫から落ち延びた時、従う兵はわずか七千余騎ほどだった。尊氏は備前国児島に到着すると、京都からの討手を三石あたりで防ぐため、石橋和義(尾張左衛門佐氏頼)に田井・飽浦・松田・内藤氏を添えて、三石に留まらせた。	三石辺 (162三石城跡)		建武三年(応安四年ごろ)	1336年(1371年ごろ)	108
13	太平記 卷十六 西国蜂起官軍進発事	將軍筑紫へ没落シ給シ刻、四国・西国ノ朝敵共、機ヲ損ジ度ヲ失テ、或ハ山林ニ隠シ或ハ所縁ヲ尋テ、新田殿ノ御教書ヲ給ラヌ人ハ無リケリ。此時若義貞早速ニ被下向タラマシカバ、一人モ降参セヌ者ハ有マジカリシヲ、其比天下第一ノ美人ト聞ヘシ、勾当ノ内侍ヲ内裏ヨリ給タリケルニ、暫方程モ別ヲ悲テ、三月ノ末迄西国下向ノ事被延引ケル(中略)依之(中略)播磨国ニハ、赤松入道門心白旗ガ峯ヲ城郭ニ構テ、討手ノ下向ヲ支ントス。美作ニハ、菅家・江見・弘戸ノ者共、奈義能山・菩提寺ノ城ヲ拵ヘテ、國中ヲ掠メ領ス。備前ニハ、田井・飽浦・内藤・頼宮・松田・福林寺ノ者共、石橋左衛門佐ヲ大将トシテ、甲斐河・三石二箇処ノ城ヲ構テ船路・陸地ヲ支ントス。備中ニハ、庄・真壁・陶山・成合・新見・多地部ノ者共、勢山ヲ切塞デ、鳥モ翔ヌ又様ニ構ヘタリ。是ヨリ西、(中略)將軍方ニ無志モ皆順ヒ不靡云事ナシ。	足利尊氏が筑紫へ落ち延びた際、四国・西国の尊氏方の人々の多くは新田義貞方への転向を図り、義貞の御教書をもらっていた。この時もし義貞がすぐに西国へ下向していれば一人も降参せぬ者はいなかったろうに、その頃義貞は天下第一の美女勾当内侍を朝廷から与えられ、少しの間の別れもつらいといて三月末まで西国出陣を延ばしてしまった。そのため、播磨国の赤松門心は白旗の峯に城郭を築き、新田軍の下向に対応する備えを固め、美作国の菅家党・江見氏・弘戸氏らは奈義能山・菩提寺の城を構築して國中を武力で押さえた。備前国では、田井氏・飽浦氏・内藤氏・頼宮氏・松田氏・福林寺氏らが、石橋和義(左衛門佐)を大将として甲斐河・三石の二城を構え、海路・陸路の守りを固めた。備中国でも庄氏・真壁氏・陶山氏・成合氏・新見氏・多治部氏らが勢山で山陽道を封鎖し、鳥も飛び越えられないよう厳重に防禦を固めた。これより西では思い入れもない人たちまで尊氏方に従い、靡かぬ者はいなかった。	奈義能山 (〈美作296〉名木ノ城・〈美作301〉大別当城) 菩提寺 (〈美作300〉菩提寺城) 甲斐河 (423甲斐川城諸説あり) 三石 (162三石城跡)		建武三年(応安四年ごろ)	1336年(1371年ごろ)	108・150

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
14	太平記 卷十六 児島三郎熊山拳旗事付船坂合戦事	四月十七日ノ夜半許ニ、児島三郎高德、己ガ館ニ火ヲカケテ、僅ニ二十五騎ニテゾ打出ケル。(中略) 今木・大富・和田・射越・原・松崎ノ者共、取物モ不取敢馳著ケル間、其勢二百余騎ニ成ケリ。兼テハ夜中ニ熊山ヘ取上リ、四方ニ篝火ヲ焼テ、大勢籠リタル勢ヒヲ、敵ニミセント巧ミタリケルガ、(中略) 夏ノ夜夜ナク明ケレドモ、無力相図ノ時刻ヲ違ジテ、熊山ヘコソ取上リケレ。如案三石・舟坂ノ勢共是ヲ聞テ、(中略) 三千余騎ヲ引分テ、熊山ヘゾ向タリケル。彼熊山ト申ハ、高サハ比叡山ノ如ニシテ四方ニ七ノ道アリ。其路何モ麓ハ少シ峻シテ峰ハ平ナリ。高德僅ノ勢ヲ七ノ道ヘ差分テ、四方ノ敵ヲ防ギケル。(中略) 夜ニ入ケル時、寄手ノ中ニ石戸彦三郎トテ此山ノ案内者有ケルガ、思モ寄ヌ方ヨリ抜入テ、本堂ノ後ナル峰ニテ関ヲ揚タリケル。高德四方ノ麓ヘ勢ヲ皆分テ遣ヌ。僅ニ二十四五騎ニテ本堂ノ庭ニ響タリケルガ、石戸ガ二百騎ノ中ヘ喚テ懸入り、火ヲ散テゾ闘ヒケル。(中略) 相図ノ日ニモ成ケレバ、脇屋右衛門佐ヲ大将トシテ、梨原ヘ打位ミ、二万騎ノ勢ヲ三手ニ分タル。(中略) 一手ニハ大江田式部大輔氏経ヲ大将トシテ、菊池・宇都宮ガ勢五千余騎ヲ船坂ヘ差向ラル。是ハ敵ヲ爰ニ遮リ留テ、搦手ノ勢ヲ潜ニ後ヨリ潜サン為也。(中略) 嶮岨ヲ凌テ三石ノ宿ノ西ヘ打出タレバ、城中ノ者モ舟坂ノ勢モ、(中略) 熊山ノ寄手共ガ歸タルヨト心得テ、更ニ仰天モセザリケリ。三百余騎ノ勢共、宿ノ東ナル夷ノ社ノ前ヘ打寄り、(中略) 東西ノ宿ニ火ヲカケ、関ヲ拳タリケル。城中ノ兵ハ、大略舟坂ヘ差向ケヌ。三石ニ有シ勢ハ、皆熊山ヘ向ヒタル時分ナレバ、闘ハントスルニ勢ナク、防ガントスルニ便ナン。舟坂ヘ向ヒタル勢、前後ノ敵ニ取巻レテ、スベキ様モナカリケレバ、只馬・物具ヲ捨テ、城ヘ連タル山ノ上ヘ、ハウノ逃上ラントゾ騒ギケル。(中略) 江田兵部大輔ハ、三千余騎ニテ美作国ヘ打入テ、奈義能山・菩提寺二箇所ノ城ヲ取巻給フ。彼城モスベキ様ナケレバ、馬・武器ヲ捨テ、城ニ連タル上ノ山ヘゾ逃上リケル。脇屋右衛門佐義助ハ、五千余騎ニテ三石ノ城ヲ責ラル。大江田式部大輔ハ、二千余騎ニテ備中国ヘ打越、福山ノ城ニゾ陣ヲ被取ケル。	四月十七日の夜半、児島高德は自分の居館に放火して、わずかに二十五騎を引き連れて出陣した。今木・大富・和田・射越・原・松崎の一党が、取るものもとりあえず馳せ参じたので、高德の軍勢は二百余騎に増加した。予定では夜中に熊山へ登ってかがり火を炊き、いかにも大軍が籠っているかのように敵に思わせる算段だったが、夏の夜はすぐに明けてしまい、仕方なく相図の時刻通りに熊山へ登った。思った通り、三石・舟坂の足利方軍勢はこれを聞いて、三千余騎の兵を割き、高德を討つべく熊山へ派遣した。この熊山は比叡山のような高い山で、四方に降りる七つの道があった。この山道は麓付近が少し険しいが、峰上は平坦だった。高德はわずかの軍勢をそれぞれの道に配備して四方の敵を防いだ。ところが夜に入る頃、寄せ手側の案内者を務める石戸彦三郎という武士が、思いも寄らぬ方向から山上へ侵入し、霊山寺の本堂の背後にある峰に登って闘いの声を揚げた。高德は四方の麓に軍勢を分配しており、自身はわずか二十四、五騎を連れて本堂の庭に控えていたが、石戸氏の率いる二百騎の中に飛び込んでいき、火花を散らして戦った。高德と申し合せていた脇屋義助(右衛門佐)は、相図の日取りになったので、梨ヶ原に出撃し、二万騎の軍勢を三手に分けた。大江田氏経(式部大輔)を大将とする五千余騎は舟坂に向かった。これは足利軍を舟坂で遮って足止めし、その間に搦手勢を密かに背後から回り込ませるためであった。搦手勢は嶮岨を凌いで三石の宿の西側へ抜け出たが、これを見た三石城中の兵も舟坂に出撃中の兵も、熊山攻撃に向かった自軍が帰還したものと勘違いし、驚くことすらなかった。搦手勢の三百余騎は、三石の東にある夷社の前二集結し、宿の東西に放火して闘いの声を挙げた。三石城中の兵はほとんど舟坂・熊山へ出払っており、戦おうにも兵が足りず、防ごうにも手段がなかった。舟坂に出陣中の軍勢も、前後を敵に包囲され、三石城に連なる山上へ逃げ登ろうと混乱した。そのころ江田兵部大輔が率いるもう一手は、三千余騎を率いて美作国へ進出し、奈義能山・菩提寺の両城を包囲した。城方は防ぐ手立てもなかったもので、馬も武器も捨てて城の背後に連なる高い山に逃れた。脇屋義助自身も五千余騎を率いて三石城を攻撃した。大江田式部大輔も二千余騎を連れて備中国へ攻め込み、福山城に布陣した。	己ガ館 (464 和田屋敷カ) 熊山 (150 熊山城跡) 奈義能山 ((美作296) 名木ノ城・(美作301) 大別当城) 菩提寺 ((美作300) 菩提寺城) 三石ノ城 (162 三石城跡) 福山ノ城 ((備中415) 福山城跡)		建武三年(応安四年ごろ)	1336年(1371年ごろ)	108・150

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
15	太平記 卷十六 備中福山合戦事	五月十五日ノ宵ヨリ、左馬頭直義三十万騎ノ勢ニテ、勢山ヲ打越へ、福山ノ麓四五里方間、数百箇所ヲ陣ニ取テ、篝ヲ焼テ居タリケル。(中略)夜已ニ明テ後、先備前・備中ノ勢共、三千余騎ニテ押寄せ、浅原峠ヨリノ懸タリケル。(中略)国々ノ勢一方ノヲ請取テ、谷々峰々ヨリ攻上リケル。城中ノ者共ハ、兼テヨリ思慮タル事ナレバ、雲霞ノ勢ニ開マレヌレ共少モ不騒、此彼ノ木陰ニ立隠レテ、矢種ヲ不借散々ニ射ケル(中略)敵ニ矢種ヲ尽サセント、寄手ハ態射ザリケレバ、城ノ勢ハ未ダ一人モ不手負。大江田式部大輔是ヲ見給テ、「サノミ精力ノ尽ヌサキニ、イザヤ打出テ、左馬頭ガ陣一散シ懸散サン。」トテ、城中ニハ徒立ナル兵五百余人ヲ留テ、馬強ナル兵千余騎引率シ、木戸ヲ開カセ、逆木ヲ引ノケテ、北ノ尾ノ殊ニ嶮キ方ヨリ喚テゾ懸出ラレケル。一方ノ寄手二万余騎ニ被懸落、(中略)式部大輔是ヲバ打捨、「東ノハナレ尾ニ引兩ノ旗ノ見ルハ、左馬頭ニテゾ有ラン。」トテ、二万余騎警ヘタル勢ノ中へ破テ入り、時移ルマデゾ闘レケル。(中略)大勢ノ中ヲ颯ト懸抜テ御方ノ勢ヲ見給ヘバ、五百余騎討レテ纔ニ四百騎ニ成ニケリ。爰ニテ城ノ方ヲ遙ニ観レバ、敵早入替リヌト見ヘテ櫓・挿桶ニ火ヲ懸タリ。式部大輔其兵ヲ一処ニ集メテ、「今日ノ合戦今ハ是迄ゾ、イザヤ一方打破テ備前へ歸リ、播磨・三石ノ勢ト一ニナラン。」トテ、板倉ノ橋ヲ東ヘ向テ落給ヘバ、敵二千騎・三千騎、此彼ニ道ヲ塞テ打留ントス。(中略)サレ共兵モサノミ討レズ、大将モ無恙リケレバ、虎口ノ難ヲ遁テ、五月十八日ノ早旦ニ、三石ノ宿ニゾ落著ケル。左馬頭直義ハ、福山ノ敵ヲ追落シテ、事始ヨシト悦給事不斜。(中略)五月十八日晚景ニ、脇屋右衛門佐三石ヨリ使者ヲ以テ、新田左中將ノ方ヘ立テ、福山ノ合戦ノ次第、委細ニ註進セラレケレバ、其使者馳テ馳返テ、「白旗・三石・菩提寺ノ城未貞落ザル処ニ、尊氏・直義大勢ニテ舟路ト陸路トヨリ上ルト云ニ、若陸ノ敵ヲ支ン為ニ、当国ニテ相待バ、舟路ノ敵差違テ帝都ヲ侵サン事疑ナシ。只速ニ西国ノ合戦ヲ打捨テ、摂津国辺マデ引退、水陸ノ敵ヲ一処ニ待請、帝都ヲ後ニ当テ、合戦ヲ致スベク候(中略)」トゾ、被仰タリケル。	五月十五日の宵に、足利直義が三十万騎の軍勢を率いて勢山(妹山。倉敷市と矢掛町の境)を越え、福山の麓四、五里の間に布陣した。夜明けの直後、足利方の備前・備中の軍勢三千余騎が浅原峠から福山に攻めかかった。諸国の軍勢も、それぞれの持ち場を受け取り、谷々峰々より攻め上った。城中の人たちは、かねてより覚悟していたので、雲霞のような大軍に囲まれても騒がず、あちこちの木陰に隠れて矢を借しまず散々に射た。足利方は、籠城軍の矢を尽きさせる目的で、わざと反撃しなかった。福山城を守る大江田氏経(式部大輔)はこの様子を見て「それほど精力が尽きないうちに攻撃して、足利直義の陣をけ散らしてしまおう」と考え、城中に歩兵をとどめ、騎兵千余騎を率いと、木戸を開き逆茂木をどかせて北の尾根の険しいところから喚声をあげて攻撃し、寄せ手二万余騎を懸け落とす。さらに大江田氏経は「東側の離れた尾根に二引両の旗が見える。これは足利直義にちがいない」とみて敵中へ突入し、しばらくの間戦った。氏経が敵の大軍の中を颯爽と駆け抜けて味方の軍勢の様子を見ると、五百余騎が討たれてわずか四百騎に減っていた。城の方を遙かに見渡すと、敵勢が早くも入れ替わって攻め寄せたとみえ、櫓や挿桶が放火され燃えていた。氏経は味方の兵を一ヶ所に集め「今日の合戦はこれまでだ。いざ敵軍の一方を打ち破って備前国へ歸り、播磨国や三石にいる味方と合流しよう」と言って、板倉の橋を東へ向かって落ち延びようとした。そこで足利直義方の二〜三千騎は、あちこちで道をふさいで大江田氏経を討ち留めようとした。しかし、それほど被害もなく、氏経は虎口の難を逃れて、五月十八日の早朝に三石の宿へ落ち着いた。足利直義は福山城の敵を追い落とすことが叶い「事始めとして上出来だ」と、この上なく喜んだ。五月十八日の夕方、脇屋義助(右衛門佐)は三石の陣から使者を出し、新田義貞(左中將)へ福山城合戦の詳細を報告した。すると、その使者がやがて戻ってきて新田義貞からの命令をもたらした。「自分たちが白旗・三石・菩提寺城を攻め落とせないうちに、足利尊氏・直義が大軍をもって海陸両方から攻め上っている状況で、もし陸路の敵を防ごうとして備前国にとどまれば、海路からの敵が素通りして京都を侵略することは間違いない。速やかに西国での合戦をやめ摂津国あたりまで引き返し、水陸の敵を一ヶ所で待ち受け、京都を背にして合戦するのがよい」との命令だった。	福山 ((備中415) 福山城跡) 三石 (162三石城跡) 菩提寺ノ城 ((美作300) 菩提寺城)		建武三年(応安四年ごろ)	1336年(1371年ごろ)	61・108

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
16	梅松論	宰府に三月三日より、四月三日まで御座ありし時分(中略)又備前の国三石の大将尾張親衛同申て云、新田脇屋大将として当城にむかふ間、兵糧用意なきよし、赤松と申(中略)漸五月五日の夕、備後の朝に御著有(中略)すてに敵播磨・備前両城を囲むよし其告あり(中略)五月十五日備前国児島に着給ふ、当所は佐々木の一族の所領なる間、加地筑前守渚近く仮御所を造、御風呂杯たて御休息あり(中略)五月十七日に下御所の御陳、備中の河原と備前の児島の間三里、下御所より御使あり、当手には備中・備後・安芸・周防・長門、大将・守護人・国人等并三浦介、美作国より昨日馳参ず、太宰少貳・大友供奉の間、御勢数をしらず候、(中略)但播磨の赤松、備前の三石の城合戦の最中のよし聞え候処に、結句新田・江田某、大将として馳下て近日備中の福山に楯籠間、今夕手分せしめ、明日払暁に追洛し火をあぐべく候、(中略)去程に翌日十八日(中略)下部走下て云、既御方の大勢福山を賁落して飛入て火を放間、敵皆落行よし申あげたり、(中略)則陸地の御勢備前国へ責入給ひしかば、三石の城の寄手脇屋没落すと聞えしかば、下御所より飛脚を以賀し申さる	建武三年(1336年)四月三日。備前国三石の大将石橋和義(尾張親衛)から、脇屋義助を大将とする新田軍が三石城に向かっているが兵糧の用意がない旨、足利尊氏に通報があった。五月五日ごろには、城が敵に囲まれたとの報が、備後の朝の浦にいた尊氏のもとにもたらされた。尊氏は五月十五日に備前国児島に到着した。ここは佐々木一族の所領だったので、尊氏は佐々木加地筑前守が海岸近くに用意した仮御所に入り、風呂などを使って休憩した。五月十七日には備中国の河原に陣取っていた足利直義(下御所)から尊氏のもとに使者が来訪した。使者が言うには、直義の軍に備中・備後・安芸・周防・長門の大将・守護・国人が参加し、美作国の三浦介も昨日馳せ参じ、九州の少貳・大友氏も従い、数え切れないほど大軍になっているという。播磨国の赤松氏からの報告では、備前国の三石城は新田軍との合戦の最中とのことだったが、近日新田一門の江田氏を大将とする一軍が馳せ下り、備中国福山に立て籠もっていた。そこで直義は、明日払暁にも福山から新田勢を追い落とし、火の手を上げる旨、尊氏に通告した。翌十八日、尊氏のもとに下部が走り込み、味方の軍勢がすでに福山を攻め落とし、城中に飛び込んで火を放ったので、敵軍はみな落ち延びた、と報告してきた。ただちに陸地を進む足利軍が、備前国に攻め込んだところ、三石城を囲んでいた脇屋義助の軍勢は没落したとのことで、直義は尊氏あてに飛脚を派遣して戦勝を祝賀した、という。	備前の国三石・当城・三石の城 (162三石城跡) 仮御所 福山 (備中415) 福山城跡)		建武三年(南北朝時代末期)	1336年(14世紀後半ごろ)	50・61
17	太平記 卷廿八 直義入道 慧源逐電事	十一月十九日二、備前福岡二著給フ、爰ニテ四国中国ノ勢ヲ待ケレ共、海上ハ波風アレテ、船モ通セス、山陰道ハ、雪降積テ、馬ノ蹄モ立サレハ、馳参ル勢多カラズ、サテハ年明テコソ、筑紫へハ向ハメトテ、將軍備前福岡ニテ、徒ニ日ヲソ送ラレケル、	観応元年(1350年)十一月十九日。十一月十九日に備前福岡に到着した足利尊氏は、ここで四国・中国の軍勢が集結するのを待ったが、海上の波浪や雪のため馳せ参じる兵が少なかった。そこで尊氏は年明けに九州へ向かうこととし、備前福岡にて無駄に日々を送った。	備前福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)		観応元年(応安四年ごろ)	1350年(1371年ごろ)	109
18	太平記 卷廿九 官方京攻 附 桃井直常入洛 義詮逃近江事	宰相中将義詮朝臣ヨリ早馬ヲ立テ、備前福岡ニ將軍九州下向ノ為トテオハシケル所へ、急ヲ告ラル、事頻並ナリ、(中略)將軍急キ福岡ヲ立テ、二千余騎ニテ上洛シ給フ	観応元年(1350年)。足利義詮が早馬を立て、九州下向のため備前福岡に滞在していた足利尊氏に急を告げた。尊氏は急いで福岡を發ち二千余の軍勢を連れて上洛した。	備前福岡 (190福岡城跡・197福岡奥之城跡)		観応元年(応安四年ごろ)	1350年(1371年ごろ)	109

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
19	太平記 卷三十八 諸国宮方蜂起、附備前軍、并桃井直常越中軍事	山陽道ニハ、同年六月三日ニ、山名伊豆守時氏五千余騎ニテ、伯耆ヨリ美作院莊へ打越テ、国々へ勢ヲ差分ツ、先一方へハ、時氏子息左衛門佐師義ヲ大将ニテ二千余騎、備前、備中兩國へ発向ス、一勢ハ備前仁ノ堀ニ陣ヲ取テ、敵ヲ待ニ、其国守護松田、河村、福林寺、浦上七郎兵衛行景等、皆無勢ナレハ、出合テハ叶ハントヤ思ヒケケ、又讃岐ヨリ、細川右馬頭頼之、近日児島へ推渡ルト聞ユルヲヤ相待ケン、皆城二橋籠テ、イマタ曾テ戦ハス、一勢ハ多治目備中守橋崎ヲ侍大将ニテ、千余騎備中新見へ打出タルニ、秋庭三郎多年拵スマシテ、水モ兵糧モ卓散ナル松山城へ、多治目、橋崎ヲ引入シカハ、当国守護越後守師秀、戦フヘキ様ナクシテ、備前徳倉城へ引退ケル、郎従赤木父子二人落止リ、思フ程戦テ、遂ニ討死シテケリ、(中略)、只陶山備前守計ノ南海ノ端ニ添テ、僅ナル城ヲ拵テ、將軍方トテハ残りケル、	康安二年(1362年)六月三日、山名時氏が軍勢を率いて美作国院庄へ出張し、国々へ兵を差し向けた。時氏の子・師義を大将とする軍の一隊は備前国仁堀に陣取った。備前国守護の松田氏や浦上行景は、みな城に籠って山名軍と戦わなかった。備中では秋庭三郎が多年にわたって築造し水も兵糧も潤沢な松山城に多治部・橋崎氏らを引き入れたので、備中国守護の高師秀は戦術を失って備前徳倉城に退却した。備中ではただ陶山備前守だけが南海の端に小さな城を築き、幕府方として残っていた。	(守護松田、河村、福林寺、浦上行景の)城 松山城 (備中158) 備中松山城跡) 備前徳倉城 (44徳倉城跡) 南海ノ端ニ添テ僅ナル城 (備中254) 笠岡城跡カ)		康安二年(応安四年ごろ)	1362年(1371年ごろ)	12・109
20	片瀬郷四ヶ村と南方村山堺相論書上ノ大江家文書	片瀬郷四ヶ村ノ山ニ而御座候ヲ、南方之者共新キニ取可申由申迷惑仕候、其むかし金川之城主松田豊後守様、山之堺被成御定事	片瀬村(肩脊村)・江尻村・大内村・沖村の四ヶ村持ちの山に、南方村の住民が薪を取りに入つて迷惑であると岡山藩役人に申告したもの。片瀬郷四ヶ村と南方村との山境は、その昔金川城主だった松田豊後守(元成または元藤)が定めたものという。	金川之城 (43金川城跡)	かたせ村庄や金兵衛ほか9名	戦国時代初期(寛永五年四月二十七日)	15世紀後半～16世紀初頭(1628年)	63
21	赤松記	浦上掃部助村宗と上の御間、不思議の雑説出来、播磨の国散々に成候間(中略)とかく浦上御対治可有にて、十一月九日に小塩より御馬出され、浦上のふくりうと申を御陣にて候、其後浦上か城備前の三石迄御馬を寄られ候、此三石城むかしよりの名城にて候へは、働不自由にて、無相違御本意難成処に、備中より松田将監と申者、浦上一味として後巻可致との雑説出来候間、難波にて柳橋豊後調法して、浦上降参可申候の躰にととのへ、からゆひをきり申分にて、十二月晦日に御帰陣なり、	永正十六年(1519年)。浦上村宗と「上」=赤松義村との間柄について、不思議な風聞が流れた。赤松義村は浦上氏を退治するため、十一月九日に置塩城を出陣し、浦上村宗が在城する備前三石まで出馬した。三石城は昔からの名城だったので、攻略が難航した。そこに松田元陸(将監)が浦上氏に味方して赤松軍の背後を攻撃してくるとの噂が流れた。そのため、赤松氏宿老の柳橋剛高(豊後)が調整を図り、浦上氏が降参したような体裁でかたちばかりの和睦を結び、赤松軍は十二月晦日に帰還した。	浦上か城備前の三石・三石城 (162三石城跡)	得平定阿(宣阿とも)	永正十六年(天正十六年)	1519年(1588年)	51
22	虎倉物語ノ類纂虎倉物語	伊賀伊賀守様、赤坂郡鍋谷の城より津高郡虎倉の城へ御移り被成久敷御座候。	伊賀伊賀守(大永年間の伊賀氏当主)は赤坂郡(?)鍋谷城に居たが、そこから津高郡虎倉城へ移転して長らく居城していた、という。	鍋谷の城 (22鍋谷城カ)※赤坂郡鍋谷に中世城郭はない。津高郡鍋谷の誤伝。 虎倉の城 (25虎倉城跡)	虎倉村又兵衛	大永年間(寛文元年九月二十八日)	1521～1528年ごろ(1661年)	33・120
23	馬場十郎右衛門奉公書ノ『吉備温故秘録』卷之八千城九	馬場岩法師。十三歳にて宇喜多大和守所に奉公仕候。其節大和守居城邑久郡戸石にて御座候。	岡山藩士馬場十郎右衛門が、曾祖父家職の覚書とされる記録に基づいて記した奉公書。馬場岩法師こと家職は、十三歳で宇喜多大和守に出仕した。そのとき大和守は邑久郡戸石に居城していた、という。	戸石 (214砥石城跡)	馬場十郎右衛門	天文二十年カ(貞享年間)	1551年カ(1684～1688年)	34・136
24	馬場十郎右衛門奉公書ノ『吉備温故秘録』卷之八千城九	宇喜多三郎右衛門邑久郡乙子之城に被居候而、大和守と日々合戦有之、直家之家来生田太郎三郎と、北地村荷蓋島之間にて鐘を合候得共、互に勝負不付、相引仕候由。此節岩法師十四歳、誠に類なき義にて、則二郎四郎と名を給候。	同上。宇喜多直家(三郎右衛門)は邑久郡乙子城に居城して、宇喜多大和守と日々合戦をくり返していた。馬場岩法師こと家職は直家の家来生田太郎三郎と北地村荷蓋島にて槍を合わせたものの、互に勝負がつかず、引き分けになったという。このとき岩法師は十四歳で、比類なき働きを宇喜多大和守に褒められ、「二郎四郎」という名前を与えられた、という。	乙子之城 (211乙子城跡)	馬場十郎右衛門	天文二十一年カ(貞享年間)	1552年カ(1684～1688年)	34・136

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
25	鈴木左七郎奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十五 干城四	鈴木□□□。備前国天神山城主浦上宗景の、代々家人にて御座候。本氏山本にて御座候。通生氏とも同姓にて御座候。(中略)天文の比、右の者宗景へ忠戦の功依有之、通生与十郎儀宗景の感状二所持仕候。雲州衆へ政宗相談、至当城押寄難儀の節、昼夜に尽粉骨の案、忽敵退散令着候。如此の趣共に、直判御座候。	岡山藩士鈴木左七郎が主家に提出した奉公書。鈴木氏は備前国天神山城主浦上宗景に代々仕える家人で、本姓は山本、通生氏とも同族であるという。天文のころ、通生与十郎は宗景に忠節を尽くして戦い、感状を二通もらった。その一通は、浦上政宗が尼子氏(雲州衆)と相談して天神山城へ押し寄せた際、昼夜粉骨して政宗・尼子勢を退散させた時のもので、宗景の直判(花押)が据えてある、という。	天神山城・当城 (137天神山城跡)	鈴木左七郎	天文二十四年カ(貞享年間)	1555年カ(1684～1688年)	34
26	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十八 干城九	赤坂郡鳥取庄之内高目(高月の誤植)城に大和守取掛候時も、無比類難仕、(中略)此時二郎四郎十七歳。	岡山藩士馬場十郎右衛門が曾祖父家職の覚書とされる記録にしたがって記述し、主家に提出した奉公書。宇喜多大和守が赤坂郡鳥取庄にあった高月城に攻めかかった時、当時十七歳だった馬場二郎四郎家職は比類ない槍働きを示した、という。	高月城 (334高月城跡101兜山城跡または353両宮山城跡か)	馬場十郎右衛門	天文二十四年カ(貞享年間)	1555年カ(1684～1688年)	34・136
27	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十八 干城九	戸石城直家に攻候。夫より上道郡沼に居住之時、二郎四郎十八歳にて直家に随ひ奉公仕候へば、則知行三百石・与力六十人預申由。	同上。宇喜多直家は戸石城を攻略し、ついで上道郡沼に居住した。この時、当時十八歳だった馬場二郎四郎は直家に従うこととして出仕した。直家は二郎四郎に知行三百石・与力六十人を預けた、という。	戸石城 (214砥石城跡) 沼 (185亀山城跡)	馬場十郎右衛門	弘治二年(貞享年間)	1556年(1684～1688年)	34・136
28	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十八 干城九	邑久郡邑久郷に宇喜多五郎左衛門、後筑前守と名を改申候、(中略)筑前守備中へ被罷成、拜を被願、既に出陣に突にて、沼之向八塚に陣可有之時、直家を可攻不被成ば、矢倉に火をかけよ、それが難成ば、自分之家を可放火、左様之儀も相成ば、只筑前守へ可馳加、約束之通可取計との状給、則直家に見せ申候処、披見有之、大に驚、其時逆心不成との返事を被遣候由。	同上。邑久郡邑久郷に宇喜多五郎左衛門という人がおり、後に宇喜多筑前守に改名した。この筑前守は毛利方備中衆へ内通し、直家討伐のため出陣する腹を決め、馬場二郎四郎に書状を送った。その内容は「沼城の向かいの八塚に自分たちが陣取った時、呼応して直家を攻めるように。それが無理なら城内の矢倉に放火せよ。それも難しければ自宅に放火すべし。これらが成就したら筑前守の軍勢へ馳せ加わるように。そうすれば約束のとおり恩賞を取りはからう」というものだった。馬場二郎四郎はこの書状をすぐに直家に見せた。これを披見した直家は大変驚き、筑前守に対し逆心してはならないとの返事を送った、という。	邑久郷 (460邑久郷城跡) 沼 (185亀山城跡)	馬場十郎右衛門	永禄年間前期カ(貞享年間)	1560年代前半カ(1684～1688年)	34
29	岡多兵衛奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』岡藤兵衛	祖父生国備前上道郡中川村、若名岡与三左衛門、宇喜田直家二奉公仕候、受用仕知行之員数承不申候、其比直家ハ備前沼之城主ニ而御座候、同龍ノ口之城主さいしよ信濃ヲ謀可討捕旨、祖父与三左衛門ニ被申付候二付、数日心懸候得共、用心密可忍入様無御座候、あいやけ岡但馬と示合、或時山下二火ヲ掛申候得ハ、城内共驚喚申候処謀入、信濃ヲ生捕、岸ヨ飛下ニ而首ヲ取申候、(中略)為褒美両岡ニ知行三千貫、内千五百貫ハ岡与三左衛門、千五百貫ハあいやけ岡但馬ニ被宛行、与三左衛門ハ筑前二致受領候由承伝候、	岡山藩士岡多兵衛が、祖父岡与三左衛門の履歴について岡山藩に報告したもので、与三左衛門は備前国上道郡中川村の生まれで、沼城の城主宇喜多直家の家臣であった。直家は、龍ノ口城主穰所経郷(信濃守)を謀殺するよう岡与三左衛門に命じた。与三左衛門は数日命令の実行を試みたが、龍ノ口城の用心は厳重でひそかに忍び込む隙がなかった。そこで与三左衛門は相婿(あいやけ)の岡但馬守と示し合わせ、ある時龍ノ口城の麓に放火したところ、城内の人たちは驚き騒ぎ立てた。この隙に与三左衛門は城内に忍び込み、穰所経郷を生け捕り、彼を抱えて岸から飛び降り首を取った。その褒美として、直家は両岡(岡与三左衛門・岡但馬守)に知行1500貫づつを給与し、与三左衛門には受領名を与えて「岡筑前守」と名乗ることを許した、という。	沼之城 (185亀山城跡) 龍ノ口之城 (181龍ノ口山城跡)	岡多兵衛	永禄年間前期(寛永二十一年)	1560年代前半(1644年)	43

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
30	桂炭円覚書	三村家親、先年尼子籠城の刻、作州へ置かせられ、上方への通路御留め成され候。然る処に宇喜多直家、家頼の遠藤と申す者に、是非家親を果し候へ。さ候はマ一廉身上引立つべきの由申し聞かせ候に付て、遠藤作州へ罷り越し、家親陣所へ忍び入り候。(中略)遠藤縁まで忍び入り、鉄砲二つ玉にて射候。一二間の間に候へば、誤まらず胸を打貫き忽ちに相果て候。(中略)其褒美として遠藤には備前内にて十蔵と申す山一城預け置き、大身に成り、近年迄罷り居り候。	三村家親は、尼子義久が月山富田城に籠城していたころ、毛利氏の指示で美作国へ配置され、尼子氏の上方との連絡路を遮断する役割を果たしていた。宇喜多直家は家来の遠藤氏に「三村家親を討ち果たせば一廉の身分に取り立てる」と言い含めた。遠藤氏は美作国の家親の陣所に忍び込み、鉄砲に弾丸を二つ込めて射撃し、家親の胸を撃ち抜いた。たちまち家親は死亡した。その褒美として直家は、遠藤氏に備前国徳倉城を預けたので、遠藤氏は大身になって最近まで健在だった、という。	十蔵と申す山一城 (44徳倉城跡)	桂元盛(炭円)	永禄九年(元和八年)	1566年(1622年)	73
31	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八千城九	上道郡妙善寺之城籠置候人数を、安芸毛利家より引取ために人数来時、山下にて敵は鎌、重介刀にて勝負仕、首取申候。	岡山藩士馬場十郎右衛門が、曾祖父家職の覚書とされる記録に基づいて記した奉公書。安芸毛利氏が上道郡妙善寺の城に配置していた軍勢を引き揚げさせるため出陣してきた時、馬場家職(重介)は城の山下にて槍をつかう敵と刀で勝負し、その首を討ち取った、という。	妙善寺之城 (193明禪寺城跡)	馬場十郎右衛門	永禄十年(貞享年間)	1567年(1684～1688年)	34・136
32	中島治大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十八千城七	備中侍大将根矢与七郎・薬師寺弥五郎、備前籠ノ口城主仕候節、浮田和泉守・松田左近将監・伊賀左衛門、国中之勢を以て籠ノ口取巻候時、備中侍大将後巻仕候故、以相図切て出、数十人打取無事に立退申時、根矢方へ感状于今所持仕候。此時於妙善寺浮田直家と備中侍共相闘候節、石川左衛門尉・中島加賀守(新左衛門事)・根矢七郎兵衛討死致候、此外惣勢五百余打死仕候。	岡山藩士中島治大夫が主家に提出した奉公書。備中の侍大将禰屋(根矢)与七郎・薬師寺弥五郎が籠ノ口城主を務めていた時、宇喜多直家(和泉守)・松田元堅(左近将監)・伊賀久隆(左衛門)らが国中の軍勢でもって籠ノ口城を包囲した。この時、備中の侍大将が籠ノ口城の後巻を行ったので、籠城衆は相図にしたがって撃つて出て、敵を数十人討ち取って無事に籠ノ口城から退去した。この戦いの際に禰屋氏に与えられた感状を今も所持している、という。この戦いに関連して、妙善寺において宇喜多直家と備中の侍たちが戦った際、石川久智(左衛門尉)・中島加賀守(新左衛門のこと)・禰屋七郎兵衛が討死し、その他総勢五百名余りが戦没した、という。	籠ノ口城 (181籠ノ口山城跡) 妙善寺 (193明禪寺城跡)	中島治大夫	永禄十年カ(貞享年間)	1567年カ(1684～1688年)	34
33	岡多兵衛奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』岡藤兵衛	其比備前岡山二ハ金光と申仁、纒之搔上ヲ仕罷有候処、両岡被申付、取巻候内、家来なませ源六・西崎おこ右衛門・小橋かん三兵衛など、申者忍入、火ヲかけ終二理運二仕候由承伝候、	永禄年間ごろ、備前岡山には金光氏という領主が、ちょっとした搔上の城(土を掻き上げて造った城)を設けて居城していた。宇喜多直家は両岡(岡筑前守と岡但馬守)に命じて金光氏の居城を包囲させた。この包囲戦の最中、岡氏の家来なませ・西崎・小橋氏らが城内へ忍び込み、内側から火を放ったので、ついに城を攻略することができた、という。	岡山・纒之搔上 (180岡山城跡)	岡多兵衛	永禄十年(寛永二十一年)	1567年(1644年)	43
34	小島次郎兵衛書状写／花房家記事	日幡御りうん二成候而より、備前山口・とわり・ゆつり三ヶ村を助兵様へ被遣候、則山口之城を御こしらへて御もち被成、ならひの菊田・かるべ・ぬかた殿をてき二被成候而日々御かせき御りうん二被成候由候、	花房職利の家臣小島次郎兵衛が、花房氏の家祖職秀についての聞き取り調査の結果を主家に報告した書状。花房職秀は日幡城防衛を成功させた褒美として宇喜多直家から備前国山口・斗有・由津里をもらった。そこで職秀は「山口之城」を修築して持ち城とし、近隣の菊田・軽部・額田氏と日々合戦し勝利した、という。	日幡 (備中431)日畑城跡) 山口之城 (85瀧ノ城カ)	小島次郎兵衛	永禄末～元亀三年ごろカ(寛永拾八年六月十二日)	1567～1572年(1641年)	41・120

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
35	虎倉物語／類 纂虎倉物語	伊賀殿は宇喜多直家の智殿にて御座候。又子息伊賀与三郎殿は、明石掃部殿姉智にて御座候。岡山に御屋形御座候て常に岡山に御座候。直家様と伊賀殿御挨拶不浅候折節、金川松田殿の城御望候て、直家様伊賀殿を御頼み被成、辰の年七月五日に、伊賀殿御取懸り被成、金川道林寺の丸と申に堂御座候。是へ夜中忍び入り聞の声を揚げ、本丸へ鉄炮博申され候。折節城中に人少く候所に、横井又七殿金川籠城を御聞候て、御馳入被成、殿守を請取言葉戦被成、鉄炮御打せ御座候。折ふし伊賀殿方より打入候鉄炮に当り、松田大殿御死去被成候由。松田殿の御内に、橋原【村】修理殿と申も打死の由申候。六日の日ゆふべ七日に御城落申候。松田若殿は御のき被成候由申候。直家様は矢原の寺に御陣所の由申候。寛文元年丑の年迄九十四年に成申候。	伊賀久隆は宇喜多直家の智だった。また久隆の子息伊賀与三郎家久は、明石掃部頭の姉智で、岡山城下に屋形があり、伊賀氏は常日頃岡山に居住していた。このように直家と伊賀氏との関係が深かったころ、金川の松田氏居城を入手したいと考えた直家は、伊賀氏に助力を依頼した。辰の年(永禄十一年)七月五日、伊賀久隆は金川城に攻めかかり、道林寺丸と呼ばれる堂舎のある曲輪に夜間忍び込んで聞の声を揚げ、本丸に鉄砲を発射した。そのとき城中の人数は少なかったが、家老の横井又七が金川籠城の噂を聞きつけて城中へ馳参じ、「殿守」を持ち場として受け取って伊賀軍に「言葉戦」を挑み、城中から鉄砲で反撃した。この戦いの折りに、伊賀軍から放たれた鉄砲玉に当たって、松田元堅(大殿)が討死した、という。松田氏家臣の橋村修理という人も討死した、という。六日の夕方から七日にかけての時間帯に、金川城は落城した。松田の若殿(松田孫次郎か)は城から脱出し、退去したと言われている。寛文元年丑の年は、金川落城から九十四年目になる、という。	岡山 (180岡山城跡) 金川松田殿の城 (43金川城跡)	虎倉村又兵衛	永禄十一年 (寛文元年九月二十八日)	1568年 (1661年)	33
36	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八千城九	金川松田城を直家切取、在城有之、其節は、岡山之城は金光与次と申侍持たるを、武略を以て切腹為致被取候。然ども、いまだ近辺敵多く、先為城番戸田【川】平右衛門を被申付候処、平右衛門与力六十人之者共、先手へ参間敷と申候間、平右衛門難儀仕案、重介同心にて可参旨、直家へ申、則同心仕、重介与力六十人一人も不退、剩へ平右衛門与力も、重介同心あらば可参とて、三十余人参、三年城を持堅、後直家が在城。其頃年号元亀之時分、後十年計有之、直家死去、	岡山藩士馬場十郎右衛門が、曾祖父家職の覚書とされる記録をもとに、家職の武功を記したものだ。宇喜多直家は松田氏の居城金川城を攻め取り、ここに在城したという。そのころ岡山城は金光与次という武將が持っていたが、直家は武略を用いて金光氏を切腹させ、城を奪取した。しかし、いまだ岡山城近辺は敵が多く、まず戸川秀安(平右衛門)に城番を命じたところ、秀安の与力六十人は最前線には行きたくないと言って難儀していた。そこで馬場家職(重介)と一緒に出向くことを直家に申し出て、了承された。家職の与力六十人は一人も逃げず、秀安の与力も家職と一緒に来るならば最前線への在番を了解し、三十余人が岡山城へ出向き、三年間城を維持し、その後直家が在城することになった。その頃の年号は元亀のころで、十年ほどして直家は死去した、という。	金川松田城 (43金川城跡) 岡山之城 (180岡山城跡)	馬場十郎右衛門	永禄十一年 (貞享年間)	1568年 (1684～1688年)	34・136
37	大村弥一左衛門奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』大村弥一左衛門	私祖父大村甚左衛門、松田蓮忠当御国金川山居城、其節甚左衛門蓮忠二奉公仕居申候、浮田直家公金川山居城ヲ被打果、落城二付蓮忠備中江被逃退候節、甚左衛門も一所二立退申候	岡山藩士大村弥一左衛門が主家に提出した自家の履歴書。弥一左衛門の祖父大村甚左衛門(元盛)は、備前国金川山を居城としていた松田蓮忠(元堅の子息)に仕えていた。ところが宇喜多直家が金川城を攻撃して落城させたため、松田蓮忠は備中国へ逃亡し、大村甚左衛門も蓮忠と一緒に立ち退いた、という。	金川山居城 (43金川城跡)	大村弥一左衛門	永禄十一年 (寛文九年か)	1568年 (1669年か)	44
38	横井玄昌奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』横井玄昌	祖父横井藏人善興、津高郡金川の松田将監殿二奉公仕居申候由、知行高八不存候、其後金川落城仕、致牢人、当国二而病死仕由二御座候	岡山藩の医師横井玄昌が主家に提出した自家の履歴書。玄昌の祖父横井善興(藏人)は、津高郡金川城の松田将監に仕えていた(所領高は不明)。その後金川城が落城して浪人となり、備前国内で病死した、という。	金川 (43金川城跡)	横井玄昌	戦国後期(寛文七年)	16世紀中盤 (1667年)	44
39	横井良伝奉公書／『吉備温故秘録』巻八十六 千城一五	横井(割注；本氏菅。)土佐。備前津高郡金川城主松田将監殿家臣にて千二百貫領知仕候由。	岡山藩家臣横井良伝が主家に提出した奉公書。良伝の高祖父横井土佐守は備前国津高郡金川城主松田将監の家臣で、1,200貫の所領を保持していたという。	金川城 (43金川城跡)	横井良伝	戦国後期(貞享年間)	16世紀中盤 (1684～1688年)	34

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
40	村川喜兵衛奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十四 千城一三	田中但馬。備前金川之城主松田将監殿に罷在候、病死。跡目無相違世伴長左衛門に被下候。	岡山藩士村川喜兵衛が主家に提出した奉公書。喜兵衛の先祖田中但馬守は、備前金川城主松田将監の家中にあった。病死後、息子の長左衛門に跡目相続が許された、という。	金川之城 (43金川城跡)	村川喜兵衛	戦国後期(貞享年間)	16世紀中盤(1684～1688年)	34
41	村川喜兵衛奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十四 千城一三	田中長左衛門。金川落城之後、直家より追々御手入有之、被召出、高知にて罷在候得共、存念の子細も有之処に、金川籠城之時之武功、秀吉公被聞召及、可被召出候間、暇申請、参候様にと、石子孫兵衛を以、被仰下候に付、(後略)	同上。金川落城後、田中長左衛門は宇喜多直家に召し出され、高い知行をもって召し抱えられたものの、色々考えるところもあった。そこに金川籠城の際の長左衛門の武功を聞きつけた羽柴秀吉が、自分が召し抱えるので宇喜多家に暇乞いをして秀吉のもとに参るようにと、石子孫兵衛を使者として申し入れてきた、という。	金川 (43金川城跡)	村川喜兵衛	戦国後期(貞享年間)	16世紀中盤(1684～1688年)	34
42	三村十助奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十三 千城一二	石井彦左衛門。備前松山城主三村修理進元親に奉公仕、同国上房郡竹之庄宝【室】納村之内にて知行高三百石被下罷在、天正元年、傍輩田中四郎兵衛と申者、備前加茂小倉之城主伊賀久隆と打果候節、能備御座候	岡山藩士三村十助が主家に提出した奉公書。先祖の石井彦左衛門は備前松山城主三村元親(修理進)に仕え、備前中国上房郡室納村で知行300石を保有していたという。天正元年、傍輩の田中四郎兵衛が備前国加茂の虎倉城主伊賀久隆に討たれた際、彦左衛門は目覚ましい武功を立てたのだという。	備前松山城 (備中158) 備前松山城跡 小倉之城 (25虎倉城跡)	三村十助	天正元年(貞享年間)	1573年(1684～1688年)	34
43	覚之次第／花房家記事	備前之内伊部城主日笠源太・宗影衆、ぶりやくにて御とり被成候事、	花房職秀が、日笠源太と浦上宗景の手勢が籠る備前国伊部城を、武略によって攻め落としたという。	伊部城 (158伊部城跡)	(花房職秀)	天正二年ごろ(元和三年以前カ)	1574年ごろ(1617年以前?)	41
44	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十四 千城九	和氣郡片上葛坂にて戸田松之城より人数出し合戦の時も、相応の働仕候由	岡山藩士馬場十郎右衛門が、曾祖父家職の覚書とされる記録をもとに、家職の武功を記したものの、和氣郡片上葛坂にて宇喜多軍が出撃してきた戸田松之城の城兵と合戦になった際も、相応の手柄を立てた、という。	戸田松之城 (171富田松山城跡)	馬場十郎右衛門	天正二年ごろ(貞享年間)	1574年ごろ(1684～1688年)	34
45	寺見三右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之七十七 千城六	寺見三四郎。天神山城主浦上遠江守宗景へ知行二百石給り奉公仕居申候、少々心馳も御座候由	岡山藩士寺見三右衛門が記した奉公書。祖父の寺尾三四郎は天神山城主浦上宗景の家臣として二百石を与えられ、ちょっとした武功も立てたことがあった、という。	天神山城 (137天神山城跡)	寺見三右衛門	戦国後期(貞享年間)	16世紀中盤(1684～1688年)	34
46	山田市郎左衛門奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』山田市郎左衛門	祖父山田小右衛門と申候、生国ハ不存候、当国之神山二被居候宗景二罷有候、身軀之程も心馳も不存候、其後福嶋太夫殿二罷有	岡山藩士山田市郎左衛門が主家に提出した自家の履歴書。市郎左衛門の母方の祖父山田小右衛門は、生まれた国は不明だが、備前国の天神山城にいた浦上宗景に従っていた。ただし、浦上氏に仕えていたころの所領高や手柄については具体的にわからない。その後、小右衛門は福島正則に仕えた、という。	当国之神山 (137天神山城跡)	山田市郎左衛門	戦国後期(寛文九年)	16世紀中盤(1669年)	44
47	木村玄石奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』木村玄石	私祖父木村三郎兵衛与申候、生国備前、宗景天神山二在城之時分奉公仕由承申候	岡山藩の医師木村玄石が主家に提出した自家の履歴書。玄石の祖父木村三郎兵衛は備前国出身で、浦上宗景が天神山城に在城していたころ、宗景に奉公していた、という。	天神山二在城 (137天神山城跡)	木村玄石	戦国後期(寛文九年)	16世紀中盤(1669年)	44
48	木村玄忠奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十六 千城一五	木村三郎兵衛。浦上遠江守宗景に仕居中、八木山之城に罷在候由承及候。家【宗】景没落之後、和氣郡伊部村に浪人にて病死仕候。	岡山藩の医師木村玄忠(上記史料の木村玄石の子)が主家に提出した奉公書。玄忠の曾祖父木村三郎兵衛は、浦上宗景に仕えて八木山城に在城していたという。宗景没落後、三郎兵衛は浪人して和氣郡伊部村で病死した、という。	八木山之城 (385八木山城跡)	木村玄忠	戦国後期(貞享年間)	16世紀中盤(1684～1688年)	34

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
49	氏名不詳某覚書／花房家記事	其後備前直家、ちくせん殿へ御見かた被申、毛利殿と相わかれ候、則作州ましほのかうりみや山と申てさきのしろ相こしらへ我にあつけられ候、右の城より岡山までつたへの城四ツ相こしらへれき＼＼こめをかれ候処二、吉川・小早川衆罷出せめ申こと＼＼あけのき、又ハかうさん仕、右つたへの城共四つなかららつきよ仕候	宇喜多直家が羽柴秀吉（ちくせん殿）に味方し毛利氏と手切れになった後、真島郡宮山と言う出先の城を築城し、「我」（この記録の筆者）に預けた。また、宮山城から岡山城までを連絡する伝の城を四つ構築し、宇喜多家の歴々が守備についた。しかし、吉川元春・小早川隆景の軍勢に攻められて四つの伝の城は全て落城してしまった、という。	みや山と申てさきのしろ (〈美作56〉宮山城跡) 岡山 (180岡山城跡) つたへの城四ツ	(宮山城番の某) ※ 額田九郎兵衛カ	天正七～八年(寛永十八年以前カ)	1579～1580年(1641年以前?)	41
50	桂皮円覚書	作州寺畑の城、宇喜多より持ち候へ、輝元様、隆景様、御取掛り成され候。五三日候て明け退き候。然ば伊賀左衛門尉城小倉へ付城仰せ付けらるべしと御意候刻、小倉より出城に持ち候福山と申すを明け退き候。幸の儀候条、此山をこなたより御取誘へ候て、御持せ成さるべしとて、備中の才田と申す城、前原左衛門尉大夫、熊谷玄蕃兩人、今に於ては才田は入らず候間、右の福山に置かせらるべきの由御意候えば、兩人御理に、其身は上意に任せ、何ようにもと存じ候え共、家人共打続き先様へ罷り越し候儀、相成る間敷と申し候。(中略) しかば同国松山に検使に置かせられ候桂源右衛門尉へ仰せ付けらるべしとて、寺畑の御陣へ召寄せられ、隆景様御座候所に置かせられ、(中略) 去年以来松山に罷り越し辛身致し候。(中略) 打続き辛身に候え共、福山へ罷り越し候は、御祝着たるべきの由仰せ聞けられ候。御意の如く賀茂付城仰せ付けられ候へば、松山は御檢使にも及ばず候。何方に罷り居り候も同前の儀に候間、兎角上意次第たるべしと御請け申し候	宇喜多氏の持ち城だった美作国寺畑城を、毛利輝元・小早川隆景が攻めたところ、十五日でいどで開城した。これを受けて輝元が、伊賀久隆の居城虎倉城に對する付城を構築しようと思っていたところ、伊賀氏が出城として持っていた福山城を放棄して退いた。輝元はこれを幸いに思い、福山城を自分たちで修築し毛利方の武將に守らせようと考え、備中才田城を守備していた馬屋原左衛門太夫・熊谷就真の二人に對し、もう才田城は守らなくてよくなったので福山城の守備につくよう命じた。ところが、馬屋原・熊谷兩人は、自分たちは上意に従って行動したいと思っているが、家来たちが連続して最前線へ行くのを嫌がっている、と申し出た。仕方なく輝元は、備中松山城に檢使として配置していた桂源右衛門尉元盛に福山城の守備を命じようと考え、寺畑城付近の毛利本陣に呼び寄せ、小早川隆景の御座所に滞在させた。その上で元盛に對し、去年から松山城への出張で辛勞をかけているが、引き続き福山城へ出張してくればありがたい、と申し聞かせた。輝元の依頼を聞いた元盛は、賀茂に付城があるなら松山城で檢使をする意味もなく、どこに居ても同じことなので、上意に従って福山城の守備につくことを承した、という。	寺畑の城 (〈美作78〉大寺畑城跡) 伊賀左衛門尉城小倉 (25虎倉城跡) 小倉より出城に持ち候福山 (19福山城跡) 才田と申す城 (〈備中76〉才田城跡) 松山 (〈備中158〉備中松山城跡)	桂元盛(皮円)	天正八年(元和八年)	1580年(1622年)	73
51	牧左馬助覚書／『美作国諸家感状記』大庭郡社村牧九郎左衛門所持文書	備中衆備前唐川江被出候刻、及合戦直家目之前二而太刀討仕、則首弔ツ討取申候	毛利方の備中衆が備前国辛川に出陣してきた時、牧左馬助は宇喜多軍に属して合戦に及び、宇喜多直家の目の前で太刀をふるって敵の首二つを討ち取った、という。	(48辛川城跡)	牧左馬助	天正八年(江戸時代初期)	1580年(17世紀前半)	41

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
52	桂炭円覚書	福山御取付のため、備中竹之庄に至て、輝元様、隆景様御陣替成され候。備中の内宥と申す所より福山へ御陣易候時、御小姓衆夜ごめに御先へ罷り越され候。芸州衆御陣易の由を聞き、地下人共悉く小倉の山下へ逃げ集り候。無案内の事に候へば、先は何ともしらず、人に逢ひ候迄と行き籠められ候。福山より二里程候て、小倉の尾頸へ行懸られ候。敵は今日芸州衆御働きの由聞へ候に付て、有程の人数小倉に取上り居り候て、此方の衆を見候処に、続きたる人数もなく、小人数を見切り悉く打おろし、うね／＼より弓鉄砲にて射立て候。其時粟屋与十郎御用に立ち候。一所に大田垣相届き討死候つ。所は無案内に候。敵は無案内にて、差廻し／＼いたて候間、手負歴々出来、力に及ばずのき申し候。(中略)路次にて歴々の衆児玉与七郎(中略)なにかに四十人余越度候。賀茂崩とは是を申し候。	天正八年(1580)四月。福山城を毛利方の拠点とするため、備中国竹庄に毛利輝元・小早川隆景が陣替えした。備中国有漢から福山城へ陣替えする際、輝元の小姓衆が夜通しで前線へと進出した。毛利軍(芸州衆)陣替えの噂を聞き、地下人たちは全て虎倉城の麓へ逃げ集まった。毛利軍は地理不案内だったので、先がどうなっているか知らぬまま、人に出くわすまで行きつこうと考え、福山城から2里ほど行ったところで虎倉城への尾根続きになる山(尾頸)へ取りついた。敵(宇喜多方伊賀軍)は、今日毛利軍が攻め寄せてくると聞き知っていたので、ありつかけの人数を虎倉城へ登らせて毛利軍を見下ろしたところ、後続する部隊もいないようだった。そこで、伊賀軍は毛利軍を小人数と見切って山上から一斉に攻め下り、尾根上から弓鉄砲で射撃した。この時、毛利方の粟屋元信(与十郎)と大田垣氏が戦死してしまった。毛利軍にとっては不案内、敵は無案内(その土地の様子をよく知っている者)だったので、繰り返し射立てられて毛利軍の将兵に手負いの者が増え、力及ばず退却した。撤退の道中で児玉元房(与七郎)ら40人ほどの武将が討死してしまった。「賀茂崩れ」というのは、この事件を言うのである、という。	福山 (19福山城跡) 小倉 (25虎倉城跡)	桂元盛(茂円)	天正八年(元和八年)	1580年(1622年)	41・73
53	虎倉物語／類纂虎倉物語	備中備前の境に藤沢と申城御座候。それへ毛利殿御取出被成候。伊賀殿御内河原六郎右衛門と申人、勘当にて浪人仕、毛利殿に居申候に付、是を案内者にて藤沢より毛利殿軍兵花やかに拵へ、虎倉の様子御覧置くとて上加茂まで御出被成候。其時虎倉より足軽衆参合、川越に鉄砲迫合仕候。毛利殿内青屋殿《割注：与十郎と云ふ。》と申能き侍一人、上加茂村の片山与七郎《割注：後に弥左衛門と云ふ。》と申人鉄砲にて川越に拵申す。其儘仲間参候而首を取申候。(中略)それよりさん／＼に追崩し、うす谷・かや谷にて余《傍注：数》多打取申由に候。十力・おぎ坂迄追ひ申候中に、加茂の侍土井と申人馬悪敷候て、おぎ坂にて河原六郎右衛門寺に居申候て土井を打取申候。伊賀殿の御内にては土井より外には打れ不申候。そのまゝ毛利殿も御引被成候由。	備中・備前の国境に藤沢という城があった。この城に毛利軍が進出してきた。毛利軍は伊賀氏の旧臣で浪人中の河原六郎右衛門を案内者とし、虎倉城の様子を偵察する目的で上加茂まで進軍した。その時、虎倉城から足軽衆が迎撃に現れ、川ごしに鉄砲の撃ち合いとなった。毛利軍の青屋殿(粟屋元信)は、上加茂村の片山与七郎に鉄砲で撃たれ、片山の中間によって首を取られた。それから宇喜多方伊賀軍は毛利勢をさんざんに追い崩し、白井谷・かわや谷で多数の将兵を討ち取った。伊賀軍は十力・荻坂まで毛利軍を追撃したが、土井という人の馬が暴走し、毛利方に討たれてしまった。伊賀氏の家中では土井氏以外に討たれた者はいなかった。そのまま毛利軍も撤退した、という。	藤沢と申城 (17藤沢城跡) 虎倉 (25虎倉城跡)	虎倉村又兵衛	天正八年(寛文元年九月二十八日)	1580年(1661年)	33・41
54	虎倉物語／類纂虎倉物語	其間につゞみだ友貞かまへと申に、伊賀殿より河原源左衛門・河田七郎、是兩人を御出し置被成候。其節備中侍はいだ殿つゞみだへ取懸攻申され候。虎倉より加勢もなく攻落し申候。中にも河原源左衛門手を負、東のたきへのき居申候。	いわゆる虎倉合戦が行われたころ、鼓田友貞構という城に伊賀久隆は河原源左衛門・河田七郎の二人を配備して守らせていた。そのとき備中国の穂田氏が鼓田の構に攻め寄せた。虎倉城から加勢もなかったため穂田氏はこの城を攻め落としたが、在番の河原源左衛門は負傷しながらも城の東にある滝へ逃れた、という。	つゞみだ友貞かまへ (295奥宿城跡・296鼓田城跡・297堤欄奥宿砦跡)	虎倉村又兵衛	天正八年カ(寛文元年九月二十八日)	1580年カ(1661年)	33

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
55	虎倉聞書／類纂虎倉物語	出城は備中四つうね、作州鷹か城相持候処に、芸州毛利より四つうねを乗取候。虎倉より二里計西加茂市場村の内藤沢と中山は、虎倉方の者取登り居申所に、又芸州より藤沢をも乗取り、城番として青屋与十郎と申人を据置申候。其後伊賀殿と扱に仕り、右領分の物成半納づ、藤沢と虎倉へ取入申候由。其節鷹か城を浦上宗景殿より攻申候に付、後詰として虎倉より出勢仕候。其留守に扱を破り、藤沢より虎倉へ不意に押懸け申候を、留主居とも伝聞き、城中の妻子下女はしたまで呼出し、旗刺物さゝせ、数百人城山の後広面村と上加茂村の境高き山へ出張居申候。藤沢の者ども案の外に候へば、上加茂の坂中へ下り軍の評議仕候処に、虎倉勢用に立程のものは下加茂へ廻り、上加茂の後十力村の山の高みへ取登り居申候。其内片山弥左衛門と申鉄砲の上手、上加茂川のへり、柳のかげにかくれ居申候で、大将青屋与十郎をねらひ打に打落申候。其時後へ廻り居申者ども、ひた／＼と打寄開を揚候得ば、敗軍仕り方々へ逃申候を追かけ大方打取申候。虎倉勢の内には土井三郎左衛門と申もの一人、長追を仕打死いたし候。大将与十郎打死、其外大勢打死仕候に付藤沢難抱、残る者共は芸州へ立退申候。	(伊賀氏は) 出城として備中国四畝城・美作国高城を保持していたが、毛利氏によって四畝城を乗っ取られてしまった。また、虎倉城から2里ほど西にある加茂市場村の藤沢という山に虎倉城側に味方する人たちが登って拠点としていたが、これもまた毛利軍が奪取して、城番として栗屋元信(青屋与十郎)を配置した。その後、毛利氏と伊賀氏との間で休戦が成立し、年貢(物成)を折半して藤沢と虎倉の両方へ納める状態になった(半納)。その頃、高城が浦上宗景(宇喜多家の誤り)に攻撃されたため、後詰めのため虎倉城から援軍を出陣させた。その留守を狙って毛利側が休戦を破り、藤沢城から虎倉城へ不意に攻め寄せてきた。虎倉城の留守居はこれを事前に伝え聞き、城中の妻子・下女まで呼び出して旗指物を掲げ、広面村と上加茂村の境の高い山へ数百人を配備した。藤沢城の軍勢にとっては思いの外のことだったので、上加茂の坂中で軍評定をしていたところ、虎倉城の軍勢のうち役に立つ者は下加茂へ回り込み、十力村の山の高みに登って陣取った。そのうち、片山弥左衛門という鉄砲上手が、上加茂川の傍の柳の陰から毛利軍の大将栗屋元信を狙撃し、背後に回り込ませていた軍勢が押し寄せ開の声をあげたところ、毛利軍は敗走し、それを追い打ちして多数を討ち取った。虎倉城側では、土井三郎左衛門という者1人が、深追いし過ぎて討死した。大将の栗屋氏が戦死し、その他大勢が討死したため、毛利氏は藤沢城を維持することが困難になり、残っていた者も毛利領へ退散した、という。	四つうね (備中93) 四ツ畝城跡 鷹か城 (番号なし 高城跡) 虎倉 (25虎倉城跡) 藤沢と中山 (17藤沢城跡)	下土井村庄屋土井六郎兵衛(話者)	天正八年(江戸時代前期)	1580年(17世紀後半)	33・41
56	桂炭円覚書	福山は敵の方より差出たる山にて、しかも此方より渡り六かしき小川候、彼是以て然るべからずとて、河よりこなたに勝山と申す山を城に仰せ付けられ、五月三日に桂源右衛門尉、赤川次郎左衛門尉、岡惣左衛門差籠められ候。備中三村家の者に竹野井惣左衛門尉と申す者相副へられ候。さ候て輝元様、隆景様は五月五日に松山へ御打納め成され候	天正八年(1580)。毛利氏にとって福山城は、地形的に敵方から差し出た山にあり、しかも毛利側から渡りにくい小川(宇甘川)に隔てられた地点にある。これは拠点としてよくないという話になり、川より毛利氏勢力圏側にある勝山という山に築城するよう毛利輝元より命が下った。五月三日には桂元盛(源右衛門尉。この記録の記主)・赤川元之(次郎左衛門尉)・岡元良(惣左衛門)および備中三村氏の家臣竹井直定(惣左衛門尉)が、勝山城に城番として配置された。その後五月五日に、輝元・隆景は松山城へ戻った、という。	福山 (19福山城跡) 勝山と申す山 (15勝山城跡) 松山 (備中158) 備中松山城跡)	桂元盛(熈円)	天正八年(元和八年)	1580年(1622年)	41・73
57	桂炭円覚書	伊賀左衛門尉は直家智にて候。(中略) 然ば左衛門尉家頼の年寄に河原四郎右衛門尉と申す者を直家より頼み候て、果し候ずる内証に候。四郎右衛門尉、直家に同心仕り、馬の血を取り候とて左衛門尉を四郎右衛門所へ呼びおろし候。是は小倉の山下に居り候。振舞を仕るとて毒をかひ、則ち翌日左衛門尉相果て候。	天正九年(1581年)。伊賀久隆(左衛門尉)は宇喜多家の婿だった。直家は伊賀氏家臣で宿老を務めていた河原四郎右衛門尉に対し、久隆を殺害するよう依頼した。河原氏は直家に同心し、虎倉城の麓にあった自分の屋敷に「馬の血を取る」といって伊賀久隆を招待した。そこで食べ物を振る舞うとみせかけて毒を盛ったので、翌日久隆は死亡してしまっ、という。	小倉 (25虎倉城跡)	桂元盛(熈円)	天正九年(元和八年)	1581年(1622年)	41・73

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
58	虎倉物語／類纂虎倉物語	それより《割註：金川落城以後》十二年程後に、伊賀殿俄に御煩ひ被成、伊賀与三郎殿岡山に御座候所に飛脚参り候。(中略)馬取も付不申虎倉へ御乗込被成、惣門うたせ番衆御付被成候。其跡より追付け宇喜多源吾殿入五十程御つれ被成、伊賀与三郎殿を追懸惣門まで御出被成候。門番申様、きびしき法度にて内へ人を入れ不申候間、是より御歸り候へと申候。伊賀殿は其時御死去にて御座候。但毒にて御果候由申候	金川落城から数えて十二年ほど後、伊賀久隆が突然病気になる、岡山城下に住まっていた久隆の子与三郎家久のもとに飛脚がやってきた。家久は馬取りも従えずに急いで虎倉城へ乗り込み、惣門を閉じ番衆を付けて守らせた。家久を追跡してきた宇喜多源吾が、虎倉城の惣門まで到着したが、門番は「家久からの厳命で城内へ人を入れるなどのことなので、ここから帰ってくれ」と言っており、源吾を通さなかった。この時、すでに伊賀久隆は死去していたが、毒死したとの噂だった、という。	岡山 (180岡山城跡) 虎倉 (25虎倉城跡)	虎倉村又兵衛	天正九年(寛文元年九月二十八日)	1581年(1661年)	33・41
59	氏名不詳某覚書／花房家記事	其後みや山之外一城も無御座候故、てさきみや山ばかりもち候ても不人〔入カ〕事二而ひきとり候へ直家被申越候、三年らうしやう仕重々ひきとり候へ直家岡山より被申付而、日中二ひきとり岡山へ罷越し、らつきよ仕候つたへの城ぬしとも々々市彈正・大森伝右衛門兩人ハけつしよ被仕候、一人ハせいばい仕、知行共我々被下、則同めう二被仕候	天正九年(1581年)。その後、宇喜多方の城は宮山城を残して一つもなくなってしまった。出先の宮山城だけを維持していても意味がないので退却しなさい、と覚書の記主のところへ宇喜多直家から命令がきた。三年間籠城を続けたものの、重ねて兵を引くよう直家から指示があったので、日中に城から退却し岡山城へ向かった。毛利氏に攻め落とされた伝の城の城主(市彈正・大森伝右衛門)は、直家によって所領没収または成敗の処分となった。直家は宮山城を長く守った覚書の記主に報いるため、彼らの遺領と「宇喜多」姓を与えた、という。	みや山 (〈美作56〉宮山城跡) 岡山 (180岡山城跡) つたへの城	(宮山城番の某)※ 額田九郎兵衛カ	天正九年(寛永十八年以前カ)	1581年(1641年以前?)	41
60	虎倉物語／類纂虎倉物語	それより伊賀与三郎殿と直家様と不通に被成候。其間に毛利殿へ様子被仰候て、直家様と手切に候。備中の中高田村と虎倉の境忍びと申城に、岡山より岡野合介殿を御置被成候。是へ毛利殿御出にて、虎倉の内宿ノ山に御陣御すゑ、忍びを御攻め被成候。其時伊賀与三郎殿は、勝尾山の上に岡山の押へに御座候。伊賀殿より金川へ夜打一兩度打せられ、首をば毛利殿へ被遣候。六十日程御攻候て合介殿に腹切らせ、毛利殿も御引取被成候。伊賀与三郎殿もそのまゝ下へ御のき被成候《割註：寛文元年の丑年七十九歳に成申候》	伊賀久隆の死去以降、伊賀家久(与三郎。久隆の子)は宇喜多直家と不仲になり、その間に毛利氏から誘いがあって直家と手切れになった。そのころ備中国中高田村と虎倉との境に忍山という城があり、岡山城の宇喜多氏が岡剛助(岡野合介)を配置して守らせていた。これを攻めるため毛利軍が出陣し、虎倉のうち宿の山に陣所を設けて忍山城を攻撃した。伊賀家久も勝尾山の上に陣取って岡山城からの援軍を押さえる役割を果たし、宇喜多方の金川城へ二度ほど夜討ちをかけ、討ち取った首を毛利氏に進上した。毛利氏は六十日ほどかけて忍山城を攻め岡剛助を切腹させると、引き上げていった。伊賀家久もそのまま「下」(中国地方西部。毛利領)へ去った。これは寛文元年(1661年)丑の年から七十九年前のことである、という。	忍ひと申城 (〈備中327〉忍山城跡) 岡山 (180岡山城跡) 虎倉の内宿の山 (39本陣山城跡カ) 勝尾山 (40勝尾山城跡カ) 金川 (43金川城跡)	虎倉村又兵衛	天正九年(寛文元年九月二十八日)	1581年(1661年)	33
61	乃美宗勝感状陣所合戦場付立写／『閩閩録』卷十一之一 浦図書	(前略)御感状有之一備前児島蜂浜二而之合戦鍵之事 (後略)	乃美宗勝が備前国児島の八浜合戦で槍働きの手柄を挙げ、毛利氏から感状をもらったことを記録したもの。	蜂浜 (242両児山城跡)	(乃美宗勝カ)	天正十年(成立年未詳)	1582年(未詳)	110
62	桂炭岡覚書	備前の児島蜂浜に至て、宇喜多与太郎人跡にて取出し候。夫に就き元清様御人跡として御出で成され、則ち一戦に及ばれ候。与太郎を鉄砲にて馬より射落し候。其勢に備前衆を追崩され、与太郎頭をば元清様御被官水川と申す者取り申し候。是にて彼表異儀無く相静り申し候。此合戦の時、有地美作手柄鍵仕られ候。	備前国児島の八浜に、宇喜多元家(与太郎)が自ら大将となって出張ってきた。これに対し、穂田元清が自ら大将となって出陣し、すぐに一戦に及んだ。この戦いで毛利軍は、宇喜多元家を鉄砲で狙撃し馬から落馬させた。これに乗じて元清は宇喜多軍(備前衆)を敗走させ、元清の家臣水川氏が宇喜多元家の首を取った。この戦いの結果、児島地域の情勢は安定化した。この合戦のとき、毛利方の備後国衆有地美作守も槍働きで手柄を挙げたという。	蜂浜 (242両児山城跡)	桂元盛(笈丹)	天正十年(元和八年)	1582年(1622年)	73

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
63	馬場十郎右衛門 奉公書 / 『吉備温故秘録』巻之八十四 干城九	児島八浜合戦直家死去之後、宇喜多七郎兵衛忠家子息与太郎大將として戸川市【平カ】右衛門・岡平七【内カ】・重介も同罷立候。	岡山藩士馬場十郎右衛門が岡山藩に提出した奉公書。十郎右衛門の曾祖父馬場家職の覚書とされる記録に基づくとされる。児島八浜合戦は宇喜多直家死後の出来事で、宇喜多忠家(七郎兵衛)の子息与太郎を大將として戸川秀安・岡家利・馬場家職(重介)らが出陣したという。	八浜 (242両見山城跡)	馬場十郎右衛門	天正十年(貞享年間)	1582年(1684~1688年)	34・137
64	虫明又八奉公書 / 『吉備温故秘録』巻之八十四 干城一三	五八、虫明市内。浦上遠江守宗景に罷在、其節備前津高郡辛川之城領り、知行七百貫領知仕候。其後宇喜多直家に相隨、右之通領知仕候。安芸毛利殿と児島八浜にて宇喜多直家養子宇喜多与太郎元家と一所に、市内並世伴近内父子共打死仕候。(後略)	岡山藩家臣虫明又八が主家に提出した奉公書。又八の曾祖父虫明市内は、浦上宗景に仕え、備前国津高郡辛川城を預かり、知行700貫を領有していたという。宇喜多氏が児島八浜で安芸毛利氏と対戦した際、市内および子息近内は宇喜多元家(直家養子)と一緒に討死した、という。	辛川之城 (48辛川城跡) 八浜 (242両見山城跡)	虫明又八	戦国後期(貞享年間)	16世紀後半(1684~1688年)	34
65	虫明又八奉公書 / 『吉備温故秘録』巻之八十四 干城一三	五九、虫明九平次。父市内家を継申苦に候得共、其節幼稚にて、辛川之城は毛利殿と堺目之城故、九平次は市内船屋敷津高郡中村へ引退罷在候。(後略)	同上。又八の祖父虫明九平次は、父市内が討死した際まだ幼児だった。そのため、九平次は毛利氏との境目の城だった辛川城を継承することができず、津高郡中村にあった父の「船屋敷」(未詳)に身を退いた、という。	辛川之城 (48辛川城跡)	虫明又八	天正十年(貞享年間)	1582年(1684~1688年)	34
66	信長公記 卷第十五	三月十七日、御次公、御具足初めにて、羽柴筑前守秀吉御伴仕り、備前の児嶋に御敵城一所相残り候、此表相働き手遣ひの由、注進これあり。	三月十七日に、羽柴御次丸(信長の子、秀吉の養子)の具足初めを祝うため、羽柴秀吉が供をして備前国児島に残っている敵城一ヶ所を攻めた。そのことについて、秀吉から信長に報告があった、という。	敵城一所 (240常山城跡カ)	太田牛一	天正十年三月十七日(慶長十五年ごろ)	1582年(1610年ごろ)	26
67	身自鏡	廿七の歳、件の宇喜田直家は死たりけれ共、其子の秀家は、羽柴筑前守の縁者に成ければ、上勢を引入、備中の諸所へ行を生ず、されば、中国勢も不残打立、先備前の児島蜂浜と云城を、備前より持たりけるを取詰けれ共、備中の所々騒動しける間、先児島をば差捨、猿懸・甲山へ打寄せて、備前境の高松・賀茂・日端・庭瀬・今保・松島・加室・鍛冶屋山・伊保山・八万山、右十ヶ所の城に人数差籠、上勢の行を窺、待懸て候ける、羽筑岡山に下着して、先今保の渡口に大城を構へ、其後十万余騎の勢にて、経山・かな床山兩城を責落して、高松の城を十重廿重に取巻、大塘を築て水責にせられける	玉木吉保(毛利輝元家臣)が27歳のとき、例の宇喜多直家は死去したが、その子秀家は羽柴筑前守秀吉の縁者になっていたのて、上方の軍勢を引き入れて備中国のあちこちに攻め込んできた。そのため、毛利氏の率いる中国勢も残らず出陣し、まず備前国児島の蜂浜(八浜)という宇喜多氏(備前)側が持っていた城を包囲したけれども、備中国内の所々があわただしくなってきたので、毛利氏はとりあえず児島を捨てて猿掛城・甲山城(幸山城)に集まり、備前との国境に当たる高松・賀茂・日端(日幡)・庭瀬・今保・松島・加室(冠)・鍛冶屋山・伊保山・八万山(八幡山)といった10余りの城に軍勢を籠もらせ、上方勢の出方をうかがって待ち構えていた。羽柴筑前守秀吉(略して羽筑)は岡山城に到着すると、まず今保の渡口に大きな城を造り、その後10万余りの軍勢でもって経山城・かな床山城(鍛冶屋山城の異称)を攻め落とし、高松城を何重にも包圍して、大きな堤防を築いて水攻めにした。	蜂浜と云城 (242両見山城跡) 猿懸 (備中227) 猿掛城跡 甲山 (備中414) 幸山城跡 高松の城 (備中393) 備中高松城跡 賀茂 (備中427) 加茂城跡 日端 (備中431) 日畑城跡 庭瀬 (備中402) 庭瀬城跡 今保 (279今保城) 今保の渡口に大城 松島 (備中436) 松島城跡・番号なし 射越山城跡 加室 (備中373) 冠山城跡 鍛冶屋山・かな床山 (備中354) 鍛冶山城跡 伊保山 (場所未詳) 八万山 (備中390) 窪木八幡山城跡 岡山 (180岡山城跡) 経山 (備中345) 経山城跡	玉木吉保	天正十年(元和三年)	1582年(1617年)	72
68	虎倉物語 / 類纂虎倉物語	伊賀与三郎殿御のきあと、秀吉公より蜂須賀彦右衛門殿・小寺官兵衛殿御兩人御越候て、御仕置被成、長船越中殿へ御渡し被成候に付、越中殿は播磨のこま山の城より虎倉へ御移り被成候。本丸には弟の長船源五郎殿、其外宇瀬殿・大田原殿・石原殿あまた御座候。	伊賀家久(与三郎)が虎倉城から退去した後、羽柴秀吉のもとから蜂須賀正勝(彦右衛門)・小寺孝高(官兵衛)が派遣されてきて置きがなされ、虎倉城は宇喜多氏の宿老長船貞親(越中殿)に引き渡されることになった。そこで貞親は播磨国の駒山城から虎倉城へ移転した。本丸は弟の長船源五郎に守らせ、その他に宇瀬・大田原・石原氏ら長船氏の与力・家来らがたくさん入城した、という。	虎倉 (25虎倉城跡)	虎倉村又兵衛	天正十三年ごろ(寛文元年九月二十八日)	1585年ごろ(1661年)	33

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
69	馬場十郎右衛門奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十千城九	宇喜多中納言いまだ宰相之時、大坂より岡山へ帰城	岡山藩士馬場十郎右衛門が岡山藩に提出した奉公書。十郎右衛門の曾祖父馬場家職の覚書とされる記録に基づくこととされる。宇喜多秀家がまだ宰相(参議)だったころ、大坂から岡山へ帰城したことがあった、という。	岡山 (180岡山城跡)	馬場十郎右衛門	天正十五年～文禄三年(貞享年間)	1587～1594年ごろ(1684～1688年)	34
70	虎倉物語／類纂虎倉物語	それより九年後の閏正月五日に、越中殿岡山より虎倉の城へ御座候。(中略)六日の朝のふるまひ石原殿に御座候。(中略)越中殿御機嫌能くゆるゝと御座候処に、越中殿を石原新太郎殿御打被成候。(中略)越中殿御手浅くて引立、おもての椽に御座候処を、をいの石原三四郎殿鉄炮にて御打被成、やがて御死去被成候。	天正十九年の閏正月五日、長船貞親(越中殿)は岡山から虎倉城へやってきた。翌日朝の饗応役は石原新太郎が務めた。貞親が機嫌よくゆるゆると過ごしていたところ、石原新太郎が貞親を殺害しようとした。貞親は浅手だったので家来たちが引き立て、表の縁側へ連れ出したところ、石原新太郎の甥三四郎が鉄砲で貞親を狙撃したため、ほどなく貞親は死去してしまっ、という。	虎倉の城 (25虎倉城跡)	虎倉村又兵衛	天正十九年閏正月五日(寛文元年九月二十八日)	1591年(1661年)	33
71	中島本政覚書／西島氏文書	関ヶ原〔○異本：之〕時、岡山籠城二成申時、作州ヨリ十八里かけ付候得共、はや戸川肥後守殿・岡越前守殿・花房助兵衛殿・坂崎左京殿御取詰候、越前守殿内池田加右衛門と申もの私〔異本：者頼〕忍入籠城仕候事、小瀬助左衛門殿被成候、其子細御親父中務殿籠城被成候、和談二成申時、私事花房助兵衛殿御引取被成候故、其時之様子花房平吉殿御家中二能存知たるもの多御座候	関ヶ原で宇喜多氏が敗戦した際、岡山城は籠城の態勢になり、中島本政も美作国から岡山城へ駆けつけた。しかし、早くも岡山城は、東軍に属していた宇喜多旧臣の戸川達安(肥後守)・岡越前守・花房職之(助兵衛)・坂崎正勝(左京亮)に包囲されていた。本政は、岡越前守の家臣池田加右衛門を頼って何とか城内に忍び入り、籠城に参加した。その時、小瀬中務正も一緒に籠城していたので、その子助左衛門が様子をよく知っている、という。また、和談開城後に本政は花房職之に保護されたので、花房家中にもその時の様子を知っている者がたくさんいる、という。	岡山 (180岡山城跡)	中島本政	慶長五年(元和六年以降寛永八年以前) ※成立年は史料中にみえる花房平吉職利の家督相続年および池田右京政綱の没年から推定	1600年(1620～1631年)	41
72	蟹江次左衛門奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』蟹江新之丞	一親彦右衛門(中略)中納言様備前江御入国被成候而、松野主馬二被仰付、当国小倉之城ヲ御預ケ被成候二付、組中何茂一所二参候時、彦右衛門ニハ鉄砲廿挺長柄廿本被預、城代仕候、其砌私ニも御知行百五十拾石之御折紙被下候、然所二、松野主馬不慮之儀候而立退被成候付、一所二退申候、	岡山藩士蟹江次左衛門が、父親の彦右衛門と自分が小早川秀秋に仕えていた頃の履歴を記録したものである。関ヶ原合戦後に備前国に入国した小早川秀秋(中納言様)は、重臣松野重元(主馬)に虎倉城(小倉之城)を預けた。松野氏の組に所属していた蟹江彦右衛門は、一緒に虎倉城へ赴くことになり、鉄砲20挺・長柄槍20本を預けられ、虎倉城代を勤めることになった。そのとき、この記録の筆者蟹江次左衛門も、秀秋から知行150石を給与する旨の折紙をもらったという。しかし、組頭で虎倉城主の松野主馬が小早川家中の不慮の事件によって退去してしまったので、蟹江父子も一緒に小早川家を去った、という。	小倉之城 (25虎倉城跡)	蟹江次左衛門	慶長六～七年(寛永二十一年)	1601～1602年(1644年)	43
73	池田長久奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫	一慶長八年卯備前国 忠継公雖為御拜領、御幼稚故 武蔵守様代知被成、其節下津井ハ西国より之手先に候間、城執立、橋左衛門差置尤之由、権現様御内意二付、城執立申様に被 仰付、児島之内三ヶ所残都合知高三万二千石に被成被下之由(後略)	岡山藩家老池田長久が、自身の履歴とともに祖父池田長政(橋左衛門・河内守)の事績を岡山藩に申告した記録。慶長八年、備前国は池田忠継の領地となったが、忠継はまだ幼年だったので、忠継の兄池田利隆(武蔵守)が政務を代行した。そのとき、下津井は西国方面の最前線に当たる要地なので城を築いて池田長政に守らせるように、と徳川家康から内命があった。そこで長政は池田利隆より下津井に築城するよう命じられ、児島郡において3万2千石の所領を与えられた、という。	城 (266下津井城跡)	池田大学(長久)	慶長八年(元禄九年)	1603年()	20

史料番号	史料名	該当部分原文	内容	城館名 (城館番号・城館跡名)	作成者名	年月日 (作成年代)	西暦 (作成年代)	文献番号
74	熊谷源太兵衛奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫『家中諸士家譜五音寄』熊谷源太兵衛	一私親慶長十年正月y御普請奉行被 仰付候、同年暮y米百俵宛拝領仕候、一備前下津井・金川・淡路之由良三ヶ所之御城石垣御普請相勤申候、	岡山藩士熊谷源太兵衛が、父親の熊谷十左衛門の履歴を記録した。十左衛門は慶長十年正月から池田利隆によって普請奉行に任命され、その役料として同年春から米100俵を支給されるようになった。具体的には、備前国下津井城・金川城・淡路国由良城の石垣普請を担当した、という。	下津井 (266下津井城跡) 金川 (43金川城跡)	熊谷源太兵衛	慶長十～十九年ごろ (寛文九年)	1605～1614年ごろ (1669年)	43
75	船戸助九郎奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十二 干城一一	船戸帯刀。(中略) 慶長八年、武蔵守様備前へ被為入候時、児島へ御検地に被遣候。翌年、御知行割之時、右播磨宰相様とり被下候御扶持米を高に直し百五十石之御折紙、十一月十一日之日附にて頂戴仕候。金川之城御取立之時御奉行仕候。下津井城御取立候時も、御奉行仕候。	岡山藩士船戸助九郎が主家に提出した奉公書。助九郎の養父船戸帯刀は、慶長八年池田利隆が備前国へ入部した際、児島郡の検地奉行を勤め、翌年の知行割の際に150石の知行を給与する旨の折紙を慶長九年十一月十一日付けで拝領した。池田利隆が金川城・下津井城を支城として取り立てた際は、両城の普請奉行を務めた、という。	金川之城 (43金川城跡) 下津井城 (266下津井城跡)	船戸助九郎	慶長九～十八年ごろ (貞享年間)	1604～1613年ごろ (1684～1688年)	34
76	池田長久奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫	一慶長十一年午江戸雖御普請被仰付、河内儀者下津井城成就不仕故、役人御用捨之由、下津井普請之内 武蔵守様二度 御見廻被遣之由	岡山藩家老池田長久が、自身の履歴とともに祖父池田長政(橘左衛門・河内守)の事績を岡山藩に申告した記録。慶長十一年、幕府から池田氏に対し江戸城手伝い普請の命令が下ったが、下津井城の建設が完了していないとの理由で、池田長政(河内)は江戸普請の役負担を免除された、という。また、長政による下津井城普請の最中に、池田利隆(武蔵守)が二、三度ほど工事の様子を見廻りに来た、という。	下津井城 (266下津井城跡)	池田大学(長久)	慶長十一年 (元禄九年)	1606年 (1696年)	20
77	池田長久奉公書／岡山大学附属図書館池田家文庫	一河内相果候時ハ新吉二歳之時故、下津井ハ西国ノ手先、播磨宰相様別而無御心元被 思召所故、河内家来之者播州佐用江所替被 仰付、(中略) 河内知高三万二千石ノ内一万石者城附と被仰、新吉幼稚故被減、前之出羽守ニ被増遣下津井へ被遣之由	同上。慶長十二年に池田長政(河内)が亡くなった時、遺児の新吉(後の池田長明)はまだ二歳だった。西国の最前線である下津井を幼児に預けることに不安を感じた池田輝政(播磨宰相)は、池田長政の家中へ播磨国佐用への所領替えを命じた。池田長政の知行は3万2千石だったが、そのうち1万石は「城附」=下津井城在番の役料という名目だったので差し引かれ、新たに下津井城主を拜命した池田由之(前の出羽守)にその1万石が与えられた、という。	下津井 (266下津井城跡)	池田大学(長久)	慶長十二～十四年 (元禄九年)	1607～9年 (1696年)	20
78	諸士家譜抜書池田主水／岡山大学附属図書館池田家文庫 ※倉敷市総務課歴史資料整備室所蔵徳山家文書に原本控あり	一祖父池田九郎兵衛 (中略) 同十四年二月廿六日、從 輝直様老万石御加増被下、都合三万二千石ニ而播州平福y備前児島下津井城へ罷越申候、此節以 御意、名を出羽与替り申候、同十八年下津井y播州明石へ所替仕候由、(後略)	岡山藩家老の池田由孝(主水)が自身の履歴とともに祖父池田由之(九郎兵衛、出羽守)の事績を岡山藩に申告した記録の抜き書き。慶長十四年二月二十六日、それまで播磨国平福の利神城主だった池田由之は、池田利隆(当時「輝直」を名乗る)から1万石の加増を受け、合計3万2千石の領主となって播磨国から備前国児島の下津井城へ入った。この時から由之は、池田利隆の命により「出羽守」を名乗るようになった。その後慶長十八年になると、由之は下津井から播磨国明石城へ転出した、という。	下津井城 (266下津井城跡)	池田主水(由孝)	慶長十四～十八年 (貞享三年) ※成立年は倉敷市所蔵の原本控に基づく。	1609～1613年ごろ (1686年)	149
79	横山三郎大夫奉公書／『吉備温故秘録』巻之八十五 干城一四	横山清左衛門。《割注；後は、横山左馬之助と申。》毛利秀元に奉公仕、伊勢之津合戦之節、津之城一番乗仕、(中略) 其後長岡三斎に奉公仕、其後暇申浪人之処、池田出羽下津井に居申節、呼出二百石給候。	岡山藩士横山三郎大夫が主家に提出した奉公書。三郎大夫の先祖横山清左衛門(左馬之助)は、毛利秀元に仕えて慶長五年(1600)の伊勢安濃津城攻めで一番乗りの手柄を挙げた。その後細川忠興(長岡三斎)に仕えたものの、また細川家を離れ浪人していたところ、池田由之(出羽守)が下津井城に居たところ、由之に呼び出されて知行200石を与えられた、という。	下津井 (266下津井城跡)	横山三郎大夫	慶長十四～十八年ごろ (貞享年間)	1609～1613年ごろ (1684～1688年)	34

・【城館名】欄の数字は、一覧表と一致している。また、〈備中○〉〈美作○〉は、備中国、美作国にある城館である。

表7 引用文献一覧表

番号	文献名
1	有朋堂文庫
2	『宇喜多家史談会会報』第2号
3	榎原雅治「山伏が棟別銭を集めた話」(『日本中世地域社会の構造』)
4	『愛媛県史』資料編古代・中世
5	大分県先哲叢書『大友宗麟』資料集第4巻
6	『大田区史』資料編寺社2
7	『岡山県古文書集』第1輯
8	『岡山県古文書集』第2輯
9	『岡山県古文書集』第3輯
10	『岡山県古文書集』第4輯
11	『岡山県史』家わけ史料
12	『岡山県史』編年史料
13	『岡山県上道郡古都村史』
14	岡山県地方史叢書8『黄薇古簡集』
15	『岡山県通史』下編
16	『岡山県立博物館蔵品目録』
17	『岡山市指定重要文化財安住院本堂保存修理報告書』
18	岡山県立博物館特別展図録『歴史を彩る人々ー岡山の古代・中世ー』
19	『岡山のアーカイブズ』4
20	『岡山藩奉公書 池田伊賀(一〜三)上』
21	『長船町史』史料編(上)考古古代中世
22	『長船町史』刀剣編史料
23	『小田郡誌』上巻
24	『改修赤磐郡誌』
25	『桂宮本叢書』第12巻私家集12
26	角川日本古典文庫『信長公記』
27	『鎌倉遺文』古文書編第32巻
28	『鴨方町史』史料編
29	神原文庫古文書展『中世の武家文書』
30	岸田裕之「新出湯浅家文書について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第28集)
31	岸田裕之「浦上政宗支配下の備前国衆と鳥取荘の遠藤氏」(『広島大学文学部紀要』第55巻特輯号2)
32	岸田裕之「小瀬水 平松家のこと 付、「新出沼元家文書」の紹介と中世河川水運の視座」(『熊山町史調査報告』4)
33	『吉備群書集成』第参輯
34	『吉備群書集成』第六輯
35	『吉備群書集成』第8輯
36	『吉備考古』第25号
37	『吉備考古』第26号
38	『吉備考古』第27号
39	『吉備津彦神社史料』文書篇
40	『記録御用書本 古文書』上巻
41	『久世町史』資料編第1巻編年資料
42	『熊山町史』参考資料編
43	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音』1
44	倉地克直『岡山藩家中諸士家譜五音寄』3
45	倉地克直「朝鮮通信使のみた牛窓・下津井(1)」(『岡山地方史研究』第66号)
46	倉地克直「朝鮮通信使のみた牛窓・下津井(2)」(『岡山地方史研究』第67号)
47	倉地克直「朝鮮通信使のみた牛窓・下津井(3)」(『岡山地方史研究』第68号)
48	『黒田家文書』第1巻
49	『群書類従』第18輯
50	『群書類従』第二〇輯
51	『群書類従』第二十一輯合戦部
52	国史大系32
53	国民文庫本
54	『国立国会図書館蔵貴重書解題』第6巻
55	小山金波『赤松政則』
56	白峰旬「城郭修補絵図諸元比較一覧表(改訂版)」(『城館研究論集』発刊準備号)
57	史料纂集『朽木家文書』1
58	史料纂集『舜日記』第2

番号	文献名
59	『新熊本市史』史料編第2巻古代・中世
60	『新修倉敷市史』2古代・中世
61	『新修倉敷市史』9史料古代・中世・近世(上)
62	『新鳥取県史』資料編古代中世1古文書編下
63	『瀬戸町史料集』
64	『総社市史』古代中世史料編
65	『増訂織田信長文書の研究』補遺・索引
66	増補統史料大成23『蔭涼軒日録』3
67	増補統史料大成25『蔭涼軒日録』5
68	増補統史料大成37『大乘院寺社雑事記』12
69	『統群書類従』九上
70	統史料大成『多聞院日記』4
71	『太子町史』第3巻史料編1
72	第二期戦国史料叢書7『中国史料集』
73	第二期戦国史料叢書9『毛利史料集』
74	『大日本古文書』家わけ8-3
75	『大日本古文書』家わけ9-1
76	『大日本古文書』家わけ11-1
77	『大日本古文書』家わけ17-1
78	『大日本古文書』家わけ21-2
79	『大日本古文書』家わけ22-1
80	『大日本史料』6-3
81	『大日本史料』6-13
82	『大日本史料』6-14
83	『大日本史料』6-17
84	『大日本史料』8-2
85	『大日本史料』8-17
86	『大日本史料』9-1
87	『大日本史料』9-8
88	『大日本史料』9-9
89	『大日本史料』9-10
90	『大日本史料』9-11
91	『大日本史料』9-12
92	『大日本史料』9-16
93	『大日本史料』10-8
94	『大日本史料』10-18
95	『大日本史料』11-1
96	『大日本史料』11-9
97	『大日本史料』11-14
98	大日本古記録
99	館島誠・小林一岳・飯野秀世「好島荘調査報告(一)」/季刊『中世の東国』秋冬8号
100	『中世日記紀行文集全評訳集成』第7巻
101	『東作誌』
102	『言継卿記』第2巻
103	『豊臣秀吉文書集』1
104	『南北朝遺文』九州編1
105	『新見市史』史料編
106	日本古典文学大系32
107	日本古典文学大系34『太平記』一
108	日本古典文学大系35『太平記』二
109	日本古典文学大系36『太平記』三
110	『萩藩閥閥録』第1巻
111	『萩藩閥閥録』第2巻
112	『萩藩閥閥録』第3巻
113	『萩藩閥閥録』第4巻
114	『萩藩閥閥録』遺漏
115	柏原及也『鴨重兵衛と鴨庄』
116	畑和良「浦上宗景権力の形成過程」(『岡山地方史研究』第100号)
117	畑和良「浦上村宗と守護権力」(『岡山地方史研究』第108号)
118	畑和良「織田・毛利備中戦役と城館群」(『愛城研報告』第12号)
119	畑和良「備前国天神山城周辺の城館群」(『愛城研報告』第19号)
120	畑和良「備前国における中世山城の縄張り」と年代観」(『愛城研報告』第22号)
121	『播磨国鶴荘資料』

番号	文献名
122	『伴信友全集』第3
123	『備前記』全
124	『兵庫県史』史料編中世7
125	『兵庫県史』史料編中世9 古代補遺
126	『広島県史』古代中世資料編Ⅱ
127	『広島県史』古代中世資料編Ⅲ
128	『広島県史』古代中世資料編Ⅳ
129	『広島県史』古代中世資料編Ⅴ
130	『不受不施遺芳』
131	『防長風土注進案』第10巻三田尻宰判下
132	本間薫山「鑑刃日々抄」(『刀剣美術』第278号)
133	『御津町史』
134	光成準治「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」(『倉敷の歴史』第18号)
135	光成準治「室家資料と中・近世移行期の間層」(『岡山県立記録資料館紀要』第3号)
136	森俊弘「岡山藩土馬場家の宇喜多氏関連伝承について」(『岡山地方史研究』第99号)
137	森俊弘「年次三月四日付け羽紫秀吉書状をめぐる」(『岡山地方史研究』第100号)
138	森俊弘「宇喜多直家の権力形態とその形成過程」(『岡山地方史研究』第109号)
139	森俊弘「岡山城とその城下町の形成過程」(『岡山地方史研究』第118号)
140	『八坂神社文書』下
141	『山口県史』史料編中世2
142	『山口県史』史料編中世3
143	『山口県史』史料編中世4
144	山下晃啓「天正後期の陣城について」(『賤ヶ岳合戦城郭群報告書』)
145	余語敏男『宗碩と地方連歌』
146	横田孝雄「代付銘のある未備前刀について」(『刀剣美術』第470号)
147	横田孝雄『所持銘のある未古刀』
148	横山定「亀山家伝来の美作国高野郷中嶋氏受給文書」(『倉敷の歴史』第13号)
149	『利神城跡等調査報告書』
150	『和気郡史』資料編上巻

第5章 城館関連地名表

凡例

1 地名表の作成について

- (1) 本表は、『角川日本地名大辞典 33 岡山県』角川書店（1989）や自治体誌等に収載された小字名から、城館に関連する地名を抽出し作成した。
- (2) 城館に関連する地名については、『城館調査ハンドブック』新人物往来社（1993）を参考とした。

2 地名表の記載内容について

- (1) 本表には、市町名、郡名、大字名、城館関連地名（小字名）、周辺城館等（大字地内に所在する城館跡）を記載した。なお、大字名に残る城館関連地名（小字名）の場所に必ず表記している城館が所存していたとは限らない。
- (2) 市町名は、合併前の名称が異なる場合は括弧を付して記した。また郡名は、新都区編成時（明治11年）の名称を用いた。

表 8 城館関連地名表

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
津高	美咲町	江与味	殿畑 構谷 城ノ後 古やしき 池ノ先古屋しき	3 江与味城跡 4 祇園山城跡
津高	岡山市	御津河内	的場 土井ノ内 古屋敷 深貫古屋敷 屋敷下 家敷添 鍛冶屋敷 吹屋敷 城山城山下 市場 屋敷	44 徳倉城跡
津高	岡山市	御津虎倉	木戸 古屋敷 河城口 堀戸 上ノ城 上之城 屋敷 矢敷 中ノ城前 中ノ城 屋敷鼻 榊ヶ市 囲 下市場 市場 城坂 下城坂 上市場 城山 城	25 虎倉城跡 34 石原城跡 39 本陣山城跡 295 奥宿城跡 296 鼓田城跡 297 堤棚奥宿城跡
津高	岡山市	御津中泉	屋敷廻り 古屋敷 小川市外 小川市 屋敷田 屋敷西 屋敷西 垣ノ内 的場畑 鍛冶屋東 鍛冶屋 屋敷辺り ジョウヤマ 城山	
津高	岡山市	御津紙工	古屋敷 屋敷下モ 小屋 小屋ノ西 台屋敷 門ノ下 土井上 土井口 中土井 土井ノ西 酒屋ヤシキ 大屋敷 市場 土井鼻 堂屋敷 馬場 馬場尻	33 久保城跡 34 石原城跡 35 城ノ段跡 36 天満城跡 38 金高城跡
津高	岡山市	御津勝尾	馬ヶ屋敷 井戸上 井戸坂	40 勝尾山城跡 備中 546 鎌倉山砦跡
津高	岡山市	御津川高	古屋敷 屋敷廻り 先屋敷 屋敷裏 柿ノ内 殿山下 万屋敷	
津高	岡山市	建部町建部上	城ヶ鼻	
津高	岡山市	建部町田地子	下勘城 勘城 土井ノ内 城代 城台 的場	26 中山城跡
津高	岡山市	建部町富沢	城山	27 荒神山城跡 28 能美城跡 29 筒井城跡 30 茶臼山城跡
津高	岡山市	建部町市場	北構 構 門田 城ノ段	31 市場構遺跡
津高	岡山市	建部町桜	矢佐古 馬場上 縄手	32 沼山城跡 299 桜村古城跡
津高	岡山市	建部町中田	堀池	
津高	岡山市	御津高津	殿屋敷 堀込岩 大溝 古屋敷 屋敷廻り 小屋下 土井元 堀ノ内 バウ川 市 土井下 プフ川市	37 菅館砦跡 298 大谷城砦跡
津高	岡山市	建部町西原	殿市 城ヶ谷 箕地山	41 保木城跡
津高	岡山市	建部町品田	縄手 浜射場 土井辺 土井辺り	
津高	岡山市	御津鹿瀬	城ヶ谷 城平 原市 ゲンヤシキ 原市堤内 古屋敷 前齊ノ市 西屋古屋敷	42 鹿瀬城跡
津高	岡山市	御津金川	広馬場 山屋敷 城山	43 金川城跡
津高	岡山市	御津草生	矢谷 屋敷裏 下市 下ノ市 古屋敷 堀ノ上 土井内 土井内堤根 城山 小屋谷 小屋ヶ谷口	43 金川城跡
津高	岡山市	御津下田	殿居畑 堀次	43 金川城跡
津高	岡山市	野殿	堀江 城ノ内 下野殿 殿ノ前 城の前	179 野殿城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
津高	岡山市	今保	松田屋敷 中屋敷 土井後 大岡屋敷 後城 西屋敷 北梶ヶ野 東梶ヶ野 西梶ヶ野 南梶ヶ野 城	279 今保城跡 280 松田屋敷跡
津高	岡山市	久米	梶沼 宮馬場	
津高	岡山市	尾上	金堀	282 美濃権介佐重宅跡
津高	岡山市	西辛川	向土井 城前 城回り	48 辛川城跡 49 辛川城の根小屋 51 名称未定
津高	岡山市	辛川市場	白山	48 辛川城跡 50 小丸山城跡
津高	岡山市	大窪	上屋敷	52 大善城跡
津高	岡山市	芳賀	馬場ノ尾	
津高	岡山市	福谷	屋敷回り 城見谷	52 大善城跡
津高	岡山市	横尾	城ノ嶮 堀越	294 横尾城跡
津高	岡山市	今岡	出屋敷	53 山崎城跡
津高	岡山市	山崎	小屋ノ庄	
津高	岡山市	橋津	城ノ辻 城辻 城ノ辻下 城山 土井元	290 蜂矢城跡
津高	岡山市	首部	屋敷前	
津高	岡山市	中原	古屋敷 堀田 堀井	
津高	岡山市	富原	矢野城 矢城	290 蜂矢城跡
津高	岡山市	横井上	垣ヶ坪	283 名称未定
津高	岡山市	吉宗	馬屋敷	
津高	岡山市	菅野	的場谷 城山	285 菅野城跡
津高	岡山市	田原	土井ノ上 奥ヶ市 垣骨 圃池内 圃池	
津高	岡山市	三和	矢野坂 堀越 矢ノ坂	
津高	岡山市	日応寺	垣内	291 海野将監宅跡
津高	岡山市	高野	繩手井田 古屋敷 門前 門先 的場 堀田 堀切	286 鍋屋城跡
津高	岡山市	北野	門口 古屋敷 門口下 屋敷前 堀田 馬場 屋敷上 柿之内 門田 木戸本 木戸	
津高	岡山市	下牧	堀越 門ノ敷	284 下牧城跡
津高	岡山市	御津中牧	北ヶ市 屋敷前 寺屋敷 屋敷廻 屋敷ソマ 元屋敷 庄屋敷 屋敷添 屋敷西 屋敷裏 屋敷 屋敷西 屋敷後	
津高	岡山市	御津中山	門之前 馬場	
津高	岡山市	御津野々口	垣ノ内 馬場西 馬場 川市 屋敷内 屋敷 殿畑 古屋敷 屋敷ノ上 馬場田 堀名 小屋田 御郡屋敷 屋敷前	
津高	岡山市	御津吉尾	的場 垣内 垣ノ内 屋敷脇 殿谷 夏垣	
津高	岡山市	御津宇垣	殿西 屋敷畑 トウジガイチ 屋敷 古屋敷 殿坪 古屋敷辺り 大垣 門ノ前 宮ノ口屋敷辺り 屋敷裏 古屋敷辺り 屋敷辺	
赤坂	岡山市	建部町大田	要害之元 的場	57 白石城跡
赤坂	岡山市	建部町吉田	馬場尻 馬場ノ上 土手ノ内	
赤坂	岡山市	建部町土師方	城下 陣後	58 土師方城跡
赤坂	赤磐市	西勢実	上門 殿田 木戸 木戸向 木戸田	340 中山城跡
赤坂	赤磐市	小鎌	馬場 備国屋敷 井戸尻 古屋 堀川	59 石上古城跡
赤坂	赤磐市	合田	古屋敷 垣之内	
赤坂	赤磐市	周匝	内ノ土井 旧城址 大鼓丸 土井 土井尻 殿町 門林 古市場 市ヶ坪	54 茶白山城跡 55 大仙山城跡
赤坂	赤磐市	是里	中小屋 堀切シ 金堀 馬場 弓場札 元屋敷 梶屋	341 中山城跡
赤坂	赤磐市	滝山	古ドヒ トヒノ窪 梶屋 カジヤ カジヤ田	63 山鳥城跡
赤坂	赤磐市	黒本	隠小屋 木戸口 砂堀 荒堀 西ヶ市	56 頼の山城跡 326 黒媛城跡
赤坂	岡山市	御津石上	堀坂	321 大松山陣跡 325 吉田山城跡
赤坂	赤磐市	中山	古屋 古屋ノ上 古屋ノ下 小屋ノ谷 殿畑 市ノ奥 嘉市田 倉掛	
赤坂	赤磐市	塩木	土井成 真ヶ市 箱ヶ市 鍛冶屋 勘者	330 塩木城跡 360 飯山城跡
赤坂	赤磐市	戸津野	戸井ノ元 トイノ	
赤坂	赤磐市	中勢実	女城 木戸 常年古屋 棒ヶ市 大田ヶ市 花ヶ市	66 長坂城跡
赤坂	赤磐市	仁堀西	城山 金堀 馬場 馬場尻り 小馬場 門田 門天 鍛冶田	60 広戸城跡 61 宮内城跡 342 仁堀陣跡
赤坂	赤磐市	仁堀中	土井ノ内 土井 土井前 土井ヶ前 砂堀 鹿堀 門田 梶田 梶田札 鞍掛 倉掛 蔵掛	68 八幡山城跡 69 明田城跡 341 梅坂城跡 342 仁堀陣跡
赤坂	赤磐市	仁堀東	城山 構 堀窪 的場 馬場 馬塚 関合ヶ市 鎌ヶ市	67 徳近城跡 68 八幡山城跡 342 仁堀陣跡
赤坂	赤磐市	平山	土井ノ内 垣ノ内 下垣ノ内 堀切後 堀佐古 門天 古屋敷 竿ヶ市 室ヶ市 佐以ヶ市 西ヶ市	
赤坂	赤磐市	石上	トイノ本 小屋窪 堀坂 門前谷	59 石上古城跡 320 大松山城跡 325 吉田山城跡
赤坂	赤磐市	石	土井 土井の札 殿前 開ノ口 堀田 堀（馬洗場） 下木戸 戸市	
赤坂	赤磐市	八島田	戸井ノ前 堀切 上木戸 イヤガ市 以屋加市	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
赤坂	赤磐市	暮田	小屋ノ谷 古屋敷	
赤坂	岡山市	御津中畑	小屋	62 中畑城跡
赤坂	赤磐市	下仁保	土井ノ内 殿ノ後 殿田 馬場	331 辻ノ山陣跡 332 葛木氏居館跡
赤坂	赤磐市	上仁保	トイノ下 門の木 鉄甲	86 葛木城跡 87 上仁保城 96 高山城跡
赤坂	赤磐市	斗有	土肥ノ外	
赤坂	赤磐市	福田	土井ヶ前 土井尻 堀田 馬々添エ 門前 市ノ口	342 小原源次兵衛宅跡
赤坂	赤磐市	惣分	城山 城山下 城山東 小屋谷 堅の内 古屋敷 門田 馬場 車場 門口 福市 徳市	70 惣分城跡 71 坂辺城跡 333 古城跡
赤坂	赤磐市	坂辺	迫城 小屋が谷尻 古屋敷 馬々末 東門野前 坊が市	71 坂辺城跡 329 名称未定
赤坂	赤磐市	大屋	古屋	
赤坂	赤磐市	山手	四郎丸 堀切 ごう掘り 古屋敷 門下 門口下 駒谷 市人田	
赤坂	赤磐市	穂崎	馬場 馬渡り 市場	102 新田陣跡 344 龍王宮跡 345 龍官山跡 346 神宮山城跡
赤坂	岡山市	御津新庄	鍛冶屋谷 鍛冶屋谷下地 カノジヤ谷 屋敷上 屋敷ノ下 屋敷前 垣ノ内 札ノ堀 小屋谷 城ノ下 城 殿奥 屋敷門口 屋敷前	72 松撫城跡 75 西谷城跡
赤坂	岡山市	御津国ヶ原	小屋谷口 小屋谷 土井 古屋敷 山ヶ市	321 国ヶ原城跡
赤坂	岡山市	御津平岡西	鍛冶久	73 地頭城跡 74 矢知城跡 322 松田屋敷跡 323 大烏帽子城跡
赤坂	岡山市	御津矢知	鍛冶屋 堀坂 土井鼻	74 矢知城跡 324 古城山跡・城址 335 岩鼻城跡
赤坂	岡山市	御津矢原	中野市 城ヶ鼻 土井ヶ向 御城口 御城	76 熊谷城跡 77 寺山城跡
赤坂	赤磐市	由津里	小屋谷 大手 王手前	80 名称未定 81 小屋谷城跡 350 高尾山城跡 351 向山城跡 352 名称未定
赤坂	赤磐市	山口	城山 城山下 門田 宮の馬場 馬淵	82 木山城跡 83 金比羅城跡 84 高光城跡 350 山口城跡
赤坂	岡山市	御津芳谷	垣ノ根 垣ノ下 垣根 屋敷後 屋敷前 古屋敷 屋敷下 屋敷上 屋敷妻 殿屋敷 屋敷ノ上 屋敷後口 上ヶ市 屋敷廻り 寺屋敷 納屋敷 滝ノ城 垣ノ上	85 瀧ノ城跡
赤坂	赤磐市	東軽部	城山 堀越 殿河内 大門 亀之元馬場下	89 東軽部城跡 91 宝地城跡 92 宮口城跡 93 大久保城跡 94 高尾山城跡
赤坂	赤磐市	南佐古田	土井の内 古屋 免ヶ市 市崎	90 南佐古田城跡
赤坂	赤磐市	町苅田	土井の内 古矢敷 門口	93 大久保城跡 94 高尾山城跡 347 石相城跡
赤坂	赤磐市	今井	九文土井	
赤坂	赤磐市	多賀	殿内 殿内灯籠下 古屋敷	335 岩鼻城跡 336 多賀城跡
赤坂	赤磐市	小原	土井の内	327 権現山城跡 328 天神山城跡
赤坂	岡山市	牟佐	土井ノ内 市場口 垣ノ内 屋敷前 古屋敷 屋敷下 屋敷裏 屋敷上 屋敷浦	100 名称未定 102 新田陣跡 319 高倉山陣
磐梨	和気町	津瀬	垣ノ内 小屋床 堀 開 簇ヶ退	105 石ヶ谷城跡 106 坊主山城跡
磐梨	和気町	小坂	城山 城山下 城ヶ鼻 古屋敷	107 小坂城跡
磐梨	和気町	田賀	土井 六兵衛下土井 高殿 高殿口 堀 中ヶ市 森ヶ市	108 田尻城跡
磐梨	和気町	宇生	土井淵 堀前 堀田 梶井 カンジャ阪 矢口	
磐梨	和気町	矢田部	古屋敷	
磐梨	和気町	加三方	小屋ノ谷 垣ノ元 古屋敷 門田 清門 梶井 鍛冶屋谷口 鍛冶屋谷 鍛冶屋谷奥	367 壁城跡
磐梨	和気町	田原上	土井 小堀 遠見山 殿市	114 西山城跡 369 田原城跡 372 長船陣跡
磐梨	和気町	田原下	城山 戸井元 門ノ奥 金ヶ一	114 西山城跡 369 田原城跡 373 国山城跡 374 仕出ヶ鼻城跡
磐梨	和気町	原	垣内 大門 古屋敷 馬場 市之介地	
磐梨	和気町	本	殿屋敷 戸井尻 土井田 垣内 堀 堀切 細堀 堀ノ後 鉄砲台 古屋敷 的場 堂ヶ市 永長市	
磐梨	和気町	父井原	城ノ段 長船陣 川市 久八市	109 城ノ段跡 371 大成城跡 372 長船陣跡 373 国山城跡 374 仕出ヶ鼻城跡 376 矢口城跡
磐梨	和気町	米澤	焰硝釜 太鼓岩	377 古城山跡
磐梨	赤磐市	釣井	古屋敷	
磐梨	赤磐市	沢原	掛土樋 古屋谷 古屋ノ谷 金堀 組市	368 澤原源蔵左衛門宅跡
磐梨	赤磐市	殿谷	城山 古屋敷 市場 市場尻 梶久	111 赤尾山城跡 112 殿谷城跡
磐梨	赤磐市	佐古	大手 大手向 大手上 大手下 大手奥	113 可真下城跡
磐梨	赤磐市	可真下	大土井 土井ノ下 土井谷 王ノ谷 馬場 馬場添 金堀 倉懸ヶ	113 可真下城跡
磐梨	赤磐市	可真上	土井 土井下 土井鼻 馬場添 門田 市場	115 可真上城跡
磐梨	赤磐市	徳富	城山 黒戸樋 梶久	117 保木城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
磐梨	赤磐市	弥上	木戸田 門上	118 妙見山大森山遺跡（妙見山城跡）
磐梨	赤磐市	稗田	戸樋ノ元 大手越 馬場ノ鼻 日殿 門田 坊ヶ市 坊ヶ一	
磐梨	赤磐市	石蓮寺	小屋 的場 的場向 古屋敷 高ヶ市 東ヶ市 備所	
磐梨	岡山市	瀬戸町万富	高縄手 堀 土井端 居場 古屋敷 古屋敷門 宮ノ馬場	116 大盛山城跡 117 保木城跡 119 保木城の砦跡 120 保木風呂屋遺跡
磐梨	岡山市	瀬戸町二日市	古屋敷	
磐梨	岡山市	瀬戸町大井	土井端	
磐梨	岡山市	瀬戸町宗堂	上山（城山）大門	122 宗堂城山城跡 123 名称未定
磐梨	岡山市	瀬戸町南方	堀田 城ノ段	124 南方城跡 362 片山城跡 363 敷ヶ鼻砦跡
磐梨	岡山市	瀬戸町弓削	古屋敷 馬場先	
磐梨	岡山市	瀬戸町坂根	城ヶ谷	125 物理城跡 358 坂根城跡 359 吉岡城跡
磐梨	岡山市	瀬戸町江尻	門畑 陣場端 陣場山 城山 城山下 城山北 馬渡 馬場屋敷	354 江尻城跡
磐梨	岡山市	瀬戸町肩脊	堀の内 城下 御所の内	125 物理城跡 127 肩脊城跡 128 高尾城跡 130 鳥の奥遺跡 129 堀ノ内遺跡 188 城ヶ辻城跡 357 陣場山城跡 358 坂根城跡 459 吉井村山陣跡
磐梨	岡山市	瀬戸町森末	烏縄手	
磐梨	岡山市	瀬戸町寺地	土井ノ内 上縄手	
磐梨	岡山市	瀬戸町光明谷	石縄手	
磐梨	岡山市	瀬戸町瀬戸	砂堀 土井の内 城の本 少砂殿 戸井本 大堀辺 堀口 古屋敷	360 飯山城跡 361 鉄砲山砦跡
磐梨	岡山市	瀬戸町下	土井ノ内 馬渡り	126 土井の内寺跡
磐梨	岡山市	瀬戸町沖	古屋敷 堀田 中畝堀 開之内	126 土井の内寺跡
磐梨	岡山市	瀬戸町大内	土井の元 戸井の元	131 内山城跡 355 大内村山陣跡
磐梨	岡山市	瀬戸町観音寺	築地山坂 殿木	
磐梨	岡山市	瀬戸町宿奥	的場	
磐梨	岡山市	瀬戸町菊山	古屋敷	
和気	和気町	奥塩田	堀切 堀切下夕 堀田 馬乗岩 番匠山 金屋敷	133 奥塩田茶臼山城跡
和気	和気町	北山方	鍛冶山 乗馬	134 北山方城跡
和気	和気町	苦木	堀田 上堀田 中堀田	
和気	和気町	矢田	小屋谷 堀 堀之下 堀之東上 堀田溝辺東 古屋敷 蔵屋敷 馬場 中庄司	135 観音山城跡 407 鉄砲ノ段跡 408 龍ヶ鼻城跡
和気	和気町	岩戸	木戸 木戸口 張木戸 張木戸下 岡本屋敷 蔵屋敷 船倉 上河市 河市東	137 天神山城跡 138 天神山城太鼓丸跡 139 天神山城跡附天瀬家屋敷跡 140 天神山城跡附岡本屋敷跡 141 天神山城跡附木戸跡 151 龍徳山城跡
和気	和気町	田土	小屋 小屋古屋敷 古屋敷 木戸 堀田 倉屋敷 鍛冶屋田 上ヶ市南 畑ヶ市 鉄砲ノ段 幟尾	136 天神山城跡根小屋 137 天神山城跡 138 天神山城太鼓丸跡 142 名称未定 400 陣屋ヶ鼻跡 401 糞田与次右衛門宅跡 402 幟尾跡 403 開跡 404 本陣平跡 408 鉄砲ノ段跡
和気	和気町	丸山	木戸 古屋敷	
和気	和気町	南山方	木戸口 上ヶ市 上ヶ市道上 上ヶ市道下 上エノヶ市	
和気	和気町	塩田	堀田 車馬 車馬上 市場 上市場 下市場 下市場中	
和気	和気町	日笠上	土井ノ下 的場 矢谷 上矢谷	144 北浦山城跡 145 青山城跡 146 天王久保山城跡 404 日笠村陣跡
和気	和気町	木倉	城内 城内上 古屋窪 上ヶ一 中ヶ一 神子ヶ一 市倉 市倉向	142 名称未定 143 大坊山城跡 145 青山城跡
和気	和気町	益原	越木戸 奥ヶ市 金ヶ市 八日市 半兵衛市 川市 原川市	151 龍徳山城跡
和気	和気町	保曾	荒堀 荒垣 火打倉 金屋	
和気	和気町	日笠下	城山 馬場	152 上見山城跡 153 鹿嶋前丸山城跡 404 日笠村陣跡 405 円山城跡
和気	和気町	吉田	土井之元 土井ノ元 上ノ土居 垣内 日ノ丸 門田 門前 森ヶ市	154 宮山城跡 409 明石宗納宅跡
和気	和気町	藤野	前土井 弥六ヶ市	
和気	和気町	泉	土居 下之土井 庄屋 鍛冶畑	394 安養寺陣跡
和気	和気町	大田原	城山 城ノ下 城ノ下大町 前土井 向井土井 堀ノ上 堀ノ下 堀ノ端 堀田 古屋敷 小屋ノ谷 馬場尻	155 曾根城跡 395 大田原備前守晴清宅跡 396 備前平四郎宅跡
和気	和気町	尺所	城ノ下 城ノ下柳ノ内 城ノ下窪田 姓司 姓司前 門田 下馬 下馬角畑 梶久 梶久下	
和気	和気町	和気	城山 城山下 垣ノ内 堀 堀田 堀田上 金ヶ市	155 曾根城跡
和気	和気町	大中山	城山 土井 奥ノ土井 板屋土井 前土井 坊ノ土井 堀田 門所 馬場 辻ヶ市 関ヶ市 墓所ヶ市 晩鐘ヶ市	156 衣笠城跡 157 北山城跡
和気	和気町	清水	奥ノ土井 東ノ土井 中ノ土井 西ノ土井 小屋ノ谷 古屋敷下 矢櫃 矢櫃上	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
和気	和気町	衣笠	大土井 西ノ土井 森土井 森ノ土肥 土肥ノ後下 鉄砲小屋 西堀田 荒堀 門田馬道 鍛冶橋	156 衣笠城跡 157 北山城跡 397 古城跡 398 平松城跡
和気	和気町	福富	広土井 土肥西 土肥裏 古屋敷 荒堀	407 古城跡
和気	和気町	日室	土井 土井前 西土井 高丸 垣内 土垣根 姓司東 姓司前 荒堀 門田 下馬	
和気	備前市	伊部	殿土井 鬼ヶ城上池 小山谷 奥小屋谷 奥小家 馬場川 馬場川北 馬場川南 梶谷	158 伊部城跡 166 茶磨岩城跡 167 鬼ヶ城跡 168 たい山城跡 169 伝太閣門跡 165 狐塚城跡 378 安達修理宅跡
和気	備前市	三石	城山 向城 五城谷 土井ヶ鼻 矢ノ丸下 宿ヶ市 守石中ヶ市	162 三石城跡 163 関川城跡 384 三石城包圍陣
和気	備前市	八木山	主殿 古屋敷 御門谷	385 八木山城跡
和気	備前市	吉永町岩崎	大土肥口 大戸樋口 土肥ヶ谷口 古屋敷 荒堀ノ上 砂田堀西 門田 馬掛	159 東山城跡
和気	備前市	吉永町吉永中	古屋敷 馬場田 馬場下	
和気	備前市	吉永町南方	鍛冶林 島ヶ市 島ヶ市南 上嶋ヶ市	
和気	備前市	吉永町福満	城ヶ上 木戸口 古屋敷 堀切 堀切元 堀切南 門田 門畑 馬渡り 馬渡り下	159 東山城跡
和気	備前市	吉永町金谷	小屋ノ谷 向木戸口 門田 門畑 馬転じ	386 馬ころび山城跡 387 壘墟 388 壘墟
和気	備前市	吉永町神根本	城ノ高下 戸井渡 小屋ノ奥 小屋ノ奥南 射場ノ元 鍛冶田 駒ノ足	147 医王山城跡
和気	備前市	吉永町高田	小屋跡 小屋谷 孖屋谷	149 惣谷山城跡
和気	備前市	吉永町今崎	土井渡 戸井渡 木戸ノ元 小屋町 元屋敷 門畑 梶田 車場道	160 明石掃部介守重宅跡 161 ろんき山城跡
和気	備前市	吉永町和意谷	松尾城 有根城西窪頭 馬道ノ上 下馬下 坊ヶ市	390 檉城跡
和気	備前市	吉永町多麻	城の裏 城ノ腰 戸井詰 小屋ノ谷 宝殿 前垣内 古屋敷 木戸ノ元 荒堀蔭 鍛冶屋 市ノ奥	132 飯盛山城跡
和気	備前市	吉永町加賀美	戸井ノ内 城ヶ畑 土居ノ内 向垣内 堀ノ傍 古屋 小屋ノ谷 木戸ノ上 古屋敷 門島 市ノ奥	
和気	備前市	吉永町笹目	堀田 七之小屋 ヶ市 ヶ市川辺り	
和気	備前市	吉永町都留岐	古城跡 城山 城ノ下 城ヶ畑口 小屋ノ成 中垣内 源内垣内 古屋敷 堀田 堀ノ根 木戸口 門島 門田	148 大股古城跡 389 鳥ヶ城跡
和気	備前市	日生町寒河	門田 殿ヶ市 幡ヶ市 梶谷	391 桜丸砦跡 392 天狗丸砦跡
和気	備前市	日生町日生	古屋敷	393 御所垣跡
和気	備前市	新庄	戸之内 馬場上 川市	
和気	備前市	福田	土井ノ内 小屋谷 門田 森ヶ市	
和気	備前市	坂根	土井内 土井 沖土井 馬所屋 市ヶ下	358 坂根城跡 359 吉岡城跡
和気	備前市	香登本	城ヶ鼻 西土井 弓場 門田 西町市場	164 香登城跡 381 古城山跡
和気	備前市	香登西	殿土井 馬場川北 馬場川南 大門 鍛冶坪	164 香登城跡
和気	備前市	大内	東土井 馬城ヶ脇 土居間 下居殿前 馬ノ子田 中ヶ市	165 狐塚城跡
和気	備前市	浦伊部	池城 的場 矢籠 馬の首	168 たい山城跡 169 伝太閣門跡 379 宇喜多別館跡 380 古城山跡
和気	備前市	友延	垣内 堀畑	
和気	備前市	麻宇那	下土樋 古屋敷 堀ノ本 木戸口	
和気	備前市	蕃山	嘉市西	
和気	備前市	伊里中	長戸樋 垣ノ内 古屋敷 木戸ヶ谷	
和気	備前市	木谷	西土井	
和気	備前市	関谷	横土井 小屋ノ谷 千田垣内 古屋敷 馬場 的場 市谷	
和気	備前市	西片上	城下谷 古屋敷 車路	168 たい山城跡 170 茶臼山城跡 385 狐塚城跡
和気	赤磐市	勢力	土相 殿御浦 門地 馬場 古屋敷 かつ林	
御野	岡山市	三野本町	酒屋敷 堀田下 堀田 馬場末 門手尻 門手 門前	173 妙見山城跡 425 狼の城跡
御野	岡山市	南方	梶久 堀田 城ノ段	
御野	岡山市	(岡山)	内山下 中山下 蓮昌寺堀端 野殿町 門田屋敷 浜屋敷	180 岡山城跡
御野	岡山市	津島	市場 堀南 堀ノ北 城 ケシヤシマ(キ) 鉄砲場 城ノ段	174 烏山城跡 175 半田山城跡 176 津島福居遺跡 419 とつつき城跡 420 遠藤河内守邸跡 425 狼の城跡
御野	岡山市	万成	本村屋敷 谷屋敷タニ	425 万成城跡
御野	岡山市	上伊福	西之城	412 八幡山城跡
御野	岡山市	内田	屋敷中	
御野	岡山市	宿	西城 東城 堀越	
御野	岡山市	浜野	屋敷添	427 西川尻陣跡 428 浜野構跡
御野	岡山市	洲崎	東屋敷 西屋敷 小屋敷	
御野	岡山市	福成	小屋ノ下 西垣原 東垣原	
御野	岡山市	福島	屋敷畑 屋敷裏 古小屋前	423 甲斐川城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
御野	岡山市	福富	後屋敷 前屋敷 堀田 竹田屋敷	
御野	岡山市	十日市	屋敷町 寺屋敷 下屋敷	
御野	岡山市	豊成	山下 城ノ西 城ノ前 南城ノ前	
御野	岡山市	青江	馬場 北川市 新屋敷 中川市	
御野	岡山市	奥田	馬場東	
御野	岡山市	二日市町	矢倉下 馬場筋	
御野	岡山市	高柳	市場口・北の丸・中の丸・鉄炮田・馬場	415 高柳城跡
御野	岡山市	矢坂	木戸口 町屋敷	177 辻川城跡 178 富山城跡
御野	岡山市	野田	寺屋敷 市場前 土井ノ西	421 野田城跡
御野	岡山市	北長瀬	土井ノ元	
御野	岡山市	今村	馬場崎	
御野	岡山市	上中野	城ノ内	412 上中野城跡
御野	岡山市	下中野	大堀	
御野	岡山市	中仙道	屋敷 馬場内	
御野	岡山市	辰己	市屋敷	
御野	岡山市	万倍	屋敷	
御野	岡山市	西市	馬場下	
御野	岡山市	当新田	屋敷後東 小屋ノ下	
御野	岡山市	新保	八郎川市	
御野	岡山市	畑鮎	堂屋敷 馬場	422 笠井山陣跡
御野	岡山市	金山寺	大門東 市坂	
御野	岡山市	玉柏	古屋敷 小屋南 小屋西 小屋後 堀越 大門	418 牧石陣跡
御野	岡山市	西川原	城ノ後 城跡 城ノ前 西城跡	426 西川原城跡
御野	岡山市	竹田	大溝西 大溝東 村前大溝東 屋敷東 屋敷下 元屋敷 寄小屋跡 屋敷 屋敷跡	
上道	岡山市	網浜	屋敷脇 奥屋敷 堂屋敷	
上道	岡山市	門田	の場 煙硝蔵 奥市 山手屋敷	430 古城山跡 431 徳長古城跡
上道	岡山市	国富	掘之内 御堂屋敷	433 国富城跡
上道	岡山市	四御神	仮屋敷 寺屋敷 古番所屋敷	181 龍ノ口山城跡 436 四御神要害跡
上道	岡山市	雄町	土井之内 西堀	
上道	岡山市	中井	柿ノ内 梶畑	
上道	岡山市	祇園	屋敷添 古屋敷 屋敷浦 馬場 屋敷邊 馬場	181 龍ノ口山城跡 432 段原磐跡
上道	岡山市	新屋敷町	屋敷前 屋敷 屋敷西 屋敷東 屋敷浦 土井ヶ東	
上道	岡山市	関	城ノ内	
上道	岡山市	八幡	屋敷前	
上道	岡山市	中島	元屋敷 古屋敷 屋敷間 東屋敷 屋敷添 大炊	182 中島城跡
上道	岡山市	さい	出屋敷 屋敷 屋敷裏 屋敷添 岡屋敷 穢所屋敷	434 税所屋敷跡
上道	岡山市	湯迫	市場後 城ノ段	445 湯迫城跡
上道	岡山市	賞田	西北屋敷 北屋敷 城山 城山下	439 脇田城跡
上道	岡山市	国府市場	古市場 北古市場 南古市場 屋敷添 土井 的場 北土井 西土井	
上道	岡山市	今在家	前屋敷 中屋敷 北屋敷 八日市	
上道	岡山市	草ヶ部	屋敷辺り 地頭土井 堀溝	183 名称未定 447 築地山陣
上道	岡山市	中尾	古市	
上道	岡山市	谷尻	土井ノ下	
上道	岡山市	北方	梶岡	
上道	岡山市	藤井	土井下 城ノ段 奥屋敷	184 藤井城跡
上道	岡山市	穴甘	梶田 梶木谷 梶木田口	449 穴甘山城跡
上道	岡山市	矢津	土井	457 矢津砦跡
上道	岡山市	松崎新田	銭小屋	
上道	岡山市	大多羅	長老屋敷 古屋敷 山田屋敷	
上道	岡山市	沼	古城跡 鶴垣 小屋ノ内 小屋ノ前 梶田	185 龜山城跡
上道	岡山市	古都南方	出屋敷 門前口 西川市 門前 東屋敷 南川市 北川市 城根 城之内 奥屋敷	186 内山城跡
上道	岡山市	鉄	堀ノ内 赤堀 土井ノ上	
上道	岡山市	宿	矢倉 市場 上ノ木戸	
上道	岡山市	吉井	中屋敷 的場谷	187 名称未定 188 城ヶ辻城跡 189 吉井城跡 458 吉井村北山下陣跡 459 吉井村山陣跡
上道	岡山市	寺山	本城下 本城山 寺屋敷	190 福岡城跡 191 (大日幡山城跡 大日幡山城跡東出丸跡 大日幡山城跡北出丸跡)

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
上道	岡山市	楯原	浮新堀 本城越 本城谷	191（大日幡山城跡 大日幡山城跡東出丸跡） 453 楯原村陣
上道	岡山市	矢井	新堀 梶田 古屋敷	
上道	岡山市	浅川	屋敷相 馬場脇	191 大日幡山城跡
上道	岡山市	一日市	城下 土井ヶ上 馬場崎	
上道	岡山市	内ヶ原	古屋敷	191（大日幡山城跡 大日幡山城跡東出丸跡） 456 王子山城跡
上道	岡山市	竹原	門前 門前山 馬場下 屋敷下 屋敷西 新堀 堀田	192 新庄山城跡 451 竹原城跡 452 馬路山陣跡
上道	岡山市	百枝月	木戸口 馬場下	456 王子山城跡
上道	岡山市	沢田	屋敷端	193 明禪寺城跡 435 澤田要害跡
上道	岡山市	原尾島	鍛冶地 屋敷前	193 明禪寺城跡 443 小丸山陣跡
上道	岡山市	中川町	正城 上市場 下市場 城ノ西 城ノ北 城ノ辻 城ノ東北	194 正木城跡
上道	岡山市	益野町	堂屋敷 小屋ノ下 堀出川口 堀出	
上道	岡山市	福治	門外 北屋敷	
上道	岡山市	久保	馬場東 馬場西	
上道	岡山市	原	土居下 新堀 屋敷添 屋敷西 馬道 馬道堤下	
上道	岡山市	砂場	土井鼻 馬場井手	
上道	岡山市	西平島	小屋前 小屋之内	454 奈良部城跡
上道	岡山市	南古都	土井端	455 古城山跡
上道	岡山市	東平島	新堀 鍛冶屋田 古屋敷 屋敷 市後	
上道	岡山市	浦間	中堀西 土橋下 中堀東 鹿堀	446 茶臼山城跡
上道	岡山市	赤田	城之内	
上道	岡山市	今谷	矢倉	
上道	岡山市	清水	開門 城ノ内	437 清水城跡 438 難波城跡
上道	岡山市	神下	堀田 土井西 土井後	
上道	岡山市	米田	知門田 屋敷下 堀田 古屋敷 堂屋敷	
上道	岡山市	長利	古屋敷 屋敷向 西屋敷 屋敷添 知門田 城山 城山下	
上道	岡山市	下	馬場 古屋敷 後屋敷 ヤシキ 寺屋敷	
上道	岡山市	長岡	屋敷後 茶屋敷	
上道	岡山市	土田	古屋敷 梶久 中屋敷	441 土田城跡
上道	岡山市	海吉	土井下 的岡	
上道	岡山市	山崎	屋敷割 上垣原 下垣原 中垣原	
上道	岡山市	円山	金城	444 円山城跡
上道	岡山市	倉田	出屋敷 上屋敷 市場屋敷 下屋敷	
上道	岡山市	桑野	新堀 中堀	
上道	岡山市	西大寺	鍛冶屋田 鍛冶屋田出口 西鍛冶屋田 東鍛冶屋田 市場町 市場	195 金山城跡
上道	岡山市	金岡	諸方ヶ土井 一丁ヶ土井 土井	
上道	岡山市	浅越	犬走り 東屋敷	
上道	岡山市	西庄	城ノ前	
上道	岡山市	西大寺松崎	垣原	
邑久	瀬戸内市	長船町長船	城之内 的場 八日市	196 長船城跡 482 板屋瀬陣跡
邑久	瀬戸内市	長船町福岡	殿町 久左衛門堀辺り 堀向 堀下 市場小路	197 福岡奥之城跡 483 津坂口の瀬陣跡
邑久	瀬戸内市	長船町服部	堀端 堀田 北堀 新堀 木戸元	198 丸山城跡
邑久	瀬戸内市	長船町磯上	堀内 堀 堀前 堀東 大門田	200 堀城跡 201 油杉城跡
邑久	瀬戸内市	長船町土師	殿屋敷 土井端 戸井端 戸井端上窪 馬場前 門堀 馬塚 北馬塚 甲山	
邑久	瀬戸内市	長船町飯井	堀端	202 高松山城跡
邑久	瀬戸内市	長船町牛文	土井下 古屋敷 古屋敷上 堀田屋敷 堀田屋敷下 堀田 馬場 馬場辻 馬塚 馬塚下 八日市田	
邑久	瀬戸内市	長船町西須恵	城山 熊城 堀田 開殿 門田 市場 市場口 五郎ヶ市 梶久	203 高山城跡
邑久	瀬戸内市	長船町東須恵	木戸口 梶給	
邑久	瀬戸内市	邑久町虫明	堀越シ 馬場 鉄砲場 鉄砲場 鉄砲場口 カジタ 始硝蔵	204 虫明城跡 481 白谷城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町福谷	古城山 小屋谷 垣ノ内 的場 鍛冶谷	478 福谷城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町上笠加	国城 我城山 堀屋敷 堀 堀ノ上 馬場前 門田 門田上 市場 古市場 市場前 カジヤ	
邑久	瀬戸内市	邑久町下笠加	堀内 市場西 カジヤ	
邑久	瀬戸内市	邑久町箕輪	小屋下 市場上	
邑久	瀬戸内市	牛窓町鹿忍	城 城山 門田 登々馬 小馬	473 鹿忍城跡

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名(小字名)	城館名
邑久	瀬戸内市	牛窓町牛窓	西町城山 城ヶ鼻 小屋谷 馬立 白馬 白馬浜	470 牛窓城跡 471 紺浦城跡 472 天神山城跡
邑久	瀬戸内市	牛窓町長浜	四郎丸 中ヶ市 ケ市 上ヶ市 寺ヶ市 方間ヶ市 聖ヶ市 土井 土井後 殿畑 堀田 大門 門坂 的 市村 市村坂 南市村	
邑久	瀬戸内市	邑久町大富	城の内 北堀	205 光明寺城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町尾張	城ノ内 城 城廻り 城ノ前 堀内 堀 堀西 門田 馬場崎 馬場西 馬場東	207 尾張城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町山田庄	城内 堀ノ前 堀下 殿ノ上	
邑久	瀬戸内市	邑久町山手	土井 北土井 南土井 的 門田 南乃市 魚ヶ市	
邑久	瀬戸内市	邑久町福元	上城 古屋敷 馬場	480 上城跡
邑久	岡山市	西大寺川口	屋敷前 屋敷後 屋敷東 古屋敷 屋敷西 堀田	
邑久	岡山市	西大寺浜	馬場崎 高屋敷 後手ヶ土井 二丁ヶ土井 中土井	208 浜城跡
邑久	岡山市	西大寺新	古屋敷 屋敷西 屋敷前 屋敷添 屋敷東 油ヶ土井 中土井 中土井西 下土井	
邑久	岡山市	西大寺五明	北屋敷 二町ヶ土井 西屋敷 中三屋敷西 屋敷西	
邑久	岡山市	西大寺門前	鍛冶ヶ後 古屋敷 屋敷前 屋敷 中門前 屋敷添 門ノ川 土井下 屋敷後 西門前	
邑久	岡山市	西大寺新地	堂屋敷 法門田 梶田	
邑久	岡山市	西大寺射越	今城 堂屋敷 古屋敷 屋敷	209 射越城跡 464 和田屋敷跡
邑久	岡山市	長沼	松殿向 土居 松殿下 屋敷廻り 寺屋敷 松殿ノ下 松殿西 松殿上林 松殿東 奥ノ馬場 馬場ノ上 馬場崎	212 長沼城跡 215 高取山城跡
邑久	岡山市	神崎町	竈屋敷 小屋ノ辻 馬ノ足 馬ノ足口 堀抜 堂屋敷 イゴフ堀 馬場 主殿割 射越田 鶴垣	463 神崎城跡
邑久	岡山市	邑久郷	城島川南 土居ノ内 城島 城ノ辻西 城ノ辻南 城ノ辻東 城ノ辻	460 邑久郷城跡 461 紅岸寺城跡 462 古城山跡
邑久	岡山市	南幸田	カキ堤東 城島端北 城島 城島端西 城島山 城島端南 城島南 城之辻北 城之辻東 城之辻南 城之辻	
邑久	岡山市	北幸田	城島北	
邑久	岡山市	久々井	殿屋敷	
邑久	瀬戸内市	邑久町北島	堀内 土井前 古屋敷 陣能山 石丸 堀田 木戸 馬場	210 向山城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町豊原	城山 城が平下 城ヶ鼻 堀ノ前 馬場崎 免ヶ市 倉ヶ端	214 砥石城跡 474 島広山城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町福山	壹 壹西 壹ノ内 壹後 壹東 壹前 古市 細工田	
邑久	瀬戸内市	邑久町大窪	堀ノ内 門田	
邑久	瀬戸内市	邑久町上山田	城山 新堀 的場 門田 油ヶ市 堂才ヶ市 下ヶ市 田代ヶ市 南ヶ市	216 上山田城跡 474 殿山城跡
邑久	瀬戸内市	邑久町下山田	五城山 五城 馬場 馬場峠 馬ヶ谷 鍛冶屋谷 梶ヶ端 梶ヶ鼻	
邑久	瀬戸内市	邑久町尻海	大土井 殿屋敷 構口 市場	
邑久	岡山市	下阿知	門之下 門ノ上 城山 幸城坂 城地ヶ谷	217 茶屋城跡 465 下阿知城跡
邑久	岡山市	上阿知	坊垣谷 門田 茶屋垣内 鍛冶屋	218 作州山城跡
邑久	岡山市	西大寺一宮	殿屋敷 紺屋敷 供殿 馬場先 宮城 堀西 御堀 堀東 鯛堀 堀切 馬渡 表屋敷	219 名称未定 220 西大寺一宮育苗園公園遺跡
邑久	岡山市	千手	垣内	
邑久	岡山市	西片岡	鍛冶ヶ嶮 城山下 城山谷 堀切レ 馬場池 門田 西ヶ市	221 大附城跡 467 釜島城跡 468 妙見山城跡
邑久	岡山市	正儀	的場 小屋端	
邑久	岡山市	東片岡	土井ノ内 釜屋敷宮ヶ市 殿ヶ市 土井 土井前 西ヶ市 堂屋敷 城田池 城田ノ向 城田 堂屋敷 堀切 南釜屋敷 釜屋敷	222 朝日山城跡
邑久	岡山市	宝伝	堂屋敷 長場谷(ババダニ) 馬場谷川西 馬場谷道上 馬場谷 馬場原 浜屋敷	
邑久	岡山市	宿毛	堀奥 殿山	466 鴻城跡
邑久	岡山市	幸地崎町	殿山 殿山下 馬場下 馬場上	
邑久	瀬戸内市	邑久町本庄	大土井 堀ハタ 古屋敷 鉄砲杭 市村 梶久	223 佐井田城跡
邑久	備前市	佐山	城ヶ端 城ヶ谷 大城 大城道上 殿上山 小屋谷 小屋谷下町 堀田 東木戸 馬場元 的場上 鍛冶給	
児島	岡山市	小串	土井山 市場 城山 城ノ端 城ノ鼻 四間堀	224 小串城跡
児島	岡山市	阿津	権堀 岡御城 城山 城山西	486 岡御前城跡 487 小串の別堡跡 488 鼻面城跡
児島	倉敷市	福田町浦田	免田 屋免 ヲロカ市 岳ノ下 前田 西ヶ市 前ヶ市 古屋上 古屋 古屋下 竹之詰 前ヶ市上 大山下 古屋ビクニ谷 山じょう	225 黒山城跡
児島	倉敷市	神田	川城 川城尻 岳ノ下 下ヶ市 前畑 真弓 寺山下 藤四郎ヶ市 上河内 山城 畑ヶ市 畑ヶ市北平 古城 辻ノ河内 上古城 古城池尻	
児島	倉敷市	黒石	小山下 古屋敷	226 城い城跡
児島	倉敷市	粒江	大山下 不動免 殿山 鉄砲池上 清滝鉄砲池 内之倉 庵山下 先陣山 飼場谷 沖ヶ市 城ヶ端 古所田 矢倉田 鞭木 かうげ崎	526 汐津三河宅
児島	倉敷市	福田町古新田	古城池高 松竹梅 古城池 松竹梅	
児島	倉敷市	藤戸町天城	山下 梶田 観音免 築田 松竹山 山下 お茶屋	227 桜山城跡
児島	倉敷市	藤戸町藤戸	岳下 殿山 馬乗岩 堀抜 殿ヶ居地 前田 竹暗	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
児島	倉敷市	福田町	前畑 山城 古城	228 川越山城跡
児島	倉敷市	広江	竹ノ爪 縄手 北縄手 小丸山 畑ヶ市 免田 奥之土井 大久保 竹ノ爪 権現屋敷 城山 古城山	528 広江城跡
児島	倉敷市	松江	梶方 徳右エ門田 門田 古屋敷 丸山下 門口 墓所切開	
児島	倉敷市	呼松町	免出 屋敷跡浜屋敷 カマエ 大波戸 宝庄坊 前島 前田 片山下山根 久保 権現屋敷	
児島	倉敷市	郷内	三宅屋敷 下大矢 中大矢 上大矢 城上	
児島	倉敷市	児島	難木 本荘 天城 郡 馬返し 浜殿 山田 和田 白尾 荘内 上山田	
児島	倉敷市	串田	王子馬場 大山下 門田 久門久 小丸田 侍屋敷 城ノ原 城山 城山下 出崎土井の端 開 開ノ下 外田 矢破地 九蔵 前溝	229 鼻高山城跡
児島	倉敷市	下津井吹上	鐘井谷 上屋敷 城裏 城裏下 城山北下 城山東下 地藏面 明神屋敷 薬師井戸 城山	
児島	倉敷市	福江	垣上 木城 木城平林木戸口 九蔵 高城 馬場添 東弓掛 前田 前畑 弓掛 弓掛上 弓掛神沙 弓掛谷	
児島	倉敷市	林	垣上 垣ノ内 上大矢 上戸津田 下大屋 太刀中 中大矢 中縄手 二枚関 山下 垣山 旗ノ下	230 福岡山城跡 527 三宅屋敷跡
児島	倉敷市	児島稗田町	小丸山 小屋ノ谷 下屋敷 城辻 城ノ前 天守 天守下 土井 殿ノ上 戸樋口 西丸山 馬場裏 東丸山 宝殿 堀切 宮ノ馬場 屋敷 屋敷前 山殿	231 稗田城跡 236 稗田土井ノ鼻城跡 237 暇城跡 268 稗田城ノ辻城跡
児島	倉敷市	児島由加	奥ヶ市 垣内 柿市 上古屋 北ヶ市 古屋 小屋 小屋下 西ヶ市 古屋敷 的面的面谷 免定 門田 門田鼻 欄ヶ市	523 山村城跡
児島	倉敷市	児島唐琴町	馬登り 木戸口 木戸口 土井ノ内 中屋敷 堀江 堀ノ外出口 堀ノ下風呂ノ内 溝免 免切 免切東 矢倉流 屋敷 屋庄谷 屋舗	518 西五山城跡
児島	岡山市	彦崎	城山 土井ノ下 内ノ土井 馬場上池 馬場池 馬場池尻 馬場 木戸口 堀江 西ノ土井 馬場左古	232 とんきり城跡
児島	岡山市	植松	樋ノ内 殿山	
児島	倉敷市	木見	江山下 垣ノ内 上屋敷 君殿ハナ 小城 先縄子 大事山下 土井ハタ 馬場 古屋敷 蔵屋敷 城山	233 戸山城跡 514 木見城跡 515 原新左衛門宅跡
児島	倉敷市	尾原	隠居山下 開原 垣ノ内 掛通 下免 小山下 城ノ谷 城山 土井ノ内 西ノヤシキ ヒラキ 堀田 丸山下 向山下 物見原 山下山 小丸山 古城山	233 戸山城跡 513 壘壇・古城山跡
児島	岡山市	片岡	城ヶ原	234 丸山城跡 235 片岡城跡
児島	岡山市	川張	天城田 西堀田 堀田 東堀田 城山 的場	234 丸山城跡
児島	倉敷市	児島柳田町	鍛冶屋ヶ市 舎利ヶ市 城山 林ヶ市 播磨ヶ市彼岸免 段平谷	522 柳田城跡
児島	倉敷市	児島白尾	中屋敷 屋敷 屋敷後	
児島	倉敷市	児島赤崎	中縄手 宮山下 屋敷前	517 鶴石鼻城跡
児島	玉野市	木目	城古狸 矢止め池	239 滝城跡 240 常山城跡
児島	玉野市	樋ヶ原	土井之内 矢の谷 市場 市場上 市場下	504 横田山城跡
児島	玉野市	用吉	小屋谷 五の丸	240 常山城跡 241 麦飯山城跡 508 古城跡 509 古城跡 510 古城跡
児島	玉野市	八浜町大崎	垣の内 殿川 馬返し 上ヶ市	241 麦飯山城跡 249 楠城跡
児島	玉野市	八浜町八浜	馬返し	242 両児山城跡 249 楠城跡 505 八幡山城跡
児島	岡山市	郡	城山下 城山	243 高山城跡 244 古城山城跡 246 怒塚城跡 489 高島林齋宅跡
児島	岡山市	北浦	射ノ場 土居 土居ノ上	
児島	玉野市	八浜町波知	大殿前 馬ノ浦 鏑谷口 大ヶ市 上ヶ市	245 丸山城跡 247 砂山城跡
児島	玉野市	八浜町見石	垣の内	246 怒塚城跡
児島	玉野市	永井	垣内 市谷	
児島	玉野市	迫間	西ヶ市 東奥ヶ市 西奥ヶ市	276 鬼味城跡
児島	玉野市	山田	城の中 殿前 殿前池下 的場 北門田 南門田 馬追道 王子谷 矢ノ谷 矢ノ谷奥	247 砂山城跡 248 西田井地城跡 511 井上城跡 512 三宅城跡
児島	玉野市	西田井地	五明殿 矢の端	248 西田井地城跡
児島	玉野市	田井	土井之内 土井之内上 岡殿 岡殿尻 岡殿奥 殿敷下 大門	250 駿河山城跡 251 見能城跡 500 田井古城跡 501 木ノ崎城跡
児島	玉野市	上山坂	城の段 物見が鼻 矢喰谷 隠ら谷	252 屋敷山城跡 253 高島城跡
児島	玉野市	下山坂	殿田 馬乗岩 五市	254 梶岡城跡 499 丸山城跡
児島	玉野市	北方	殿山 殿山北 殿山下 殿給 浜殿 浜殿西 浜殿下	497 秋葉山城跡
児島	玉野市	梶岡	城山 小屋奥 鐘突堂	254 梶岡城跡
児島	玉野市	番田	馬返し 門田	255 杭原遺跡 256 相引城跡 257 番田城跡
児島	玉野市	胸上	城山 本陣路 馬場中 鐘突堂	258 胸上城跡 497 秋葉山城跡
児島	玉野市	東田井地	物見が原	252 屋敷山城跡 506 伊賀栗之介宅跡
児島	玉野市	沼	的場 投石	259 丸山城跡
児島	玉野市	大藪	的谷	

旧郡名	市町村名	大字名	関連地名（小字名）	城館名
児島	倉敷市	児島通生	大蔵作り 御所 御所ノ後 三丸口 勝負石 城 城ノ下 城ノ脇 城端 城山 城山下 城山ノ下 縄手 札場前古屋敷 堀端 向山下 元屋敷 本屋敷 矢倉下 屋敷 土井ノ下 丸山ノ下	260 宮の鼻城跡 264 湊山城跡 517 鶴石鼻城跡
児島	倉敷市	曾原	竹田山 的場 大開 梶屋	
児島	倉敷市	菰池	大開 開 山下	
児島	倉敷市	下津井田之浦	鍛冶屋町 竹ノ後 段岸 前畑 的場 明神筋横明神段岸 台場	
児島	倉敷市	児島塩生	垣ノ内 カフトノ 蔵ノ前 小谷 小開 下屋敷 城ノ下 城山 惣竹田 大鼓石 大明神免 旦祥坊 トフ免 南後屋敷 南旦祥坊 南屋敷 元屋敷本太 屋敷 屋敷後 屋敷下	261 本太城跡
児島	倉敷市	児島味野	馬ヶ谷 垣屋称 釜堀場 三門 霜ノ下城ノ北 城ノ谷 城ノ辻 大門 竹ノ詰 段田 中縄手 八段 開 開谷広畑 前新田 門ノ前 柳ヶ一 垣内 門ノ前 城山	262 神水城跡
児島	倉敷市	児島宇野津	ヲ々クボ 梶ヶ山 角田 北ノ谷木戸口 城ヶ谷 走り上 古屋敷 前田 免場 免場川東 横丸	
児島	倉敷市	児島小川町	城ノ下 城ノ谷 城ノ辻 城ノ本 新城下 新田堀 高城 高城下高城辻 高山下 馬場下 浜ノ庄開キ 開ノ下 宝殿 水垣 宮ノ馬場 免田 屋敷田・屋敷ノ坂 山下	263 小川城の辻城跡
児島	倉敷市	児島下の町	古城 城山 高田新開 堤角田 土井ノ下 殿前 縄手 馬場 宝殿山 堀江 縄手	271 熊城山城跡
児島	倉敷市	児島田ノ口	上ノ段 大屋敷 垣ノ内 久衛屋敷 ゴフボリ古屋 下ヶ市屋敷 城山 太吉屋敷 縄手 人殿 平丸 古屋敷 前田屋敷 門屋 門脇 矢敷 矢谷 堀江 堀辻 城ノ辻	272 向山城跡 521 田ノ口城跡
児島	玉野市	滝	石城 御所 堀ノ内 三堀 馬場 馬継 馬子池	274 寺上山城跡 275 滝の古城跡 273 鍛冶山城跡 502 滝古城跡
児島	玉野市	長尾	馬継 荒馬	276 鬼味城跡
児島	玉野市	玉	城山 堀切 古堀 古堀毛野内 遠見岩	277 玉城跡 503 玉古城跡
児島	玉野市	渋川	城ノ下 垣ノ内 隠れ谷	
児島	玉野市	向日比	城山 城の鼻	278 向日比城跡 507 四宮城跡
児島	玉野市	小島地	堀切 矢の谷	498 古城山跡
児島	倉敷市	児島上の町	尾垣内 城久谷 鹿ヶ市 下縄手 城ノ辻 谷ヶ市 佃田 鳴竹 縄手 西山猫ヶ市 祖母谷開ノ谷 弥太郎ヶ市 山下 岳下	269 岩山城跡 270 内田城ノ辻城跡
児島	倉敷市	下津井	馬屋 御旅所 正面城ノ下 城山 竹原山 鼓田 馬場田 堀切 城の辻 陣屋の山 台場 天城	266 下津井城跡 267 古下津井城跡 524 釜島城跡 525 松島城跡
児島	倉敷市	大島	久須見幸神 陣屋 前畑	

第6章 総括

第1節 岡山県の中世城館跡について

はじめに

岡山県では、平成25年より県内に分布する中近世城館跡の分布調査を開始した。調査は7ヶ年度におよび、令和元年度に終了した。すでに岡山県における中近世城館跡については、『日本城郭大系 第13巻 広島・岡山』⁽¹⁾で、884ヶ城が記載されており、おおよその分布数は把握されていた。特筆すべきは全20巻におよぶ『日本城郭大系』のなかで中世の山城について概要図として縄張りの平面図をもっとも数多く掲載した県であった。さらに概要図は単に平面図だけではなく、縦断面図が添付されている点は大系のなかで岡山県だけである。縦断面図は曲輪がどの程度の高低差で造営されているか、切岸の角度はどれくらいかという、実は山城にとってもっとも重要な情報である。ところが重要でありながら当時は切岸や階段状の曲輪配置に注視した調査や研究は皆無といってよいほど関心が低かった。そうしたなかで大系の岡山県ははずば抜けて先進的な取り組みをおこなっていたと評価したい。

一方、発掘調査においても富山城跡を皮切りに岡山県では数多くの中世城館跡の発掘調査が実施され、数多くの調査成果をあげており、日本における中世城館跡の考古学的研究の先駆的地域であった。富山城跡では中世城館跡ではほとんど行うことのできない層位的な分析がおこなわれ、下層で松田氏時代が、上層で浮田氏時代の構造や遺物の組成が明らかにされている。

しかし、残念なことに岡山県の中世城館跡のそれ以後の調査は低調であった。そうした状況のなかで津山市教育委員会で『美作国の山城』が刊行された⁽²⁾。ここでは旧美作国の中近世城館跡666ヶ所が記載され、ほぼ旧美作国内を網羅されていた。

ところで昭和49年より実施された文化庁の補助事業である中近世城館跡分布調査は現在ほとんどの都道府県で終了している。岡山県は後発部隊といってよい。そうしたなかで岡山県ではGPSを用いて縄張り図を作成した。これによって極めて正確な縄張り図の作成ができた。今回の分布調査の最大の成果はこのGPSを用いた測量図の作成であると言っても過言ではないだろう。

ここではこうした分布調査の成果を踏まえて岡山県の中近世城館跡の特徴について述べてみたい。

まずは備前では赤松氏や山名氏が守護であったが、戦国時代には守護代の浦上氏が勢力を伸ばす。それに対して宇喜多氏が最初は毛利氏に、後には織田信長に与して最終的には備前を支配することとなった。備中では細川氏が守護であったが、守護代に庄氏、石川氏、上野氏、三村氏らがいたが、毛利氏に与した三村氏が備中を支配することとなった。しかし宇喜多直家が毛利氏と同盟を結ぶと毛利氏に攻められ三村氏は滅び、備中は毛利氏と宇喜多氏が支配することとなる。美作では山名氏や赤松氏が守護であったが、戦国時代には出雲尼子氏が支配することとなる。戦国時代後半には織田信長と結んだ浦上氏が美作の支配を認められるが、宇喜多氏によって滅ぼされ、宇喜多氏の被官花房氏によ

て支配されていた。

このように三国の戦国時代は極めて不安定で、合戦が繰り返され数多くの山城が築かれた。しかし、出雲の月山富田城、安芸の郡山城のような一国支配の戦国大名の巨大な城は築かれなかった。国人の詰城が大半ではあるが、三国を争奪するように国境付近には横堀や土塁の発達した構造の山城が築かれたのは特徴的である。織豊系の陣城ではなく、毛利氏や宇喜多氏の陣城が数多く築かれたことは注目してよい。

本稿では石垣の存在、竪堀群と土塁囲いの山城について分析を加え、岡山県での山城の特徴を探ってみたい。

石垣・石積み

石垣・石積みについては分布調査とは別にすでに乗岡実氏による詳細な研究がある⁽³⁾。まず石垣と石積みの概念であるが、石を積む際に築石の背面に栗石という裏込石を充填させるものを石垣、背面に栗石などを入れず、無造作に積上げたものを石積みと呼んでおきたいが、ここでは切岸面に石を積み上げるものを総称して、石垣・石積みとする。つまり石材を用いることのみ注目してみた。

これまで戦国時代の石垣については15世紀後半から16世紀前半に出現するもので、その分布は列島のなかでも限られた地域に認められるとされていた。その地域とは信濃松本周辺、飛騨、美濃、北近江、南近江、西播磨、東備前、北部九州である。こうした地域では栗石を伴わない石積みが15世紀後半頃より山城の切岸部に用いられるようになる。乗岡氏によると岡山県内で54ヶ所の城館跡に石垣・石積みが認められるとしている。その内訳は備前17、備中21、美作16とほぼ同じ割合で、国ごとの粗密はさほど認められない。今回の分布調査によって県内の97ヶ所の城館跡で確認されており、その割合は決して多いとは言えないものの、ほぼ全域に分布しているという事実は注目してよい。つまり戦国時代の石垣・石積みは少数とはいえ特異な施設ではなく、岡山県内では普遍的に用いられていたという事実である。これは岡山県内だけの事例ではなく、西国においても石垣・石積みはほぼ全域に分布していることも明らかになりつつある。

畝状竪堀群

戦国時代の山城を構成するものは曲輪(兵の駐屯地)、堀切(遮断線)、切岸(遮断面)、土塁(遮断壁)という4つの土木施設である。戦国時代の山城はこの土木施設によって縄張りという城の基本プランを形作っていたわけである。その構成要素を分析することによって城館遺跡は戦国時代の資料となり得る。

ここではまず畝状竪堀群についてみておきたい。

竪堀群は1980年代に発見された⁽⁴⁾。発見当初は極めて珍しい防御施設として注目されたが、その後の詳細な分布調査によって青森県から熊本県までほぼ全国的に分布することが判明し、現在では普遍的な防御施設として位置付けられている。城の規模で構えられるものではなく、極めて小規模な城にも構えられているし、巨大な山城に構えられないこともある。その構え方にも様々なパターンが存在する。

ここでは岡山県の畝状竪堀群を3つに分類する。

①山城の先端部分に放射状に構えるもの

典型的事例として、常江田城（備前）、勝山城（備前）、金川城（備前）、金砕山城（美作）、茶臼山城（備前）、宮山城（美作）、白石城（備前）、都我布呂城（美作）、医王山城（美作）、猿掛城（備中）、片岡城跡（備前）、鍛冶山城（備中）、竹山城（美作）、三倉田城（美作）などである。尾根筋を登ってくる敵に対処するために構えられたものである。

②山城の側面に構えられるもの

典型的な事例として、江与味城（備前）、大仙山城（備前）、土師方城（備前）、山王城（備中）、青山城（備前）、高屋城（備中）、岩屋城（美作）、両児山城（備前）、北丸城（備中）、鉢伏城（美作）、井戸橋城（備中）、南山城（備中）、三星城（美作）、井内城（美作）などである。緩斜面を防御する目的で構えられたものと考えられる。

③城域をほぼ全周して構えられるもの

典型的な事例として、常江田城（備前）、高釣部城（備中）、山王城（備中）、飯ノ山城（備中）、宮田山城（備中）、岩明山城（美作）、平福寺城（美作）、梶間山城（美作）、福田城（美作）、小原山王山城（美作）などである。最も発達した畝状豎堀群として評価できよう。

なかでも発達した折を持つ土塁や横堀と組み合わせた大仙山城（備前）、井内城（美作）は畝状豎堀群の最終形態を示すものとして評価できよう。一方、山城本体からは離れた場所に何度も屈曲する折を有する横堀の外側土塁より豎堀を連続させて設ける両児山城（備前）がある。これは旧城ではなく、新たな勢力が改修した臨時的な陣城として評価できるものである。備前・備中の境目として構えられた城のひとつであり、天正10年（1582）の八浜合戦では宇喜多春家・基家が在陣しており、北峰が先に築かれていたものを八浜合戦に際して南峰を増築したのと考えられる。畝状豎堀群ではあるが、南峰は折を随所に効かせた長大な横堀を巡らせ、その前面に畝状豎堀を巡らせている。

こうした畝状豎堀群①、②、③は恒常的に詰城に構えられたものと考えられる。一方で②のなかでも大仙山城（備前）、井内城（美作）、両児山城（備前）のように発達した畝状豎堀群はこうした普遍的なものではなく、臨時的な陣として構えられたものと評価できよう。

ところで、畝状豎堀群をもつ城館跡の分布状況を県内で示すと大きく5つの地域に密集していることがわかる。これはほぼ県内全域に分布すると見てよい。そのなかで②と③が備前と備中の国境に分布するのは注目してよいだろう。毛利氏と宇喜多氏の抗争の最前線に分布する②と③は国境紛争に備えて毛利氏によって築かれた陣城や境目の城の可能性が高い。例えば勝山城は天正8年（1580）に毛利氏が加茂崩れで敗走したのちに福山城に代わって拠点としており、最前線の軍事的城郭として畝状豎堀群が構えられたのであろう。

横堀・土塁囲い

山城を構成する防御施設のひとつとして土塁がある。土塁のなかでも曲輪を全周するものは極めて少ない。戦国時代の山城の土塁は曲輪の一辺であったり、極めて部分的な使用が大半である。岡山県内では土塁囲いの曲輪をもつ城を3つに分類することができる。

①曲輪に土塁が全周するもの

典型的な事例として、新山城（備前）、砥石城（備前）、高城（美作）、菅野城（備中）、梶形城（美作）、松ヶ嶋城（美作）、烏が仙城（美作）、医王山城（美作）、鉢伏城（美作）、笠松城（美作）、円宗寺城（美作）、年末城（美作）、荒神山城（美作）、小原山王山城（美作）などがある。戦国時代に築

かれたものか、その後中心部のみ戦国期後半に改修された可能性も考えられる。

②土塁に折が設けられるもので、②-1 曲輪造成がされているものと、②-2 土塁内部に自然地形が残るものに細分できる。

②-1 の典型的事例としては、長野城(備前)、大仙山城(備前)、富田松山城跡(備前)、伊達弾正館(備中)、下風城(美作)、鳥越山城(美作)、南山城(備中)などがある。南山城(備中)はほぼ全域の発掘調査が実施されており、土塁に折が設けられ、さらにその斜面に畝状縦堀が構えられている。

②-2 の典型例事例としては、名称未定(備前 142)、大坊山城(備前)、高陣の陣(備中)、吉谷城(備中)、姿山城(美作)、山方高築遺跡(美作)、横手城(美作)、上竹城(備中)、新宮城(美作)、久田城(備中)、日近城(備中)、大陣屋(備中)、中の城城(美作)、黒山城(備前)、両児山城跡(備前)、神南備山城(美作)、城山城(美作)、伊勢畑城(美作)などがある。土塁囲いでかつ折を効かせているにもかかわらず、土塁内部の曲輪の削平が極めて甘く、臨時性をうかがわせる。おそらく陣城として構えられたものである。前述の両児山城(備前)は別の場所に築かれている。天正 10 年(1582)の宇喜多氏と毛利氏の間に行った八幡合戦に宇喜多春家・基家が布陣している。本来の山城には畝状縦堀群を設け、さらに尾根筋を確保するために堀と土塁と横堀ラインを設定し、その前面に畝状縦堀群を構えたものと見られる。

また、新宮城(美作)、吉谷城(備中)、伊勢畑城(美作)は巨大で長期の対陣、もしくは大将の陣と考えられる。また、横手城(美作)は土塁囲いの内部をさらに方形区画している。陣の可能性もあるが、寺院の可能性も考えられる。

③自然地形に沿ったものではなく、人工的に矩形に構えられたもので、③-1 複郭以上のものと、③-2 単郭もしくは複郭でも極めて小規模なものに細分できる。

③-1 の典型的事例としては、黒山城(備前)、小陣屋(備中)、牛神砦(備中)、尾崎 1 号(備中)、尼ヶ城(美作)、長良山城(備中)、三星城(美作)、小坂向城山城(美作)、日爪城(美作)、古川城(美作)がある。これらは陣として築かれたものと考えてよい。

黒山城は外柵形虎口を有し、縦堀と土塁が極めて巧妙に配置され、横堀を巡らせ、副郭も折を効かせた土塁囲いとするなど、戦国時代後半に築かれたことを示している。記録、伝承の存在しないことより陣城として築かれたことは明らかで、江戸時代の記録からは天正 2～3 年の備中兵乱に三村氏側の城であったとするが、その構造より天正 7 年(1579)に勃発した宇喜多・毛利氏の軍事的緊張段階の可能性が高い⁽⁵⁾。毛利氏の陣城築城であるが、曲輪を土塁によって囲い込み、横堀を巡らせ、虎口を外柵形とするなど、織田信長の陣城と同様の構造で築かれたことがわかる。

③-2 の典型的事例としては、野路山城(備中)、名称未定(備中 152)、守福寺裏山の陣(備中)、名越 2 号砦(備中)、名越 3 号砦(備中)、鍋山城(美作)、殿屋敷(美作)、岩屋城陣城群(美作)、寄城(美作)、蕨尾城(美作)、大西構(美作)などがある。これらは城攻めなどの対陣として築かれた陣城である。岩屋城陣城群(美作)は天正 12 年(1584)に毛利氏方の中村頼宗が立て籠もった岩屋城を攻めるために宇喜多秀家軍の花房職之、岡家利、戸川秀安らが岩屋城を取り囲んだ陣城群である。こうした単郭もしくは小規模な複郭の陣城は単独で築かれたものではなく、岩屋城を取り囲む土塁線上に点々と構えられた仕寄りの陣と見られる。その構造は基本的には方形とし、土塁によって曲輪を圍繞している。そして陣城と陣城間を土塁によって結んでいる。こうした攻城戦の陣城のあり方は、攻める城に対して点々と陣城を構える段階より一歩進んだ形態として捉えることができる。織田

信長の攻城戦では元亀3年(1572)の小谷城攻めで土塁の構築が見られるが、攻める城に対して包囲する形状で土塁が廻るのは天正6～8年(1578～80)の三木城攻めからであるが、南方のみで全周するものではない。天正9年(1581)の鳥取城攻めでは完全に周囲を包囲するものの土塁が全周したかどうかについては不詳である。そうした三木城攻めや鳥取城攻めの延長線上に岩屋城攻めの陣城群は位置付けられ、宇喜多氏が織田信長や羽柴秀吉の戦いから習得して築いたものと考えられよう。

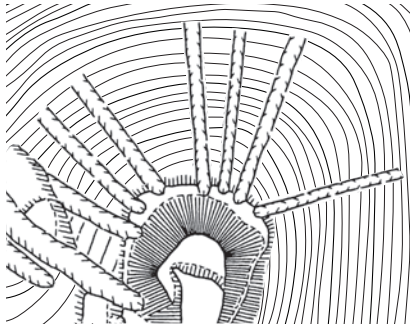
一方、全周はしないものの土塁に折を設け、外柵形を虎口に導入する辛川城(備前)がある。極めて小規模な造りであり、曲輪面も整形せず自然地形を残すことより陣城として構えられたものであり、天正10年(1582)の備中戦役の際に備前・備中監視のために羽柴秀吉側によって築かれたものと考えられている⁽⁶⁾。

おわりに

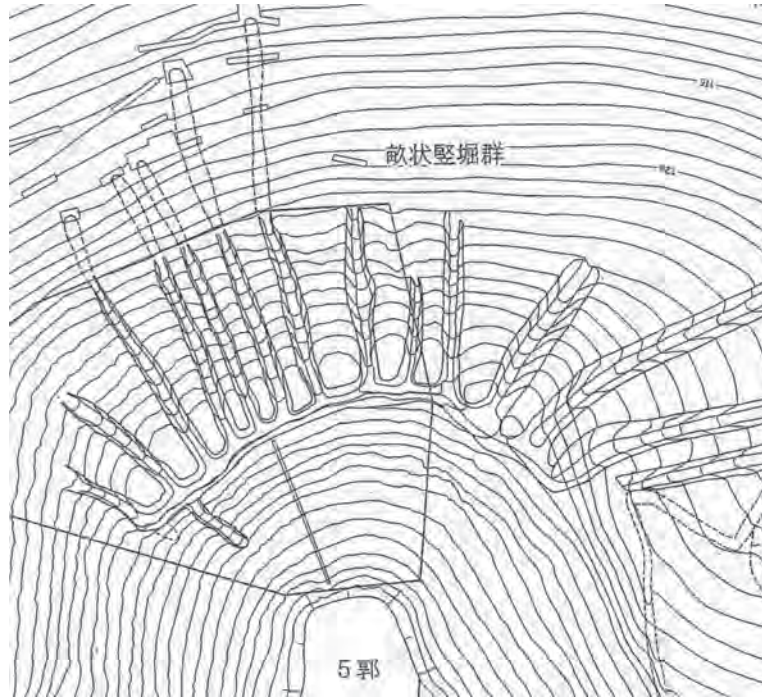
ここでは岡山県の中世城館跡の分布調査によって明らかとなった中世山城の構造を総括的に概観してみた。中世城館跡を石垣・石積み、畝状豎堀群、土塁囲いという施設からみると石垣・石積みは岡山県内には普遍的に用いられた施設であることが明らかになった。一方、畝状豎堀群や土塁囲いを伴う城館の方が特異な構造であることが判明した。これらは国境や紛争地帯に多く分布しており、毛利氏や宇喜多氏が陣を構えるにあたって用いた防御施設であることも明らかとなった。しかし、分布する大半の城館は石垣・石積み、畝状豎堀群、土塁を持たない小規模な山城である。今回の分布調査ではそうした個々の城館跡の構造が把握できたことが最大の成果である。何ら特徴的な構造を有さない城跡を分析、研究することが今後課せられた課題である。(中井 均)

註

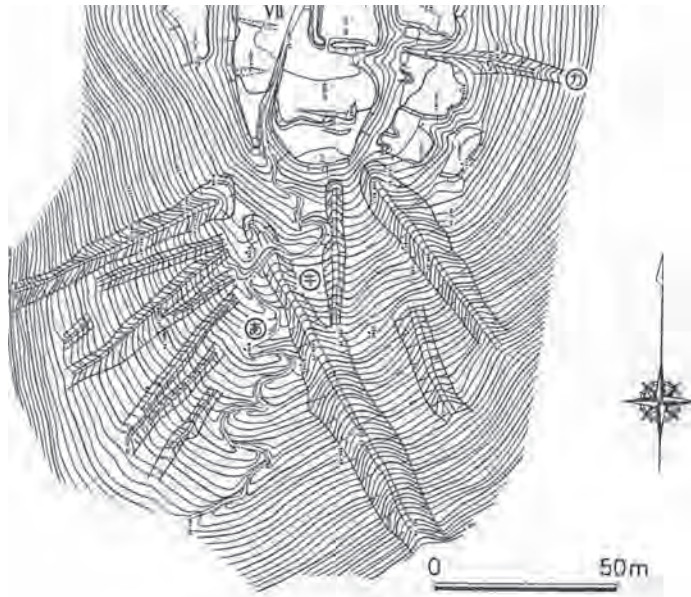
- 1 児玉幸多、坪井清足監修 1980『日本城郭大系 第13巻 広島・岡山』新人物往来社
- 2 津山市教育委員会 2010『美作国の山城』
- 3 乗岡実 2019「中国地方の戦国期城郭石垣の様相」『戦国時代における石垣技術の考古学的研究』平成28～31年度学術研究助成基金助成金基盤研究(C)(一般)研究成果報告書 研究代表者中井均
- 4 伊藤正一氏が『日本城郭大系 第7巻 新潟・富山・石川』(新人物往来社 1980)のなかで大葉沢城跡などで連続する豎堀群を報告し、研究ノートの中なかでは畝形施設として紹介しているが、今後は畝形阻塞、畝形阻障の名がふさわしいとしている。
- 5 池田誠 1993「毛利氏と宇喜多氏における城取りで戦の一考察—備前備中国境戦における八浜攻防戦を中心に—」『中世城郭研究』第7号 中世城郭研究会
- 6 畑和良 2008「織田・毛利備中戦役と城館群」『愛城研報告』12 愛知中世城郭研究会



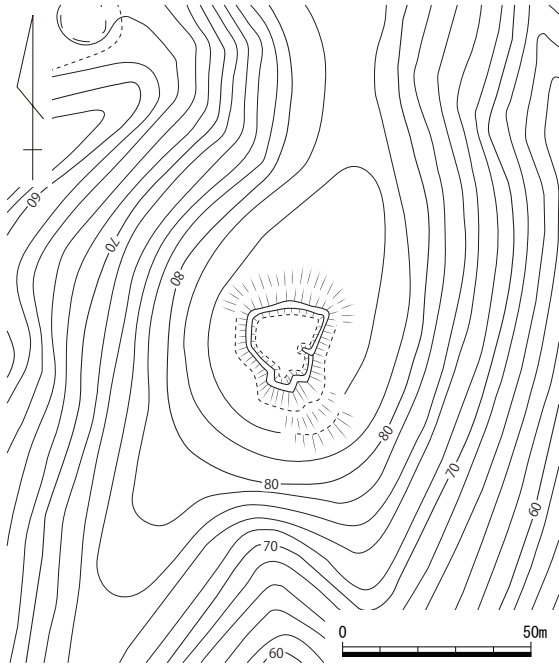
第 212 図 片岡城跡畝状縦堀群
(部分) (1/2,000)



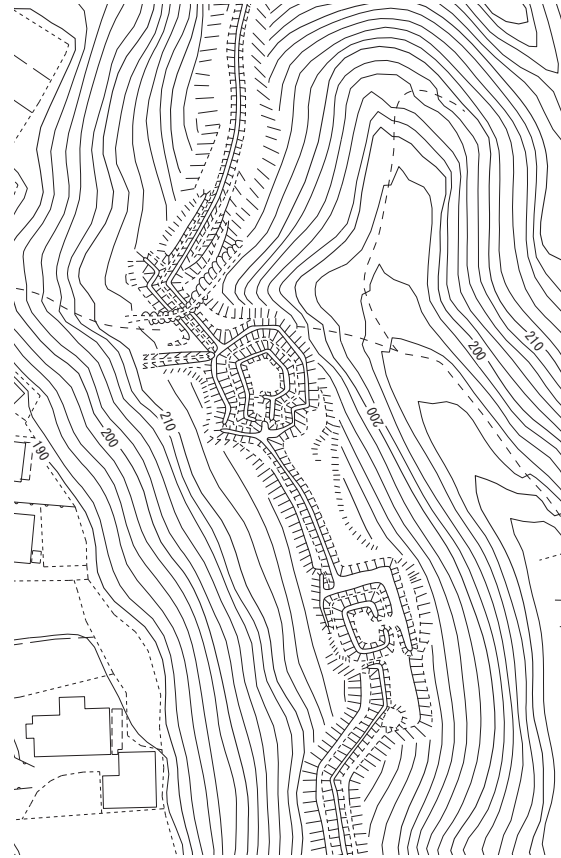
第 213 図 牛の皮城跡 (広島県) 地形図 (部分) (1/700)



第 214 図 上平城跡 (滋賀県) 測量図 (部分) (1/2,000)



第 215 図 名越2号砦跡縄張り図 (1/2,000)



第 216 図 岩屋城付城跡縄張り図 (1/2,000)



第 217 図 三木城攻めのシクノ谷峰構付城跡 (兵庫県) 遺構平面図 (1/1,000)

第2節 岡山県の中世城館研究史

1 はじめに

平成28年度文化庁『埋蔵文化財関係統計資料』⁽¹⁾によると全国には古代から近世まで35,829の城館の存在が知られる。時代別では、古代と江戸時代のものを除いた中世の城館数が最も多く、その数31,506と全体の88%を占める。この数は都道府県単位で実施された中世城館の悉皆調査成果等が反映されたものであるが、ここに示された岡山県の1055の城館数は平成25年開始の岡山県中世城館悉皆調査実施以前の数値であって、実態を示すものではない。岡山県の悉皆調査は、周知の1,055城跡に地誌類や地籍名等を精査して城館の可能性を有するものを加えた1,423城を対象に実施された。この結果、城館の新たな確認や、所在が不明な城館、現地で検討したが城館とは認められず消滅としたもの等を取捨検討し、現時点で1,126城跡の存在が明らかにされた。

岡山県下の中世城館研究は、江戸時代に制作された国絵図や地誌類等への収載城館情報を出発点として、その内容は近・現代の郡誌や市町村等自治体史に活用されてきた。研究が大きく進展したのは、我が国が高度経済成長期に入った昭和40年代以降の大規模開発に伴う城館の発掘調査件数の増加、および昭和54年以降の城郭遺跡を地域史解明のための史料と位置づけ、こうした意識で行われた縄張り調査の高まりを契機とする。その後も文献史学・縄張研究・考古学の立場から多くの研究がなされてきた。この結果、城館跡は地域の歴史を解き明かす歴史資料として認識されてきたといえる。

2 国絵図・地誌類にまとめられた城館

織田信長や豊臣秀吉による天下統一の過程で出された「天正の城破令」や、豊臣氏滅亡後に徳川家康によって出された慶長12(1607)年の「天下一統山城停止令」、さらには慶長20(1615)年徳川氏によって出された「元和の一国一城令」などによって、それまで戦乱を背景に各地に造られた戦略上重要な山城の多くが破却された。県下においても秀吉による天正14(1586)年の山城停止令が備中の茶臼山城(矢掛町)と浅口市の鴨山城両城の伝承⁽²⁾に見られ、いずれも山城を廃して麓に館を構えさせられたという。その後、戦乱の世が終焉を迎えたことで、存在意義を無くした多くの山城は役目を終え、廃城となり、やがてその多くは人々の記憶から忘れ去られた。

こうした城館を調査し、再度認識させる契機となったのが、江戸幕府が諸藩に命じた国絵図の作成である。国絵図は、諸藩領内の状況や生産高の実態掌握のため、慶長9(1604)・正保元(1644)・元禄9(1696)・天保2・6(1831・1835)年の4回にわたって作られ、国境の境界や郡名、村落名と生産高や主要河川や主要道を示したもので郷帳とともに幕府へと提出された。実態は、諸藩領地と諸国間交通、並びに居城図や主要山城の位置など軍事拠点を掌握するための軍事上の目的であった⁽³⁾。

また、江戸時代の中期になると、地域に残る古典や古物を実証主義的な方法で研究する学問である国学が勃興する。これを反映して、備前・備中・美作でも口伝等によって伝えられてきた歴史や伝承を編纂し、領国・特定地域・便覧等の地誌に留めるようになり、ここに古城(跡)も取り上げられた。

主なものでは、備前では石丸定良が元禄13～17(1700～1704)年に『備前記』⁽⁴⁾を、享保6(1721)年には『備陽記』⁽⁵⁾を著し、宝永6(1709)年には高木太亮が『和気絹』⁽⁶⁾に和気郡・磐梨郡・邑久郡・

上道郡・御野郡・赤坂郡・津高郡・児島郡の各郡内に存在する合計 41 の城館が来歴を含め収録された。さらに、元文 4 (1739) 年には、和田弥兵衛正尹他によって岡山藩唯一の官撰の領国地誌である『備陽国志』⁽⁷⁾ が成立。御野郡・津高郡・赤坂郡・磐梨郡・和気郡・邑久郡・上道郡・児島郡内所在の 208 城の他、備中の岡山藩領と鴨方藩領に存在する 22 城を含めた合計 230 城が書上げられた。

備中では、享保 11 (1726) 年に『古戦場備中府志』⁽⁸⁾ が平川親忠によって軍記や子孫の伝記等を参考に上房郡 14 城、川上郡 24 城、英賀郡 23 城、哲多郡 26 城、小田郡 20 城、後月郡 14 城、下道郡 12 城、窪屋郡 12 城、浅口郡 17 城、都宇郡 7 城、賀陽郡 21 城等、合計 190 城の城が来歴を含め収録された。しかし安永 9 (1780) 年成立の古川古松軒『吉備の志多道』⁽⁹⁾ では信憑性についての批判がなされている。その後、宝暦 3～5 (1753～1755) 年には石井好胤によって『備中集成志』⁽¹⁰⁾ が著され、『古戦場備中府志』とは郡によって数が多少異なるものの同数の 190 城が収録された。

美作では、元禄 4 (1691) 年に津山藩主森長成が家老の長尾隼人に命じて編集させていた『作陽誌』⁽¹¹⁾ が成立。編集は各村に命じて作成させた書上げを材料とし、これを江村宗晋がまとめたもので、西 6 郡の苫南郡・苫西郡・久米郡南分 (久米南条郡)・久米郡北分 (久米北条郡)・大庭郡・真島郡内に存在する古城跡についての記述が見られる。また、延宝 6 (1678) 年から元禄 10 (1697) 年にかけて森藩家臣木村昌明が諸書籍や諸氏の先祖勲功を集めて『武家聞伝記』⁽¹²⁾ を編集。美作地方の古城を「美作国中古城之覚」としてまとめた。内容は正保 2 (1646) 年に津山藩森家が幕府に提出した「正保国絵図」の帳面に書上げられた 54 城、および『太平記』⁽¹³⁾ に記載された重複する 9 城を含め、西北条郡 4 城、久米北郡 13 城、吉野郡 11 城、苫北郡 10 城、英田郡 24 城、苫西郡 8 城、大庭郡 8 城、真島郡 19 城、久米南郡 24 城、東北条郡 9 城、勝田北郡 18 城、勝田南郡 6 城、さらに吉野郡追加 3 城の合計 166 城が収録された。文化 12 (1815) 年に成立の『東作誌』⁽¹⁴⁾ には、『作陽誌』に収録されなかった東 6 郡 (東南条郡・東北郡・勝北郡・勝南郡・吉野郡・英田郡) が追補され、155 の城館と 100 の屋敷が収録された。

3 軍記文学・軍記物等に登場する城館

岡山県での城郭の初見は、建暦 2 (1212) 年以降延慶 2 (1309) 年までの間に成立したと『平家物語』の中に見られる。妹尾太郎兼安が「ふくりゅう寺縄手」の「さゝのせまり」に城郭を構えた記事である⁽¹⁵⁾。しかし、山城の出現は応安 3 (1370) 年までに成立とされる『太平記』以降で、南北朝期の動乱を背景に備前の三石城・熊山城、備中の福山城・松山城、美作の竹山城・鞍懸城・篠向城等約 20 城が登場する。その後、江戸時代中期頃から軍記物が各地で制作され始める。

主なものを挙げると、備前では、『備前文明乱記』⁽¹⁶⁾ が文明 15 (1483) 年から長享 2 (1488) 年の備前福岡合戦を描き、福岡城の攻防に関わる城が見られる。安永 3 (1774) 年には岡山藩士土肥経平が備前を中心に諸家に伝わる記録類をもとに嘉吉元 (1441) 年から慶長 8 (1603) 年の池田氏入部までの間の動乱を著した『備前軍記』⁽¹⁷⁾ があり、赤松・浦上・宇喜多氏の興亡記事に多くの城が登場する。

備中では、『中国兵乱記』⁽¹⁸⁾ と『備中兵乱記』⁽¹⁹⁾ がある。『中国兵乱記』は、中島元行が自身の体験と見聞を元和元 (1615) 年に書き残したものとされ、明応 2 (1493) 年から慶長 19 (1614) 年までの叙述である。『備中兵乱記』は、備中松山城主三村元親が天正 2 (1574) 年から翌年に毛利氏に攻められ滅亡するまでの諸城での戦いが描かれた。

美作では『美作太平記』⁽²⁰⁾ が地域の群雄割拠を題材として制作され、物語中には各地の城が登場し、地

誌類と共に後世に伝える役割を果たす。ただし、中には存在自体や城名、城主名等には疑うべき記述も見られる。この他には、後藤氏の三星城を宇喜多氏が落城させるまでの顛末と東作地方の諸城と国衆の興亡を記した『三星軍伝記』⁽²¹⁾や岩屋・神楽尾・高山・高屋・横田の諸城の合戦の概要を記した『天正年中美作国古城合戦記』⁽²²⁾等がある。以上、代表的なものを挙げたが、いずれも岡山県の戦国時代史を牽引してきた歴史資料であるが、内容に信憑性を欠くものも多く見られる。

この他、軍記とは異なり、萩藩主毛利吉元が家臣永田政純に命じて萩藩諸家に伝わる古文書と系譜を集成した史料集萩藩の『閥閥録』⁽²³⁾が享保10(1725)年成立する。毛利氏をはじめ大内氏・尼子氏など戦国時代における中国地方の有力大名の興亡や織田・豊臣政権との関係を知るうえにおいて貴重な資料といえ、備中・美作地方の動向のなかで城館の消長も数多く知られる。

4 近代の城館研究

明治時代後期から太平洋戦争終結までの間、城館は近世の地誌類の記載内容を踏襲した形で主に郡誌や町誌⁽²⁴⁾へ収載されてきた。こうした中、美作では椎口松玲氏が昭和3(1928)年に『英田郡史考』⁽²⁵⁾を著し、美作の戦国時代史をはじめ郡内に存在する46の城館や構について個別に縄張り略測図を添えて城史の詳述を行った。また、昭和4(1929)年には片岡竹市氏が『月田郷土史』⁽²⁶⁾を刊行され、そこに収載された三堂坂城・月田城等の縄張り略測図には防御を意識した「曲輪」や「堀切」等の書き込みがなされていた。

その翌年の昭和5(1930)年には永山卯三郎氏によって、地誌類に収載された全県下の城館記事を「鈔記せしもの也、固より玉石同架甚だ疑わしきもの、外は之を収載」とし、備前国235城、備中国241城、美作国166城の合計642城を「戦国時代の諸城陞」として『岡山県通史』に集成された⁽²⁷⁾。

備中では、昭和12(1937)年には永山氏が『吉備郡史』の中で、吉備郡に所在する城を「平地城」と「山城」に分類され、『平家物語』・『備中誌』・『備中府志』等の記載内容から鳥嶽城以下11城を鎌倉時代から戦国時代への位置づけを行い、また戦国時代の城については「戦国時代の諸城砦」⁽²⁸⁾としてまとめられた。注目されるのは、収載された山城の曲輪配置が高低差を意識した現在の縄張り調査で主流となっているケバ線によって表現され、しかもそれを周辺地形の中に入れ込むなど視覚化が図られていた点である。さらに、倉敷市南山城跡の縄張り略測図に描かれた畝状豎堀群には「小堤防七條」および「大堤防三條」・「中堤防一條」等の書き込みが見られ、氏はこの頃すでにこの遺構を防御施設として認識されていたことが知られる。ただし、並行する豎堀群より豎堀間の高まりである土塁を重要視していたことも窺われる。

備前では、昭和15(1940)年には『改修赤磐郡誌』⁽²⁹⁾が刊行され、荒木誠一氏は「城址と戦跡」において赤磐郡のみならず周辺の御津郡・和気郡・邑久郡・上道郡・勝田郡・久米郡の一部の城館83城を対象に来歴をまとめられた。そこでは天神山城や茶臼山城をはじめ主要8城についての概述がなされ、そのうち茶臼山城や白石城に所在する畝状豎堀群についてもふれられ、これを「穴堀」と表現されている。

5 現代の城館研究

昭和20年代から40年代にかけて昭和の大合併を契機に県下各地で制作された自治体史⁽³⁰⁾は、近世地誌類の記述内容を踏襲するものがほとんどであった。そうした中で特筆されるのが、寺坂五夫氏によって昭和30(1955)年から33(1958)年にかけてまとめられた『美作古城史』⁽³¹⁾である。『作陽誌』や『東作誌』さらには『美作古城記』等地誌や城誌等へ記載された城館名や、伝承・地籍名等によって知られる計385の

城や城主について関係合戦譚や諸家の記録等を取捨検討された大作といえる。その後、昭和42(1967)年と昭和43(1968)年には、『日本城郭全集』10岡山県⁽³²⁾と『日本城郭全集』補遺編⁽³³⁾が刊行され、相賀庚氏によって昭和5(1930)年の永山氏の「戦国時代の諸城跡」以来となる県下595城の集成がなされた。

(1) 縄張研究と考古学

昭和40年代後半から昭和50年代になると高度経済成長を背景に全国各地で開発に伴う遺跡の発掘調査が行われ、県下でも多くの城館跡がその対象になった。発掘調査は、縄張り調査では不可能であった城館構造を明確にするとともに、出土遺物は築城から廃城時期の解明を可能とするばかりか、城内での生活や城主の力を背景とした交易のあり方にまで研究対象を広める役割を担った。考古学の研究手法が縄張り調査研究に取り入れられたことで、以後の城館研究が大きく進展することとなったといえる。

このタイミングで出版されたのが『日本城郭大系』第13巻⁽³⁴⁾である。昭和55(1980)年刊行の同書「岡山県」には葛原克人氏編集により近世地誌類はもとより近・現代の市郡町村史を網羅して県下の城館886城が集成された。中でも備前・備中・美作に所在する主要な110城跡については考古学の視点から備前を出宮徳尚氏、備中を葛原克人氏、美作を河本清氏によって発掘調査成果・来歴等関係文献、さらに各氏が独自に作成した縄張り図をもとにその内容が詳述された。従来の地誌類には見られなかった縄張り図と城史が一体となった著作といえる。また、用田政晴氏は、美作地方で確認された諸城の立地、縄張りについて考古学の視点から、中世山城研究への展望を行った⁽³⁵⁾。その後、昭和58(1983)年に、出宮氏によって、備前を中心に蓄積された縄張り図から戦国期の山城を対象に、城郭を構成する曲輪配置の検討⁽³⁶⁾がなされた。この結果、一類(主郭単一型)、二類(副郭付き単一主郭型)、三類(羅列的主郭複合型)、四類(中心郭群複合型)、五類(多極中心郭複合型)、六類(中核付中心郭群複合型)の6分類が行われ、一類と二類が小国人層もしくは有力小領主の居城、三類が数郷から郡の大半を領有した国人層の居城、四類が一郡以上の領地を保持した有力国人層の居城、五類が大人層や戦国大名の有力直臣の居城、六類は国堅固の城で戦国大名の居城を想定された。また、出宮氏は昭和62(1987)年には県下で発掘調査が実施された12の城館を網羅し、前述の類型分類と城主層の想定について各城跡の相対的な位置関係を示すとした⁽³⁷⁾。

(2) 縄張図作成の意義と成果

一方、縄張研究の立場からは、昭和54(1979)年には村田修三氏によって「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用することが必要」⁽³⁸⁾との提言がなされ、これを契機に曲輪・虎口・堀切・土塁等、平面構造を図化した縄張図の精度の高まりが見られるようになった。その成果は、昭和62(1987)年刊行の村田修三氏監修『図説中世城郭事典』⁽³⁹⁾において見られ、県下では村田氏をはじめ池田誠氏・八巻孝夫氏によって金川城跡、三石城跡、高松城跡、医王山城跡、笹向城跡等が道線法作図によるケバ線表現で描かれた縄張り図をもとに、新たな評価がなされるようになった。また、城館の発展段階についても村田氏⁽⁴⁰⁾・中井均氏⁽⁴¹⁾が、さらに千田嘉博氏による織豊系城郭の虎口の型式変化に着目しての研究⁽⁴²⁾が出されたのもこの頃で、いずれも以降の城館研究の指針となるものであった。

以後、こうした意識で描かれた縄張図を用いた研究が県下各地で見られるようになった。美作と備前の城郭について池田誠氏は詳細な縄張り図をもとに在地系の縄張りの中に織豊系縄張りを検討し、地域の特徴と大名間抗争に関わる大名の動向の考察がなされた⁽⁴³⁾。その後も村田氏の考えは県下自治体史にも反映され、1999年の横山定氏の「倉敷の中世城郭」⁽⁴⁴⁾をはじめとして、2003年尾崎聡氏「金光町の城と館」⁽⁴⁵⁾、2004年難波澄夫氏・橋本惣司氏「落合町の中世山城」⁽⁴⁶⁾、2005年尾崎聡氏「井原市の中世山城」⁽⁴⁷⁾、2006年邑久町の河本清氏「中世城館跡の概要」⁽⁴⁸⁾、2008年谷重豊季氏の芳井町「町域の城砦

跡」⁽⁴⁹⁾、2019年の島崎東「中央町の城館」⁽⁵⁰⁾等がある。また、ウェブサイトにて論考を掲載した畑和良氏の成果⁽⁵¹⁾も注目される。

(3) 地域の取り組み

地域に伝わる多くの城館跡はこれまで地域で顕彰され、保護・保存のための取り組みが実施されてきた⁽⁵²⁾。中には独自の調査も行われ、その成果は今日の城館研究に貢献している。主な活動を挙げると、岡山市の御津町ワンダークラブ歴史班による町内10城の調査⁽⁵³⁾。浅口市の浅口歴史探訪会による10城の縄張り調査⁽⁵⁴⁾。高梁市では「川面地域まちづくり推進(委)・史跡保存部会」が寺山城跡の整備を進めながら測量調査を行い、成果を測量調査報告書⁽⁵⁵⁾で公開し、さらに新見市では哲西民俗研究会が旧哲西町内に存在する10城を対象とした測量調査を実施。成果は機関紙『やたべ』での公開等がある⁽⁵⁶⁾。2010年には、こうした全国の城館跡の顕彰および保存会の集いである第25回国民文化祭「全国山城サミット」が津山市を会場に開催された。ここで刊行されたのが山形省吾氏の調査成果である208城の縄張り図を中心に美作地方の656城を収めた『美作国の山城』⁽⁵⁷⁾である。地誌や軍記等で複数存在していた城館名の整理と各城史の解説を文献史学の立場から森俊弘氏が行い、掲載された山形氏作成の城館縄張解説および美作地域の城館概説が中西儀昌氏によってなされた⁽⁵⁸⁾。中西氏は、美作地域の城館を大きく山城・丘城・館城に分類したうえで永禄以前と元龜・天正期では大きく様相が変化したとする。前者の16世紀前半まで在地領主は平地居館・丘城を構え、軍役に応じて有力者の居館や山上の詰め城等の拠点城郭に在番していたものが、後者では毛利氏と織田氏の勢力伸張に伴う境目の緊張により、国衆や土豪層が力量に応じた山城や丘城を築き、これが多数の城館が整備された背景と結論づけられた。また、美作に多く見られる構の存在についても注目し、構を分布から村落単位の土豪層が横並びに割拠する様相を示す城郭遺構と評価された。

(4) 発掘調査成果

1960年代になって、全国各地で大型の公共事業をはじめ民間開発事業が増加する。県下でも主なものでは中国縦貫自動車道路、山陽自動車道路等の道路建設、苫田ダム建設、圃場整備、採石、また近年では携帯電話や電波基地局の設置等によって大小様々な工事が実施されてきた。これに伴って今日までに大小およそ50城の記録保存のための発掘調査が行われた。

昭和42(1967)年～昭和64(1989)年

県下で城館研究に初めて考古学の研究方法が取り入れられたのは、1967年の岡山市富山城跡の発掘調査である⁽⁵⁹⁾。中世城館の発掘調査では嚙矢となる調査で、万成石採石による破壊に対応するため、現状の把握と記録保存を図ることを目的とした保存を前提とした調査であった。このため規模は最小範囲に留まるものであった。しかし、発掘調査は縄張り調査では限界であった地表面下に残された城館構造の実態解明には大変有効で、初期の石垣をはじめ、曲輪から検出された礎石列や周辺から出土した多量の瓦からは城内には瓦葺建物の存在が、またこれに共伴した輸入陶磁器類を中心とする土器類からは城内では嗜好性のある日常生活が営まれていたことをも明らかにした。

1972年と1973年には中国縦貫自動車道路建設に伴って真庭市赤野遺跡⁽⁶⁰⁾と植木遺跡⁽⁶¹⁾が、同じく1972年から1976年にかけて新見市岩屋城跡⁽⁶²⁾・土井城跡⁽⁶³⁾・藤木城跡⁽⁶⁴⁾・岸本城跡⁽⁶⁵⁾の発掘調査が行われた。ただし、この頃は行政が行う発掘調査の萌芽期とあって、体制や期間ともに十分とはいえないなかでの調査であった。したがって、対象範囲は調査区内の曲輪と堀切等に絞った限定的なもので、斜面を含めた城内の全貌解明には至らなかった。しかし、調査によって曲輪配置や各曲輪に伴う建物、さらには防御施設としての柵列等のあり方が、また城内出土の備前焼や常滑焼等の遺物からは築城年代の比定、

地域間交易の解明も可能となった。さらに、藤木城跡の調査では、城の直下の谷筋から切岸造成による居館跡が確認され、同時性から藤木城との関係が注目された。

1973年、井原線建設に伴う矢掛町川面遺跡の調査では、平野部に遺る条里地割の中に幅7～8mの堀で防御された一辺100mの方形居館の存在が確認され、内部に遺存した焼土や炭等からは館が焼失した可能性が窺われた⁽⁶⁶⁾。同例は、真庭市谷尻遺跡赤茂地区で1983年に確認された幅5mの堀によって画された東西80m以上、南北70m以上の方形館⁽⁶⁷⁾がある。内部からは23棟の掘立柱建物と石組み井戸の存在が認められ、出土した備前焼をはじめとする土器の編年観により室町時代中～後半の館であることが判明した。また、1985年、山陽自動車道建設に伴う笠岡市園井土井遺跡からは一辺約60mの範囲内には大規模な礎石建物を含む南北朝から室町時代にかけての17棟の建物が重複して検出された⁽⁶⁸⁾。さらに、1986年には南北朝時代から天正3(1575)年まで備中の国人多治部氏の館跡と考えられた新見市の田治部氏館跡が調査された。館内からは6棟の大型建物と2棟の蔵跡と考えられる遺構が規則性をもって存在しているのが確認された。⁽⁶⁹⁾

一方、山上の城では城主を浦上宗景の宿老明石飛騨守とする岡山市の保木城跡が1979年に碎石工事に伴って調査が行われた。標高181mの頂部には懸造りの建物を配した主郭をはじめ、尾根には礎石建物を含む大小18の曲輪が配置されていた。城内からは多量の土器類の他、炭化した約200kgの穀類(ムギ・イネ・アワ)が出土し、籠城時に備えた備蓄穀物として注目された⁽⁷⁰⁾。また、1985年には赤磐市の周匝茶臼山城跡の標高約170mの頂部主郭からは建物に伴う多数の柱穴と土坑が検出された。中でも一辺9m、深さ4m以上の大型竪穴遺構はその構造から生活物資や武器の貯蔵を兼ねた住居施設と想定された。また、主郭から出土した遺物からは15世紀後半から17世紀にかけての日常生活を物語る土器類の他に硯や天目茶碗等城主の階層性を窺わせる内容の遺物が数多く見られた⁽⁷¹⁾。

1987年には、天正10(1582)年の羽柴秀吉による備中高松城攻めに関わる城の調査が行われた。岡山市甫崎天神山城跡⁽⁷²⁾と忍山城出城跡⁽⁷³⁾である。甫崎天神山城跡は毛利方の陣城で、尾根筋と頂部を中心に8面の曲輪と8棟の建物確認された。尾根の後方を防御する堀切と南側斜面にも防御のための施設が認められない点から出撃のための拠点と性格づけられた。一方、忍山城出城跡は忍山城の出城ではなく、宇喜多方の忍山城を攻撃するための毛利方の築いた「相城」とされた⁽⁷⁴⁾。

平成元(1989)～平成31(2019)年

1991年にも総社市内のゴルフ場建設に伴って予定地内にある6か所の砦状遺構の内、名越砦跡と千引砦跡の2か所の発掘調査が行われた。両砦跡は同時に調査がなされた千引砦と大陣屋を繋ぐ土塁と共に備中と備前の国境に位置し、周囲を簡易な土塁で防御された状況から、これも天正10(1582)年の羽柴秀吉による高松城攻め時の陣城と考えられた⁽⁷⁵⁾。

1995～1998年には、苫田ダム建設に伴って吉井川上流域の鏡野町久田地域において発掘調査が行われた。久田地域は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝で、文明13(1481)年の「山名政之注進状」に見える久田庄に比定され、平野部には久田堀ノ内遺跡⁽⁷⁶⁾と河内構跡⁽⁷⁷⁾の館跡が、また平野部を見下ろすことのできる山側尾根筋には河内城跡⁽⁷⁸⁾・久田上原城跡⁽⁷⁹⁾・城峪城跡⁽⁸⁰⁾・比丘尼ヶ城跡等が所在し、対象地内は斜面部を含めて全面調査が実施された。久田堀ノ内遺跡は、規則性をもった掘立柱建物群が周辺に存在する小城下町を彷彿させる中、一辺75mから最長130mに達する三種類の規模と時期の異なる堀によって囲まれた館跡で、内部からはそれぞれの館に伴う状況で掘立柱建物や井戸等が検出された。出土遺物によって南北朝時代・室町時代・近世の三時期にわたる変遷が判明した。河内構跡は吉井川の左岸段丘面にあっ

て、西側段丘斜面以外に防御施設をもたず、3条の溝によって区分された平坦な造成面からは主軸を揃えた建物群や石組みの井戸等が検出され、美作に多いとされる構の構造の一端が明らかとなった。一方、河内城跡・久田上原城跡・城峪城跡では、城内での曲輪配置はもとより建造物の有無や土塁・切岸・曲輪等構築工程の解明がなされた。また城内からは備前焼や輸入陶磁器・土師器・鉄鍋等、貯蔵や食事に関わる遺物の他、鉄鎌・雑刀・礫石等の武器類、さらには建物の建築に使用されたことを推測させる多数の鉄釘が見られ、土器類は築城年代を南北朝時代の14世紀後半への位置づけを可能とし、その他の遺物は城内での日常を窺わせる資料となった。また、これら4城に近接する天狗山城跡と東山城跡を含む6城が約1km間隔に配置されている状況について、軍勢の移動等情報伝達のための城郭間ネットワークの存在と、さらに南北朝時代の山城の特徴として、堀切は2条で曲輪は小規模なものが多く、その間には自然地形を残す点が指摘⁽⁸¹⁾された。

この他にも、碎石・採土、道路工事、史跡整備、さらに近年数を増す電波等基地局の設置に伴う大小規模の発掘調査が各地で行われた。

出土遺物と曲輪のあり方から南北朝時代に比定されたのが2008年の井原市の青蔭城跡⁽⁸²⁾、さらに15世紀代までの存続が判明した1996年の岡山市の熊谷城跡⁽⁸³⁾である。熊谷城跡からは、備前焼の大甕を含む日常土器類と共に瀬戸の天目や卸皿、硯、鉄製鋤先、炭化した塊状を含む多量の穀類が出土した。山城跡からの穀類の出土は、地上デジタル中継放送局の設置に伴い2010年に調査が行われた浦上宗影の宿老日笠頼房の居城とされる和気町青山城跡⁽⁸⁴⁾からも確認されている。検出された二の郭建物1は被熱面の存在から炊事場が、建物3は床面全体に夥しい炭化穀類(オオムギ、コムギ、コメ、キビ)が1520g出土したことから穀倉跡と考えられ、天正5(1577)年4月の宇喜多直家による青山城攻めの際の焼失、廃絶伝承を考古学的に裏付ける調査例とされた。

岡山市高松・足守地域では、天正10(1582)年の高松城の攻防に関係した城館の調査が行われた。1997年の備中高松城三の丸跡⁽⁸⁵⁾と1998年、2001年、2002年の備中高松城水攻め築堤跡⁽⁸⁶⁾、さらには1997年の足守地区のすくも山城跡⁽⁸⁷⁾と2004年の一国山城跡⁽⁸⁸⁾である。備中高松城三の丸跡からは、高松城築城以前の14世紀代の集落の存在とその後築城整備された三の丸の南辺を画する幅約4m、深さ約2mで断面逆三角形を呈する堀の存在が確認された。国指定史跡「蛙ヶ鼻築堤跡」に繋がる水攻め築堤跡の調査区では、底幅約27mの築堤痕跡と、基底面からは築堤材である多量の俵痕跡(長さ30~60cm、単軸30~60cm、厚さ20cm)が検出された。一方、すくも山城跡と一国山城跡はいずれも全長30m程の小規模な城で、すくも山城は天正10(1582)年の羽柴秀吉が児島之内郡年寄中に出した書簡等に見られる「すくも塚の城」に比定され、また防御施設である堀切が東側にのみ偏在することを根拠に城は毛利氏の織田勢に対するもので、冠山城の出城とされた⁽⁸⁹⁾。一国山城跡も秀吉方による冠山城攻めのために兵を揃えた場所として『中国兵乱記』に見られる。報告書では頂部から南西方向下段に二つの段状遺構が造られ、そこからは14世紀前半から中葉にかけての土師器椀と鍋や備前焼、亀山焼、東播系の鉢等がまとまった状況で、さらに鉄鎌の出土や石列の検出が報告され、一国山城跡以前の遺構と考えられた。これに対して筆者は、県下で行われた発掘調査成果をもとに南北朝期の城館についてまとめたことがある⁽⁹⁰⁾。その中で検出された二つの段状遺構と頂部平坦面については、いずれも南北朝期の特徴をもった曲輪配置で、石列とされた集石はこれに伴う礫石とし、これが後に秀吉方による冠山城攻めの陣城「一国山」として整備され、再利用されたと考えた。同様に、古い山城を後に陣城として再利用したと考えられる城に真庭市羽庭城跡⁽⁹¹⁾がある。南北朝期の土師器鍋や亀山焼の甕の出土と縄張りから想定⁽⁹²⁾したが、森氏は天正7(1579)年の宇喜多方

の攻撃に備えた毛利方の陣所とされた⁽⁹³⁾。これに関して、2001年調査の真庭市見明戸の小坂向城山城跡は、一辺約60mの長方形を呈し、周囲に総社市千引砦や名越砦等に酷似する土塁を廻らしたものであったが、内部からは建物等生活痕跡が全く見られなかった状況から、性格を必要時に街道を見張るための見張り台と考えられた⁽⁹⁴⁾。

なお、2017年からは倉敷市南山城跡で小田川改修工事に伴っての発掘調査が行われた。全面調査によって、二重堀切・土塁・畝状竪堀群で防御が厳重に固められた曲輪を含め、全ての構造が解明されたといえる⁽⁹⁵⁾。南山城の築城時期とその性格については、小川文好氏は天正2(1974)～9(1581)年の間に毛利氏が築いた「境目の城」で慶長5(1600)年まで機能していた⁽⁹⁶⁾とし、最近の畑和良氏の研究では天正11(1583)年の毛利・宇喜多両氏の分国境界の確定に対応して毛利氏が整備した可能性が指摘⁽⁹⁷⁾されている。

一方、平地に所在する館城の調査も各地で行われた。1992年の勝央町茂平城跡⁽⁹⁸⁾、2001年の総社市総社遺跡⁽⁹⁹⁾、2003年の真庭市高田城三の丸遺跡⁽¹⁰⁰⁾、2004年の岡山市中島城跡⁽¹⁰¹⁾、2007年の津山市院庄構跡⁽¹⁰²⁾等である。

茂平城跡は、比高差10mの低位な丘に上下二段の曲輪で構築された館城である。主郭をはじめとする各曲輪には13棟の建物跡が確認された。注目されたのは、12基の地下式横穴の存在である。戦乱時の略奪に備えた隠し物や人々が難から逃れるための地下の避難場所としての性格が考えられ、類例は津山市百々遺跡⁽¹⁰³⁾でも見られた。総社遺跡は、備中高松城主清水宗治の家臣国府市正の居館跡と伝承される館跡で、その一部が国道180号バイパス建設に伴って調査された。16世紀代まで機能していた堀を埋めて防御を固めるために新たに土塁が構築されているのが確認された。この防御線の改修・強化が天正8(1580)年の毛利氏による備中南部境目諸城の強化策と考えられた。平野部にあつて旭川沿いの要衝に位置する中島城跡は、中島大炊を城主と伝える幅5mの堀を廻らした一辺50mの方形居館であったが、土砂で埋没した脆弱な旧河道の上に選地せざるを得ない造りであった。河川交通の要衝を抑える橋頭保的な役割が防御に優先した館城づくりの一例⁽¹⁰⁴⁾といえる。この他、高田城の西麓に位置する高田城三の丸遺跡の調査からは、15世紀から17世紀初頭にかけて4期にわたる建物や井戸で構成された生活面が確認された。院庄構跡は、森忠政美作入府に際して津山城築城までの約1年間、仮の館として整備された。『森家先代実録』⁽¹⁰⁵⁾によると約90m四方の本丸と外郭から構成され、いずれにも幅14～23mの堀を廻らした平城であったことが知られる。2007年以降数次の確認調査が実施され、その結果、堀の規模が『森家先代実録』記載内容とおおむね一致することが確認された。

(5) 織豊期の城郭

発掘調査の増加によって、16世紀後半の織豊期を特徴づける城郭の存在も明らかとなってきた。石積・石垣および虎口等の防御施設と礎石建物や瓦を指標とする織豊系城郭⁽¹⁰⁶⁾の存在である。この系譜に繋がる支城、陣城(付城)群等について、各地で新たな確認と評価がなされている。

陣城

天正7(1579)年の毛利氏と宇喜多氏の断交以降、織田方羽柴秀吉による天正10(1582)年の備中高松城攻めを経て、天正13(1585)年までの間に「境目」各地で起こった合戦に係りして多くの陣城が構築された。備中高松城、八浜攻防戦、美作岩屋城等⁽¹⁰⁷⁾の攻防戦はその代表的なものである。備中高松城についての研究は古くから行われてきたが、周辺に所在する毛利・羽柴方の陣城群について縄張りを中心とする嚆矢となる研究が1987年に池田誠氏によって行われた⁽¹⁰⁸⁾。その結果、羽柴方の陣城群については鳥取城

攻めや賤ヶ岳合戦時の陣城に比べてはるかに劣る縄張りであるとの評価がなされた。また、畑和良氏も第一次史料の掘り起こしによって織田・毛利の備中戦役を整理し、さらに舞台となった下足守地区に所在する小規模な土塁圍繞の城郭に着目し、精緻な検討を行った⁽¹⁰⁹⁾。その結果、最新の虎口を備えた技巧的な土塁圍繞タイプの城郭は在地のものではなく、織田・毛利・宇喜多氏等広域権力の軍事的要請を背景に成立した織豊勢力の陣城とし、規模が100m以上で複郭構造の城を拠点的城郭、100m以下で単郭構造の城を陣城に分類された。また、下足守周辺に展開する堅固な陣城と高松城周辺の簡素な陣城に相違が存在する意味について、秀吉の戦略や段階的に進行する合戦状況が反映したものとされた。その後、2012年には乗岡実氏によって備中高松城攻めの織田方の陣城群のあり方と特徴の整理が行われた⁽¹¹⁰⁾。乗岡氏は、陣城群を3つの類型に分類し、1類を丘陵上において小規模な単郭の土塁囲みの陣城とし、1類は規模に大小偏差があるなか長さ50mを超える中核的な陣城が各地区に1城ずつ存在するとする。また、各陣城を結ぶ土塁については、陣城と一体化して連絡道・遮断線としての機能の他にも可視化効果を狙った施設との性格づけを行った。2類は1類より敵城に近い位置において攻城戦を控えた機能的な陣城。3類は、高松城周辺の丘頂から尾根筋において1類と2類に比較して大型化したものであるが、防御を固める土塁や虎口が認められないとした。この分類は備中高松城攻めが初期の足守周辺での拠点確保から各陣城群と土塁線による包囲網形成段階、さらに絶対優位を確保した段階で敵城の孤立と多数兵力を駐屯させ、後詰勢との戦闘に備えるための推移で、織豊政権が関わった攻城戦の普遍性との評価がなされた。

天正10(1582)年の八浜合戦については、池田誠氏が第一次史料および歴史伝承の読み込みを踏まえ、両兒子山城と麦飯山城、さらには周辺に所在する城郭構造の検討を行った。その結果、両兒子山城を宇喜多氏の城とした場合、特徴として畝状堅堀群・横堀・枳形虎口を挙げ、麦飯山城のなかでも東峰・麦飯山城については美作・備中での毛利氏関係の城郭に見られる「ある間隔に散らした配置の」堅堀構築技法を根拠に毛利氏の遺構と指摘された⁽¹¹¹⁾。

一方、備中高松城攻めから2年後の天正12(1584)年、宇喜多勢が中村頼宗の守る岩屋城攻めを開始し、岩屋城周辺の山塊に包囲のための陣城を廻らす。この陣城群の様子と「荒神の上」の構造略図が「岩屋城調査中間報告」⁽¹¹²⁾で示された。これら「陣城」群に注目した池田氏は、縄張り調査を行ない、2005年には調査途中ながら成果をまとめられた。氏は、陣城群を陣所・警備所・狼煙場に分類し、各地の織豊系陣城に見られる「方形枳形空間」・「低土塁」・小振りな「横堀」での囲隔・「方形プラン」・「平虎口」等が採用されていることと、「包囲ライン」は「塁」ラインと犬走り状「回廊」が結合した構造が三木合戦・鳥取合戦と類似することを指摘された。また、岩屋城攻めの陣城の一つ荒神上陣城について中西儀昌氏は、織豊系城郭が技術的に進化する最中の様相を示すもので、美作地方で織豊系縄張り技術が導入された最初の事例と評価された⁽¹¹³⁾。

その後、高田徹氏によって、岩屋城攻めの陣城(付城)群の縄張り調査が実施され、全貌が明らかとなった⁽¹¹⁴⁾。この結果、岩屋城を囲む全周約6.5kmに及ぶ付城ラインには、山頂等高所に構築された42の付城がおおよそ150m間隔で配置され、その間が土塁ラインで緊密に連結されていることを確認した。同時に複雑な地形に付城ラインを構築するためには、地形の調査・緊密な計画プランの存在が必要であったと考えられた。また、付城の最大125m、最小6mに代表される規模の格差について、これを機能差と考えられ、規模の大きな拠点的な付城は有事の防御施設指令所として、一方小規模な土塁を三方向に構築した特徴的なコ字型付城は監視所的な存在と想定された。また、土塁ラインに織豊政権に類似するところは認められるものの、虎口プラン等には織豊系城郭の特徴が見られないとの指摘がなされた。

石垣・瓦

岡山城の石垣研究は、すでに巖津政右衛門氏⁽¹¹⁵⁾、尾崎聡氏⁽¹¹⁶⁾をはじめとする先学による論考があるが、平成元(1989)年岡山城内で各種施設建設や史跡整備に伴う発掘調査が開始されると、これを契機に研究が大きく進展する。本丸跡からは宇喜多秀家による本格的な織豊系城郭の普請以前の曲輪と土塁を含め、秀家期から小早川秀秋を経て池田利隆による備前監国期にかけての埋没石垣が重層的に検出された⁽¹¹⁷⁾。乗岡氏は共伴する膨大量の瓦を層位や製作技法に基づく年代観により、同じく石垣についても層位や切り合い関係、さらに連続関係等から編年的位置づけを検討し、織豊期の岡山城の変遷を1～4式に分類された。1式は、天正年間(1573～1591年)宇喜多直家から秀家の幼少期を含む段階で、瓦はコビキAを伴い、石垣は構造的には土留めの低石垣・石組。2式は、文禄年間から慶長5年頃(1592～1600年)の宇喜多秀家期で、瓦はコビキA、石垣は織豊系城郭の指標である高石垣が構築され始めた段階。3式は、慶長6・7(1601・1602)年頃の小早川秀秋段階で、瓦はコビキBに転換、石垣は自然石の巨石使用高石垣の段階。4式は、慶長8(1603)年以降の17世紀第1四半期頃池田忠継期段階で、瓦はコビキB、石垣は反りや割石使用の高石垣とされた⁽¹¹⁸⁾。

支城

さらに、乗岡氏は県下の宇喜多氏関連城郭に伴う瓦⁽¹¹⁹⁾が岡山城と同范関係にあることに着目し、これを本城と支城の関係で捉え、支城を4段階に整理された⁽¹²⁰⁾。1式期は、宇喜多氏が既存の山城を整備・改修した段階で、同范関係をもつ金川城・徳倉城・岩屋城・篠向城が旭川に沿って南北に並ぶ状況から、対毛利戦略に基づく軍事ラインの形成と評価された。2式期には、岡山城を中心に近似する距離を隔てて所在する常山城・撫川城・高松城・徳倉城・荒神山城が挙げられ、瀬戸内海航路、玉島往来、山陽道、津山往来等交通の要衝を、さらに荒神山城を美作支配の戦略的拠点で旭川及び吉井川沿いに備前に至る陸路を固めたものとし、これら衛星的支城が岡山圏域を軍事的にも視覚的にも具現化したものと評価された。3式期は、領内諸城の廃城を進める一方、宇喜多氏の支城であった金川城・常山城・虎倉城・沼城を小早川秀秋が踏襲したとされた。4式期は、下津井城・金川城が挙げられ、下津井城は常山城の役割を引き継ぎ瀬戸内海上交通掌握のための拠点、金川城は徳倉城と虎倉城の北口の守りを集約した存在で、地域支配と西に対する軍事機能が統一した段階とされた。

一方、宇喜多氏の支城について出宮氏は、かつて城郭を構成する曲輪配置を分類⁽¹²¹⁾された中で、戦国後期の4～6類を対象に検討を行い、宇喜多氏の支城形成について論究された⁽¹²²⁾。氏は、宇喜多氏が亀山城を本城としていた戦国大名成長期(第1期)の支城に富山城・金川城・虎倉城・荒神山城を、本城を石山に構築し全国レベルの戦国大名に達した(第2期)の支城には常山城・虎倉城・亀山城を充て備前国制覇後の拡充的支城とし、これに天神山城・三石城・三星城を加えられた。それら支城の縄張りに振り分け方式の構成形態が認められたとし、それを築城のコンセプトと評価された。

城の類似性

岡山城と大坂城本丸の類似性については、すでに三浦正幸氏、中井均氏、乗岡実氏によって指摘されてきた⁽¹²³⁾。その後、岡山城本丸下の段において2期の構造を明らかにした乗岡氏は、曲輪や石垣の走行のみだけでなく、天守や大手門、御殿等の配置にも大坂城本丸との共通性をより明確にし、さらに、二の丸、外曲輪から城下町に至るまで両城の比較を行い全体に及ぶ相似性を明らかにされた⁽¹²⁴⁾。この背景には、豊臣秀吉と宇喜多秀家の特殊な関係が存在したとする。

6 おわりに

縄張り図を伴う城館跡の集成は、前述したとおりこれまでに旧国単位では美作が一例と行政単位では倉敷市、金光町、落合町、井原市、邑久町、芳井町、哲西町、中央町等でなされてきた。しかし、県下全域にわたる集成は本報告書が初めてで、確認された全ての城館の実態を縄張り調査によって明らかにした画期的な成果といえる。内容的にも縄張り図のほとんどがGPS及び道線法により描かれ、同一縮尺で統一した縄張り図は地域を越えての城館の比較・検討を可能とするばかりか、築城から廃城までの年代観や築城主体の階層を知るための歴史資料としても高く評価される。さらに、本報告書には第一次史料を中心とした文献に見られる城館記事から備前・備中・美作の中世社会の政治動向がまとめられており、岡山県における中世城館研究の基調となる研究報告といえる。 (島崎 東)

註

- 1 『埋蔵文化財関係統計資料—平成28年度—』文化庁文化財部記念物課 2017年
- 2 茶臼山城は『古戦場備中府志』の注に「山城の記を皆々こぼち捨て、平地に御館をつくる法度」が出され、鴨山城は城絵図「築山城之図」の書込み「関白秀吉公、諸国一円の仰せによりて、山上城を用いず、麓に平屋形を構え座し」とある。
- 3 川村博忠『国絵図』吉川弘文館 1990年
- 4 石丸平七郎定良『備前記』全9巻 元禄13(1700)年～17(1704)年
- 5 石丸平七郎定良『備陽記』全35巻 享保6(1721)年 日本文教出版 1965年
- 6 高木太亮軒「和気絹」全3巻 宝永6(1709)年 『吉備群書集成』第一輯 吉備群書集成会 1931年
- 7 和田弥兵衛正尹他『備陽国志』全13巻 元文4(1739)年 『吉備群書集成』第一輯 吉備群書集成会 1931年
- 8 平川金兵衛親忠「古戦場備中府志」 享保11(1726)年 享保20(1735)年改作・解題『吉備群書集成』第五輯 吉備群書集成会 1931年
- 9 古川古松軒「吉備の志多道」 安永9(1790)年 『吉備群書集成』第一輯 吉備群書集成会 1931年
- 10 石井好胤「備中集成志」全20巻 宝暦3(1753)年～宝暦7(1757)年 『備中集成志』 吉田書店 1943年
- 11 江村宗晋撰、長尾隼人勝明編「作陽誌」全3巻 元禄4(1691)年 『新訂作陽誌』3巻 作陽古書刊行会 1975年
- 12 木村昌明「武家聞伝記」 延宝6(1678)年 『岡山のアーカイブズ6(記録資料館活動成果史料集)』 岡山県立記録資料館 2012年
- 13 「太平記」『日本古典文学大系』3 岩波書店1962年
- 14 正木兵馬「東作誌」 文化12(1815)年 『新訂作陽誌』 作陽古書刊行会 1975年
- 15 妹尾太郎兼安が源義仲軍を「ふくりゅう寺繩手」の「さゝのせまり」を城郭に構えた記事(巻8妹尾最後)「平家物語」『日本古典文学大系』32・33 岩波書店 1959年、1960年
- 16 目黒裕欣「備前文明乱記」 永禄元(1558)年 『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 17 土肥経平「備前軍記」 安永3(1774)年 『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 18 中島元行「中国兵乱記」元和元(1615)年 『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 19 「備中兵乱記」 『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 20 菅原保実『美作太平記』 元禄年間(1688～1704)年 『新編吉備叢書』第一巻所収 吉備群書集成会 1931年
- 21 藤原某「三星軍伝記」『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 22 「天正年中美作国古城合戦記」 天保2(1831)年 『吉備群書集成』第三輯所収 吉備群書集成会 1931年
- 23 『萩藩閩閩録』山口県文書館 1967年
- 24 『和気郡誌』(明治42年)、『赤磐郡誌』(大正元年)、『岡山県勝田郡誌』(大正元年)、『上房郡史』(大正2年)、『邑久郡史』(大正2年)、『児島郡誌』(大正4年)、『阿哲郡誌』(大正4年)、『川上郡誌』(大正9年)、『上道郡誌』(大正11年)、『岡山県御津郡誌』(大正12年)、『都窪郡誌』(大正12年)、『英田郡誌』(大正12年)、『久米郡誌』(大正12年)、『真庭郡誌』(大正12年)、『吉備郡史』(大正12年)、『小田郡誌』(大正13年)、『浅口郡誌』(大正14年)、『岡山県後月郡誌』(大正15年)、『苦田郡誌』(昭和2年)、『岡山市史』(昭和11年)、『改修赤磐郡誌』(昭和15年)、『改定邑久郡史』(昭和28年)等市郡誌や『久世町誌』(昭和7年)等がある。
- 25 椎口松玲『英田郡史考』 1928年
- 26 片岡竹市『月田郷土史』 1930年
- 27 永山卯三郎「戦国時代の諸城跡」『岡山県通史』 岡山県通史刊行会 1930年
- 28 永山卯三郎『吉備郡史』中巻 吉備郡教育会 1937年

- 29 荒木誠一「城址と戦跡」『改修赤磐郡誌』 岡山県赤磐郡教育会 1940年
- 30 『岡山市史』(昭和39)、『井原市史』(昭和39)、『勝田郡誌』(昭和33)、『勝加茂村史』(昭和26)、『湯原町史』(昭和28)、『落合町誌』(昭和29)、『英田郡粟広村史』(昭和29)、『灘崎町史』(昭和31)、『鴨方町史』(昭和31)、『新野村史』(昭和32)、『常盤村史』(昭和36)、『備中町史』(昭和47)、『賀陽町史』(昭和47)、『上道町史』(昭和48)等がある。
- 31 寺坂五夫『美作古城史』 作陽新報社 1977年
- 32 相賀庚「岡山県」『日本城郭全集』10 人物往来社 1967年
- 33 相賀庚「岡山県」『日本城郭全集』補遺編 人物往来社 1968年
- 34 葛原克人・出宮徳尚・河本清「岡山県」『日本城郭大系』第13巻 新人物往来社 1980年
- 35 用田政晴「美作における中世山城について」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会 1979年
- 36 出宮徳尚「戦国城郭の構成試論」『小室栄一教授古希記念論文集』 五月書房 1983年
- 37 出宮徳尚「中世城郭」『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年
- 38 村田修三「城跡調査と戦国史研究」『日本史研究』211 1980年
- 39 村田修三監修『図説中世城郭事典』 新人物往来社 1987年
- 40 ・村田修三「中世の城館」『講座・日本技術の社会史』6 日本評論社 1984年
 ・村田修三「城の発達」『図説中世城郭事典』第2巻 新人物往来社 1987年
- 41 中井均「中世城館の発生と展開」『物質文化』第48号 物質文化研究会 1986年
- 42 千田嘉博「織豊系城郭の構造」『史林』70-2 1987年
- 43 ・池田誠「美作国における中世城郭の一考察—縄張り研究の視点からみた天正期津山盆地の政治情況—」『中世城郭研究』第8号 中世城郭研究会 1994年
 ・池田誠・光畑克己「縄張り研究の視点からみる「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の一考察—天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による築城動向(その1)—」『中世城郭研究』第12号 中世城郭研究会 1998年
- 44 横山定「倉敷の中世城郭」『新修倉敷市史』 1999年
- 45 尾崎聡「金光町の城と館」『金光町史』 2003年
- 46 難波澄夫・橋本惣司「落合町の中世山城」『落合町史』通史編 2004年
- 47 尾崎聡「井原市の中世山城」『井原市史』通史編 2005年
- 48 河本清「中世城館跡の概要」『邑久町史』考古編 2006年
- 49 谷重豊季「町域の城砦跡」『芳井町史』通史編 2008年
- 50 島崎東「中央町内の中世城館」『中央町史』資料編 美咲町教育委員会 2020年
- 51 畑和良「落穂ひろい」http://homepage2.nifty.com/OTIBO_PAGE/index.htm
- 52 備前では亀山城跡保存会。美作では真庭歴史研究会、および美作の中世山城連絡協議会が中心となり、岩屋城を守る会、医王山城跡保存会、神楽尾城跡保存会、矢筈城跡保存会、田辺城保存会、三星城跡保存会が、備中では高越城址顕彰会、平川の歴史をかたる会等が顕彰と保護活動を行っている。
- 53 御津町ワンダークラブ歴史班「御津の山城」 2002年
- 54 浅口歴史探訪会「浅口地域の中世山城探訪2013年版」 2013年
- 55 尾上元規「寺山城跡測量調査報告書」高梁市教育委員会 2009年
- 56 ・島崎東「備中西山城とその周辺の中世山城」『やたべ』39 哲西民俗研究会 2007年
 ・島崎東・竹原伸之「哲西の山城Ⅱ」『やたべ』43 哲西民俗研究会 2013年
- 57 『美作国の山城』第25回国民文化祭津山市実行委員会 2010年
- 58 中西儀昌「概説—美作国の山城・丘城・館城—」『美作国の山城』第25回国民文化祭津山市実行委員会 2010年
- 59 ・富山城跡発掘調査団『富山城跡第1次調査報告』岡山市教育委員会 1968年
 ・出宮徳尚他『富山城跡第2次調査報告』岡山市教育委員会 1969年
- 60 岡田博他「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 岡山県教育委員会 1973年
- 61 田中満雄「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 岡山県教育委員会 1976年
- 62 岡田博「岩屋城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20 岡山県教育委員会 1977年
- 63 下澤公明「土井城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21 岡山県教育委員会 1977年
- 64 浅倉秀昭「藤木城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23 岡山県教育委員会 1978年
- 65 松本和男「岸本城址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』22 岡山県教育委員会 1977年
- 66 下澤公明「川面遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 岡山県教育委員会 1974年
- 67 森田友子「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』4 北房町教育委員会 1986年
- 68 福田正継「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』70 岡山県教育委員会 1988年
- 69 高畑知功「田治部氏屋敷址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67 岡山県教育委員会 1988年
- 70 ・松本和男「保木城址第1次発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会 1980年
 ・松本和男「保木城址第2次発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』11 岡山県教育委員会 1981年

- ・岡本芳明「備前保木城について」『森宏之君追悼城郭論集』 織豊期城郭研究会 2005年
- 71 松本和男『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』 岡山県吉井町教育委員会 1990年
- 72 宇垣匡雅「甬崎天神山城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994年
- 73 井上弘『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』72 岡山県教育委員会 1989年
- 74 山本浩樹「天正年間備中忍山合戦について」『岐阜工業高等専門学校紀要』第29号 1994年
- 75 武田恭彰「千引遺跡」「名越遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 総社市教育委員会 1999年
- 76 弘田和司「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 77 下澤公明「河内構跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 78 島崎東他「河内城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 79 亀山行雄「久田上原城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 80 亀山行雄「城峪城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 81 亀山行雄・佐藤寛介「久田地区の中世山城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 岡山県教育委員会 2003年
- 82 高田知樹「青蔭城跡」『井原市埋蔵文化財発掘調査報告』3 岡山県井原市教育委員会 2009年
- 83 ・長谷川一英「熊谷城址出土の遺物について—金銅製品編—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 岡山市教育委員会 2016年
- ・長谷川一英「熊谷城址出土の遺物について—鉄製品・石製品・銭貨編—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 岡山市教育委員会 2017年
- ・長谷川一英「熊谷城址出土の遺物について—施釉陶器編—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 岡山市教育委員会 2018年
- 84 米田克彦「青山城跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』41 岡山県教育委員会 2011年
- 85 高橋伸二『備中高松城三の丸跡発掘調査概報』 岡山市教育委員会 2000年
- 86 高橋伸二『備中高松城水攻め築堤跡』 岡山市教育委員会 2008年
- 87 草原孝典『すく毛山遺跡』 岡山市教育委員会 1998年
- 88 神谷正義他「一国山城跡」『南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群』 岡山市教育委員会 2006年
- 89 草原孝典「大名間抗争による在地秩序の解体—備中高松城水攻め周辺にみる—」『森宏之君追悼城郭論集』 織豊期城郭研究会 2005年
- 90 島崎東「岡山県下における中世前半期の城郭」『研究報告』33 岡山県立博物館 平成25年
- 91 池上博「羽庭城」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3 久世町教育委員会 1999年
- 92 注90に同じ
- 93 森俊弘「西美作、攻城戦のなごり」『教育時報』819号 2017年
- 94 杉山一雄「小坂向城山城跡について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』176 岡山県教育委員会 2003年
- 95 岡山県教育委員会によって実施。
- 96 小川文好「備中南山城についての一考察」『中世城郭研究』第14号 中世城郭研究会 2000年
- 97 畑和良「備中南山城の縄張りとその成立背景」『倉敷の歴史』第29号 倉敷市総務部 2019年
- 98 氏平昭典「茂平城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 岡山県教育委員会 1996年
- 99 宇垣匡雅「総社遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会 2007年
- 100 橋本惣司『高田城三の丸遺跡』岡山県真庭郡勝山町教育委員会 2005年
- 101 島崎東ほか「中島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221 岡山県教育委員会 2009年
- 102 小郷利幸・平岡正宏『年報津山弥生の里』第16～19号 津山弥生の里文化財センター 2006～2012年
- 103 平井勝「百々地下式横穴の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 岡山県教育委員会198年
- 104 島崎東「考古学から見た中世城館—旭川流域・吉井川流域・神代川流域の調査事例から—」『岡山県の自然と文化』36 岡山県郷土文化財団 2017年
- 105 「森家先代実録」『岡山県史』第25巻 津山藩文書 岡山県 1981年
- 106 ・中井均「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」(村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社 1991年
- ・中井均「織豊系城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物—」『織豊城郭』第1号 織豊期城郭研究会 1994年
- 107 他に、天正3(1575)年の天神山城の攻防をめぐる陣城について畑氏による詳細な論考がある。畑和良「備前国天神山城周辺の城館群」『愛城研報告』第19号 愛知中世城郭研究会 2016年
- 108 池田誠「高松城」「境目七城」「毛利輝元軍陣城群」「羽柴秀吉軍陣城群」『図説中世城郭事典』3 新人物往来社 1987年
- 109 ・畑和良「織田・毛利備中戦役と城館群—岡山市下足守の城郭遺構をめぐる—」『愛城研報告』第12号 愛知中世城郭研究会 2008年
- ・畑和良「備前・備中境目の城館と大名間抗争—岡山市足守の城郭遺構をめぐる—」『中世城郭研究』第24号 中世城郭研究会 2010年
- 110 乗岡実「備中高松城攻めの陣城」『織豊期城郭研究会2012年度鳥取研究会史料織豊系城郭の陣城』織豊期城郭研究会

2012年

- 111 池田誠「毛利氏と宇喜多氏における城砦戦の一考察－備前備中境戦における八浜防戦を中心に－」『中世城郭研究』第7号
中世城郭研究会 1993年
- 112 「岩屋城調査中間報告」 久米町文化財保護委員会 1976年
- 113 中西注53に同じ
- 114 高田徹「美作岩屋城包囲の付城群について」『中世城郭研究』第25号 中世城郭研究会 2011年
- 115 巖津政右衛門『岡山城と城下町』 日本文教出版社 1972年
- 116 尾崎聡「岡山城石垣の構築諸年代」『岡山民俗』第199号 1993年
- 117 『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1997年
・『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』 岡山市教育委員会 2001年
- 118 乗岡実「岡山城本丸の変遷」『史跡岡山城跡本末下の段発掘調査報告』 岡山市教育委員会 2001年
- 119 ・長谷川一英「虎倉城採集の瓦について」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 岡山市教育委員会 2009年
・平岡正宏「医王山城採集の瓦」『年報津山弥生の里』第4号 津山市教育委員会 1997年
・田嶋正憲「備前児島常山城址採集の遺物」『森宏之君追悼城郭論集』 織豊期城郭研究会 2005年
岡本寛久「常山城跡発掘調査報告」『岡山県文化財報告』10 岡山県教育委員会 1980年
- 120 ・乗岡実「瓦からみた宇喜多秀家期岡山城の支城群」『環瀬戸内の考古学』 古代吉備研究会 2002年
・乗岡実「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣－岡山城支城群の諸問題－」『吉備地方文化研究』第18号 就実大学吉備地方文化研
究所 2008年
- 121 註36に同じ
- 122 出宮徳尚「戦国城郭の支城の縄張り形態考－備前国宇喜多氏の支城形成のコンセプト－」『森宏之君追悼城郭論集』 織豊期
城郭研究会 2005年
- 123 ・三浦正幸「築城の歴史を語る縄張り」『岡山城』 学習研究社 1996年
中井均「城郭史からみた聚楽第と伏見城」『豊臣秀吉と京都』 文理閣 2001年
・乗岡実「宇喜多・小早川の居城 岡山城」『韓国の倭城と大阪城 資料集』 倭城・大阪城 国際シンポジウム実行委員会
2005年
- 124 乗岡実「宇喜多秀家の岡山城と豊臣秀吉の大阪城－その相似性－」『西国城郭論集Ⅱ』 中国・四国地区城館調査検討会
2012年

第3節 考古学から見た備前国の中世城館跡

1 はじめに

備前国の中世城館跡の総合調査は、平成25～27・30年度に実施した。第1章で触れたように、この事業は歴史文化遺産として評価が高い山城跡や館跡等の現状を把握して、今後の保護と活用を図るための基礎資料を得ることを目的としている。ここでは、今回の調査成果を踏まえて、考古学から見た備前国の中世城館について検討してみたい。

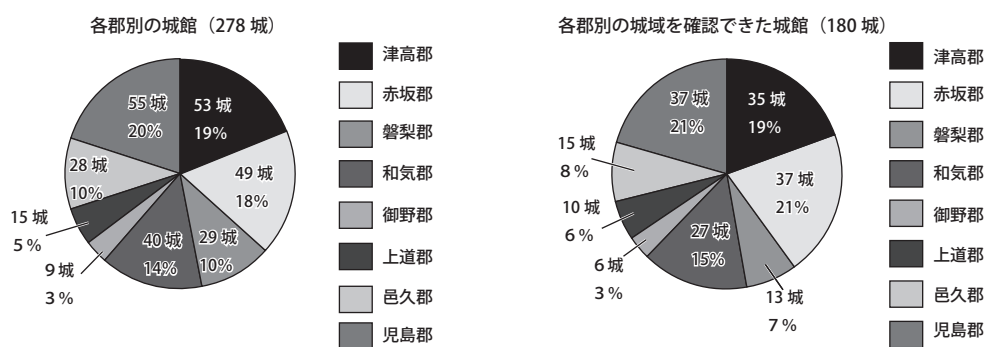
2 備前国の中世城館跡の概要

今回実施した中世城館跡の総合調査では、備前国内528城の城館情報を収集した。このうち278城については、所在地または推定地を確定して概況確認を行うことができた。各郡別の城館数をみると、津高郡は53城(19%)、赤坂郡は49城(18%)、磐梨郡は29城(10%)、和気郡は40城(14%)、御野郡は9城(3%)、上道郡は15城(5%)、邑久郡は28城(10%)、児島郡は55城(20%)であった。また、第3章では、主に城館の構造や性格が明らかとなった181城については、図・写真を用いて報告しており、その他の城館についても、現況でわかり得た概要などを一覧表で説明している。このうち、46高松城水攻め鳴谷川遺跡を除いた180城のうち、各郡別の城域を現認できた城館数みると、津高郡は35城(19%)、赤坂郡は37城(21%)、磐梨郡は13城(7%)、和気郡は27城(15%)、御野郡は6城(3%)、上道郡は10城(6%)、邑久郡は15城(8%)、児島郡は37城(21%)であった(表9)。なお、各城館の年代観はさらなる分析と検討を要する。ここでは、個々の城館情報をまとめて、備前国の城館総体の「立地と現況」・「規模」・「防御施設」についてみていく。

立地と現況

備前国の先述した278城の立地について、頂部、尾根部、端部、平地部の4分類を行ってみた。その結果、頂部は139城(50%)、尾根部は87城(31%)、端部は33城(12%)、平地部は19城(7%)であり、概ね「頂部>尾根部>端部>平地部」といった立地の傾向を示し、特に頂部の立地の割合が高く、端部の立地の割合はやや低いようである。参考に美作国406城の城館の立地をみると、概ね「頂部≒尾根部>端部>平地部」といった立地の傾向を示す。つまり、備前国の城館の立地は美作国に比

表9 各郡別の城館と城域を確認できた城館



べて、頂部の立地の割合が高く、尾根部、端部の立地の割合はやや低いといえる。こうした立地の傾向の差異は、眼下を望む平地や河川・交通路などの可視条件が反映していると考えられ、備前国が吉備高原・瀬戸内丘陵・岡山平野と「吉備児島」と呼ばれる大島と複数の小島からなる地勢であるのに対して、美作国が主に中国山地からなる地勢であることに起因していると思われる。こうした可視条件が反映したと思われる城館の立地の傾向は、備前国内の各郡でも同様に認められ、主に吉備高原・瀬戸内丘陵に位置する津高郡や赤坂郡の城館の立地の割合は、備前国内と比較して、尾根部と端部が多い傾向を示す。

次に、備前国の先述した 278 城の城館が立地している場所の現況（重複箇所含む）をみると、全体の 60%が山林に所在しており、以下、宅地・社寺・その他が 30%、水田・果樹園・畑が 10%を占めている。山林の比率の高さは圧倒的であるが、地勢的な特徴から美作国に比べ、その傾向(66%)は低いといえる。これも立地の傾向と同様に、岡山平野を含むゆえの備前国の特徴といえる（表 10）。

規模

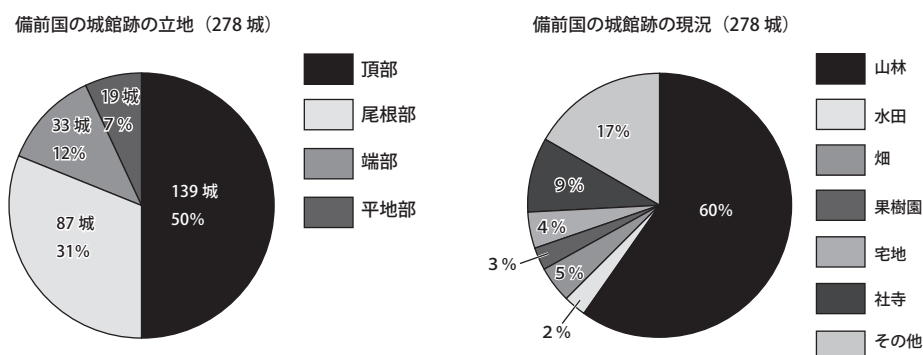
城館の立地する地形や防御施設のあり方によって計測が難しい点があるが、城域を現認できた備前国の 180 城の城館の東西または南北長の最大値を基にして、全長 300 m以上を大型城館、200 m以上 300 m未満を中型上位城館、100 m以上 200 m未満を中型下位城館、100 m未満を小型城館の 4 分類を行ってみた。その結果、大型城館は 24 城（13%）、中型上位城館は 29 城（16%）、中型下位城館は 61 城（34%）、小型城館は 66 城（37%）であり、概ね「小型城館≒中型下位城館>中型上位城館≒大型城館」といった状況がうかがえる。各郡別の規模の傾向をみると、赤坂郡・児島郡は備前国の傾向と異なり、小型城館より中型下位城館が最も多い特徴を示す。

各郡別の規模別の傾向をみると、大型・中型上位城館 53 城のうち、津高郡は 11 城（21%）、赤坂郡は 12 城（23%）、磐梨郡は 1 城（2%）、和気郡は 10 城（19%）、御野郡は 2 城（4%）、上道郡は 6 城（11%）、邑久郡は 2 城（4%）、児島郡は 9 城（17%）であった。各郡内の広さや地勢相違は考慮する必要があるが、大型・中型上位城館は、津高郡・赤坂郡・和気郡・児島郡に多く、磐梨郡・御野郡・邑久郡に少ないことがうかがえる。なお、第 3 章で個々の城館の報告で触れているとおり、大型・中型上位城館は、有力領主の本拠や所縁の地に所在したものが多く特徴を示す。（表 11）

防御施設

備前国の先述の 180 城の城館について、ここでは曲輪と中世城館の主要な防御施設である土塁・

表 10 備前国の城館の立地と現況



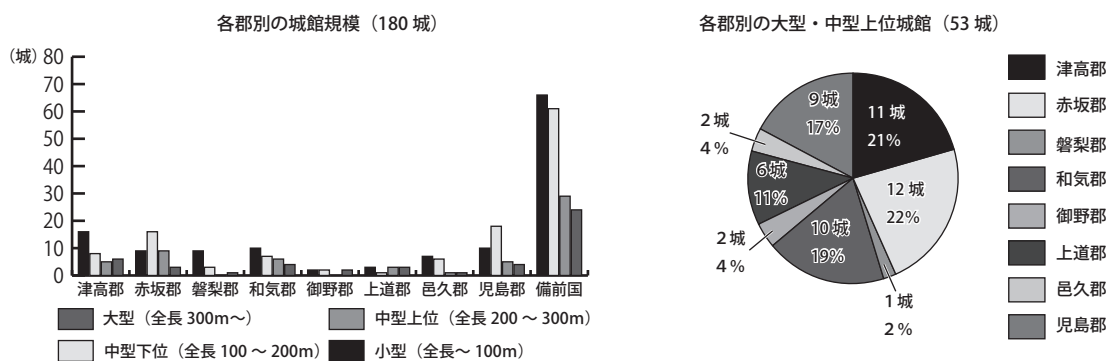
堀切・豎堀及び特徴的な防御施設である畝状豎堀群（畝状空堀群）、横堀や石列・石積み及び石垣の概要についてみていく。始めに、備前国の個々の城館の曲輪をみると、全体的に自然地形をそのまま活かした形状の曲輪が多く認められる。そうしたなかで、長さ30m以上の方形の曲輪、または長さ30m以上で幅が20m以下の細長い方形の曲輪を有する城館に着目すると、180城のうち33城(18%)で存在する。郡別では、津高郡は9城(27%)、赤坂郡は5城(15%)、和気郡は1城(3%)、御野郡は5城(15%)、上道郡は3城(9%)、邑久郡は2城(6%)、児島郡は8城(24%)で認められる。主に塁線を整えるために地形改変を行った城館でみられ、曲輪面をみると、削平度が高く、自然面はあまり残されていないようである。また、これらの城館はその特徴から、総じて新しい時期に築造または改修が行われたものが多いと推察される。

土塁は180城のうち85城(47%)で存在する。郡別では、津高郡は22城(26%)、赤坂郡は11城(13%)、磐梨郡は3城(5%)、和気郡は14城(16%)、御野郡は3城(4%)、上道郡は6城(7%)、邑久郡は4城(5%)、児島郡は22城(26%)、と郡により片寄りを示す。このなかには、折れをもって横矢が掛かっているものも認められる。堀切・豎堀等は180城のうち137城(76%)で認められ、小型・中型下位城館の一部などを除き、多く用いられている。

次に、10面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館に着目すると、180城館のうち16城(9%)で存在する。郡別では、津高郡は3城(19%)、赤坂郡は2城(13%)、和気郡は5城(31%)、上道郡は1城(6%)、邑久郡は3城(19%)、児島郡は2城(13%)で認められ、主に多段の曲輪と切岸及び支尾根を遮断する堀切・豎堀をもつ大型・中型上位城館などでみられる。また、これらの城館はその特徴から、総じて古い時期に築造または改修が行われたものが多いと推察される。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館をみると、180城館のうち58城(32%)で認められる。郡別では、津高郡は15城(26%)、赤坂郡は7城(12%)、磐梨郡は9城(16%)、和気郡は10城(17%)、御野郡は2城(3%)、上道郡は1城(2%)、邑久郡は7城(12%)、児島郡は7城(12%)であり、これらは、いわゆる砦や陣城にあたる城館が多いと思われる。

続いて、特徴的な防御施設である畝状豎堀群を有する城館をみると、180城のうち19城(11%)で認められる。郡別では、津高郡は7城(37%)、赤坂郡は4城(21%)、和気郡は2城(11%)、上道郡は1城(5%)、児島郡は5城(26%)である。横堀を有する城館をみると、180城のうち11城(6%)で認められる。郡別では、津高郡は5城(45%)、赤坂郡は1城(9%)、和気郡は2

表 11 各郡別の城館規模と大型・中型上位城館





第 218 図 備前国主要城館位置図 (1/400,000)

城 (18%)、児島郡は 3 城 (27%) である。石列・石積み及び石垣を有する城館をみると、180 城のうち 29 城 (16%) で認められる。郡別では、津高郡は 6 城 (21%)、赤坂郡は 4 城 (14%)、磐梨郡は 1 城 (3%)、和気郡は 9 城 (31%)、御野郡は 2 城 (7%)、上道郡は 1 城 (3%)、邑久郡は 3 城 (10%)、児島郡は 3 城 (10%) である。また、石材の組み方をみると、29 城のうち、基本的に石材を段重ねをしない石列は、赤坂郡に 1 城、上道郡に 1 城、邑久郡に 2 城の合わせて 4 城 (14%)、低石塁である石積みは、津高郡に 3 城、赤坂郡に 3 城、磐梨郡に 1 城、和気郡に 6 城、児島郡に 1 城の合わせて 14 城 (48%)、高石塁である石垣 (いわゆる高石垣を含む) は津高郡に 3 城、和気郡に 3 城、御野郡に 2 城、邑久郡に 1 城、児島郡に 2 城の合わせて 11 城 (38%) で認められる。ただし、土止めと城壁の峻別は難しい面がある。この他、先述の分類に属さない石材使用がみられる和気郡の 143 大坊山城跡や 142 名称未定の城跡もある。なお、石積み・石垣については、乗岡実氏が同章第 5 節で詳細な考察を行っている。瓦をもつ城館は 180 城のうち 9 城 (5%) で認められ、郡別では、津高郡は 3 城 (33%)、赤坂郡は 1 城 (11%)、和気郡は 1 城 (11%)、御野郡は 2 城 (22%)、児島郡は 2 城 (22%) である^(1・2) (第 218 図)。

3 旧郡別の中世城館の概要

ここでは備前国を構成していた8郡に築かれた中世城館の特徴を整理してみる。

津高郡（岡山市北区・吉備中央町・美咲町の一部）（表12、第218図）

郡内の城館を53か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は35か所である。なお、今保城については中世文書に記載が認められるが、所在地が判然としていない。規模をみると、大型城館は9常江田城跡、17藤沢城跡、19福山城跡、25虎倉城跡、43金川城跡、44徳倉城跡の6城、中型上位城館は8新山城跡、22鍋谷城跡、34石原城跡、42鹿瀬城跡、47長野城跡の5城である。比高差をみると、200m以上の高所に築城された城館は、25虎倉城跡、34石原城跡の2城、30m未満の低所に築城された城館は、13細田城跡、14妙見山城跡、49辛川城の根小屋跡、50小丸山城跡の4城である。全体的にみると、比高差30～100mに立地する小型城館の割合が高い。長さ30m以上の方形の曲輪を有する城館は、1野々平城跡、24清常城跡、25虎倉城跡、42鹿瀬城跡、43金川城跡、44徳倉城跡、幅が20m以下の細長い方形の曲輪を有する城館は、30茶臼山城跡、35城ノ段跡、40勝尾山城跡があり、他郡と比較して多い。土塁は規模にかかわらず多くの城館で用いられている。次に、10面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・竪堀の総数が5未満である城館は、25虎倉城跡、34石原城跡、42鹿瀬城跡がある。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・竪堀の総数が5未満である城館は15城あるが、24清常城跡などは高い防御性を示している。また、中型下位城館の48辛川城跡も、塁線に折れを多用して防御を固めている。3江与味城跡、17藤沢城跡には3条以上の多重堀切がみられる。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状竪堀群を有する城館は、3江与味城跡、8新山城跡、9常江田城跡、15勝山城跡、19福山城跡、40勝尾山城跡、43金川城跡の7城、また、横堀を有する城館は、13細田城跡、14妙見山城跡、15勝山城跡、24清常城跡、40勝尾山城跡の5城である。石列・石積み及び石垣を有する城館は、25虎倉城跡、43金川城跡、44徳倉城跡で石垣が認められ、いずれの城館からも一定量の瓦がみつまっている。また、19福山城跡、42鹿瀬城跡、

表12 津高郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～		全長 (m)
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	
300～											
200～300					34石原 (○☆)					25虎倉 (■☆垣瓦)	
100～200	10小森 (凸) 21十力 (凸) 36天満 38金高 52大善 (凸)		18三納谷 (凸○)	3江与味 (畝) 40勝尾山 (凸□畝横)	22鍋谷 (○) 42鹿瀬 (凸■☆積)		44徳倉 (凸■☆垣瓦)			17藤沢 (凸○☆) 19福山 (凸○☆畝積) 43金川 (凸■☆畝垣瓦)	
30～100	1野々平 (凸■) 2未定 (凸○) 16藤沢 (凸) 23大手 24清常 (凸■横) 30茶臼山 (□) 33久保 (凸○) 35城ノ段 (凸□) 37菅館砦	15勝山 (凸○畝横)		12片山 (凸○) 48辛川 (凸●)		8新山 (凸●☆畝) 47長野 (凸●☆積)		9常江田 (●畝)			
0～30 比高 (m)	49辛川城の根小屋		50小丸山 (凸●)	13細田 (凸●横) 14妙見山 (●横)							

凡例

※表の縦軸は平地から城館までの比高差、横軸は城館の全長を示す。

※表の「防御少ない」は土塁・堀切・竪堀の総数が5未満、「防御多い」は土塁・堀切・竪堀の総数が5以上を示す。

※表のカッコ内の記号は以下を示す。

- ：30m以上の平坦面 ○：30m以上で幅が20m以下の細長い平坦面
- ：30m以上の方形の平坦面 □：30m以上で幅が20m以下の細長い方形の平坦面 ☆：曲輪の数が10以上

※表のカッコ内の文字は以下を示す。

- 凸：土塁 畝：畝状竪堀群 横：横堀 列：石列 積：石積み 垣：石垣

47 長野城跡で石積みが認められた。

津高郡は、旭川流域のほか同水系の宇甘川流域に大型・中型上位城館が築城されており、特徴的な防御施設をもつ城館も多くみられる地域である。また、15 勝山城跡や 40 勝尾山城跡のように、小型・中型下位城館でもこうした防御施設を多用した城館も認められる。このような状況は、同郡が備中国と西接して、宇喜多・毛利両氏の勢力の境目地域にあたり、加えて、43 金川城跡の松田氏、25 虎倉城跡の伊賀氏の本拠が所在しており、金川城合戦を始め、辛川合戦や虎倉合戦、忍山合戦、そして、備中高松城の合戦に至るまで、長らく軍事的な緊張状態が継続していた地域であったことを推測させる。なお、備中国境上の城館は、17 藤沢城跡、40 勝尾山城跡と備中編の 140 飯ノ山城跡があり、不明城館の 546 鎌倉山岩もその可能性がある。美作国境上の城館は、美作編の 66 都我布呂城跡がある。

赤坂郡（岡山市北区・赤磐市の一部）（表 13、第 218 図）

郡内の城館を 49 か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は 37 か所である。なお、高尾城については中世文書に記載が認められるが、所在地が判然としていない。規模をみると、大型城館は 55 大仙山城跡、61 宮内城跡、82 木山城跡の 3 城、中型上位城館は 54 茶臼山城跡、57 白石城跡、58 土師方城跡、62 中畑城跡、65 黒沢城跡、66 長坂城跡、70 惣分城跡、76 熊谷城跡、85 瀧ノ城跡の 9 城である。比高差をみると、200 m 以上の高所に築城された城館は、85 瀧ノ城跡の 1 城、30 m 未満の低所に築城された城館は、89 東軽部城跡の 1 城である。全体的にみると、比高差 30～100 m に立地する中型下位城館の割合が高い。長さ 30 m 以上の方形の平坦面を有する城館は、54 茶臼山城跡、55 大仙山城跡、75 西谷城跡、77 寺山城跡、100 名称未定の城跡があり、他郡に比べて多い。土塁は小型城館・中型下位城館であまり用いられていない。次に、10 面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が 5 未満である城館は、62 中畑城跡、70 惣分城跡がある。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が 5 未満である城館は 7 城あるが、100 名称未定の城跡などは高い防御性を示している。55 大仙山城跡、68 八幡山城跡、69 明田城跡には 3 条以上の多重堀切がみられる。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状豎堀群を有する城館は、54 茶臼山城跡、55 大仙山城跡、57 白石城跡、58 土師方城跡の 4 城、横堀を有する城館は、55 大仙山城跡である。石列・石積み及び石垣を有する城館は、57 白石城跡、58 土師方城跡、77 寺山城跡で石積み、100 名称未定の城跡で石列が認められた。発掘調査を実施した城館は 2 城ある。76 熊谷城跡では、曲輪・

表 13 赤坂郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～		全長 (m)
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	
300～						85 瀧ノ (凸☆)					
200～300											
100～200	72 松撫 81 小屋谷 92 宮口 100 未定 (凸■列)		84 高光 86 葛木 (○) 98 善応寺 101 兜山		65 黒沢 (凸○) 66 長坂 76 熊谷 (凸○)	54 茶臼山 (凸■畝瓦) 58 土師方 (凸●畝積)	82 木山	55 大仙山 (凸■☆畝横)			
30～100	56 頓の山 79 宇那山 (○) 88 菖蒲佐古	68 八幡山 (凸) 83 金比羅	63 山鳥 (○) 64 先谷 (○) 67 徳近 (○) 71 坂辺 73 地頭 (凸) 74 矢知 75 西谷 (■) 77 寺山 (凸■横) 78 殿谷 (○) 97 正崎	69 明田	62 中畑 (○☆) 70 惣分 (☆)	57 白石 (凸○☆畝積)				61 宮内 (○☆)	
0～30 比高 (m)			89 東軽部								

堀切・土塁・掘立柱建物・土坑などを検出し、土師器・備前焼・施釉陶器・石製品・鉄製品・金銅製品・銭貨及び大量の炭化米などが出土している。54 茶臼山城跡では「大型竪穴遺構」や土坑・柱穴を検出し、土師器・備前焼・陶磁器・瓦・石製品・鉄製品・銭貨などが多数出土している。

赤坂郡には、旭川・吉井川流域や備前国境付近に大型・中型上位城館が築城されており、特徴的な防御施設をもつ城館が多くみられる地域といえる。また、吉井川水系の滝山川流域や砂川上流域、旭川水系の新庄川上流域にも、小型・中型下位城館ながら堀切や竪堀を用いた城館が認められ、現在の県道 53 号御津佐伯線付近では城館や築城の口碑が多く残っている。こうした状況は、各時代において松田・浦上・宇喜多・尼子・毛利といった各氏の勢力の境目が、国・郡界と支配領域が一致していない状況で存在し、各氏を支持する中小領主も郡内に雑居していたと思われる、長らく軍事的な緊張状態が継続していた地域であったと推測される⁽³⁾。

磐梨郡（岡山市東区・赤磐市・和気町の一部）（表 14、第 218 図）

郡内の城館を 29 か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は 13 か所である。規模をみると、大型城館は 117 保木城跡であり、中型上位城館にあたる城館はなかった。比高差をみると、200 m 以上の高所に築城された城館は、105 石ヶ谷城跡、106 坊主山城跡、109 城ノ段跡の 3 城、30 m 未満の低所に築城された城館はなかった。全体的にみると、比高差 100～200 m に立地する小型城館の割合が高い。長さ 30 m 以上の方形の曲輪を有する城館は確認できない。土塁はあまり用いられていない。次に、10 面以上の曲輪数を有し、防御施設がある土塁・堀切・竪堀の総数が 5 未満である城館は確認できない。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・竪堀の総数が 5 未満である城館は 9 城あるが、いずれも高い防御性は示さない。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状竪堀群や横堀を有する城館はなく、石列・石積み及び石垣を有する城館は、105 石ヶ谷城跡で石積みが認められた。発掘調査を実施した城館は 117 保木城跡であり、調査の結果、曲輪・土塁・礎石建物・掘立柱建物を検出し、備前焼・常滑焼・陶磁器・石製品・鉄製品・銭貨及び約 200kg の炭化した穀類などが出土した。磐梨郡は 117 保木城跡を除いて、土塁・堀切・竪堀による防御が少ない小型・中型下位城館を中心に認められることから、早い段階で軍事的な緊張状態から開放された地域、あるいは、備前国内の東西勢力の緩衝地帯となっていた可能性が考えられる。なお、117 保木城跡は明石氏が本拠とした。

和気郡（備前市・和気町の大部分と岡山市東区・赤磐市の一部）（表 15、第 218 図）

郡内の城館を 40 か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は 27 か所である。規模をみると、大型城館は 137 天神山城跡、162 三石城跡、168 たい山城跡、171 富田松山城跡の 4 城、中型上位城館は 138 天神山城太鼓丸跡、144 北浦山城跡、145 青山城跡、155 曾根城跡、159 東山城跡、164 香登城跡の 6 城である。比高差をみると、200 m 以上の高所に築城された城館は、134 北山方

表 14 磐梨郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～		全長 (m)
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	
300～											
200～300	106坊主山 109城ノ段		105石ヶ谷(積)								
100～200	103上田 114西山 125物理 128高尾(○)		104稲蒔								
30～100	107小坂 108田尻(凸) 131内山(凸)		127肩脊(○)								117保木(凸○☆)
0～30 比高差(m)											

城跡、137 天神山城跡、138 天神山城太鼓丸跡、142 名称未定の城跡、159 東山城跡、162 三石城跡、164 香登城跡、166 茶磨岩城跡、171 富田松山城跡の 9 城、30 m 未満の低所に築城された城館は 153 鹿帰前丸山城跡の 1 城である。全体的にみると、比高差 100 ～ 200 m に立地する小型城館の割合が高い。長さ 30 m 以上の方形の曲輪を有する城館は、171 富田松山城跡である。土塁は比較的多くの城館で用いている。次に、10 面以上の曲輪数を有し、防御施設がある土塁・堀切・竪堀の総数が 5 未満である城館は、134 北山方城跡、144 北浦山城跡、148 大股古遺跡、155 曾根城跡、159 東山城跡がある。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・竪堀の総数が 5 未満である城館は 10 城であるが、142 名称未定の城跡、143 大坊山城跡、166 茶磨岩城跡などは高い防御性を示す。168 たい山城跡には、3 条以上の多重堀切がみられる。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状竪堀群を有する城館は、145 青山城跡、162 三石城跡の 2 城、また、横堀を有する城館は、143 大坊山城跡、162 三石城跡の 2 城である。石列・石積み及び石垣を有する城館は、137 天神山城跡、162 三石城跡、171 富田松山城跡で石垣、138 天神山城太鼓丸跡、149 惣谷山城跡、155 曾根城跡、159 東山城跡、164 香登城跡、166 茶磨岩城跡で石積みが認められた。なお、137 天神山城跡では一定量の瓦がみついている。一方、142 名称未定の城跡と 143 大坊山城跡では、前者は土塁上に破碎石で被覆する状況、後者は横堀と切岸下方の一部に土留めの石材を確認した。これらの城館はその特徴から、天神山城合戦時に使用した陣城の可能性も考えられる。発掘調査を実施した城館は 145 青山城跡であり、調査の結果、掘立柱建物を検出し、焼失により落城した伝承を裏付けるように、大量の炭化種子が出土した。

和気郡は備前国の東端に位置する 1 郡であると同時に、浦上氏が支配していた赤松領の西端地域であるといえる。つまり、国・郡界と支配領域の境目が一致しておらず、同郡の城館構造をみる場合、播磨国南西部の状況も加味する必要があると思われる。例えば、播磨国南西部で畝状竪堀群や横堀、石列・石積み及び石垣を有する城館は、比較的多く認められている⁽⁴⁾。同郡もこうした特徴的な防御施設をもつ城館が多くみられるが、同じ赤松領内の城館という見方をすれば、その構成や特徴に類似性が確認できると思われる。また、こうした状況から、長らく軍事的な緊張状態が継続していたと推測させる⁽⁵⁾。なお、同郡では、浦上村宗らが 162 三石城跡、浦上宗景が 137 天神山城跡を本拠としており、164 香登城跡や 171 富田松山城跡を浦上一族が治めていた。また、八塔寺川・金剛川流域に所在する 149 惣谷山城跡、154 宮山城跡、155 曾根城跡、159 東山城跡を明石氏、日笠川流域に所在する 144 北浦山城跡、145 青山城跡、146 天王久保山城跡を日笠氏、金剛川流域に所在する 156 衣笠城跡、157 北山城跡を中山氏などというように、吉井川の支流単位に大小の有力領主が治めていたことがうかがえる。

表 15 和気郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～ 全長 (m)	
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い
300～			134北山方 (凸○ ☆)		138天神山城太鼓丸 (積)					
200～300	142未定 (凸石) 166茶磨岩 (凸積)				159東山 (☆積)	164香登 (凸○☆積)		162三石 (凸●☆畝横垣) 171富田松山 (凸■☆垣)		137天神山 (○☆垣瓦)
100～200	135観音山 (凸) 143大坊山 (凸横石) 151龍徳山 157北山		148大股古 (☆) 158伊部 (凸)	149惣谷山 (凸○ 積)	144北浦山 (☆) 155曾根 (●☆ 積)	145青山 (凸○畝)		168たい山 (凸○)		
30～100	132飯盛山 152上見山 154宮山		133奥塩田茶白山 (●) 147医王山 (凸) 163関川 (凸)							
0～30 比高差 (m)	153鹿帰前丸山 (●)									

御野郡（岡山市北区・南区・中区の一部）（表 16、第 218 図）

郡内の城館を9か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は6か所である。規模をみると、大型城館は178 富山城跡、180 岡山城跡の2城のみであり、中型上位城館にあたる城館はなかった。比高差をみると、200 m以上の高所に築城された城館はなく、30 m未満の低所に築城された城館は180 岡山城跡の1城である。全体的にみると、比高差と城館規模にはまとまりがないようである。長さ30 m以上の方形の曲輪を有する城館は、172 船山城跡、173 妙見山城跡、175 半田山城跡、178 富山城跡、180 岡山城跡があり、他郡に比べて多い。また、10面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は確認できない。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は172 船山城跡、174 烏山城跡であるが、いずれも高い防御性は示さない。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状豎堀群や横堀を有する城館はなく、石列・石積み及び石垣を有する城館は、178 富山城跡、180 岡山城跡で石垣が認められた。発掘調査を実施した城館は176 津島福居遺跡、178 富山城跡、180 岡山城跡の3城である。このうち、178 富山城跡では、松田期と浮田期の2期の存在を確認し、曲輪・堀切・土塁・石垣・虎口・櫓台・礎石建物・池などを検出した。また、土師器・備前焼・染付・瓦・石製品・鉄製品・銭貨などが出土した。また、180 岡山城跡では、岡山城及び城下町を含む範囲の調査が実施され、本丸については、1590年頃以前から1620年代に至るまで5期に渡る曲輪の変遷を辿ることが明らかとなり、二の丸については、安土桃山時代から幕末に至るまでの城内の屋敷の変遷を確認した。出土遺物としては、須恵器・土師器・陶磁器・瓦・漆器・木製品・金属製品・古銭などがある。

御野郡には、412 上中野城、413 北方ノ構、415 高柳城などのように近世地誌類に記載されているながら、市街地化によって地表面の観察だけでは所在地が確認できない城館が少なくない。今後は推定地周辺で実施される試掘・発掘調査の機会を活かすことで、その実態が明らかになると思われる。

上道郡（岡山市中区の大部分と岡山市東区の一部）（表 16、第 218 図）

郡内の城館を15か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は10か所である。なお、湯迫城と奈良部城については中世文書に記載が認められるが、所在地が判然としていない。規模をみると、大型城跡は185 亀山城跡、191 大日幡山城跡、193 明禅寺城跡の3城、中型上位城館は181 龍ノ口山城跡、189 吉井城跡、192 新庄山城跡の3城である。比高差をみると、200 m以上の高所に築城された城館は181 龍ノ口山城跡の1城、30 m未満の低所に築城された城館は182 中島城跡、185 亀山城跡の2城である。全体的にみると、比高差と城館規模にはまとまりがないようである。長さ30 m以上の方

表 16 御野郡・上道郡の中世城館一覧

御野郡	0～100		100～200		200～300		300～400		400～ 全長 (m)	
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い
300～										
200～300										
100～200	174烏山		175半田山 (■)				178富山 (凸■ 垣瓦)			
30～100	172船山 (凸■)		173妙見山 (■)							
0～30 比高差 (m)										180岡山 (凸■垣瓦)
上道郡	0～100		100～200		200～300		300～400		400～ 全長 (m)	
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い
300～										
200～300						181龍ノ口山 (凸■ ☆畝)				
100～200	188城ヶ辻				192新庄山	189吉井 (凸☆)	191大日幡山 (凸)			
30～100		187未定	186内山 (凸)				193明禅寺 (凸○)			
0～30 比高差 (m)		182中島 (■)								185亀山 (凸■☆列)

形の曲輪を有する城館は、181 龍ノ口山城跡、182 中島城跡、185 亀山城跡がある。土塁は大型・中型上位城館で用いられている。次に、10 面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が5 未満である城館は、185 亀山城跡があるが、同城の最大の防御施設は周囲に存在した湿地帯であろう。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が5 未満である城館は 188 城ヶ辻城跡であるが、高い防御性は示さない。また、187 名称未定の城跡には3 条以上の多重堀切がみられる。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状豎堀群を有する城館は、181 龍ノ口山城跡で認められたが、横堀を有する城館はなかった。石列・石積み及び石垣を有する城館は、185 亀山城跡で石列が認められた。なお、185 亀山城跡については、後世の大規模な改修や整備の対象にはなっていなかったと考えられている一方で、三層天守が岡山城の大納戸櫓に移築されたとも伝わっており、その実態は現状で判然としていない。発掘調査を実施した城館は 182 中島城跡、185 亀山城跡、191 大日幡山城跡の3 城である。このうち、191 大日幡山城跡の東出丸では土坑や多数の柱穴を確認しており、土師器・瓦・石製品・鉄製品・銭貨などが出土した。また、中島大炊が居城したと伝わる 182 中島城跡では、周囲約 60 m 四方を堀で囲まれた屋敷地を検出し、須恵器・土師器・陶磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・獣骨などが出土した。

上道郡には、備前国の守護所である 197 福岡奥之城跡を巡っての攻城戦となった福岡合戦に関わる 188 城ヶ辻城跡、189 吉井城跡、191 大日幡山城跡などが所在するが、これらの城館の防御施設はわずかであり、その後の改修も特に行われなかったようである。こうしたことから、この合戦以降、守護所は戦いで奪取・奪回するほどの政治的・戦略的価値がなくなっていったと推測される。また、同郡には宇喜多直家の飛躍時の本拠となった 185 亀山城跡やいわゆる明禅寺合戦に関わる 182 中島城跡、193 明禅寺城跡などが所在するが、どの城館の防御施設も土塁・堀切・豎堀などを組み合わせたのみの簡素な構造といえる。なお、181 龍ノ口山城跡では、堀切の後方の南側面で畝状豎堀群を確認した。畝状豎堀群は極度に軍事的緊張が高まった境目と称される地域で多く生み出されるとの考えに立てば⁽⁶⁾、御野・津高・赤坂郡の3 郡に囲まれた同城は、こうした条件にあてはまる。

邑久郡（瀬戸内市と岡山市東区・備前市の一部）（表 17、第 218 図）

郡内の城館を 28 か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は 15 か所である。規模をみると、大型城館は 214 砥石城跡、中型上位城館は 211 乙子城跡である。比高差をみると、200 m 以上の高所に築城された城館はなく、30 m 未満の低所に築城された城館は、196 長船城跡、198 丸山城跡、199 智満城跡、200 堀城跡、201 油杉城跡、205 光明寺城跡、206 今木城跡、207 尾張城跡、213 城島城跡の9 城と他郡と比較して多い。特に、200 堀城跡は、土塁囲みの方形を呈する平地城館の様子が比較的良好に残っている。全体的にみると、比高差 0～30 m に立地する小型城館、中型下位城館の割合が高い。長さ 30 m 以上の方形の曲輪を有する城館は、200 堀城跡、213 城島城跡がある。

表 17 邑久郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～ 全長 (m)	
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い
300～										
201～300										
101～200	203高山 (凸)		215高取山 (○☆)							
31～100	212長沼 216上山田				211乙子 (○☆列)		214砥石 (凸○☆垣)			
0～30 比高差 (m)	198丸山 201油杉 (列) 205光明寺 213城島 (■)		196長船 (凸) 199智満 200堀 (凸■) 206今木 207尾張							

土塁は全体的に多く認められない。次に、10面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は、211乙子城跡、214砥石城跡、215高取山城跡がある。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は7城であるが、高い防御性は示さない。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状豎堀群や横堀を有する城館はなかった。石列・石積み及び石垣を有する城館は、214砥石城跡で石垣、201油杉城跡、211乙子城跡で石列が認められた。発掘調査を実施した城館は220西大寺一宮育苗園公園遺跡であり、調査の結果、鎌倉～室町時代の水田・館跡・埋葬遺構を検出し、館跡は藤井氏一族の関わるものと推測している。

邑久郡には、藤原純友が拠った467釜島城や源平合戦に登場する206今木城跡、片岡常春が居城したと伝わる221大附城跡など、平安時代まで遡る故事来歴をもつ城館が他郡と比べて目立つ。また、199智満城跡、205光明寺城跡、206今木城跡、209射越城跡や464和田屋敷のように、南北朝時代の南朝方にあたる豊原荘出身の「悪党」に関わる城館も多い。一方、福岡合戦の中心地で備前国の守護所である197福岡奥之城跡が所在するが、大永年間（1521～1528）の大洪水のためか、その実態は判然としていない。また、郡内には中世の海上交易で栄えた牛窓港や虫明港があり、前者は470牛窓城（471紺浦城・472天神山城）、後者は204虫明城跡と関わりが深いと思われるが、こちらも港と城館との関係性が把握しきれていない。総じて、同郡内の城館には特徴的な防御施設が認められないことから、この地域は早い段階で軍事的な緊張状態から開放されたと考えられる。なお、208浜城跡、211乙子城跡、214砥石城跡や460邑久郷城、461紅岸寺城が所在する当地は、宇喜多氏の所縁の地である。

児島郡（玉野市と岡山市南区・倉敷市の一部）（表18、第218図）

郡内の城館を55か所確認し、このうち、城域を現認できた城館は37か所である。規模をみると、大型城館は240常山城跡、241麦飯山城跡、242両児山城跡、266下津井城跡の4城、中型上位城館は247砂山城跡、253高畠城跡、257番田城跡、261本太城跡、278向日比城跡の5城である。比高差をみると、200m以上の高所に築城された城館は、240常山城跡、241麦飯山城跡、246怒塚城跡の3城、30m未満の低所に築城された城館は、245丸山城跡、257番田城跡、258胸上城跡、260宮の鼻城跡、263小川城の辻城跡の5城である。全体的にみると、比高差30～100mに立地する中型下位城館の割合が高い。長さ30m以上の方形の曲輪を有する城館は、225黒山城跡、233戸山城跡、240常山城跡、245丸山城跡、253高畠城跡、258胸上城跡、261本太城跡、266下津井城跡であり、他郡に比べて多い。土塁は規模に関わらず全体的に多用している。次に、10面以上の曲輪数を有し、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は、243高山城跡、253高畠城跡がある。一方、小型城館のうち、土塁・堀切・豎堀の総数が5未満である城館は7城であるが、高い防御性は

表18 児島郡の中世城館一覧

	0～100		100～200		200～300		300～400		400～		全長 (m)
	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	防御少ない	防御多い	
300～				246怒塚 (凸)				240常山 (凸■☆垣瓦)			
200～300											241麦飯山 (凸☆)
100～200	244古城山 (凸) 251見能 (凸)	228川越山 (畝)	232とんきり (凸○) 239滝 (凸) 243高山 (凸○☆) 248西田井地	233戸山 (凸■畝積) 274寺上山 (凸)	253高畠 (凸■☆)	247砂山 (凸○)					
30～100	230福岡山 250駿河山 (○) 259丸山 (○) 273鍛冶山 (凸)	269岩山 (○畝)	231神田 (○) 237巖 (凸○) 264湊山 271熊城山 270内田城ノ辻 (○)	225黒山 (凸■横) 229鼻高山 (凸●) 235片岡 (凸○畝) 262神水 (凸)	261本太 (凸■垣?) 278向日比 (○)			242両児山 (凸●畝横)			266下津井 (凸■垣瓦)
0～30 比高差 (m)	260宮の鼻 (○)	245丸山 (凸■横)	258胸上 (■) 263小川城の辻 (●)		257番田 (○)						

示さない。土塁は規模に関わらず、全体的に多用している。

続いて、特徴的な防御施設を有する城館をみると、畝状空堀群を有する城館は、228 川越山城跡、233 戸山城跡、235 片岡城跡、242 両児山城跡、269 岩山城跡の 5 城、また、横堀を有する城館は、225 黒山城跡、242 両児山城跡、245 丸山城跡の 3 城である。石列・石積み及び石垣を有する城館は、240 常山城跡、266 下津井城跡で石垣、233 戸山城跡で石積みが認められた。なお、261 本太城跡は第 3 章の記述にしたがい評価を保留した。発掘調査を実施した城館は 240 常山城跡、254 梶岡城跡、266 下津井城跡の 3 城である。240 常山城跡では、築城時の造成と掘立柱建物や配石遺構を検出し、備前焼・瓦などが出土した。266 下津井城跡では、天守台関連遺構及び石組み溝・柵状遺構・配石遺構などを検出し、土師器・備前焼・陶磁器・瓦・土製品・鉄製品・銭貨・獣骨などが出土した。

児島郡では 2 度に渡る本太城合戦や備中兵乱、八浜合戦といった戦いが示すように、備前の浦上・宇喜多氏を始め、備中の三村氏、安芸・備後の毛利氏、阿波・讃岐の三好氏、伊予の村上氏などの他国の有力大名らがその覇権を争った地域である。こうした歴史をもつ当郡の城館は、他郡のものとは異なって多様な特徴を有していると思われる。また、先述の合戦に関わる、261 本太城跡や 240 常山城跡、241 麦飯山城跡、242 両児山城跡はもちろん、こうした複雑な状況が他の城館の築城・改修にも大きな影響を与えたと推察される。

4 まとめ

以上、備前国に所在する城館跡について、様々な視点から比較・検討を行った。岸田裕之氏は「大河が貫流する岡山県地域の戦国時代史は、各水系の領主・土豪層の河川交通・流通に関わる秩序と権益の共有、またそれをめぐる対立と争奪の所産であった」とする⁽⁷⁾。改めて備前国の城館跡の立地をみると、主に河川や山・峠などの自然的境界で画された国・郡境線沿いや交通の要衝などで認められる。このような場所は政治的・軍事的に対立する領主達の支配領域の「境目」にあたり、その周辺では境界防衛と侵略を目的とした城館が多く築かれていったと考えられ、今回の調査成果でもそうした状況を確認することができた。また、今回の調査は悉皆的かつ総合的に行われたことから、これまで詳細不明であった小型城館や中型下位城館などの実態も明らかとなり、各城館の現状も一定程度把握することができた。今後の展望としては、こうして得られた城館情報に文献史料や発掘調査の成果も加味することによって、さらに備前国の中世史が解明されていくことを期待したい。（澤山）

註

- ・文中に記した各構成比（%）は小数点以下第 1 位を四捨五入しており、合計しても必ずしも 100 とならない。

参考文献

- (1) 乗岡 実ほか『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会 1994
- (2) 乗岡 実「宇喜多秀家期の瓦と石垣を伴う岡山城支城群」『中国・四国における織豊系城郭の成立と展開』中国・四国地区城館調査検討会 2014
- (3) 畑 和良「備前国における中世山城の縄張りとは年代観—瀧ノ城と鳥取庄の城館群—」『愛城研報告』第 22 号 愛知中世城郭研究会 2018
- (4) 多田暢久「城郭構成からみた地域と境目—西播磨地域の中世城郭を中心に—」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社 2002
- (5) 畑 和良「備前国天神山城周辺の城館群」『愛城研報告』第 19 号 愛知中世城郭研究会 2015
- (6) 高屋茂男「畝状空堀群」『中世城館の考古学』高志書院 2014
- (7) 岸田裕之「岡山県地域の戦国時代史研究—その課題と方法—」『広島大学文学部紀要』55-特集号 2 1995

第4節 文献史料から見た備前国の中世城館

本稿では、平安末期から近世初期（12世紀後半～17世紀前半）を対象として、備前国の政治・軍事史をまとめておきたい。本巻掲載の文献史料一覧表に依拠した記述には史料番号(参考史料は「参1」と表記)を付し、それ以外の史料・先行研究(文末に記載)に基づく記述には注記を施した。

(平氏と備前国) 平安時代後期、瀬戸内海の家賊追討を一つの目的として、武士出身の平正盛・忠盛父子が備前国司に任じられた。この平氏による備前国統治をきっかけに備前国生え抜きの有力豪族難波氏・大森(大守)氏らが平氏の指揮下に入り、平氏の強大な武力の一角を形成したと考えられている(岡山県1989)。難波氏は備前国一宮(吉備津彦神社)近辺を拠点に備前・備中両国に一族を繁栄させた有力者で、平治の乱など重要な戦いに従軍し、源義平を捕縛する手柄を立てた(藤井1974・岡山県1989)。大森氏は備前国一宮の社務職を務め「王藤内」の通称で呼び習わされた名家で、備前国の平氏勢力を代表する武将妹尾兼康の麾下に入って活動したとの記録が残る(藤井1971)。

こうした経緯から、備前国は平氏政権の軍事的基盤の一つとなり、その追討を目論む源氏勢力との緒戦の舞台となった。寿永二年(1183)八月、平氏政権の総帥平宗盛(清盛の子)は兵船百余艘を児島に集結させ、源氏軍西進に備えている(『玉葉』寿永二年八月十二日条)。同年十月、木曾義仲は自ら備前国へと出陣し、妹尾兼康率いる平氏軍が備前国津高郡の「篠のせまり」「福輪寺阡」に設けた防御陣地を突破するが(参1～3)、同年閏十月水島で海戦に手慣れた平氏軍に大敗した(岡山県1989)。

次いで元暦元年(1184)、源頼朝の命により源範頼・義経が率いる平氏追討軍が山陽道を西下して一ノ谷に平氏軍を破った。範頼軍はさらに進んで備前国に至り、平行盛率いる平氏軍が「城郭」を構えて集結する児島の攻略を担当した。この時、範頼の指揮下にあった佐々木盛綱が備前国本土と児島とを隔てる藤戸の海峡を騎馬で渡って対岸の平氏陣営に突入、これをきっかけに源氏軍は平氏軍を打ち破ったという(参4～6)。その後、源義経の活躍もあり文治元年(1185)三月平氏政権は滅亡した。

(鎌倉幕府の備前国統治と関東武士の入部) 元暦元年(1184)の一ノ谷合戦直後、源頼朝は土肥実平を備前・備中・備後三ヶ国の惣追捕使に任じ、旧平氏領の占領地行政・当該地域の武士に対する軍事指揮権を委ねた(伊藤2010)。これが鎌倉幕府体制下での備前国守護のはしりと考えられている。その後、承久の乱(1221年)に勝利した鎌倉幕府は、後鳥羽上皇に味方した西国武士の所領を没収し、これらの地に東国の御家人を地頭として配置していった。これによって、備前国にも関東武士が順次入部している。弘長三年(1263)ごろ熊野御領備前国小島庄を四十余年にわたって押領していた「地頭加治太郎左衛門尉」の名が史料にみえ、藤戸合戦で活躍した佐々木盛綱の直系佐々木加地氏(本領は越後国加地庄)が承久の乱直後に地頭職を得て備前国児島郡へ入ったことがわかる(小川1980・北村1994)。このほか松田氏(相模国松田庄出身)・伊賀氏(本領は陸奥国好島庄西方)といった関東武士の一門が備前国津高郡・三野郡に地頭職を得て入部・定着し(榎原2000・伊藤2010)、近江国甲賀郡を出自とする頓宮氏(小川1980)なども地頭職を得て備前国和気郡に入った。彼らのうち、伊賀光幸、頓宮清観、松田盛経らは六波羅探題の使節(国内における所領相論の検分・現地執行官)として重要な役割を担った(外岡2015)。備前国守護職も東国御家人の担うところとなり、承久の乱直後の備前国守護は佐々木信実(盛綱の子)が拜命し、文永元年(1264)ごろには長井泰重、元

応・嘉暦年間（1310～20年代）には伊賀光貞が守護を務めている（佐藤 1988・榎原 2000・伊藤 2010）。

一方、備前国生え抜きの武士のうちにも、平家滅亡・承久の乱による所領改変後も生き残り、関東武士と共存・競合する者たちがいた。一宮神主家の大森氏は、平家に加担したため幽囚の身に置かれたが赦されて備前国内の本領を安堵されたと伝えられ（藤井 1971）、鎌倉後期の当主大森康通は津高郡上村地頭職を保持して前備前守護伊賀氏と争っている（榎原 2000）。建長七年（1255）ごろ「三野郡地主」を自称して金山寺の寺領を押領した三野佐信の存在が知られるが（岡山県 1990）、この三野氏も「一宮ノ在庁」と称されている（『太平記』）。彼らは祭祀・所領管理など一宮を維持する経営・信仰体系の一部を担うことで、一宮の影響力下にある山陽道沿線の都市領域において勢力を維持した人々と考えられる。東国出身の松田氏は、一宮を核とする一国規模の信仰・経営体系を介した勢力拡大を企図し、神主家大森氏ら関係領主と連携し社領支配に介入していった（榎原 2000）。

弘安元年（1278）冬、一遍が備前国福岡の市で教化した武士も、吉備津宮神主家から邑久郡藤井村の藤井家へ婿養子に入った人物で、上記の領主群の一画を占める武士であった。彼の居宅は「備前国藤井といふ所の政所」と呼ばれており、隣接する鹿忍庄の下司を務めていた藤井氏の荘園管理の役所兼居宅と考えられている（藤井 1971）。地頭職や下司職を得ることで荘郷の現地支配権を得ていた当時の武士にとって、その役職由来の役宅＝政所こそ正当な領主としての本拠であった。一方、元徳二年松田氏と伊賀氏が三野郡福輪寺村の領有権をめぐる争った際、真偽はともかく「松田七郎三郎が城郭を構え悪党人を語らって福輪寺村を横領した」と表現されているように（榎原 2000）、正当性とは無関係な実力行使による所領支配の手段としての「城郭」の存在が鎌倉時代最末期になって登場してくる。やがて両者は、武家の領域支配の装置として相互に影響し合いながら発達を遂げていく。

（南北朝内乱と三石城） 鎌倉最末期になると、蠢動する反幕の動きにそなえ、吏僚系の御家人伊賀氏に代わり佐々木加地時秀（源太左衛門尉）が備前国守護に復帰した（伊藤 2010）。間もなく正慶二年（元弘三年、1333）二月、赤松円心が後醍醐天皇に呼応して播磨国で倒幕の兵を起こし、六波羅探題からの召喚に応じて東上中の山陽道諸国の軍勢と舟坂山で対峙する情勢を迎えた（岡山県 1990）。このとき、円心に共鳴した和気郡三石保の地頭伊東大和九郎宣祐（伊東大和入道祐宗の子で三石伊東氏を継いだ「九郎憲祐」と同一人物とみられる。伊東市史史料編古代・中世所収伊東系図を参照）は、館の背後にある「三石山」に城郭を構え、山岳寺院熊山霊仙寺を拠点として後醍醐天皇方の将として挙兵する。守護加地時秀の代官加地源次郎左衛門（時秀舎弟の義秀か。伊藤 2010）は伊東氏討伐に動くが、一戦で敗退し児島郡へ退去した（参 8、岡山県 1990）。その後、赤松円心らは足利尊氏と合流して六波羅探題を攻め滅ぼし、同年のうちに鎌倉幕府は滅びた（元弘の乱）。

この乱に際し伊東宣祐が築いた三石城こそ、一次史料に名称がみえ現在地も判明する城郭としては備前国の中世史上最初の城であり、南北朝前半の備前国をめぐる争奪はこの城を中心に行われた。鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇が主導する建武政権が成立すると、松田盛朝が備前国守護に就任したと考えられている（佐藤 1988・岡山県 1990）。建武二年（1335）十一月、足利尊氏が後醍醐天皇に背いて挙兵すると、旧守護の佐々木一族が足利方に味方し天皇方の軍勢を備中国の戦いで破った。備前国三石城へ退却した天皇方の軍勢は、京都から下向してきた守護松田盛朝と合流して和気宿へ進出するが、盛朝が足利方へ寝返ったため、熊山城（熊山霊仙寺）を經由して敗走する（岡山県 1990）。

建武三年（1336）初頭、京都で後醍醐天皇方と戦って敗れた足利尊氏は、同年三月山陽道を押さえる要衝の地三石城に石橋和義を入城させ、追撃に備えた上で九州へ落ち延びる（5）。和義は足利氏一門出身の宿老で、備前国内の足利方諸将の軍事統率者（当国大將軍）となり、守護松田一族、佐々木一族、頓宮、内藤、三野氏らを指揮下に置いた（参 11～13）。後醍醐天皇方の新田義貞は弟の脇屋義助が率いる軍勢を派遣し、熊山城で蜂起した児島高德一党と呼応して三石城を攻撃するが、石橋和義は兵糧欠乏にもかかわらず尊氏が九州から反転して上洛戦に撃って出るまで三石城を守り抜き、五月十八日新田軍を撤退に追い込んでいる（3～5、参 14～16、岡山県 1990）。

同年十一月、足利尊氏を將軍とする室町幕府が成立すると、昨年来足利方に与して活動していた松田盛朝が備前国守護に再任用された。以後、数年の断絶（一時的に細川顕氏が守護職を拝命）があるものの、約30年間松田氏は備前国守護を務めることとなる（佐藤 1988）。同じく足利方として活動した旧守護家の佐々木加地時秀も建武四年（1337）正月に従五位下備前守に任じられ（「師守記」康永元年六月十二日条／大日本史料 6－7）、幕命の現地執行などを担当し（「東寺百合文書」サ函 7－3 暦応三年八月二十一日室町幕府執事高師直施行状案／大日本史料 6－6）、室町幕府初期の備前国支配を支えた。一方、赤松円心の子則祐も備前国東部で新恩地を与えられた可能性が高く、貞和年間（1345～50）には和気郡新田庄中山に菩提寺宝林寺を建立している（岡山県 1990・1991）。

（観応の擾乱と山口御陣） その後、足利尊氏・高師直と尊氏の弟直義との政争（観応の擾乱）が発生し、直義の猶子足利直冬が備後国に下向すると、山陽道諸国は足利一門の内紛と南北兩朝の抗争が絡む複雑な戦乱に巻き込まれていく。直冬討伐のため出陣した尊氏は、観応元年（1350）十一月備前国福岡まで進んで長期滞在するが、足利直義派が南朝と同盟したとの急報を得て、かつて三石城防衛に功のあった石橋和義を備前国の押さえに残し十二月三十日京都へ退却する（岡山県 1990）。文和元年（1352）十月になると、南朝・直冬方の山名時氏が備前国鳥取庄へと侵攻してきたため、尊氏は再び石橋和義を大将とする軍勢をもって山名軍に対抗した（同前、9・10）。この時、石橋和義が山名勢に対峙する目的で展開した陣営が「山口御陣」（9）と呼ばれており、備前国守護松田信重の本拠領域のひとつ鳥取庄山口（畑 2018）に足利軍の本陣が置かれたことがわかる。付近には南北朝期前後の遺物が豊富に散布する瀧ノ城（同前）など、この戦いと関連を窺わせる城郭が点在する。和義率いる足利勢は苦戦を強いられたが、文和二年（1353）正月に山名軍を撤退させた（岡山県 1990、10）。

十年後の康安二年（1362）、再び備前国は山名時氏の子師義の来襲を受けるが、守護松田信重や備前国東部の赤松領にあった浦上行景は自身の城に引き籠り、山名軍との会戦を避けた（岡山県 1990）。この年の山名軍侵攻は、中国管領として山陽道諸国を管轄する細川頼之（小川 1980）が伊賀高光（掃部助）ら備前・備中諸将を率いて讃岐国へ出張していた隙を突いて行われており（「太平記」卷 38／大日本史料 6－24）、松田・浦上氏単独での交戦を避けたものとみられる。また、秋庭氏の山名方与同によって備中国を保てなくなった同国守護の高師秀も、備前徳倉城まで撤退したという（岡山県 1990）。

（赤松氏の備前国守護職獲得と守護代・国人） 松田信重は康安二年の戦いで積極的に動かなかった責を問われたのか守護職を罷免され、貞治四年（1365）以後は播磨守護赤松則祐が備前守護職を兼帯することになった（佐藤 1988）。以後、赤松氏は嘉吉の乱による途絶期間を除き180年間備前国を統治する。則祐は播磨国を本拠としたため、御一家衆の赤松肥前守朝範（在田氏の祖。則祐の甥）

を最初の守護代に起用し備前国支配を委ねた（「大宮文書」貞治四年十月十九日赤松則祐遵行状案／南北朝遺文中国・四国篇4）。その後、守護代職は貞治六年までに浦上七郎兵衛尉行景に交替し、しばらく浦上一族が守護代を歴任する（水野1975）。浦上氏は播磨国浦上庄を名字の地とする武家だが、赤松氏の守護就任以前から備前国内に拠点を構えており、現地掌握の適任者として守護代に抜擢されたものとする。ただし、応永年間（1394～1427年）以降は小寺伊賀入道性応が備前国守護代を務めた（「離宮八幡宮文書」応永二十三年八月十三日赤松義則遵行状／大日本史料7-25、「天龍寺文書」飾磨津別符由来書／兵庫県史史料編中世7。入道名は「看聞日記」応永二十五年四月五日条／大日本史料7-31に拠る）。この時期は備前守護代職が特定の氏族に世襲化されておらず、浦上氏の影響力も限定的なものだったと評価できる。なお、応永年間の備前国守護所は福岡に置かれていた（15・16）。

その一方、守護職を失った松田氏は將軍直属の奉公衆家として存続し、備前・備中両国の一宮を掌握する嫡流の松田備前守家、鹿田庄を本拠に旭川河口地域に影響力をもった松田鹿田家、鳥取庄山口を本貫とする松田山口家などの有力庶家を派生させ在地における勢力を増大させた（榎原2000）。彼らは須々木氏ら他の有力国人とともに幕府一守護系列による分国支配を補完する役割を果たしつつ、守護の独走・反乱を牽制・抑止する役割を担い、地域に勢力を根付かせていった（同前）。

応永三十四年（1427）に守護赤松義則が病没した後、將軍足利義持は後継者の赤松満祐から播磨国を没収した（岡山県1991）。満祐がこの措置に不服を表明したため、義持は満祐から備前国をも没収して赤松七条家の当主満弘を新守護に任命し（同前）、備前松田氏に命じて満祐の備前国守護代小寺性応を攻め殺した（「法光寺文書」如法経道場赤松持貞讒訴書置／兵庫県史史料編中世2）。まもなく幕府側の不備が暴露され、赤松満祐は播磨・備前の守護職に復するが（岡山県1991）、当時の室町幕府一守護一国人体制においては幕府の意図から守護が逸脱した場合の統制機能が分国内まで浸透しており、赤松氏が幕府の意思を離れて自在に備前国を支配する状態には至っていなかったのである。

（嘉吉の乱と備前国・児島郡） 嘉吉元年（1441）六月、將軍足利義教による統制政治に追い詰められた赤松満祐は、自邸にて義教を謀殺した（嘉吉の乱）。赤松氏は幕府による討伐対象となり、備前松田氏および備中国守護細川氏久が備前国の赤松方掃討にあたった（岡山県1991）。同年九月九日、和気郡安養寺の寺僧は福岡に向いて細川氏久宿老連署の禁制を受領しており（同前）、細川軍がこの日までに福岡の守護所を攻略したことがわかる。その翌日、幕府軍の主力が播磨国木山城を攻略して赤松満祐を自害させ、十七日には備前国在陣の細川軍の攻勢により某城（残画より三石城と推定）陥落の近いことが報じられ（18）、まもなく赤松氏は滅亡した。戦後、備前国守護職は山名教之に与えられ（岡山県1991）、教之の重臣小嶋之基が守護代に任じられた（「康富記」享徳二年八月二日条）。赤松氏に味方した守護代小寺伊賀守や浦上七郎兵衛尉らの所領は没収されて幕府給人の扶持とされ（「蜷川家文書」長祿四年十月政所方御奉書修理替物給物方引付／国立公文書館蔵）、主家ともども没落する。

なお、児島郡は備前国の一部だが、応永年間には東半分が阿波国守護細川氏領となっていた。その後、嘉吉の乱の功労者に赤松氏旧分国を恩賞地として割り振る際、備前国守護職の管掌区域から児島郡一円が切り離され、阿波守護細川持常が児島郡の分郡守護職を兼ねることになったと考えられている（三宅1989）。これを契機に児島郡には四宮・高畠氏など阿波国を本貫とする領主が移入し（同前・

北村 1994)、児島郡をめぐる政治・軍事史は本土側と異質な経緯をたどることになるのである。

(赤松氏の備前国回復と浦上氏の守護代職独占) 嘉吉の乱で分国を失った赤松氏の遺臣たちは、当時南朝勢力の手中にあった神璽奪還を条件に、將軍暗殺罪の赦免とお家再興の実現を幕府に掛け合せて了承を得、南朝の皇子を殺害して神器を取り戻した。この手柄が認められ、長祿二年(1458)幕府は赤松政則を当主とするかたちで赤松氏再興を公認し、備前国和気郡新田庄を所領として給付した上加賀国半国の守護職に任じた。赤松氏を倒して備前国を得た山名教之がこの措置を歓迎するはずはなく、新領地に入ろうとする赤松軍と山名軍とが和気郡三石を舞台に合戦を繰り返した(岡山県 1991)。

応仁元年(1467)に応仁・文明の乱が勃発すると、赤松政則は東軍細川勝元に味方して、西軍山名氏の手の中にある備前国全土の回復を目指した。この時、山名氏側は京都出陣中の守護代小鴨之基に代わり一族の小鴨大和守が守護所福岡を「要害」に仕立てて赤松軍侵攻に備えたが、赤松軍は難波掃部助・松田一族ら備前国内の有力者を味方につけ、短期間で山名勢を敗退させ備前国を奪還する。ところが、赤松軍の備前国奪還に助勢した松田氏が、その軍功をもって備前国守護職に復することを望み、赤松氏宿老浦上則宗によって阻止されるという一幕があった(「備前難波文書」文明十三年四月七日難波行豊軍忠状/岡山県史家わけ史料)。こうした経緯を踏まえ松田氏への配慮が加えられたものか、赤松氏は備前国の新守護代に松田遠江入道藤栄を単独で任命している(「備前西大寺文書」応仁元年九月十八日赤松氏奉行人連署奉書、同年十一月二十四日松田藤栄渡状/岡山県古文書集2)。

こうして赤松氏は旧分国を回復したが、分国の経営や各国守護代を含む家臣団全体の統括、軍勢の統率などは、筆頭宿老の浦上則宗が一手に引き受けることになる(野田 2001・小林 2004)。備前国守護代職も応仁二年(1468)以降松田藤栄に則宗の一門衆浦上基景を加えた連名体制とされ(小林 2004)、以後浦上則宗・宗助(則宗の甥)といった則宗の近親者が守護代職を継承していった(水野 1975)。この間、早い段階で松田氏が排除されて浦上一門衆が単独で守護代職を独占的に世襲するかたちに改まり、守護赤松氏から浦上一門守護代への命令伝達も全て浦上則宗経由で行われたため、赤松氏の備前国支配は則宗を頂点とする浦上一族が全面的に取り仕切る体制で進められることとなった。

(福岡合戦と松田氏の台頭) こうして浦上氏が守護赤松氏の分国支配を請け負うかたちで影響力を伸ばす一方、一宮神領や関係領主を従える松田氏は周辺の荘園侵略による勢力拡張に努めていた。文明十一年(1479)十月、守護赤松政則は播磨国へ下向し(岡山県 1991)分国に対する直接支配を強めたが、その所領政策は荘園保護に基づく在地国人統制を基調としていたため、荘園横領を繰り返す松田氏との関係は悪化の一途をたどる。こうした状況下、文明十五年(1483)赤松氏の抑圧を嫌った「松田菅」こと松田元就(実名「元就」については横田孝雄 1995 所収刀剣銘に拠る)が山名政豊と結び付き、政豊の嫡子山名俊豊が率いる備後・安芸の軍勢を備前国へ導き入れ、合同して赤松氏の備前国守護所福岡城に攻め寄せた(「随心院文書」(文明十五年)十二月七日宝林寺雲龍軒弘嚴書状/兵庫県史史料編中世8)。福岡城には守護代浦上則国とその一門、赤松政則の「三奉行」櫛橋則伊、備前国内の中小領主が籠城し、山名・松田連合軍の攻撃をしのいだ(翠竹真如集/五山文学新集5、備前文明乱記/吉備群書集成3、畑 2001～2006)。事態打開を期した赤松政則は、備前国へ援軍を送り出す一方、自ら軍勢を率いて山名氏の本拠地但馬国を叩く作戦を決行するが、播磨国境で山名軍に大敗する。この報せを受けた福岡籠城衆は文明十六年正月ごろ戦意喪失して城から脱出(備前文明

乱記／吉備群書集成 3)、山名俊豊・松田元就は福岡城を接收し備前国の奪取に成功した(福岡合戦)。浦上則宗ら赤松氏宿老衆は、敗戦の原因をつくった守護赤松政則を廃し、赤松有馬則秀の子慶寿丸を新当主に迎えた。だが、幼君を戴く重臣主導体制では求心力を発揮できず、足利義政の仲裁で赤松政則と浦上則宗との和解が実現し、再び政則を当主とする体制で山名軍に対する反撃が開始された(岡山県 1991)。赤松軍による山名軍掃討は困難を極め、文明十七年(1485)備前国守護代浦上則国が砥石城で山名軍に敗れ討死するなど浦上一族・被官の多くが戦陣に倒れた(水野 1975)。こうした過程を経て長享二年(1488)七月、則国の跡を承け備前国奪還戦を指揮していた浦上宗助が福岡城から山名勢を撤退させて入城を遂げ(30～32)、備前国は再び赤松氏の手中に帰すこととなる(岡山県 1991)。

以後、備前国守護代は浦上宗助が務めたが、松田氏の自立的活動は止まらなかった。延徳二年(1490)八月、松田一族をはじめとする「中国之国人十三人」は備前国児島で会談し、協調して幕府・守護の施策に抵抗し寺社本所領に対する実力支配を進めることを申し合わせた(「晴富宿禰記」同年九月五日条)。同三年(1491)、備中国の庄元資が守護細川氏と全面对決に及んだ際、先の盟約に基づき松田元就が庄氏に助力したため、翌年浦上宗助・基景が松田氏居城の攻略に出陣している(33)。この戦いは「金河合戦」と記されており(34)、松田氏が金川城を本拠としていたことがわかる。明応六年(1497)にも浦上宗助は旭川を越えて伊福郷で松田鹿田氏と戦い敗退している(宇喜多能家寿俊讃／黄薇古簡集)。浦上・松田氏の勢力境が、旭川を軸とする南北ライン周辺にあったことが想像される。

(赤松氏支配の後退) 明応五年(1496)播備作守護赤松政則が病死した。政則には男子がなく、浦上則宗ら宿老が合議して御一家衆の赤松七条政資の子・道祖松丸(後の義村)を新当主として迎えた(水野 1975)。しかし、荘園保護に基づく国人の勢力拡大抑止を政策基調とし、幼君に代わって実権を行使する浦上則宗に他の重臣や国人たちが反発、赤松家中は分裂して「東西取合」と呼ばれる内戦に発展する(小林 2004)。この内戦を経て浦上則宗の権力は弱体化し、播磨・備前・美作各国で現地支配に携わる守護代・郡代級の領主が独自の勢力を伸ばした(同)。備前国でも、守護代浦上宗助による現地執行を守護赤松氏側が追認する事態を見ることが出来る(「金山寺文書」明応六年六月十八日赤松氏奉行人連署奉書／岡山県古文書集 3)。「東西取合」合戦の渦中で宗助は、赤松氏の菩提寺宝林寺領だった備前国内の庄郷を押領するなど自勢力の拡充に努め(「東寺百合文書」い函 45(明応八年)十月二十六日赤松性喜書状／岡山県史家わけ史料)、浦上氏が守護との関係を前提としない独自地盤を備前国東部に形成するきっかけをつくった。その結果、文亀二年(1502)の浦上則宗没後(水野 1975)、浦上惣領家の家督は則宗直系から宗助の子・浦上村宗に移ることになる。

(赤松・浦上両氏の主導権闘争) 浦上村宗は永正十四年(1517)ごろ開始された守護赤松義村の執政に宿老として参与する(畑 2006)。幕府政治を掌握する細川高国の宿老内藤貞正の娘を妻とする村宗は(『経尋記』永正十八年七月十六日条／大日本史料 9 - 13)、高国との紐帯を背景に赤松氏分国の維持を狙った。ところが赤松義村は高国の政敵細川澄元を支持し(岡山県 1991)、村宗と対立する宿老小寺則職と組んで浦上氏の権限を押さえ、自らが分国支配の主導権を握ろうとした(畑 2006)。かくして義村・村宗は対立し、浦上氏討伐を決した義村は永正十六年(1519)十一月、自ら出馬して浦上村宗の本拠三石城を猛攻したが攻めあぐね、金川城主松田元陸による浦上方助勢の動きに驚いて撤退する(岡山県 1991・参 21)。翌年美作守護代中村則久・粟井景俊(実名は『実隆

公記』享禄二年十月八日条に拠る）ら美作国衆も村宗に味方したため、赤松義村は美作国に小寺則職率いる討伐軍を派遣するが、村宗は松田元陸とともに出陣し則職を敗死させた（水野 1983・榎原 2000・畑 2001～2006）。こうして赤松義村を追い詰めた村宗は、永正十八年（1521）義村を暗殺し、その遺児でまだ幼い政村を新守護に擁立し赤松家の実権を掌握した（水野 1983・岡山県 1991・畑 2006）。

しかし、赤松義村に味方した小寺氏らは村宗の専政を憎んで浦上氏への反抗を続け、やがて細川両家の主導権争いが再燃すると、彼らは細川澄元の子晴元に味方し細川高国派の浦上村宗に対抗する。享禄二年（1529）細川晴元との争いに敗れた細川高国は、松田元陸の本拠金川城へ落ち延び（54）、浦上村宗に助力を願った（水野 1983・岡山県 1991）。村宗はその要請を容れ、享禄三年（1530）高国を奉じて出陣し、晴元与党の小寺氏らを追い落として播磨一国を制圧、翌年春までに摂津国の過半を軍事的影響下に収めた（同前）。ところが、父の仇村宗の追討を志す守護赤松政村は密かに細川晴元に内通し、享禄四年（1531）六月、摂津国天王寺で晴元と対戦中の細川高国・浦上村宗連合軍を背後から襲い、村宗・松田元陸をはじめとする 7000 余の将兵を横死させ、細川高国を自害に追い込んだ（大物くずれ。水野 1983・板津 1983）。生き残った浦上氏の一族郎党は、浦上国秀（村宗の遺児政宗が幼少につき当主を代行）を首領として結集し、赤松村秀・宇野村頼と結んで赤松政村の粛清を謀り（畑 2006）、赤松・浦上氏は以後数年間にわたって内戦を繰り返すこととなる（依藤 1999）。

（戦国期山城の出現） 15 世紀末～16 世紀初頭に入ると、備前国守護所として政治・軍事の中心に位置していた「福岡」の名は史料上から姿を消し、地域権力化した個別領主の居城の名が政治拠点として史料上に出現してくる。香登城は福岡を一望できる山上にあり、守護赤松氏宿老として播磨国置塩に出仕する浦上村宗に代わって備前国守護代の権限を継承した浦上宗久（村宗の弟）が在城していた（岡山県 1991・畑 2006）。浦上村宗自身も、赤松義村を倒しその遺児政村を擁立した大永元年（1521）以後、播磨国の赤松氏由来の政治拠点を利用せず、自身の居城三石城・播磨室山城で赤松氏分国の政務を執行している（畑 2006）。同じころ、永正十三年（1516）松田豊後守元能（元藤改名）は居城「松田豊後守山城」（金川城か）に連歌師宗碩を招いて連歌会を催し（余語 1993）、松田山口家も居城「山口の城」（瀧ノ城か）で連歌会を挙げるため三条西実隆に発句詠出を依頼している（畑 2018）。守護赤松氏の求心力が後退して地域支配が個別国衆の手に移り、内乱が恒常化する情勢下、平地にあった守護由来の拠点が捨て去られ、戦時のみ使用されていた山城が恒常的な政治拠点として整備・維持され、執務・文化的行事の場として利用される状況が立ち現れてきたのである。浦上宗助が福岡再入城を果たしてから 30 年ほどの間に、備前国の城館をめぐる事情は大きく変化したといえよう。

（尼子氏の山陽道侵攻と浦上氏の内訌） 「大物くずれ」後の赤松氏分国の内紛が収まらぬ中、天文六年（1537）になって出雲尼子詮久が美作国に侵攻し、赤松氏の本拠播磨国へ進出する勢いを示した。互いに父を討たれ対立していた赤松政村と浦上村宗の遺児政宗は、尼子氏侵攻の危機を前に和睦する（依藤 1999）。だが、翌年尼子軍が大挙して播磨国へ来襲すると、赤松氏一門を含む多数の国衆が戦わずして尼子氏に帰服、赤松政村は国外へと逃亡した。尼子軍は同年中に備前国へ兵を向けるが、松田元堅・明石源三郎（行雄か）ら有力国衆が尼子氏に帰服したため（「八坂神社文書」天文九年六月十四日宇垣秀緒・横井氏明連署書状／八坂神社文書下、「親俊日記紙背文書」（天文十年）十一月十四

日三好政長書状案／国立公文書館蔵)、国内の赤松方諸将は没落を余儀なくされた。浦上政宗も備前国から播磨国へと退き、天文八年(1539)同国室山城に攻め寄せた尼子軍と交戦している(依藤1999)。

これ以降、浦上政宗は守護赤松晴政(政村改名)の奏者として行動する(「美作牧文書」(天文九年)十一月二十七日赤松晴政書状／久世町史資料編第一巻など)。政宗は幕府が守護として公認する赤松晴政を奉じることで備作地域支配の正当性を確保し、尼子氏の実力行使を否定する動きに出たのである。尼子詮久は天文十年(1541)再び備前国境まで進出し味方国衆を後援するが(「毛利家文書」(天文十年)卯月二十四日某書状／大日本古文書8-4)、浦上政宗は天文十三年(1544)冬から翌年にかけて尼子方領主を掃討し、居都庄の城(沼城か)などを奪還して備前国を回復した(58、『言継卿記』天文十三年十二月八日条、「備前西大寺文書」天文十四年六月二十八日浦上政宗判物／岡山県古文書集2)。

ところが、天文二十年(1551)尼子晴久(詮久改名)は再び備前・美作両国へ侵攻し、備前国北部の周匝城・宮内城を攻略、「国中之輩」を帰属させた(畑2003)。備前国の実力支配の可能性を世間に印象づけた晴久は、翌年將軍足利義輝から備前・美作両国の守護職に任命されている。これによって赤松氏は備前・美作両国に対する公的支配の根拠を失い、赤松氏権力の補佐者として備作両国に影響力を伸ばす浦上政宗も、勢力維持の手法を改めることを迫られた。天文二十二年(1553)春、播磨国室山城にあった政宗は一族重臣を率いて備前国へ下向し直接支配の強化を実施(畑2015b)、尼子軍侵攻によって動揺する国内の鎮撫に努めつつ、新守護尼子氏との結合を謀った。一方、政宗の弟浦上宗景は兄の入国以前から備前国の浦上方諸勢力を引率して尼子氏の侵攻に抗しており、天文二十三年(1554)正月ごろ備前国北境を睨む要害の地に天神山城を構築し、尼子軍の南下を押さえていた(森2001・畑2003)。新守護尼子氏に結び付き直接支配強化を進める政宗と宗景とは間もなく対立し、同年二月政宗は弟宗景を義絶して尼子晴久と同盟したことを諸領主に通告、自らに味方して天神山城の通路を遮断するよう求めた(同前)。兄から討伐対象とされた宗景は、尼子氏の対抗勢力に成長していた毛利元就と手を結び、援軍を乞うた。これに応じた元就は、天文二十四年(1555)五月芸備国衆と三村家親率いる備中衆を備前国へ派兵し、浦上政宗に味方する松田元堅の属城を包囲した。毛利軍の助力を得て政宗方松田氏の動きを封じた宗景は、同年七月尼子・浦上政宗連合軍を天神山城に迎え撃ち、これを撃退する(畑2003)。その後、宗景は毛利方備中衆と連携して新庄山城などの政宗方諸城を攻略し、永禄三年(1560)までに備前国東部の新領主としての地位を固めた(同前)。

(浦上宗景の勢力拡大と宇喜多直家の台頭) 浦上氏の内訌に介入し宗景を勝利させた毛利元就は、浦上氏の内政に干渉するようになった。永禄六年(1563)、浦上宗景はこうした状態からの脱却を図り、兄政宗と和睦した上で毛利氏への敵対姿勢を顕し(畑2003)、宗景に同調せず毛利方に留まった龍口城主穰所氏を攻撃する(84)。この動きに呼応して、備前国児島・連島でも毛利氏に敵対する勢力が蜂起した。当時、尼子氏攻略を進めていた毛利元就は三村家親ら備中衆を伯耆国へ出動させていたが、家親らの帰国を許すとともに能島村上水軍の棟梁村上武吉に助勢を依頼、家親・武吉は同年閏十二月に児島へ渡って浦上氏に同調する動きを封じ、本太城を帰服させた(85、「長府毛利文書」(永禄六年)閏十二月二十四日小早川隆景書状／広島県史古代中世資料編V、「宝島寺所蔵史料」永禄十三年三月二十一日弘法大師掛絵裏書／新修倉敷市史2、「閩閩録」巻52兼重五郎兵衛(永禄六年)

毛利元就書状写／萩藩閩閩録 2)。翌永禄七年五月、毛利氏の要請で三村家親らが伯耆国の陣営に戻ったのを見計らった浦上宗景は宇喜多直家に命じて龍口城を夜襲させるが、城中には浦上氏の動きを警戒した三村氏の盟友石川久智の増援部隊が入っており、彼らの奮戦で浦上軍は敗北した（81～83）。以後浦上方宇喜多軍と毛利方備中衆は、この龍口城をめぐる攻防を繰り返す（87～89）。

浦上氏の攻勢を憂慮した三村家親は、永禄八年（1565）八月備中国へ帰還し、浦上氏および美作国に残存する尼子方勢力の掃討に着手、美作国久米南条郡沼元構を落として北から備前国へ攻め込む態勢を整えた（92）。備前国の北と西に同時に敵を抱える状況となり、安易な出動が困難となった宇喜多直家は、永禄九年（1566）刺客を放って三村家親を鉄砲で暗殺し、窮迫した事態を打開する（森脇書／戦国期中国史料撰）。永禄十年（1567）、浦上宗景は宇喜多直家の率いる軍勢をもって毛利方の金光要害（岡山城の前身）を包囲攻撃し（畑 2001～2006、畑 2016）、備前国から毛利方備中衆を一掃する。続いて翌年七月、宇喜多直家は松田元堅の居城金川城を急襲し、松田氏を滅ぼした（森 2006）。

同年九月、浦上宗景は播磨守護赤松義祐を支援する名目を得て義祐と敵対する播磨国龍野城主赤松政秀を攻撃すると同時に、北九州の大友宗麟と通謀し「毛利氏包囲網」を形成、東西から毛利元就を挟撃する構えをみせた。毛利氏および赤松政秀と友好関係にあった將軍足利義昭・織田信長は、永禄十二年（1569）宗景の策動を封じるべく播磨国へ軍勢を派遣するが、大きな戦果を得ることなく撤退し、宗景は援軍の望みを断たれた龍野城を包囲、赤松政秀を降伏させた（畑 2001～2006）。これをもって、浦上宗景は児島を除く備前国のほぼ全域・美作国東南部に加え西播磨を影響下に従え、山陽道東部における反毛利氏勢力の核に成長する。その一方、浦上軍の主力として奮戦してきた宇喜多直家も浦上氏と並び立つ政治的核に成長、永禄十二年七月浦上氏討伐軍を派遣した織田信長に内通し、宗景に反旗を翻した（森 2006）。織田軍の撤兵をうけ直家は間もなく宗景と和睦して浦上氏陣営に復帰するが、以後宇喜多氏は浦上氏から政治的に自立した存在として行動するようになる（同）。

（児島郡をめぐる攻防と宇喜多氏居城岡山城の成立） 永禄六年に児島へ出動して反毛利勢力を鎮定した毛利方の能島村上武吉は、本太城に重臣嶋吉利を入れて児島郡西部に影響力を伸ばした（山内 1994）。阿波三好氏は、毛利氏が児島を足がかりに讃岐国へ進出することを恐れ、永禄十一年（1568）八月ごろ香西又五郎率いる軍勢を児島へと渡海させ、毛利方の本太城に先制攻撃を加えた。しかし、城を守る嶋吉利の激しい抵抗にあい三好軍は大将を討たれて大敗する（同前）。

元亀元年（1570）九月、大友宗麟らと結んで毛利氏包囲網を形成する浦上宗景・宇喜多直家が、毛利氏の勢力圏備中国南部・備前国児島への同時侵攻に着手すると、三好氏は浦上氏と同盟し、間もなく能島村上武吉も毛利氏から離反して包囲網に加わり、児島郡西部が毛利氏包囲網側に占拠される事態となった。浦上・三好勢が備讃海域の制海権を握り連携通路を確保することを恐れた毛利元就は、備中衆と因島村上水軍を急派して浦上・三好方に降った鼻高山城・本太城を包囲させ、元亀二年（1571）四月までに陥落させた（山内 1994）。その間、篠原長房が率いる三好軍が讃岐国宇多津まで進出、浦上宗景・宇喜多直家も旭川下流地域まで自ら出陣し、阿讃備前の連合軍が児島郡に來襲する構えをみせたため、毛利元就は常山城に援軍を入れて城主上野隆徳を支援し、児島郡諸領主の動揺を鎮めた（124・127）。これに加え、毛利氏は備前本土から児島への渡り口にある今保城を押さえ浦上・宇喜多軍の児島渡海を撃肘したため（125・128）、浦上・三好連合軍による児島郡占領は回避された。

元亀三年（1572）十一月、毛利輝元による本格な反攻に遭った浦上宗景・宇喜多直家は、將軍足

利義昭の仲裁に頼って毛利氏と講和する（134）。講和に際して互いの領国境界が定められ、浦上・宇喜多氏は毛利氏との合戦で獲得した備中国内の城郭を毛利氏に返還し、毛利氏も備前国今保城を破却・撤収した（133・134、畑 2008）。一方、この講和交渉時点で毛利氏は宇喜多直家を「岡山」の代名詞と呼んでおり（133）、直家がすでに岡山城を本拠としていたことが判明する。元龜年間毛利氏との合戦に臨んだ直家が、備中南部・備前児島の両面作戦に対応する出撃拠点として好適な岡山に拠点を定めたものと評価できるが、これ以降宇喜多氏は岡山城を本拠地とする体制を固めていくことになる。

（備前・美作国主宇喜多直家の誕生） 天正元年（1573）十二月、浦上宗景は織田信長から備前・美作・播磨三ヶ国の朱印状を獲得し、信長の権力をバックに三ヶ国の領主を指揮下におこうと図った。すでに浦上氏に比肩する実勢力と名声を得ていた宇喜多直家は宗景の動きに反発し、翌年三月浦上氏と断交、同じ不満をもつ有力領主を味方に誘って挙兵した（久保 2000）。

両軍は半年間、邑久郡東部、赤坂郡南部で一進一退の攻防を続けたが、過去の経緯から浦上宗景に不信を抱く毛利輝元がこれを浦上氏排除の機会と捉えて宇喜多氏を後援したため（「閩閩録」巻 58 内藤次郎左衛門（天正二年カ）五月八日毛利輝元書状写／萩藩閩閩録 2）、戦況は宇喜多氏有利に転じる。天正二年（1574）九月には浦上氏の宿老明石行雄と浦上方の有力支城香登城が宇喜多氏に寝返り、浦上家中は動揺した（畑 2015 a）。ところが同年閏十一月、浦上宗景とこれに従う三浦貞広は、事態打開を期して大友宗麟・三好長治と連携して毛利氏包囲網の再現を謀り、毛利方備中衆の盟主三村元親を毛利氏から離反させることに成功する（山本 2007、森脇 2016）。事態の急迫を受け、毛利輝元・宇喜多直家は浦上氏攻略を休止し、三村氏討伐に全力を傾注した。宇喜多氏の侵攻を一時的に凌いだ宗景は、織田信長に援軍派遣を要請し態勢立て直しを図ったが、毛利氏との関係悪化を恐れた信長の浦上氏支援は、毛利氏に対し浦上・宇喜多氏を和解させるよう要望するという間接的対応に留まった（森脇 2016）。その間、毛利軍とともに三村元親を追い詰め腹背の脅威を解消した宇喜多直家は、天正三年（1575）四月ごろ浦上氏の本拠天神山城近傍の青山城などを攻撃し、付城を設けて天神山城を包囲する（畑 2015 a）。同年九月、力尽きた宗景は天神山城を捨てて播磨国へ逃走し、浦上氏による備前国支配は終わりを告げた（寺尾 1991・しらが 1997）。これをもって宇喜多直家は「両国持たる人」（「譜録 梶杜六郎広連所蔵文書」（天正七年）十一月三日吉川元春書状／広島県史古代中世資料編Ⅴ）＝備前・美作両国の諸領主を束ねる有力大名として毛利氏から認知され、これ以降本格化する織田・毛利戦争の帰趨を握る存在に成長する。また、毛利輝元はこの戦乱中、三村氏に与同した児島郡常山城主上野隆徳を滅ぼし、常山城を支城化して児島郡を直接的な影響下に置くことに成功した（光成 2008）。

（織田・毛利戦争と直家の死） 天正四年（1576）、織田・毛利氏が全面戦争に突入すると、宇喜多直家は毛利方先鋒となって播磨国攻略を積極的に推進した。天正六年（1578）上月城合戦で毛利軍が織田軍を破ると、播磨・摂津国衆の過半は毛利氏に味方するが、その後の毛利氏の動きは鈍く味方国衆への大規模な援軍派遣も行わなかった。直家は播磨・摂津の諸将と共に毛利氏分国の防波堤として使い捨てられることを警戒したものか、天正七年（1579）九月毛利氏と断交し織田信長に服属する。これによって備前・備中国境地帯は織田・毛利氏の軍事的境界と化した。天正八年（1580）三月、織田方宇喜多直家は岡山城の近郊辛川へ攻め寄せた毛利軍を迎え撃ち、敗走させた（辛川崩れ）。この時、毛利軍は備前・備中境目の長野城・今保城にも攻め込んだが、宇喜多方の抵抗にあって敗退

する（畑 2008）。同年四月、毛利軍は備前・備中国境の藤沢城（藤佐井・藤斎城）を足がかりに宇喜多方の国衆伊賀久隆の討伐を企てた。毛利軍は伊賀氏の支城福山城を接收し伊賀氏の本拠虎倉城へと進軍したが、伊賀軍の奇襲に遭い指揮官を討たれて大敗する（加茂崩れ）。敗戦後、毛利方は敵方に突出した福山城を捨て、勝山城を築いて伊賀氏の押さえとした（参 52・53・56・畑 2001～2006）。このように宇喜多氏は善戦したが、織田信長から積極的な援助を得られぬまま疲弊し、毛利氏の物量作戦に追い詰められていく。伊賀久隆の謎の横死を確認した毛利氏は、天正九年（1581）八～十月久隆の後継者伊賀家久を帰服させて近傍の備中忍山城を攻略し、備前国北西部を制圧した（山本 1994・2010）。こうして毛利軍の攻勢が備前国内に及ぶ危機の中、宇喜多直家は病死する（森 2003）。

（八浜・高松合戦と中国国分） 天正十年（1582）正月、宇喜多直家の遺児秀家は織田信長より家督と所領を安堵された。その直後、宇喜多氏は毛利方の児島郡小串城主高島氏を調略し、自陣営に寝返らせている（森 2003）。高島氏離反の影響が児島郡全域に波及することを恐れた毛利輝元は、叔父の穂田元清を大将とする軍勢を児島郡へ送り込んだ。元清は天城に陣城を設け、これを足がかりに児島郡へと進出し、麦飯山城を押さえた。宇喜多氏は秀家の叔父宇喜多忠家・元家父子を八浜に渡海させ、両児山城を拠点に毛利軍と対峙するが、同年二月の合戦で毛利軍に敗れ、宇喜多元家を討ち取られて敗走した（八浜崩れ。同前）。勝ちに乗じた毛利軍は宇喜多方の両児山城を包囲したが、羽柴秀吉率いる織田軍の備前国進出の噂を聞き、備中国幸山城まで軍勢を引き揚げている（同前）。

天正十年四月、岡山城へ到着した羽柴秀吉は、「今保の渡口に大城」を築き（参 67）辛川城など備前・備中国境地帯の城に手勢を配備して（畑 2008）毛利軍の陽動を封じた後、備中国へと出動し毛利方諸城を陥落させ、高松城を水攻めにした。ところが、高松城包囲の最中「本能寺の変」が発生し織田信長が横死したため、秀吉は毛利輝元に講和を提示し輝元がこれに応じ織田・毛利の決戦は回避された。その後、秀吉と毛利氏は互いの領国境を決める交渉を行い（中国国分）、天正十三年（1585）春毛利領と秀吉方宇喜多領の範囲・境界が確定、宇喜多秀家は児島郡を含む備前・美作国の全土、備中・播磨国の一部を合わせた 47 万 4 千石を領する大名となる（大西 2017）。一方、毛利方の伊賀家久は備前国北西部の所領を失い、虎倉城を羽柴秀吉の使節に引き渡し退去した（256・258）。

（宇喜多秀家の治世と支城体制） 宇喜多秀家は「国分」成立当初 13 歳の少年に過ぎず、領国支配は宿老合議によって担われた。しかし、天正末年～文禄年間（1591～96）になると、成年に達した秀家は直属奉行人を介した自らの意思に基づき集権的分国支配に着手する（森脇 2011）。この過程で秀家は、検地を経て家臣団の本領の石高と対応する軍役負担を確定し、場合によっては従前の本領と無関係な地域に所領高に応じた知行地を再設定した可能性が高い。例えば宿老富川達安の本領は、天正十三年まで毛利領として推移し富川氏の地縁的本領があったとは考えがたい児島郡に設定されており（「秋元興朝所蔵文書」文禄三年九月十二日宇喜多秀家判物／久世町史資料編第一巻編年資料）、当主秀家の意図を反映した本領転封をとまなう分国内要地への重臣配置が行われたことがわかる。

こうした分国統治の強化と並行するかたちで、天正十六年（1588）ごろから宇喜多氏居城で分国支配の中核となる岡山城の大規模改修が開始され、七ヶ年ほどの工期を経て高石垣上に瓦葺の天守・櫓が建つ近世城郭としての岡山城と城下町が整備された。岡山城と城下町の整備は家臣団統制と一体的に進められ、分国内の中小武家は「居城」の保有を否定され、秀家の家臣として城下町へ集住させられた（森 2009）。その一方、常山城・小串城・虎倉城などの分国支配の要となる城郭は岡山城の

支城とされ慶長五年（1600）まで存続した（275）。虎倉城二の丸櫓台南裾で筆者が発見した鬼瓦は、秀家期または小早川期の虎倉城に瓦葺の櫓が整備されていたことを推測させる。徳倉城（266）・本太城（畑 2016）も支城として存続した可能性がある。備前国西部と児島の中央・東端・西端に支城配備が確認できる一方、岡山城より東にこの時期の存続を確認できる城がないのは、播磨国赤穂・佐用郡が宇喜多領に編入され備前国東部が分国境ではなくなった後に支城整備が推進されたことを物語る。

一方で宇喜多秀家による分国構造の刷新は、旧体制に馴染む宿老衆と秀家を取り立てた直属奉行人層との政治的対立を生み、お家騒動に発展する（大西 2010・森脇 2011）。秀家は家中立て直しを図るが、直後の慶長五年（1600）に勃発した関ヶ原合戦に西軍の主力として参戦し、滅亡した。

（小早川・前期池田氏の支城体制と城割） 宇喜多氏滅亡後、備前・美作二ヶ国の大名となって岡山城に入った小早川秀秋は、常山城を壱岐正利、片上城（富田松山城か）を林丹波守（黒田 2000）、虎倉城を松野重元（畑 2018）といった重臣に委ねて支城化し、普段は彼らの与力が城番となって支城を管理する体制を敷いた（畑 2018）。これらの支城は備前国の南方海上・東端・北西端に分布し美作国境には確認できないことから、秀秋が他大名との領国境に関連するエリアに絞って支城を配備したことがわかる。しかし、秀秋は慶長七年（1602）急死し小早川家は断絶した。

小早川家断絶後、江戸幕府は播磨国主池田輝政の子忠継に備前国を与えるが、忠継幼少のため池田利隆（輝政長男）が備前国に入り国政を執った。利隆は常山城に代わる児島郡の新拠点として下津井城を築城する。「下津井ハ西国より之手先に候間、城執立」てるよう徳川家康の内意を受け、城主池田長政の江戸普請役を免除して工事が進められ（参 73・76）、慶長十二年（1607）までに総石垣の近世城郭が備讃瀬戸を望む海辺に出現する（282）。このとき金川城にも家老の日置忠俊が入り「新城」として整備された（287）が、下津井・金川城の石垣普請は池田利隆が奉行を派遣し直営で実施した（参 74・75）。しかし、元和三年（1617）までに下津井城が「毀撤」されたことが確認されており（倉地 1991）、大坂の陣終結後幕府の意向をうけ岡山城の支城は廃されたとみられる。さらに寛永十五年（1638）の島原の乱直後、金川城の石垣が割り崩された（287）。記録は残らないが、下津井城も主郭と各曲輪の櫓台石垣が激しく損壊している。古城の縄張りを利用して一揆軍が蜂起することを予防する狙いから、既に機能停止している金川・下津井城に対し、改めて縄張りを破碎する「城割」が行われた可能性が高い。こうして備前国からは岡山城を除く全城郭が姿を消したのである。

（畑 和良）

（参考文献）

- 藤井駿 1971 『吉備地方史の研究』（法蔵館）
- 藤井駿 1974 「難波氏の由緒について」（『鴛渚舎通信』5）
- 水野恭一郎 1975 「赤松被官浦上氏についての一考察」（『武家時代の政治と文化』創元社）
- 小川信 1980 『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館）
- 水野恭一郎 1983 「守護代浦上村宗とその周辺」（『武家社会の歴史像』国書刊行会）
- 板津謙六 1983 「松田氏雑考」（『玉松 松田元成、大村出雲 五百年祭記念』玉松会）
- 佐藤進一 1988 『室町幕府守護制度の研究 下』（東京大学出版会）

- 三宅克広 1989 「室町期備前国児島郡の分郡支配」(『岡山県史研究』11)
- 岡山県 1989 『岡山県史』第三巻古代2
- 岡山県 1990 『岡山県史』第四巻中世1(岡山県)
- 岡山県 1991 『岡山県史』第五巻中世2(岡山県)
- 寺尾克成 1991 「浦上宗景考」(『國學院雑誌』92 - 3)
- 倉地克直 1991 「朝鮮通信使のみた牛窓・下津井(1)」(『岡山地方史研究』66)
- 余語敏男 1993 『宗碩と地方連歌』(笠間書院)
- 山本浩樹 1994 「天正年間備前忍山合戦について」(『岐阜工業高等専門学校紀要』29号)
- 北村章 1994 『備前児島と常山城』(山陽新聞社)
- 横田孝雄 1995 『所持銘のある末古刀』(私家版)
- 山内謙 1997 『海賊と海城』(平凡社)
- しらが康義 1997 「天神山落城についての一史料」(『岡山藩研究』23)
- 依藤保 1999 「享禄四年大物崩れ後の播磨」(『歴史と神戸』38 - 5)
- 黒田基樹 2000 「小早川秀詮の備前・美作支配」(『藩世界の意識と関係』岩田書院)
- 久保健一郎 2000 「「境目」の領主と「公儀」」(『藩世界の意識と関係』岩田書院)
- 榎原雅治 2000 「備前松田氏に関する基礎的考察」(『日本中世地域社会の構造』校倉書房、初出1988年)
- 野田泰三 2001 「戦国期における守護・守護代・国人」(『日本史研究』464)
- 森俊弘 2001 「岡山藩士馬場家の宇喜多氏関連伝承について」(『岡山地方史研究』99)
- 畑和良 2001～2006 『落穂ひろい』(ウェブサイト、<http://ochibo.my.coocan.jp/>)
- 畑和良 2003 「浦上宗景権力の形成過程」(『岡山地方史研究』100)
- 森俊弘 2003 「年欠三月四日付け羽柴秀吉書状をめぐって」(『岡山地方史研究』100)
- 小林基伸 2004 「浦上則宗論」(『戦国期の権力と文書』高志書院)
- 畑和良 2006 「浦上村宗と守護権力」(『岡山地方史研究』108)
- 森俊弘 2006 「宇喜多直家の権力形態とその形成過程」(『岡山地方史研究』109)
- 山本浩樹 2007 『西国の戦国合戦』(戦争の日本史12 吉川弘文館)
- 光成準治 2008 「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」(『倉敷の歴史』18)
- 畑和良 2008 「織田・毛利備前戦役と城館群」(『愛城研報告』12)
- 森俊弘 2009 「岡山城とその城下町の形成過程」(『岡山地方史研究』118)
- 大西泰正 2010 『豊臣期の宇喜多氏と宇喜多秀家』(岩田選書地域の中世7)
- 伊藤邦彦 2010 『鎌倉幕府守護の基礎的研究 国別考証編』(岩田書院)
- 山本浩樹 2010 「織田・毛利戦争の地域的展開と政治動向」(『西国の権力と戦乱』清文堂)
- 森脇崇文 2011 「豊臣期大名権力の変革過程」(『ヒストリア』225)
- 外岡慎一郎 2015 『武家権力と使節遵行』(同成社)
- 畑和良 2015a 「備前国天神山城周辺の城館群」(『愛城研報告』19号、2015年)
- 畑和良 2015b 「中世港湾都市備前国片上の「年寄中」と浦上氏権力」(『岡山地方史研究』135)
- 畑和良 2016 「本太城主「能勢修理」のこと」(『倉敷の歴史』26)
- 森脇崇文 2016 「天正初期の備前地域情勢と毛利・織田氏」(『ヒストリア』254)
- 大西泰正 2017 『宇喜多秀家』(実像に迫る13 戎光祥出版)

畑和良 2018 「備前国における中世山城の縄張りと年代観」(『愛城研報告』22)

第5節 岡山県下の城館遺跡に残る石積み・石垣

1 はじめに

石垣は、瓦葺建物と共に岡山城、津山城、備中松山城、下津井城、成羽陣屋などの江戸時代に機能した近世城館を大きく特徴づけるが、それ以前の城館にもあった。今回の総合調査の対象となった城館跡に残る石積み・石垣は、城館遺構としての認定や時期特定に課題を残すものもあるが、数十もの城館跡にわたる事実は注目に値する。本稿では、概ね慶長8年（1603）以前に積まれたとみられる石積み・石垣について総括を行い、岡山県下の城館遺跡を考える手立てとしたい。便宜的に高さ約1.5 m以上の壁面を形成するものを石垣、それ以下のものを石積みと呼称する。また、本格的な織豊系城郭の成立を告げる宇喜多秀家の岡山城築城を画期に、天正年間後葉以前を戦国期、以後を織豊期とする。

2 石積み・石垣が残る主要な城郭

(1) 備前

岡山城（岡山市北区）は天正16年（1588）（1）から豊臣大名としての宇喜多秀家が積んだ高さ最大15 mで、がむしゃらに垂直ではなく計画的に一定の傾斜をもたせた法勾配で立ち上る高石垣が林立し、県下で最も典型的で巨大な織豊系城郭である。現構造は続く小早川秀秋や池田忠継・忠雄の改修による高石垣が混在するいっぽう、中の段の史跡整備に伴う発掘調査では、最下層から秀家期に先行する宇喜多直家期に積まれたとみられる、曲輪外周土塁南西隅付近の内裾の石積みが検出された（2）。その古段階は、城地で採集できる流紋岩系で長辺40 cmほどの粗荒材を横に置いて高さ0.6 mで垂直に積む石積み、新段階はやはり城地の地山由来とみられる長辺90～200 cmの花崗岩の巨石を高さ0.8 mの列石状に組み立てた構造で、両者とも高さがないにも関わらず空石状態の裏込石を伴っている。検出部位の土塁上には隅櫓が建っていた可能性がある。

富山城（岡山市北区）は、本丸・二の丸などに石積み・石垣が残り、部分的に発掘調査が行われた（3）。両曲輪とも外周土塁外方基部ないしは曲輪肩部に施された高さ0.5 m前後の石積みとその下方の曲輪裾部に最大遺存高1.5 mの石垣が二重に廻る。本丸では上部は松田後期、下部は浮田期と時期差が確認された。少なくとも本丸北下石垣は石垣面のうちに立石ないしは大石が一定間隔で配され、その間を小さめの築石を横に置いて充填する特徴がある。また、裏込めを含めた断面形が石塁状で、盛土によって埋込まれた裏側にも粗雑な石垣面をもつ。そうした構造は安芸の吉川元春館をはじめとした吉家氏関係の城館や寺院に特徴的で、文献史料にみえる「石つき之もの共」が積んだとされる石垣（4）と近似し、技術的な関連性が注目される。

金川城（岡山市北区）は、備前最大の山城であるが石垣は顕著でない。大手の登城路に面する道林寺丸の限定的な曲輪の側部の局所に高さ約2 mで垂直に立ち上る石垣が残るほか、本丸北西部の土塁外側斜面に長辺1 m級の配石が残る。また二の丸の杉の木井戸の奥の土塁にも高さ0.5 mほどの護岸石積みがある。本丸南東にある喰違い虎口にも石垣が積まれていた形跡があるが、散布する石材に矢穴痕が残る割石が含まれ慶長半ば以降に下ると判断できる。



写真 222 天神山城 (和気町)



写真 223 三石城 (備前市)



写真 224 北曾根城 (和気町)



写真 225 東山城 (備前市)



写真 226 白石城 (岡山市北区)



写真 227 本太城 (倉敷市)



写真 228 常山城 (岡山市南区・玉野市)



写真 229 徳倉城 (岡山市北区)

第 219 図 備前国の山城に伴う石垣・石積み

徳倉城（岡山市北区）は織豊期に積まれたとみられる石垣が、本丸と北に続く妙見宮のある曲輪を中心に多用される。最大高は約5 mに達し、築石に長辺1 m以上の大石を用い、虎口部では立石を組み込んでいる。本丸南(写真 229)などでは隅角が鈍角で、地形に従って石垣を構築したことが分かる。麓の谷から目立つ東面は石垣が顕著であるのに、背後となる西側では石垣が確認できず、虎口部の立石組込みと合わせて、視覚を意図した指向性が強く窺える。

虎倉城（岡山市北区）は、本丸を中心に高さ3 m以上の石垣が構築されていたとみられるが、破城を受け、現状は長辺1 m級の石材が散布する。本丸南部では局所的に高さ1 m程度で残る個所が確認できるほか、東南に延びる長大な南の曲輪の先端の局所にも残骸が確認できる。

長野城（岡山市北区）は、主郭から一段下がった曲輪の斜面の局所に、高さ0.7 m内外で盛土部の土留めが主目的とみられる地山石使用の石積みがある。

白石城（岡山市北区）では、南西尾根の半ば付近の曲輪の西辺側部のごく局所に、高さ1.5 mの石垣がある。盛土部の土留めの役割が主目的とみられ、裏込石が充填されている（写真 226）。

砥石城（瀬戸内市）では本丸の東辺に高さ1.5 m内外で垂直に立ち上る石垣が構築されている。ただし、現構造の大部は近年の積み直しを受けている。

三石城（備前市）では、城門部と麓の盆地を見下ろす檜台状曲輪に部位が限定されるが、高さ2～3 mの石垣が一定区間墨線をなす。石材は城地で豊富な地山石である。概して急角度で立ち上がるが、城門部脇の外周部（写真 223）では計画的な法勾配とみられる部位もある。隅角は角石の長辺の一段ごとの左右の振り分け＝算木積みの指向性は希薄である。横堀の外方土塁の内裾にも長辺1 m程度の大きさを2段以上に積んだ石積みがある。

東山城（備前市）では、尾根筋下方の二つの曲輪の側部に最大長辺1 m級の地山石を高さ約1.4 mに積むが、石垣面としての体裁が整わず盛土端の土留めとしての観が強い（写真 225）。

富田松山城（備前市）では、主郭土塁内裾の一部にも列石状の石組みを伴うが、西側山腹の複数の曲輪で地山石使用の石積みが多用されている。盛土部とみられる曲輪肩部や曲輪間の段などの各局所に残り高さ1 m以下で長辺数十 cm 以下級の地山石を雑に積む。

北曾根城（和気町）では本丸西側の長さ数mの局所に、地山石を高さ約1.5 mで垂直に立ち上る石垣が残る。端部は地山の露岩に続けて積んでいる（写真 224）。

天神山城（和気町）は、戦国大名となった浦上宗景の居城で、戦国期に積まれたとみられる石垣が県下で最も多用された山城で、復元最大高が約3 mに達する個所もある。石垣は相当数の曲輪で確認できるが、尾根直交方向より、急斜面となる長辺側部で顕著で、一部の曲輪の虎口脇などにも認められる。現存最大高は2 m前後で、平均的な築石は長辺数十 cm、空石状態の裏込石を伴って垂直に立ち上がる（写真 222）。石材は地山石で、曲輪の造成時に生じた石を石垣材として用いた側面が強そうである。出丸とされる太鼓丸でも虎口部脇を中心に高さ1 m前後の石積みが残るが、築石の長辺は1 m超級のものを含んで横積み度が高い。本城部との違いは該当部付近で採れる地山石の石種や大きさ・形状に由来する側面が強そうである。

また本城の南西山麓にある天瀬侍屋敷跡で現存最大高1.5 mの石積みが広範に確認できる。幅1 m前後の石塁状で屋敷地の土塀の基礎とみられるものが主体で、方形に完結圍繞するものもある。空石状態の裏込石を伴って地山石を垂直に積むが、一部に立石を組み込む部位もある。

常山城（玉野市・岡山市南区）は、大量の瓦を伴って織豊期に積まれたとみられる石垣が多用され

る。最大高5 mを越え、長辺1 mを超える築石を交える石垣が個別の曲輪を完結圍繞することはないが、高くて構築区間が長いのは本丸の西側や南に続く兵庫丸の先端部、北東尾根先端の惣門丸（写真228）、北尾根先端の榎尾丸で、防御正面という軍事性と合わせて、陸路が通過する山麓部や海上交通に関わる児島湾からの視覚性を勘案した配置とみられる。高石垣は一定の法勾配をもって立ち上り、本丸西辺石垣の一部には立石を石垣面中に組み込む。

本太城（倉敷市）は高さ最大1.5 m前後で地山石を垂直に積む石垣が主郭を取り巻いている（写真227）。

（2）美作

伏山城（岡山市北区）は小規模山城であるが、城地が岩山で石材が豊富なことも恐らく関わって、石垣が多用され、現状最大高が約3 mに達する特異な城郭である（写真231）。主郭だけでなく尾根筋に沿って二段ある曲輪のほぼ全辺に石垣が確認できるが、露岩に当る個所で石垣が一旦終わる部位もあり、厳密にはコマ切れで、方向軸が微妙に異なる石垣の集合体で、高さ確保のため、あるいは構造的に安定した平坦面を造るために、二段、三段と階段状となる部位もある。築石は最大長辺1 m超級のものから人頭大のものまで交え立ち上がりはほぼ種直で、空石状態で裏込石が充填される。隅角部も含むが、角石は大きさ・形が一般部築石に対して特化せず、算木積みを指向するわけではない。

伊勢畑城（岡山市北区）は、大手門や主郭の北西下の曲輪など、土塁切目となる通路部脇や、主郭下方の帯曲輪の斜面のごく局所に現状高0.8 mほどの石積みが残る。

鶴田城（岡山市北区）は、高さ1.2 m内外で地山石を垂直に積んだ石積みが、主郭の東斜面や西尾根の曲輪の側部や先端で一定区間にわたって連続する。

立畑城（久米南町）は、主郭南方の帯曲輪で岩盤を加工した段が認められるが、確実な石積みがあるのは主郭北東の大堀切に面する肩部の局所（写真230）で、土留めとみられる高さ0.5 m程度の粗雑な石積みが残る。裏込石を伴っていないようである。

一之瀬城（美咲町）は、本丸の北西斜面局所、北西の曲輪の先端、南の曲輪の西側部で長辺数十cm級の築石による高さ0.7 mほどの石積みを確認できる。空石状態の裏込石は伴っていないようである。

岩屋城（津山市）は、美作屈指の大規模山城であるが土造りが基本で、水門脇や主郭南東の帯曲輪斜面などのごく局所に土留めを担う石積みがあった形跡がある。

篠向城（真庭市）も土造りが基本の大規模山城で、本丸の外斜面ごく局所に高さ0.8 mで垂直な石積みが残る。斜面のものは4段積みであるが、虎口通路脇とみられる個所では、扁平立石を組み込む。

高田城（真庭市）では、山麓の屋敷跡部分の発掘調査で戦国期に遡るとみられる石積みを伴う段造成が確認されたほか（5）、山上にある本丸の城門部で、残存高1 m以下の石積みで区画された通路部が発掘調査（6）された。検出遺構は破城を受けて判然としないが、共伴瓦から織豊期に機能したことは疑いない。そのうち南東辺の垂直に立上る石積みは築石背後に少数の控石材は配すが、裏込めはなく、築石間に土砂層を挟む戦国様式である。

上山城（美作市）は、頂部平坦地に最大高約1 mで、長辺数十cm級の築石を垂直に積んだ石積みが残る。列石部を交えて完結圍繞していた可能性が窺えるが、当遺跡自体が城館跡であるのかが不詳である。

荒神山城（津山市）は、破城を受けたとみられ、本来の石積み・石垣の状況は不詳である。本丸で



写真 230 立畑城 (美咲町)



写真 231 伏山城 (岡山市北区)



写真 232 矢筈城 (津山市)



写真 233 医王山城 (津山市)



写真 234 経山城 (総社市)



写真 235 塩山城 (新見市)



写真 236 鬼身城 (総社市)



写真 237 鍛冶山城 (岡山市北区)

第 220 図 美作国・備中国の山城に伴う石垣・石積み

も石材の散布から石垣があった可能性も窺える。南側二段目の曲輪の外斜面局所や北側の金蔵の段の斜面などに1 m余りの高さをもって残る。また、主尾根西の曲輪の枅形虎口部にも低石積が残る。

医王山城（津山市）は、慶長期まで降るとみられる大量の瓦を伴う主郭の二辺が石塁となり、内外面とも長辺1 m足らずの築石を、最大高1.5 m内外で垂直に積む（写真233）。そのほか、本丸の南斜面の局所や、南尾根先の曲輪の先端部にも石積みが残る。

矢筈城（津山市）は天正12年（1584）の廃城と伝わり、美作で最も石垣が顕著な戦国期山城である。新城とされる西側曲輪群のうちでも主郭と東方尾根に続く曲輪を中心に現存最大高約2 mの石垣が顕著で、尾根筋に沿う曲輪の両側部に長さ数十mに及ぶ墨線が形成されている（写真232）。尾根を横断する方向の曲輪段や土塁基部にも低い石積や大石使用の列石による土留めを設ける部分もある。石材は全て地山石で、長辺数十cm級（最大では1 mを超える）の荒割材を横に積み、立ち上りは垂直に近く、背後には裏込石を伴う。石垣が顕著な区域は露岩が顕著な区域と一致し、城地の石材の豊富さが構築量の多さに結びついていることは疑いないが、いっぽうで同様に地山石材が豊富な東側曲輪群では石垣が顕著でなく、単に石材の有無が、石垣の有無や量を決定づける要因ではなかったことを物語る。

（3）備中

鍛冶山城（岡山市北区）は、最高所を乗せる土台的な曲輪の外斜面を復元高3 m以上、地山石を横に積んで裏込石を明確に伴う石垣が囲っていた形跡がある。南東斜面では現存高2 m前後で、長辺数十cm以上の築石を法勾配で積む個所が残る（写真237）。ただ一部ではそれより復元高が低くて垂直に立ち上る個所もある。築石は全体とすれば長辺1 mを超えるものを交えている。戦国以来の中世山城の中枢部に限って、高松城水攻め後に石垣を積んで織豊系城郭化を図った観が強い。

撫川城（岡山市北区）は平城で、長辺1 m超級の築石を用い、主郭の外周に水堀から立ち上がる法勾配で高さ4 m内外の織豊期に積まれたとみられる石垣がある。少なくとも現状で石垣が残るのは主郭西半部に限られ、本城である岡山城の前衛として、西方へ対する防御性や視覚性を重視した構築であった可能性が窺える。築石は沖積地である城地では採れない花崗岩自然石で、確実な搬入石材である。

備中高松城（岡山市北区）も沖積地に立地する平城である。本丸外周の発掘調査（7）で、関ヶ原合戦後の初期高松陣屋としての改修期の瓦と石材が混じりながら濠底に堆積する状況が確認された。水攻め後の花房氏による改修によって、本丸外周に水堀から立ち上がる高さ2～3 mの石垣が構築され、元和堰武を受けた高松陣屋の移出に伴って破城を受けた可能性が窺える。

鷹巣山城（岡山市北区・倉敷市）は高松城攻防戦時に毛利勢、あるいは小早川隆景が入った陣城とされる。主郭の山側、大堀切に面して設けられた土塁の外辺基部に高さ約1.2 mの石積みが確認できる。垂直に立ち上り、端部に隅角部をもつが、角石長辺は形態的に明確でなく算木積みを指向していない。築石背後に控え石材は確認できるが空石の裏込めではなさそうである。

すくも山城（岡山市北区）も高松城水攻め時の毛利方の小規模な陣城であった。発掘調査によって主郭の両側辺で護岸となる石積みが検出された（8）。築石背後に空石ではない控え石材を伴いながら長辺50cm未満の築石を横に3段程度、高さ1 m足らずに積んでいた。

経山城（総社市）は、主郭付近の虎口脇（写真234）、土塁基部、曲輪肩部、曲輪内土塀基礎などに最大高約1.2 mで地山石を用いて垂直に立上る石積みが、各局所とはいえ広範に残る。

表 19 石垣や瓦を伴う主要な城館

国	城名	所在地	石垣 (構築量は▲▲▲→▲→△→∴で模式化、高さは最大高、戦国様式・織豊様式などの別を表示)	瓦 (量を▲▲▲→▲→△で模式化)
備前	岡山城	岡山市北区	▲▲▲▲▲高さ15m(戦国・織豊・徳川)：織豊遺構は各曲輪外縁を完周：総石垣	▲▲▲▲▲岡山城1～5式
	富山城	岡山市北区	▲高さ2m以上(戦国)：主郭側辺連続、土塁基部など	▲岡山城1式併行品
	金川城	岡山市北区	△復元高2～3m程度か(戦国・徳川)：主郭斜面など局所	▲岡山城1・4式(岡山城との同范品が主体)
	徳倉城	岡山市北区	▲▲高さ5m内外(織豊)：中枢曲輪群外周連続など・多用	▲▲岡山城1・2式(岡山城との同范品が主体的)
	虎倉城	岡山市北区	▲高さ1.2m(織豊か?)：主曲輪斜面ほか局所・本来はもっと高く多用か(被破城?)	▲▲岡山城1式併行品、3式(岡山城との同范品含む)
	長野城	岡山市北区	△高さ0.7m内外(戦国)：曲輪斜面ほか散在	なしか
	白石城	岡山市北区	∴高さ1.5m(戦国)：尾根先曲輪側部のごく局所	未確認
	亀山(沼)城	岡山市東区	未確認	未確認
	保木城	岡山市東区	なしか	△不詳
	砥石城	瀬戸内市	▲高さ1.5m内外(戦国)：主曲輪側辺やや連続	なしか
	三石城	備前市	▲▲高さ2.5m(戦国)：城門周辺・平野側台など限定部で連続	未確認
	東山城	備前市	∴高さ1.4m(戦国)：曲輪側部の局所。石垣としての面が不揃い。	なしか
	富田松山城	備前市	▲高さ1m内外(戦国)：斜面部曲輪の側部に散在	なしか
	北曾根城	和気町	∴高さ1.5m(戦国)：中枢曲輪側部のごく局部	なしか
	天神山城	和気町	▲▲高さ2.5m(戦国)：曲輪側部など連続、多用	△岡山城1式併行品(馬屋の段のみ)
	天瀬侍屋敷	和気町	▲▲高さ1.5m以下(戦国)：曲輪・敷地の区画連続、多用	なしか
	周匝茶臼山城	赤磐市	なしか	△岡山城1式併行か(平瓦のみ=大棟熨斗?)
	常山城	玉野市・岡山市北区	▲▲▲高さ5m(織豊)：主曲輪・尾根先曲輪など連続区間・多用	▲▲岡山城2式(岡山城との同范品が圧倒)
	下津井城	倉敷市	▲▲▲高さ5m内外(徳川)：各曲輪外縁を完周：総石垣	▲▲岡山城4式(岡山城との同范品が圧倒)
	本太城	倉敷市	▲高さ1.5m内外(戦国)：主曲輪外周連続	なしか
美作	伏山城	岡山市北区	▲▲高さ3m(戦国)：主要曲輪の外縁を連続、多用されるが完周でない	なしか
	伊勢畑城	岡山市北区	∴高さ0.8m(戦国)：土塁横断の城門部脇や曲輪斜面のごく局所	なしか
	鶴田城	岡山市北区	▲▲高さ1.2m内外(戦国)：主要曲輪の外縁を連続	未確認
	立畑城	久米南町	∴高さ0.5m内外(戦国)：主郭の堀切側肩部の局所	なしか
	一之瀬城	美咲町	∴高さ0.7m(戦国)：主曲輪斜面、副曲輪の先端・側部の局所	なしか
	岩屋城	津山市	∴高さ1.2m内外(戦国)：主郭でない曲輪の斜面のごく局所	▲岡山城1式(岡山城と同范)：慈悲門院跡の曲輪ほか
	篠向城	真庭市	∴高さ0.8m(戦国)：主郭の斜面などごく局所	△岡山城1式(岡山城と同范)：天正5年銘)
	高田城	真庭市	∴復元高1～2m(戦国)：主郭の城門付近の局所に連続(被破城?)	▲岡山城3式(岡山城と同范)、別にコピキA瓦も
	上山城	美作市	△高さ1m(戦国)：主曲輪の外周を完周していたか	未確認
	林野(倉敷)城	美作市	東端部の曲輪などに石材が散布し、何らかの石積みがあったか?	▲岡山城3・4式併行品(同范関係不詳)
	荒神山城	津山市	△(▲か)1.5m内外：周辺曲輪の斜面など(被破城か)	▲▲岡山城2式(岡山城との同范品が圧倒)
	津山城	津山市	▲▲▲▲高さ15m内外(徳川)：各曲輪外縁を完周	▲▲▲▲岡山城3～5式併行品
	医王山城	津山市	▲▲高さ1.5m内外(戦国)主曲輪外周石塁として連続、一部曲輪の斜面局所	▲岡山城3・4式併行品(同范関係不詳)
	矢筈城	津山市	▲▲高さ2m内外(戦国)：西曲輪群の複数曲輪の側部を長く連続	未確認
備中	鍛冶山城	岡山市北区	▲復元高さ3m以上(織豊)：主郭付近の外縁に本来は連続・完周か(被破城?)	△不詳
	撫川城	岡山市北区	▲▲高さ4m内外(織豊)：主郭の3辺に連続	▲岡山城2式(岡山城との同范品)
	高松城	岡山市北区	宇喜多期の状況は不詳、慶長半ば(徳川)は▲高さ2m内外か	▲▲岡山城1式併行品、同4式(岡山城との同范品が圧倒)
	鷹巢山城	岡山市北区・倉敷市	△高さ1.2m(戦国)：大堀切に面する主郭土塁基部の1辺に連続、両端に隅角	なしか
	すくも山城	岡山市北区	∴高さ0.7m(戦国)：主郭両側辺斜の斜面	なし
	経山城	総社市	▲▲高さ1.2m内外(戦国)：主郭付近の複数曲輪の外周に断片的に散在	△不詳
	長良山城	総社市	▲▲高さ2m内外：両丘頂の曲輪の外周	なしか
	木村山城	総社市	∴高さ0.7m内外：曲輪の前面段(列石状)	なしか
	鬼身城	総社市	▲▲復元高5m内外：城門部や主郭部周辺の外縁に本来は連続か(被破城?)	▲岡山城2・3式併行品?(コピキB>A)
	猿掛城	倉敷市・矢掛町	∴高さ1m内外：一部曲輪外縁の局所、曲輪内の段など	△不詳
	矢掛茶臼山城	矢掛町	▲▲高さ2m内外：主郭の一辺、一部曲輪の斜面局所	不詳
	松山城(大松山)	高梁市	△高さ1m内外(戦国)：一部曲輪の外縁斜面の局所	不詳
	松山城	高梁市	▲▲▲▲高さ10m内外(徳川ほか)：各曲輪外縁を完周	▲▲▲▲岡山城3～5式併行品、ごく少量コピキA瓦
	鶴首城	高梁市	△高さ1.2m内外(戦国)：主郭の平野側外縁など	なしか
	成羽陣屋	高梁市	▲▲高さ4m前後(徳川)：主曲輪の外縁を完周	不詳
	鴨山城	浅口市	∴高さ1m内外：一部曲輪外縁の局所	なしか
	石蟹山城	新見市	∴高さ0.7m内外：ごく一部曲輪の側縁(列石状=土塀～土塁基部)	なしか
	樫城	新見市	∴高さ0.7m内外：一部曲輪の肩部・斜面の局所	なしか
	塩山城	新見市	▲▲高さ2.5m：主郭との斜面局所	なしか

長良山城（総社市）は、神社境内となっている北の平坦地と同じく南の平坦地に外斜面に長辺1 m 超級を含む花崗岩自然石を積んだ石垣が残る。北の平坦地のものは最大高約2 mで垂直に立ち上り、西・北・東の各辺を画すコ形に連続して続く。裏込石を伴い、大石使用で築石を横に置くが、隅角部は算木積みを指向しない。南の平坦地では南辺を中心に1～2段が観察できる。当遺跡は史料上から城跡とされ、石垣も構造から近世・近代のものとは考えにくい、城跡か否かの検討を含めて課題が残る。

木村山城（総社市）はごく一部の曲輪の尾根筋横断辺となる段の虎口脇などに長辺1 m前後の築石を用いた列石～低石積が残る。

鬼身城（総社市）は、大規模な破城を受けているらしく、各所に石材が散布し、その状況から本来は相当規模の石垣が各所にあったものとみられる。曲輪群全体の外周部に高石垣が廻っていたようで、南西から北東は外斜面に断続的に石垣基部が残る。東端部の外斜面にも隅角部の基部が残り（写真236）、復元高は約5 mとなる。角石が長辺1 m級の大石で、算木積みを指向し、法勾配で立ち上る。曲輪群内部でも、大手虎口に本来は両面に石垣を伴う石塁を伴っていたとみられるし、尾根上の曲輪間の段や虎口跡にも現状高1 m内外で石垣の残骸が残る。慶長年間頃に高石垣が積まれ織豊系城郭に改修されたものと判断できる。矢穴を伴う石材は未確認。

猿掛城（矢掛町・倉敷市）は、主郭の北東辺の局所に高さ1 m前後で垂直に立ち上る石積みが確認できる。また、北東下方の曲輪の段の一部にも低石積みが残る。

矢掛茶臼山城（矢掛町）は、主郭の西に高さ2 mほどの石垣が残るが、少なくとも一部は後世の積み直しを受けている可能性が窺える。いっぽう、公園となっている南方の曲輪斜面の複数個所にも高さ1 m前後で垂直に立ち上る石積みが断片的に残る。

松山城（高梁市）は、小松山を中心とする近世城郭に伴う高石垣とは別様式で、高さ1 m前後までで、地山石を横に積んで垂直立ち上がる石積みが大松山の曲輪群の曲輪肩部などの局所で確認でき、戦国期に遡る可能性が高い。土留めの機能を主目的にするとみられる。

鶴首城（高梁市）では平地を見下ろす主郭北辺を中心に、地山石を最大高約1.2 mで垂直に積んだ石積みが確認できる。

鴨山城（浅口市）は主郭ではない曲輪の外斜面のごく局所的に高さ1 m未満で扁平な花崗岩の地山石を横に積んだ石積みがある。築石の背後は直に土砂が密着し、裏込がない。

石蟹山城（新見市）は尾根筋に沿う段上曲輪群の側部に付随する通路状帯曲輪の外側辺にあった土塀の基礎か土留めとみられる列石や曲輪の側部に高さ0.7 m程度の低石積みが残る個所がある。築石は地山由来の自然石で長辺1 m超級のものを交える。

樅城（新見市）は主郭付近を中心とした複数の曲輪の肩部などの各局所に、現状高0.7 m内外以下で土留めを主目的とする小石材による石積みが点在する。

塩山城（新見市）は主郭から南に一段下がった曲輪の外斜面に、平均長辺数十cmの地山石を用い裏込石を伴う石垣が残る。現存高2.5 m、復元高3 m余りに達し、平面長10 m足らずの局所的な構築とはいえ備中では異例の高さである（写真235）。主郭から北西に下った帯曲輪の端部にも低石積みが残る。

3 石積み・石垣の諸類型

岡山県下の城館跡に残る石積み・石垣は城館ごと、またそのうちの地点ごとに多様であるが、ここでは主に高さとの勾配を基準に類型化をしておく。

L類は高さ数十cm以下で、土留め機能を一義的にするとみられる低石積みである。

うち、1類は築石の長辺が数十cm級以下で一人が自力で積める程度のもの、2類は築石長辺が1m前後を越えて積むのに二人以上の共同作業や機械力が必要なものと細分する。

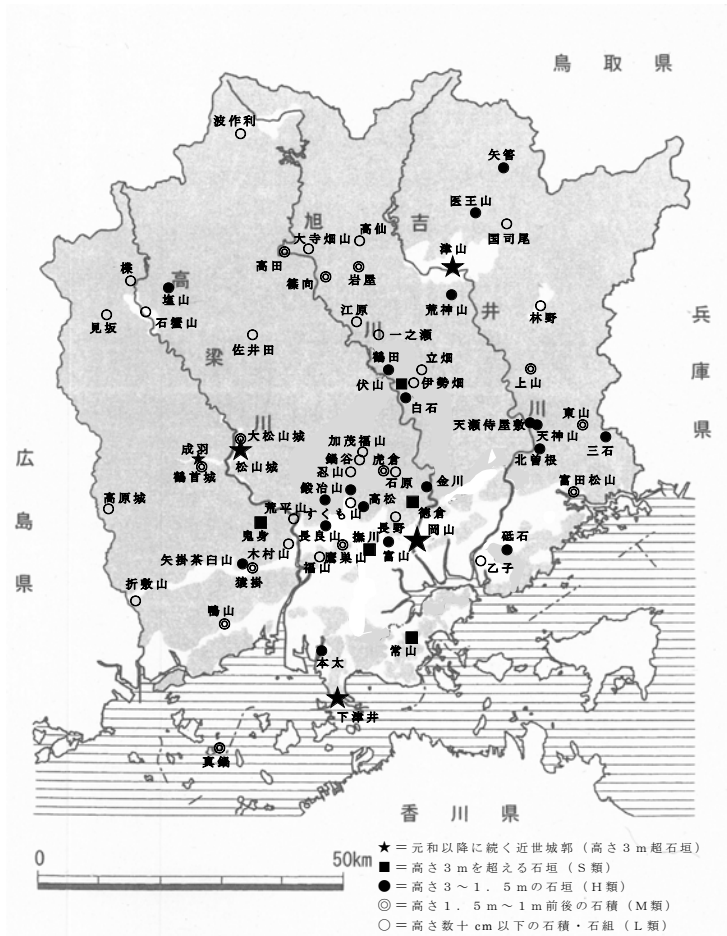
L1類は、戦国期に遡るとみられる石積みの主体で、備前では岡山城本丸中の段のI期古段階の土塁郭内側裾、富山城本丸上、天神山城の飛驒丸東の曲輪間段斜面の裾、三石城本丸の居館跡の裾、長野城、美作では一之瀬・立畑城、備中ではすくも山・忍山城・樺城、先述以外の城では備前の乙子城(岡山市東区)、美作の国司尾城(津山市)・大寺畑山城(真庭市)、備中の忍山城(岡山市北区)・荒平山城(総社市)・佐井田城(真庭市)などで確認できる。また高さが低いぶん事実上は列石に近似するL2類は、岡山城本丸中の段のI期新段階の土塁内側裾、三石城の本丸北西の横堀を画する土塁裾、木村山・石蟹山城などで確認できる。岡山城本丸中の段の発掘ではL1類とL2類が時期差として捉えられ、後者が戦国最末のあり方を示すことは注目される。

M類は高さ1～1.5m前後の石積みで、富田松山城・東山城、高田城・上山城、大松山城・鶴首城・猿掛城・鴨山城などで確認できるが、M1類とする築石長辺が数十cm級以下のものが多い。

H類は高さ1.5m～3mの石垣で、富山城・砥石城・北曾根城・天神山城・三石城の大手門北や三の丸の先端部から一段下がった小曲輪・白石城、伏山城・鶴田城・医王山・矢筈城、長良山城・矢掛茶白山・塩山城などがあり、富山城・天神山城・三石城、矢筈城・長良山城の各一部は長辺1m前後を超える築石を含んでH2類となる。

S類は高さ3m以上の石垣で、長辺が1mを超える築石を含み、明確な隅角部を持って角石は大きさや形の上で一般部築石に対して特化しており、L・M・H類は立ち上がりがほぼ垂直であるのに対し、一定の傾斜をもった法勾配となっている。岡山城はもとより、常山城・徳倉城・撫川城で明確に確認できるが、備前の虎倉城、備中の鬼身城や鍛冶山城などの復元像も該当する。

以上の各類型の分布(第3図)をみると、石積み・石垣をもつ城館跡は全県域に万遍なく分布するが、



第221図 石積み・石垣を伴う城館跡の分布

L～H類のうちで高さをもったH類は備前から美作東部に偏り、備中は総じて低いものが多いことが判る。戦国後葉から織豊期にかけては、およそ備前は浦上氏・宇喜多氏、美作は毛利方の国人・土豪ないし宇喜多氏、備中は三村氏や毛利方の勢力圏であったことに照らすと興味深い。

またS類は備前東部や備中南東部に偏っている。2類つまり長辺1m級の築石の本格導入は、列石様のL2類を別にすると、S類と強い相関性が窺える。

4 瓦との共存関係

石積みや石垣が積まれた年代や当該城館の性格を考える際に、参考となる考古資料に瓦がある。石積み・石垣の構築と瓦葺建物の建設の同時性の確認は、発掘調査などによる細かな検討が必要ではあるが、両者は城館の施設整備に伴うパーツという共通性をもつ。特に石垣・礎石建建物・瓦の有機的な結合は、織豊系城郭を考古学から考える上で指標的な意義がある(9)。

岡山県下の戦国期末から織豊期にかけての瓦は、岡山城本丸跡出土品を軸に編年や同範関係の確認が進んでいる(10)し、岡山城以外の戦国～織豊期の城館に伴う瓦の実体も一程度は明らかになっている。岡山城(11)での瓦の生産年代観は、1式が天正元年以降の宇喜多直家段階から、秀家による本格的な織豊系城郭としての築城以前、2式は天正16年(1588)に築城が始り、天守竣工と伝わる慶長2年(1597)に一応の完成をみる秀家の岡山城に伴うもので、量的な主体は文禄年間。3式はコビキB導入最初期で、関ヶ原合戦直後の小早川秀秋段階頃、4式は慶長8年～寛永9年(1632)に至る池田忠継・忠雄期、5式は後池田＝光政期以降に比定できる。各期とも多種多様で、瓦範数も相当数に及ぶ。最大の画期は1式と2式の間で、一気に粗雑化や文様・製作工程などの簡略化が進む。1式は2式以降に比べて、つくりが丁寧で、胎土は精良、器面への炭素の吸着も良好で、瓦当面に対して文様区が深く、しっかりと施文されているのである。軒平瓦の文様は、唐草の巻数が、1式は4転、2式は3転、4式は2転が主体と概説できる。1式の側区の幅は文様区の上と同等に狭いのに、2式は幅が広がり、4式以降は幅広型が定式化する。また軒丸瓦では、1・2式では巴の尾部が長く、珠文が小さくて、数は20を超えるものもあるのに、4式では珠文がやや大きくなって数も17程度に収斂する傾向があり、5式になると珠文数が12個で定式化する。コビキ技法(12)のAからBへの転換年代は、2式と3式、つまり慶長2年(1597)～同6年(1601)の間で、2式に始る大量生産の開始とは同時ではなくタイムラグがある。なお、1式は播磨阿賀などの瓦工人による製品とみられるが、2式以降は岡山城下で新たに編成された瓦工人の製品と見通せる。また、2式以降で岡山城と同範関係がある他城郭の瓦は、範傷の進行などから、岡山城例が先行して作られた事が判る例が支配的である。

各城館跡での具体的な関係をみていくと、備前では、先ず宇喜多氏の本城となった岡山城では本丸中の段で、L類と岡山城1式の瓦が、S類と2式以降の瓦の共存が層位的に確認できる。富山城では1式併行期を最新とする瓦のみが確認され、L類・H類との共伴が確認できる。石積み・石垣と瓦ともに本丸に重心をもちながら、大手曲輪・二の丸にも分布し、地点単位レベルでも共存性が窺える。金川城では少なくとも1・4式の瓦が確認できるが、散布の中心となる本丸周辺においても石積み・石垣は顕著ではなく、道林寺丸の石垣付近に瓦を伴った形跡は未確認である。徳倉城では、S類石垣の顕著な本丸と妙見宮のある曲輪に岡山城との同範品を主体とする1・2式の瓦が大量に散布し明確な相関性が窺える。虎倉城は本丸を中心にS類の石垣を伴っていた可能性があり、該当部周辺には一定量の1式併行期の瓦と岡山城と同範品を含む膨大量の3式の瓦が散布する。天神山城は広範にH類石垣が構築されているのに対し、瓦は本丸で

は未確認で、馬屋の段だけに限られる。秀吉期の姫路城などと同範関係をもつ1式併行の天正年間の製品である。常山城は2式で岡山城と同範関係をもつ瓦が複数地点に跨って散布し、少なくとも本丸では大量の瓦とS類石垣との共存が明確である。

美作ではB類程度の石積みがある岩屋城では、岡山城と同範関係をもつ1式の瓦が中腹の慈悲門寺跡とされる曲輪や山上曲輪群の谷部平坦地に散布するが、地点レベルでは両者の共存関係は不明瞭である。篠向城の瓦も岡山城と同範関係をもつ1式で天正5年(1573)銘の瓦が本丸で採集されているが、地点レベルでは石積みとの共存関係は見いだせない。高田城の本丸虎口部では岡山城と同範関係をもつ3式の瓦と、M類の石積みが共存する。荒神山城では岡山城と同範関係をもつ2式の瓦が本丸や大量に散布する本丸では石垣を伴っていた可能性がある。また、石積みを伴う西側の曲輪の虎口部や北の金蔵の段周辺にも瓦が散布し、共存関係が窺える。医王山城ではH類石垣のある本丸では、3～4式併行とみられる瓦が大量に散布する。林野城では東方の曲輪の土塁周辺や西端の曲輪の西辺付近でコビキA・Bの両技法による瓦片が散布するいっぽう、別地点で石積みの残骸かとみられる石材が散布する。

備中では、鍛冶山城では本丸廻りにS類石垣があったとみられ、瓦も散布するとされるが(13)、瓦の型式や時期は現状では不詳である。織豊期には宇喜多領であった撫川城はS類石垣と岡山城との同範品を含む2式の瓦が本丸で明確に共存する。同じく備中高松城は本丸に1式併行期、2式併国期、岡山城との同範品を主体とする4式の瓦を伴い、高さ2～3mの石垣と共存したとみられる。戦国期後葉から織豊期を通じて毛利領であった高梁川以西にある鬼身城では本丸を中心に岡山城2式～4式併行期とみられる瓦が散布し、本丸を含む随所にS類石垣があったとみられる。猿掛城では本丸で瓦片とM類石積みの共存が確認できる。

以上、石積み・石垣を伴う城館には必ず瓦を伴うわけではないが、瓦を伴う城館には何がしかの石積み・石垣が伴うと言える。ただし現状での例外として、大棟の熨斗瓦として使われた可能性のある平瓦が出土した周匝茶臼山城(赤磐市)(14)では石積みは未確認である。またL・M・H類の石積み・石垣は城館単位レベルでも、うちでの地点単位レベルでも必ずしも瓦との共存関係は確認できない。対してS類石垣は城館レベルでは必ず瓦と共存関係にあり、地点レベルでもみても共存性が強く窺える。さらに瓦の製作年代から整理すると、概ね天正年間とみられる1式段階の瓦は城館レベルで石積み・石垣との共存関係にあったとしてもL～H類まで、地点レベルでは石積み・石垣と瓦は共存しない場合が多い。いっぽう、2式段階の瓦は城館レベルでも地点レベルでも石垣との共存性が強く、特に岡山城と同範関係をもって宇喜多秀家による岡山城の支城整備によるとみられる瓦を伴う城館は、石積み・石垣の実体が不詳の荒神山城を除けばS類石垣が確認できる。ところが3式併行期頃では、虎倉城・鬼身城はS類石垣と共存するが、医王山城はH類であるし、金川城、林野城、高田城に至っては石垣が顕著でない。このことは、織豊期に入ってもL～H類ないしは戦国様式の石積み・石垣が部分的には継続して構築されたり、石垣を構築せずに瓦葺建物のみを建てた城郭もありえることを示している。特にその可能性は岡山城主で言えば宇喜多秀家期よりも慶長5年(1600)からの小早川秀秋期のほうが濃厚といえる(15)。また、続く4式、つまり慶長8年(1603)からの池田期まで見渡せば、下津井城では4式の大量の瓦を伴って高石垣が累々と築かれたのに、同じ4式期の瓦を伴う金川城では虎口部などに限定的に石垣が積まれたとしても、総石垣化には至らなかったのである。両者とも前代の戦国期から機能した城であるが、下津井城は新規築城に近い改修であり、金川城は相当に古い構造を温存した改修と言うことになる。

いずれにしても、石垣の規模・構造、また瓦との共存関係や瓦の年代観から類推すると、L～H類とS類

は大きな違いがあり、1式段階では瓦とL～H類の石積み・石垣が確実に存在するが、両者は地点レベルでは必ずしもリンクしていない。またS類の出現画期は2式期にあって、その時点で宇喜多氏の岡山城・毛利氏の広島城など大名居城以外の城館でも石垣と瓦葺建物が結びついたことが確認できる。

そうしたことから、岡山県下では、石垣をもち瓦葺建物を建てながら元和元年(1615)以降に続かない織豊系城郭が多いという特色を生み出している。加えて言えば、山陰や広島・山口、四国・九州に比べると戦国～織豊期の瓦を伴う城館が多いのも本県の特色で、その建築年代は瓦の生産年代と瓦の組成から考えると、織豊系城郭の成立には確実に遡るが、その直前の天正年間に始ったと展望できる(16)。

5 戦国期から織豊期にかけての石積み・石垣の変化

以上を整理するとL～H類を専らとする戦国様式の石積み・石垣の営みが古くからあったのに対して、新たに2式段階にS類つまり織豊様式の石垣が導入されたとの図式に辿りつく。石積み・石垣における戦国期と織豊期の違いは、既に諸氏によって提示されているが(17)、ここでは、当県城館の特色として注目すべき点や各様式でのバリエーションに絞って示しておく。

石材については、戦国様式では築石は総じて長辺50cm前後までの小さなものが多く、大きくても長辺1m足らずであるが、岡山城本丸最下層新段階の実例から織豊系城郭の成立に僅かに先行して天正年間半ばまでには長辺1mを超える大石の使用が始り、続く織豊期の高石垣で普遍化していくことが確認できる。また、戦国期では自然石、あるいはせいぜい粗割り程度までの加工しか施さない石材が圧倒するが、織豊期に入ると矢穴痕を伴う割石が少量ながら確実に岡山城で確認できるが、その支城である徳倉城・撫川城・常山城、また備中の鍛冶山城や鬼身城では未確認である。岡山県下の城館での矢穴を伴う割石の多用は、池田氏段階の岡山城や下津井城・金川城、津山城、備中松山城など慶長年間半ば以降となる。また戦国期の石材は城地かごく近辺で採れる石を用いたとみられるものに尽き、強いてモデル化すれば概ね1km以内から集まるとみられ、城地が石材の豊富な場所であれば、石積み・石垣が多用されるという相関性が明らかに指摘できる(18)。「岩山型」とでもいうべき典型例として天神山城・三石城、伏山城・矢筈城、塩山城などがあるが、豊富な石材があるから石積み・石垣が築かれたという環境要因に総てを帰すのではなく、その場所に石を積んで城郭施設を造るという発想と構築可能な技術の存在を積極的に評価する視点が重要である。城地外広範囲からの石材搬入は戦国期にはなかったとみられるが、織豊期では瀬戸内海島嶼部を始めとした相当に広範囲からの採石が想定できる宇喜多秀家期の岡山城はもとより、その支城である撫川城において確認できる(19)。しかし、山城で石垣の構築量が多い常山城や徳倉城などは、石材種や露岩の所在状況から判断すると、城地ないしごく近隣からの採石を主とするとみられ、そうした類型も存続した。

築石の積み方については、戦国期から織豊期を通じて、横積みが優位で、一部に乱積みもあるが、落とし積みは未確認である。立石や大石を組み込む列石や低石積みはともかく、高さをもった石垣中に立石を組み込むものは、富山城例が戦国期末に遡る可能性があるが、織豊期では岡山城のほか常山城、徳倉城などの織豊系城郭内の一部分で顕著となる。一般論として戦国期では裏込石を伴わないものが多いとされ(20)、相対的に古いものや低いものは、富山城大手曲輪列石状石垣、立畑城、鴨山城などのように確かに裏込めを伴わないものもあるが、岡山城最下層・天神山城・白石城、伏山城・矢筈城、長良山城・塩山城などA～C類で戦国期に遡る可能性が強いもので既に相当な普遍性をもって採用されている。隅角部に着目すると、戦国期では隅角部を持たないものが相当多く、あっても隅角を直角にする意識が希薄である

ものが多いし、角石の大きさや形を一般部築石に対して特化させていなかったり、角石長辺を一段ごとに左右に振り分ける算木積みへの指向性はなく、織豊期との大きな違いとなっている。

構築量と構築場所については、戦国期では各城郭内での構築量は僅かで、構築場所も局所に限定される例が多い。また曲輪造成時の切土部・盛土部の別に注目すると、織豊系城郭の石垣は切土部・盛土部を通じて構築されている場合が多いのに対し、戦国期では盛土部ないしはその肩や根と言った端部や境界に限って積まれていて、盛土との強いセット関係が窺え、護岸という機能のウエイトが高いと展望できる。したがって織豊期では石垣が城全体に及ばない場合でも、主郭には必ず築かれるのに対し、戦国期では他部にあっても主郭には築かれていない例がある。また、戦国期ではL～H類の石積み・石垣が個別の曲輪を完全に囲い込む例は皆無に近い。ただ富山城本丸はその可能性をもつ(21)。また、それに近似して2m前後の高さをもった石垣が顕著に多用されて塁線が形成され曲輪を一定区間にわたって曲輪を囲むのが天神山城・矢筈城、伏山城などである。天神山城・矢筈城は尾根筋に沿う複数の曲輪の側辺を中心に石垣を廻らせた、伏山城は各コマ切れ石垣の集合との色合いが強いが、そうした戦国期の石積み・石垣のあり方は、天神山城が天文23年(1554)に築城(22)、矢筈城が天文2年(1533)築城と伝わることからすると16世紀半ばまでに達成されていた可能性も窺える。対する織豊期では岡山城本丸では確かに各曲輪を高石垣が完結圍繞する。しかし、その宇喜多秀家期の支城で石垣が多用される常山城、徳倉城、撫川城では、本丸をはじめとする特定曲輪に限っても完結圍繞していなかったり、仮に完結圍繞していたとしても高さを極端に変化させており、慶長半ば以降に築城され「総石垣」の名に相応しい下津井城、津山城、備前松山城とはあり方が異なっている。常山城など三城は軍事的正面性や視覚性を重視した指向性の強い石垣配置といえ、結果として尾根筋に沿う長大な塁線の一翼を担う天神山城や矢筈城とは、共に石垣が多用されるとは言え異なる配置観によるものと評価できる。

長辺1mを超えるような大石使用で、間詰石を施し、時に立石を組み込むなどして、整美な石垣面を形成し、背後に空石状態の裏込層を伴い、角石が一般部築石に対して形・大きさ・積み方の面で特化したうえで明確な折れ線を示す隅角部をもち、一定の傾斜による法をもって立ち上がり、盛土部～地山削り出し部に関わらず間断なく一定の構造で曲輪を画して塁線を構成し、十分な強度をもって水平な天端線を造りだし、天端一杯に瓦葺きの城郭建物が建ちうる石垣、そうした技術体系や理念によって築かれた石垣を「織豊系の城石垣」(23)とするなら、戦国期の石積み・石垣とは大きな断絶がある。戦国期のうちでの地域内での変化・発展は当然にあるとしても、それが自己完結的に発展・変化して織豊系の城石垣に至ったというより、外来の技術体系の導入と石垣構築に関する理念の革新があり、新たな様式が加わったと評価できる。ただしこのことは、戦国に育まれた地場の工人が、織豊系の城石垣の構築にも関わったことを、決して否定するものではない。

以上のように、岡山県内の城館には、戦国から織豊期を経て徳川期に至る長期の営みによる多彩な石積み・石垣が数多く残り、構築量、規模・構造・機能のうえで特筆すべきものが大いに見いだせる。(乗岡 実)

註

(1) 森俊弘2009「岡山城とその城下町の形成過程」『岡山地方史研究』118 岡山地方史研究会

(2) 岡山市教育委員会1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』

(3) 岡山市教育委員会1969『富山城跡第2次調査報告』

(4) 木村信幸1996「石つき之もの共」について『織豊城郭』第3号

平川孝志2001「石つき之もの共」の石垣について『吉川元春館跡の研究』広島県教育委員会

- (5) 勝山町教育委員会2005『高田城三の丸遺跡』
- (6) 真庭市教育委員会2015『真庭市指定史跡 高田城総合調査報告書』
- (7) 岡山市教育委員会1976『備中高松城跡公園発掘調査概報』
- (8) 岡山市教育委員会1998『すくも山遺跡』
- (9) 中井均1990「織豊系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣の出現—」『中世城郭研究論集』
- (10) 岡山市教育委員会1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
 平岡正宏1997「医王山城採集の瓦」『津山弥生の里文化財センター年報』第4号
 岡山市教育委員会2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』
 乗岡実2000「中世山城の瓦三題」『吉備されど吉備』古代吉備国を語る会(天神山城・虎倉城・篠向城)
 藤原好二2000「山本慶一氏寄贈の資料 I」『倉敷埋蔵文化財センター年報』7(下津井城)
 乗岡実2001「林信男氏蒐集の考古資料 I」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999年度(備中高松城)
 乗岡実2002「瓦からみた宇喜多秀家期岡山城の支城網」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会(常山城・徳倉城・荒神山城・撫川城)
 乗岡実2009「岡山県下のコビキBの瓦を伴う城郭群」『西国城館論集 I』中国四国地区城館遺跡検討会(金川城・虎倉城・林野城・医王山城・鬼身城)
 乗岡実2019「瓦から中国・四国地方の織豊系城郭と瓦工人を考える」『織豊城郭』第19号 織豊期城郭研究会
- (11) 前掲注10書、乗岡実編2018「(集成)岡山県」『織豊期城郭瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会
- (12) 森田克行1984「屋瓦」『摂津 高槻城』高槻市教育委員会
- (13) 永山卯三郎1937『吉備郡史』吉備郡教育会
- (14) 吉井町教育委員会1990『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』
- (15) 前掲注10の乗岡2009
- (16) 前掲注10の乗岡2019
- (17) 北垣聰一郎1987『石垣普請』法政大学出版局
 中井均1996「安土城前夜」『織豊城郭』第3号 織豊期城郭研究会
 中世城郭研究会編2000『第17回全国城郭研究者セミナー 戦国時代の石垣』
 宮武正登2000「検出遺構(主に石垣)から見た原城跡」『原城発掘』新人物往来社
 中井均2002「置塩城跡の石垣—播磨・備前地域の戦国期城郭からの検討—」『置塩城跡総合調査報告』夢前町教育委員会加藤理文2012『織豊権力と城郭』高志書院
 乗岡実2014「石積み・石垣」『中世城館の考古学』高志書院
 乗岡実2016「兵庫・中国地方における織豊系の城石垣の成立」『織豊城郭』第16号 織豊期城郭研究会
 乗岡実2019「中国地方の戦国期城郭石垣の様相」『戦国時代における石垣技術の考古学的研究』(研究成果報告書:代表者 中井均)
- (18) 乗岡実2015「山陽・山陰の城郭向け採石場」『織豊城郭』第15号 織豊期城郭研究会
- (19) 注18
- (20) 注17の中井1996ほか各書
- (21) 富山城では1式までの瓦しか確認されていないが、逆に石垣の構築は2期に下る可能性も考えてみるべきかも知れない。その際は、瓦は古瓦の流用品のみで構成されたということもあり得る。
- (22) 畑和良2003「浦上宗景権力の形成過程」『岡山地方史研究』100
- (23) 注17の乗岡2014・2016・2019

備前国中世城館関連文献一覧表

凡例

- ・一次資料を除く城館関連文献を近世地誌類、自治体史、その他関連文献、及び発掘調査ごとに別けて一覧表を掲載している。なお、文献番号は通し番号である。
- ・各一覧表に記載されている文献番号は、出典文献の読み仮名順に振っている（順不同）。
- ・城館文献一覧表には報告書掲載番号、城館名とその城について関連する記述がみられる文献番号を記載している。

近世地誌

- ・出典欄には資料名称と出典を記している。
- ・年代は出版年ではなく、編纂年を記している。

自治体史

- ・単著によるものは著者名を、共著によるものは編集者、あるいは出版者名を記している。

その他

- ・主に明治時代以降に編纂された地誌類や、軍記物、個人研究の一部を記している。

発掘調査報告書

- ・発掘調査対象となった城館名、出典、及び調査主体を記している。

表 20 文献一覧表

近世地誌

文献番号	著者	出典	編集者・出版社	年代
1	石丸平七郎定良/著	「備前記」『備作之史料』4 備前記	備作史料研究会 就実女子大学近世文書解読研究部/編纂	元禄13(1700)年～元禄17(1704)年
2	高木太亮軒/著	「和気絹」『吉備群書集成』第1輯地誌部上	作陽書房・吉備群書集成刊行会	宝永6(1709)年
3	石丸平七郎定良/著	『備陽記』	日本文教出版	享保6(1721)年
4	平川親忠/著	「古戦場備中府志15巻」『吉備群書集成』第5輯雑部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	享保20(1735)年
5	和田正尹 他/編	「備陽国誌」『吉備群書集成』第1輯地誌部上	作陽書房・吉備群書集成刊行会	元文4(1739)年
6	不明	「吉備前秘録」『吉備群書集成』第1輯地誌部上	作陽書房・吉備群書集成刊行会	元文5(1740)年～寛延元(1748)年(推定)
7	不明	「吉備前鑑」『新編吉備叢書』第2巻	歴史図書社・新編吉備叢書刊行会	正徳(1711)年～宝暦(1764)年(推定)
8	石井了節/著・片山敬人/校訂	『備中集成志』	研文館吉田書店	宝暦7(1757)年
9	大沢惟貞/輯録	「吉備温故秘録」『吉備群書集成』第8輯吉備温故秘録 享之巻(巻27-50)	作陽書房・吉備群書集成刊行会	寛政11(1799)年～享和年中(1803)年(推定)
10	不明	「29和気郡手鏡」『吉永町史』資料編	吉永町史刊行委員会	文化年間(1804～1818)年(推定)
11	岡山藩留方/編	「撮要録」『撮要録』	日本文教出版	文政6(1823)年
12	松本亮/著	「東備郡村誌」『吉備群書集成』第2輯地誌部中	作陽書房・吉備群書集成刊行会	天保8(1837)年～13(1842)年(推定)
13	渡辺正利/編	「備中村鑑 下」『吉備群書集成』第2輯地誌部中	作陽書房・吉備群書集成刊行会	文久元(1861)年

自治体史

文献番号	著者	出典	編集者・出版者	年代
14	赤磐郡教育会／編	『赤磐郡誌』	教育資料社	1912
15	赤坂町教育委員会／編	『赤坂町誌』	赤坂町	1984
16	旭町／編集	『旭町誌』資料編	旭町	2002
17	遠藤逸夫／著・笹井準二／著	『岩田村誌』	岩田村誌編纂委員会	1957
18	日幡直之／著	『伊部町誌』	伊部町報道委員会	1951
19	千種尋常高等小学校／編	『太田吉岡村誌』	千種尋常高等小学校組合	1924
20	岡山県史編纂委員会／編纂	『岡山県史』第1巻 自然風土	岡山県(山陽新聞社)	1983
21	岡山県史編纂委員会／編纂	『岡山県史』第4巻 中世1	岡山県(山陽新聞社)	1989
22	岡山県史編纂委員会／編纂	『岡山県史』第5巻 中世2	岡山県(山陽新聞社)	1991
23	岡山県史編纂委員会／編纂	『岡山県史』第6巻 近世1	岡山県(山陽新聞社)	1984
24	岡山県史編纂委員会／編纂	『岡山県史』第17巻 年表	岡山県(山陽新聞社)	1991
25	岡山県史蹟名勝天然記念物調査会／編	『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第9	岡山県史蹟名勝天然記念物調査会	1932
26	小坂保／〔ほか〕編	『岡山県上道郡古都村史』	古都村史刊行会	1958
27	永山卯三郎／編著	『岡山県通史』上編	岡山県	1930
28	御津郡教育会／編	『岡山縣御津郡誌』	御津郡教育会	1923
29	三好伊平次／編著	『岡山県和気郡藤野村誌』	藤野村誌編集委員会	1953
30	岡山市役所／編集	『岡山市史』全	岡山市	1920
31	岡山市役所／編	『岡山市史』第2	岡山市	1936
32	岡山市役所／編	『岡山市史』第3	岡山市	1937
33	岡山市役所／編	『岡山市史』第5	岡山市	1938
34	小林久磨雄／(編)	『邑久郡誌』第1編	邑久郡教育会	1917
35	小林久磨雄／(編)	『邑久郡誌』第3編	邑久郡教育会	1913
36	小林久磨雄／編	『邑久郡史』上巻	邑久郡史刊行会	1953
37	岡山県邑久郡邑久町役場	『邑久町史』	邑久町	1972
38	邑久町史編纂委員会／編集	『邑久町史』考古編	瀬戸内市	2006
39	邑久町史編纂委員会／編集	『邑久町史』地区誌編	瀬戸内市	2005
40	長船町史編纂委員会／編集	『長船町史』民俗編	長船町	1995
41	岡山市史編集委員会／編	『概観岡山市史』	岡山市	1958
42	岡山県赤磐郡教育会／編纂	『改修赤磐郡誌』	岡山県赤磐郡教育会	1940
43	桂又三郎／著・横山章／編著	『片上町史』	片上町史編纂委員会	1951
44	板津謙六／著	『金川町史』	金川町史編集委員会	1957
45	賀陽町教育委員会／編	『賀陽町史』	賀陽町	1972
46	永山卯三郎／(編)	『吉備郡史』巻中	吉備郡教育会	1937
47	熊山町誌編さん委員会／編	『熊山町誌』	熊山町	1973
48	熊山町史編纂委員会／編	『熊山町史』大字史	熊山町	1993
49	熊山町史編纂委員会／編	『熊山町史』通史編上	熊山町	1994
50	永山卯三郎／編	『倉敷市史』第2冊	倉敷市史刊行会(名著出版)	1960～1964
51	永山卯三郎／編	『倉敷市史』第6冊	倉敷市史刊行会(名著出版)	1960～1964
52	永山卯三郎／編	『倉敷市史』第8冊	倉敷市史刊行会(名著出版)	1960～1964
53	私立児島郡教育会／編	『児島郡誌』	岡山県児島郡役所	1915

文献番号	著者	出典	編集者・出版者	年代
54	宮田亘／著	『児島郡田井村誌』	玉野市教育委員会	1919
55	伊原仙太郎／編	『西大寺町誌』	西大寺町誌刊行会	1971
56	西大寺市史編集委員会／編集	『西大寺市史』	岡山市	1980
57	佐伯町史編纂委員会／編集	『佐伯町史』	岡山県和気郡佐伯町	1975
58	山陽町史編集委員会／編集	『山陽町史』	山陽町	1986
59	上道郡教育会／編	『上道郡誌』	上道郡教育会	1922
60	岡崎誠／編	『上道町史』	岡山市	1973
61	倉敷市史研究会／編集	『新修倉敷市史』2 古代・中世	倉敷市史研究会（山陽新聞社）	1999
62	倉敷市史研究会／編集	『新修倉敷市史』3 近世上	倉敷市史研究会（山陽新聞社）	2000
63	瀬戸町誌編纂委員会／編集	『瀬戸町誌』	瀬戸町	1985
64	水藤千代造／（編）	『高島村史』	吉備高島聖蹟顕彰会	1937
65	建部町／編集	『建部町史』地区誌・史料編	建部町	1991
66	建部町／編集	『建部町史』通史編	建部町	1995
67	建部町／編集	『建部町史』民俗編	建部町	1992
68	建部町／〔編〕	『建部町略史』	建部町史編纂委員会	1977
69	玉野市史編纂委員会／編	『玉野市史』	玉野市	1970
70	東児町史編纂委員会／編	『東児町史』	東児町史編纂委員会	1974
71	平田英文／編	『灘崎町史』	記念事業特別委員会	1956
72	灘崎町史編さん委員会／編集	『灘崎町史』	灘崎町	1982
73	西山村史編纂委員会／編	『西山村史』	教育出版	1954
74	吉田研一／編	『備中誌』上編	日本文教出版	1903
75	福田町誌編纂委員会／編	『福田町誌』	福田町誌刊行委員会	1958
76	藤戸町誌編集委員会／〔編〕	『藤戸町誌』	藤戸町史蹟保存会	1955
77	三石町史編集委員会／編	『三石町史』	三石町	1959
78	渡辺一炳／編輯	『御津郡誌』	御津郡教育会	1906
79	児子喜六／（編）	『御津郡大野村誌』	村誌編輯委員会	1956
80	御津町史編纂委員会／編	『御津町史』	御津町	1985
81	御津町文化財保護委員会／編	『御津町史料』第1集 虎倉城編	御津町文化財保護委員会	1963
82	御津町文化財保護委員会／編	『御津町史料』第2集 玉松城編	御津郡文化財保護委員会	1964
83	山田村／編	『山田村誌』	山田村	1928
84	吉井町史編纂委員会／編集	『吉井町史』第2巻 史料編上	吉井町	1991
85	吉永町史刊行委員会／編	『吉永町史』通史編2	備前市	2006
86	私立和気郡教育会／編	『和気郡誌』	山陽新報社	1909
87	和気郡史編纂委員会／編纂	『和気郡史』資料編 下巻	和気郡史刊行会	1983
88	吉永町史刊行委員会／編	「39 竹内真一所蔵文庫 3 都留岐村史」『吉永町史 資料編』	吉永町史刊行委員会	不明
89	吉永町史刊行委員会／編	「39 竹内真一所蔵文庫 2 多麻村誌」『吉永町史 資料編』	吉永町史刊行委員会	不明

その他

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
90	岡尋／〔編〕	『赤磐郡銘鑑』	赤磐郡銘鑑発刊所	1953
91	乗岡実	「石垣の普請と採石地—岡山県南の城郭を中心に—」『森宏之君追悼城郭論集』	織豊期城郭研究会	2005

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
92	香川 正矩／著 宣阿／補	『陰徳太平記』『新編吉備叢書』第2巻	歴史図書社・新編吉備叢書刊行会	享保2(1717)年
93	乗岡実	「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣ー岡山城支城群の諸段階ー」『吉備地方文化研究』第18号	就実大学吉備地方文化研究所	2008
94	不明	「宇喜多戦記」『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	不明
95	出宮徳尚	「宇喜多直家の領国と支城網」就実大学吉備地方文化研究所歴史シンポジウム『直家・秀家とその時代』報告書	就実大学吉備地方文化研究所	2005
96	乗岡実	「宇喜多秀家期の瓦と石垣を伴う岡山城支城群」『中国・四国における織豊系城郭の成立と展開ー秀吉期を中心にー』	中国・四国地区城館調査検討会	2014
97	宇野学区史刊行会／編	『宇野地区の歴史』	宇野学区史刊行会	1981
98	瀬戸町江尻老人クラブ／編	『江尻の歴史』	瀬戸町江尻老人クラブ	1978
99	岡山大学附属図書館／編	『絵図で歩く岡山城下町』	吉備人出版	2009
100	石原孝次郎／編	『岡山県邑久郡国府村誌』		1896
101	島崎東	「岡山県下における中世前半期の城郭」『岡山県立博物館研究報告』第33号	岡山県立博物館	2013
102	乗岡実	「岡山県下の城郭出土瓦」『城郭瓦の変遷ー織豊期から近世へー』	中国・四国地区城館調査検討会	2006
103	岡山県教育委員会／編	『岡山県の文化財』1	岡山県教育委員会	1980
104	岡山県教育委員会／編	『岡山県の文化財』3	岡山県教育委員会	1982
105	光岡 てつま／写真 加原耕作／文	『岡山城』山陽新聞サンブックス	山陽新聞社	1994
106		『岡山城』歴史群像・名城シリーズ12	学習研究社	1996
107	乗岡実・田中幸夫	「岡山城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
108	岡山城史編纂委員会／編	『岡山城史』	岡山市	1983
109	木畑道夫／編述	『岡山城誌』	木畑道夫写	1891
110	出射久志／[編]	『邑久郡郷土読物』	邑久郡教育国民科研究部	1940
111	兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会	『置塩城跡総合調査報告書』	兵庫県飾磨郡夢前町教育委員会	2002
112	畑和良	「織田・毛利備中戦役と城館群ー岡山市下足守の城郭遺構をめぐってー」『愛城研報告』第12号	愛知中世城郭研究会	2008
113	畑和良	「落穂ひろい」(http://ochibo.my.coocan.jp)		最終閲覧日 2019年7月 30日
114	山内讓／著	『海賊と海城』平凡社選書168	平凡社	1997
115	岡山市可知郷土史編さん委員会／編	『可知郷土史』	岡山西大寺公民館可知分館	1973
116	後藤誠一／(編)	『葛城村誌』	土井源三郎	1953
117	吉岡三平／編著・小山保／編著	『門田村誌 小串村誌 阿津村誌補足と覚え書』	吉備郷土研究会	1981
118	乗岡実・長谷川一英	「金川城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
119	内藤お千代／著	『上伊田の歴史』2	内藤 お千代	1987
120	内田誠也／著	『上加茂合戦記』	加茂川町教育委員会	1979
121	川西浩／著	『神根史考』	友野謄写堂(印刷)	1938
122	乗岡実	「瓦からみた宇喜多秀家期岡山城の支城網」『環瀬戸内海の考古学ー平井勝氏追悼論文集』下巻	古代吉備研究会	2002
123	吉井町史談会／編 吉井町社会科教育研究会／編	『郷土資料集』第1集	吉井町教育委員会	1971
124	谷口澄夫／著者代表	『郷土の歴史』中国編	宝文館	1959
125	渡辺知水／編	『郷内誌』	渡辺知水	1909
126	小磯俊介／編・小磯昇／著	『小串村誌稿』	小磯俊介	1984
127	乗岡実	「虎倉城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
128	不明	「兒島常山軍記」『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	慶長(1603)年頃(推定)
129	多和和彦／著	『琴浦町の歴史と地理』	琴浦町教育委員会	1954
130	伊原仙太郎／編	『西大寺の城跡』	西大寺愛郷会	1974
131	五弓久文／編	『三備史略』巻之2	五弓久文	1894

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
132	五弓久文／編	『三備史略』巻之3	五弓久文	1894
133	相賀徹夫／編	『山陽の城』	小学館	1980
134	又兵衛・土井六郎兵衛／著	『類纂 虎倉物語』(虎倉物語・虎倉問書・虎倉記)『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	寛文元(1661)年
135	早田玄洞／著	『史上の吉備』上編 上古の巻, 中世の巻, 衰世の巻	山陽新報社	1926
136	早田玄洞／著	『史上の吉備』下編 乱世の巻	山陽新報社	1928
137	渡辺知水／編	『下津井誌』	松林堂書店	1909
138	乗岡実・中井均	「下津井城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
139	藤原好二	「下津井城趾出土の陶磁器と食物残滓」『倉敷の歴史』第9号	倉敷市史研究会	1999
140	児島市文化財調査委員会／編	『下津井城の研究』	児島市文化財調査委員会	1954
141	多田暢久	「城郭構成からみた地域と境目」『新視点中世城郭研究論集』	新人物往来社	2002
142	上道郡校長会／編	『上道町史蹟』	上道郡校長会	1963
143	家光三志／〔編〕	『新庄原部落誌』	家光三志	1979
144	村田修三／編	『図説中世城郭事典』3近畿 2中国, 四国, 九州	新人物往来社	1987
145	土井秋夫／編著	『瀬戸町の地名』	瀬戸町教育委員会	1976
146	瀬戸町教育委員会／〔編〕	『瀬戸町歴史事典』	瀬戸町教育委員会	2006
147	出宮徳尚	「戦国城郭の支城の縄張り形態考一備前国宇喜多氏の支城形成のコンセプト」『森宏之君追悼城郭論集』	織豊期城郭研究会	2005
148	後藤丹治・釜田喜三郎校注	「太平記 2」『日本古典文学大系』35	岩波書店	1961
149	光成準治	「高松城水攻め前夜の攻防と城郭・港」『倉敷の歴史』第18号	倉敷市文書館(アーカイブス)研究会	2008
150	土肥延平／著(推定)	「龍ノ口落城記」『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	伝:元禄元(1688)年春某氏記写
151	大原昭平／作成	『たまの歴史と地誌資料』	大原昭平	2006
152	北畠謙三／著	『玉野史跡社寺案内』	山田快進堂	1956
153	福力勝治／著	『地底の語部たち』	西日本法規出版	1990
154	乗岡実・田中幸夫	「茶白山城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
155	中島元行／編	「中国兵乱記」『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	慶長20(1615)年
156	三宅克広	「中世瀬戸内の水運と備前国児島周辺」『倉敷の歴史』第3号	倉敷市史研究会	1993
157	乗岡実	「中世山城の瓦三題」『吉備されど吉備』〔古代吉備国を語る会〕創立30周年記念誌上語る会／水内昌康名誉会長頌寿記念誌上語る会	古代吉備国を語る会	2000
158	玉野市槌ヶ原自治会／企画編集	『槌ヶ原の歴史と文化』	玉野市槌ヶ原自治会	2002
159	乗岡実・田中幸夫	「常山城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
160	石井常太郎／(編)	『常山城を中心とした兵乱記』	石井常太郎	1930
161	池田誠・光畑克己	「天正十年前夜に至る毛利勢と織豊勢による「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の築城動向(その二)『戦乱の空間』第2号	戦乱の空間編集会	2003
162	藤一雲	「天神山記」『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	天明7(1787)年
163	乗岡実・長谷川一英	「天神山城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
164	多和和彦／著	『東児町の城跡について』	多和和彦	1972
165	多和和彦／著	『東児の古地蔵と城址』	〔多和和彦〕	1972
166	乗岡実・長谷川一英	「徳倉城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
167	乗岡実・田中幸夫	「富山城跡」『織豊期城郭の瓦』	織豊期城郭研究会	1994
168	池上淳之／著	『豊地区覚え書』	〔池上淳之〕	2000
169	池田誠・光畑克己	「縄張研究の視点からみる「備前備中国境阿智・児島両内海地域」の一考察」『中世城郭研究』第12号	中世城郭研究会	1998
170	中野栄夫	「西島家・島瀬家文書について」『倉敷の歴史』第5号	倉敷市史研究会	1995
171	葛原克人／編	『日本城郭大系』13 広島・岡山	新人物往来社	1980

文献番号	著者	出典	編集・出版者	年代
172	大類伸／監修	『日本城郭全集』10	人物往来社	1967
173	大類伸／監修	『日本城郭全集』15	人物往来社	1968
174	角田誠／[ほか]編集	『播磨利神城』	城郭談話会	1993
175	新納泉・石坂俊郎ほか	『半田山城跡の測量調査』『都市近郊林(半田山)の自然特性およびその環境保全機能に関する研究(Ⅳ)』平成元年岡山大学教育学内特別経費研究成果報告書	岡山大学	1990
176	土井基司	『附編Ⅴ半田山城測量後記』『岡山大学構内遺跡調査研究年報』7	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1990
177	土肥経平／著	『備前軍記』『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	安永3(1774)年
178	村瀬安兵衛／著	『備前国人佐柿入道常円物語』『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	貞享4(1687)年
179	畑和良	『備前国天神山城周辺の城館群』『愛城研報告』第19号	愛知中世城郭研究会	2015
180	畑和良	『備前国における中世山城の縄張り時代観—瀧ノ城と鳥取庄の城館群—』『愛城研報告』第22号	愛知中世城郭研究会	2018
181	田嶋正憲	『備前児島常山城址採集の遺物』『森宏之君追悼城郭論集』	織豊期城郭研究会	2005
182	北村章／著	『備前児島と常山城』	山陽新聞社	1994
183	不明	『備前古城絵図』『吉備群書集成』第1輯地誌部上	作陽書房・吉備群書集成刊行会	不明
184	近藤勇／編	『備前西大寺古文書』	吉備文化研究会	1947
185	目黒祐欣／著	『備前文明乱記』『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	永禄3(1560)年
186	岡本芳明	『備前保木城について』『森宏之君追悼城郭論集』	織豊期城郭研究会	2005
187	大饗利正／著	『備前三石城史の研究』	修学社	1942
188	角田直一／著	『備前中兵乱常山合戦』	山陽新聞社	1984
189	日生町郷土史研究会／編 日生町文化財保護委員会／編	『日生の気象と地名の伝承』	日生町教育委員会	1982
190	片山峯吉／編	『馬屋下村史』	[岸正一]	1971
191	御津町ワンダークラブ 歴史班／編	『御津の山城』	御津町ワンダークラブ	2002
192	『美作国の山城』編集委員会／編集	『美作国の山城』	津山市教育委員会生涯学習部文化課	2011
193	不明	『妙善寺合戦記』『吉備群書集成』第3輯戦記部	作陽書房・吉備群書集成刊行会	不明
194	池田誠	『毛利氏と宇喜多氏における城砦の戦の一考察—備前備中国境戦における八浜攻防戦を中心に—』『中世城郭研究』第7号	中世城郭研究会	1993
195	畑和良	『本太城主「能勢修理」のこと』『倉敷の歴史』第26号	倉敷市文書館(アーカイブス)研究会	2016
196	津高郷土研究会／編 青井空人／編著	『横井村誌』第8輯 伝説・土俗民俗	津高郷土研究会	1955
197	片山新助／文	『よみがえる岡山城下町』	山陽新聞社	1996
198	和気中学校／編	『和気の歴史』	和気町	1968
199	黒田慶一／編・高田徹／編	『16世紀末全国城郭縄張図集成』下 近畿・中国・四国・九州・沖縄・韓半島篇	倭城併行期国内城郭縄張図集成刊行会	2008

発掘調査

文献番号	出典	編集者・出版社	年代
200	『青山城跡』『岡山県埋蔵文化財報告』41	岡山県教育委員会	2011
201	育苗公園発掘調査現地説明会資料	岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団	1977
202	『大日幡山城出丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』118	岡山県教育委員会	1997
203	『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』154	岡山県教育委員会	2001
204	『岡山中堀』『岡山県埋蔵文化財報告』19	岡山県教育委員会	1989
205	『岡山城内堀』『岡山県埋蔵文化財報告』20	岡山県教育委員会	1990
206	『岡山城二の丸遺構』『岡山県埋蔵文化財報告』20	岡山県教育委員会	1990
207	『岡山城二の丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』78	岡山県教育委員会	1991

文献番号	出典	編集者・出版社	年代
208	『岡山城二ノ丸跡』『岡山県埋蔵文化財報告』21	岡山県教育委員会	1991
209	『岡山城本丸中の段(第IV次)』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成7)年度	岡山市教育委員会	1997
210	『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』	岡山市教育委員会	1997
211	『岡山城二ノ丸(中電変電所)跡(中電2次)』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996(平成8)年度	岡山市教育委員会	1998
212	『岡山城内堀』	岡山市教育委員会	1998
213	『岡山城二の丸跡』	中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会	1998
214	『岡山城二の丸(宇野自動車)遺構』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1997(平成9)年度	岡山市教育委員会	1999
215	『岡山城本丸下の段』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1997(平成9)年度	岡山市教育委員会	1999
216	『岡山城二の丸(榊原病院)石垣』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998(平成10)年度	岡山市教育委員会	2000
217	『史跡岡山城本丸下の段(第2次)』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998(平成10)年度	岡山市教育委員会	2000
218	『史跡岡山城本丸下の段(第3次)』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999(平成11)年度	岡山市教育委員会	2001
219	『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』	岡山市教育委員会	2001
220	『岡山城本丸石垣解体修理』『岡山市埋蔵文化財センター年報1』2000(平成12)年度』	岡山市教育委員会	2002
221	『岡山城三之曲輪跡』	岡山市教育委員会	2002
222	『岡山城二の丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』175	岡山県教育委員会	2003
223	『岡山城三之外曲輪(旧弘西小)跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報3』2002(平成14)年度』	岡山市教育委員会	2004
224	『岡山城三之外曲輪(中央中)跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報4』2003(平成15)年度』	岡山市教育委員会	2005
225	『岡山城二之丸(市道丸の内16号線)跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報4』2003(平成15)年度』	岡山市教育委員会	2005
226	『岡山城二之丸跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報6』2005(平成17)年度』	岡山市教育委員会	2007
227	『史跡岡山城跡本丸本段・下の段(テニスコート跡)』『岡山市埋蔵文化財センター年報7』2006(平成18)年度』	岡山市教育委員会	2008
228	『岡山城三之外曲輪跡 旧岡山藩藩学跡』	岡山市教育委員会	2008
229	『岡山城三之外曲輪跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報8』2007(平成19)年度』	岡山市教育委員会	2009
230	『史跡岡山城跡本丸下の段(テニスコート跡)』『岡山市埋蔵文化財センター年報8』2007(平成19)年度』	岡山市教育委員会	2009
231	『史跡岡山城跡本丸下の段』『岡山市埋蔵文化財センター年報9』2008(平成20)年度』	岡山市教育委員会	2010
232	『岡山城三之外曲輪跡(川崎病院)』『岡山市埋蔵文化財センター年報13』2012(平成24)年度』	岡山市教育委員会	2014
233	『岡山城三之外曲輪跡』	岡山市教育委員会	2016
234	『岡山城二の丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245	岡山県教育委員会	2018
235	『岡山城二の丸跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』247	岡山県教育委員会	2019
236	『梶岡城跡』『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』4	玉野市教育委員会	1990
237	『亀山城西の丸跡』『岡山市埋蔵文化財センター年報』2	岡山市教育委員会	2003
238	『熊谷城跡出土の遺物について -金銅製品編-』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第8号	岡山市教育委員会	2016
239	『熊谷城跡出土の遺物について -鉄製品・石製品・銭貨編-』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第9号	岡山市教育委員会	2017
240	『熊谷城跡出土の遺物について -施釉陶器編-』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号	岡山市教育委員会	2018
241	『熊谷城跡出土の遺物について -土師質土器・備前焼編-』『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第11号	岡山市教育委員会	2019
242	小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告	岡山市教育委員会	1993
243	『下津井城跡発掘調査概要』『倉敷埋蔵文化財センター年報』5	倉敷埋蔵文化財センター	1998
244	『下津井城跡発掘調査概要』『倉敷埋蔵文化財センター年報』6	倉敷埋蔵文化財センター	1999
245	『城山散布地』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71	岡山県教育委員会	1988
246	『高松城水攻め鳴谷川遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』38	岡山県教育委員会	2008
247	『茶臼山城跡』『岡山県埋蔵文化財報告』16	岡山県教育委員会	1986
248	『常山城跡』『岡山県埋蔵文化財報告』10	岡山県教育委員会	1980
249	『常山城跡』『玉野市埋蔵文化財発掘調査報告』	玉野市教育委員会	1980

文献番号	出典	編集者・出版社	年代
250	「津島福居(市道)遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成7)年度	岡山市教育委員会	1997
251	『富山城跡第1次調査報告』	岡山市教育委員会	1968
252	『富山城跡第2次調査報告』	岡山市教育委員会	1969
253	「中島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221	岡山県教育委員会	2009
254	『中島遺跡』	岡山市教育委員会	2011
255	「稗田城跡確認調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報』13	倉敷埋蔵文化財センター	2013
256	『備前周匝茶臼山城址発掘調査報告書』	吉井町教育委員会	1990
257	「保木城址」『岡山県埋蔵文化財報告』10	岡山県教育委員会	1980
258	「保木城址」『岡山県埋蔵文化財報告』11	岡山県教育委員会	1981

表 21 城館関連文献

城館番号	城館名	別称	出典
1	野々平城跡	野々平古城山跡	3・9・11
2	名称未定		3・9・11
3	江与味城跡		3・5・9・11・12・16・27・28・133・192
4	祇園山城跡		
5	百坂城跡	百坂古城山・百坂山古城・百坂山城	3・5・9・11・12・27・28・31・42・78・82・133・136・171・177
6	小森古城跡	小森古城山・小森城	3・5・9・11・12・27
7	刈山城跡	狩山城	5・12・27・28・171
8	新山城跡	尾原城	3・5・9・11・12・27・28・31・42・78・82・133・136・171・176
9	常江田城跡	江田城・江田古城山・江田の城・郷田城	9・11・28・133
10	小森城跡		5・28・82・133・171
11	面城跡		9・11・27・28・171
12	片山城跡		
13	細田城跡		
14	妙見山城跡	明見山城・明見山古城山・細田妙見山城・妙見城	2・3・5・9・11・12・27・28・171
15	勝山城跡	木戸の城山・木戸ノ城山	2・12・27・28・78・113・171
16	藤沢城跡	藤妻の城・藤木城・藤妻・藤木	9・11～13・27・28・45・74・78・81・120・134・136・155・171・172
17	藤沢城跡	藤才城・古城山・藤戈・狸ヶ城・藤才古城山・藤妻の城・藤妻城・藤才	9・11～13・27・28・45・74・78・81・120・134・136・155・171・172
18	三納谷城跡		5・9・12・27・28・31・42・82・136・171・177
19	福山城跡	福山古城山	1・3・9・11・12・27・28・78・92・120・133・171・177
20	山之田城跡		27・28・171
21	十力城跡	長官城	3・5・9・11・27・28・78・120・171
22	鍋谷城跡	鍋谷古城山・瑞谷城	1・2・3・5・9・11・12・27・28・31・44・78・120・133・136・171
23	大手城跡	大手(年)城	12・27・171
24	清常城跡	清常山	27・28・120・133・134・171
25	虎倉城跡	虎倉古城山・虎倉ノ古城山・虎倉ノ城・虎倉の城・加茂小倉城・小倉城	1～3・5～7・9・11・12・17・22・24・27・31・34・42・44・66・78～80・82・91～94・96・102・108・120・124・127・132～134・136・147・155・171・174・177・188・190・191・193
26	中山城跡		3・5・9・11・27・28・65・66・78・133・171
27	荒神山城跡		27・28・66・171
28	能美城跡	大杉能美城・野見ヶ城・野見古城山・野見城	3・5・7・9・11・12・27・28・42・65・68・78・133・171・172
29	筒井城跡		27・28・42・66・68・171
30	茶臼山城跡	茶臼山古城	1・3・5・9・11・12・27・28・42・44・65・66・68・133・171
31	市場構遺跡		
32	沼山城跡	沼山古城跡	3・5・9・11・12・27・28・42・65・66・68・78・171

城館番号	城館名	別称	出典
33	久保城跡		5・12・191
34	石原城跡		5・12・27・28・80・171・191
35	城ノ段跡		191
36	天満城跡		5・12・28
37	菅館砦跡		191
38	金高城跡		1・3・9・80・191
39	本陣山城跡	奥宿城・感状山・本陣山	17・27・173
40	勝尾山城跡	加津保舟山古城・船山古城・船山古城山・舟山城・信倉城・信倉山古城	1～3・5～7・9・12・17・27・28・31・80・134・136・146・155・171・173・177・191
41	保木城跡	保気山城・保木山城	3・5・9・11・12・27・28・42・65・66・171
42	鹿瀬城跡	鹿瀬古城	5・9・12・27・28・31・42・44・66・78・80～82・171・191
43	金川城跡	玉松城・玉松古城山・臥龍山城・臥龍山玉松城・臥龍山・金川の城・金川ノ城・金川臥龍山城・金川臥龍山本城・金川臥龍山玉松城・金川臥雲山ノ本城・金川玉松城・金川本城・金川ノ本城	1～3・5～7・9・11・12・19・22～24・27・28・30・31・34・42・44・66・76・78～80・82・83・90～94・96・108・115・118・120・124・131～134・136・142・144・146・147・155・171・172・174・177・185・187・188・190・191・193
44	徳倉城跡	土倉城・土倉古城山・土倉の城・戸倉古城・戸倉の城址・戸倉山城・戸倉城	1～3・5～7・9・11・12・21・27・28・31・42・44・78・80・91・93・96・102・122・131・133・136・147・166・171・174・187・199
45	名称未定	大膳山城	5
46	高松城水攻め鳴谷川遺跡		46・104・246
47	長野城跡	長野古城山・大膳山	1・3・5・9・12・27・28・78・112・113・133・171・190
48	辛川城跡	西辛川城・西辛川城跡	1・3・5・9・27・28・108・112・133・136・171・190・242
49	辛川城跡（辛川城の根小屋）		242
50	小丸山城跡		1・5・9・12・242
51	名称未定		
52	大善城跡	大膳城・大善山城・	5・9・12・133・171・172・190
53	山崎城跡		5
54	茶白山城跡	周匝城・周匝茶白山城・周匝村城・周匝の城	1～3・5・9・11・12・14・27・31・42・82・84・90・91・93・123・133・136・154・162・171・172・177・247・256
55	大仙山城跡		42・84・123・172
56	頓の山城跡	頓ノ山城	42・123・172
57	白石城跡	太田ノ古城山・大田白石古城山	1・2・3・5・9・11・12・14・27・31・42・65～68・82・90・113・133・171
58	土師方城跡	土師方古城	1・3・5・9・11・12・14・19・27・42・65・66・80・171
59	石上古城跡		5・9・14・27・171
60	広戸城跡		42・123・171・173
61	宮内城跡	宮内上城・宮内古城山・光仙寺城・仁堀西城・仁堀西古城	1・3・5・9・11・12・14・27・42・84・113・123・171・173
62	中畑城跡		5・9・12・14・27・42・80・113・171・191
63	山鳥城跡	山鳥古城・山鳥山城・鳥山城	1・3・5・9・11・12・14・27・31・42・82・84・123・136・171・172・177
64	先谷城跡	光谷城・先谷古城山跡	1・3・5・9・11・12・27・42・84・113・123・171・172
65	黒沢城跡	黒沢山城	5・12・14・27・42・84・123・133・136・171・172
66	長坂城跡	長佐古城・長坂古城	5・12・14・27・42・84・90・123・171・172
67	徳近城跡	徳近古城	1・3・5・9・12・14・27・42・84・123・133・171・173
68	八幡山城跡		12・42・113・123・171・172
69	明田城跡	明石城・明田古城	5・12・14・27・42・84・113・123・171・172
70	惣分城跡		1・3・5・9・12・14・15・27・42・171
71	坂辺城跡	笹岡古城・笠岡古城	5・12・14・15・27・42・113・171・172
72	松撫城跡	松ナデ古城山・松撫古城・松撫古城山・松撫の城・瀬戸山城	1・3・5・9・11・12・14・27・42・80・119・133・136・143・171・191
73	地頭城跡	平岡西古城・平岡西城・としが丸城	1・3・5・9・12・14・27・42・80・119・171・191
74	矢知城跡	矢知古城	5・9・12・14・27・80・171・191

城館番号	城館名	別称	出典
75	西谷城跡	新庄西谷の城・新庄城・鳥越山城	1・2・3・5・9・12・14・27・31・42・44・80・82・113・119・133・136・171・177・191
76	熊谷城跡	矢原古城・矢原城	1・3・5・9・11・12・14・27・31・42・80・82・101・171・191・238~241
77	寺山城跡		31・42・134・191
78	殿谷城跡	松長城・伊田城・殿山城	1・3・5・9・12・14・27・31・42・80・82・119・133・136・171・177・191
79	宇那山城跡	うな山城址・うな山城・野良山城	5・12・14・27・31・42・80・82・90・113・119・136・171・177・191
80	名称未定		1・3・9・11・15・27・42・73・172
81	小屋谷城跡	小屋谷山城・小尾(屋)谷山城・小屋谷古城山跡・由津里城・備前由津里の城・由津里・八左城	1・3・5・9・11・12・14・15 ~ 27・42・113・171・180
82	木山城跡	木山古城跡	3・5・9・12・14・15・27・42・73・171・173
83	金比羅城跡	こうかう山城・山口古城	3・11・12・15・27・42・73・173
84	高光城跡	からから城・かうかけ山城・かうかう山城・からから山の城・山口カラ山城・かなへ城	1・3・5・9・11・12・14・15・27・31・42・73・82・133・136・171・172・177・180
85	瀧ノ城跡	瀧之城・瀧城・瀧城山・瀧城山城・大鹿谷城	1・3・5・9・11・12・14・27・31・42・73・80・82・116・133・136・171・177・180・191
86	葛木城跡	上地山城	3・5・9・11・12・14・27・31・42・58・73・133・171・180
87	上仁保城跡	吉原陣屋	14・27・42・58・73・171
88	菖蒲佐古城跡		
89	東軽部城跡		1
90	南佐古田城跡		15・42・171
91	宝地城跡	津地ノ上城・津地の上城・ホウシ山古城・ほうじ山城・法地の上城	1・3・5・9・11・12・15・27・42・171
92	宮口城跡	東軽部城・龍王山城・宮口ノ上・宮口の上城	1・3・5・9・11・12・14・15・27・42・171・172
93	大久保城跡	ヲンチ古城山・おんじ城・たんら山城・おんち山城・をんし山に壘	1・3・5・9・11・12・14・15・27・41・133・171・172
94	高尾山城跡	高尾山の城・大苅田高尾山城・長尾古城山・長尾城・唐臼ヶ台	1・3・5・9・11・12・14・15・27・31・42・73・136・171・172・177
95	神田城跡	神田古城	5・12・27・42・58・73・133・171・173
96	高山城跡		42・58・73・171
97	正崎城跡		1・3・5・9・14・27・42・58・73・171・172・180
98	善応寺城跡	赤坂城	3・5・9・11・12・14・27・42・58・73・133・171・172・180
99	沼田城跡		12・14・27・42・58・73・171・172
100	名称未定		177
101	兜山城跡	上月城・上山城・上山の城・上山古城・上古山城・上田城	3・5・9・12・42・58・73
102	新田陣跡	新田陣山	1・5・7・12・14・42・58・73・90
103	上田城跡		1
104	稲蒔城跡		1・42・84・123・172
105	石ヶ谷城跡		42・87・153・172・173
106	坊主山城跡		42・87・153・173
107	小坂城跡		42・87・153・172
108	田尻城跡		42・87・153・172・179
109	城ノ段跡		42・57・87・153・173・179
110	岡城跡	小野田城・小野田古城山	1・3・5・9・11・12・14・27・42・47・48・49・133・171
111	赤尾山城跡		3・5・9・11・12・14・27・31・42・47・48・136・171
112	殿谷城跡	殿谷古城	3・9・11・49・133・145・177・198
113	可真下城跡		42・47・48
114	西山城跡		1・3・5・9・11・12・14・27・42・87・133・171・177・198
115	可真上城跡		3・5・9・11・12・14・27・42・133・136・171
116	大盛山城跡		49・145・146
117	保木城跡	保木山城・保木古城山・熊野保木城・熊野保木山城・保木の城	1・2・3・5~7・9・11・12・14・19・27・31・42・47・49・63・82・85・90・133・136・145・146・171・172・177・186・198・257・258

城館番号	城館名	別称	出典
118	妙見山大森山遺跡(妙見山城跡)	妙見城・大森山・塩納妙見城・塩納の妙見城	42・47・48・63・145・146
119	保木城の砦跡		146
120	保木風呂屋遺跡		145
121	塩納大日遺跡		
122	宗堂城山城跡		63・145・173
123	名称未定		
124	南方城跡	南方古城	1～3・5・9・11・12・14・19・27・31・42・63・113・145・146・171・172・183
125	物理城跡	城ヶ谷山城・城ヶ谷城・坂根城・坂根物理城	1・5・6・9・12・14・19・27・31・42・63・85・98・133・145・146・171
126	土井の内寺跡		63・145
127	肩脊城跡	肩脊古城	1・3・5・9・11・12・14・27・31・42・63・82・98・113・133・136・145・146・171・177
128	高尾城跡	高尾山城・高尾古城・高尾山・肩脊高尾城	1・3・5・9・11・12・14・27・42・63・98・113・146・171
129	堀ノ内遺跡		42・63・79・90・145・146
130	鳥の奥遺跡		5
131	内山城跡	大内城	1・3・9・11・31・42・63・145・146・171
132	飯盛山城跡	飯森山城・飯森山・八塔寺	1・5・9～12・27・85～87・89・121・136・171・173・192
133	奥塩田茶臼山城跡	茶臼山城	1・3・9・27・42・86・87・121・133・153・171～173
134	北山方城跡		1・3・9・27・86・87・121・153・171・172
135	観音山城跡	観音山古城山	3・9・11・12・27・42・57・87・121・133・171・179・198
136	天神山城跡根小屋		87
137	天神山城跡	天神山古城	1～3・5～7・9・11・12・19・22～24・27・30・31・34・42・44・57・59・75・76・82・86・87・90～92・94・96・108・111・115・121・124・130・132・133・136・146・153・155・157・162・163・171・172・174・177・179・183・185・188・190・193
138	天神山城太鼓丸跡		86・87・113
139	天神山城跡附天瀬武家屋敷跡		87
140	天神山城跡附岡本屋敷跡		87
141	天神山城跡附木戸跡		87
142	名称未定	木倉田土境の城	179
143	大坊山城跡	大坊城・大坊古城山	1・3・9・11・27・86・87・121・171・173・179・198
144	北浦山城跡	帰当羅山城・帰当羅山壘・帰当田城・帰当田山城・帰当田古城山・きどうら山城	1・3・5・9・11・12・27・31・82・86・87・121・133・136・171・173・177・198
145	青山城跡	青山古城	1・3・5・9・11・12・27・31・42・82・86・87・95・113・121・133・136・171・172・177・179・198・200
146	天王久保山城跡	天王久保城・天王久保山の古壘・天王久保古城山	3・5・9・11・12・27・87・121・133・171・198
147	医王山城跡	東山硫黄山城・いろう山城・イヲウ山古城・いわふ山城・硫黄山城	3・5・9～12・27・31・42・82・85・87・121・136・171・177・198
148	大股古城跡	大股城・大股古城山・大俣城・大俣古城山・鳥がなる城	1～3・6・7・9・10・27・85～88・121・132・133・171
149	惣谷山城跡	惣谷城・惣谷古城山	1・3・5・9～12・27・85・87・121・133・171
150	熊山城跡	熊山古城山・熊山古城・熊山の城・熊山二陣	1・2・3・5～7・9・12・21・22・24・27・31・34・42・50・76・86・87・121・133・136・168・171・172・177・185・187
151	龍徳山城跡	竜徳山城・龍徳古城山城	3・9・11・87・179
152	上見山城跡	上見山壘・上見山古城	3・5・9・11・12・27・87・121・171・179・198
153	鹿帰前丸山城跡	鹿帰前門山城・鹿帰前丸山壘・岡山城	3・5・9・11・12・27・42・87・121・171・198
154	宮山城跡	宮山古城・働城	3・5・9・11・12・27・29・31・42・82・85・87・121・133・136・171・172・177・198

城館番号	城館名	別称	出典
155	曾根城跡	北曾根城・北曾根古城・北曾根古城山・名黒山城・名黒古城山	1・3・5・9・11・12・27・29・31・42・82・85～87・113・121・133・136・171・172・177・198
156	衣笠城跡	衣笠山城	1・27・42・86・87・121・171・172・198
157	北山城跡	北山古城・北上城・大中山城	1・3・5・9・11・12・27・31・42・82・86・87・121・133・136・171・172・177・198
158	伊部城跡		1・3・9・27・31・87・113・121・136・171・177
159	東山城跡	東山古城・北方城・巖門山城	3・5・9～12・27・85～87・113・121・133・171・172・198
160	明石掃部介守重宅跡		12
161	ろんき山城跡	あんき山城・論議山城・あんき山壘・ロンギ山古城	3・5・9～12・27・85・87・121・171
162	三石城跡	三ツ石城・三石ノ城・三石古城山	1・2・3・5～7・9・11・12・19・21～24・27・30・31・34・42・44・50・59・75～77・79・82・86・87・91～94・96・101・111・115・121・124・131・133・135～136・141・144～146・162・171・172・174・177・183・187・190
163	関川城跡		179
164	香登城跡	香々登城・香々登ノ城・香登壘城山城・城山城	1・2・3・5・7・9・11・12・22・27・30・31・34・42・86・87・92・121・124・131・133・136・171・172・177・183・187・198
165	狐塚城跡		1・3・5・12・18・27・87・121・171
166	茶磨岩城跡	茶磨山城	5・12・18・27・87・121・171
167	鬼ヶ城跡	鬼か城・鬼が城	1・3・5・12・18・27・87・121・171・172
168	たい山城跡	たいの山の城・タイ山城・田井山城・鯛山・上の山	1・3・5・9・11・12・18・27・87・121・171・173
169	伝太閣門跡	法悦城・法悦の城	12・27・43・87・108・121・133・171
170	茶白山城跡	茶白山の壘	5・9・12・27・31・43・86・87・121・171・172
171	富田松山城跡	戸田松・戸田松城・戸田松山・戸田松古城・戸田松古城山・戸田の城・戸田松の城・土田松・土田松山城・土田松山・富士松ノ城・土田松城・松ヲ端城	1～3・5～7・9・11・12・27・31・34・42・43・86・87・91・96・111・113・121・133・136・162・171・172・177・199
172	船山城跡	舟山城・舟山の城・船山古城山・船山古城・船山要害	1・3・5・9・11・12・22・27・28・31・34・42・59・64・78・82・94・108・113・115・124・130・133・136・155・171・177・183・188・193
173	妙見山城跡	釣・鐘子鉤古城・明見山城・鐘子釣城・鐘子釣古城山・鐘子ノ釣古城山	1・2・3・5～7・9・12・27・28・31・33・41・42・64・78・108・133・171・177
174	烏山城跡	篠が迫城・篠ヶ迫城・篠が迫の城・篠ヶ迫の城・烏山古城跡・笹瀬山の城・佐々迫の城・笹が迫に城・篠ノ迫ノ城・笹ヶ迫城	2・3・5・9・11・12・27・28・33・50・75・78・79・133～135・171・190
175	半田山城跡		1・3・31・101・108・133・171・175・176
176	津島福居遺跡	福隆寺城・福輪寺要害・福輪寺の要害・福輪寺暇・福輪寺暇の要害	79・131・135・136・155・250
177	辻川城跡	辻川古城	1・3・9・12・27・28・79・108・171・173・190
178	富山城跡	八幡山城・大安寺城・万成城・萬成城・飛山城・飛山ノ古城・富山古城山・万成山の城・矢坂城・矢坂富山城・矢坂山の城・八幡山の城・富士山城	1・2・3・5～7・9・11・12・19・22・27・28・30・31・33・34・41・42・44・55・59・75・76・78・79・82・91～94・96・108・115・124・130・133・136・155・167・171・172・177・183・184・187・188・190・193・251・252
179	野殿城跡	大安寺城	5・6・7・9・12・27・31・78・79・108・133・171
180	岡山城跡	烏城・岡山御城・石山本城・石山の城	1・2・6・7・12・20・22～25・27・28・30・31～34・41・42・44・51・55・59・60・64・75・76・79・82・91・92～94・96・99・102・103・105～109・115・120・124・130・132・133・134・136・142・150・155・160・171・172・177・178・184・188・190・193・197・199・203～235
181	龍ノ口山城跡	龍口山城・龍の口山城・龍口城・龍の口城・竜の口城・竜ノ口・竜口城・竜ノ口山・竜ノ口城・辰ノ口城・八幡山城・天神山城・天神山古城・天神山ノ古城	1・2・3・5～7・9・11・12・22・24・27～30・31・34・41・42・59・60・64・79・94・97・108・115・130・132・133・136・150・155・171・177・183・187・188・190・193
182	中島城跡	中島古城・中島村古城	1・2・5～7・9・12・22・27・31・33・34・41・42・59・64・97・113・126・130・133・136・150・171・177・253・254
183	名称未定		
184	藤井城跡	おん山城・たん山城・タン山城	5・12・26・27・42・64・130・136・142・171・173・177

城館番号	城館名	別称	出典
185	亀山城跡	沼・沼城・沼ノ城・沼の城・沼古城山・沼の古城山・沼城古城・沼の亀山・沼の亀山城・沼亀山城・沼村亀山の城・亀山の城・亀山	1・2・3・5~7・9・11・12・20・22~24・27・30・31・34・41・42・51・55・59・60・64・71・73・75・76・82・90・92・94・97・108・113・115・124・130・132 ~ 134・136・142・146・147・155・162・171・172・177・178・183・184・188・190・193・237
186	内山城跡		5・12・26・27・42・59・60・64・130・133・136・171・173・183
187	名称未定		42
188	城ヶ辻城跡	伏間城ヶ辻城	42・63・145・146
189	吉井城跡		133・171
190	福岡城跡		19・22・24・30・31・44・59・79・82・98・136・142・145・146・171・187・190
191	大日幡山城跡 ほか	火鉢城・火鉢山城・火鉢が城・火鉢ヶ城・火鉢ヶ城山・大火鉢城・日畑城	1・3・5・9・11・12・19・27・31・34・42・59・60・113・133・136・142・171・172・177・185・202
192	新庄山城跡	新庄古城山・竹原城・奈良部城・奈良部の城	1・3・5・6・9・11・12・22・27・31・95・124・130・133・171・172・177
193	明禪寺城跡	明善寺砦・妙善寺・妙善寺城・妙善寺古城山・妙善寺山城・妙善寺ノ古城	1・3・5・6・9・11・12・22 ~ 24・27・30・31・34・41・42・59・64・79・94・97・108・115・124・130・133・136・142・155・171・177・183・188・190・193
194	正木城跡	正木山城・正木古城山・中川城・中川正木古城	1・2・3・5 ~ 7・9・11・12・27・56・59・64・108・115・130・133・146・171
195	金山城跡	八幡山城	27・55・59・115・130・133・171・184
196	長船城跡	築地城	1・2・3・5・9・11・12・27・31・34 ~ 36・42・133・136・145・171
197	福岡奥之城跡	福岡城・稲荷城・稲荷山・中島山・奥の城	1・2・3・5・9・11・12・22・27・34 ~ 36・42・110・124・131・133・136・145・172・177・185
198	丸山城跡	丸山古城山・丸山古城・圓山城・円山城・丸山に城	1・3・5・7・9・11・12・27・35・36・40・42・133・171
199	智満城跡	智間城	31・36~39・50・171
200	堀城跡		7・27・35・36・40・100・113・133・171
201	油杉城跡		5・9・12・27・35・36・100・171
202	高松山城跡	飯の城・飯井ノ城・飯井村ノ城・飯井城・鷹取備中守屋敷	1・6・12・27・31・34~36・133・171
203	高山城跡	西須恵高山城・西須恵城	5・9・12・27・31・34 ~ 36・42・82・92・136・171・177
204	虫明城跡	虫明古城	2・3・5・9・11・12・27・31・34 ~ 39・42・82・136・171・177
205	光明寺城跡	大富の城	1・3・6・9・12・27・31・35~39・50・171・172
206	今木城跡		2・3・5・6・9・11・12・27・31・34 ~ 39・50・133・168・171・172
207	尾張城跡		3・5・9・11・12・27・31・34・36~39・42・82・136・171・172・177
208	浜城跡	浜ノ城	5・9・12・27・35・36・130・168・171・172
209	射越城跡		5・9・12・27・35・36・130・133・168・171・172
210	向山城跡	陣忍山・陣能山・陣の山城	38・39
211	乙子城跡	音湖城・乙湖・乙子の城・乙子古城山	1・2・3・5~7・9・11・12・22・24・27・30・31・34 ~ 36・42・59・60・92・94・108・110・113・124・130・133・136・142・162・168・171・172・177・183・188・190
212	長沼城跡	長沼古城・高尾城	1・3・9・27・31・35・36・171・172
213	城島城跡		9・11・130
214	砥石城跡	戸石城・戸石ヶ城・砥石古城山・砥石山城・砥石山ノ城	1・2・3・5・6・9・11・12・22・24・27・30・31・34 ~ 39・42・59・75・82・92・94・108・110・115・124・130・133・136・142・168・171・172・177・187・188・190
215	高取山城跡	高尾城・高取山・高山・明神山城	2・5・9・12・22・27・31・34~36・38・39・42・82・108・115・133・136・171・172・177
216	上山田城跡	上山田古城	5・9・12・27・35~39・171・173
217	茶屋城跡		
218	作州山城跡		5・9・12・27・35・36・130・171・172
219	名称未定		

城館番号	城館名	別称	出典
220	西大寺一宮育苗園公園遺跡		201
221	大附城跡	大附ヶ城・大つきの城・大つちの城・大つきのしろ・大つきの城・大ツケ古城山	3・5・9・11・12・27・34～36・130・133・171・172
222	朝日山城跡	朝日城・旭山城	5・9・12・27・35・36・130・171・172
223	佐井田城跡	殿山古城	5・9・12・27・35～39
224	小串城跡	丸山城・小串丸山城・小串城山	1・2・3・5～7・9・11・12・27・31・41・51・53・82・83・108・117・126・133・136・149・171・173・177
225	黒山城跡	黒山壘・黒山古城	1・3・5・9・11・12・27・50・53・75・169・171・194
226	城い山城跡	黒石城・黒石城山・シロイヤマ(城山?)・城ヶ鼻	27・53・161・171
227	桜山城跡	桜山の城	1・3・5・12・27・53・76・171
228	川越山城跡	川崎山城・川越城	1・3・5・9・27・53・61・169・171
229	鼻高山城跡	鼻高古城山・鼻高山壘	1・3・5・7・9・11・12・27・53・61・125・128・133・161・171
230	福岡山遺跡	笹間城	12・169
231	稗田城跡		161・255
232	とんきり城跡	とんき山城・とんき城	5・12・27・53・71・72・171・172・194
233	戸山城跡	木見戸山城・木見戸山壘	1・3・5・9・11・12・27・53・61・171・194
234	丸山城跡	まし奥城・まし奥山城・マジ奥古城山・九十九山	1・3・9・11・12・53・71・72・172
235	片岡城跡	片岡古城	5・27・71・72・171・172
236	稗田土井ノ鼻城跡		
237	暇城跡		161
238	迫川城跡	迫川古城	27・28・31・71・72・171・173・188
239	滝城跡	滝古城	1・3・5・9・12・27・171
240	常山城跡	常山古城・備前津ノ山城	1・2・3・5～7・9・11・12・22～24・27・30・31・44・50・52・53・61・69・71・72・75・76・83・91～93・96・102・108・122・124・126・128・132・133・136・147・149・151・152・155・158～160・171・172・174・177・181～183・188・190・199・248・249
241	麦飯山城跡	麦飯城・麦飯古城山・麦飯山の古城・雨乞古城山・横田山城	1・2・3・5～7・9・11・12・24・27・31・34・50・51・53・61・69・92・136・149・152・155・156・158・160・169～172・177・194
242	両児山城跡	両児城・二子山城・二子山古城・二子山壘・八幡山・八浜城	1・3・5・9・11・12・22・27・31・34・50・53・61・69・92・132・133・136・152・155・160・162・171・177・194
243	高山城跡	高山古城山	1・3・5・9・11・12・27・41・53・76・108・133・171
244	古城山城跡	南谷城・南谷古城・郡古城山	1・3・5・9・11・27・53・108・171
245	丸山城跡	小丸山城・小丸山	5・9・12・27・53・69・133・152・169・171・194
246	怒塚城跡	いが塚城・いか塚山城・怒塚山城・いか塚の壘	1・3・5・9・12・27・53・69・152・171
247	砂山城跡	彦崎砂山城	1・3・5・9・12・27・53・69・71・72・165・171・194
248	西田井地城跡		1・3・9・70・164・165
249	楠城跡	楠ヶ峯ト云テ陣所	1・31
250	駿河山城跡	田井古城・田井城・するか山城	1・3・5・9・11・27・53・54・69・152・171
251	見能城跡		53
252	屋敷山城跡		70・164・165
253	高島城跡	鉾立城・鉾立古城・物見が鼻	1・3・5・9・11・12・27・41・53・70・126・133・149・164・165・171
254	梶岡城跡		70・164・165・188・236
255	杭原遺跡		
256	相引城跡	馬返城	70・164・165・171
257	番田城跡	番田古城	1・3・12・27・70・133・164・165・171
258	胸上城跡	胸上古城	1・3・5・9・12・27・70・83・126・133・136・164・165・171・177

城館番号	城館名	別称	出典
259	丸山城跡	圓山城・円山城・亀山城	1・3・5・9・11・12・27・53・69・83・152・171・194
260	宮の鼻城跡	城の首	169
261	本太城跡	本太古城山・元太山城	1・3・5・9・11・12・27・31・50・53・61・62・75・114・133・136・149・169・171・177・195
262	神水城跡	神水山城・神隊（遂）山城・神水山の城・神隊古城山	1・3・5・9・11・12・27・53・61・169・171
263	小川城の辻城跡		
264	湊山城跡	通生湊山城・児島通生湊山城	50・51・83・161・188
265	城山城跡		245
266	下津井城跡		1・2・3・5・6・9・11・12・27・30・31・51・53・71・76・91・93・96・102・108・132・133・136～140・149・169・171・172・177・188・243・244
267	古下津井城跡		160
268	稗田城ノ辻城跡		129
269	岩山城跡	岩山古城	1・3・129・149・169
270	内田城ノ辻城跡		1・3
271	熊城山城跡		1・3・129・161
272	向山城跡	がん山城・ガン山古城・雁山城	1・3・5・9・11・12・27・53・129・171
273	鍛冶山城跡	鍛冶屋城	1・3・5・9・12・27・53・69・171
274	寺上山城跡		1・3・5・9・12・27・53・69・171
275	滝の古城跡		1・3・5・9・12・27・53・171
276	鬼味城跡	鬼味山城・鬼の味城・木実城・鬼味山壘・木見古城山・キノ見古城山	1・3・5・9・11・12・27・53・69・171
277	玉城跡	嘉陽城	9・12・27・31・53・69・133・152・171
278	向日比城跡		1・3・12・69・133

報告書抄録

ふりがな	おかやまけんちゅうせいじょうかんあとそうごうちょうさほうこくしょ							
書名	岡山県中世城館跡総合調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澤山孝之・和田 剛・小嶋善邦・河合 忍・米田克彦・上梶 武・島崎 東・氏平昭則・小林利晴・亀山行雄・高田恭一郎・中井 均・乗岡 実・畑 和良							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2020年02月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
岡山県備前地域所在の城館跡等278か所	おかやまし 岡山市	33201	1214ほか	—	—	20150401 ～ 20190331	—	岡山県中世城館跡総合調査
	くらしまし 倉敷市	33202	953ほか					
	たまのし 玉野市	33204	1ほか					
	びぜんし 備前市	33211	53ほか					
	せとうちし 瀬戸内市	33212	243ほか					
	あかいわし 赤磐市	33213	46ほか					
	わけちよう 和気町	33346	7ほか					
	みぎきちよう 美咲町	33666	19ほか					
きびちゆうおうちよう 吉備中央町	33681	14ほか						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡山県備前地域所在の城館跡等278か所	城館跡及び関連遺跡	鎌倉時代から江戸時代	曲輪・堀切・横堀・ 竪堀・土塁・石垣・ 虎口・櫓台・土橋など	陶磁・瓦				
要約	岡山県内各地に残る中世城館跡の現状を把握し、その保存と活用を図るための記録を作成することを目的に、平成25年度から国庫補助事業として実施した中世城館跡総合調査の成果。岡山県全体では、1,423地点の調査を実施し、1,126城の城館関連遺構を確認。目的、経緯、概要（位置・規模・構造・現況・略史・縄張り図）、分布地図、一覧表等を掲載。備前国では、446地点の調査を実施、278城の城館関連遺構を確認し、金川城跡など181城について掲載した。							

岡山県中世城館跡総合調査報告書

第1冊

－ 備前編 －

令和2年2月28日 印刷

令和2年2月28日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター

岡山市北区西花尻 1325- 3

発 行 岡山県教育委員会

岡山市北区内山下 2- 4- 6

印 刷 株式会社中野コロタイプ

岡山市北区玉柏 390